目次

図版　須貝稔
編集　横山尚武
装幀　菊地信義

流行作家時代 ——中期の作風——

西鶴が四十一歳の天和二年（一六八二）に発表した処女作『好色一代男』を書く必然性は、その直前に敢行した風俗詩的な独吟千六百句の『大句数（おおくかず）』と独吟四千句の『大矢数（おおやかず）』を見ればわかる。だがそれは西鶴自身の内部事情で、俳諧師としていくら有名であっても、大坂の板元が当時はまだ仮名草子と称していた得体の知れない小説の処女作を引き受けるはずもなく、奥付に「荒砥屋孫兵衛可心板」とある、後にも先にもこれっ切りのインスタント板元の私家版であった。

ところがこの破天荒の悪漢小説（ピカレスク）が大当り、翌天和三年には江戸で当時全盛の浮世絵師・菱河師宣（ひしかわもろのぶ）の挿絵で、江戸版『一代男』の出版（翌貞享元年三月刊）の話が持ち込まれたので、西鶴もやる気を出して第二作『諸艶大鑑（しょえんおおかがみ）』（好色二代男・貞享元年四月刊）を書くと、地元大坂の板元・池田屋（岡田三郎右衛門）が飛びついて、忽ち西鶴は上方のローカル作家となった。

第三作『西鶴諸国ばなし』（貞享二年一月、大坂池田屋版）
第四作『椀久（わんきゅう）一世の物語』（同年二月、大坂森田版）
第五作『好色五人女』（同三年二月、大坂森田版）
第六作『好色一代女』（同三年六月、大坂池田屋版）

一六八二年に私家版作家として出発した西鶴は、まもなく地元大坂の板元がスポンサーとなって、ローカル

古典への招待



作家となったのであった。しかし五年間に六作とはいかにも寡作である。もっともその間に、貞享元年六月には住吉社前で一昼夜独吟二万三千五百句の荒行(あらぎょう)を敢行したり、翌貞享二年一月には京都の宇治加賀掾(かがのじょう)のために浄瑠璃『暦(こよみ)』を新作刊行し、道頓堀で上演したり、かなり我儘に浮気をしている。だから小説の方も「好色」というテーマを興のおもむくままに拡大解釈して体験領域内に取材し、悠々と書いているので、寡作ではあるが生き生きとしている。

ところが『一代女』に続く第七作は、「好色」とはまったく関係のない『本朝二十不孝』（同貞享三年十一月刊）で、この作品には地元の岡田三郎右衛門（池田屋）と千種(ちぐさ)五兵衛のほかに、江戸青物町の万谷(よろずや)清兵衛（万屋の誤り）がはじめて参加している。この二都版の『二十不孝』をきっかけとして、翌貞享四年から西鶴は大坂・江戸、または大坂・京都、大坂・京都・江戸の板元が参加する二都または三都版の作者となった。例えば、

貞享四年（一六八七）

一月、『男色大鑑(なんしょくおおかがみ)』（大坂・京都。再版は三都版）

四月、『武道伝来記』（大坂・江戸）

元禄元年（一六八八）

一月、『日本永代蔵』（三都版）

二月、『武家義理物語』（三都版）

十一月、『新可笑記』（大坂・江戸）

元禄二年（一六八九）

一月、『本朝桜陰比事(おういんひじ)』（大坂・江戸。流行作家時代の最後の作品）

以上を要約すると、大坂のローカル作家であった西鶴が京都や江戸の板元にも、その斬新な文体や娯楽性を

認知されて三都版作家、つまり全国で通用する流行作家にのし上がったということである。こうなると注文殺到、五年間に六作という自主的創作でお茶を濁しているわけにはいかない。

江戸の万屋が参加して三都版作品の第一号となった『本朝二十不孝』（貞享三年十一月刊）は、『一代男』から始まって翌貞享四年一月刊の『男色大鑑』へと続く好色本シリーズの流れの中で、突然割り込んできた異質の作品である。だが作者にとって一連の好色本の登場人物たちは、封建社会のモラルや制度をまるで無視した悪党たちだったのだから、中国の『二十四孝』ならぬ本朝の『二十不孝』を書く必然性は十分にあった。そこへ持ってきて五代将軍綱吉は、忠孝を目玉とする儒教の信奉者で、『一代男』が出版された天和二年には、諸国に「忠孝札」を建てさせ、不忠不孝の輩は重罪に処すべき旨を令している（『徳川実記』）。その当局の方針に迎合した京儒・藤井懶斎が、貞享元年に漢文体の『本朝孝子伝』（三冊）を出版した。これが時流に乗って翌二年に再版、さらに三年八月に三版が出た。この文部省推薦まがいの教訓的な『孝子伝』の流行に便乗し、大坂と江戸の板元が相談して急遽、西鶴ならではの反面教師をよそおった娯楽的な悪漢小説を注文し、大急ぎで出版に漕ぎつけたのが、このいかにもジャーナリスティックな『二十不孝』であった。

しかしさすがに西鶴である。割り込んできた急作の『二十不孝』とほとんど同時の貞享四年一月刊の『男色大鑑』は、当代の好色の一面である「男色」（衆道）をテーマとして、「好色物シリーズ」の掉尾の作品として、『二十不孝』より先に脱稿していたのである（『西鶴新論』男色大鑑の成立）。もちろん『大鑑』の板元は大坂と京都で、江戸の板元は加わっていない。だが何しろ人口の半分は衆道愛好の本家の武家で、すでに江戸の板元の声が掛かっていたので、西鶴は『大鑑』の巻一の一で江戸の読者へのサービスに努めている。

とかくは男世帯にして、住み所を武蔵の江府に極めて、浅草のかた陰にかり地をして、世の愁喜、人の治乱をもかまはず、不断は門をとぢて、朝飯前に若道根元記の口談、見聞覚知の四つの二の年まで諸国をた

づね、一切衆道のありがたき事、残らず書き集め、男女のわかちを沙汰する。

もちろんフィクションではあるが、精一杯のサービスをしている。その甲斐あって『大鑑』の再版には江戸の万屋が参加して、まさしく三都版作家になっている。

三都版の流行作家になるということは、いつの時代でも作家の本懐であるに相違ない。しかし昨貞享三年までの五年間に、わずか六作三十四冊であった彼が、貞享四年から翌元禄元年までの二年間に、十作五十四冊の大量生産作家に変貌したのである。しかもその大部分は『男色大鑑』に引き続き、「諸国敵討」と傍題した『武道伝来記』(八冊)や『武家義理物語』(六冊)、『新可笑記』(五冊)、『本朝桜陰比事』(五冊)など、町人出身の西鶴にとっては体験領域外の、伝来の写本によるか聞き書きするよりほかはない、武家物シリーズである。

これだけの外注による量産をこなすには、ローカル作家時代のように、問題意識を持ってリアルタイムで取材し、文体や構成に意を用いた作風では処理できない。どうしても題材本意で文章も記述体の説話文学に移行せざるをえない。しかもその世界に対してアウトサイダーであった西鶴は、武士道というモラルに支配された悲劇を、痛みを感ずることなく、新しい娯楽文学としてリアルに描いている。それについて、『武道伝来記』についての論難書『日本武士鑑』(元禄九年刊)が序においていう。

ここに近年、武道伝来記と名付けて世に弘むるあり。これをうかがひ見るに、一として実なることなし。猥りがはしき虚亡の説のみなれば、人の教になるべき物にしも非ず。

返り討ちにされたり、せっかく敵を討ちながら、たまたまその敵の家に奉公していたばっかりに、主殺しの罪で獄門にかけられたりという、武家としては触れられたくない『伝来記』の冷静非情な敵討ちの裏話を、虚妄の説として非難しているのである。だがそれ故にこそ『伝来記』は、正義化された敵討ちの正体を暴いたユニークな作品たりえたのである。



アウトサイダーの西鶴が、こういう大量の武家説話シリーズを書き続けるには、ローカル作家時代の『西鶴諸国ばなし』の序文で、「世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ」という、取材旅行などしていては間に合う道理がない。もうこの頃は、推理作家の松本清張さんが取材や必要事項の蒐集・整理のために複数の助手を抱えておられたように、その種の西鶴工房が形成されていたようである。そしてそのニュースソースは、貞享・元禄当時九十五軒に達していた諸藩の蔵屋敷の社交性ゆたかな蔵役人たちであった。その蔵屋敷の蔵物（年貢米や物産）の売買を代行する「蔵元」も、その代金を預かる「銀掛屋」（掛屋）も、多くは有力な両替商で、談林俳諧を嗜む連中であった。両者は新町廓などで饗応し合っていた（宮本又次『大坂町人』）。武家説話の取材に出向く必要はなかったのである。

だが武家物シリーズはテーマ・題材ともに行き詰まることを見越した西鶴は、同じ説話でも新生面を開くべく、武家物とは打って変った町人階級の盛衰をテーマとした説話集『日本永代蔵』（六冊三十章・三都版）を、『武道伝来記』（貞享四年四月刊）と『武家義理物語』（翌元禄元年二月刊）との間の同元年一月に発表している。かつて現役の町人であった西鶴にとって、サブタイトルを「大福新長者教」というこの『永代蔵』は、目先の変った町人説話として執筆したとはいえ、アウトサイダーであった武家説話と違って、その世界は明暗を百も承知の運命共同体であった。はからずもこの一作が、武家物シリーズの衰退を尻目に、元禄三年以後、没する同六年までに、説話性から脱却して独自な方法を擁するに至ったシビアな町人物の晩年を迎えることになったのである。

最後に、この流行作家時代に西鶴は、自分の俳諧師としての体験や素質に適応した方法を確立していることを指摘しておきたい。何しろ彼は小説を書くまでの二十数年、俳諧（連句）という短詩型をもっぱらとしてい

たので、人生の断面をとらえて簡潔に描くコント作家的な方法が身についていた。けれども作家を志したからには、一定のテーマや題材を総合的に描くという意欲を持ったのは当然である。だからローカル作家時代の西鶴は、処女作の『一代男』や『一代女』『五人女』などのように、長編・中編を目ざしているのだが、主人公を設けているとはいえコントの集合体で、建築的な構成とは無縁である。

ところが『男色大鑑』を起点とする武家物シリーズになると、一定のテーマと題材によって統一した短編集という、短歌における連作と同様の、独特の方法を擁するに至っている。これによって、例えば貞享二年刊の『西鶴諸国ばなし』のような、素朴で無構想の中世的説話文学や、長編めかした短編集というスタンスの不安定な方法から脱出し、彼の素質にフィットした方法に落ち着いたのであった。『日本永代蔵』を起点とする晩年の町人物も、テーマや題材は違ってもこの方法を堅持しているから、まさに西鶴が作家として確立した基本的方法というべきである。

（暉峻康隆）

凡例

一、本書には、井原西鶴の浮世草子中、中期の代表作品、『西鶴諸国ばなし』『本朝二十不孝』『男色大鑑』を収めた。本文作成にあたっては、挿絵のすべてを、本文該当個所に収め、場面の説明を施した。底本には、解説に記したとおり、最も信頼できるものを選び、さらに諸本を参照しつつ、正しい本文づくりに努めた。

一、本全集の一貫した方針にのっとり、また、影印本・原本どおりの翻刻本が、すでに多数出版されている現状を考え、単に正確なだけではなく、つぎの諸点で、読者に理解しやすく、親しみやすい本文づくりを行った。

漢字

1 読みやすい本文づくりの観点から、原文にある漢字→仮名、仮名→漢字の操作を行った。「其(その)・此(この)・也(なり)」などは、すべて「その・この・なり」に改めた。

2 旧字体を現在通行の字体に改めた。

3 当て字・誤字の類は、原則として、正字に改めた。

大形(おほかた)→大方　機遣い→気遣ひ　許・斗・計→ばかり　思日→思ひ　浅間敷→浅間しき　去迚は→さりとては

本文理解の上で、原形を示す必要あり、と考えられる場合は、頭注欄に掲げた。

4 異体字は、原則として、通行字体に改めたが、ニュアンスの汲みとれる「泪(なみだ)」などについては残した。

仮名

1 歴史的仮名づかいに統一することを原則とした。

2　送り仮名は、活用語尾から付すことを原則とした。書簡文などのような特殊な場合は、味わいをこわさぬために、送りを省くような操作も行った。

ふりがな

1　ふりがなは、常用漢字表に載るもの以外はこれをつけ、載るものでも読み誤るおそれのないものは省略した。

2　また、右の場合でも、頻出する語については、見開きページ内で、適宜、省略を行った。

句読点・段落

1　句読点は、読みやすさへの配慮にもとづき、本文の語調を生かしつつ施した。

2　段落も、読みやすさへの配慮から、適宜、新たに設けた。現代語訳の段落は、本文に準じて設けた。

清　濁

1　原文の清濁には、誤脱が多いので、当時の発音に即した形に、できるだけ改めるべく、適宜、これを取捨した。

反復記号・重ね字

1　「〱」や、一字の漢字の場合の重ね字「々」は使用するが、「ゝ」は、原則として用いない。

会話・心中思惟

1　複雑な文脈を容易に理解するためのくふうとして、会話・心中思惟を、適宜、「　」記号でくくり、地の文と区別した。

2　ただし、西鶴文体の特色のひとつとして、会話が末尾で地の文にとけこんでいるような個所については、無理に記号をつけるようなことはしなかった。

3　本文における「　」と、現代語訳における「　」とは、できるだけ対応するよう努めた。

鑑賞の手引きほか

1　本文鑑賞の手引きとなるような事柄については、頭注欄に、❖をつけて掲げた。この位置は、手引きの内容から適当と

考えられる個所に掲げたため、章頭・章尾など、必ずしも一定ではない。

2 『男色大鑑』では、主として後半四巻に、実在した役者が多数登場するので、巻末に「登場役者一覧」としてまとめ、頭注では参照していただくために「→役者一覧」と記した。

暦月・年齢

1 本書の中では、特にことわりのない場合は、陰暦を用い、年齢は数え年である。

表題ほか

1 各話の目録と表題（見出し）が異なる場合は、そのまま残した。

2 その他、板本としての形式を残すことが適当と考えられる個所（刊記など）については、形式上の不統一も若干残した。

一、本書は日本古典文学全集本をもとに手を加えたものであるが、改稿するにあたり、『男色大鑑』については谷脇理史氏の協力を得た。記して謝意を表する次第である。

私たちの先人の計り知られぬ努力によって、今日まで読み継がれ、守り伝えられてきた貴重な文化的財産、日本の古典の中には、現在では当然配慮の必要がある語句や表現が、当時の社会的背景を反映して使用されている場合があります。そうした古典が生まれ、育まれてきた時代の意識をそのまま読者に伝え、歴史的事実とその古典を取りまく社会的状況への認識を深めていただくのが、古典を正しく理解することにつながると考え、本全集では原文のままを収録することといたしました。

（編集部）

西鶴諸国ばなし

宗政五十緒 校注・訳



板本表紙（吉田幸一氏蔵）
雲形巻竜紋表紙本。縦26.8㎝×横17.3㎝

入絵

西鶴諸国はなし

一

巻一　あらまし

一　公事は破らずに勝つ　奈良、東大寺と興福寺の間の太鼓貸借事件。所有は興福寺、保管は東大寺となった奈良奉行の判決のいきさつ。最高の知恵者は公儀の奈良奉行であったという「知恵」譚。

二　見せぬ所は女大工　京都、御所方の奥局で起こった怪異。一条に住む女大工を入れて調べると、祈禱札の間に金釘でとじられた守宮が起こした異変であった。「不思議」譚。

三　大晦日はあはぬ算用　妻の兄から歳末に金十両贈られた浪人者原田内助が、同じ浪人仲間七人を品川の借宅に招いて忘年会。その席で小判十両を座中に見せる。のち、十両を集めると九枚しかない。客がその座で衣服を改めるに、三人目の男が金子一両持っていることを語り、身の潔白を述べ、生命を捨てると言う。ところが座中の何者かが「小判はここにある」と言って一両を投げ出した。と、内方より内儀が、小判は重箱の蓋に付着して台所に返っていた、と言って一両を持ち出す。十両の小判が十一枚になったのは、一両を客の誰かが出したに違いない。算用が合わない。しかし、出し主は申し出ない。内助の判断で、庭の手水鉢の所に一両置いて、帰る時に客を一人ずつ出して、小判一両の主に返却する。江戸の武士仲間の「義理」譚。

四　傘の御託宣　「慈悲」のために紀州掛作観音の貸し傘ということがあった。この傘がある時、風で飛んで肥後の奥山に落下した。里人はこれを伊勢内宮の神体と判断して、社を造り信仰すると、この傘に精が入って神になった。この神が「美しい娘を巫女に差し出せ」と御託宣をする。それに応ずる娘がいないので、後家がその役を引き受け、社殿に一夜奉仕したけれども、神が情をかけてくれなかったので、傘を引き破って捨てた。

五　不思議のあし音　昔、身分のあった人が盲目となり、伏見に隠れ住んで一節切を吹いていた。この人は万物の調子を知り当てることができた。ある二十三夜待に問屋に呼ばれて行き、そこで、道を通る人々が何者であるか、その中には不思議な人物もいたが、足音でいちいち言い当ててみせた。「音曲」譚。

六　雲中の腕押し　元和年間、箱根山の熊谷に庵住する短斎坊のところに、昔、源義経の家来であった常陸坊海尊が現れ、昔話をする。そこへ平家の武者、猪俣小平六がやって来て、二人で腕押しをする。「長生」者のはなし。

七　狐四天王　播州姫路の人、門兵衛が石を投げて子狐を何気なく殺した。これにより「恨」まれて、狐たちに一族の者が仕返しされる。その仕返しのさまざまのはなし。

世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。
一熊野の奥には、湯の中にひれふる魚あり。二筑前の国には、ひとつをさし荷ひの大蕪あり。三豊後の大竹は手桶となり、四若狭の国に二百余歳の白比丘尼の住めり。五近江の国堅田に、七尺五寸の大女房もあり。六丹波に一丈二尺の乾鮭の宮あり。七松前に百間つづきの荒和布あり。八阿波の鳴戸に、竜女のかけ硯あり。一〇加賀の白山に、えんま王の巾着もあり。一一信濃の寝覚の床に、一二浦島が火うち筥あり。一三鎌倉に頼朝の小遣帳あり。一四都の嵯峨に、四十一まで大振袖の女あり。
これをおもふに、人はばけもの、世にない物はなし。

世の中はたいへん広いものである。そこで、日本の諸国を見巡って、はなしの種を求めてみた。すると――。
熊野の奥山には、湯の中で泳いでいる魚がいる。筑前国には、一つを二人して差し担う程の大蕪がある。豊後国の大竹はそのまま手桶となる大きさ、若狭国には二百余歳まで長生きをしている身体の白い尼が住んでいる。近江国の堅田に、身長が七尺五寸の大女もいる。丹波国に一丈二尺ある大きな干した鮭を祀った社がある。松前に百間つづいた長い荒布がある。阿波の鳴門に、竜女が持っていた掛硯がある。加賀の白山に閻魔王の巾着がある。信濃の寝覚の床に浦島太郎の持っていた火打箱がある。鎌倉に源頼朝の小遣帳がある。京都の嵯峨に四十一の年まで大振袖を着て客を引く女がいる。
これを思うと、人間は化物である。どのようなものでも、ないものは何もない、というのがこの世の中。

一 和歌山県東牟婁郡本宮町にある川湯温泉では、湯の中を鮎など小魚が泳いでいる。 二 福岡県怡土(糸島郡)では大蕪を産出(筑前国続風土記三十)。 三 大分県日田地方の漢竹にはそのまま手桶になる大きさのものがある。 四 福井県小浜市の熊野山に祀られる白比丘尼は人魚を食べて八百歳生きたという伝説がある(西北紀行下 貝原益軒)。 五 滋賀県大津市堅田のおよねという女は身長が七尺二、三寸(約二・二メートル)あり大力。貞享頃見世物に出る(『用捨箱』下など)。 六 京都府綾部市の九鬼魂神社に合祀された杵宮の神体についての一説か。一丈二尺は約三メートル六〇センチ。 七 北海道産の昆布のことか。ただし百間(約一八〇メートル)の長大なものは記録未見。荒布は長いもので四、五尺、日本では主として西南地方の海に産し、鳴門もその産地。
❖以上の六条は大なる物、長なる物の列挙である。
八 鳴門は竜宮城の東門に当たるという(太平記十八)。 九 掛子のある箱(外箱の縁に掛子を掛けて、盆様の蓋がはまるような作り)で、掛子に筆・墨、中に紙・帳簿など、下部に金や銭がはいるようになっている。→七八ページ挿絵(左下方)。 一〇 石川県の白山には地獄谷・血の池地獄などがある。 一一 長野県の木曾街道、寝覚の床臨川寺には浦島の遺品の硯箱・釣竿が伝わる。この谷川で彼が釣をした伝説がある(和漢三才

図会六十八)。 三 火打石・ほくちのほか、小銭なども入れる。 三 鶴岡八幡宮の別当家は頼朝の日記を蔵する(一話一言三)。

❖以上の四条は小銀(こがね)に関係したもの。

四 京都の西郊。愛宕山参詣者を泊める宿屋の客引き女が、年をとっても娘の姿をしていることをいう。

❖人間が化物である一つの姿を、浮世草子好色物風の筆致で、滑稽に述べる。

近年諸国咄(きんねんしよこくばなし)

大下馬(おほげば)　巻一

目録(もくろく)

一 民事訴訟。この話は、太鼓の所有権についての訴訟話。
二 「破らず」は、「太鼓を打ち破らず」と「訴訟で相手を打ち敗らず」との意味をかける。両方ともしないで、結果としては興福寺が太鼓の所有権を獲得した知恵話。
三 大寺院の子院。興福寺の子院は貞享頃には九十六あった（奈良曝三）。
四 人に見せない女性の居住する奥つぼねの修理は女大工にさせる。
五 上京にある東西に通じる主要道路。
六 東海道で、日本橋から二里（約八キロメートル）、一番目の宿場。江戸の市中ではない。

一 神の述べる言葉。多くは神が人や物に憑(つ)き、あるいは夢に託して意志を述べる。二 京都市伏見区。桃山時代には伏見城の城下町として繁栄したが江戸時代初頭、伏見廃城により町は衰微した。しかし、東海道の宿駅の一つで、京都から大坂に行くには、この町の南、京橋から、夜間、下り船に乗るのが普通であり、またこの町の東部を北から南に通じる道は、京都の三条大橋東詰から南下して奈良に至る大和街道で、交通の要衝。三 伊豆と相模とにまたがる山で、東西が狭く高峻。東海道が通り、上り四里、下り四里。山頂の芦ノ湖を背にして箱根峠と元箱根との間に関所があり、江戸時代は箱根の関といい日本第一の関所。

四 古代の冠位の最高位。これを与えられたのは藤原鎌足がただ一人。よって鎌足の別称となる。幸若舞曲「大織冠」は鎌足とその子不比等(ふひと)を同一人として筋を作る。鎌足の二女こうはく女は唐の太宗皇帝の后となり、彼女が興福寺造営の施入にむけ宝珠・華原磬(かげんけい)・泗浜石(しひんせき)を日本に送る途中、房前の沖で竜王に宝珠を奪われる。これを取り返そうとして鎌足が房前に赴き、潜水の巧みな海女(あま)と契り、男子をもうけた後、理由を語り、海女に宝珠の取返しを頼む。海女は潜水するが、その間、竜王の心を酔わせるため鎌足が都か

(四) 傘(からかさ)の御託宣(ごたくせん)一　紀州(きしう)の掛作(かけづくり)にありし事　慈悲(じひ)

(五) 不思議(ふしぎ)のあし音(おと)　二伏見(ふしみ)の問屋町(とひやまち)にありし事　音曲(おんぎよく)

(六) 雲中(うんちゆう)の腕押(うでお)し　三箱根山熊谷(はこねやまくまだに)にありし事　長生(ちやうせい)

(七) 狐(きつね)の四天王(してんわう)　播州姫路(ばんしうひめぢ)にありし事　恨(うらみ)

公事は破らずに勝つ

[四]大織冠、さぬきの国、房崎の浦にて、竜宮へ取られし、玉を取り返さんために、都の伶人を、呼びくだし給ひて、管絃ありし、[五]唐太鼓、ひとつは、南都[六]東大寺にをさめ、またひとつは、[七]西大寺の宝物となりぬ。

この太鼓いつの頃か、[八]西本願寺に渡りて、今に[九]二六時中を、勤めける。昔日に、革張り替ゆる時、この中を見るに、[一〇]西大寺の、豊心丹の方組を、細字にて、書付ありけるなり。外は木をあらはし、中には諸の羅漢を彩色、金銀の置あげ、日本たぐひなき名筒なり。

毎年の[一一]興福寺の、法事に入る事ありて、東大寺の太鼓を借りて、勤められしに、ある年東大寺より、太鼓をかさずして[一二]衆徒・[一三]神主の言葉を、当年ばかりはと添へられ、やう〳〵借りて、仏事を済ましぬ。

その後、使を立つれども、太鼓をもどさず、寺中集まつて、

公事は破らずに勝つ

大織冠、藤原鎌足公が、讃岐国、房崎の浦で、竜宮へ取られた、唐土渡来の宝珠を取り返すために、都の楽人を呼び下されて、海上で音楽を奏した時に用いた唐太鼓の、一つは奈良東大寺に納め、他の一つは西大寺の宝物となった。

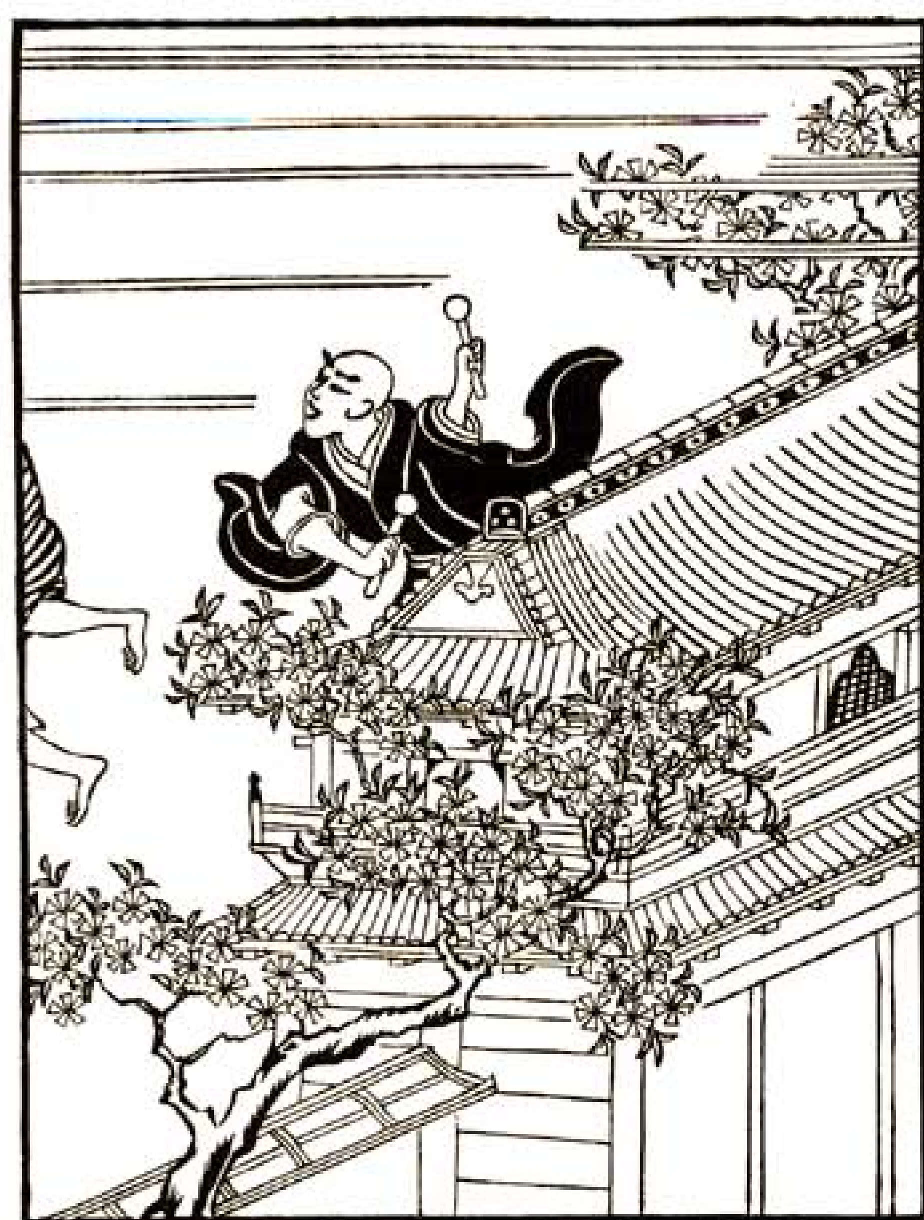
西大寺の太鼓は、いつのころか西本願寺に移り、今日に至るまで時刻を告げる太鼓となっている。その昔、革を張り替える時、この太鼓の筒の内を見ると、西大寺の豊心丹の薬方を細字で書き付けてあった。この太鼓は、外側は木地で、内側には多くの羅漢を彩色で描き、金銀泥の盛り上げをしてあって、日本無比の立派な筒である。

一方の、東大寺の太鼓であるが、毎年、興福寺の法事に必要あって、この太鼓を借りてつとめていたが、ある年、東大寺より太鼓を貸さぬというので、法事に支障をきたすことになった。興福寺の衆徒と春日大社の神主とが、今年だけは貸してほしいと、言葉を添えたので、東大寺も承諾して、興福寺の方ではやっと借り

ら楽人を呼び下し、奏楽させる。海女は宝珠を取って帰るが、途中竜のために殺される。この海女の子が藤原房前。五「大織冠」に「左右の楽屋に飾り立てたる大太鼓」とある。雅楽などに用いる大太鼓。六 聖武天皇発願による創建。興福寺と並称される奈良の大寺院。付属の宝蔵が正倉院。七 古代には、東大寺と並称された大寺院であったが、室町末期には兵火にかかり衰退。八 京都にあり、浄土真宗本願寺派本願寺の本山。西大寺の太鼓は堺の西本願寺派の寺院にある(雍州府志六)。九 一日十二時の時刻を報ずる太鼓となった。一〇 西本願寺の太鼓は、豊臣秀吉が朝鮮出兵の時、かの地から取り寄せ、西大寺に納めたところ、天正年間、現在地に西本願寺造営の時、秀吉の夢にこの太鼓が出現し、同寺に遣わされることを願ったので、秀吉が寄進。この太鼓の筒の用材はつつじの木で、筒内には豊心丹の方組がある(本願寺七宝物由来)。豊心丹は西大寺の諸坊で売っていた丸薬で病による諸痛を治す。その方組の伝来には、中国から道宣律師が伝来、畠山義春が伝来、と二説がある。江戸時代には有名な薬。一一 藤原不比等が現在地に移建したと伝える。藤原氏の氏寺で、春日大社の実権ももつ。

❖興福寺維摩会に用いる五獅子の如意は東大寺に蔵されていたが、両寺院間に事件があった時、東大寺が

評判する。「数年借し来つて、今、この時に至り、憎きしかたなり。只はかへさじ。打ちやぶつて」といふ者あれば、「それも手ぬるし、飛火野にて焼け」とあまたの若僧・悪僧いさみて、方丈に声ひびきわたりて静まらず。その中に学頭の、老法師の進み出て、「今朝より聞くに、何れもの申し分皆国土の費なり。某が存ずるには、太鼓をそのまま、当寺の物になせる、分別あり」と、筒の中に、東大寺と、先年よりの、書付を削り、新しき墨にて、元のごとく、東大寺と書きしるし、この事沙汰せず、東大寺に、もどせば、悦び宝蔵に



ることができて法事をすませた。

その後、東大寺は使者を立てて太鼓の返却を求めてきたが、興福寺はこれを戻さないで、すべての子院の者たちが集会して、このことを評議した。「長年貸し続けてきて、今日になって貸さぬというのは、何としても腹の立つ仕方だ。このままでは返さぬ。革をたたき破って返してやれ」と言う者があれば、「それも手ぬるい。飛火野で焼いてしまえ」と、数多の年若い僧や勇猛な僧らが勇みに勇んで、寺の方丈の座敷に人々の声が響きわたって、静めようとしても静まらない。その中に、学頭職の老僧が進み出て言うには、「今朝より皆々の言い分を聞くと、すべてわが国の損失になることばかりである。私が考えるには、太鼓をそのまま興福寺の所有の物にする計略がある」と、太鼓の筒の中に、東大寺と、以前より記してあった書付けを一度削り落として、あらためて新しい墨で、もとのように、東大寺、と書いて、この事を内密にして東大寺に返却すると、東大寺の側では喜び、宝物蔵に納め置き、今一度取り出して調べるということはしなかった。

翌年になってまた、興福寺の法事前に、使僧を遣わして、東大寺に、「例年のと

これを出さなかったので法事に支障をきたし、衆徒がこれを朝廷に奏上し、東大寺に勅があって、如意を出させ、法事を行う。永仁三年(一二九五)の事件である。この如意は表は三鈷杵を、裏は五獅子を彫る(塵添壒囊抄十九)。挿絵の太鼓に獅子の絵が描かれているのは右の事件を素材にしたことを暗示する。

三 江戸時代には二十家あり、春日神社の神人でもあり興福寺の諸用をつかさどり寺院内の実権を握っていた。三 春日神社の神主。藤原時風秀行の子孫が代々この職につく。

一 当時は、「借」を「貸し・借り」両訓。
二 興福寺と春日神社との中間にある野。
三 寺院の表の間。この間の奥の間に仏を祀り、表は廊下・縁を隔てて大庭がある。公式の会合に用いられる。
四 興福寺勧学院の職の一。別当の下、知院事の上。



興福寺側の若僧・悪僧が太鼓を返却すまいと勇んでいるさま。太鼓の皮に描かれた唐獅子の絵はこの話の原拠を示す。

入れ置き、かさねて出す事なし。

明の年また、興福寺の法事まへに、使僧を遣はし、「例年の通り、預け置き候、太鼓を取りにまゐつた」と申せば、腹立して、使の坊主を打擲して帰しける。

この事奉行所[五]へ申し上ぐれば、御僉議になつて、太鼓を改めたまふに、名筒を削りて、東大寺との書付、「たとへ興福寺からの、仕業にても、越度は古代の書付しれがたし。自今興福寺の太鼓に極め、先例の通り、置所は東大寺」にあづけ、年々入る時を、うちけるとなん。

おり預け置いた太鼓を取りに来ました」と言うと、東大寺の僧はこの言葉に腹を立てて、使僧を打ちたたいて帰した。

この事を興福寺側は奈良奉行に告訴すると、お取り調べになって、太鼓を調査されたところ、太鼓の筒の内を削って東大寺と書きつけてあるので、「たとえこの書付けが興福寺のしわざであったとしても、手落ちは東大寺の側にあり、古くからの書付けがどうなっていたか、現在では知ることはむつかしい。そこで、この太鼓は、今後は興福寺の所有物と取り決め、先例どおり置き場所は東大寺」ということにして、東大寺に預けて、興福寺では毎年の法事の時にこの太鼓を取り出して打った、ということで一件落着した。

五 奈良奉行。奈良町奉行ともいい、奈良の寺社の裁判をも行う。この第一章は、名裁判官の奈良奉行をほめ、公儀に対する祝儀としている。

❖この話は裁判話として、西鶴の作品としては、裁判小説『本朝桜陰比事』に接続する。

見せぬ所は女大工

道具箱には、錐・鉋・すみ壺[一]・さしがね[二]。顔も三寸[三]の見直し、中[四]びくなる女房、手あしたくましき、大工の上手にて、世を渡り、一条小反橋[五]に住みけるとなり。

「都は広く、男の細工人もあるに、何とて女を雇ひけるぞ」「されば御所方[六]の奥つぼね[七]、忍び返し[八]のそこね、または窓の竹うちかへるなど、すこしの事に、男は吟味[九]もむつかしく、これに仰せ付けられけるとなり」。

折ふしは秋もすゑ[一〇]の、女郎達案内して、かの大工を紅葉の庭にめされて、「御寝間の袋棚、えびす[一一]大黒殿まで、急いで打ちはなせ」と、申しわたせば、「いまだ新しき御座敷を、こぼち申す御事は」と、尋ね奉れば、「不思議を立るも理りなり。すぎにし名月の夜、更け行くまで奥にも、御機嫌よくおはしまし、御[一二]うたたねの枕ちかく、右丸・左丸といふ、二人の腰本どもに、琴のつれ引き。このおもしろさ、座中眠り

見せぬ所は女大工

大工の道具箱にあるものは、錐・鉋・墨壺・さしがね。その顔をつくづくと見るならば美点もあるが、鼻びくの女、手足はたくましくて、大工仕事が上手、これを職業にして、一条戻橋に住んでいるということである。

「都は広く、男の大工・指物師も多数いるのに、どうして女大工を人は雇うのか」「それは御所方の奥の女部屋の、忍び返しの破損、または窓格子の竹を打ち替えるなどの、簡単な仕事でも、男の大工では身元調べも面倒だから、そのような時にはこれに仰せつけられるということだ」。

ちょうど、頃は秋の末のこと、御所方で、末々の女たちが案内して、かの女大工を紅葉の植えてある庭に召されて、「お寝間の袋棚、夷・大黒天を祀ってある棚にいたるまで、急いでうちはずせ」と言いつけたので、「まだ新しいお座敷をおこわしになることは、どうしてでございましょうか」と、女大工がお尋ねすると、「不審に思うのはもっともである。

一 材木に直線を引くために用いる道具で、穴の中に墨を入れ、糸をこの穴の中に通し、墨をつけ、この糸を張って線を引く。大工の必要道具。
二 鋼鉄で作った物差しで「かね」ともいう。直角に折れ曲がっている大工の使うものを曲尺という。
三 諺。物の長さも、詳しく見直すと三寸の計り違いもある。物事は詳しく調べると多少の誤りもある、という意。さしがねの縁で文章が上から続く。
四 顔の真ん中の鼻が低い、不器量な顔をいう。
五 一条堀川にかかっている戻橋。
❖戻橋の西には、平安時代の陰陽師で占いの名人として知られる安倍晴明の屋敷があり（現在、晴明神社）、彼が使った十二式神は戻橋の下に置いていた。この縁。後出する占い師安倍左近は、この縁。また、渡辺綱は、この橋の上で鬼女に出会ったという伝説があり、これは二七ページに述べる、本話の素材の『古今著聞集』にある渡辺—渡辺綱—鬼女に出会う伝説—一条戻橋、という連想、また、叡山の祈禱札は、同じく『古今著聞集』にある薬師堂—薬師如来—比叡山延暦寺、という連想による。
六 天皇・上皇・女院などの居所、摂関家の屋敷などをいう。
七 屋敷の奥の女性が居住する部屋。
八 門・塀の上に盗賊などの侵入を防ぐために取り付けた、先のとがった鉄・竹・木の垣。→三四六ページ注三。

九 男子禁制の女人の居住する場所にはいるため、その職人の素姓の取調べは特に厳重。
一〇 秋の末と木の女郎(女官)とをかける。
一一 夷・大黒天を祀った棚。両神は幸福を願う神。
一二 「琴」と「うたたねの枕」は俳諧の付合。
一三 鼻が低く、額と両頬とあごとが高い女性をいう。不器量な女。
一四 お側付きの女性の名で、職名をつける。内蔵之助。
一五 京都東山にある八坂神社(神仏習合)の付近。洛東の名所で遊楽地であるから占い師も居住する。
一六 安倍家は陰陽師の家であるので、占い師には安倍の姓を名のって、その子孫、あるいはその家から別れ出た弟子であることを示す者が多い。

一 比叡山延暦寺(根本中堂の本尊は薬師如来)の家内安全の祈禱札。年々、重ねて打つ。
二 色は灰黒色で体長は長いもので約二〇センチ。九寸(約二七センチ)ははなはだ長いが、これはつぎに記す素材となったむかでの体長に準じたものであろう。
❖この話の素材は、『古今著聞集』巻二十「摂津国ふきやの下女昼寝せしに大蛇落懸かる事」(イ)と、これに



御所方の女大工の仕事のさま。何枚も重なっていた祈禱札の金釘にやもりがとじられている。仕事着が紋付・裾模様であるのは貴人方での仕事を示す。

を覚まして、あたりを見れば、天井より、四つ手の女、顔は[一三]乙御前の黒きがごとし。腰うすびらたく、腹這ひにして、奥さまのあたりへ、寄ると見えしが、かなしき御声を、あげさせられ、『守刀を持ちて、まゐれ』と仰せけるに、おそばにありし、[一四]蔵之助とりに立つ間に、その面影消えて、御夢物語のおそろし。我がうしろ骨と、おもふ所に、大釘をうち込むと、おぼしめすより、魂きゆるがごとく、ならせられしが、されども御身には、何の子細もなく、畳には血を流してありしを、[一五]祇園に[一六]安部の左近といふ、うらなひめして、見せ給ふ

過ぐる八月十五夜に、夜の更けゆくまで、この座敷で奥方さまにもご機嫌よくいらっしゃって、御うたたねなさったが、枕近くには右丸・左丸という二人の腰元が侍り、琴の連れ弾きをしておった。この琴のおもしろさに、座中の人々は眠りを覚ましてあたりを見ると、天井より四つの手のある、顔はおかめのようで色黒く醜く、腰の平たい女が、腹這いして奥方様の近くへ寄って行くと見えたが、奥方様は悲しいお声をおあげになり、『守り刀を持ってまいれ』と仰せられたので、お側に侍っていた蔵之助が取りに立つ間に、その化物の姿は消えてしまった。お目覚めになった奥方様は、恐ろしい御夢の物語をなさいました。自分の背骨と思われる所に大釘を打ち込まれた、と思われるほどの激痛で、意識不明になるほどにおなりでしたが、しかしながら、御身には何の変ったこともありません。ところが、畳には血が流れているので、祇園に安倍の左近という占い師がいるのを召して、占わせになると、『この建物の内に、災いを起こす原因があるようです』と申すので、建物の内部を、すべて調べて見るのである。遠慮なく、全部を打ちはずせ」と、三方の壁ばかりにして、そ

後続する「渡辺の薬師堂にして大蛇釘付けられて六十余年生きたる事」(ロ)。右二話は、イ、下女が昼寝している間に大蛇がその上に落ちかかろうとしたが、彼女が胸に大釘をつけていたので、恐れて落ちなかった。ロ、渡辺の薬師堂の屋根を修復した時、屋根のこけら板をはずすと、釘に打ち付けられて生きている大蛇がいた。堂の建立時から計算してみると、六十余年、この蛇は生きていたという話。さらには、中山三柳著『醍醐随筆』下に見える、宇治で上林峰順に聞いたつぎの話であろう。ある人が家の改築のため門をこわした時、「家内安全護摩供など札多く打たるを取はなしたるに、札が破れて釘残りたるを見れば蜈蚣の一尺ばかりなる身の正中を釘にて打付けて有」。これは札を打った時その下にいたのであろう。札の年は二十余年以前で、いまだに生きていた。

[三] かやの実。煎って殻を爪で押し割り内の実を食べる。かち栗は栗を日で干し、臼でついて殻・渋皮を除いたもの。食べる時は手に握りあたためて柔らかくする。勝軍利の義をとって武家では特に祝儀用として重んずる。両者は正月の祝儀酒の肴。[四] 正月に神棚に飾る松。[五] しだ。うらじろともいう。季節によって色が変わることがないので正月の祝い

に、『この家内に、わざなすしるしのあるべし』と、申すによつて、残らず改むるなり。用捨なく、そこらもうちはづせ」と、三方の壁ばかりになして、なほ明障子まで、はづしても、何の事もなし。「心に懸かる物は、これならでは」と、[一]叡山より御祈念の札板おろせば、しばしうごくを見て、いづれもおどろき、一枚づつはなして見るに、上より七枚下に、長九寸ばかりの[二]屋守、胴骨を金釘にとぢられ、紙程薄くなりても活きてはたらきしを、そのまま煙になして、その後は何のとがめもなし。

大晦日はあはぬ算用

[三]榧・かち栗・[四]神の松・[五]やま草の売声もせはしく、餅突く宿の隣に、[六]煤をも払はず、二十八日まで髭もそらず、[七]朱鞘の[八]反をかへして、「春まで待てといふに、是非にまたぬか」と、米屋の若い者を、にらみつけて、[九]すぐなる今の世を、[一〇]横にわたる男あり。名は原田内助と申して、かくれもなき、牢人。

のうえ、明かり障子まではずしても、何の変った事も見当らない。「心にかかるものはこれ以外にはない」と、打ち付けてあった、延暦寺からいただいたご祈禱の札板をおろすと、しばらくの間、それが動くのを見て、皆々驚き、この札板を一枚ずつとりはずして見ると、上から七枚下に、長さ九寸ばかりのやもりが、胴の骨を金釘で打ち付けられ、その体は紙ぐらいの薄さになっても、まだ生きて動いていた。それをそのまま焼いて煙にしたところ、その後は全く何の災いも起らなかった。

大晦日はあわぬ算用

榧の実・かち栗・神の松・うらじろの売り声も忙しく、餅つきをする家の隣に、煤払いもせず、年の暮れの二十八日まで髭も剃らず、朱塗りの鞘の反りを返して、「春まで支払いを待てというのに、どうしても待てないのか」と、掛取りにやって来た米屋の若手代をにらみつけて、何事もまっすぐに正しく行われている今の世を、横車を押してわたる男がある。名

物につけて飾る。六 煤掃きもしない。江戸では一般に十二月十三日に行うが定まりはない。七 朱塗りの鞘。江戸初期の伊達風俗で主人公が六法者の侍である事を示す。八 刀の刃の方を上方にしてすぐ抜けるように構える。九 慣用句。まっすぐな政治が行われている今日。
一〇 横道なことをして世を送る。世間に迷惑をかけ不法なことをして生活する。一一 品川妙国寺の海岸寄りにあった。一二 半井は朝廷の典薬頭（てんやくのかみ）和気氏。江戸幕府典薬頭の家も半井で、清庵は半井家から姓を許された医者。一三 現、外神田二丁目にあり、平将門を祀り、武神として知られ参詣人も多い。この頃は江戸の町はずれ。一四 遠慮なく人に財物の援助を願い望むこと。ここは金銭。
一五「…病の妙薬、…丸、…によし」という薬袋の表書きをもじる。
❖この部分の原拠は『可笑記』巻二のつぎの話。大江文平という人、貧乏の果てに金持の医者玄山に貧病の薬を求めたところ、玄山笑って調合し、金子百両を包み「養命補身丸」と書いて与え、「一治療は大験あり、再発は知らず」と言った。
一六 かみころもの略。厚手の和紙をこんにゃく糊でつなぎ、柿渋を塗り、日にさらし、足で踏み、手でもみ、柔らかくして作る。冬の着物で、寒さを防ぐによいが、そまつな衣服。
一七 夏の羽織。
❖客が侍として、貧乏の中にありな

広き江戸（えど）にさへ住みかね、この四五年、品川（しながは）の藤茶屋（ふぢぢやや）[一一]のあたりに棚かりて、朝（あした）の薪（たきぎ）にことをかき、夕（ゆふべ）の油火（あぶらび）をも見ず。これはかなしき、年の暮（くれ）に、女房（にようばう）の兄、半井清庵（なからゐせいあん）[一二]と申して、神田（かんだ）[一三]の明神（みやうじん）の横町（よこまち）に、薬師（くすし）あり。このもとへ、無心（むしん）[一四]の状（じやう）を、遣（つか）はしけるに、度々（たびたび）迷惑ながら、見捨てがたく、金子（きんす）十両（りやう）包みて、上書（うはがき）に、「ひんびやうの[一五]妙薬（めうやく）、金用丸（きんようぐわん）、よろづによし」としるして、内儀（ないぎ）のかたへおくられける。

内助よろこび、日頃別（ひごろべつ）して語る、浪人仲間へ、「酒ひとつもらん」と、呼びに遣（つか）はし、幸ひ（さいはひ）雪の夜のおもしろさ、今までは、くづれ次第の、柴（しば）の戸を明けて、「さあこれへ」といふ。以上七人の客、いづれも紙子（かみこ）[一六]の袖（そで）をつらね、時ならぬ一重羽織（ひとへばおり）[一七]、どこやらむかしを忘れず。常の礼儀すぎてから、亭主罷（まか）り出（いで）て、「私（わたくし）仕合せの合力（かふりよく）を請けて、おもひままの正月を仕る（つかまつる）」と申せば、おの〳〵、「それは、あやかり物[一八]」といふ。「就（それにつき）レ夫上書（うはがき）に、一作（いつさく）[一九]あり」と、くだんの小判を出（いだ）せば、「さてもかる口なる御事[二〇]」と見てまはせば、盃（さかづき）の数かさなりて、「能（よ）い年忘れ、ことに長座（ちやうざ）」と、千秋楽（せんしうらく）[二一]をうたひ出し、

は原田内助（ないすけ）といって、名の知れわたった浪人。広い江戸の市中にさえその無法さが知れわたり、住みにくくなって、この四、五年前から品川に移り、藤茶屋（ふじぢゃや）近くに借家住いをしていたが、貧しさも果てまで来て、朝の炊事に使う薪（たきぎ）にも事をかき、夜は灯油もないというありさまであった。このようなどん底の貧しさで迎えた年の暮れに、女房の兄に半井清庵（なからいせいあん）といって、神田明神の横町に医者がいたが、そこへ無心の手紙を出したところ、たびたびの事で迷惑ではあったが見捨てるわけにはゆかないので、金子十両を包んで、その上書きに、「ひんびょうの妙薬、金用丸、よろずによし」と書いて、内助の内儀の方に贈られた。

内助は喜び、常（つね）日頃、特に懇ろに交際している浪人仲間へ、「酒を一献（こん）差し上げたい」と呼びにやった。さいわい、その夜は雪で、景色もおもしろく、これまでは崩れたままになっていた柴（しば）の戸をあけて、「さあ、これへお入りくだされ」と案内する。合計七人の客は、皆、紙子（かみこ）を着、冬に時節はずれの単羽織（ひとえばおり）を着てはいるが、どことなく、昔仕官していたころの面影が残って一応の身なりを整えている。一通りの挨拶（あいさつ）がすんでから、亭主

がら作法を欠かぬ様を描き出している。後続する事件において、客のおのおのが義理がたく身を処してゆく行動に対応する身なり。
一八 その幸運に似たいと思うほどの幸運者。相手をほめる場合の慣用句の一。
一九 一つの作意。ひと趣向。
二〇 滑稽で軽妙な言葉。
二一 謡曲「高砂」のキリ(末尾)の部分「千秋楽には民を撫で、万歳楽には命を延ぶ、相生の松風颯々の声ぞ楽しむ」で、これをうたうと宴会が終了したことを示す。

一 酒の燗をするに用いる、つると口とがついた金属性の小鍋。これを銚子の代りに用いて直接にこれから酒を杯に入れるのは卑賤の風俗。
二 塩辛を入れた壺皿。塩辛は強肴(酒を更に勧めるための肴)で、客が好きなだけ壺から取る。
三 面妖のなまり。不思議。
四 渋い顔。しかめっつら。
五 きちんとすわり直して。膝を立ててすわるのが正式の作法。

燗鍋・塩辛壺を手ぐりにしてあげさせ、「小判も先づ、御仕舞ひ候へ」と集むるに、十両ありし内、一両たらず。座中居なほり、袖などふるひ、前後を見れども、いよ〳〵ないに極まりける。

　あるじの申すは、「其の内一両は、さる方へ払ひしに、拙者の覚え違へ」といふ。「只今まで慥か十両見えしに、めいよの事ぞかし。兎角は銘々の身晴れ」と、上座から帯をとけば、その次も改めける。三人目にありし男、渋面つくつて物をもいはざりしが、膝立てなほし、「浮世には、かかる難儀



が改めて出て、酒宴になり、「私は運のよい援助を受けて、思いのままの正月をします」と言うと、皆々、「それはうらやましい」と言う。「それについて、金包みの上書きにひと趣向が見られます」と、かの小判を出すと、「さてさてお上手なしゃれだ」と見て回すうちに、杯の数も重なって行く。「気持のよい年忘れの会で、ことのほか長居をしました」と、「千秋楽には民を撫で」と祝言の謡をうたいだし、酒宴も果てになり、燗鍋・塩辛壺を手渡しして片づけてしまわせ、「小判もまずはおしまいください」と集めたところ、十両あったうちの一両が足らない。一座の人々は居ずまいをなおし、袖などを打ち振り前後を見、調べてみたが、いよいよ出てこない。

　主人が言うには、「そのうちの一両は、ある所に支払ったので、私の覚え違いでした」と言う。「ただ今まで、確かに十両あったのに不思議なことだ。とにかく皆の身の潔白を示すために」と、正客から着物の帯を解いて身の潔白を示すと、その次の男も衣類を改めた。ところが三番目にすわっていた男は、それまでは渋い顔をしてものも言わなかったが、居ずまいを正し、「この世の中にはこういっ



内助宅で客に見せた小判が重箱の蓋に一枚付着していたのを、その妻が持ち来るさま。離れ座敷・渡り廊下の借宅は内助が中級武士であったことを示す。

もあるものかな。それがしは、身ふるふまでもなし。金子一両持ち合はすこそ、因果なれ。思ひもよらぬ事に、一命を捨つる」とおもひ切つて申せば、一座口を揃へて、「こなたにかぎらず、あさましき身なればとて、小判一両持つまじき物にもあらず」と申す。「いかにもこの金子の出所は、私持ちきたりたる、六徳乗の小柄、七唐物屋十左衛門かたへ、一両二歩に、昨日売り候事、まぎれはなけれども、折ふしわるし。つね〴〵語り合はせたるよしみには、生害におよびし跡にて、御尋ねあそばし、かばねの恥を、せめては頼む」と申しもあ

六 彫金家、後藤家の本家第五代。代々四郎兵衛と称する。天文十九～寛永八年(一五五〇～一六三一)。後藤家は室町中期より、足利・織田・豊臣・徳川にわたって、代々の彫金の家。徳乗の時から大判座・分銅座の支配を行う。彫金工としては特に傑出した人ではないが、金座の支配を行った後藤光次は彼に彫金の術その他を学んだ。小柄は刀の小刀櫃にさす小刀。また、その柄をいう。ここは柄の彫金が徳乗の作という意味。

七 輸入品を取り扱う商人。工芸美術品をも扱う。

たつらいこともあるものだなあ。私は衣服を振って調べるまでもない。金子一両を持ち合わせているのが身の不運だ。思いも寄らぬことで一命を捨てることになった」と思い切って言った。すると、一座の人々が口をそろえて、「あなただけでなく、いかにおちぶれた身の上だとはいえ、小判一両を持たないものではない」と言う。「いかにもこの金子の出所は、私、長年持っていた後藤徳乗作の小柄を、唐物屋十左衛門方へ一両二歩で昨日売却したことに違いはないが、何分、時節が悪い。常々懇ろに語り合っていた仲として、私が自害したあとで、お調べくださって、死後に残った汚名をどうかすすいでもらいたい」と言いもあえず刀の革柄に手をかけて抜こうとする。その時、「小判はここにある」と、丸行灯の陰から小判一両を投げ出した者がいる。「さては見つかったか」と一座の騒ぎがしずまり、「物には念を入れて調べるがよい」と言う時、台所から内儀が声を出して、「小判はこちらに来ていました」と、重箱の蓋につけたまま座敷へ出された。「これは、宵のうちに山芋の煮染めを入れて出されたが、その湯気でくっついたのか。そういうこともあろう。これ

へず、革柄[一]に手を掛くる時、「小判はこれにあり」と、丸行灯の影より、なげ出せば、「さては」と事を静め、「物には[二]、念を入れたるがよい」といふ時、内証より、内儀声を立てて、「小判はこの方へまゐつた」と、重箱の蓋につけて、座敷へ出されける。「これは宵に、山の芋の、にしめ物を入れて出されしが、そのゆげにて、取り付き[三]けるか。さもあるべし。これでは小判十一両になりける」。いづれも申されしは、「この金子、ひたもの数多くなる事、目出たし」といふ。

　亭主申すは、「九両の小判、十両の僉議するに、十一両になる事、座中金子を持ちあはせられ、最前の難儀を、すくはんために、御出しありしはうたがひなし。この一両我が方に、納むべき用なし。御主へ返したし」と聞くに、誰返事のしてもなく、一座いなものになりて、夜更鶏[四]も、鳴く時なれども、おの〳〵立ちかねられしに、「このうへは亭主が、所存の通りに、あそばされて給はれ」と、願ひしに、「兎角あるじの、心まかせに」と、申されければ、かの小判を一升桝に入れて、庭の手水鉢の上に置きて、「どなたにても、この金子の主、

では小判はふえて十一両になった」。皆が言うには、「この金子、どんどんと数多くなることは何としてもめでたい」。

　亭主が言うには、「九両の小判は実は十両のはず、という詮議をしているうちに十一両になった、ということは、この座中にどなたか金子を持ち合わせた方がおられ、最前の難儀を助けようとして、ご自分の小判をお出しになったに違いない。この一両は私の方に納める筋合いのものではない。持主の方に返却いたしたい」と、客に聞いたが、誰一人名のって出る者もなく、一座は妙に白けてしまって、夜更けに鳴く一番鶏が鳴き出す時分になっても、皆々座を立って帰ろうとしても帰ることができない。そこで、「このうえは亭主が考えている通りにさせてくださらぬか」と願ったところ、「ともかくも、ご主人のお心にまかせる」と客たちは言われたので、亭主はかの小判を一升枡に入れて、庭の手水鉢の上に置いて、「どなたでも、この金子の持主はお取りになってお帰りください」と、お客を一人ずつ立たせて、そのつど、戸をいちいち閉めて、七人を七度に帰して、その後、内助は手燭をともして枡の中を見ると、誰とも知れず持ち帰っていた。

一 刀の柄を鮫の皮で巻いて、その上を糸で巻いたもの。立派な装具で、持主は浪人していても刀を大切にしていることを示す。

二 諺に「物には念を入れよ」。

三 小判は楕円形で、重さは約四・八匁(約一八グラム)、寸法は縦約二・三寸(約七センチ)、横約一・二寸(約三・六センチ)。厚さは一ミリメートル以下なので、山の芋のねばりと湯気とでくっつくことは考えられる。

四 鶏は丑の時より初めて鳴く。これを一番鳥という(和漢三才図会四十二)。ここは冬であるから、この時刻が午前二時過ぎになったことを示す。

五 てしょく。持ち行くに便利なように柄のついた小さい燭台。

❖商人の掛取りに対しては支払いを

しない侍が、侍同士の間ではきわめて義理がたいのは、当時における武士と庶民との間の身分差別意識の表れである。また、登場した侍が六法者たちで、その仲間同士では義理を特に重んずるということをこの話は示している。

とらせられて、御帰り給はれ」と、御客独りづつ、立たしまして、一度々々に、戸をさし籠めて、七人を七度に出して、その後内助は、[五]手燭ともして見るに、誰ともしれず、とつてかへりぬ。

あるじ即座の分別、座なれたる客のしこなし、かれこれ武士のつきあひ、格別ぞかし。

傘の御託宣

[六]慈悲の世の中とて、諸人のために、よき事をして置くは、[七]紀州掛作の、観音のかし傘、二十本なり。昔よりある人寄進して、毎年張り替へて、この時まで掛け置くなり。いかなる人も、この辺にて雨雪の降りかかれば、断りなしに、さして帰り、日和の時律義にかへして、一本にても、たらぬといふ事なし。

[八]慶安二年の春、[九]藤代の里人、この傘をかりて、[一〇]和歌吹上にさし掛かりしに、[一一]玉津島のかたより、[一二]神風どつと、この傘と

亭主の即座のくふう、座なれた客の振舞い、かれといいこれといい、武士の交際というものは格別に立派なものである。

傘の御託宣

仏の慈悲があまねくゆきわたっているこの世の中であるから、諸人のために、人々はよい行いをしておく。その一つは紀伊国の掛作の観音の寺にある、貸し傘二十本である。昔から、ある人が寄進して、毎年張り替えて、今日まで寺に掛け置かれている。どのような人でも、この辺で雨や雪が降りかかると、断りなしにこの傘をさして帰るが、天気のよい時にまっ正直に返却するので、一本でも足らなくなったということがなかった。

慶安二年の春、藤代の村人がこの傘を借りて和歌の浦の吹上にさしかかったと

六 仏語。慈は楽を与えること、悲は苦を除くこと。仏・菩薩が、一切の衆生を愛したまう心をいう。特に観世音菩薩についてよく用いる。「掛作の観音」にかかる。

七 紀州は紀伊国(和歌山県)。掛作は欠作とも書き、現、和歌山市嘉家作丁。和歌山の町の北の入口で、京大坂から和歌浦・熊野へ通じる道筋に当たり、小さい町で宿屋がある。観音は一乗院観音寺・千手院弘誓寺の二か寺がある。欠作の町の西にある本町九丁目には傘師が並んでいた。

八 一六四九年。本書刊行の貞享二年からは三十五年前。

九 和歌山県海南市藤白。和歌山の町より約八キロメートル南にあり、その峠は町から見え、熊野街道が通る。

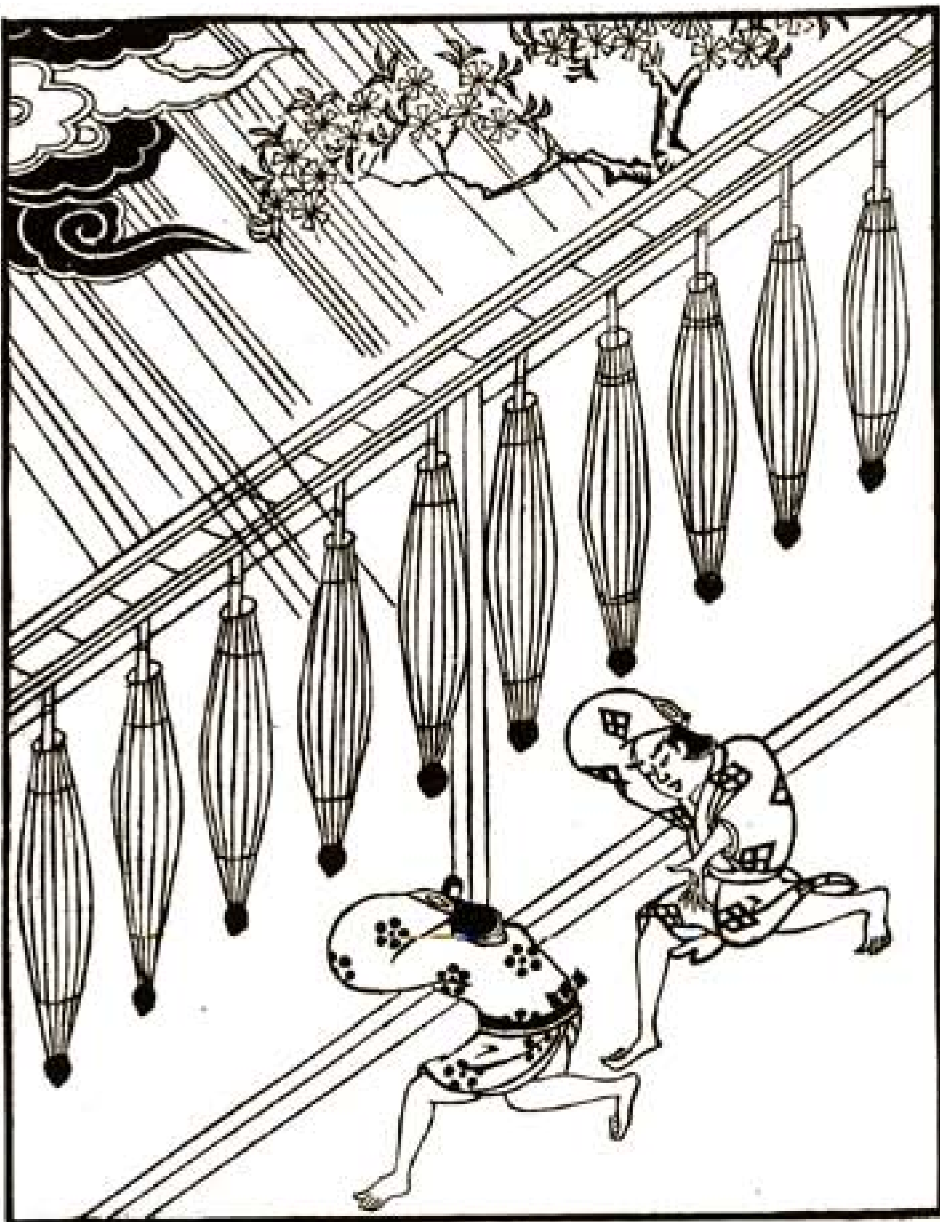
一〇 和歌山の町と和歌浦との間の北の浜。歌枕。「藤代の御坂を越えて見渡せば霞もやらぬ吹上の浜」(続後撰 行意)。付近の雑賀庄は室町時代一向宗門徒の根拠地。

一一 和歌浦の民家の東にある玉津島社。小社であった。歌枕。

一二 玉津島の縁で神風といった。春の突風。

つて、行衛もしらずなるを、惜しやとおもふ甲斐もなし。吹き行く程に、肥後の国の奥山、穴里といふ所に落ちける。

この里はむかしより、外をしらず住みつづけて、無仏の世界は広し、傘といふ物を、見た事のなければ、驚き、法体・老人あつまり、「この年まで聞き伝へたる、様もなし」と申せば、その中にこざかしき男出て、「この竹の数を読むに、正しく四十本なり。紙も常のとは格別なり。かたじけなくも、これは名に聞きし、日の神、内宮の御神体、ここに飛ばせ給ふぞ」と申せば、恐れをなし、俄に塩水をうち、荒菰の



掛作観音の貸傘のさま。諸人が急な雨に遇うと自由に使用できる。男たちが袖笠で駆けているのは、衣装から春の野遊びに出かけていたことを示す。

ころ、玉津島の社の方から突風がどっと吹いて、この傘を取って行方知れずになったのを、ああ、惜しい、と思う甲斐もなく、失ってしまった。傘は風に吹かれて、九州肥後国の山奥の、穴里という所に落下した。

この村の人々は、昔から他所の土地との交渉を断って住み続けているという。世界は広いもので、このような文化の程度も低く仏法もゆきわたっていない土地であるから、傘というものを人々は見たことがない。そこで、皆々驚き、法師姿をした物知り老人たちが集まり、「この年まで、このようなものを聞き伝えた例がない」と話し合っている時、その中の小利口な男が進み出て、「この骨の竹の数をかぞえてみると、まさに四十本ある。紙も普通のものとは異なっている。畏れ多いことだが、これは噂に聞いた日の神、伊勢の内宮、天照大神のご神体がここに飛来されたのだ」と言うと、皆々恐れてしまって、この傘ににわかに塩水を打ってけがれを清め、荒菰の上に奉置して、村人総出で山にはいって、社殿を造る用材を運び出し、屋根に葺く萱を刈り、やがて伊勢の内宮のようにして、あがめるようになった。それにつれて、傘に神霊

一　熊本県の南の山間部であろう。この地域は相良藩領で一向宗は禁教。

二　無筆をむぶつともいい、非文化的な土地。仏教の伝播していない土地にかける。「世界」は「無仏の世界」と「世界は広し」（慣用句）とをかける。

三　法師姿。すなわち剃髪した者。知識人を示す。

四　和歌山製の傘の紙は高野紙を用いる。

五　天照大神。伊勢内宮の祭神。四十は外宮の末社の数で、この男の説はこざかしいこじつけ。

❖肥後の奥山の傘信仰の素材につぎの事実がある。同地方は相良藩領で、同領では一向宗門徒が禁教下に、傘仏という、傘の形をした木の内に、名号「南無阿弥陀仏」を書き、周囲に光背四十八条の線を描いた懸け仏を籠め、この本尊を隠れて信仰していた。暗に、これを本話の滑稽の話の素材にしている。また、ある所に祀られていた神が他所へ飛んで行き、新しくそこで祀られることは日本各地に伝説がある。この神を飛神という。

上になほし、里中山入りをして、宮木を引き、萱を刈り、ほどなう伊勢移して、あがめるにしたがひ、この傘に性根入り、五月雨の時分、社壇[六]しきりに鳴出て、止む事なし。

御託宣を聞くに、「この夏中、竈[七]の前をじだらくにして、油虫[八]をわかし、内陣[九]まで汚らはし、向後国中に、一疋も置くまじ。又ひとつの望みは、うつくしき娘を、おくら子[一〇]にそなふべし。さもなくば、七日が中に車軸[一一]をさして、人種のないやうに、降りころさん」との御事、おの／＼恐やと、談合して、指折の娘どもを集め、それかこれかとせんさくする。未だ白歯[一二]の女泪を流し、いやがるをきけば、「我々が、命とてもあるべきか」と、傘の神姿の、いな所[一三]に気をつけて、なげきしに、この里に色よき、後家[一四]のありしが、「神の御事なれば、若い人達の、身替りに立つべし」と、宮所に夜もすがら待つに、何の情[一五]もなしとて、腹立して、御殿にかけ入り、かの傘をにぎり、「おもへば身体[一六]倒し奴」と、引きやぶりて捨てつる。

が宿り、五月雨の頃になって、社壇がしきりに鳴動して止まない。

そこで神のご託宣をお聞きしてみるに、「この夏中、社の竈の前を不潔にして油虫をわかし、内陣までけがらわしくしてしまった。今後は国中に油虫を一匹も置いてはならない。もう一つの望みは、美しい娘をおくら子として奉仕させよ。そうでなければ七日の内に大雨を降らせて、人種の絶えるように降り殺す」という御事であった。村人は皆々、恐ろしいことだ、と相談して、指折りの美しい娘を集め、おくら子にするにはどの娘がよいか話し合った。これを聞いて未婚の娘たちは泣いていやがるので、そのわけを聞くと、「おくら子になりますと、私たちの生命はとてもございません」と、傘の形の妙なところに注意して嘆き悲しむ。これを聞いて、この村の色気の多い後家が、「神様の御事ですから、若い人たちの身代りに私が立ち、奉仕いたしましょう」と申し出て、社で一夜中待っていたところ何事もなかった。神様が全く情けをかけてくれない、とは何の事だと、後家は腹を立てて、社殿に駆け上がり、かの傘を握り、「思えば、この見かけ倒し奴」と、ひき破って捨ててしまった。

六　神が奇瑞・異事を示す前兆。
七　神社に造られたかまど。
八　ごきぶり。油臭を好み、傘に巣くうことも多い。
九　神殿の最奥で神体を安置する、社で最も清浄な場所。
一〇　伊勢大神宮に奉仕する処女の巫女をいう。さらに大神宮以外の巫女にも用いる。
一一　車の軸のような太い雨を降らす。
一二　女は結婚するとおはぐろで歯を黒く染めるので、まだ歯を染めぬ未婚の女をいう。
一三　異な所。傘をたたんだ形態が大きい陽物に似ている事をいう。
一四　後家は好色である、という「はなし」の約束をふまえた展開。
一五　以下、情を交えることの期待が裏切られた言葉と行為。
一六　姿だけのやつ。

一 中国、春秋時代の斉の人。字は子長。孔子の弟子で鳥の言葉を解した(史記・仲尼弟子伝)。二 未詳。安倍家の名のりは泰親のように泰の字が名の上部にある。安倍晴明もまた鳥の語を聞き知った。三 音声の調子。ものの言いぶり。言いぶりで人の身の上を占う事は『人倫訓蒙図彙』巻三「占師」の項に「五音調子の占」と見える。四 →二二ページ注三。五 宇治川にかけられた橋で、豊臣秀吉の時、豊後国守大友氏がかけたのでこの名がある。現在は観月橋という。京都から伏見を経て奈良へ行くにはこの橋を通る。交通の要衝。三条橋から二里(約八キロメートル)。六 ひとよぎり。尺八に似た竹製の管楽器。節が中間に一つだけあるので、こういう。節の下は七寸、上は三寸八分、計一尺八分(約三〇・三センチ)の寸法。遊興の楽器として用い、鳴らすとその音が嫋々として糸のごとく絶え間なく、近世は歌謡の伴奏楽器として三味線と合奏することもあった。七 伏見の町の西部にあり、米穀・材木・薪炭の問屋がある。京都の市中からは勧進橋を経て南下し、この町通りを左折して京橋に至る。八 米穀問屋か。九 月待ちの行事。一〇 日待ちは正、五、九月の吉日に宴集して、供物を供え、通夜して日の出を待って拝む行事。月待ちは三、十七、二十三、二十七夜の月を待って拝む行事。この夜、主人は斎戒沐浴し、親戚・友人を集めて遊び、僧侶・陰

不思議のあし音

唐土の公冶長は、諸鳥の声を聞き分け、本朝の安部の師泰は、人の五音を、聞く事を得たまへり。

この流れとや申すべし、ここに伏見の、豊後橋の片陰に、笹垣をむすび、心をゆく水のごとくにして、世を暮らしぬる盲人あり。捨てし身のむかし残りて、ただ人とは見えず。つねに一節切ふきて、万の調子を聞きたまふに、違ふ事まれなり。

ある時に、問屋町の北国屋の、二階ざしきにて、九月二十三夜の月を、待つ事ありて、宵よりこの所の、若い者の集まりて、お三寸機嫌の、こうた・浄瑠璃、日待・月待、何国も同じさわぎぞかし。旦那山伏の多門院、めでたき事どもを語れば、あるじうれしさのあまりに、「何によらず、御遊興を、御好み次第」。客がたより、「かの一節切を聞く事ならば」との望み、亭主ちかづきとて、頓て呼び寄せける。

不思議の足音

中国の公冶長は諸鳥の声を聞き分けることができ、日本の安倍の師泰は人の音声の調子によって、その人の身の上の吉凶を占うことがおできになった。

この末流とでもいうのであろうか、ここに伏見の豊後橋の片ほとりに小竹垣の草庵を結び、心を行く水の流れのように移り行くままに世を暮らしていた盲人があった。今は世を捨てた姿であるが、昔の、身分のあった時の名残があって、普通の人とは思えない。常に一節切を吹いて、その音色によってさまざまの運勢を判断されたが、誤る事はめったになかった。

ある時、伏見問屋町の北国屋の二階座敷で、九月二十三夜の月待ちの行事をして、宵のうちからこの所の若者たちが集まって、酒機嫌で小唄をうたい浄瑠璃を語る。日待ち・月待ちはどの土地でも同じような騒ぎである。旦那山伏の多門院がめでたい祭文を語ったので、主人はうれしさのあまり、「何でもお遊びをお望み通りにお振舞いいたしましょう」と言

陽師を招き、読経させる。遊びは民間では浄瑠璃・説経・狂言・歌念仏・三味線・一節切・尺八・浄土双六・カルタ・枕引・腕相撲・頸引・福引などを行う(日次紀事・一月)。月の出が遅い夜であるから、道路は暗い。一一 常にその家に出入りして、祈禱や仏事などをする山伏。俳人、多門院問加。一二 山伏が祭文を語る。その祭文に喜びに満ちた言葉が連ねてあったのである。一三 月待ちの主人役の人。一四 当時よく知られた歌謡「吉野のを山をゝ、雪かと見いれば、雪ではあゝらでんゝ、やこれの、花あの吹雪よのんゝ、やあこれの」(糸竹初心集上)の一節。一五 屋内の階段で、側面の各段の間が引出しや戸棚などになっているもの。一六 行灯や灯明の油皿に油をつぐ、磁器または金属製の手と口のついている瓶状の道具。一七 原本「おはぬ」。廊下の板が薄く、また、杉戸の立て方が、不安定であることを知ったのであろう。一八 出産の陣痛。当時は座産で、出産の時に産婦の腰を他の人が支える。一九 行をして財物を人から得る、乞食の一類。『人倫訓蒙図彙』巻六「腕香」の項に、「仏法を求むるには身命を惜しまぬ事古今の通法にして諸の祖師其の行跡あまたなり。然れども、今の行人はこれを触れ歩きて人に見せ、食を求むる手だてなれば名は行にして澆山かはれり、とかくつらきは命かな」とある。二〇 鳥の足の形に作った高

先づ一四吉野の山を、所望して吹く時、茶のかよひする小坊主、一五箱階子をあがる。聞きて、「油洒すよ」と申されける。大事にかけて、一六油差持ちしに、はづし置きたる杉戸こけ掛かり、一七おもはぬ怪我をいたしける。

おの〳〵、「これは」と、横手をうつて、「只今大道を行く者は、何人ぞ」と申せば、足音の調子を聞き合はし、「これは老女の手を引き、男は物おもひして行く、顔つき。足取のせはしさ、取揚げ婆なるべし」。「それか」と、人をつけて聞かすに、「かの男が申すは、『一八しきりがまゐつたら、腰は我らでも抱きますが、とても事に、息子を産めば、仕合せ』」と申す。大笑ひして、又その次に通る者を聞くに、「二人ぢやが、独りのあし音」と。見せにやれば、下女、小娘を負うて行く。その跡に通るものを、何と聞くに、「これは正しく、鳥類なるが、おのが身を大事がる」といふ。また見に行くに、一九行人、二〇鳥足の高足駄をはきて、道をしづかに歩み行く。「さても〳〵、あらそはれぬ事どもなり。とてもなぐさみに、今一度ききたまへ」と、いづれも二一虫籠をあけて、待つに、道筋

うと、客の方から、「かの一節切の御方に人の調子を聞くことができますならば」という望みを出した。亭主は懇意であるから、すぐに呼び寄せた。

まず、吉野の山を、という曲を客からの所望で吹く時、茶を運ぶ小僧が、油差しを持って箱梯子を二階へ上って来る。これを占って、「油をこぼすよ」と言われた。注意して油差しを持っていたところ、はずしておいた杉戸が急に倒れかかって、小僧は思いがけない怪我をしてしまった。

皆々、「これは」と、占いの的中に手を打って感心し、続いて、「今、大道を歩いて行く者はどういう人でしょうか」と尋ねると、足音の調子を聞き合わせて、「これは老女の手を引いて、男は物思いして行く顔つきであり、歩調のあわただしさから考えて、産婆であろう」と言う。「そうだろうか」と、人を遣わして様子を聞かせると、「かの男が、『陣痛が起こりましたなら、腰は私でも持ちます。できることなら、男子を産んでくれるとよいのですが』と言っていた」と言う。一座の人々は大笑いして、また、そのつぎに通る人が何者であるか、と尋ねると、「二人だが一人の足音」と言う。見にや

い足駄。→三八ページ挿絵。三 虫籠窓の略。民家の本格子で格子の縦の間が狭いものを、虫籠のようであるので虫籠格子といい、この格子窓を虫籠という。

一 夜の五つの時(午後八時頃)を告げる鐘。
二 伏見の京橋から大坂八軒屋までの淀川九里を上下する船の下り便。『人倫訓蒙図彙』巻三「伏見下り船」の項に、「此船は京角蔵是を領するなり、…今いせといふ船、一番は伏見を五つに出す、船賃一匁又は百文、時により高下あり」とある。夜行して明け方八軒屋に着く。ここは第一番の下り便に乗るために急ぐ客。
三 衣服を入れて下僕にかつがせる箱。→三八ページ挿絵(右下方)。慶長年間、豊臣秀吉の下僕布施久内が初めて作る(和漢三才図会三十二)。
四 大刀と小刀。天和二年(一六八二)の法令により武士は大小二腰を挟むが、農工商は脇指一腰のみと定められる(和漢三才図会二十一)。

も見えかね、初夜[一]の鐘の鳴る時、旅人の下り[二]舟に、乗りおくれじといそぐ風情、二階のともし火に、映りて見るに、一人は刀・脇指をさして、黒き羽織に、菅笠をかづき、今一人は、挟箱[三]に酒樽を付けて、あとにつづきて行く。あれを問へば、「二人づれなり。一人は女、一人は男」といふ。「宵からの中に、これがばかりが違ひぬ。我々見とめて、なる程大小[四]までさして、侍衆ぢや」と申す。「いな事なり。女にてあるべし。おの〳〵の目違ひはなき」と申せば、又、人を遣はし、様子を聞かせけるに、樽持ったる下人に少語くは、「夜舟にて、



ると、下女が小娘を背負って行くのであった。そのあとを通る者を何者かと尋ねると、「これは間違いなく鳥類であるけれども、自分の身体を大切にしている」と言う。また見に行くと、行人が鳥足の高下駄をはいて、道を静かに歩いて行く。「さてさて、全くよく当るものですね。いっそうの慰みに今一度聞き当ててください」と、皆々二階の虫籠窓を開けて待っていると、道筋も暗く見えにくいが、初夜の鐘が鳴る時、旅人が淀川の下り船に乗り遅れまいと急ぐありさまが、二階の灯火に映って見える。一人は刀・脇差をさして黒羽織に菅笠を着、今一人は挟箱に酒樽をつけてあとに続いて行く。あれは何者かと問うと、「二人連れである。一人は女、一人は男」と言う。「宵からの人でこればかりが違った。我々がこの目で見て、確かに大小までさしており、侍衆です」と人々は言う。「それは不審なことだ。女であるに違いない。皆々に見誤りはないか」と言い聞かせると、樽を持った下人に主人がささやくには、「夜船では、その樽に注意しなさい。酒ではなくてすべて銀ですから。夜道の用心に、このように男の姿をして大坂へ買物に行く

五 下京にある東西の道で、商業街。
六 おかたは「御方」で人妻の敬称。女主人の米屋。
❖この盲人はもと武将で、理をもって物音を判断している。盲人が音によって異事を予言することは『窓のすさみ』追加下、『翁草』巻三十九などに見える。

七 江戸時代初期。元和(一六一五〜一六二四)。五年十二月、関東大雪。
八 笹。玉は美称の接頭語。箱根には笹が多い。 九 木の実や草などの草木のみを食べて生活し、仏道修行する人。米・麦なども食べない。

一 「十六さすがり」とも、また、略して「むさし」ともいう。遊戯の一種。遊戯方法は、盤上の周囲に置かれた十六の子駒が一つの親駒を中央に囲



北国屋の二階は右から二人目が盲人。道行く者は左から、産婦の夫と取揚げ婆、小娘を負う下女、行人、米屋の男装の女主人とその従者。

その樽心掛けよ。酒にはあらず皆銀(かね)なり。夜道(よみち)の用心に、かく男の風俗して、大坂(おほさか)へ買物に行く」と申す。よくよく聞けば、五条(ごでう)[五]のおかた[六]米屋とかや。

雲中(うんちゅう)の腕(うで)押し

[七]元和(げんわ)年中(ねんちゅう)に、大雪ふつて、箱根山(はこねやま)の[八]玉笹(たまざさ)をうづみて、往来(ゆきき)の絶えて、十日ばかりも馬も通ひなし。

ここに鳥さへ通はぬ峰に、庵(いほり)をむすび、短斎坊(たんさいばう)といふ、[九]木(もく)

のです」と言っていた。詳しく聞いてみると、京都の五条通の米屋の女主人だということであった。

雲中の腕押し

元和年間に大雪が降って、箱根山の笹(ささ)まで埋めつくして、街道の往来が絶えて、十日ほども馬の通行さえなかった。

この箱根の、鳥さえも通わぬ高い峰に、庵(いおり)を結んでいる短斎坊(たんさいぼう)という木食(もくじき)の僧が

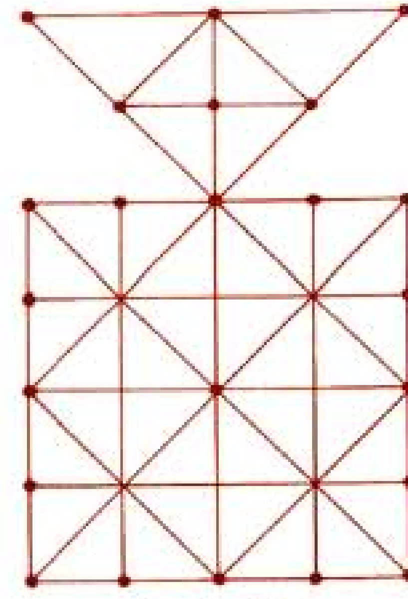
食ありしが、仏棚も、世を夢のごとく暮らして、百余歳になりぬ。常に十六むさし[一]を、慰みに指されけるに、ある時奥山に、年かさねたる法師のきたつて、むさしの相手になつてあそびける。そのありさまを見るに、木の葉をつらぬき肩に掛け、腰には藤づるをまとひ、黒き顔より、眼ひかり、人間とはおもはれず。松の葉をむしり、食物として、物いふ事まれにして、これ程よき友はなし。

ある夕暮に、焼火にことをかきしに、かの老人、こしより革巾着[二]を取出し、「これは鞍馬[三]の名石にて、火の出る事はやしと、判官殿[四]に、もらうた」と、まさ〲しう語る。短斎おどろき、「そなたはいかなる人ぞ。その時はひさしき事」といへば、「我こそ常陸坊海尊[五]。むかしにかはる有様」といふ。これを思ひあはすに、この人の最後のしれぬ事を申し伝へしが、さては不思議と、「過ぎにし弁慶[六]は、色黒く、せいたかく、絵にさへおそろしく、見ゆる」と尋ねければ、「それは大きに違うた。またなき美僧」とかたる。「義経[七]こそ、丸顔にして、鼻ひくう、向歯ぬけて、やぶにらみにて、ちぢみが

いたが、仏を祀る棚も作らず、この世を夢のように暮らしているうちに百余歳になった。いつも十六むさしを慰みにさされていたが、ある時、この山奥に年とった法師がやって来て、十六むさしの相手になって遊んだ。そのありさまを見ると、木の葉をつづって衣として肩にかけ、腰には藤蔓を帯にしてまとい、黒い顔から眼が光り、どう見ても人間とは思われぬありさまをしていた。松の葉をむしって食物として、ものを言うこともきわめて少ないので、わずらわしさがなく、友達としてはこれほどよい友達はいない。

ある夕暮れに、焚火の火が消えた時、かの老人が腰から革巾着を取り出して、「これは鞍馬山の名産の火打石で、発火することが速いからと、判官義経殿からいただいた」といかにもまことのように語った。短斎坊が驚いて、「あなたはいったいどういう方ですか。判官殿がおられたその時は、はるか昔のことですが」と言うと、「私が常陸坊海尊だ。昔に変る姿をしているが」と言う。この言葉を考え合わせてみると、なるほどこの海尊は最期が不明であると言い伝えられているが、このように長生きをしているとは、思いも及ばなかったことだと、いろいろ

んで、これを攻める。親駒は八方に動き、二つの子駒の間をうかがって直行すると、左右の子駒が死ぬ。このようにして、親駒の行動に障害がなくなると親の勝ち、子駒が親駒を攻めて逃げることができなくなると子の勝ちとなる。



十六むさし

二 革で作られた巾着。巾着は小銭を入れる小袋で紐を帯に挟む。ただし、銭のほかに小物も入れる。 三 京都の北にある鞍馬山。義経は七歳から十六歳まで在山(義経記)。鞍馬山産の火打石は名産で発火が速く、京都市中でも売られた。 四 検非違使尉を判官という。義経は検非違使尉に任官していたので、彼の別称となる。 五 義経の近臣。もと園城寺の僧。義経最後の衣川合戦の朝、外出して行方不明となる。長生きして仙人となった(和漢三才図会六十五)。東国諸地方に仙人としての伝説がある。 六 『義経記』巻三では熊野の別当弁せうの嫡子とする。義経の近臣で、剛勇の者として知られ多くの伝説がある。 七 平治元〜文治五年(一一五九〜八九)。源義朝の子。平家討滅に大功があったが、のち、兄頼朝に圧迫され、衣川

しらに、横ふとつて、男ぶりは、ひとつもとりえなし。只志が大将で、その外は、[八]片岡が万にしわい事。[九]忠信は大酒くらひ。[一〇]伊勢の三郎は、買掛りを済まさぬやつ、[一一]尼崎・[一二]渡辺・[一三]福島の舟賃、[一四]侍顔して一度もやらず。[一五]熊井太郎は、一年中、[一六]びくにずき。[一七]源八兵衛は、[一八]ぬけ風の俳諧して、埒の明かぬもの。[一九]駿河二郎は、めいよな事の、夏冬なしに、ふんどし嫌ひ。[二〇]亀井は、何をさしても、[二一]小刀細工がきいた。[二二]鈴木・[二三]継信は、棒組にて、一生[二四]飛子買うて暮らす。[二五]兼房は[二六]浄土宗にて、後世願ひ。この外ひとりも、ろくな者は、なかつた」とかたる。「さてまた、[二七]静は今に申す程の、美人か」ととへば、「いや〳〵、十人並にすこしすぐれた、女房を、その時は、判官世盛りにて、[二八]借銭はなし、[二九]唐織・鹿の子の、法度もなく、明暮京の水で、みがきぬれば、うつくしい。今でも[三〇]大名衆の、妾ども、[三一]御関所の改めに見るに、その時よりは、風俗がよい」と申して、「まだ咄したい事もあれども、皆うそのやうにおもやろ。誰ぞ証拠人、ほしや」といふ折ふし、柴の網戸をおとづれ、「正しくこれに、海尊のお声がしまする。少と

と尋ねてみた。「昔の弁慶は色が黒く、身長が高く、絵で見ただけでも恐ろしく見えますが、そうでしたか」と尋ねると、「それは大変な違いだ。この世の中に二人といないほどの美しい僧であった」と語る。「義経こそ、丸顔で鼻が低く、門歯が抜けて、やぶにらみで、髪は縮れ毛で、横ぶとりで、男ぶりには一つもとりえがない。ただ志がすぐれていて、大将の器であった。そのほかの人たちは、片岡八郎はすべてにけちで、佐藤忠信は大酒飲み、伊勢の三郎は買物しても代金を支払わぬ奴。尼崎・渡辺・福島の船賃は侍顔して一度もやったことがない。熊井太郎は、一年じゅう、比丘尼女が好き。源八兵衛は抜け風の俳諧をして埒が明かぬ者。駿河二郎は不思議なことに、夏冬ともにふんどしを嫌ってつけない。亀井六郎は、何をさせても小器用であった。鈴木三郎と佐藤継信とは、相棒で、一生旅回りの陰間を買って暮らした。増尾兼房は浄土宗で来世ばかり願う。その他、一人もろくな者はなかった」と語る。「ところで、静御前は今に伝えられるほどの美人でしたか」と問うと、「いやいや、十人並みより少し美しい程度の女を、その時は判官は威勢の盛んな時で、借金

の館で藤原泰衡らに攻められて自殺。容貌が醜かったことは、『源平盛衰記』巻四十三に「面長うして、身短く、色白うして、歯出でたり」とあり、西鶴の頃は通説。「其の時義経帽子と鉢巻／痛みぬる向ふ歯反つて猿眼」(西鶴大矢数十八)。[八]八郎為春(経春とも)。常陸国鹿島の出身。以下は、義経の近臣。その行状は『源平盛衰記』『義経記』に詳しい。[九]佐藤四郎兵衛。陸奥国信夫荘司元治の子。[一〇]名は義盛。伊勢国鈴鹿の関で強盗をしていた。のち、上野国にあり、義経の陸奥下向の時に家来となる。[一一]義経が平家追討の時出船した大物浦はこの海岸。[一二]淀川の下流で八軒屋の付近。源氏が平家追討の時、船揃えをした場所。[一三]大坂の堂島の西方に続く地。以上三か所には江戸時代に渡船場があった。[一四]当時、武士の無賃乗船者がいたことを暗に示す。[一五]名は忠元。壇の浦合戦では平行盛を攻撃。[一六]尼の姿をして売色する女。[一七]源八広綱。一の谷の合戦の人数のうちに見える。[一八]俳諧の連句で、句の表面に明瞭にあらわさず余意で意味がわかるような句作りの手法を「ぬけ」といい、このような作風をぬけ風という。貞門俳諧では嫌ったが、談林俳諧では軽妙な滑稽を示す手法としてかえって喜ばれ、多く用いられた。[一九]名は清重。雑色で、義経に夜討ちをかけた土佐坊昌俊を六条河原で斬る。[二〇]名は重清。鈴木

三郎(→注二三)の弟で、熊野出身。二二 こまごまとしたことをするをいう。二三 三郎重家。紀伊国熊野三党の一、鈴木党の出身。二三 佐藤三郎兵衛。忠信の兄。二四 旅回りをして売色する少年。二五 増尾十郎。衣川で義経とともに死ぬ。二六 法然の始めた宗旨で、来世に浄土に生まれることを願う。二七 磯禅師の娘で白拍子。義経の側室。二八 西鶴頃の大名が借金の多かったことを暗にいう。二九 天和三年(一六八三)に惣鹿子のような女の衣類を製造禁止するなど、当時、高価な衣装の着用・製造を、制限していたことをいう。三〇 大名の側室には京都の女性が多い。三一 女乗物は戸を開いて、女が見て調べるのが定め。

一 名は則綱。猪俣は武蔵七党の一。平家討伐の際、源範頼の大手の軍に加わる。一の谷の合戦では、大力の侍大将平盛俊をだまして討ち、高名第一と記された。大力で知られる。「(関東)八か国に聞こえたるしたたか者也、鹿の角の一二のくさかりをばたやすう引裂きけるとぞ聞えし」(平家物語九)。
二 岡山県の西部。
三「往にし軍物語」か「いにしへの軍物語」の意。
四 新潟県柏崎市米山町にある北陸海道の難所。義経が奥州に落ちる時、北の方がここで出産。
五 小さい箱枕を二人が指先でつかん

御目に掛かりたし」と内に入る。

「やれなつかしやなつかしや、命ながらへて、又あふ事のうれし。先づ御亭坊へ、引きあはしましよ。これは猪俣の小平六とて、むかしのよしみなるが、今は備中の深山に、すまれますが、このたびはきどくの、たづねなり。自今以後は、顔見しられて、互に」と申して、夜もすがら、いにしの軍物語、きのふけふのごとく、「今に平六、力の程は」といへば、「さのみ替はらじ」と、片肌ぬぐ。常陸坊もうでまくりして、亀割坂にて、枕引きせし事、おもひ出して、「さらばうでお



右が常陸坊海尊、左が猪俣小平六、腕押し図。団扇を持つ行司は短斎坊。勝負するうちに、箱根山中から天に昇ってゆくさま。

はなし、唐織・鹿の子染の禁止令もなく、朝夕、京の水でみがいたので美しかったのだ。今でも大名衆の側室たちをお関所改めで見るに、その時分よりは今のほうが側室の姿かたちはよろしい」と言って、「まだ話したい事もあるのだが、皆うそを言っているように思うだろう。誰か証人になる人が欲しいなあ」と言う時、柴の編戸に人が訪れて来た物音がする。「確かにここに海尊のお声がします。ちょっとお目にかかりたい」と内にはいる。「やあ、なつかしいなつかしい。長生きしたお陰でまた会う事ができてうれしい。まずご亭主に引き合わせよう。これは猪俣の小平六といって、昔からの知合いだが、今は備中の深山にお住みで、このたびは珍しい訪問です。今後は顔をお見知りくださって、お互いにご懇意に」と言って、一夜じゅう、昔の軍物語を、昨日今日の出来事のように語る。常陸坊が、「今でも平六、力の程度はどのくらいだ」と言うと、「昔とほとんど変らぬ」と片肌ぬぐ。常陸坊も腕まくりして、亀割坂で枕引きをした事を思い出して、「それならば、腕押しをしよう」と、両人負けず劣らず、六時間余りももみ合うと、短斎坊も中に立って、両方を力づけ、その

し」と、両人まけず、おとらず、三時あまりも、もみあへば、短斎も中に立ち、両方へ力を付けて、かけ声雲中に、ひびきわたつて、三人ながら姿をうしなひて、この勝負しつた人もなし。

狐四天王[六]

諸国の女の髪を切り、家々のはうろく[七]を破らせ、万民をわづらはせたる、大和[八]の源九郎ぎつねがためには姉なり。としひさしく、播磨の姫路[九]にすみなれて、その身は人間のごとく、[一〇]八百八疋のけんぞく[一一]をつかひ、世間の眉毛[一二]おもふままに読みて、人をなぶる事自由なり。

ここに本町筋[一三]に、米屋[一四]して、門兵衛といふ人、里ばなれの、山陰を通るに、しろき小狐の集まりしに、何心もなく、礫うち掛けしに、自然とあたり所あしく、そのままむなしくなりぬ。ふびんとばかりおもうてかへる。

その夜門兵衛が、屋敷の棟に、何百人か女の声して、「お

かけ声は雲の中に響きわたって、三人ともに姿を消してしまって、この勝負の結果はどうなったやら、知った者はいない。

狐四天王

諸国の女の髪を切り、家々の焙烙を割らせ、悪戯をして、多くの人々を困らせた、大和の源九郎狐の姉である狐が、長年、播磨の姫路に住みつづけている。名を於佐賀部狐といって、その身体は人間のようで、八百八匹の手下を使い、世の中の人を自由自在にばかして、人をなぶることも思うままであった。

ここに、姫路の本町筋に米屋をしている門兵衛という人が、人里離れた山陰を通っていると、白い小狐が集まっていたので、何気なく礫を打ちかけたところ、たまたま一匹の小狐に当り、その当り所がわるく、そのまま死んでしまった。かわいそうなことをした、と思っただけで家に帰った。

で引き合う室内遊戯。枕を引き取ったほうが勝ち。

六 於佐賀部狐の四匹のすぐれた従者。四天王は従者や弟子などのうちで最もすぐれた四人を称する。

七 「ほうらく」とも。食物をいるに用いる素焼きの土鍋。穀類・茶・薬などを入れ、火の上にかけて静かにかき回しながらいる。静御前が吉野で法楽の舞を舞ったので、「静かに舞わせ」というなぞで、「ほうらく」というとの俗説がある。播磨製は佳品(和漢三才図会三十一)。

八 「凡ソ狐ハ多寿、数百歳ヲ経ル者多クシテ皆人間ノ俗名ヲ称ス、大和ノ源九郎狐、近江ノ小左衛門ノ如シ、…人ヲ惑シ仇ヲ報ヒ、亦、能ク恩ヲ謝ス」(和漢三才図会三十八)。

九 兵庫県南部の中心都市。城下町。

一〇 江戸八百八町のように多数を意味する数。

一一 従者。家来。

一二 睫毛を読むとも。読むは数える意。だます。ばかす。

一三 姫路城大手門の南にある町筋。

一四 姫路は播州米の集散地。播州米は大坂で上等米。

姫さま、たま〳〵野あそびましますを、命をとりし者、そのままは置かじ」と、石をうつ事雨のごとし。白壁・窓蓋まで、うちやぶれども、その礫ひとつもなし。家内おどろく。

明の日の昼前に、旅の出家のきたつて、「お茶一ぷくたまはれ」と申されけるに、下女に申し付けて、まゐらせけるに、間もなく同心らしき、大男二三十人乱れ入りて、「御たづねの出家を、何とてかくし置きけるぞ」と、その断り聞き入れず、亭主・内儀を押へて、坊主になして後、かの出家もともに、尾のある姿をあらはして、にげかへる。是非もなき仕合



一 天窓の蓋。

二 町奉行配下の下級の士。

三 お尋ね者。師家や主人殺しのような重罪の触書によって指名手配の犯人。

❖以下、門兵衛の近親者が髪を剃られるのは、於佐賀部狐が子狐を殺された恨みに、手下を使って仇を報いたもの。しかし、於佐賀部狐は人を殺害しないといわれ、本話でも、相手を一人も殺してはいない。

その夜、門兵衛の屋敷の棟に、何百人もの女の声がして、「お姫さまがたまたま野原で遊んでいらっしゃったのを、命を取った者だ、このままにしてはおかぬ」と、石を投げつけること雨が降るように激しく、白壁・天窓の蓋まで打ち破られたが、しかし、その礫は一つもなく、家の者たちはこれに驚くばかりであった。

翌日の昼前に、旅の僧がやって来て、「お茶を一服いただきたい」と言われたので、下女に言いつけて、差し上げると、間もなく同心のような大男が二、三十人、家の内に乱入して、「お尋ね者の出家をどうして隠しておいたのだ」と弁解も聞き入れず、亭主と内儀とを押さえつけて頭を剃って坊主にして、その後、その僧と一緒に、尻尾のある狐の姿をあらわして逃げていった。どうしようにもしかたがない災難である。

また、門兵衛の息子の妻が、息子の門右衛門は北国に行って留守の間であるからと、実家に帰っていたのだが、狐が、かの門右衛門にばけて、四、五人連れで走り入って、女房をつかまえ、「私が他国に行ったあとで密通していた男のいたことが知れた。命だけは許してやる」と、



狐たちの仕返しの図。門兵衛の作り葬礼の行列。左先頭が導師、輿に棺が置かれる。輿の右側に位牌もつ孫。輿の左右の袴・肩衣姿は町衆のさま。

四 息子の妻。
五 相手をののしる場合に用いる感動詞。
六 二階建の堂に住む狐を示す。
七 年の功を経た狐を示す。
八 かぶるとその姿が見えなくなる笠。姿を隠すのが巧みな狐を示す。

一 鶏を襲って殺すのを好む狐を示す。
二 田畑を荒らすのを好む狐を示す。
三 姫路城の天守閣の上層に住む有名な狐。「天守櫓の上層に居て常に人の入ることを嫌ふ、年に一度其の城主のみ是に対面す、其の余は人怯れて登らず、城主対面する時、妖其の形を現はすに老婆なりと伝ふ」(甲子夜話三十)。四 四人の武勇にすぐれた家来と一人だけ特にすぐれて強い武者。ここは源頼光の家来、渡辺綱・坂田公時・碓氷定光・卜部

せなり。

又、門兵衛が嫁[四]、むすこの門右衛門、北国に行きて留守のうちとて、里にかへりてありしに、かの門右衛門になりて、四五人づれにてはしり込み、女房をとらへ、「我他国の跡にて、かくし男あらはれたり。命はゆるして」と申しもあへず、あたまをそられ、「身に覚えのなき事ぞ」と、年月の恨みをいうてなげきぬ。「[五]おのれ証拠を見せん」と、女を引き立て、はるかの山中に行きて、五人立ちならび、ひとり〳〵名乗りける。「これは[六]二階堂の煤助」「[七]鳥居越しの中三郎」「[八]かくれ

言いも終らぬうちに頭を剃られ、「そのようなことは身に覚えがありません」と、長年一緒に夫婦でいたのに、このような疑いをかけられたことの恨みを言って嘆いた。「おのれ、その証拠を見せてやろう」と、女を引っ張って遠くの山の中に連れ行き、五人立ち並んで一人一人名を名のった。「これは二階堂の煤助」「鳥居越しの中三郎」「鶏食いの闇太郎」「野荒しの鼻長」と言って、「於佐賀部殿の四天王、独武者とは我々のことだ」と、姿を変えて狐となって失せてしまった。このことを門兵衛の家に行って語り、大いに嘆いたが、今更どうにもならなかった。

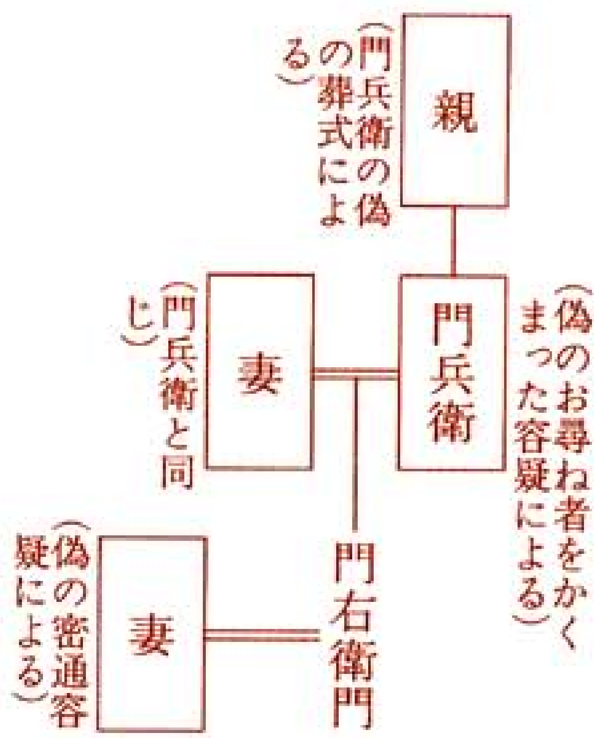
また、そのつぎの日の昼の十二時ごろ、大きな葬式があって、引導の長老が先に立ち、幡・天蓋をさしかけ、美しい輿が光り輝き、孫に位牌を持たせ、一門は葬礼の白衣を着て涙を流し、町衆は上下の礼装で、焼き場に送る様子であった。門兵衛の親は五、六里離れた所に住んでいたが、ここへあわただしく人を遣わして、「門兵衛殿が、前夜急死されました。お嘆きになると思って、なるべく遅くお知らせしました。すぐに焼き場へおいでください」と言う。この門兵衛の遺骸を悲

笠の金丸」「一にはとり食ひの闇太郎」「二野あらしの鼻長」とて、「三於佐賀部殿の、四四天王、ひとり武者これなり」と、形をかへてぞうせける。この事門兵衛に行きて、ふかくなげくに甲斐なし。

またその次の日、午の刻に、大きなる葬礼をこしらへて、五導きの長老、六はた・七てんがいをさし掛け、たまの輿ひかりをなし、孫に位牌を持たせ、一門白衣の袖をしぼり、八町衆は九袴・肩衣にて、一〇野墓のおくるけしき、門兵衛親里、五六里はなれしが、けはしく人遣はし、「一一夜前頓死いたされ候、御なげきあるべしと、すこしもおそく御しらせ申すなり。すぐに墓へ御こしあれ」と、このありさま哀れに煙となし、親類ばかり跡に残り、「さてもさても夢の世や、若いを先に立てて、おもしろき事もあるまじ。これにて一二法体ましませ」と、俄坊主になし、姫路にかへれば、門兵衛・内儀も姿をかへてありし。様子聞きて悔やめども、髪は生えずしてをかし。

しくも煙にして、親類だけがあとに残り、「さてさて、夢のようにはかない世の中であるよ。年若い人を先立たせて、これから先はおもしろいこともございますまい。ここで髪をお剃りなさいませ」と、急に坊主にして、姫路に帰ると、門兵衛も内儀も姿を変えて坊主頭になっていた。事情を聞いて後悔したが、髪はすぐには生えるものではなく、何ともおかしな姿であった。

季武と独武者とをふまえている。
五 死者に引導を渡す僧。一般に、長老は檀家が檀那寺の住職を敬っていう称。主として禅宗の僧に用いる。
六 仏菩薩の威徳を示す具で、法事を荘厳にする仏具。→四五ページ挿絵(左方)。
七 「きぬがさ」とも。葬送の時には棺の上をおおう。→四四ページ挿絵(右方)。
八 同じ町内の人々。
九 普通にいう上下。一般の武士・庶民の礼服。畠山重忠が富士野の狩の時、礼服の素袍の袖を取り、長袴の裾を短くして、活動しやすいようにしたのが始まりという(和漢三才図会二十八)。
一〇 火葬場。近世は、墓地に付属して火葬場があった。
一一 江戸時代の火葬は、死後一昼夜以上を経ることが定め。
一二 剃髪して僧の姿になること。世間をのがれることを示す。
❖狐たちに報復された門兵衛の縁者(□印)を系図に示すとつぎのようになる。



入絵

西鶴諸国はなし

二

巻二　あらまし

一　姿の飛び乗物　摂津、池田に女乗物が捨て置かれていた。中にいた美女に男がいたずらをしようとすると、左右から蛇の頭が出てきて男どもに食いつき、彼らの身を痛めた。のち、この乗物は街道の所々に飛び行き、人を悩ました。「因果」者の美女のはなし。

二　十二人の俄坊主　紀州の国守、徳川頼宣が加太の浦で水上のさまざまな「遊興」をした。居合抜きの腕前を見せた関口某をほめ、やがて出現した海上の大蛇を頼宣が長刀で打ち払う。

三　水筋の抜け道　若狭、小浜の網糸屋の女中ひさが海に身投げした。この死骸が遠く離れた大和秋篠の地下水脈から地上に出現した。ひさの男、庄吉が供養すると、夢にひさが現れて、彼女を責めつけ身投げに追い込んだ主人の女房に「報い」をする。その同日に、若狭でその女房も死んだという。

四　残る物とて金の鍋　摂津、平野の木綿買い商人が、大和からの帰路、生馬「仙人」を助けて酒肴の馳走にあずかり、また、仙人の妾の隠れた楽しみを見、よい慰みをする。

五　夢路の風車　飛騨の奉行が奥山で「隠れ里」に迷い込み、夢の中で、殺された二人の女商人から敵討ちを頼まれる。国王に申し上げると、その犯人を処刑し、奉行は褒美に唐織・島絹を与えられ、風車で帰国した。

六　男地蔵　京都、北野の片側町に住む、独身の合羽のこはぜ職人は、少女を愛することを喜び、「新賽の川原」と名付けた自家に近辺の少女を集める。のちには洛中の町々の少女たちをも愛し、二、三日家に置いては帰した。この「現世の遊楽」が町奉行に知られたけれども、男は処罰されなかった。

七　神鳴の病中　信濃、浅間山麓の古い家柄の松田藤五郎の遺産争いで、兄弟半分ずつ、というのを、兄藤六が「欲心」から無理を言って、家宝の刀だけを相続して家を出た。この刀を名刀と思い京都の鑑定家に見せたところ、鈍刀であると知られた。帰郷してそのわけを母親に聞くと、母親は、その刀は正保年中の水争いの時、親父が隣村の男を切りつけたが、全く切れなかったため、かえって親父も罪にならなくて済んだので、「命の親」だと言って家宝にしたのである、と語った。この時の水飢饉は水神鳴の病中によってであった。

近年諸国咄

大下馬　巻二

目録

一 美女をいう。

二 駕籠のように二人でかつぐ、人の乗る乗物をいう。屋根があり、その周囲がおおわれて外から内部が見えない。横に引き戸がついていて、上方の屋根の部分を上げることができ、ここから人が出入りする。庶民が乗ることは原則として許されない。→五二ページ挿絵。

三 大阪府池田市。

四 和歌山県和歌山市加太。和歌山市内北西部の海岸で、近世は加太村につづく漁村。少彦名命を祀る淡島明神があり、諸国より参詣人が多くあった。

五 福井県小浜市。小浜湾の東南岸にあり、酒井氏の城下町。海陸交通の要地で、江戸時代前期には北国の産物は多くこの港に陸上げされて京都方面に輸送された。敦賀とともに北国航路の重要港の一。

（四）残る物[一]とて金の鍋(なべ)　仙人(せんにん)

大和(やまと)の国生駒(いこま)[二]にありし事

（五）夢路(ゆめぢ)の風車(かざぐるま)[三]　隠里(かくれざと)[四]

飛騨(ひだ)[五]の国の奥山にありし事

（六）楽(たの)しみの男地蔵(をとこぢざう)[六]　現遊(げんいう)[七]

都北野(みやこきたの)[八]の片町(かたまち)[九]にありし事

（七）神鳴(かみなり)の病中(びやうちゆう)　欲心(よくしん)

信濃(しなの)[一〇]の国浅間(あさま)[一一]にありし事

一 西鶴の慣用句。「残る物とて家蔵ばかり、軒の松風淋しく」（永代蔵四の二）。 二 奈良県と大阪府との境の中央部にある山。 三 風で走る車。 四 山奥に隠れて存在する理想郷のような村落をいう。日本各地にその存在が伝えられているが、飛騨国の近辺では、美濃国（怪談老の杖三）・信濃国（世事百談三）などにもあった。大坂の近辺では摂津国の池田の北部に存在した伝説がある。中国の桃源郷のような存在。 五 岐阜県の北部。同国は山国で周囲が山に囲まれて、外部との交渉は少なかった。 六 地蔵菩薩の略。→六六ページ注八。 七 現世の遊楽。この世での楽しみ。 八 京都の北西部、洛中の端にある北野天満宮、および、その付近。 九 道の片側のみが町家になっている町。ここは、道の他方が北野天満宮の境内。京都の市街地の周辺部で、庶民の町。西陣織などの織物とそれに付属する仕事で生活している者が多い。 一〇 長野県。 一一 長野県の北東の県境にある浅間山の地方。

一二 一六二五年。本書刊行から六十年以前。 一三 池田の町にあって、応神天皇の御代に南中国の呉地方から来朝した、女織工、呉織(くれは)を祀る。 一四 呉服神社の東北の山上にあり、呉織・漢織(あやは)の二女が絹をつなぎ裁縫を教えた。その時に用いた松の葉を残して植えたと伝えられる（摂陽群談）。 一五 乗物の横についている

姿の飛び乗物

[一二]寛永二年、冬の初めに、津の国池田の里の東、[一三]呉服の宮山、[一四]衣掛松の下に新しき女乗物、誰かは捨て置きける。柴刈る童子の見つけて町の人に語れば、大勢集まりて[一五]戸ざしを明けて見るに、都めきたる女郎の、[一六]二十二三なるが、美人といふはこれなるべし。黒髪を乱して、[一七]末を金の平元結を懸け、肌着は白く、上には、[一八]菊梧の地無しの[一九]小袖を重ね、帯は[二〇]小鶴の唐織に、[二一]練の薄物を被き、前に[二二]時代蒔絵の[二三]硯箱の蓋に、秋の野を写せしが、この中に[二四]御所落雁、[二五]煎榧、さま〴〵の菓子積みて、[二六]剃刀かたし見えける。「[二七]御方は何国いかなる事にてかくお独りはましますぞ。子細を御物語あるべし。古里へおくり帰して参らすべし」と、いろ〳〵尋ねけれども、言葉の返しもなし。只さしうつむきてまします。目つきもおそろしくて、我先にと家にかへりぬ。

「今宵そのまま置きなば、狼が憂き目を見すべし。里におろ

姿の飛び乗物

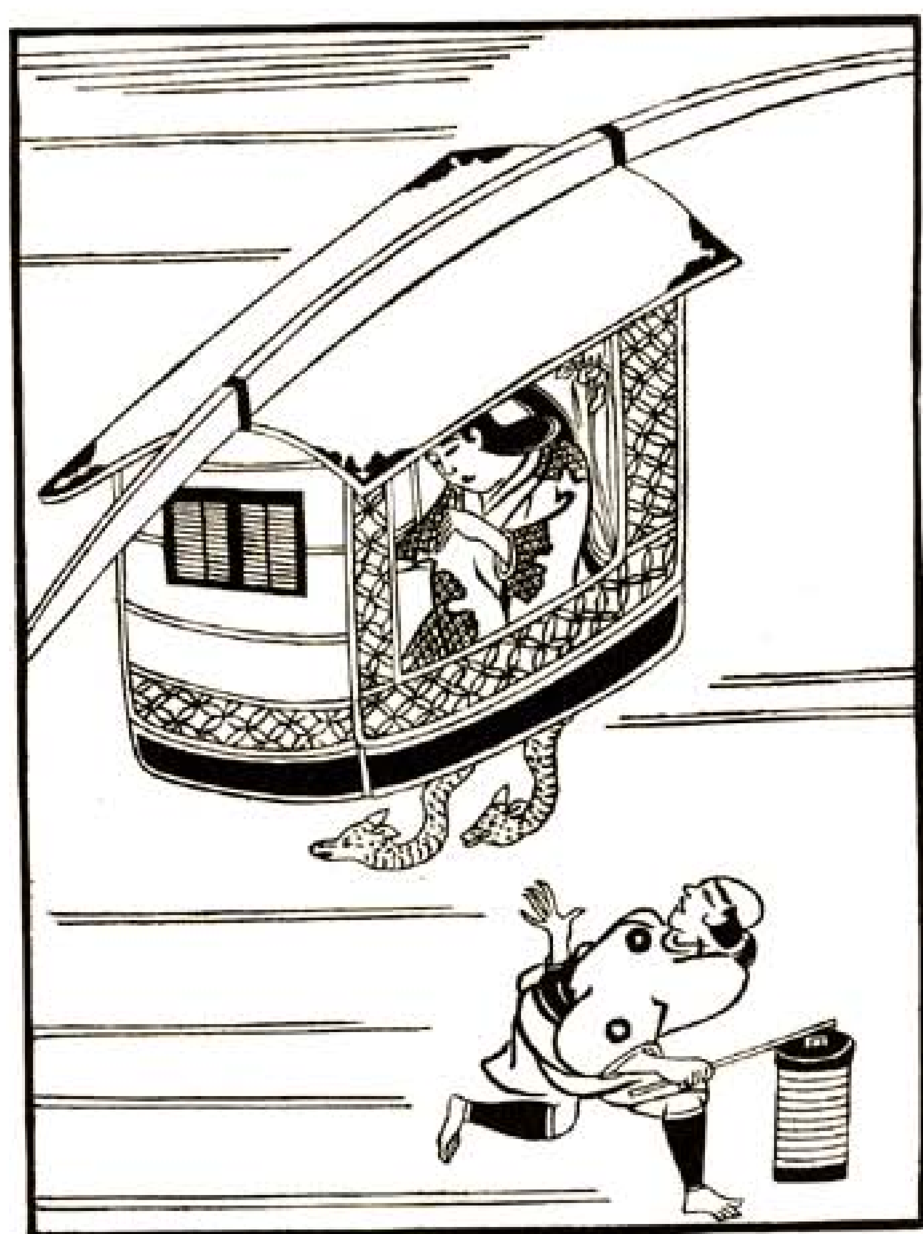
寛永二年の冬の初めに、摂津国池田の町の東、呉服の宮の山の、衣掛け松の下に、新しい女乗物が置いてあった。誰が捨て置いたのであろうか。柴を刈る童子がこれを見つけて、町の人に話すと、大勢の者たちが集まって来て、戸を開けて見たところ、都の女らしい二十二、三歳の女がすわっていた。この世に美人というのは、このような女をいうのであろう。その姿はというと、乱れた黒髪の先の方を金の平元結で結び、肌着は白く、その上に一面に菊桐の模様のある小袖を着、帯は小蔓模様の唐織で、練絹の薄物を頭にかけていた。女の前には秋の野の草花の絵を描いた時代蒔絵の盆に、御所落雁、煎った榧の実などさまざまな菓子が盛られて、剃刀が一挺見えた。「あなた様はどこのお方で、どうしてこのようにお一人でいらっしゃるのですか。そのわけをお話しください。お国元へ送り返してさしあげましょう」といろいろ尋ねたが、一言の返事もない。ただ、さしうつむいていらっしゃる。その目つきもどことなく恐ろしいので、人々は気味悪がって、我先にと家に帰ってしまった。

戸。[一六]一般に女性をいう。[一七]髪の端を金箔を置いた平元結で結んだ。髪を束ねるに用いる元結は杉原紙・奉書紙・長永紙をよりあわせたもの。平元結は薄様・引合・杉原紙などを細くたたんで作った元結で、末を結ぶのは髪がすべらかしで公家方の風俗。[一八]菊と桐の模様を一面に描いたもの。模様は当世風でなく、この女性が公家方の様をしていることを示す。[一九]絹布の綿入れの着物。貴人の日常着。[二〇]小鶴は小蔓で小さいつる草の織模様をいい、唐織は中国製の織物。日本にはきわめてわずかしか輸入されていない。女性が高貴の身分の様をしている。[二一]練り絹で織った薄い被衣。被衣は女性が外出の時に頭にかぶるもの。[二二]東山殿足利義政時代(一四四九～九〇)にできた蒔絵を時代物という。蒔絵は金銀の粉を漆器にまいて花草鳥獣などを描くをいう。[二三]硯蓋。口取りの肴や菓子などを盛り、あるいは花や色紙などをのせるのに用いる広蓋の漆器をいう。[二四]加賀金沢の伊波家製の長生殿という落雁を御所落雁と称するが、ここは禁裏に納める落雁のことか。落雁は南蛮渡来の高級菓子の一種で、糯米を粉にしていり、砂糖汁を加えて型に入れたもの。もろく軽くて消散しやすく、鳥の餌にもなるので、落雁というか(和漢三才図会百五)。[二五]榧の実をいったもの。菓子の一種。指の爪で押して殻を割って中の実を食べる。

二六 片方。一挺。 二七 もとは、高貴の女性の敬称であったが、のちは、一般に人妻を称する。公家方では未婚の女性をいう。

一 幕府の直轄領の、産業を勧め、租税の徴収、争訟の解決をする役人。池田村は代官の支配地と九条家領とがあった。近世初期には代官所は在地に置かれていた。
二 大阪府箕面市瀬川。西国海道の宿場。
三 男女の仲のこと。好色話をいう。
四 情けをかけてくれ、ということ。情交を要求する言葉。
五 毒蛇であるから、まむしか山かがしであろう。

して、一夜は番をして、朝は[一]御代官へ御断りを申すべき」と、また、山にのぼれば、かの乗物は、一里南の、[二]瀬川といふ宿の、砂浜に行きぬ。既に日も暮れて、松の風すさまじく、往来の人も絶えて、所の馬方四五人、この女郎を忍び行きて、[三]浮世の事どもを語り尽くして、「[四]情」といへど、取りあへずましませば、荒男の無理に、手を差してなやめる事、左右へ[五]蛇の頭を出し、男どもに食ひ付きて、身を痛める事、大方ならず。何れも眼くらみ、気を失ひ、命を不思議にのがれ、その年中は、難病にあへり。



貴人の女が乗る飛び乗物。屋根に金具を打ち、胴に七宝つなぎの模様を描く上製。輿の下部から左右に蛇が頭を出す。男は近辺の使い走りの者。

「今夜そのままにして置いたならば、狼がやって来て食われるであろう。乗物を町に下ろし、今夜は番をして、明朝お代官へ報告しよう」と、人々はまた山に登ると、その乗物は見えず、一里（約四キロメートル）南の瀬川という宿場の川の砂地に移っていた。すでに日も暮れて、松の枝に吹く風もすさまじく、通行の人も絶えた頃、この所の馬方四、五人が、この女の所にやって来て、好色話をして、「お情けにあずかりましょう」といどんだが、女は相手になさらなかったので、荒くれ男たちが無理じいに手ごめにしようとした時、女の身体から左右に蛇が頭を出し、男たちに食いつき、たいへんな危害を与えた。皆々眼がくらみ、気を失ったが、生命だけは不思議と助かり、その年いっぱいは難病に苦しんだ。

その後、この乗物は芥川に移ったともいった。また、松尾大社の社前にも見え、翌日は丹波の山近くに行き、一時間も一か所に止まらなかった。のちには乗っている女も姿が変り、美しい少女になり、または八十余歳の翁になり、あるいは顔が二つになり、あるいは目鼻のない姥ともなり、見る人ごとにその姿は違っていた。これに恐れをなして、摂津から京都

六 淀川右岸にあり現在の大阪府高槻市内にあった北から南へ流れる小川で、そばを西国海道が通っている名所の地。
七 京都市西京区嵐山宮町にある松尾大社。松尾の南方から丹波に越える山道がある。ただし、近世は、普通には、その南方の老の坂を通って丹波に至る。
八 少女をいう。髪は末を短く切って結ばずにたらした形にしている。遊里では太夫・天神のそばにいて雑用をする少女をいう。
九 久我畷。京都市の南。「鳥羽の南より西におり行く道有り。桂河を渡りて久我の森を経て神足の北へ出る道有り。其程をいふ」（菟芸泥赴八）。京都から陸路で西国に行くには多くこの道を通る。
一〇 一六四八～五二年。
一一 橋本は京都府八幡市内。石清水八幡宮の山の西麓の淀川の岸にあり、古代と桃山時代とには右岸の山崎に通じる橋があった。ただし、この頃は廃損。狐川は淀川と木津川との合流する所にある渡船所（雍州府志一）。
一二 人魂の火。
一三 水泳初心者は、網に入れた大ひょうたんを胸に当て、また、小ひょうたんを連ねて布の袋に入れ、これを帯やたすきにして身体を浮かせた。
一四 なりゆきでそうなるかもしれない、もしも（万一）の時。

その後は乗物、芥川[六]にありともいへり。または松の尾[七]の神前にも見え、次の日は丹波の山近く行き、片時も定めがたし。後には美しき禿[八]に替はり、または八十余歳の翁となり、顔二つになし、目鼻のない姥ともなり、見る人毎に同じ形にはあらず。これに恐れて、夜に入り里の通ひもなく、世のさまたげとなりぬ。

この事知らぬ旅人夜道を行くに、思ひもよらぬ乗物の棒、肩を離れず、奇異の思ひをなしける。されども少しも重からずして、一町ばかりも過ぐると、俄に草臥出て、たやすく足も立たず難儀にあへる。陸縄手[九]の飛び乗物と申し伝へしはこれなり。慶安年中[一〇]まではありしが、いつとなく絶えて、「橋本・狐川[一一]のわたりに、見なれぬ玉火[一二]の出し」と里人の語りし。

十二人の俄坊主

泳ぎ習ひは瓢箪[一三]に身をまかせて、浮き次第に水練の上手となつて、自然[一四]の時の心掛け深し。

近くにかけての街道は、夜になると人通りが絶えて、世の中の難儀になった。

この事を知らない旅人が、夜道を行くと、思いもかけぬ乗物の棒が肩にくっつき、乗物をかついだようになり、奇妙な思いをした。しかし、少しも重くはなく、一町（約一〇九メートル）ばかりも行くと旅人は急にくたびれが出て、足が立たなくなるという難儀な目にあった。久我畷の飛び乗物と言い伝えられているのはこれである。慶安年中までは、この不思議はあったが、いつとなく絶えて、その代りに、「橋本・狐川付近に見なれぬ火の玉が飛んでいた」とその近辺の村人が話していた。

十二人の俄坊主

水泳の習い始めは、うきの瓢箪に身体をまかせて、身体が水に浮いてくるにつれて水泳の上手となって、いざという時の役に立つように、常日頃から心掛けている者は、感心な侍である。

ちょうど、季節は夏、海は波静かで、紀州加太の浦の御遊とあって、領主はお船をこの海岸に漕ぎ寄せられた。御料理船から御膳を運ぶのには、御膳の係が水

折ふし、夏海の静かに、[一]加太の浦あそびとて、[二]御船を寄せられしに、[三]御台所船より[四]御膳の通ひ、浪の上を行くに、[五]腰より下ばかりを濡らして、自由する事、畳の上に変はらずして、[六]月代をする人もあれば、[七]中将棋をさすもあり。[八]鸚鵡盃を交し、曲呑みするもをかし。[九]曲舞にのせて小鼓を打ち、または[一〇]瓜の曲剝き、これさへ奇妙に眺めしに、四五人して、すぐり[一一]藁を何程か手毎に抱へて、海中に入りて、出ぬ事二時に余りて、[一二]二王の形を作りて、手足の力身までを細縄がらみの細工、これぞ仏師も及びがたし。



の上を行くが、腰の下ばかりが海中にはいっているだけで、その自由に動く様子は、畳の上と変らない。水中で月代を剃る人もあれば、中将棋をさす人もある。おうむ貝の杯を人々と交わして、曲飲みするのもおもしろい。曲舞の謡にのせて小鼓を打ち、または、瓜の曲むきをする、これらさえも奇妙な業と眺められるのに、さらに、四、五人して、取り揃えた藁をいく束かずつ手ごとに抱えて海中にはいり、海から出ぬこと四時間余りで、二王の形を作り、手足の筋骨隆々たる様までを細縄でくくった細工に仕上げた。これは本職の仏師でも不可能な業である。

いろいろの御遊びの間に、殿様のお召船の船端に、柔術の達人、関口某という侍が、ゆったりと遠くを眺めていられたのを、殿様が小姓衆に仰せ付けになり、「御意」と言葉をかけて、小姓が急に海中へ突き落とした。落とされた関口はやがてはるかかなたの船にあがった。「どのような達人でも不意打ちには手が出せない」と大笑いしたが、関口は少しも驚かない。殿様のお召船に乗り移ると、「どうしてこのように、なす事もなく一人で海中に落ちたのか」と殿様は仰せられる。関口は、お小姓を一緒に海中に落

一 和歌山市加太の海岸。富んだ漁村で民家が千軒あった(南遊紀行中)。
二 殿様のお召船をいう。
三 料理をする船。
四 立泳ぎで、膳を持って泳ぐ配膳泳ぎをいう(踏水訣)。
五 「両足にて水を踏み、両手にて水をおさえ、足に釣合ひ浮く時は半分水より上に浮きて、さながら水を歩むが如くに見ゆる泳ぎなり」(踏水訣)。
六 男子の頭の額から頂の中央にかけて髪を剃った部分。
七 将棋の一種で、盤面は縦横十二目ずつ、駒数は各四十六でする遊戯。
八 おうむ貝で作った大杯。


おうむ貝

九 室町時代から行われた舞の一種。謡曲の曲(一曲の骨子となる内容を叙述説明した部分)に取り入れられている。
一〇 瓜の皮を曲芸風にむくこと。
一一 葉や袴などをとって茎をととのえた藁で、藁細工に用いる。
一二 寺院の門の両脇に立てる二体の金剛力士。二王像は勢いよく力強い様に造形される。これまでは曲泳の話。



淡島の磯近くに寄り来る大蛇に徳川頼宣が水中で長刀を振るい立ち向うさま。頼宣は波の上でも長刀を自在に振るうことができたことを示す。

一三 関口八郎右衛門柔心。関口流の柔術・居合抜きの祖。
一四 主君の近くに侍る少年をいう。「今、近習伺候ノ人ヲ呼ンデ扈従衆ト曰フ」（和漢三才図会七）。
一五 主君の仰せ。
一六 剣術・槍術などにすぐれた者。「手とは術の事也、剣・鎗の上手を手者と云ふ」（俚言集覧）。
一七 少年。ここは小姓をいう。
一八 絹または麻で織った単。夏用の単着。

さま〳〵の御遊興の折から、御船端に関口[一三]の何某、豊かに遠見して居られしに、小姓衆[一四]に仰せ付けられ、「御意[一五]」と言葉を掛けて、さざ浪の中へ突き落としけるに、遥かの船に上がりぬ。「いかなる手者[一六]もだますには」と大笑ひすれども、すこしも驚かず。召船に乗り移れば、「何とて手もなく一人は沈みけるぞ」と仰せける。少人[一七]にあやまりもあればと存じ、左の袂に印を付け置くのよし、申し上ぐる。かの者めして、御覧あるに、麻袴より、帷子[一八]まで二三寸突き通し、そのかすり脇腹かけて、茨椮のごとく、細き筋のつきしに、御前始め

として、もし間違いでも起こすと一大事と思い、そのようにはしなかったが、左の袂に印をつけておいた旨を、殿様に申し上げた。かの小姓を召してご覧なされたところ、着ていた麻袴から帷子まで、二、三寸（約六〜九センチ）突き切られてあり、そのかすり傷が脇腹にいばらにひっかかれたような細い筋となっていたので、殿様をはじめ、従臣たちは皆々横手を打って感心した。関口は海へ落ちざまに脇差を抜いてかの小姓の脇に当てて切ったのに、その切られた当人さえも知らないから、ましてほかの人の眼にはとまらなかったのである。その速いことは日本一の居合抜きの業である。殿様もこの関口の業を知って大変なご機嫌である。

やがてお召船は浦々を巡りゆく間に、家中の人々を乗せた船は磯に漕ぎ寄せ、人々は淡島明神の境内までも遊び荒らして、若侍たちが酒宴に興じているうちに、にわかに波が高くなり、黒雲が立ち重なって、長さ十丈（約三〇メートル）余りの大蛇が海中に出現して、その鱗は風車のように動く。頭の左右に生えている角は枯木のように見え、口からは火炎を吹き立て、巨体は山がさらに動くようで、皆皆大騒ぎをしているうちに、お召船の間

て、おの〱横手をうちぬ。落ちざまに指添へ抜きて当てし一に、その人さへ覚えねば、まして外よりは目にとまらず。はやき事、日本一の御機嫌。

御船は浦々めぐれば、家中の船は、礒にさしつけ、阿波島の神垣のあたりまでも荒らし、若き人々酒興せしに、俄に高浪となり、黒雲立ち重なり、長十丈あまりの、うはばみ二の出、鱗は風車のごとし。左右の角枯木と見えて、火焔吹き立て、山更に動くと見て、いづれも騒ぎけるに、間近くきたりしに、御長刀にて払ひたまへば、恐れて跡にかへる。大うねりして、小舟は天地かへりて悩みぬ。沖より十二人乗りし小早三、横切四れに押すと見えしが、蛇蝎一息に呑み込み、身もだえせしが、間もなく跡へ抜けて、汀に流れ着きしを見るに、残らず夢中五になつて、頭髪一筋もなく、十二人作り坊主となれり。

水筋の抜け道

若狭の国小浜といふ所に、猟師の遣ふ網の糸を商売して、

近くまでやって来たので、殿様が御長刀で打ち払い給うと、大蛇は恐れをなして、あとに引き返す。大波が生じて、小船は天地をくつがえすごとく激しく動揺して、人々は難渋した。そこへ、沖から十二人乗った小早船が、大蛇の前を、横に向きを変えて漕ぎ去ろうとしたところ、大蛇が一息にこの船をのみ込み、身もだえしたが、間もなく、船は大蛇のしりへ抜けて、汀に流れついたのを見ると、皆、気を失って、十二人は俄坊主となっていた。

水筋の抜け道

若狭国の小浜という所に、漁師が使う網の糸を商って裕福に暮している人があった。その人は越後屋の伝助といって、この港では有名な人である。年季奉公の女に、名をひさといって、その姿は北国の女にしては美しく、心をかけて言い寄った人も数多くあったが、その中でも京屋の庄吉という京都とこの地とを往来して商売していた男があって、この男と深い仲になった。男はこの田舎の町も住みよい所となり、ひさと年を重ねていたが、彼にはまだ定まった妻がほかにあったわ

一 脇指。
❖この部分は関口柔心が居合抜きの達人であったことの一挿話。
二 淡島の沖の苫が島には昔から大蛇がすむという(南遊紀行中　貝原益軒)。
❖この部分は徳川頼宣の豪勇の話。
三 速力の速い小船で、十挺から四十挺の櫓がついていて(ここは十二人乗り)、多くは船ばたが少し高くなっている半垣作り、あるいは欄干作り。物見や飛脚などに用いる。
四 船ばたを横に見せて通る。
五 気を失う。
❖この部分は、大蛇にのまれて助かった人の奇譚。大蛇にのまれて助かった人の髪が全部抜けていたことは、『醍醐随筆』上、近江国甲賀の童子の話に「髪ことごとく抜けて再び生ぜず」と見える。
❖この章の一原拠は紀伊国の江戸時代初代の領主徳川頼宣(家康の第十子)の言行である。頼宣は水泳に長じ、紀州にあって水中で自分で瓜をむいて、水泳に長じた者にその瓜を与えたり、立泳ぎのまま鉄砲で水上の鴨を射とめたなどのことがあった。また、友が島に上陸し、木に腰をかけると、それが竜のかたちをあらわす大蛇であったので、志津の長刀でその蛇の頭にあて、動けば刺し殺すというと、もとの臥木になったという(翁草)。

有徳に世を渡る人あり。越後屋の伝助とてこの湊にかくれなし。年切の女に、名をひさと呼びて、その姿、北国者にはやさしく、心を掛けし人、あまたの中にも、京屋の庄吉とて、都より通ひ商ひせしが、なじめば片里も住家となりて、年を重ねてありしが、いまだ定まる妻もなし、かのひさを忍び馴れて、すゑ〴〵までの事を申しかはせしに、親方の女房見とがめ、あらけなくせつかんして、「兎角は形、人並なるがゆゑに、いたづらをするなれば目の前に思ひしらせん」と火箸を赤めて、左の脇顔に差し付けけるに、皮薄なる所焼けちぢみて、女の身にしては、このかなしさ、大方乱気になつて、年月手馴れし鏡台に向かへば、顔をかしくなるを、身もだえして嘆き、世にながらへても、せんなしと思ひ極め、心にある事書置きして、小浜の海に身を投げけるに、その夜は沖浪荒く、死骸も行方知れず。ふびんとばかり申し果てける。

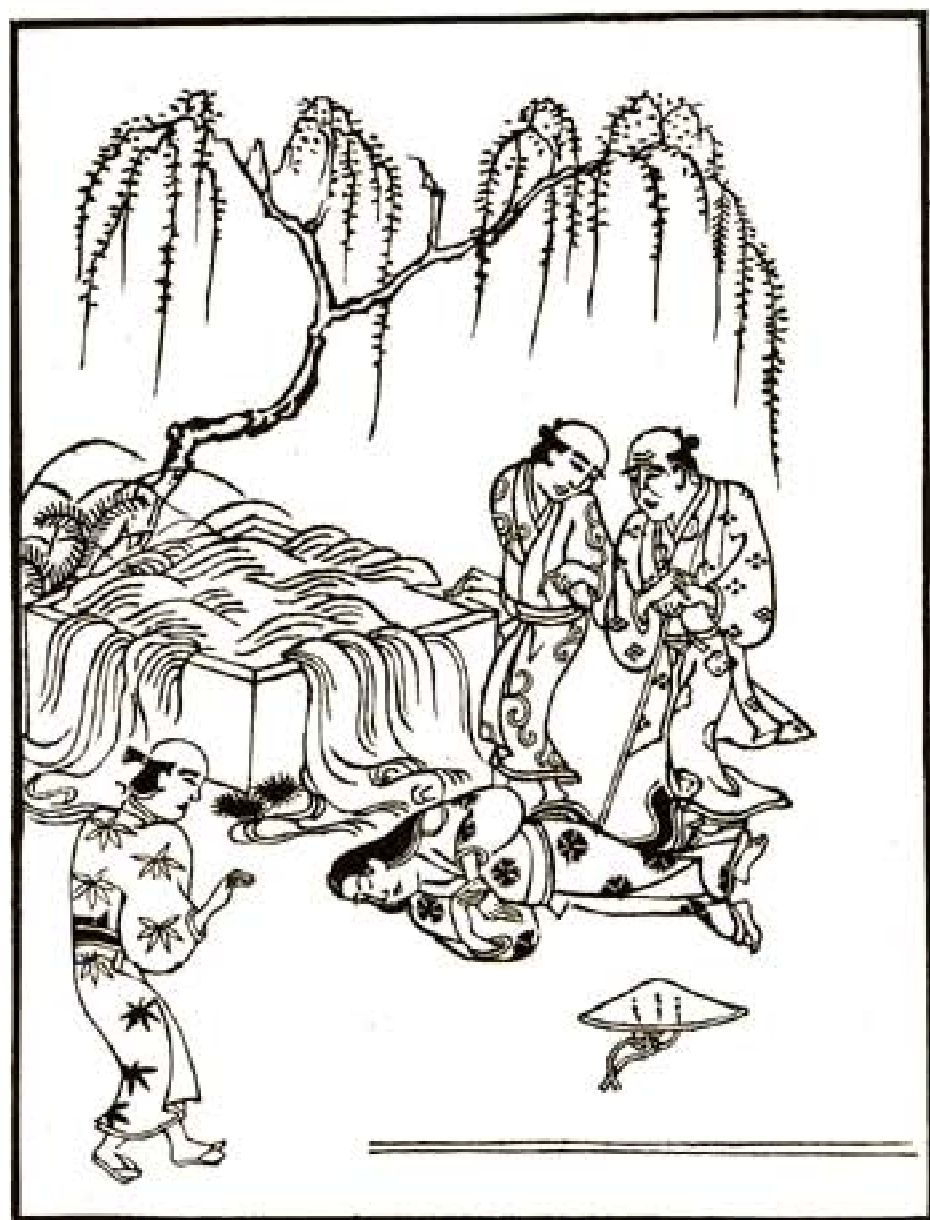
その頃は正保元年、二月九日の事なるに、大和の国、秋志野の里に、田畠の用水のために、百姓集まりて、古き寺地の跡を切りならして池を掘りけるに、世間より深く土をあぐ

けではなく、ひさと人目を忍んで会っていて、将来一緒になることを約束していた。ところが、これを主人の女房が見つけて、責めつけ荒く叱って、「とにかく、姿が十人並みだからこのようなふしだらなことをするのだ。はっきりと思い知らせてやろう」と火箸を焼いて赤くして、ひさの左の横顔にさしつけたので、顔の皮の薄い所が焼けちぢれて、見苦しくなり、女の身になって思うと、このように容貌が醜くなったことはたいへんに悲しいことだ。ひさは気が狂ったようになって、長い間使っていた鏡台に向かうと、以前に変って、鏡に映る自分の顔が醜くなってしまっているのを、身もだえして嘆き、こんな顔でこの世に生きていてもしかたがない、と心に思いきめ、思っていることを書置きに書いて、小浜の海に身を投げた。が、その夜は沖は荒れていて、ひさの死骸は行方しれずになってしまった。かわいそうなことだ、と人々は言っただけで、この事件は終ってしまった。

その時は正保元年二月九日のことであったが、大和国、秋篠村で、田畑の用水を得るために百姓たちが集まって、昔、寺のあった土地の跡を整地して池を掘っ

六 豊かで富んでいる商人。
七 二年以上の長期契約で雇った奉公人。ただし原則は十年を越えない。半年・一年の短期契約の雇い人(半季居・一季居という)よりも主人のしつけがきびしい。
八 両地を往来してする商売。京都から小浜までは約七〇キロメートル(二日行程)。
九 強く人を責めさいなむこと。
❖ひさは年季奉公人であるから、主人に拘束されるところが大きい。当時、女奉公人の取締りは主人の妻の責任であった。
一〇 淫奔なこと。ひそかに異性と通じること。
一一 一六四四年。本書刊行から四十二年以前。寛永二十一年十二月改元。改元以後は、その年の始めから元年となる。
一二 奈良市にある名所。西大寺の北方にあり、秋篠寺がある。

れども、水筋に当たらぬ事を悔やみ、鋤鍬のいとまなく、三日二夜掘る程に、水の蓋と聞こえて、車何百輛か引く音して、片隅に穴明きて、それより青浪立ちのぼり、俄に阿波の鳴戸のごとく渦のまく事二時あまり、池より水あまりて、国中大雨の思ひをなし、驚く事かぎりなし。明けの日水静かになつて見れば、十八九なる者、身を投げしが、岸の茨に寄り添へしを哀れと、引きあげ見るに、この里々の女とも見えず。殊更十日も以前に身捨てしありさま、いと不思議と申す折ふし、二月堂の行ひに参詣せし旅人、しばし目をとめて、「世には



海に投身した若狭小浜の女、ひさの遺骸が遠方の大和秋篠の湧水から流れ出たことを示す。木わくは湧水で四囲がくずれぬように急いで造ったもの。

ていたが、世間の池の深さよりも深く土を掘り下げていったのにいっこうに地下水の水脈に掘り当らぬことを口惜しく思い、さらに鋤鍬を休むひまなく使って三日二夜掘り続けていったところ、水脈の上と思われて、車を何百両も引くようなごうごうという音がして、その片隅に穴がぽっかり開き、そこから澄んだ水が吹き上がり、急に阿波の鳴門のように水が渦巻くこと四時間余りも続いた。池を満たした水は外にあふれ出し、この地方の人は大雨が降ったような思いをして、非常に驚いた。翌日、水の出がおさまって、その池を見ると、十八、九歳の女の身投げ死体が岸の茨の枝にひっかかっていたので、かわいそうにと引き上げて見たが、このあたりの土地の女ではない。ことに、十日も以前に身を投げた様子である。たいへん不思議なことだと人々が言い合っている時、奈良東大寺の二月堂の法会に参詣した旅人が通りかかって、死人をしばらく見て言うには、「世の中には似た姿の人もいるものだなあ。遠く土地を隔てているが、この女は越後屋の下女にそっくりであるよ」と死骸の前にまわってくわしく調べてみると、鹿の子散らしの模様の木綿着物に、帯はいつも見なれて

一 渦潮の名所の阿波の鳴門。

二 東大寺羂索院で行われる都率の法を修する法事。「毎年二月朔日より十四日までおこなひ有り…これを二月堂のおこなひといふ」(奈良曝二)。天平勝宝四年(七五二)に始まる。修二月の法(修二会)とも。

三 鹿子は、鹿の子絞り。「絞り染の紋に白き星を染め出すをいふ」(増補俚言集覧)。散らし紋は散らし模様で、所々をその模様で染めてあるもの。江戸初期の町家の下女では晴着。

似たる面影もあるものかな。遠き国里を隔てしに、越後屋の下女にそのままなるは」と前にまはりて、改めけるに、木綿着物に、鹿子[三]の散らし紋、帯はつね〴〵見つけし、横島の黄色にして、胸に守袋、これを明けて見るに、善光寺[四]如来の御影、檀特[五]の浄土珠数[六]、書き残せし物をあらまし読むに、疑ひなく若狭の事なり。「これを思ふに、奈良[七]の都へ若狭より水の通ひありと伝へしが、昔より今の世まで、例もなきぞ」と、身体はその里に埋みて、さま〴〵弔ひ、おの〳〵右の品々を持ちて、国元に帰りしに、いづれも横手を打つて、この物語に哀れまして、庄吉万事捨てて、その身を墨染[八]になして、秋[九]志野の里に行きて、塚のしるしの笹陰に、昔の事ども申し尽くし、自づからの草枕、まだ夢も結ばぬうちに、火燃えし車に、女二人とり乗りて飛び来るを見るに、正しく伝助が女房なり。これを押へて焼金当つるは、我がなれしひさが姿の替はる事なし。「今ぞ思ひを晴らしけるぞ」といふ声ばかりして消えぬ。[一〇]三月十一日の事なるに、日も時も違はず、若狭にて、一声叫びて空しくなりけるとなり。

いる黄色の横縞で、胸に守り袋を持っていて、これを開いて見ると善光寺の阿弥陀如来のお守りに、檀特で作った浄土宗の数珠、それに書置きがはいっていて、これを一通り読むと、間違いなく若狭のことが書かれてあった。「これについて考えてみると、奈良の都へ若狭から水脈が通っているという伝説があるが、昔から今まで、このようなことは例がないことだ」と、死骸はこの土地に埋めて十分に供養をし、旅人は皆々遺品をもって、国元若狭に帰ったところ、若狭の人たちは皆、横手を打って驚き、この物語により、彼女を以前にましてあわれんだ。これを知った庄吉は商売その他いっさいの世事を捨てて出家になり、秋篠の村に行って、ひさの塚に参り、しるしに植えた笹のかたわらで昔の思い出などを語っているうちに、ひとりでに眠ってしまった。まだ十分寝入らぬうちに火の燃えている車に女が二人乗って飛んで来るのが見える。乗った一人は間違いなく伝助の女房である。この女を押さえて焼け火箸を当てているのは自分がなじんでいたひさの姿そのままであった。「今こそわが思いを晴らしたぞ」と言う声だけがして、その姿は消えてしまった。三月十一日のこ

四　善光寺は長野市にある天台・浄土兼宗の大寺で、本尊の如来は欽明天皇十三年(五五二)に百済より渡来したもの。

五　檀特草の実で作った数珠。檀特草は、芭蕉に似た葉の草で、実は丸く黒色できわめて硬い(和漢三才図会九十四)。

六　浄土宗で用いる数珠。「環数珠其ノ数三十六、俗ニ環違ト云フ形ノ如クシテ浄土宗之ヲ用ヒテ以テ数万遍ノ修行ニ便ス、参州大樹寺登誉上人始メテ之ヲ作リ、永禄三年之ヲ東照神君(徳川家康)ニ献ル、以来、彼ノ宗派常ニ之ヲ用フ」(和漢三才図会十九)。

七　二月堂の前にある井戸(若狭井)は若狭の音無川の水が流れて来ているという伝説がある。「うがちし土の跡に、清水湧出づる、これすなはち閼伽の水に用ひ給へり。いつの年にても水出かぬる時は、衆僧若州(若狭)の方に向ひて祈り、若狭々々と云へれば忽ち水出きたる也。若州多の神の前に川あり。音無川といふ。これより二月堂の行なひの水行くなり」(京童跡追三)。

八　墨染の衣を着る。出家すること。

九　原本「秋志の里」。

❖このあたりの記述は『名所小鏡』秋篠里の条に載せる『拾玉集』の慈円の歌「旅の空秋ぞ悲しき秋篠の鹿と虫とに枕ならべて」によるか。

一〇　ひさが入水して三十五日(上方の慣習で中陰明け)に当るか。

残る物とて金の鍋

俄に[一]時雨て、[二]生駒の山も見えず、日は暮におよび、[三]平野の里へ帰る、[四]木綿買道を急ぎ、昔、[五]業平の、高安がよひの、[六]息継ぎの水といふ所まで、やう〳〵走りつきしに、跡より八十あまりの、老人きたつて頼むは、「近頃の[七]無心なれども、老足の山道、さりとては難儀なり。しばらく負うてたまはれ」といふ。「やすき事ながら、かかる重荷の折ふしなれば、叶



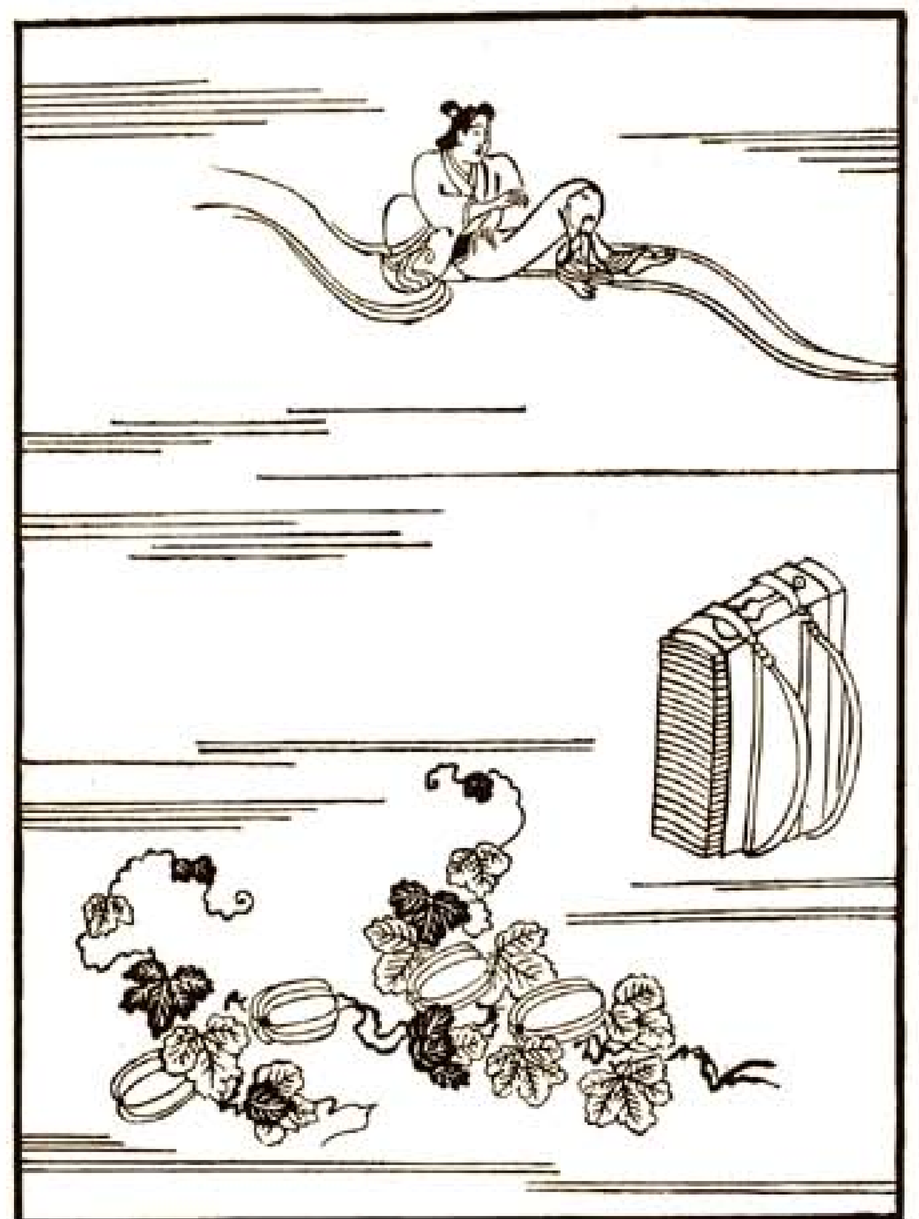
一 冬の初めに降る雨。『名所小鏡』には、「時雨」は生駒の縁語として載る。
二 「我宿の梢の夏になるときは生駒の山ぞ見えずなりける」(後拾遺　能因)による。
三 現、大阪市平野区内の地名。西鶴の頃は平野村。綿・木綿の集散地で、綿・木綿商人が多く居住した。
四 大和西部・河内丘陵地には綿栽培が盛んで、木綿織物の生産が盛んであった。この商人は大和から木綿を買い入れての帰途、竜田から十三峠を越えて神立に至る途中であろう。さらに八尾を経て平野に至る。
五 『伊勢物語』二十三段に在原業平が河内国高安郡の女に通っていた話が載る。
六 息継ぎは休息のこと。小休憩して飲む水。業平の恋の水、別れの水などあるが、この清水の場所は不明。
七 他人に遠慮なく援助を求めること。→二九ページ注一四。

とであったが、その日も時も違わず、若狭では伝助の女房が一声あっと叫んで息が絶えた、ということである。

残る物とて金の鍋

にわかに時雨てきて、生駒山も見えなくなり、時刻も日暮れになって、大和から平野村に帰る木綿買いが道を急ぎ、昔、業平が高安通いをした時の、息継ぎの水という所までやっと走り着いた時に、あとから八十余歳の老人がやって来て頼むには、「たいへんご迷惑なことをお願いしますが、老人の足で山道を行くのは非常に難儀です。しばらくの間、背負ってください」と言う。「おやすいことですが、このように木綿の重荷を背負っている時ですから、とてもできません」と男は言った。「老人をいたわる志がおありでしたら重くは肩にかかりません」と、鳥のように老人は男の肩に飛び乗って行くうちに、一里ばかりも過ぎて、松原に至ると、時雨もあがったので、老人はひらりと下りて、「さぞお疲れのことと思います。お礼に、十分ではありませんが、こちらへおいでください。酒を一献さしあげましょう」と言う。男は見渡したが、

はじ」と申す。「いたはりのこころざしあらば、重くはかからじ」と、鳥のごとく飛び乗りて行くに、一里ばかりも過ぎて、松原の陰にて、日和もあがれば、老人ひらりと下りて、「草臥の程も、思ひやられたり。せめては、酒ひとつ盛るべし。これへ」と、見えわたりて、吸筒もなく、不思議ながら、近う寄れば、吹き出す息につれて、うつくしき手樽ひとつ、現はれける。「何ぞ肴も」と、こがねの小鍋いくつか出しける。これさへ合点のゆかぬに、「とてもの馳走に、酒の相手を」と吹けば、十四五の美女、琵琶琴出して、これをかきな



生馬仙人馳走図。客の男の荷物は買入れた木綿。上に秤を載せる。男の傍にはかんなべと平鉢・角盆の肴で、本文の記述とは相違するが、これは強肴（しいざかな）で更に飲酒が進んだことを示す。

酒を入れた吸筒もないので、不審に思いながら老人の近くへ寄ると、老人の吹き出す息とともに、美しい手樽が一つ現れた。「何か肴でも」と、珍しい肴のはいった黄金の小鍋をいくつか出した。これだけでも合点がゆかないのに、「このうえの馳走に、酒の相手をお出ししましょう」と息を吹くと、十四、五歳の美女が琵琶を持って現れ、これをかき鳴らし、後には杯の付差しなどいろいろと、酒の相手をしたので、いつの間にか酔ってくると、冷やし物を出しましょう、と言って、時季はずれの瓜を出した。

この、万事の自由さは極楽にいるような気持がして、楽しんでいるうちに、かの老人は女の膝を枕にして、いびきをかいて寝入った。その時、女が小声になって言うには、「私はこのお方の妾でございますが、朝晩つきそっていて、いつも気をつかっています。このお方のお目のあかぬうちの楽しみに、内密の男に会うことを見逃してください」と言う。その言葉が終るや、この女も息を吹いて、十五、六歳の若衆を出し、「今申しましたのはこの方のことです」と手を引き合い、その近くを、二人で歌いながら歩いていたが、後には長くどこへ行ったのか行方

八 酒や水などを入れて携帯する竹筒、または筒形の容器。
九 酒を入れる樽の一種で、高さが高く、両方の手のついているもの。
一〇 小さい鍋に入れた料理で、多くは、凝った、手のこんだ料理。
一一 このついで。
一二 楽器の琵琶をいう。

一 自分が口をつけた杯を人に差すこと。 二 酒の酔いをさますために食する冷たい果物。 三 夫に隠れて情を通じる男。 四 二人以上が相連れてうたう歌。 五 だらしなくなること。ここでは泥酔すること。 六 大阪市住吉区の沖の海。 七 謡曲「高砂」のキリ(末尾)の文句「相生の松風颯々の声ぞ楽しむ」のことで、これを千秋楽といい、これをうたうと宴の終わったことを示す。相生―住吉。 八 大阪市住吉区。

❖商人の夢は謡曲「邯鄲」の盧生

らし、後には付差[一]さま〲、我を覚えず、酔出ければ、冷[二]し物とて、時ならぬ瓜を出しぬ。

　この自由、極楽の心地して、たのしみけるに、かの老人、女の膝枕をして、鼾出せし時、女小声になつて申すは、「自らこれなる御方の手掛者なるが、明暮つきそひて、気尽し止む事なし。御目の明かぬうちの、たのしみに、かくし夫[三]に会ふ事、見ゆるして給はれ」と申す。言葉のしたより、これも息ふけば、十五六なる若衆を出し、「最前申せしはこの方」と、手を引き合ひ、そのあたりを、連れ歌うたうて[四]歩きしが、後にはひさしく、行方のしれず。老人目覚めたらばと、寝がへりのたび〱に、かの女を待ち兼ねつるに、いつとなく立ち帰り、若衆を、女呑み込みければ、老人目覚まして、この女を呑み込み、はじめ出せし道具を、かたはしから呑み仕舞ひ、金の小鍋を一つ残して、これを商人に取らし、両方ともに、どれ[五]になつて、色々の物語尽きて、既に日も那古[六]の海に入れば、相生[七]の松風うたひ立つに、老人は住吉[八]のかたへ飛びさりぬ。

が知れなくなった。老人が目を覚ましたならばどうなるのだろうか、と寝返りをうつたびごとに心配して、その女が帰って来るのを待ちかねていたが、いつの間にか帰って来て、女が若衆をのみ込むと、老人は目を覚まして、この女をのみ込み、初めに出した道具をかたっぱしからのんでしまい、黄金の小鍋を一つだけ残して、これを商人に与えた。二人とも酔っぱらってしまって、さまざまの物語もしつくし、すでに日も住吉の那古の海に没したので、相生の松風、と千秋楽をうたいだすと、老人は住吉の方へ飛び去った。

　商人はまた、しばらく眠り、夢を見たが、その夢は、春の花が散ると餅をつき、蚊帳をたたむと月が出、門松もあれば盆踊りの大踊りもあり、それは盆も正月も一年中が一度にやって来、昼とも夜とも分けられないというおもしろいものであった。男は、短い間によい慰みをして、鍋一つが残った。平野村に帰って、この事を語ると人々は言った。「それは、生馬仙人という人で、毎日住吉から生駒へ通う、という言い伝えがある。きっとそれであろう」。

が夢から覚める前の、『日は出でて明らけくなりて、夜かと思へば昼になり、昼かと思へば月又さやけし、春の花咲けば、紅葉の色濃く、夏かと思へば雪もふりて』の詞章を俳諧化したもの。春かと思えば年の暮れになり、夏かと思えば秋となり、正月もあれば、盆もあり、という意。九 大勢で踊る盆踊り。一〇「残る物とて…」は西鶴の慣用句。一一 摂津国住吉の人で、河内国高安（現、大阪府八尾市内）の生馬谷に住んだ。

❖生馬仙人のことは『元亨釈書』巻十八に見え、この書に拠った『本朝神社考』に載るつぎの説話がこの章の原拠の一。宇多天皇の寛平九年（八九七）、行脚の僧明達という人が仙人に生馬の谷の庵で会い、瓜五個を馳走された。

❖この章の全体の直接の出典は、『酉陽雑俎続集』四に載るつぎの説話である。許彦という男が綏安山の中を歩いていると一人の書生に出会った。書生は、足が痛いので、許が背負っている鵞鳥の籠の中に入れてかついでほしい、というので許は承知した。許が籠を背負っても重く感じなかった。しばらく行って大樹の下で、書生は籠から出、許に馳走するという。許が承知すると、書生は口からおいしい食物を盛ったいくつもの銅盤を吐き出した。馳走を食べ、酒を飲むうちに、書生は一人の十五、六歳の美しい女を吐き出した。やがて書生が酔って眠る

と、女は許に、自分は好きな男と会いたいと言い、二十歳余りの一人の男を吐き出した。その男は許に挨拶をし、ともに酒を飲んだ。やがて、書生が目を覚まそうとすると、女は男をのみこんだ。書生は起きて、許に、日暮れであるから別れようと言い、自分の吐いた銅盤をのみこみ一つだけ大銅盤を残して、許にこれを与えて去った。

三 不思議。

❖この章は隠れ里伝説をふまえている。飛驒国には異界があること、『今昔物語集』巻二十六第八話に見える。ただし、この章の原拠ではない。

一三 主人の命を奉じて任務を行う者。ここは郡奉行か。しかし、一人で山中を通行していたらしいから、奉行の手付の軽輩の侍か。以下はその山中巡視中の出来事。 一四 岩穴の中に奇異なことが存するのは、日本各地に知られる。越後国・常陸国・信濃国・下野国などに存在するものについては『世事百談』巻三に記事がある。洞穴の下方が明るくて、水の色や魚が明確に見えるのは、奇異な事象を物に即して明瞭に表現している。

一五「金魚は長さ指ほどの紅なる小魚にして、尾のところ金色にして光輝あり。若き時はまだ黒し。支那・日本、今は印度にても水瓶に養ひ、まだ羽の生えぬ蚊(ぼうふら)を餌とす。銀色をする別種あり」(日本誌一 ケンプエル)。ふなの一種で、日本で

商人はしばし枕して、夢見しに、花が散れば、餅をつき、蚊屋をたためば、月が出、門松もあれば、[九]大踊あり。盆も正月も一度に、昼とも夜とも知れず、すこしの間に、よいなぐさみをして、[一〇]残る物とて鍋ひとつ。里に帰りて、この事を語れば、「[一一]生馬仙人といふ者、毎日、住吉より生駒に通ふと申し伝へし。それなるべし」。

夢路の風車

世には[一二]面妖なる事あり。飛驒の国の奥山に、むかしより隠れ里のありしを、所の人もしらず。

ある時、山人の道もなき、草木をわけ入るを、[一三]奉行見付けて、跡をしたひ行くに、鳥もかよはぬ峰を越し、谷あひ三里程もすぎて、おそろしき[一四]岩穴あり。かの山人これに入りける。のぞけば只くらうして、下には清水の流れ青し。目馴れし[一五]金魚多し。我これまで来て、この中見届けずにかへるも、[一六]侍の道にはあらずと、おもひ定め、四五丁くぐるとおもひしが、

夢路の風車

世の中には不思議なことがあるものだ。飛驒国の山奥には昔から隠れ里があったが、そのあたりの人々もこれを知らない。

ある時、山人が道もない草木の生い茂った中を分け入って行くのを、奉行が見付けて、跡をつけて行くと、鳥も通わぬ高い峰を越し、谷間を三里（約一二キロメートル）ほども過ぎて行くと、恐ろしい岩穴があった。その山人はここにはいって行った。奉行がその岩穴を覗いてみると中はまっ暗で、下の方に清水の流れが青く見えた。流れの中には見なれた金魚がたくさん泳いでいた。自分はここまでやって来て、この中に何があるのか見とどけないで帰ってしまうのでは、臆病

は江戸時代前期から、飼われたが、ここは異郷であることを示す。[六]侍は武勇を重んずべき身分の者として考えられていた。

一「喜見城の有様とは」の意。喜見城は仏語で、帝釈天の住む城の名。城の四門に四つの庭園があって天人が遊戯する。「忉利天ハ亦、三十三天ト名ヅク、蘇迷盧山頂ニ住ス、山頂ニ宮有リ、善見城ト名ヅケ、亦、喜見城ト名ヅク…是レ天帝釈ノ住スル所也」(三界義)。男性が行って遊楽する理想郷と考えられていた。「目前の喜見城とは吉原・島原・新町」(好色二代男一の一)。

二 春がしゅんの魚類。海岸に近い土地を示し、鶯・雲雀という春の平野の野鳥とともに、この隠れ里が山中にありながら、山中とまったく異なった土地柄であることを示す。

三「島オリ物ハ外国ノ島ヨリ出ダスヲ云フ」(貞丈雑記三・頭書)。もと、島(東南アジア・南中国)で織られて輸入された絹織物をいう。筋のある織物(縞織物)で、のち、これと同じように筋のある織物を島(縞)というようになった。ここは、隠れ里が異国であるさまを示している。

四 彼女たちの夫。夫は庶民であって、機織りをする二人の女を妻にしている。異国の習俗を示している。

五 一疋は二反。

六 近世における日本の慣習では、庶民の妻は夫が死んで子のない場合、

唐門・階、五色の玉をまきすて、[一]喜見城のとは、今こそ見れ、これなるべし。折ふしは冬山を分けのぼり、落葉の霜をふみて来りしに、ここの景色は春なれや。鶯・雲雀の囀りて、[二]生烏賊・さはら売る声、おのづからのどやかに、しばし詠めけるうちに、眠り出て、これなる草枕して、前後も知らず仮寝する。

その夢心に、女の商人二人来て、跡や枕に立ち寄り、我を頼みて申すは、「はづかしながら、かかる面影をまみえ申すなり。自らは、この都の傍に、[三]島絹を織りて、世を渡りしに、何に不足なる事もなかりしに、[四]つれたる人、風の心地とて、かりそめのわづらひ、やむ事なく、最後の形見に、織りためし絹、二千[五]疋たまはり、[六]子もない者の事なれば、これを売りて、年月を送りて、すゑ〴〵は出家にもなれとの、名残の言葉にまかせ、ここかしこの[七]市に立ちて、渡世とす。いまだ一年も経たざりしに、我に[八]執心の文を遣はしける。おもひもよらぬ事なり。その男は、谷鉄と申して、この国に住みし大力なり。その後ふみのかへしを、せぬ事をうらみ、ある夜

で侍の道にはずれていると、覚悟をきめて暗い中をはいって行き、四、五町（四、五百メートル）もくぐって行ったかと思うと、唐門・階段の美々しい建物があって、庭には金・銀・硨磲・瑠璃・瑪瑙の五色の玉が撒き散らされており、伝え聞く喜見城というのは、今ここに見たこれをいうのであろう。ちょうど、時節は冬で、奉行は冬山を分け登り、落葉においた霜を踏んで来たのだが、ここの景色は今まさに春であるよ。鶯・雲雀はさえずり、生烏賊・鰆を売る声も、どことなくのどやかで、しばらくその景色を眺めているうちに、眠気が出て来て、かたわらの草を枕にしてぐっすりとそのまま寝入ってしまった。

その夢に、女の商人が二人現れて、寝ている前後に立ち寄り、奉行に頼んで言うには、「このような姿をお見せいたしますのは、お恥ずかしいことでございます。私どもは、この都の片ほとりに縞絹を織って世を渡っていて、何の不足もございませんでしたが、夫が風邪の心地といって、ついちょっと患った後に、亡くなってしまいました。最期の時に、織りためていた絹を二千疋いただき、子供もいない者のことだから、これを売って年

百か日すぎると再婚してもよい。
七 市場。道路に品物を並べて販売する場所。
八 恋文。

九 正当な報いとして処刑させる意である。敵を討つのは日本では士分のすることで、庶民は許されない。以上、二人妻、後家が出家すること、敵討ちなど、日本とは異なった慣習を叙述して、隠れ里が隔絶した世界であることを示す。
一〇 知るたより。証拠。



隠れ里に至った奉行が、夢に殺された二人の女織物商人に出会い、仇討を頼まれるさま。荷物をになう二人の女の形は潮汲みの松風・村雨図のパターン。

しのび入り、二人の者を切り殺し、貯へ置きし、絹紬をとりてかへり、死骸は野末埋みける。この事せんさくあそばしけるに、知れずして、今に谷鉄をば浮世に置く事の口惜しや。ことに執心と申せしはいつはりなり。只、絹を取るべき謀事なり。あはれ、国王へ申し上げられ、かたき[九]をとつてたまはれ」と、女の首両方より、袖にすがりてなげく。「それこそやすき事なれども、何をかしるべ[一〇]に、申し上ぐべきたよりもなし」と申せば、「それにこそ、証拠あれ」と、念比に語る。「これより南にあたつて、広野あり、つねは木も草もな

月を送り、後々は出家になりなさい、という遺言どおりに、あちこちの市に出て縞絹を売って世を渡っていました。ところが、夫が亡くなってまだ一年も経たないうちに、私に恋文をよこした者がおりました。思いもよらぬことでございます。その男は谷鉄と申しまして、この国に住む大力の者でございます。その後、恋文の返事をしないことを恨んで、ある夜私たちの家に忍び込み、二人を斬り殺して貯えていた絹紬を盗んで帰り、死骸は野原のすみに埋めました。このことをお奉行様がお調べになりましたが、犯人がわかりませんので、今もなお、谷鉄をこの世に生かしていることは口惜しくてなりません。特に、谷鉄が私に執心と言いましたのはうそでございます。ただ、絹を取ろうとする計略でございます。なにとぞ、国王に申し上げて、敵を討ってくださいませ」と女の首が左右から袖にすがりついて嘆き訴えた。「そのようなことは容易なことだが、何を証拠に国王に申し上げればよいのか。その証拠がないではないか」と言うと、「それには証拠がございます」と詳しく語った。「これより南に当るところに広い野原があって、そこは今までは木も草も生えていない所

き所なり。我等を掘り埋めし後に、二またの[一]玉柳のはえしなり。これしるしに、頼む」との言葉もつい絶えて、夢は覚めける。

　不思議とおもひ、かの野にゆけば、その里人集まり、「今までは、見なれぬ柳」とおどろく。さてはと、この事、国王へ申し上ぐれば、あまたの人を遣はし、かの地を掘らせ見たまふに、夢に違はず、女二人、むかし姿かはらず、首おとしてありける。あらまし[二]奏聞仕れば、谷鉄が住家に、大勢みだれ入りて、からめ取り、「おのれが[三]身より出ぬる錆なれば」と、[四]鉄の串刺にして、巷にさらしたまへり。

　その後、かの侍には、御褒美とて、目慣れぬ[五]唐織の、島絹かず〳〵たまはりて、「汝、この国にては、命みじかし。いそいで古里に帰れ」と、紅の風車に乗せられ、浮雲とりまきて、[六]目ふる間に、住み馴れし国に帰り、ありのままに申せば、「その所をさがし出せ」と、数百人山入りして、谷峰たづね見れども、今に知れがたし。

でございましたが、私たちを掘って埋めたあとに、二またの美しい柳が生えました。それを証拠にお願いいたします」との言葉も急に消えて、夢は覚めた。

　奉行は、不思議な夢であると思って、その野原に行くと、その村の人々が集まって、「今までに見なれない柳だ」と驚いていた。さてはと思って、この事を国王に申し上げると、多くの人を遣わしてその土地を掘らせてご覧になる。すると、奉行の夢に間違いなく、二人の死骸が現れ、姿は生前と変らないが、首は斬られてあった。このことを一通り国王に申し上げると、谷鉄の住処に捕方が大勢で乱入して、からめ取り、「自分の身から出たさびだから」と、鉄の串ざしの刑にして、大通りにさらした。

　その後、かの侍にはご褒美として珍しい唐織の縞絹をたくさん下されて、「汝、この国では生命がなくなる。急いで故里に帰りなさい」と紅色の風の車に乗せられて、浮雲に取り巻かれて、またたく間に住みなれた故郷に帰り、ありのままを人々に語ると、「その隠れ里を捜し出せ」と、数百人の人々が山入りして谷や峰を尋ね求めたが、今だにその郷がどこにあるのかわからない。

一　玉は美称。美しい柳。
二　国王に申し上げること。
三　諺「身から出た錆」。自分自身が原因をつくってひきおこした災い。刀の錆が刀身から生じるのにかけていった諺。ここは犯人谷鉄の鉄にかけていう。
四　鉄の串刺し刑は日本では行われない。串刺しにして、大通りに晒した刑にした。
❖このあたりは亡霊に頼まれて敵討ちをする説話の型。
五　中国産の織物。さらに、その他の外国産の織物にもいう。
六　ちょっとわき見をする間に。きわめてわずかの時間をいう。「ふるは正面より横にそらすことにて、脇見することなり」(西鶴語彙考証　真山青果)。
❖この章は『太平広記』一二七「蘇娥」の章を原拠とし、異郷に行って帰郷する説話である異郷訪問説話(浦島太郎や俵藤太秀郷の竜宮訪問説話など)の型をふまえる。異郷から帰る時には珍品・奇物を与えられる点が共通している。
七　雨天の時に着る衣。上等品はラシャなどで作るが、下等品には紙にえごま油を塗った紙合羽もある。身体全体を包み、前をこはぜでとめる。こはぜは、足袋や袋などの合わせる部分につける小さい爪形の金具。竹材・骨材などでも作る。
八　賽の川原は日本の仏教にいう、小

男地蔵

北野の片脇に、合羽[七]のこはぜをして、その日をおくり、一生夢のごとく、草庵に独り住む、男あり。

都なれば、万の慰み事もあるに、この男はいまだ、西東をも、知らぬ程の娘の子を集め、好ける玩び物をこしらへ、これに打ちまじりて、何の罪もなく、明暮たのしむに、後には新[八]さいの川原と名付けて、五町三町の子供、ここに集まり、父[九]母をも尋ねず、遊べば親ども喜び、仏[一〇]のやうにぞ申しける。

その後、この男夜に入り、月影をしのび、京中にゆきて、美しき娘を盗みて、二三日も愛しては、又帰しぬ。これを不思議の沙汰して、暮より用心して、いとけなき娘を門に出さず、都の騒ぎ大方ならず。昨日は六条[一一]の珠数屋の子が見えぬとて嘆き、今日は新町[一二]の椀屋の子を尋ね悲しむぞかし。

頃は軒端[一三]に菖蒲葺く、五月の節句の、色めける、室町通り[一四]

男地蔵

洛中、北野のほとりに合羽のこはぜを作って毎日を送り、一生をぼんやりとして、小さい家に一人で住んでいる男があった。

都だから多くの慰みごともあるのに、この男は、まだ西も東もわからないほどの幼い女児を集めて、女児たちの好きな玩具を作り、これらに交じって自分も無邪気に一日中楽しんでいるうちに、後には人も新賽の川原と名づけて、付近の子供たちはここに集まり、父母に会いたいと求めることもしないで遊んでいるので、生活に忙しいその親たちは、子供にかかる手を省くことができるので喜び、この男を仏のように言っていた。

その後この男は、夜、月の光から身を隠して京の町中に行き、美しい娘を盗んで、二、三日ほどかわいがっては返していた。娘が急に見えなくなるのを不審なことだと評判して、人々は警戒して日暮れになると幼い娘を家の外に出さず、都の町の騒ぎは大変であった。昨日は六条

児が死後に行く場所。父母を恋しがる小児がここで川原の石を積んで父母の供養のために塔を造るが、それを鬼が来て破壊する。その時、地蔵菩薩が出現して小児を救う。京都の西方の埋葬地を、さい(今、西院に作る)川原と称する。北野の南方にある。

九 『地蔵和讃』に父母を慕う詞章がある。この付近の町家は両親ともに仕事をもち働くので、子供を安心して託することができて喜ぶのである。

一〇 賽の川原の縁語。

一一 六条は下京の東西の通りで、東、西本願寺の所在地。その門前には数珠屋が多い。東本願寺前には上、中、下の数珠屋町がある。

一二 新町は京都の中央部にある南北の通り。二条の南北には塗物屋が多くあった。「(椀、家具や)品々の枕・折敷・并びに、弁当・盆・重箱・提重・張付障子縁・書院床の縁・万づ塗物、これらをあきなふ、新町二条の北にあり」(人倫訓蒙図彙四)。

一三 五月五日は端午の節句で、前日の四日に邪気を除くために菖蒲・よもぎを軒端にさす。→六八ページ挿絵。

一四 京都の中央部にある南北の通りで、織物・染物の呉服商が並んでいた。「金襴・今織・唐織、もろ〳〵の絹類、染小袖、室町通下立売より下、蛸薬師通まで十町の間、こと〴〵くあり」(万買物調方記)。「色めける」は室町通の呉服のはなやかなさまをいう。

一 日傘を召使いの女がさしかける。「乳母日傘…昔は乳母を召使ふほどの然るべき者の児には日傘を差掛けさせたる故に左は云ふめり、其の傘は丹青もてさま〲絵をかきし也。殊に菱川が絵に多く見えて、延宝・天和・貞享の頃専ら用ひたり」(守貞漫稿三十三編)。室町通には大名の呉服所(呉服その他、諸物購入係をつとめる商人)が多くおり、彼らは富裕であった。


お乳母日傘
（骨董集）

二 京と伊勢の桑名の間は二十八里強(約一一〇キロメートル)で約三日弱の行程。

三 旅行用の笠。「菅笠ハ雨日両用ニシテ貴賤男女冬夏咸旅行必ズ之ヲ用フ具也」(和漢三才図会二十六)。→六八ページ挿絵。

四 桃山時代、京都の町の四囲に土塀を築き、この土塀の内を洛中と定めた。江戸時代にもこれは受け継がれた。

五 町方で、家の者が失踪すると、町奉行所へ届け出ねばならないが、五日ぐらいは届け出ないで探索する。

六 正しい表記は「流石」であるが、原本は「石流」。これは西鶴の慣用表記。

の、菊屋の何某のひとり娘、今七歳にて、そのさますぐれて、生れつきしに、乳母・腰元がつきて、入日をよける傘[一]さし掛けて、行くを見すまし、横取りにして、抱きて逃ぐるを、「それ〱」と声をたつるに、追つかくる人もはや、形を見失ひける。この男の足のはやき事、京[二]より伊勢へ、一日に下向するなれば、跡につづくべき事、およびがたし。その面影を見し人のいふは、「先づ菅笠[三]を着て、耳の長き女」と見るもあり。「いや顔の黒き、目の一つあるもの」と、とり〲に姿を見替へぬ。かの娘の親、いろ〲嘆き、洛中[四]をさがし


家の軒に菖蒲・よもぎをたばねて挿すのは端午の節句の風俗。女の子をさらう男と、乳母、日傘をさす腰元。室町の呉服所の門を出た所で起こった事件。

の数珠屋の子が見えなくなったといって嘆き、今日は新町の椀屋の子がいなくなったので捜し悲しむ、というようなありさまであった。

ちょうどその時は、家々の軒端に菖蒲をふく五月の端午の節句時分で、はなやかな呉服の町、室町通の菊屋某の一人娘が、今年七歳で、その姿は特に美しく生れついており、彼女に乳母・腰元がついて夕日をさける傘をさしかけて通って行くのを、かの男が見て、横から奪い取って、抱いて逃げた。乳母・腰元たちが、「それ、それ」と大声をあげたので、人々は追いかけたが、すぐに子盗人の姿を見失ってしまった。この男の足の速いことは、京から伊勢へ一日で下るほどであるから、そのあとに続いて追いかけることはむつかしい。その姿を見た人が言うには、「まず、菅笠をかぶり、耳の長い女」と認めた人もおり、「いや、そうではない。顔が黒く、目が一つある化物だ」と言う者もおり、人によっていろいろとその姿を見違えていた。この娘の親は非常に嘆き、洛中を捜しまわったので、だんだんとわかってきて、この子供を取り返し、このことを町奉行所に申し上げると、奉行はこの男を出頭させて、彼が

けるに、自然と聞き出し、かの子を取り返し、この事を言上申せば、召し寄せられて、おもふ所を、御聞きあそばしけるに、只何となく、小さき娘を見ては、そのままに欲しき心の出来、今まで何百人か、盗みて帰り、[五]五日三日は愛して、また親元へ帰し申すのよし、外の子細もなし。かかる事のありしに、今まで世間に知れぬは、[六]石流都の大やうなる事、思ひ知られける。

神鳴の病中

欲には一門兄弟の中も、見棄つる事、世のならひぞかし。

信濃の国、[七]浅間の麓に、松田藤五郎と申して、所ひさしき里人のありしが、今年[八]八十八歳にして、浮世に何をか思ひ残す事もなく、末期の近づく時、藤六・藤七、二人の子を枕に、「我、相果てての後、[九]摺糠の灰までも、[一〇]二つに分けて取るべし。さてまた、この刀はめいよの命を助かり、この年まで世に住む事の目出度く、この家の宝物となれば、たとへ[一一]牛は売

思っていることをお聞きになったところ、この男は、ただなんとなく幼い娘を見ては、そのままにその娘が欲しいという気持がわいてきて、今まで何百人か盗んで帰り、五日、三日かわいがってまた親元に帰していましたということで、別に他意はなかった。このようなことが数多く起こっていたのに、今までは一般に知られていなかったというのは、さすがに都はおっとりとしているからだと、思い知られるのであった。

神鳴の病中

欲のために一家一門、兄弟の仲も絶えることは世間によくあることである。

信濃国、浅間山の麓に松田藤五郎といって、古くからこの土地に住む村人がいた。今年八十八歳になり、この世に何も思い残すこともなく、臨終が近づいた時、藤六・藤七という二人の子を枕もとに呼び寄せ、「自分が死んだ後は何から何まで、もみがらの灰にいたるまで、真っ二つに分けて二人で遺産を相続しなさい。それから、この刀は自分が、不思議に生

七　浅間山の麓。この地域は五穀の成育悪く、果樹もなかった。いわゆる不毛地域。以下、古くから続いた家であるから多くの遺産のあることを想定させ、相続争いの必然性を示す。また、当主は庄屋年寄を務める家と思われ、刀を持っている。このような家柄であるから、父親が家宝とした刀は名刀であったと、長男が推測したのである。

八　米寿といい、一家一門を集めて長寿を祝う。

九　稲のもみがら。この灰は田畑の肥料になる。

一〇　財産相続を二等分にせよと遺言した。江戸時代の慣習では、財産相続には単独相続と分割相続とがあり、分割相続の場合でも、その分割の割合は必ずしも一定ではなかった。『本朝桜陰比事』巻一の七では京都の話であろうが、「大方世間の法に沙汰して、兄に六分、弟に四分といひわたし」としている。均分にしたのは、以下の話から知られるように、長子が暗愚であったので、父親が弟と二等分するよう遺言したのであろう。なお、江戸時代の遺産相続は遺言によるのが原則。

一一　牛は効率の高い農業生産具。ただし、関東ではその利用はまだ少なかった。『和漢三才図会』巻三十七に「牛…大抵関東ニハ馬多ク牛少ナシ…関東ニハ則チ馬ヲ以テ之(牛)ニ代フ」。信濃はむしろ馬の産地。

るとも、これをはなつことなかれ」と念比(ねんごろ)に申し置かれて、つひに仏の国[一]へまゐられけるに、いまだ七日[二]も経つや経たずに、はや跡職(あとしき)[三]を争ひ、諸道具両方(りやうはう)へ分け取る。

　件(くだん)の刀をば、兄も弟(おとと)も心掛(こころが)けて、論ずることの見苦しさに、[四]親類立ち会ひ、「兎角(とかく)、惣領(そうりやう)[五]なれば、この一腰(ひとこし)は藤六に渡せ」と、いろ／＼に申せど、弟(おとと)はさらに合点(がつてん)をせず、兄は是非に取らねばきかず、いづれも曖(あつか)ひ[六]に、日を暮らしぬ。藤六申すは、「二つに分けたる家を、皆藤七に取らすべし」と申せば、やうやう曖(あつか)ひ済みて、藤六は刀ばかりとつて家を出(いで)、「向後(きやうこう)

一 極楽浄土に行く。死ぬこと。
二 死者の没後の法事として、六日目に初七日の法事をする。中陰の法事の最初。
三 死去した者の財産相続。
四 遺産相続には、親類、あるいは町・村役人が立ち会って確認する。
五 長男。「今俗に嫡子の事を総領と云ふ」(俚言集覧)。以下、財産相続は分割できるが、家督相続は単独相続であり、普通には長男が相続するので、家宝の刀は家督相続者である兄藤六の相続分であると、親類の立会人が言ったのである。
六 仲裁。江戸時代は庶民間の紛争は、親類・同地域(町・集落)の者の調停によって処理されるのが原則。この調停をあつかいという。ここは親類によった。
七 鑑定。ここは刀の鑑定。京都では、この頃、本阿弥(二家)・徳原家があった(万買物調方記 一)。
八 奈良で造られた刀で鈍刀。奈良刀は「当時は却つて鈍刀の名目となれり」(倭訓栞)、「上品ニ非ズ」(雍州府



命が助かり、この年までめでたく世に長生きすることができた、この家の宝物であるから、貧しくなって、たとえ耕作に使う大切な牛は売るようなことがあっても、これだけは手放してはならない」と特に念を入れて言い置かれて、ついに極楽浄土へ行かれたが、まだその初七日の法事もすまぬうちに、もう遺産の相続を争い、諸道具を両方に分けて取った。

　例の刀をば、兄も弟も特に心をかけて争論することの見苦しさに、親類が立ち会って、「何はともあれ長男だから、この刀は藤六に渡しなさい」といろいろに説いたが、弟はどうしても承知しない。兄の方もまた、絶対にこの刀を貰(もら)わなければ承知できないという。立会いの人々も皆々仲裁に日を送るばかりであった。藤六が言うには、「二つに分けた遺産は皆々藤七に与えよう」と言うので、やっと話がまとまり、藤六は刀だけを手に入れて家を出、「今後は百姓をやめる」と言って、それから遠い都へ上り、刀の目利き所へ行って、この刀を見せたところ、刀は全くの鈍刀で、しかも焼刃(やきば)の模様もいい加減なものだから、二度と相手にしないので、また故郷に帰って、母親の所に行って、

志七)と評価されている。
九 原本「焼刃も、かつてなれれば」。焼刃は刀の刃の上にある波紋のような模様。その模様もでたらめで、美しい波紋でない、いい加減な鍛冶によって造られた刀であることを示す。
一〇 深田。水分が多いため泥が深い田。
一一 水がかれてしまった土地。
一二 田に水を引くことについての争論で、農民にとっては死活の問題の争い。
一三 渋皮に同じ。稲のもみがらをいい、人間の皮膚では、最も外側の皮をいう。
一四 殺人犯は死罪になるので、刀が切れなかったため、自分も死罪を免れた。
一五 銘が刻まれていない刀。下等の刀であることを示す。以下、母親が兄藤六にその事情を、相続争いの時に説明しなかったのは、二人兄弟の場合には弟に愛情をより深くそそぐ母親の心理とも見られる。

一 一六四四〜四八年。本書刊行の約四十年以前。 二 おおよそ千貫の物成りの田(千石の米を収穫する田)に配水する用水樋で、百町歩の田の用水樋。用水樋から流れてくる水を両村に分配するので、その奪い合いのための争いである。江戸初期には新田の開発、用水樋の敷設が全国的に盛んに行われた。 三 村役人の長。農村に住居し、領主の命令で、その


水争いのさま。左の刀を抜こうとしているのが藤五郎で村役人のさま。裸身は耕作農民たち。虎の皮の褌(ふんどし)は火神鳴の鬼。天から舞い降りて仲裁しようとする。

百姓をやめる」と、それよりはる〴〵の都に上り、目利へ行きて、これを見するに、奈良物にして、しかも焼刃も、かつてなれば、重ねて人手にも取らねば、また古里に帰り、母親の方に行きて、刀の様子を尋ねけるに、老母語りけるは、「そのむかし国中、百日の日照り、ふけ田も干潟となつて、村々水論のありし時、隣里の男を、親仁切り付けられしに、渋り皮も剝けず、危ふき命を助かられしなり。その時この刀の、切れぬを喜び、命の親とて、一代家の宝物とは申されける。はじめより、無銘の何の役にもたたざる物とは、隠れも

刀の由来を尋ねたところ、老母が話すには、「その昔、信濃国中が百日続きの日照りで、水の多い田も干上がってしまい、村々で水争いのあった時、隣村の男を親仁が刀で斬りつけられたが、相手は薄皮もむけなかったので、人を斬ったという事件にもならないですみ、親仁は処刑されることもなくて、あぶないところを命が助かったのです。その時、この刀が切れなかったことを喜んで、命の親として、親仁一代家の宝物だとおっしゃったのです。初めから、無銘の何の役にも立たないものとはわかっていたのに、おまえが何に替えても欲しがっていたことが私には不思議でした。しかも水争いは、正保年中の六月の初めの頃のことでしたが、両村の人々が大勢、千貫樋に集まって、庄屋年寄たちが生命を捨てるほどの姿で争いをして、まさに衝突しようとした時に、日の照っている最中、太鼓が一つ鳴り、空から黒雲が舞い下がって、赤褌をした火神鳴がやって来て、村人たちに言うには、『まず静まって聞いてください。長い間雨を降らさないで、このように村々が困っているのは、我々仲間のしわざです。というのは、この頃、水神鳴たちが若気のいたりに夜這星と遊んで、惜

なきに、その方が万に替へても、欲しがる事の不思議なり。しかも水論は、[一]正保年中、六月初めつ方の事なるに、両村の大勢、[二]千貫樋にむらがり、[三]庄屋年寄、一命を捨てて、争ひして、今ぞ危なき折ふし、日の照る最中に、一つの太鼓鳴り、黒雲まひさがつて、赤褌をかきたる、[四]火神鳴の来て、里人に申すは、『先づ静まつて聞きたまへ。ひさしく雨をふらさずして、かく里々の難儀は、我々中間の業なり。この程は、水神鳴ども若気にて[五]夜這星に[六]たはぶれ、[七]あたら水をへらして、おもひながらの日照りなり。おの〳〵[八]手作の[九]牛房をおくられたらば、追付け雨を請け合ふ』と申す。『それこそやすき事なれ』と、あまた遣はしけるに、[一〇]竜の駒に一駄つけて天上して、その明けの日より、はやしるしを見せて、ぱらり〳〵と、[一一]痳病気なる、雨をふらしける」とぞ。

しい腎水を減らしたので、心にかかりながらも雨を降らすことができず、日照りとなったのです。皆さんの手作りの牛蒡を薬用に送ってくださったならば、直ちに雨を降らせることを約束いたします』と、言います。『そのようなことはたやすいことだ』と、牛蒡をたくさん与えたところ、火神鳴は天馬に一駄それを積んで天に上って行き、その明けの日から早くもそのしるしを見せて、ぱらりぱらりと淋病病みの小便のように、少しずつ雨を降らしました」ということだ。

土地の行政の庶務を勤める。「一、村役人唱之義、関東方にては名主組頭と云ひ、…上方・遠国は庄屋年寄と唱る、所に依ては庄屋一人、年寄一人あり」(地方凡例録七)とあり、庄屋年寄で普通は一人役。兄弟の父はこの役を務めていたのであろう。[四]火神鳴・水神鳴ともに雷であるが、火神鳴は落雷の場所を焼き、水神鳴は焼かず、大雨を降らせるのみのものをいう。「両儀集説巻之六、『世俗火神・水神ノ二種アリト云フ者ハ、火雷・水雷ノ異アルヲイヘリ。火雷ハ墜チテ必ズ焼跡ヲ留ム。水雷ハ物ヲ撃ツテ損傷ストイヘドモ火焼ナシ云々。』羽陽秋北水土録巻之五、『…雷鳴し、動震して万物を焼くを、是を火鳴る雷と云。…雷鳴震動すと雖も、万物を焼くと云ふことなく、唯だ強雨を降らすを、是れ水鳴る雷と云ふなり。』」(西鶴語彙考証　真山青果)。[五]流星。[六]情交することをいう。[七]水は腎水、精液。情交が過ぎて腎水が減ること。[八]自作した、自家消費分の作物。[九]精力をつける食物であるが、また利尿の食物でもある。[一〇]天空を駆ける馬。[一一]女性の尿道淋をいう。「しやうかち」は「消渇」で、正しくは糖尿病などの病気をいうが、女性の淋病には、かくして、この病名を用いる。「今俗ニ婦人淋病ヲ謂フ、消渇ト為スハ誤リ」(和名類聚抄箋注二)。老母の語る話であるためにこのように表現した。

入絵

西鶴諸国はなし

三

巻三　あらまし

一　蚤の籠抜け　駿河、府中に住んでいた「武勇」の浪人津河隼人に、同夜、紺屋に入り主人を殺した夜盗の疑いがかかる。だが、証拠がない。入牢になり未決囚で年を経た。のち、隼人は京都の牢に移される。牢内で囚人が仕込んだ蚤の軽業の籠抜けを見たり、いろいろな話を聞いたりしていると、その中の新吉という男が、府中の夜盗であったことがわかった。新吉も、他の殺人もあるので死罪は免れられないと、自白して、奉行に申し出た。奉行は隼人に、長く未決囚であったので、その代償を望むよう仰せられた。隼人は新吉たち二人の助命を申し出、彼らを助けた。

二　面影の焼残り　風邪がもとで「無常」のこの世を去った京都上長者町の十四歳の娘を、千本で火葬に付したところ、夜中に棺桶が薪の中からころがり出て、娘のその姿は焼け残って、生き返った。これを乳母の夫が朝早く行って見つけ、こっそり連れ帰り養生させて、親元に返した。娘は十七歳で尼となったという。

三　お霜月の作り髭　大坂の玉造で、一向宗の霜月の報恩講で同行四人が、その夜、入婿する男が寝ている間に、その顔に墨を塗った。これが起りで騒動になり、結局、お寄坊主も同行の衆も作り髭をし、狂人の様子をして詫び言して歩いた。「馬鹿」話。

四　紫　女　筑前博多、袖の湊に、侍ながら仏道修行の心で庵住する「夢のような人」伊織の所に、紫色の着物を着た紫女の妖怪が出没して、伊織を迷わし殺そうとする。これを医者が診断して、伊織は紫女を切ろうとする。女は逃げていったが、その後も出現するので、供養すると、のちには現れなくなった。

五　行末の宝舟　信濃、諏訪湖の氷上を、春の狐渡りの後、人の止めるのも聞き入れず勘内という馬方が渡り、途中、氷が消えて水没する。その年の七月七日に、湖の沖の方より船に乗って勘内が現れ、竜宮の買物使いにやって来たと言う。帰りに銀銭で一杯にした宝船を与えるから一緒に来なさい、と言うと、「無分別」の六人の里人が船に乗る。しかし、目安書する男だけは急に気が変り乗船せず、今まで生きており、六人は帰って来なかった。

六　八畳敷の蓮の葉　吉野の奥山、西行庵に住んでいた僧が、竜の昇天を見、世界の広大さを語る。天竺の霊鷲山の池の蓮の葉は二間四方、八畳敷ほどもあり、人がその上で昼寝できると「名僧」策彦が語ったところ、それを聞いていた織田信長がその小ささに笑った、という話。

七　因果の抜け穴　兄大河判兵衛の「敵討ち」に出かけた弟判右衛門とその子判八は、但馬の片田舎に隠れている相手の住家に侵入するが、失敗して逃亡する。その時、判右衛門が塀の穴をくぐれず、敵に足をつかまれる。因果なことに判八は父の首を打ち落して持ち逃げる。改めて判八は一人で敵討ちに出かけるが返り討ちにあう。

近年諸国咄（きんねんしょこくばなし）

大下馬（おほげば）　巻三

目録（もくろく）

一 軽業の一種で、口が四五㌢、長さ二㍍余りの竹籠を地上二㍍足らずの所に横にして、その中を菅笠をかぶった男が跳躍してくぐり抜け、出て地上に立つ曲芸。また、輪の中をくぐり抜ける芸もある。延宝年間（一六七三〜八一）に初めて長崎から大坂にくる。



籠抜け
（和漢三才図会）

二 静岡県静岡市。

三 上京にある東西の通りで、現在の京都御所の西にあり、北に中立売通、南に下長者町がある。土御門通ともいう。富裕町人が多く居住していた。

四 霜月は十一月の異称で、親鸞の忌日の十一月二十八日の前の七日間、二十一日から二十七日までを報恩講といい、東本願寺では法事が行われる。

五 大阪城の南方の地域。当時は大坂の市街から少し離れた地域である。

㊃ 紫女[一] 筑前[二]の国博多にありし事 夢人

㊄ 行末の宝舟 諏訪[三]の水海にありし事 無分別

㊅ 八畳敷[四]の蓮の葉 吉野[五]の奥山にありし事 名僧

㊆ 因果[六]の抜け穴 但馬[七]の国片里[八]にありし事 敵打

一 年を経た狐の化した女。「三才図会ニ云フ、狐ハ古ヘ淫婦ノ化スル所、其ノ名ヲ紫ト曰フ、…女中記ニ云フ、狐五十歳ニシテ能ク変化ス、百歳ニシテ美女ト為リ、神巫ト為リ、丈夫ト為リテ女子ト交接ス、千歳ニシテ…其ノ人ヲ魅スル者多ク人ノ精気ヲ取リ、以テ内丹ヲ成ス、…狐ハ陰類也、陽ヲ得テ乃チ成ル、故ニ牡狐ト雖モ必ズ女ニ托ハリ以テ男子ヲ惑ス也、然レドモ大害ヲ為サズ、…狐ノ人ニ托ク事強気ナル者ニハ則チ托ク事能ハズ、蓋シ邪気虚ニ乗ジテ入ルノ謂ヒ也」(和漢三才図会三十八)。

二 福岡県福岡市。

三 諏訪湖。長野県にある湖。周囲約一二キロメートル。

四 みずぶき(鬼蓮)。

五 奈良県の南部、吉野郡。ここは吉野山。

六 因果には、仏語で、すべての事象は、それを生ずる因があり、その因から果が生じ個々の事象となるということの意と、過去世における悪業の報いとして現在世でうけるふしあわせなことの意と、不運の意とがあり、この題名にはそれらの三つの意味を重ねて用いている。

七 兵庫県の北部。

八 片田舎。

九 富士山から吹き下ろしてくる寒風。

一〇 盗賊や火事を警戒する時期。年

蚤の籠抜け

[九]富士颪の騒がしく、府中の町も、[一〇]用心時の歳の暮になりぬ。世をわたる万の事も不足なく、[一一]武道具も昔を捨てず、[一二]歴々の牢人、津河隼人と申せしが、いかなる思ひ入れにや、[一三]下人なしに只独り、すこしの板庇を借りて住みけるに、十二月十八日の夜半に、盗人大勢しのび入りしに、夢覚め[一四]枕刀をぬき合はせ、四五人も切り立て追つ散らし、何にても物はとられず、[一五]沙汰なしにして、近所も起こさず済ましぬ。

その夜また、同じ町はづれの[一六]紺屋に夜盗入りて、家をあらし、[一七]染絹・[一八]掛硯をとりて行くに、亭主鑓の鞘はづして出合ひけるに、七八人も取り巻き、主を切りこかし、思ふまま、諸道具までを取つて行く。

夜明けての[一九]御僉議に、下々の申すは、「皆、髭男の、[二〇]大小を指してまゐつた」といふ。かかる折ふし、かの牢人の門に、血の流れたる、世間より申し立て、さま〴〵の[二一]申し分けその

末をいう。

一一 武士としての表道具である武具。鎧・冑・刀・脇指・鑓・弓など。

一二 家柄の立派な。

❖主人公の浪人は、仕官していた時は上級武士であった者と設定されている。以下の記述に、下人を一人ももたぬことについての筆者の弁明、出牢しうるつてをもつこと、などがその設定と関係する。この章はそのような上級武士の心情を描いたもの。

一三 武士は下級職の者でなければ下人を雇う。

一四 枕もとに常に置いている護身用の刀。

一五 幕府の触れ書によると、町家において盗人が侵入した場合は、声を立てて町中に知らせる。町中は出会い、逮捕せねばならない。物を盗まれなかったからといって見逃してはならない。

一六 普通の染物屋。

一七 染めた絹。絹織物は高価。

一八 →一九ページ注九。七八ページ挿絵の左下方にいる盗人のかついでいる箱。この中の下部に貨幣を入れる。携帯用金庫を兼ねる。

一九 町奉行所の取調べ。

二〇 刀と脇指。盗人が武士であると証言した。

二一 弁明。浪人側の弁明に証拠がないので容疑は晴れない。なお、江戸時代には原則として、犯罪を本人が自白しなければ処刑することはできない。

蚤の籠抜け

富士の山から山おろしの風が騒がしく吹き、駿河の府中の町も、家々が火事・盗人の用心をする年の暮れになった。生活に何一つ不自由なく、武士の諸道具もその昔仕官していた時のように持ち続けていた、素姓正しい浪人の、津河隼人という人がいたが、どういう考えからであろうか、下人も置かずただ一人の暮しで、この町の、小さい板庇のそまつな家を借りて住んでいたが、十二月十八日の夜中に、盗人がこの家に大勢で忍び入ったので、隼人は眼を覚まし、枕もとの刀を抜き合わせ、四、五人も斬り立て追い散らし、物品は何も盗まれなかったから、何も起こらなかったことにして、近所の人を起こして事件を話しておくということもしないですませておいた。

その夜また、同じ町のはずれの染物屋に夜盗が押し入って、家の中を荒らし、染絹や掛硯を盗んでゆくので、亭主が槍の抜身をもって立ち向かったが、盗人は七、八人で取り巻き、主人を斬り倒して、

一 牢に入れる。取調べ中は容疑者を入牢させる。
二 以前は上級武士であったが、現在は浪人としておちぶれているので、名を隠している。
三 板倉勝重の時のことか。
四 「その身に科を覚え」たのは七七ページ注一五に記したように、浪人も法令違反をしていることを反省しているからである。
五 公方儀の略。徳川将軍は内大臣に任ぜられたので公家方となり、その略、公方は、江戸時代では将軍家を称する。将軍の幕府を指し、さらに幕府の諸職をもいう。
六 牢屋の鉄格子。

証拠もなければ、是非なく籠者(らうしや)[一]してありける。「昔はいかなる者ぞ」と、御たづねあるに、[二]「この身になつて名はなし」と、うち笑つて申す。何ともむつかしき僉議(せんぎ)にて、年月(としつき)を重ね七年(しちねん)過ぎて、駿河(するが)の籠者残らず、[三]京都の籠に引かるる事あり。

又このうちにまじり、都(みやこ)の憂き住ひ、武運の尽きなり。あまた人はあれども、[四]その身に科(とが)を覚えて、今更[五]公儀(こうぎ)を恨みず、命を惜しまず。

ある雨中(うちゆう)に、[六]くろがねの窓より、幽(かす)かなる明りをうけ、蛤(はまぐり)



思うままに諸道具までを奪っていった。

夜が明けてからの役人の取調べで、下男たちが言うには、「盗人たちは皆髭(ひげ)の生えた男で、大小をさして来ました」と言う。ちょうど同じ時、かの浪人の家の入口に血が流れているのを、世間の人々が訴えたので、浪人に夜盗の疑いがかけられ、浪人はいろいろの弁明をしたが、その証拠となるものがなかったので、しかたなく取調べのために牢屋(ろうや)に入れた。「昔はどのような者であったのか」と役人が尋問したが、浪人は、「このような姿になっているのですから、名のる名前もありません」とうち笑って言った。どうにも判断のしにくい事件で、そのまま年月を過ごしているうちに、七年過ぎて、駿河(するが)の入牢者が、皆、京都の牢屋に移送されるということがあった。

また、この入牢者たちとともに、都のつらい牢屋住いをするのは武運の尽きというものである。有力な知人がいたので、出牢のつてはあったのだが、自分にも落ち度があったことを知って、今更役人も恨まず、生命も惜しく思わなかった。

ある雨の日に、鉄格子(てつごうし)の窓からかすかにさしてくる明かりをたよりに、蛤(はまぐり)の貝を合わせて髭(ひげ)を抜く者もあれば、ちり紙

七 薄縁はふちをとった薄い畳表で、牢屋内ではこれを敷いて座臥する。これを織った糸。
八 踊りの一種で物もらいが大道でする踊り。鹿踊り。獅子舞とは異なる。「今、勧進の代神楽は、舞手の乙女もなく、只、鼓・太鼓ことやうにたたきたてて、太鼓打の面つき狂人のやうなるを見てうれしがる。しかのみならず獅子が立ちて扇の手を使ひ、一の谷節で舞ふ、最珍しき事どもなり。岡崎女郎という鹿おどりなればいかが」（人倫訓蒙図彙七）。
九 桃山時代の大盗賊。事跡不詳であるが、一説には三好氏の臣、石川明石の子。身体長大、三十人力であったが、文禄三年（一五九四）捕えられて、一子とともに京都三条河原で釜煎りの刑に処せられる。三十七歳。『本朝二十不孝』巻二の一では、近江の豪農の子で、七条河原で処刑されたとする。『本朝二十不孝』には、石川五右衛門の手下の盗人が、「色々四十八手の伝受を、印可まで、この道執行するこそ、うたてけれ」（→一八八ページ）と盗みの伝授をしたように記している。
一〇 秘伝を授けること。
一一 白昼堂々と物を盗むこと。盗人のほうも危険の多い、ベテランの盗み方。
一二 手柄話。



染物屋に押し入った夜盗。戸外は右から、松明・抜身の刀は首領。夜着、つづら、掛硯（小銭が入っている）、衣装、米俵、長持を盗み出す男、抜身の男は先手（さきて）で最後に出る。

の貝にて髭を抜くもあり、塵紙にて仏を作るもあり、色々芸づくし、独りも鈍なる者はなし。その中に髪白く巻き上がり、さながら仙人のごとくなるが、薄縁の糸にて、細工に虫籠をこしらへ、このうちに十三年になる虱、九年の蚤なるこれを愛して、食物には、我が太腿を食はしける程に、すぐれて大きになり、やさしくもなつきて、その者の声に、虱は獅子踊をする、蚤は籠抜けする。悲しき中にも、をかしさまさりぬ。

後は石川五右衛門より、伝受の昼盗みの大事、または、高

細工で仏像を作る者もあり、入牢者がいろいろの芸尽しをしていたが、彼らのうちには一人として鈍才の者はいなかった。その中に、髪が白く巻き上がって、ちょうど仙人のような男がいて、薄縁の織糸で、細工に虫籠を作り、この中に十三年も生きている虱、九年になる蚤を入れており、これをかわいがって、食べ物には、自分の太腿の血を吸わせている間に、非常に大きくなり、やさしいことには彼になついて、その者の声で、虱は獅子踊りをし、蚤は籠抜けの芸をした。これを見ていると悲しい自分の境遇のうちにもおかしさがまさって愉快になった。

その後は、石川五右衛門から伝授された昼盗みの秘伝を語る者もあり、または、手柄話になって、ちょろりの新吉という男が、彼の片耳のないわけを聞く人に、語って言うには、「俺は危ない目に出会ったことが四十三度あったが、一度も傷を負うようなことはなかった。ところがある時、駿河で浪人の家に押し入ったが、手早く斬り立てられて、皆々生命がやっと助かるという目にあった。わが身一代にこれほどいやな目にあったことはない。それにも懲りないで、その夜、また、染物屋に盗みにはいって、主人を斬り殺し

名咄になつて、ちよろりの新吉といふ男に片耳のない、子細を聞く人に語るは、「我けはしき事に出合ひしは、四十三度、一度も手を負はざりしに、ある時に駿河にて、窂人がたへ押し込みしに、手ばしかく[一]切り立て、みなく\命をやうく\拾ふ。一代にこれ程、好かぬ目にあひつる事はなし。それにもこりず、その夜染物屋へ入りて、主を切り殺して」と、ありのままに語るを聞きて、「我こそその窂人の、隼人と申す者ぞ。その方どもの仕業、我が難儀となるなり。かかる身となりて、さらく\命を惜しむにはあらず、侍の悪名[二]とつて、相果つる事の口惜し。何とぞこの難の、晴るるやうに」と申しければ、盗人聞きわけ、「我々はそれのみならず、この度は、女を殺しての科、かれこれのがるる事なし。御身の事、御訴訟申さん」と、籠番を頼み、両人あらましを申しあげければ、ひさしく済まざる[三]事の埒明き、窂人を召され、ながく\の難儀の段思召し、何にても望みを、かなへくださるべき、仰せなり。窂人ありがたく存じ、「しからばこの二人が、命を申し請けたし。最前はかれら故の、難にあひ候へども、こ

て……」と、ありのままに語ったのを、隼人が聞いて、「我こそその浪人の隼人という者だ。その方どもの仕業により、拙者は難儀にあい、このように牢にはいっているのだ。このような姿になっているが、けっして生命を惜しんで言うのではない。侍が悪名を負ったままで死んでしまうことが残念なのだ。どうか無実のこの汚名が晴れるようにしてもらいたい」と言うと、盗人は承知して、「我々二人はその事だけでなく、このたびは女を殺したための罪ですから、あれもこれも、死罪を逃れることはできません。あなたのことを役人に申し出ましょう」と牢番に頼んで、二人は事件のおおよそを申し上げると、長らく未決であった事件が解決できた。奉行は浪人を召され、長い間の難儀を考慮に入れて、何でも望みがあればかなえてくださる、という仰せがあった。浪人はありがたく思い、「では、事件を自白した二人の生命をいただきたい。以前には彼らのために難儀にあったが、このたびの二人の証言で、武士としての名を失わずにすんだうれしさにお願いいたします」と何度も申し上げて、二人の生命を助けたということである。

一 手早く。盗人を殺さなかったのは、事件になるのを浪人が恐れたからである。

二 武士は名誉を最も大事にするゆえの言葉。

三 事件が処理できないこと。

四 京都東山の北から南へかけての一帯は桜の名所。神楽岡・清水寺など。

五 京都の西郊、嵯峨にある池。「古ヨリ月ヲ賞スルノ処也。池ノ西ニ月見壇有リ、八月十五日ノ間洛人来遊ス」(雍州府志九)。

六 この世の貧乏でつらいこと。

七 酒は秋に造り込みをし、秋・冬に販売するので、酒造家は春・夏は暇である。近世は洛中でも酒造が行われていた。

八 楽しく暮している家で、富裕な町

の度の申し分けにて、武士の名を埋まぬ事のうれしさ」。かさね／＼言上申し、助けけるとなり。

面影の焼残り

[四]東山の花に暮らし、[五]広沢の月に明かし、[六]浮世の悲しき事を知らず、上長者町に[七]酒つくり込み、春夏は隙なる、[八]楽し屋あり。ひさしく子を願ひしに、娘一人まうけて、[九]乳媼をとりて育てしに、今[一〇]十四歳になりしが、いづれを難いふべき事もなき、美女なれば、諸人の思ひ入れも深かるべし。

[一一]母の親の才覚にて、[一二]遅からぬ事を取り急ぎ、[一三]縁付の手道具までも、残る所もなく拵へ、あなたこなたの[一四]云入れも合点せず、都の花をと、聟見競べし折ふし、風の心地と、なやみけるに、[一五]京中の薬師に掛けて、さま／＼看病すれども甲斐なく、惜しや眠るがごとく、世を去りける。二親のなげき限りもなし。

[一六]その日も暮れて、ひそかに[一七]野辺のおくりをして、[一八]千本のみ

面影の焼残り

東山の花見に春の日を暮らし、広沢の池の月に秋の夜を明かして、この世の貧苦を知らずに、上長者町で造り酒屋をして、春・夏は家業の暇な、富裕な町人が住んでいた。長い間、子を授かることを神仏に祈願していたが、娘一人を得て、乳媼をつけて育てているうちに、今は十四歳になったが、どこにも難のつけようのない美女であったので、多くの人々がこの娘に深く思いをかけた。

母親の考えで、まだ遅くもない縁組のことをとり急いで、結婚のための手道具もすべてこしらえてしまい、あちらこちらからの縁談の申込みにもなかなか承知せず、都の花というような婿を得ようと、求婚の婿を見くらべているうちに、娘は風邪にかかって病に臥せったので、京中の名医にかけて、いろいろと看病したけれども、その甲斐もなく、惜しくも眠るように世を去っていった。両親の嘆きはたいへんなものであった。

その日も暮れて、ひっそりと野辺の送

家をいう。

九 乳を与える乳母。当時は富豪の妻女は、容姿がおとろえるので乳児に自分の乳を与えず、乳母を雇う風習があった。抱いて守りをする乳母を抱き乳母というのに対する語。

一〇 女性が成人した年齢。「女は十四歳より初めて経水通じ」(女重宝記三の一)。

一一 娘のしつけや婚礼など諸事についての直接責任者は母親。

一二 まだ早い結婚のことを急ぎ。女性は十三、四歳から結婚するが、特に上層の家では結婚が早い(女重宝記三の一)。

一三 結婚の際に持ってゆく手回りの道具で、連台・衣桁・手拭掛・手箱・貝桶・行灯などをいう(女重宝記二の七)。

一四 結婚の申込み。

一五 京都中の医者。京都には名医が多数いたので名医に診察させたことを示す。

一六 死者を火葬・土葬するには、蘇生することもあるので、死後一昼夜以上おくのが通例であるが、ここはその日のうちに火葬に付したので、後述のような蘇生が起こったわけである。

一七 遺骸を埋葬地・火葬地へ送ること。ここは火葬場へ送ること。

一八 京都の西北の船岡山西麓にある火葬場を俗に千本という。付近一帯は墓地。千本の閻魔堂で三月の終りにする念仏供養の時に鳴らす叩き鐘。

つ鐘に、無常覚めて、煙をかくる時、下々の女までも、同じ火に飛び入るばかりの、思ひをなして帰るに、春の闇さへつらきに、雨の降り出て、殊に哀れを残す。その夜の明方、七つの時取りをして、灰寄せに行くに、乳まゐらせたる嫗が男、わが宿よりすぐに、人よりもはやく、墓原に行くに、道すがら人も見えず、三月二十七日の空、宵の気色より、なほ物すごく、焼場に行けば、何とも見分けがたき形、足元へ踏み当て、これはとおどろき、燃さしをあげて見れば、死人はうたがひなし。いかなる亡者ぞと、念仏申し、さて娘御の火葬を見るに、早桶たきぎの外へ、こけて出けるに、気をつけ、かの死人を見れば髪頭は焼けても、風情は変はらず。いまだ幽かに息づかひのあれば、木の葉の雫を口にそそぎ、我が一重をぬぎて、着せまゐらせ、跡へはよその歯骨を入れ置きて、それより負ひたてまつり、土手町の借屋敷に行きて、年頃目をかけし者をたたき起こし、「忍びて養生をする、病人」と申し、一間なる所へたて込み、夜明けて見るに、惣身黒木のごとし。二度人間にはなりがたきありさまなれども、脈にた

りをして、千本の火葬場に聞こえる三つ鐘に、この世の無常を知って、薪に火をつける時、下女までも同じ火中に飛び入りたいというばかりの悲しい思いをして、その帰る時になると、春の夜は闇さえもつらいのに、そのうえ雨も降り出して、ことさら哀れな思いを残した。その夜の明けがた、七つ時に時刻を定めて、骨あげに行くのに、乳母の夫が、自分の家からすぐに、他人よりも早く墓場に行った。その途中は、人にも会わず、三月二十七日の空は宵に見た景色よりもなお恐ろしかった。火葬場に行ってみると、何であるとも見分けにくいものの形が足に当り、これは、と驚いて燃えさしを取り上げて見ると、それはまさしく死人であった。どういった亡者であろうかと念仏を唱えて、さて、かの娘御を火葬したところを見ると、棺桶が薪の外へ倒れ出ているのに気をつけて、先ほどの死人を見ると、髪・頭は焼けていたが、顔かたちは変らず、元どおりであった。まだかすかに息をしていたので、木の葉にかかった雨の雫を口に注ぎ入れて、自分が上に着ていた単の着物を脱いでお着せして、そのあとには他の人の歯骨を入れ置いて、それからお背負いし、土手町の借家に行って、

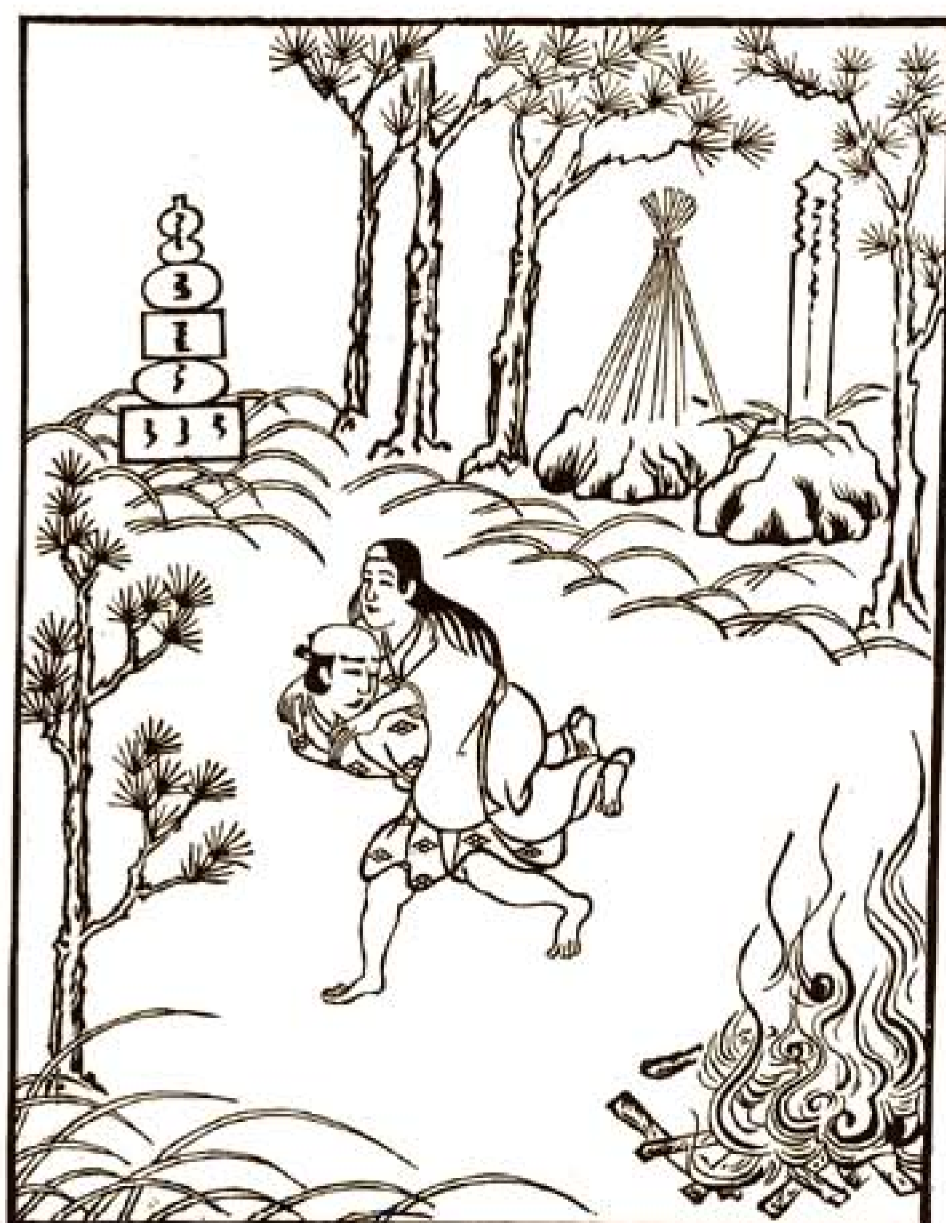
一 棺桶に積んだ薪に火をつける。
二 午前四時頃。
三 時刻を取り決めること。
四 骨あげ。
五 夫をいう。
六 遺骸を入れて土葬・火葬にする桶。棺桶。
七 容貌。
八 上に着ていた単の着物。
九 歯。
一〇 河原町通の東にある南北の通りで、荒神口から高田の専修寺の別院までで、五つ町がある。この通りの東が鴨川。
一一 囲っていた妾。
一二 襖・障子などで外部から内部が見えないようにすること。
一三 木を蒸焼きにしたもの。京都では燃料にする。大原木。

一四　常にかかっている医者。

一五　→二七ページ注一六。

一六　『易経』に基づき卦爻によって、その人の吉凶盛衰などを占い見ること。占い。

一七　効果が上がること。



生きていた娘を背負って帰る、うばの夫。五輪塔、新しい土葬の立て竹、卒都婆と、松の木が並んでいるのは千本松原の、千本の火葬場であることを示す。

のみあれば、不断[一四]の医者を呼びに遣はし、はじめを語りて、しのび／＼に薬を盛れば、次第に目を明き、足手を動かし、自然に見苦しき事もやみぬ。

半年も過ぎて、様子を聞けども、かつて物をいはねば、現の人に会へるごとし。これは薬師も合点ゆかず、「占はしても見給へ」と、安部[一五]の何がしを呼びて、八卦[一六]を見るに、「この人何程、薬を尽くしたまふとも、利く[一七]事更にあるまじ。子細は、親類中に、うき世になき人の弔ひ事をしたまふ故ぞ」と、見通す様にぞ申しける。

年来懇ろにしていた者を起こして、「こっそりと養生をしている病人だ」と言って一間に隠し入れて、夜明けて娘を見ると全身が黒木のようにまっ黒になっていた。二度と人間の姿にはなりにくいようなありさまであったが、脈に望みがあったので、かかりつけの医者を呼びにやって、一部始終を語って、こっそりと薬を与えると、だんだんに目を開け、手足を動かし、自然と、焼けて醜くなっていたところもなくなってしまった。

半年も過ぎて、身体の様子を娘に尋ねたが、全くものを言わないので、正気を失った人に会っているようなありさまであった。これは医者にも理由がわからず、「占わせてみてください」と言うので、安倍の何某という占師を呼んで、娘の八卦を見させると、「この人はどんなに薬を飲ませても、けっしてききません。そのわけは、親類中で、この人がこの世にない者として法事をなさっているからです」と事柄を見通すように言った。

今はこのように隠しておいたのではどうにもならないと、長者町に行って両親に一つ一つこのことを話すと、両親は夢の覚めたような気持になって、「仮に姿はどうなっていようとも、生命さえこの

今は隠して叶はじと、長者町に行きて、二親に段々、この事を語れば、夢の覚めたる心地して、「たとへ姿はともあれ、命さへ世にあらば、うれしさこれぞ」と、俄に仏檀の位牌をくだき、仏事をやめて、精進[一]を魚類にひき替へて、祝言[二]にいさみをなせば、たちまちその日より物をいひ出し、この程の恥を悲しみ、親達のなげきを思ひやり、万の心ざし、常にたがふ事なし。「我無事するゑ〴〵は出家になして」と、一筋におもひ定め、その後は親にも一門にも会はず。

かくて三年も過ぎて、昔に替はらず、美女となりて、つねぐ〜願ひ通り、十七の十月より、身を墨染[三]の衣になし、嵐[四]山の近なる里に、ひとつ庵をむすび、後の世を願ひける。またためしもなき、よみがへり[五]ぞかし。

お霜月の作り髭

大上戸の同行[六]四人、いつとても諸白[七]、二斗切に呑みほしける。このお寄坊主[八]、はじめの程は、雫も嫌はれしが、人々に

世にありますならば、これ以上のうれしいことはありません」と、にわかに仏壇に祀ってあった娘の位牌をこわし、仏事をやめて、食事も精進を魚類に変えて、喜び勇めば、たちまちその日から娘はものを言いだし、これまでの恥ずかしい姿を悲しく思い、また親たちの嘆きを察して、どんなことでも常に娘は気持を親と食い違わせることがなかった。「私は無事に日を送った後は、尼になって一生を送ろう」と娘は一心に思い極め、その後は親にも一門の人々にも会わなかった。

このようにして三年過ぎて、昔と同じような美しい女となって、常々、願っていたとおりに十七歳の十月から、身に墨染の衣をまとって、嵐山近くの村に一つの庵を結び、来世を願う身となった。これは他に例をきかない蘇生の物語である。

お霜月の作り髭

大酒飲みの、浄土真宗の門徒仲間四人がいて、いつも上酒二斗（約三六リットル）をあまさず飲み干していた。この門徒仲間に招かれる坊主は、最初のころはほんのわずかの酒もいやがっていたが、この人たちに勧められて、だんだんと酒

一 魚肉を食べないこと。
二 めでたいことをいう。ここでは娘が蘇生していたこと。
三 僧尼の着る黒色の衣。出家することをいう。
四 京都の西郊にあり大堰川の右岸の山。嵯峨に接し、この付近は中古から男女の遁世者が居住していた。「近なる」は「近くなる」の誤り。
五 蘇生の物語。人が死んで冥土にゆき、後にこの世に蘇生した物語が当時にも時々あった。その物語を「よみがへり」といった。
六 一向宗（浄土真宗）で信者同士をいう。
七 原料となるこうじ・酒米に、ともに精白米を用いて造った上酒。
八 在家の仏事に常に招かれる僧。
九 いろいろの小杯を捨てて。蓮如の『領解文』の冒頭の文「もろもろの雑行、雑修、自力のこころをふりすてて、…このうへの称名は、御恩報謝とよろこびまうし候」をもじったもの。
一〇 淡路島と四国の阿波国（徳島県）との間にある鳴門海峡には大鳴門・小鳴門という大小二つの渦巻がある。
一一 息子に家督を譲って本人は隠居すること。
一二 連体形は「残す」であるが、当時の慣用の語法。
一三 「取越し」は繰り上げする、の意。浄土真宗の東本願寺の門徒は、親鸞

進められて、もろ〳〵[九]の小盃をふり捨てて、阿波[一〇]の大鳴門・小鳴門と名付けて、渦まく酒をよろこぶ。いづれも子供[一一]に世をわたし、年に不足もなければ、何かおもひ残する[一二]事もなし。

楽しみは呑死と定め、折ふし十月[一三]二十八日、今宵お取越しとて、殊勝にお文[一四]をいただき、ありがたきお談合[一五]に泪を流し、跡は例の大酒になつて、前後をしらず、小歌まじりになぐさみける。その次の間に、近所の若い者ども、親仁達の騒ぎをかしがり、これを聞寝入りにして、居る中に、その夜更けてから、沙汰[一六]なしに聟入りをする男ありしが、うれし貌に、内にも居られず、ここにその時分を待ち合はすを、かの法師の見つけて、「この男奴は、今晩[一七]聟入りをすると、兼ねて聞いたり。先の娘の美しさ、昔の浄瑠利[一八]御前も及ぶまじ。にくやあいつ奴が、御曹司[一九]様に、髪月代をしすまして、呼ばぬさきから、女房自慢なる顔つきに、さらば祝うて[二〇]、釣髭[二一]」と、墨すり筆に染めて、物の見事に作りければ、年寄ども、その筆をば[二二]ひあひて、我も〳〵とつくる程に、顔ひとつ、手習[二三]のごとく書きよごしける。

が飲めるようになり、そのうち、使っていたさまざまの小杯を捨てて、阿波の大鳴門・小鳴門と名づけた大杯を使うような大酒飲みとなり、その杯に注ぐ酒がなみなみと渦を巻いているのを喜ぶようになった。この仲間は皆、息子に家業を譲って隠居し、年もとって、何一つこの世に思い残すこともない身の上であった。

この世の楽しみは酒の飲死と決めていたが、ちょうど、十月二十八日、今宵はお取越しの法事で、まじめに蓮如上人の御文を聞かせていただき、ありがたいご法話に感激の涙を流し、そのあとは例のとおりの大酒を飲んで、前後を知らぬありさまとなり、小唄をうたったりして遊んでいた。この隠居たちが酒宴をしていたその次の間では、近所の若者たちが、老人たちの騒ぎをおかしく思い、これを耳にしながら、寝入ってしまっていた。その中に、この夜更けに、世間に披露しないで婿入りをする男がおり、うれしくて自分の家にもいられず、ここで婿入りの時刻を待ち合わせているのを、かの法師が見つけて、「この男奴は、今晩婿入りをすると、かねがね聞いている。先方の娘は美しくて昔の浄瑠璃御前も及ばないほどだ。憎いやつだ、あいつ奴は、義

の忌日の法事の報恩講を、一か月繰り上げ十月二十八日に行う。この法事をお取越しという。

一四　蓮如の『領解文』のこと。東本願寺の門徒が、こう称する。浄土真宗の宗義を平明に説明した書状集で、お取越しの法事の時などに、これを誦する。

一五　法話。

一六　ひそかにすること。

一七　結婚の祝言は夜分行うのが当時の慣習。

一八　三河国矢作の宿の長者の娘で、奥州に下向していた源義経(御曹司)と契る。義経伝説に現れる女性で、浄瑠璃「十二段草子」その他に作られ、一般によく知られていた。

一九　曹司は部屋の意で、御曹司は部屋住みの公家の子息をいい、武家にも用いる。特に源氏の子息をさすことがあり、京都にはいって検非違使尉に任官するまでの源義経をいい、義経の異称ともなる。ここは、義経のように、という意と、家柄のある家の子息のように、との意を兼ねる。義経の時代には月代を剃る慣習はなかった。

二〇　「さらば祝うて…」は慣用句。

二一　中間・奴が威勢を示すために口髭の先をはね上げたもの。鍋墨で書く。

二二　奪い合って。

二三　手習は、習字の稽古。習字の稽古に用いるとじ帳の紙は真っ黒くなるまで書く。

その後[一]けはしく宿にかへり、袴[二]着るまでも、人[三]の気もつかず、その姿にて聟入りせしに、先にて興を覚まし、指添[四]へをさげて、駆け出すを、舅留めて、申すは、「この上は、おの／＼堪忍あそばしても、我等きかず。もはや[五]百年目」と、死出立ち[六]になりて行くを、両町[七]ききつけ、さま／＼に噯[八]へども、きかざれば、やう／＼四人[九]に、作[一〇]り髭をさせ、頭[一一]に引裂紙をつけ、上下[一二]を着し、日中に詫言。よい歳をして、孫子のある者共、面目なけれど、死[一三]なれぬ命なれば、是非もなき事なり。中にもすぐれてをかしきは、御坊の上髭[一四]ぞかし。



詫言（わびごと）をして回る男たち。墨でかいた作り髭と元結に細い紙を結い付けたのは狂気のさまを示す。袴・肩衣、脇差は町人の正装。

経のように髪・月代をきれいにして、婿にならぬ前から、女房自慢の顔つきをしているから、それを祝って、顔に釣髭を書いてやろう」と墨をすり筆に含ませて、ものの見事に釣髭をかいたので、その座の老人たちもその筆を奪いあって、我も我もとかの男の顔にかいたところ、顔一つが習字の稽古紙のように真っ黒にかきよごされてしまった。

　その後、男は急いで自宅に帰り、袴を着る間も人がこれに気づかず、その姿で婿入りしたので、先方で驚いてしまった。ここで男はこのいたずらを知り、怒って脇指を持って駆け出すのを、舅が止めて言うには、「このうえは皆さまが堪忍なさっても私はきかない。もはや最後だ」と、死装束で行こうとするのを、両方の町の者たちが聞きつけて、さまざまになだめてみたが、舅は聞き入れなかった。やっと、いたずらをした四人に作り髭をかかせ、頭に引裂き紙を付け、狂人の様子をさせ、裃を着けて、真っ昼間に詫言をさせた。よい年をして孫子まである者たちで恥ずかしいが、人間は容易に生命を捨てる事ができないからいたしかたがない。中にもひときわおかしかったのは坊主の上髭であった。

一 あわただしく。
二 原本「袴きる」。町人の礼装には袴・肩衣を着する。これを俗に裃と称する。
三 夜分であり、屋内も暗いので、男の顔が墨で黒くなっているのがわからなかったのである。 四 脇指。町人の礼装には脇指を帯びる。
五 のっぴきならぬ時にいう語。後にひけぬ。
六 相手を斬り殺し、自分もその場で死ぬため。 七 いたずらをされた側の居住している町と、した者たちの居住している町との両町の者。町の代表者は年寄。
八 条件を出して和解させるようにすること。異なった町の町人間の紛争は、原則として、まずその両町の者が仲裁にはいって和解させるのが江戸時代の規則。これで和解できなければ町奉行所に提訴する。
九 同行の四人。 一〇 墨で書いた髭。
一一 狂人のさまを示す。男にしたいたずらを四人の者の狂気行為として和解させたのである。狂人は江戸時代でも処罰しない。 一二 →注二。
一三 「死なれぬ命」は慣用句。冒頭の「いづれも子供に…何かおもひ残す事もなし」とある句に呼応。老人たちへの皮肉の言葉。
一四 鼻の下の髭。頰にかけて大きく描く。僧侶には珍妙な風俗。
❖この章の原拠は狂言「六人僧」(後藤興善説)。

紫女

筑前の国、[一五]袖の湊といふ所は、むかし読みぬる本歌に替はり、今は人家となつて、[一六]肴棚見え渡りける。

磯くさき風をも嫌ひ、[一七]常精進に身をかため、仏の道のありがたき事におもひ入れ、[一八]三十歳まで妻をも持たず、世間むきは[一九]武道を立て、[二〇]内証は出家ごころに、[二一]不断座敷をはなれ、[二二]松柏の年ふりて、深山のごとくなる奥に、一間四面の閑居をこしらへ、[二三]定家机にかかり、[二四]二十一代集を、明暮写しけるに、折ふしは冬の初め、[二五]時雨の亭の、いにしへを思ふに、物の淋しき[二六]突揚窓より、やさしき声をして、「伊織さま」と名をよぶ。

女の来る所にあらねば、不思議ながら、有様をみれば、いまだ[二七]脇明けしきぬの色、紫を揃へて、[二八]さばき髪を真中にて、[二九]金紙に引き結び、この美しき事、何ともたとへがたし。これを見るに、年月の心ざしを忘れ、只夢のやうになつて、うつ

紫女

筑前国袖の湊という所は、昔、詠んだ歌とは様子が変って、今は人家が建ち並んで、魚屋の店がずっと続いている。

そこに、磯の魚くさい風をも嫌い、常に精進に身をかたく保ち、仏道の尊い事に心を向け、三十歳まで妻ももたず、世間向きには武士としてふるまい、内は遁世の心をもつ男があった。日常の居間を離れ、松・柏の年経て深山のように茂っている庭の奥に、一間（約一・八メートル）四方の静かな居処を造り、定家机によりかかり、二十一代集を昼夜写していたが、時は冬の初め、時雨の亭の、昔の定家のありさまを思っている時、もの淋しい突上げ窓の外から、やさしい声で、「伊織さま」と名を呼ぶ者がいる。

女の来る所ではないので、不思議に思いながら、その様子を見ると、まだ脇明けの着物の色は、紫色を着重ねて、とき散らした髪を真ん中で金紙で引き結び、この美しいことは、ほかにたとえようもない。これを見ると、この年月の遁世の志を忘れ、ただ夢のようにぼんやりとな

一五 福岡市の海岸。「博多ノ中ニ在リ、昔、此ノ処ニ入海有リ、唐船出入ス」（和漢三才図会八十）とあり、外国船も入港していた。「松浦潟袖の湊に漕ぎ寄せむもろこし船の泊りもとめば」（夫木集）。歌枕でもあり、辺鄙な所でもあった。「日暮るれば袖の湊を行く蛍さわぐ思ひの程や見ゆらん」（夫木集）。
一六 魚商の店。 一七 日常、身を清く保ち、魚鳥などの肉食をせぬこと。
一八 「三十ニシテ室有リ、始メテ男事ヲ理ス」（礼記・内則）。中国では三十歳で妻をめとる作法に基づく記述。
一九 武士の習慣。主人公は市中に居住しているから浪人であって、内に遁世を願う心がある。この内心の弱みに妖狐がつけ込んで惑わしたのである。
二〇 遁世を願う心。 二一 常の居間。
二二 松と柏。柏は檜・このてがしわの類の総称。両樹とも常緑樹で庭木に用いる。 二三 歌人の用いる文机。「橘や定家机の有所　杉風」。
二四 『古今集』から『新続古今集』まで二十一の勅撰集をいう。歌道を学ぶための基本の歌集。 二五 藤原定家の亭の名で、その所在については諸説がある。京都西郊の小倉山にある常寂光寺の楼門の竹林もその跡という（雍州府志五）。 二六 窓蓋を下から突き上げて開ける窓。 二七 脇をあけた着物。十九歳までの未婚女性の着物。
二八 髪を結わないでとき散らした髪。
二九 金元結。

つをぬかしけるに、この女袖より、内裏羽子板[一]を取り出して、独り羽根をつきしに、「それは嫁突か[二]」と申せば、「男もたぬ身を、嫁とは人の名を立て給ふ」と、切戸[三]おし明けて、はしり入り、「誰でもさはつたら、つめる程に」と、しどけなき寝姿、自然と後結び[四]の帯解けて、紅の二[五]のもの、ほのかに見え、細目になつて、「枕といふ物ほしや。それがなくば、情しる人の膝が借りたいまで[六]。」あたりに見る人はなし。今鳴る鐘は九つ[七]なれば、夜もふかし」といふ。いやといはれぬ首尾[八]、俄に身をもだえて、いかなる御かたと、尋ねもせず。若盛り

一 内裏雛のような一対の男女、さらには公卿・女官などが彩色で描かれた羽子板。
二 数をかぞえることを「よむ」という。羽根突きの「よみ突き」の転じた語か。または、「ひとごに、ふたご、みわたし、よめご」と数えて突くので、これによっていうか(嬉遊笑覧)。
三 くぐり戸。非常のための戸口。
四 未婚の女性は帯の結び目を後ろにする。
五 腰巻。布の二幅を縫い合わせて作るのでこの名がある。八歳から着する。
六 文の末尾につけて感動の意を示す。
七 午前零時頃。
八 拒否できない成行き。


出現した紫女の妖怪を祈り伏せようとする僧のさま。袈裟を着しているのが和尚。

って、魂を奪われてしまっていたが、この女は袖の内から内裏羽子板を取り出して、一人で羽根を突いているので、「それは嫁突きというものか」と聞くと、「夫をもっていない身を、嫁といわれるとは、人に浮名をお立てになります」と切戸を押し開けて座敷に走り入り、「誰でも触ったなら、抓るからに」と乱れた姿で横になった。いつとなく後ろ結びにしていた帯も解けて、紅色の腰巻がちらちらと見え、細目になって、「枕というものが欲しいよ。それがなければ、情けを知る人の膝がお借りしたいよ。あたりに見る人はなし。今鳴っている鐘は九つですから、夜も更けてます」と言う。男もこばむ事ができぬ成行きになってしまって、にわかに身体が燃えてきて、いかなる御方でございましょうかと、尋ねもしないで、契りを交わした。血気盛りの思い出に、情を交わして、早くも曙となり、女との別れを惜しんで、「さようなら」と女が出て行くのを、幻のように感じ、心に悲しく、つぎの夜になるのを待ちかね、他人にはこのことは話さず、夜夜契りを交わして、まだ二十日も経たないのに、自分では気づかぬうちに、しだいに痩せてくるのを、かねて懇意にして

のおもひ出、はや曙の別れを惜しみ、「さらば」と出て行くを、まぼろしのごとく、かなしく、又の夜になる事を待ち兼ね、人には語らず、契りを籠めて、いまだ二十日もたたぬに、我は覚えず、次第に痩するを、念比なる薬師のとがめて、脈を見るに、おもふにたがはず、[九]陰虚火動の気色に極まり、「さりとは[一〇]頼みすくなき身の上なり。日頃はたしなみ深く見えたまふが、さては[一一]隠し女のあるか」と、尋ねければ、「[一二]さやう〳〵、さやうの事は、なき」と申されける。「我にしらせ給はぬは[一三]不覚なり。命の程も迫るなり。つね〴〵別して語り、そのままに見捨てて、殺しけると、[一四]世の取沙汰も迷惑なり。今より御出入申すまじき」と、立ち行くを留め、「何をか隠し申すべし」と、段々はじめを咄せば、[一五]道庵しばし考へ、「これぞ世に伝へし、紫女といふ者なるべし。これにおもひつかるるこそ、因果なれ。人の血を吸ひ、一命を取りし事ためしあり。兎角はこの女を切りたまへ。さもなくては、やむ事なし。又養生のたよりもなし」と、すすめければ、伊織おどろき、[一六]おろかなる心を取りなほし、「いかにも〳〵、しる

いた医者が見とがめて、脈を見ると、推察どおりに腎虚の様子と診断し、「さてさて、生命の長くない身体です。日頃は身を深く慎んでいらっしゃるようでしたが、さては隠し女がいるのですか」と尋ねると、「そんな、そんな、そんなことはありません」と言う。「私に打ち明けてくれないのは愚かなことです。あなたの命の終りも近づいています。常々格別に語り合いながら、このままに見捨てて、殺してしまったと、世間に評判されるのも私には迷惑です。今から後はここに出入りはいたしますまい」と立って行くのを止めて、「何を隠しましょう」と一部始終を話すと、医者の道庵はしばらく考えて言うには、「これが世に言い伝えられている紫女という者でしょう。これに思いをかけられたということは悪運です。紫女は人の血を吸い、一命を取った例もあります。とにかくこの女を斬ってしまいなさい。そうしなければ、女が通って来ることを止めることはできません。また、身体を養生させる方法もほかにありません」と勧めると、伊織は驚き、女に惑わされた心を取り直し、「なるほど、なるほど、知るつてもなかった美女が通って来るというのは考えてみると恐ろし

九　腎虚のこと。過度の性的消耗により身体が衰弱する病気。
一〇　生命が先行き長くないこと。
一一　世間に披露しないで置いている妻。
一二　内心を隠しての返答であるので、つかえた表現になっている。
一三　不覚悟の略。愚か。
一四　世間の評判。
一五　相手の医者の名。
一六　化性の女に惑わされた心を本心にかえして。

一　武士の気性が現れたことを示す。
二　福岡県糟屋郡新宮町にある立花山。
三　仏道に志す者。僧侶のみならず在家の修行者をもいう。四　危い生命を助かることができた。文が中絶しているのは浄瑠璃で段の末尾が中絶して次の段に移るに用いる手法の型をとったもの。
❖本章の原拠は、『御伽婢子』巻三に

べもなき、美女の通ふはおそろし。[一]是非今宵、打ち止めん」と、油断なく待つ所へ、袖を顔に押し当て、「さても〳〵、この程の御情に引きかへられ、我を切りたまはんとの御心入れ、うらめしや」と、近寄るを、抜打ちにたたみかくれば、そのまま消えかかる、面影をしたひ行くに、[二]橘山のはるか、木深き洞穴に入りける。

その後も心を残し、あさましき形見えければ、国中の[三]道心者あつめて、弔ひけるに、影消えて伊織も、[四]あやふき命を。

行末の宝舟

[五]人間程、物のあぶなき事を、かまはぬものなし。

信濃の国諏訪の湖に、[六]毎年氷の橋かかつて、狐の渡り初めて、その跡は人馬ともに、自由に通ひをする事ぞかし。春また、狐の渡りかへると、そのまま氷とけて、往来を止めけるに、この里の[七]あばれ者、根引の勘内といふ馬方、[八]廻れば遠しと、人の留むるにもかまはず、我が心ひとつに、渡りけるに、

いことです。ぜひ、今夜は打ち止めましょう」と油断なく待つところへ、袖を顔に押し当てて、「さてもさても、先頃までのご愛情に変られて、私をお斬りになろうというお気持が恨めしゅうぞんじます」と近寄るのを、抜打ちにたたみかけて斬りつけると、そのまま逃げかかる、そのあとを追って行くと、橘山の奥の、樹木が深く茂った洞穴の中にはいってしまった。

その後も紫女は執心を残し、化性の姿を現したので、国中の仏道修行者を集めて法事をしたところ、再び現れなくなり、伊織も危うい生命を助かった。

行末の宝舟

人間ほど、危険をかまわぬものはない。信濃国、諏訪の湖では、毎年氷の橋がかかって、狐の渡り初めということがあって、そのあとは人馬ともに自由に通行をするのである。春はまた、狐が渡り帰ると、すぐに氷が溶けて氷上の往来を止めるのに、この土地の乱暴者の根引の勘内という馬方が、回れば遠いと、人々が止めるのも聞き入れず、自分の判断だけで大丈夫だと考え、氷の上を渡っていた

載る、中国の『剪灯新話』の「牡丹灯記」を翻案した「牡丹灯籠」。梗概をつぎに掲げる。京都五条に住む荻原新之丞は最近妻を失った。七月十五日、盂蘭盆の夜、二十歳ばかりの美女が女童に牡丹花の灯籠を持たせて通るのを見て、その女を誘って契りを結ぶ。毎夜女は通って来るが、これを隣家の翁が壁のすき間から覗いて見ると女にはあらず白骨であった。このことを翁に告げられた新之丞は、女が幽霊であることを知り、東寺の卿公という修験者から魔除けの札をもらい門に貼ったところそれから女は来なくなった。五十日ほど経て、女の墓所の万寿寺を通り、門内を見るに、女がたちまち出現して新之丞を墓に引き込み殺してしまった。その後二人の幽霊が出現するので新之丞の一族の者が弔いの納経をすると、二度と現れぬようになった。富士昭雄の説では『御伽婢子』巻二「狐の妖怪」に直接の想を得たとする。また、『情妖録』上「砧杵精」の記述には語句の類似があり、原拠を推考する手がかりとなる。

五 本章のテーマで、勘内と竜宮へ行った六人についていった言葉。 六 「毎年小寒ノ後堅ク凍リ、海ヲ塞グ、神獣有リ、始メテ氷ノ上ヲ走ル、人、足跡ヲ見テ往来スル事、平陸ノ如シ、立春ノ後、又、神獣行ク、而シテ後、氷解ク、謂フ所ノ神獣ハ乃チ狐也、狐ハ本ト氷ヲ知ル」(和漢三才図会六

真中過ぎ程になりて、俄に風暖かに吹きて、跡先より氷消えて、浪の下にぞ沈みける。この事隠れもなく、哀れと申し果てぬ。

同じ年の[九]七月七日の暮に、星を祭るとて、梶の葉に歌を書きて、水海に流しあそぶ時、沖のかたより、ひかり輝く舟に、見なれぬ人あまた、取り乗りける。其の中に勘内、高き[一〇]玉座に居て、その[一一]ゆゆしさ、むかしに引き替へ、皆々見違へける。舟より心静かにあがり、前に使はれし親方のもとに行けば、いづれもおどろき、様子聞くに、「それがし只今は、[一二]竜の中都に流れ行きて、大王の[一三]買物使ひになりて、金銀我がままにつかまつる」と[一四]金銭二貫くれける。「さて此処元より、米もやすし、鳥・肴は手どらへにする、女房はより取り、[一五]旅芝居の若衆もくる、はやり歌の、[一六]やろか信濃の雪国を、うたひあかして、さむいとも、ひだるいともしらず、正月も盆も、ここと少しも違うた事なし。[一七]十四日から灯籠も出して、ここと替はつた事は、[一八]借銭乞ひといふ者をしらぬ」と申す。「この七月は、我はじめての盆なれば、ひとしほ[一九]馳走のために、

ところ、湖の真ん中過ぎぐらいになって、急に風が暖かく吹いて、あとさきから氷が溶けてゆき、溺れて波の下に沈んでしまった。このことを知らぬ人はなく、かわいそうだといって、それきりになった。

その年の七月七日の日暮れに、星を祀るために、梶の葉に歌を書いて、湖に流して遊んでいる時、沖の方から光り輝く船が現れ、船には見なれぬ人々が多数乗っていた。その中に、勘内が美しい高座にいて、その立派さは、昔に変っていたので、皆々見違えてしまった。勘内は船から静々と陸に上がり、以前使われていた親方の所に行ったところ、皆驚いてしまって、様子を聞くと、「私はただ今は、竜の首都に行きついて、大王の買物係となって、金銀を自分の思うままに使っています」と金銭二貫を親方に与えた。「ところで、竜の都は、ここよりも米も値段が安いし、鳥や魚も手でとらえることができるほど豊富です。女はより取り見取りです。旅芝居の若衆もやって来ます。はやり歌の、やろか信濃の雪国を、一晩中うたい明かして、寒いということも、腹がへるということも知りません。正月も盆も、ここと少しも違ったことは

十八)。七 乱暴なことを常にする者。馬方は無法者の多い職業。「声高にして何事にも先づ片肌ぬぐは彼等が風俗也」(人倫訓蒙図彙三)。八 湖の岸を回ると遠い。九 七夕の節句の日で、この日は牽牛星・織女星を祀り、梶の葉に歌や心に思うことを書き、これを水に流す風習がある。一〇 玉は美称の接頭語。美しく飾った座席。一一 とりわけ立派であること。一二 竜王の都。竜宮。竜宮は海中にあると思われていたが、また、琵琶湖など湖中にもあると思われて伝説が作られている。一三 物品の購入役。一四 金で作った銭。銀で作ったものを銀銭という。江戸時代には「諸大名家は万一の際の準備として銀座に托して自家使用の銀銭金銭を鋳造し、幕府もまた通用銭にあらざる故をもつて、その鋳造を禁止しなかつた」(西鶴語彙考証　真山青果)。一五 地方巡業の歌舞伎の若衆方。若衆方は未成年の男子の役をする主役またはそれに準ずる役方。売色をすることもある。一六 当時流行した「さんがらが節」の一節。「荒い風にも当てまいさまを、やろか信濃の雪国へ、さあささんがらが」(松の落葉四)。一七 七月十五日の盂蘭盆の前日に盆灯籠を掛け、精霊を祀る。この日を盆前といい、一年の上半期の売買決済日。一八 借金取り。十四日は売掛金の支払いをうける最終日。一九 供応。料理以外のもてなしにもいう。

一 美しい娘。
二 大勢が一団となって踊る盆踊り。
三 海産の巻貝の一種でたにしより大きい食用貝。大きいものは長さ九センチほどになる。子供の遊び、ばいごまに用いる。
四 淫奔。好色。
五 休暇。
六 →九一ページ注一四。

国中の色よき娘、十四より二十五まで、いまだ男を持たぬをすぐりて、大踊のこしらへ、それは〳〵またあるまじき事なり。その用意の、買物にまゐつた」と申す。めしつれし者ども、何とやら礒くさく、かしら魚の尾なるもあり、螺のやうなるもあり。万の買物をもたせ出行く時、「あの国の女の、いたづらを皆々、見せましたい事ぢや」といふ。「それはなる事か」といへば、「それがしのままなり。十日ばかりの隙入りにして御越しあれ。銀銭を舟に一ぱい積みてまゐらせん」と申せば、「我はつね〳〵のよしみ」「人よりは念比し



ありません。十四日から盆灯籠を出します。ここと違ったことは借金取りという者がいないことです」と言う。「この七月は、私にとっては初めての盆ですから、一段と立派な馳走をするために、国じゅうの美しい娘の十四歳から二十五歳までの、未婚のをよりすぐって大踊りの組をこしらえます。それはそれは二度とこのようなことはありません。その用意の買物にやって来ました」と言う。召し連れてきた者たちも、どことなく磯くさいにおいがし、頭が魚の尾のような者もいたり、巻貝のような者もいたりである。いろいろの買物を彼らに持たせて出て行く時に、「あの国の女の淫奔を皆に見せてあげたい」と言う。「それはできることですか」と聞くと、勘内は、「私の思うままになります。十日ほど休みにしておいでなさい。白銀の銭を船に一杯積んで差し上げましょう」と言うと、「わしはいつもお前と仲がよかった」「わしはほかの人よりもお前と親しい仲だった」と勘内と一緒に行くことを皆が争った。親方をはじめとして、その中から七人を同伴することになった。とり残された人々はこれを悲しんだが、同行者は相手にしなかった。

た」と、行く事をあらそひける。親方をはじめ、その中にて、七人伴ひける。取り残されし人、これをなげきしに、耳にも聞きいれず。

くだんの玉船[七]にのりざまに、一人分別して、「命に替へる程の用のあり」とてゆかず。「さらば〳〵頓て」[八]といふ間もなく、舟は浪間に沈み、それより十年あまりも過ぎゆけど、たよりもなく、踊りを見にと、歌[九]にばかり歌うて果てぬ。

この六人の後家のなげき、又一人ゆかぬ人は、今に命のながく、目安書[一〇]して世を渡りけるとなり。



竜宮からの買物使い、勘内が帰る時のさま。左より、蓮の葉・みそはぎの枝を持つ魚男、盆提灯・踊り団扇を持つ螺男、蓮の花をもつ魚男。いずれも盂蘭盆用品。

乗って来た美しい船に乗る際になって、一人の男が急に考えを変えて、「生命にかかわるような用事があった」と言って行くのをとりやめた。「さようなら、さようなら、すぐ帰って来ますから」と言う間もなく、船は波間に沈んで、それから十年余りも経ったが、何の音沙汰もなく、踊りを見に、という歌にだけうたわれて、このことは忘れられてしまった。

この六人の男の後家たちの嘆きは深かった。また一人の行かなかった人は、今なお長生きをしていて、公用文書の書記役をして暮していることである。

七 玉は美称の接頭語。美しい船。

❖勘内の親方・友人たちは勘内と同様の乱暴者・無法者で、色と欲とに身の危険を省みない。分別した男は、後に目安書きして渡世している者であるから、文字を知る知識人と設定されている。彼は危険なことには、最後まで同調しなかったのである。

八 左様ならば、やがて帰って来ましょう。別れの挨拶。

九 諺。噂ばかり人に聞かせて、現実に行われないこと。

一〇 事件などを箇条書きにした文書を書くこと。村方の公用文書や民事訴訟の訴状などを書くこと。

❖竜宮行きの民話は近世にも事実譚として通行していた（『新著聞集』巻九など）。この章はこれをふまえている。

八畳敷の蓮の葉

五月雨のふりつづき、[一]吉野川も[二]渡り絶えて、常さへ山家は、物の淋しやと、むかし[三]西行の住みたまひし、苔清水の跡をむすび、殊勝なる[四]道心者のましますが、所の人ここに集まりて、[五]煎じ茶に日を暮らしぬるに、雨しきりに、俄に山も見えぬ折ふし、板縁の片隅に、古き[六]茶碓のありしが、その[七]しん木の穴より、長七寸ばかりの、細蛇の一筋出て、間もなく[八]花柚の枝に、飛び移りて、のぼると見えしが、雲にかくれて、行方しらず。麓の里より、人大勢かけ付けて、「只今この庭から、十丈あまりの[九]竜が天上した」と申す。この声におどろき、外に出て見るに、門前に大木の、[一〇]榎の木のありしが、[一一]一の枝引き裂け、その下掘れて、池のごとくなりぬ。「さても〳〵大きなる事や」と、人々のさわぐを、法師うち笑つて、「おの〳〵広き世界を見ぬゆゑなり。[一二]我筑前にありし時、差荷ひの大蕪菜あり。又[一三]雲州の松江川に、横幅一尺二

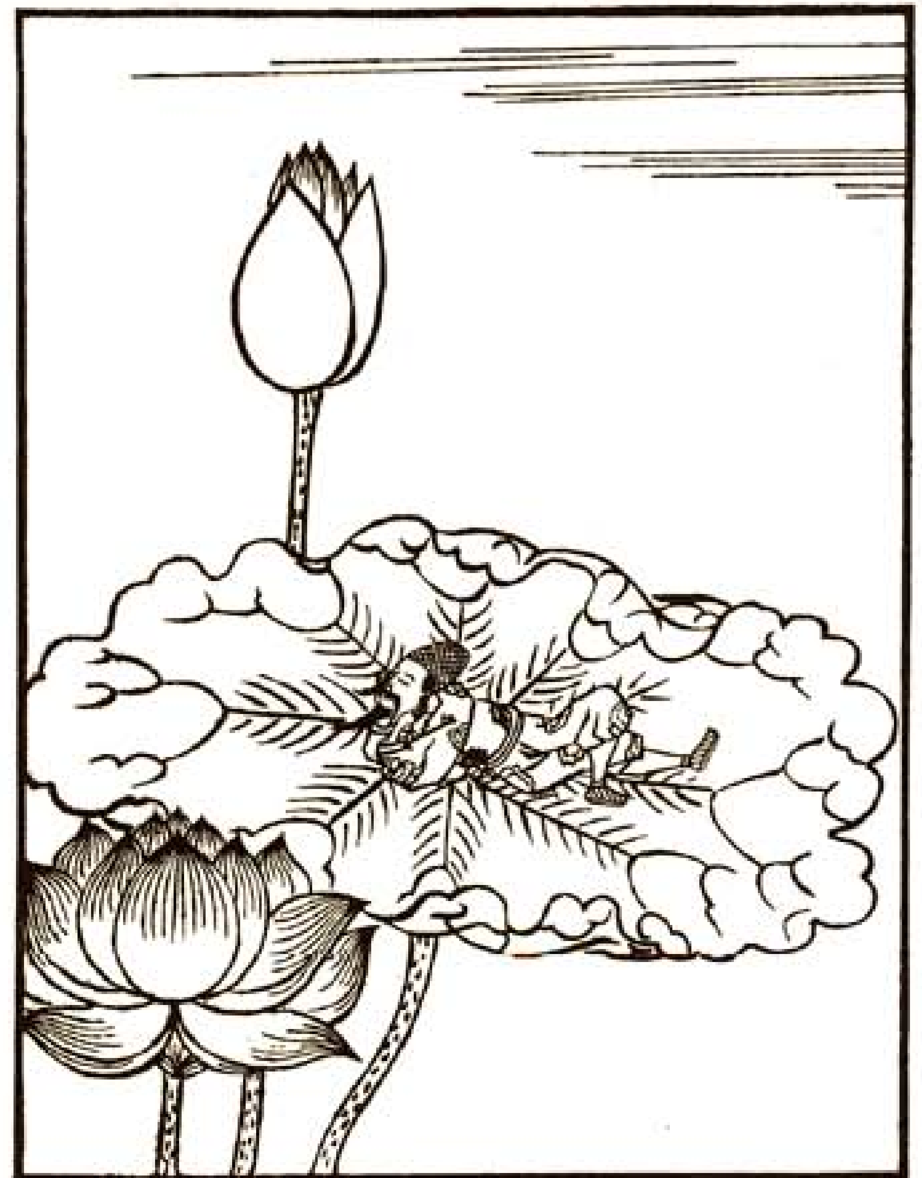
八畳敷の蓮の葉

五月雨が毎日降り続いて、吉野川も水量を増し、渡し船の往来も絶えて、常日頃でさえも吉野の山の住いはもの淋しいのに、このほどはなおさらであると、昔、西行が住まわれていた、苔清水の庵の跡に住居を構えた、立派な仏道修行者がいらっしゃったが、この庵に、土地の人々が集まって煎じ茶を飲んで雑談をして雨中の日々を送っていたところ、雨がひときわ激しく降り出し、急に山も見えぬようになった時、庵の板縁の片隅に古い茶碓が置いてあったが、その心木の小さい穴から長さ七寸（約二一センチ）ばかりの細い蛇が一匹出てきて、まもなく柚子の枝に飛び移って木を登ると見えたが、さらに昇って行って遂に雲に隠れて行方知れずとなった。麓の村から、人々が大勢駆けつけて来て、「たった今、この庭から十丈（約三〇メートル）余りの竜が昇天しました」と言う。この言葉に驚き、内にいた人々が出て見ると、門前にあった榎の大木が、いちばん下の大枝を引き裂かれ、その下が掘れて池のようになっていた。

「さてさて、大きなことだ」と人々が驚

一 奈良県吉野郡の大台が原を源として西北方に流れる川。下流が紀の川。
二 六田の渡し場。北方から吉野にはいるには土田から東行して吉野川を六田の渡しで越えて六田にはいり、吉野山の一の坂から上ってゆくのが本道。
三 吉野山の奥深い所にある。西行が吉野山に住んだことは『山家集』の歌により知られる。「西行の庵室、四方正面堂(吉野の奥の院)より、西北に当る堂の後より道あり、山の岨を二町程行きて下る、其の間小川あり、小滝あり、苔の清水と云ふ、庵室に西行が絵像あり、西行此の所にての詠歌多し、此の所に三年住みけるとなん、人遠く閑寂なる所也」(大和廻　貝原益軒)。
四 仏道に志す人。後に法師とあるから、ここは僧侶。
五 飲茶の一種で、葉茶を湯で煎じる。一般に飲む茶。
六 抹茶を作る石臼。
七 臼の下石の真ん中にある、心の木をさし込む穴。上石の上面からこの穴に茶の葉を入れて臼でひき、抹茶にする。
八 花の咲いている柚。柚は四月頃小さく白い花が咲く。柚の実をも花柚といい、柚味噌などを作る。柚味噌は僧家の美味な食品。
九 竜と蛇とはもとは一類で、春夏に昇天する。琵琶湖北岸で、一尺(約三〇センチ)余りの蛇が水上と蘆の梢とを往復しているうちに一丈(約三メートル)ばかりになり、黒雲起こり夕立がして、竜となり昇天したと、『和漢三

才図会』巻四十五「竜蛇部」に見える。今日の竜巻をいう。
一〇 ニレ科の樹木で大木は高さ二〇㍍近くになる。実は食用になる。
一一 幹の最初に分かれた大枝。
一二 →一九㌻注二。
一三 出雲(島根県東部)。松江川は松江市を流れる大橋川をいうか。鮒は出雲名産の一つ。
一四 滋賀県大津市の西部にある山。歌枕。
一五 鹿児島県に属し、佐多岬の西南方にある小島。台明竹を産する。
一六 「漢竹ハ雲南(中国)ノ永昌ニ出ヅ、桶斛トナスベシ」(和漢三才図会八十五)。
一七 和歌山県の南部。
一八 灯油を貯蔵する陶器の壺。人の頭ぐらいの大きさ。
一九 大蟻には身長一寸(約三㌢)余のものがある(和漢三才図会五十二)。
二〇 北海道は昆布の産地。 二一 長崎県に属する九州北方の二大島。
二二 京都の西郊の地名。この地にある、臨済宗の大寺天竜寺をいう。
二三 策彦周良(一五〇一〜七九)。京都の人で天竜寺の僧。天文八年(一五三九)、天文十六年の二度、明国にはいった。織田信長・武田信玄などの武将の帰依者があった。 二四 織田信長。
二五 天竺(インド)の摩伽陀国の王舎城の東北四〇㌖の所にある釈迦説法の地。摩伽陀国は八、九月より三、四月まで酷暑。毎日三、四度冷水を浴びる(和漢三才図会六十四)。



霊鷲山の池の大蓮の葉の上では人が昼寝できるという、策彦和尚の話を描く。

寸づつの鮒あり。近江の長柄山[14]より、九間ある山の芋、掘り出せし事もあり。竹が島[15]の竹は、そのまま手桶[16]に切りぬ。熊野[17]に油壺[18]を引く蟻[19]あり。松前[20]に一里半続きたる昆布あり。対馬[21]の島山に、髭一丈のばしたる老人あり。遠国を見ねば合点のゆかぬ物ぞかし。むかし嵯峨[22]の策彦和尚[23]の、入唐あそばして後、信長公[24]の御前にての物語に、『霊鷲山[25]の、御池の蓮葉は、およそ一枚が二間四方ほど開きて、この薫る風、心よく、この葉の上に昼寝して涼む人ある』と、語りたまへば、信長、笑はせ給へば、和尚御次の間に立ちたまひ、泪を流し、衣の

き騒ぐのを法師が笑って語った。「皆々は、このような山の中にいて広い世界を見ないから、この程度のことを大きいといって驚くのです。私が筑前にいた時には、二人で差荷いせねば運べないほどの大蕪がありました。また、出雲の松江川には横幅が一尺二寸ある鮒がいます。近江の長柄山からは長さが九間（約一六メートル）もある山の芋を掘り出したこともあります。竹が島の竹は切ってそのままで手桶になります。熊野には油壺を引っ張るほどの大蟻がいます。松前には一里半続いた昆布があります。対馬の島には髭を一丈のばした老人がいます。遠い国を見なければこれらのことはとても承知できないでしょう。昔、嵯峨天竜寺の策彦和尚が入唐なされてご帰国の後、織田信長公の御前での物語に、『霊鷲山の御池の蓮の葉はおよそ一枚が二間四方ほどの広さがあり、これを吹く夏の風は快く、この葉の上に乗って昼寝して涼む人があります』とお話ししますと、信長公がお笑いになったので、和尚がお次の間に退かれて、涙を流し衣の袖をたいそう濡らされたのを見て、信長公の家来が、『ただ今、殿様がお笑いなさったのを口惜しくお思いになったのですか』と尋ね

一 和尚が信長の壮大な気宇に感激したのである。信長の考えが一般の人とは相違していること、西鶴は『武家義理物語』巻二の三に記している。
❖この話の類型は、昔話の巧智譚のうちの「業(ぎょう)くらべ」話の型で、話をしてゆくうちにだんだん大きな話になってゆく型と、これに「青い鳥」型(青い鳥を捜しに行って求められず、帰ってみるとわが家に青い鳥がいた)が複合したもの。
二 武家で主人が外出する時に、その槍を持って随行する奴(やっこ)。
三 乗り馬を持つのは三百石以上の上級武士。
四 使者役の侍。使番ともいう。使番は武家の職名で、戦時は指令の伝達や戦功の監査、平時は諸役人の動静視察や主君の使い役をつとめる。「使者役は公界(くがい)に出す第一の面(おもて)道具なれば、其の器量を選び、発明にして弁舌あざやかにて礼式を知り、文字を知りて、片言をいはざるを上とすべし、奏者又同じ」(人倫訓蒙図彙一)。武家では重要役職。
五 容姿。「又、俗に姿を風俗と云」(俚言集覧)。
六 町人の武士観。武士は明日の身の上さえ知れない身分の者であると町人は見ていた。
❖主人公の人物設定が器量ある上級武士で難の何一つない人物でありながら、前世の悪因により悪果をうけ

袖(そで)をしぼりたまふを見て、『只今(ただいま)、殿の御笑ひあそばしけるを、口惜しくおぼしめされけるか』と、尋ね給へば、和尚(わじやう)のたまひしは、『信長公天下(のぶながこうてんか)を御しりあそばす程(ほど)の御心入れには、[一]ちひさき事の思はれ、泪(なみだ)を洒(こぼ)す』と、のたまひけるとぞ」。

因果(いんぐわ)の抜け穴

[二]鑓持(やりもち)・[三]乗馬(のりむま)をひきつれて、家中(かちゆう)にまたなき[四]使者男(ししやをとこ)、大河判右衛門(おほかははんゑもん)が[五]風俗、世に見ならへといはれしに、[六]武士の身程(ほど)定めがたき物はなし。

きのふ古里(ふるさと)、豊後(ぶんご)の国より、[七]文遣(ふみつか)はしけるを、[八]女筆(によひつ)こころもとなく、明けて見るに、兄嫁(あによめ)が書き越しける。「判兵衛(はんべゑ)殿事、この十七日の夜(よ)、妙福寺(めうふくじ)の棋会(ごくわい)に、すこしの助言(じよごん)より、[九]いひあがりて、寺田弥平次(てらだやへいじ)打つて、はや所を立退(たちの)き申し候。子もなき人の御事なれば、おの〳〵さまならで、誰(たれ)か外(ほか)には、たよりもなし。女の身の是非もなき仕合(しあは)せ」と、哀れに申し

られますと、和尚(おしょう)がおっしゃったことには、『信長公が天下をご統治あそばされるほどの御志と比べると、八畳敷の蓮の葉などは小さいものだということがわかって、感激して涙を流したのです』とおっしゃった、ということです」。

因果の抜け穴

御用の外出には鑓持(やりもち)・乗り馬を引き連れて、家中に二人といないほどの才能ある使者役、大河判右衛門(おおかわはんえもん)の行儀・風体を世の人々は見習いなさい、と言われたほどの立派さであったが、武士の身ほど不安定なものはない。

昨日、故郷の豊後国(ぶんごのくに)から書状が到着したところ、表書きが女の筆跡で書かれていたのを不安に思い開封して見ると、兄嫁が書いてよこしたものであった。書状には、「夫、判兵衛殿の事、この十七日の夜、妙福寺の碁会(ごかい)に、少しの助言から興奮して、寺田弥平次(てらだやへいじ)に斬(き)られ、相手ははやここを立ち去りました。夫は子のない人でございますから、あなた様方のほかには誰も仇討(あだう)ちのお願いをする人はございません。私は女の身ですので、仇討ちをするわけにはまいりません」と哀れ

遣はしける。

思案に及ばず、俄に御暇[10]申し請け、一子の判八ばかり連れて、武州[11]を立ち出る。「この弥平次は、殿[12]より御取立ての者なれば、深く隠して中々手にはまはるまじ。つね/\伝へ聞きしは、但馬の国に、里人に親類ありとや。定めてこれへのくべし。我々もこの所へ行きて、心掛くべし」と、急ぎ但馬に下りて、忍び/\にたづねけるに、案のごとく、百姓[13]の門作りに、二重垣をして、牢人あまたかくまへ[14]、用心の犬まで何疋か、夜は油断なく、拍子木[15]を鳴らし、間もなう目を覚ましける。

ある夜雨風はげしく、しかも闇なれば、焼食[16]こしらへ、先づ犬どもに近寄り、横手の塀を切り抜き、また内なる壁に道つけて、広庭[17]にしのび入りしが、弥平次聞き付け、「何者か」といふ。親子ともに板の切をくはへ、魚の骨のごとくにもてなし、犬のまねいたせしに、これを聞きて、「犬には頭が高い。皆起きあへ」と呼ばはる程に、兼ねての若者どもおめき[18]渡れど、まだ気遣ひをして、弥平次は出ず。けはしくなれば[19]、

に書き送ってきた。

思案する必要もないことで、急に主君にお暇を願い出て、一子判八だけを連れて武蔵国江戸を出立した。「この弥平次という男は、殿が新しくお取り立てになった者であるから、同家ではその居処を深く隠して、なかなかこちらがつかまえることはできないだろう。常日頃伝え聞いたところによると、但馬国に村人の親類があるという話だ。きっとそこへ身を隠しているに違いあるまい。我々もそこへ行って捜してみよう」と、急いで但馬国に下って、ひそかに尋ねてみると、推測どおりに、百姓の家に門造りの屋根で、二重垣をして、浪人を多数抱え、番犬まで何匹か飼い、夜は油断なく、拍子木を打って見回りをし、変事があるとすぐ目を覚ますような警戒をしていた。

ある夜、雨風が激しく吹き降りし、しかも闇の夜であったので、焼き握り飯をこしらえ、まず犬どもに近寄り、これを与えて吠えさせぬようにして、横手の塀を切り抜き、また、内の壁にも穴を開けて通路を作り、広土間にまで忍び入ったが、弥平次が物音を聞きつけ、「何者か」と言う。親子ともに板切れを口にくわえて、魚の骨のように見せて犬のまねをし

る仏教的因果観によりこの篇は構成されている。

七 書状がつかわされたのを。

八 女性の筆跡。

九 気が高ぶって強く言い張る。

❖仇討ちはその子がするのが原則。子がいない場合には弟がする。甥が伯父のために仇討ちするのはきわめてまれであり、戦国時代の長曾我部元親の式目のように伯叔父の仇を甥が討つことを禁じている例もある。この頃、弟が兄の仇討ちをした有名な事件に天和二年(一六八二)、但馬国七味郡村岡における近藤源太兵衛の仇討ちがある。この章はこの事件に想を得たか。

一〇 仇討ちに出立するには、ひとまず主君に暇を申し受けて浪人となる。

一一 武蔵国で、江戸のこと。

一二 現在の主君が挙げ用いた侍。主君が抜擢した侍であるので、強く守護されているのである。

一三 平百姓は門をつけることはできないのが通例。郷士の住居。

一四 たくわえる。雇う。

一五 夜回りの者が打つ拍子木。

一六 焼いた握り飯。

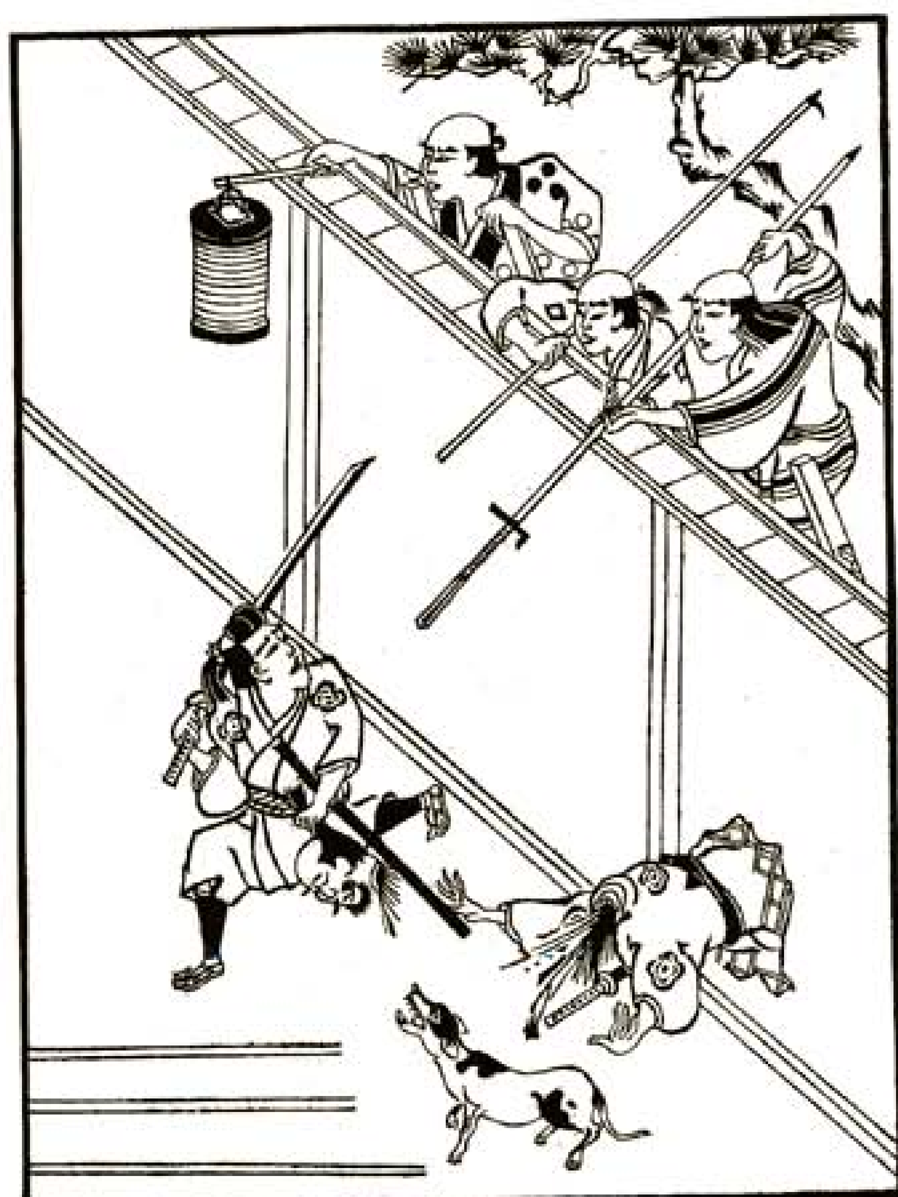
一七 庭は屋内の土間。台所の広い土間。

一八 わめく。

一九 危なくなったので。

「先づこの度はのけ」と、出さまに[一]鍋釜を提げて[二]、おもてに捨て置き、はじめの抜け道に出るに、老人の不自由さは、くぐり時隙入る処を、跡より大勢両足に取り付き、すこしも身の動きならず。判八立ち帰りて、親の首を切り、その首提げて、逃げのびけるに、跡にて詮議さまざま、鍋釜の様子を見て、盗人にはうたがひなしと、[三]その通りにすましける。

その後判八は、我が手に掛けし親の首を持ちて、[四]入佐山の奥ふかく、秋萩の下葉を分けて、「世にはかかる憂き目もある事かな。敵は打たで、いかなる因果ぞかし。江戸にましま



追われた判八が親の首を斬って逃げるさま。屋敷の内側の用心棒たちは左より、小田原提灯・とび口・片鎌槍（かたかまやり）を持つ。

たが、これを聞いて、「犬にしては頭が高い。皆々起きて出会え」と呼び続けたので、変事の際の用心に前々から抱えておいた若者たちが大声を上げて知らせたけれども、まだ怪しい者がいると考えて弥平次は警戒して出て来ない。身に危険が迫ってきたので、「まずこのたびは逃げよう」と出がけに鍋釜を提げて、表に捨て置き、初めにつけた抜け道から出ようとすると、老いた身で自由がきかず、くぐる際にひまどったところを、あとから大勢の者がその両足に取り付いて、全く身体が動けなくなってしまった。判八は逃げたものの、また立ち帰って、親の首を斬り、その首を提げて逃げのびたが、そのあとで、弥平次の方は取調べをいろいろとしたところ、鍋釜を表に捨ててあるのを見て、盗人に違いない、と判断して、そのように事は落着した。

その後、判八は自分が打った親の首を持って、入佐山の奥深くにはいり、秋萩の下葉を分け入って、「世の中には、このようなつらい目にあうこともございます。仇は討たないで、このように親を討つということは、なんという悪運でしょうか。江戸にいらっしゃる母がお聞きになったならば、私をふがいない者と思い、

いったような様子にしておいたのである。

一 接尾語。「…の時」の意。

二 相手を警戒させぬために盗人のは

❖子が親の首を斬る部分の原拠は、日本の説話集では『今昔物語集』巻十の三十二。本章の直接の拠所は『源平盛衰記』巻二十「楚効荆保の事」の章の荆保の説話。荆保が父とともに盗みにはいって、父子逃亡する時、後から垣の中をくぐり抜ける父が足を捕えられたので、荆保が父の首を斬って家に帰った、という説話。判八の名の判は荆保の荆の字の草体に似るところからつけ、これにより、判右衛門・判兵衛の名をつけたと思われる。

三 侵入した者を盗人であるとして。

四 兵庫県出石郡出石町入佐にある山。歌枕。

す母の聞きたまはば、我を腑甲斐なく、御なげきも深かるべし。されども[五]一念かけし弥平次を打たでは置くまじ。御心安かれ」と、御首に物を語りて、さて、木の根をかへし、埋み所の穴を掘りしに、下より[六]しやれかうべ一つ出ける。「これもいかなる人の、昔ぞ」と、しらぬ哀れならべて、うづめ、[七]露草を折りて、水を手向け、その日もまだ暮に遠ければ、人の目をしのび、夜に入り里に帰らん。塚を枕に、しばしまどろむうちに、かのしやれかうべ、告げて語るは、「我は判[八]右衛門があさましき形なり。我がためとて、かたきを打ちに来て、汝が手にかかる事は、[九]これ定まる道理あり。前世にて、弥平次が一門、ゆゑなき事に八人まで失ひければ、天この科をゆるしたまはぬを、[一〇]今この身になりて覚ゆる。その方とても、これをのがれがたし。[一一]武勇の本意をやめて、[一二]墨染の身となりて、先立ちし二人が跡をよく〳〵弔ふべし。この言葉の証拠には、我が形あるまじ。二度掘つて見るべし」と、告げて失せける。

　かの塚を掘るに、初めのしやれかうべなき事、不思議なが

お嘆きも深いに違いありません。とはいえ、心に決めました弥平次を討たないではおきません。ご安心ください」と父の首に物語をして、さて、木の根を掘り返して、首を埋める穴を掘ったところ、下から髑髏が一つ出てきた。「これもどのような人のなれの果てであろうか」と、知らないながらも哀れに思い、二つの首を並べて埋め、露草を折って供え、水を手向け、その日はまだ日暮れに間があるので、人目を忍んで、夜にはいって村里に出よう、と塚を枕にして、しばらくの間うとうとと眠っているうちに、かの髑髏が夢に現れて告げ語るには、「我は判右衛門の幽霊である。わがためとして敵討ちに来て、汝の手にかかって死ぬということは、これは前世から定まった理由がある。我は前世にて弥平次の一門を、ゆえもなく八人まで殺したので、天がこの罪科をお許しにならない。そのことが今この死んだあとになってわかった。その方もこの因果の理からのがれることはできない。だから武士の志を捨てて発心し、出家して、先立った我々二人の跡をよくよく弔ってもらいたい。この言葉が誠である証拠に、わが形はもうないであろう。再び掘ってみなさい」と告げて失

五　一心をかけた。心に決めた。
六　風雨にさらされた頭骨。古くなった頭骨にも用いる。ここは後者。
七　夏から秋にかけて青色の花が咲く雑草の一種。
八　「あさまし」は意外な、の意味から「死ぬ」の間接表現となる。死んだ姿。幽霊として出てきた姿。
九　このようになると決まっている理由。
一〇　現在世から離れて、自分にある因果応報を知ったということ。
一一　武士としてもつべき心。ここは、仇を討つ心をいう。
一二　僧侶の服である墨染の衣を着る身。出家することをいう。

一 仇討ちに失敗して討手が逆に敵に討たれること。

❖本章の西鶴における展開として仇討短篇小説集『武道伝来記』（貞享四年刊）がある。

ら、よもや打たで置くべきかと、心を尽くせし甲斐なく、判八も又、一返打ちにあひぬ。

せた。

その塚を掘って見ると、初めの髑髏がなくなっていることは不思議であったが、けっして敵を討たないでおくものかと、いろいろと心をくだいたその甲斐もなく、判八もまた、返り討ちにあった。

入絵

西鶴諸国はなし

四

巻四　あらまし

一　形は昼のまね　大坂、道頓堀の浄瑠璃井上播磨掾座で、夜中に人形が勝手に動き回る。翌日、座の者たちが小屋中を狩ってみると古狸どもが逃げ出した。狸が人形に「執心」して、昼の真似をしてこれを遣った話。

二　忍び扇の長歌　江戸、上野の花見帰りの大名の奥方の一行の乗物の中に二十余歳の美女が乗っているのを、ある若侍が一目で「恋」に落ちた。若侍はその女性のいる大名の奥局に仕えて、二年経つ。女も男を恋しく思う。女は長歌を書いた扇を男に送り、二人は忍んで屋敷を出奔して、麻布の小さい裏棚に隠れ住んだ。これを大名方で探し出し、男は屋敷内で処刑、女は自害を勧められたが従わず、かえって自分の行為の正当性を主張し、尼になった。

三　命に替はる鼻の先　高野山に住む「天狗」が少女に化けて檜物細工人の仕事を妨害する。職人が怒って叩こうとすると、少女はその気持を知って口に出す。職人が困惑しているうちに、薄板用の工具が自然に外れて少女の鼻先に当った。驚いて、天狗の正体を現して逃げ、一族の天狗を集めて高野山を焼こうとする。これを宝亀院の住職が夢の中で知り、自分が天狗になって彼らを禁戒しようと言って、弟子を連れて昇天する。

四　驚くは三十七度　常陸、鹿島に林内という雁捕り猟師がいた。女房が猟をやめてほしいと嘆いても聞き入れなかった。ある夜、女房が子供を寝させていると、子供が三十七度驚き、声をあげて身を震わせる。女房は猟から帰って来た林内に、捕った雁の数を、三十七羽と言い当てた。これに驚き林内は「殺生」の雁猟をやめ、捕鳥道具を土中に埋めた。それが鳥塚といって今に残っている。

五　夢に京より戻る　和泉、堺の金光寺の白藤は、人が花房を折って帰ると、その夜、女がやって来て取り返す。この白藤は昔、後小松院が内裏に移し植えたけれども、藤の精が院の夢に現れて、京からもとの所に戻し植えられたという「名草」木譚。

六　力なしの大仏　山城、下鳥羽の車使い大仏は、身体は大きいが力が無かった。残念に思い、生れた男子を訓練すると、九歳で車引く牛を宙差しできる「大力」となる。十五歳より鳥羽の小仏と名乗って世に知られた。

七　鯉の散らし紋　河内、内助が淵の「猟師」内助は独身で、巴と呼ぶ大鯉を愛していた。この鯉は全身の鱗に一つ巴の紋様があった。のち、内助が女房をもつ。ある夜、内助の留守に美女がやって来て、女房に、自分は内助と情を通わしており妊娠もしている、親元へ帰りなさい、と言う。女房はこれを内助に語るが、内助は心当りの女は無いと言う。夕暮に猟に出ると、内助の舟に大鯉が飛び乗り、口から子の形のものを吐き出して失せた。

近年諸国咄（きんねんしよこくばなし）

大下馬（おほげば）　巻四

目録（もくろく）

一　形は昼のまね　　執心
　　大坂の芝居[一]にありし事

二　忍び扇の長歌（ながうた）　　恋
　　江戸土器町（かはらけまち）[二]にありし事

三　命に替（か）ゆる鼻の先　　天狗（てんぐ）
　　高野山（かうやさん）[三]大門（だいもん）[四]にありし事

一 道頓堀の人形浄瑠璃芝居。
二 麻布飯倉町の俗称。現、港区麻布台二丁目あたり。「芝の土器町のすゑに、小家勝ちなる淋しき所に廻りしに」(本朝二十不孝五の四)。この章の原拠竹芝寺縁起伝説の竹芝寺の跡が港区三田四丁目の済海寺であるとすると、両者の距離は約一キロメートル。
三 和歌山県にあり、真言宗の総本山金剛峰寺とそれに関係した建物とがある。奥の院には弘法大師の廟がある。また、日本全国から納骨される墓地があり、墓地の広さは日本最大。
四 高野山の西口の坂の上にある高大な楼門。嘉禎三年(一二三七)建立。ただし、現在の門は宝永二年(一七〇五)建立。

㈣　驚くは三十七度　　殺生
　　常陸の国鹿島にありし事

㈤　夢に京より戻る　　名草
　　泉州の堺にありし事

㈥　力なしの大仏　　大力
　　山城の国鳥羽にありし事

㈦　鯉の散らし紋　　猟師
　　河内の国内助が淵にありし事

一 茨城県鹿嶋市。東国第一の神社、鹿島神宮がある。鹿島神宮は、東は太平洋に面し、回廊は海中にあった。

二 大阪府堺市。中世は外国貿易で栄えた商業都市で、元禄期にもその富が蓄積されており、長崎貿易などの特権商人が居住していた。

三 現、京都市伏見区。京都の市中の南方にあり、平安末期から車貸し(運送業者)が居住していた。近世では洛外。

四 紋所が飛び飛びに散らして描かれてあるのをいう。

五 大阪府大東市にある大池。「ないじょがぶち」ともいう。古くは八〇〇㍍四方あった。「蓮多く魚多し、三箇より漁人行きて採る、又、其の辺にも漁家少しあり」(南遊紀行　貝原益軒)。

六 人形浄瑠璃で詞章を語る役者をいう。

七 井上播磨少掾(一六三二〜八五)。名は要

形は昼のまね

[六]浄瑠璃の太夫に、[七]井上播摩とて、さま〴〵の節を語り出して、諸人に口真似させける。ある時の[八]正月芝居に、[九]一の谷のさかおとしの合戦を、[一〇]五段につくり、人形もひとつ〳〵、細工人こころをつくしてこしらへ、役者もめい〳〵の魂入りて、源平西東にたて別れ、[一一]大軍の所を遣ひけるほどに、[一二]大坂中うつして、これ見物事とて、ひさしくはやりける。

その頃は二月の末の事なるに、明暮春雨のふりつづき、万の[一三]浜芝居まで[一四]やみて、物のさびしき夜半に、[一五]千日寺の鉦の声、蛙の鳴くより外は、きく事もなく、[一六]楽屋番の小兵衛・左右衛門、[一七]木枕をならべ、ともし火かすかにして、はなし寝入りに、前後もしらぬ時、人の足音に目覚まし、二人ともに[一八]夜着の下より、あたまをあげて見るに、遣ひ捨てたる人形ども、物こそいはね、そのまま人間のごとく立ち合ひ、しばしたたきあひ、くひつき、血煙たつておそろし。その後に西の方よ

形は昼のまね

浄瑠璃の太夫に井上播磨といって、さまざまの節を語り出して、人々に口まねさせ、流行らせた人がいる。ある年の正月芝居に、一の谷の逆落しの合戦を五段の浄瑠璃に作り、人形も一つ一つ細工人が心を打ち込んでこしらえ、人形遣いの役者たちもおのおの精魂こめて、源氏と平氏とが西と東とに別れて大合戦の場を遣ったので、大坂中がここに移ったような超満員の観客で、長期間盛況が続いた。

ちょうどその頃は二月の末のことであるが、毎日春雨が降り続いたため、道頓堀のすべての芝居小屋はもとより、浜側の中芝居までも休演して、物寂しくなった夜中に、千日寺の鉦の音と、蛙の鳴き声のほかは聞こえる物音とてもなく、楽屋番の小兵衛・左右衛門の二人が木枕を並べて、灯火を細めて話しつつ寝入り、前後も知らず熟睡していた時、人の足音がしたので、目を覚まし、二人とも夜着の下から頭をあげて見ると、遣ったままに捨て置いた人形どもが、ものは言わぬ

栄。京都の人。明暦から延宝にかけての京坂の太夫で、播磨節の流祖。虎屋源太夫に浄瑠璃を習い、一流を開き、大坂道頓堀で興行し、有名であった。のちの竹本・豊竹の風に大きな影響を与えた。

八 初春興行の浄瑠璃芝居。

九 源義経の一の谷逆落しの合戦。播磨の正本に『源平軍論』(万治四年以前)がある。

一〇 古浄瑠璃の段数は、初期は十二段その他で一定しなかったが、明暦・寛文頃には六段が主流を占め、しだいに五段も多くなり、延宝以後は五段が主流となった。

一一 大合戦。

一二 大坂中がここに移って。大坂の人がすべてこの芝居に入場して。

一三 道頓堀の南岸の東西の通りに並ぶ芝居小屋のうち、堀岸側の芝居小屋をいう。中芝居の小屋である。

一四 当時はそまつな小屋掛けだったので、雨天の日には休演した。

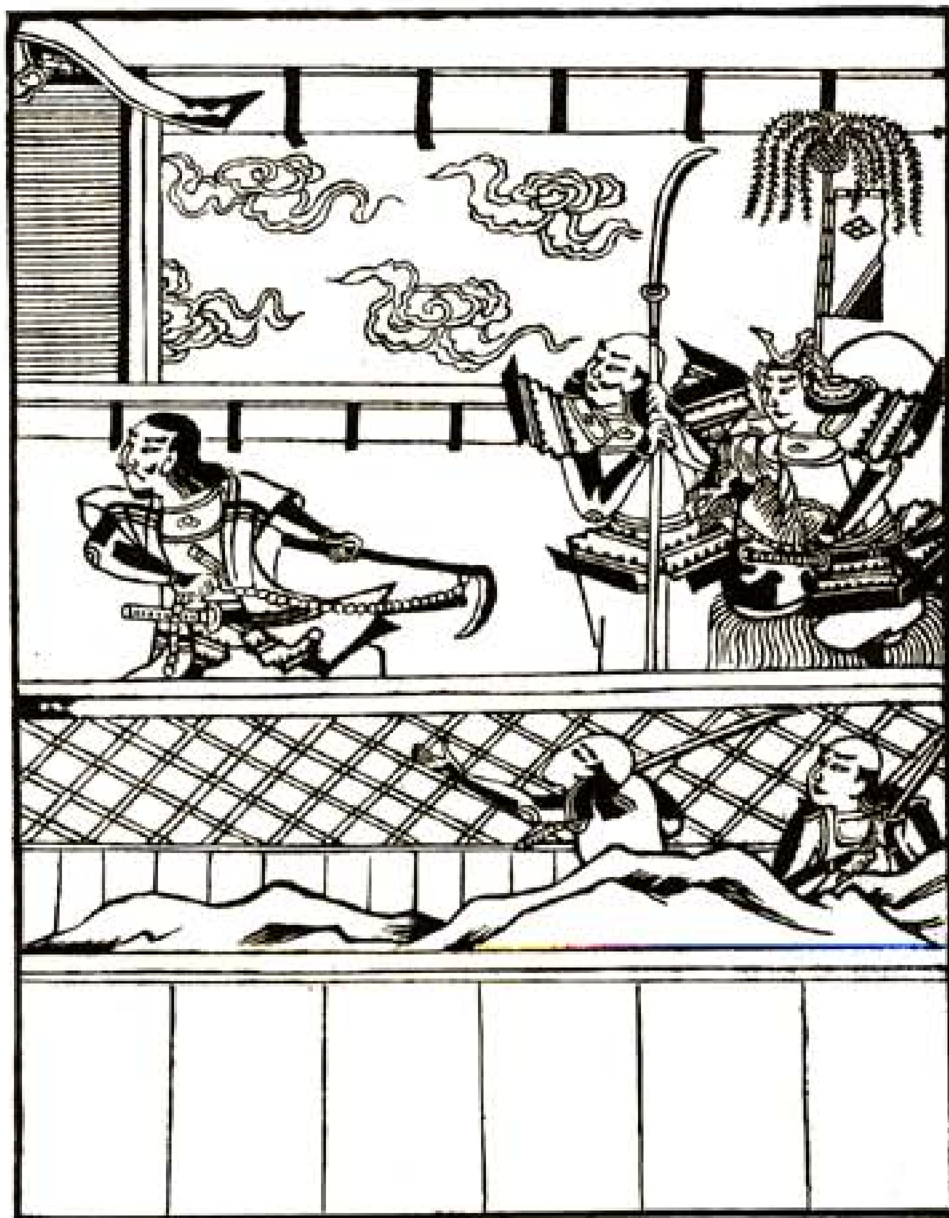
一五 道頓堀の芝居小屋の南にある浄土宗法善寺の通称。寛永年間に千日の念仏供養をしたので、このように称する。鉦は念仏する時にたたくもの。

一六 楽屋は芝居小屋の幕の内側をいい、役者のいる場所。芝居小屋の番人。

一七 木で箱形に作った簡易な枕。

一八 寝る時に上に掛ける寝具で、普通の着物のような形で広く大きく、長さが一つ身の一・五倍ある。

り、越中の二郎兵衛と名付けし出来坊ゆたかに出れば、東から、佐藤次信出て、これは半時ばかりもきりむすびしが、つかれてあひ引きにして、次信は腰をうつて休む。二郎兵衛はそろ〳〵庭におりて、天目・柄杓を取つて、息つぎの水呑むありさま、舌の音して、人にすこしも替はる事なし。その跡は敦盛の若衆人形にとりつき、または、おやま人形にしなだれ、色々の事ども、宵のこはさやみて、をかしくなりぬ。夜もすがら二郎兵衛の人形かけまはりけるが、明方に鳴りをやめける。



が、そのまま人間のように立ち合い、しばらく打ち合い、食いつき、血煙もあげて恐ろしい情景となった。その後、西の方から越中の二郎兵衛と名づけた人形がゆったりと現れると、東からは佐藤継信の人形が現れて、これは半刻ばかりも斬り結んだが、疲れて引き分けにし、継信は腰をたたいて休息した。二郎兵衛の方はそろそろと土間に降りて天目茶碗と柄杓を取って、息継ぎの水を飲む様子で舌つづみの音がし、人間に少しも変ったところがない。継信の人形はそのあと、敦盛の若衆姿の人形にくっつき、または女方の人形にしなだれかかって、さまざまのしぐさをするので、宵の頃の恐ろしさも忘れておかしくなった。一方の二郎兵衛の人形は、一夜中駆け回っていたが、明けがたになると止み、静かになった。

楽屋番の二人は驚いて、座元にこれを報告した。ところが、これを聞いて皆々驚いている中に、四蔵という年老いた道化人形遣いがいて、この男は少しも驚くことなく、「昔から人形同士が食い合いをすることはその例が多い。しかし、水を飲んだわけがどうしてもわからない」と言うので、翌日、木戸番・札売りどもが大勢かかって狩ってみると、年経た狸

一 平家方の侍大将、平盛嗣。室山、水島合戦で平家方を勝利させて高名をとる。一の谷の合戦では熊谷二郎直実と一騎討ちをしたが、退却した。
二 あやつり人形。
三 藤原秀郷の子孫、佐藤三郎兵衛継信。弟に四郎忠信があり、兄弟ともに源義経の家臣となって奥州平泉から義経に従い、継信は讃岐国屋島の合戦で義経の身代りに平教経の矢に射られて討死にした。義経の家臣の四天王の一人。
四 疲れたので腰をたたいて休息した。
五 天目形の茶碗。
六 息継ぎは休息すること。休息して飲む水。
七 平敦盛。清盛の弟経盛の子。一の谷の合戦で、熊谷直実と戦い、十六歳で討死にした。
八 美少年の人形。
九 若い女の人形。京坂で遊女をおやまということより起るか。小山次郎三郎という者が女の人形を巧みに遣うによっていうか(嬉遊笑覧六上)。

楽屋番の二人おどろき、太夫本にてこれを語る。皆々横手うつ中に、四蔵といふ古き道外のありしが、すこしも騒がず、「むかしより、同じ人形共、くひあふ事はためし多し。いかにしても、水を呑みし事不思議なり」と、明の日、木戸番・札売ども、大勢掛けて、狩つて見るに、年へし狸ども、ゆかの下より飛び出て、今宮の松原へ失せにける。おそろしきとも中々。



人形浄瑠璃井上播磨座の一の谷源平合戦のさま。右（上手）が源氏方、左（下手）が平家方。上段中央に花灯口（かとうぐち）。舞台は三段。

どもが床の下から飛び出て、今宮の松原へ逃げ失せた。恐ろしいというよりもそれ以上の大変事である。

一〇 芝居を興行する場合の名義人。一座の中心で役者の監督をする。

一一 道外は「うつけ(馬鹿)を第一とし、うそがましき事のみいひ、なりふりまでおかしげに見え、見物の方々笑ひを催さす」(人倫訓蒙図彙七)。この人形を遣う人形遣い。野呂松、あるいは京坂の操芝居では、そろま・そろ七・麦間などとも称し、道化た言葉や身振りをなし、浄瑠璃の段物の間に狂言をした(嬉遊笑覧六上)。

❖人形は死物であるが、水を飲むことから生類であると推測したのである。

一二 芝居の入口にいて客の呼込みをする者。

一三 芝居の入口にいて入場札を売る者。

一四 道頓堀の南方にある今宮恵比須社の松林。

一五 古浄瑠璃に見られる「恐ろしきともなかなか申すばかりはなかりけり」によった句。

忍び扇の長歌

屋かた住ひ、気づまりも、上野の花にわすれて、諸人の心玉うきたつ、春のありさま、衣装幕のうちには、小歌まじりの女中姿、ほんの桜よりは、詠めぞかし。

日も暮に近き折ふし、大名の奥様めきて、先に長刀・二つ挟箱もたせて、高蒔絵の乗物つづきて、跡より二十あまりの面影、窓のすだれのひまより見えけるに、そのうつくしさ、和国美人揃のうちにも見えず。うか〳〵と付いてまはりける、この男やう〳〵中小姓ぐらゐの風俗、女のすかぬ男なり。おもふにおよばぬ御方を恋ひ初め、跡より行く中間にたづねしに、「さる御大名の姪御さま」と、あらまし様子を語りすてて行く。

さてはとその所をしりて、奥かたへの御奉公をかせぎしに、よき伝ありて相済み、二年ばかり勤めしうちに、あなたこなたへの御供申せし折ふし、思ひ入れし御乗物に目をつけける

忍び扇の長歌

武家屋敷に住んで気のつまるのも、上野の桜を見ると忘れてしまい、人々の魂が浮き立ってしまう、この春のありさまが見られる衣装幕の内に、小唄まじりで遊興する女中姿がながめられるのは、ほんとうの桜よりもよい風景である。

日も暮れがたに近くなった時刻、大名の奥方らしい様子で、行列の先頭には長刀・二つ挟箱を持たせて、高蒔絵をした乗物が続き、そのあとから二十歳余りの姿が乗物の窓の簾の隙間から見えたが、その美しいことといえば、日本の美人姿を描いた絵本のうちにも見られぬほどのすばらしさであったので、うっとりとしてついてまわっている男があった。この男はやっと中小姓ぐらいの身なりで、女が好かない容貌の男であった。こちらが懸想しても及ばぬ御方を恋い初めて、あとより行く中間に尋ねると、「この女性はさる大名の姪御様です」と、おおよその様子を語りすてて行った。

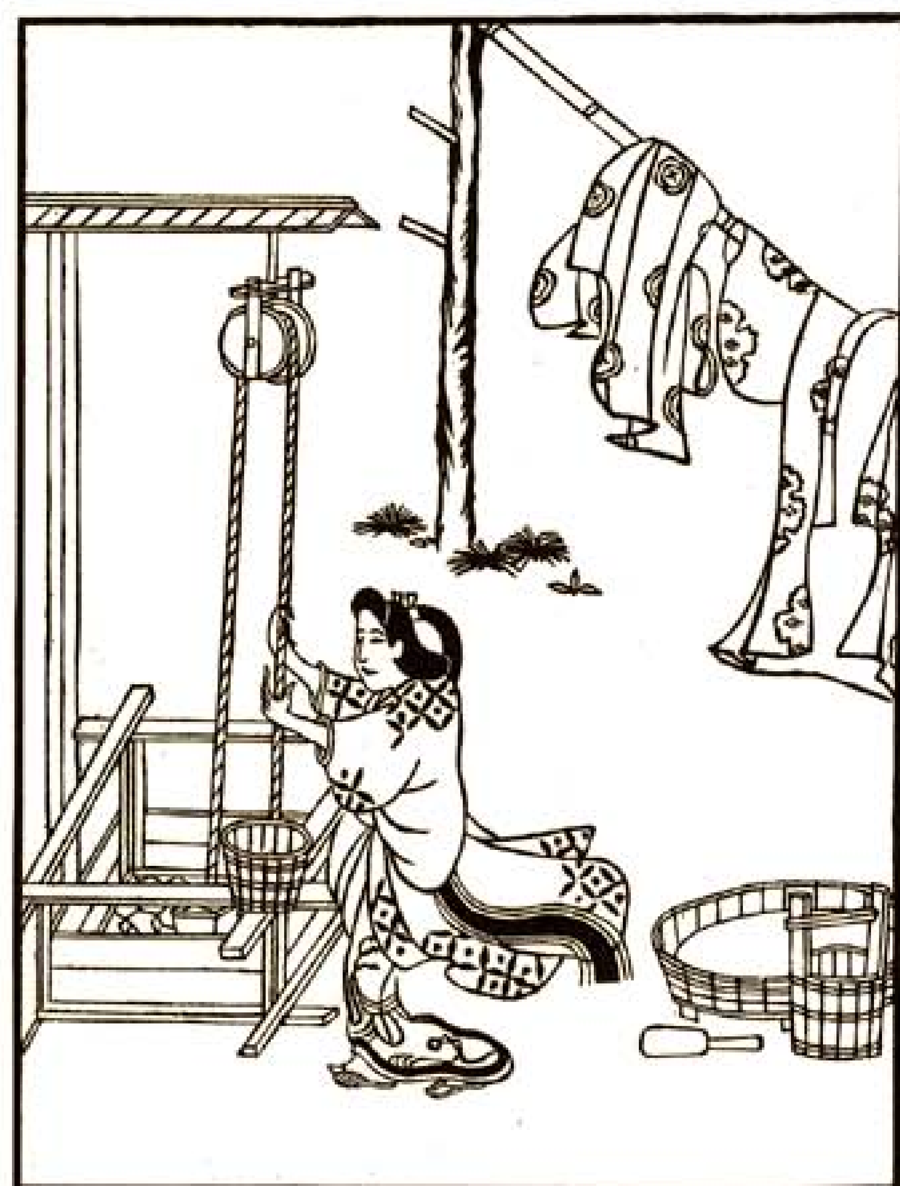
さては、とその所を知って、奥向きへの奉公を求めたところ、よいつてがあっ

一 武家屋敷。
二 東京都台東区上野公園の一帯。東叡山寛永寺の境内で江戸第一の桜の名所。山内なので、乱暴狼藉はさせないから、女性が安心して花見ができた。
三 小袖の袖に綱を通して幕のように張りめぐらしたもの。小袖幕とも。
四 長刀は近世では主として婦女用の武具となり、上級武家の女性が道中する時にはその前方に持たせてゆく。挟箱は衣装を入れた箱で、上級武家の女性が道中する時には、対の挟箱をその前方に持たせてゆく。
五 金銀で描いた模様が地より高く盛り上がった蒔絵。武家方で用いる。
六 乗物駕籠。
七 日本の古今の美人を絵にかき、簡単な説明文を付した絵本の一種。
八 事変のある時には主君の身辺を警備し、常時は諸役を勤める。「あながち器量をえらばず、時によりて此の内より使者役をする事も有り、児小性上りの中小性は風俗かくれなし」（人倫訓蒙図彙一）。
九 武家の奉公人で、足軽の下、小者の上の職。侍に召し使われ、渡り奉公人であるから口も軽い。
一〇 大名の私用を勤める奉公。
一一 奥向きには御広敷番という男の役人が勤めている。男はこの役人として召し抱えられたのであろう。
❖二年の経過から、大名の姪の年齢がすでに二十歳をかなり越えていることになる。この女性の父は大名の

弟で、部屋住みの身(厄介者)と思われる。この女性は、未婚のまま一生を送らせる予定として、大名は処遇していたのであろう。

一二 お末といい、雑用をする役で、大名に奉公する女中の最も低い役。御半下ともいう。
一三 一棟の長い建物を横にいくつもに仕切った住居用の建物で、大名の江戸屋敷では中級以下の侍が居住した。
一四 武家の女性では通常でも用いるが、特に祝儀などの時に使用する。
一五 →注一三。
一六 文柄。文章の書き様。
一七 長歌。和歌の一体で、五音七音を繰り返し、終りを七音七音で結ぶ長い歌。
一八 散らし書きにしていたのであろう。
一九 くぐり戸。奥の建物を分離させた塀につけた入口。

一 武家の奉公人。中間の下で、草履取りなどの雑用をする役。
❖奉公している小者と見せかけて、宵の暗さにまぎれて屋敷から外出したのである。


出奔した姫がすすぎ洗濯するさま。裏棚の借家で共同井戸の水汲み。右下部には手桶・たらい、洗濯の布を打つ砧(きぬた)。

に、縁は不思議なり。あなたにもいつともなう、おぼしめし入られ、[一二]すゑ〴〵の女に仰せ付けられ、[一三]長屋の窓より、[一四]黒骨の扇を投げ入れける。若い者中間より見付けて、かの[一五]半女と心のあるやうに申すを、沙汰なしに酒など買うて、口をふさぎぬ。その夜御扇ひらき見るに、筆のあゆみ、只人の[一六]ぶんがらにもあらず。おぼしめす事ども、[一七]長歌にあそばしける。[一八]よく〳〵読みて見るに、「我をおもはば、今宵のうちに、連れて立ちのくべし。男にさま替へて、[一九]切戸をしのび、命をかぎり」との御事、このかたじけなさ、身をくだきてもと思ひ定

て召し抱えられ、二年ばかり勤めているうちに、方々へお出かけのお供をするようになり、その時には、恋い慕っている人のお乗物に注意していたところ、男女の縁というものは不思議なものである。先方でもいつということなく懸想され、お末の女に仰せ付けられて、中間の長屋の窓から黒骨の扇を投げ入れさせた。若い中間たちにそれを見つけられて、男がその下女と気のあるように言うのを、口どめに酒さかなを買い、一杯飲ませて彼らの口をふさいだ。その夜、御扇を開いて見ると、筆の運びは普通の人の文章の調子ではない。思っていらっしゃることなどを長歌になさっていた。よくよく読んでみると、「私を思っているのなら、今宵のうちに連れて立ち退きなさい。男に姿を変えて切戸に忍んでいます。命をかけて」との御事であった。このありがたさに身を粉にしても思いを遂げようと決心して、その時刻を待っていたところ、お知らせのとおりに、小者の姿になっておいでなさったので、屋敷のご門を闇にまぎれて出て、早くもその夜のうちに、土器町という所の縁故の者をたよって、ここに隠れ、小さい裏長屋を借りて、人目を忍んで住んでいた。姫は何の用意も

二 表通りの家宅の裏側に建てられた家で、小家、長屋などの借家をいう。 三 護身用の小刀。 四 貧乏の意をいう。

❖脱走した大名家の犯罪者であるから、昼間外出すると危険であり、男が侍であるので、戦争の際の外傷薬として、切り傷の薬の処方を知っているのである。なお、膏薬売りは、昼間、深編笠をかぶる商売なので、世をはばかるには好都合(万の文反古二の二)。

五 貴人の女性は洗濯を自分でしないので、仕方を知らぬゆえ人目に立ったのである。

❖大名の江戸屋敷内において家臣の中から犯罪者が出、その犯罪者が屋敷から脱走した場合には、その家中で捜し出し、屋敷へ連行し、屋敷内で処分するのが普通。

六 死罪。士分の者と奥の女性との私通は、男は切腹、女は一生押し込め(監禁)に処せられるのが通例。

七 大名の当主の尊称。若殿に対していう。 八 貴人の女性の尊称。 九 ここは、世間の通例として、自害することを勧告した。

❖この女性は年齢が二十余歳であって、彼女はかなり明瞭な倫理観をもつ。これは一つには、彼女を未婚のままで一生終えさせる藩主の意図に対する批判と考えられる。

一〇 きまり。人間のきまり。 一一 「貞女二夫ヲ更メズ」(史記・田単伝)。

一二 一生に一人の男をもったこと。

め、その時を待つに、御しらせたがはず、[一]小者姿にして、御出あそばしけるを、御門をまぎれ出、はやその夜に、[二]土器町といふ所に、よしみの者あり、これにしのび、すこしの裏棚を借りて、人しれず住みけるに、何の心もなく出たまへば、世を渡るべき種もなければ、[三]御守わきざしを、少かの質に置きて、月日をおくらるるうちに、[四]またかなしく、男は夜々、切疵の膏薬を売れどもはかどらず。後にはせんかたつきぬれば、[五]手なれたまはぬ、すすぎせんだく、見る目もいたはしく、近所も不思議を立てける。屋敷よりは、毎日五十人づつ、御ゆくへをたづねしに、半年あまり過ぎて、さがし出し、大勢とりかけ、かの男は縄をかけて、その夜に[六]成敗にあひける。

その後、姫は一間なるかたにおしこめ、自害あそばすやうに、しかけ置きても、中々その志もなく、時節うつれば、「いかに、女なればとておくれたり。最後をいそがせ」と、[七]大殿より仰せければ、[八]姫の御かたに参りて、[九]「世の定まり事とて、御いたはしくは候へども、不義あそばし候へば、御最

なく屋敷をお出になったので、日々の生活の種もなく、お守りの脇差を少額の金の質物に置き、月日をお送りになっているうちに、また窮乏してきて、男は夜々、切り傷の膏薬を売りに出たが、売れ行きもはかばかしくなく、後には生活する手段もなくなってしまったので、姫は慣れていらっしゃらない洗濯の仕事をするようになった。それは他人が見ていても痛々しいので、近所の人々もへんなことだと噂しあった。大名の屋敷からは毎日五十人ずつの侍が、姫のお行方を捜していたところ、半年余り過ぎてついに捜し出し、大勢の者が取りかかり、かの男には縄をかけて、その夜のうちに死刑にされた。

その後、姫は一間に押し込めて、自害なさるようにしむけておいたが、なかなかその気持もなく、日数が過ぎるので、「いかに女だからといって臆病すぎる。早く最期を遂げるようにさせよ」と大殿様から仰せられたので、使者は姫の居所に参って、「世間の定法ですから、おいたわしいことではございますが、不義をなされたからには、ご覚悟を」と申し上げると、姫の言うには、「私は命を惜しむのではありませんが、自分に不義など

❖身分の低い男と結ばれた例は、『更級日記』につぎに記すような武蔵国竹芝寺縁起伝説が載る。本章はこの伝説によっている。
　武蔵国から皇居の衛士に上った男が庭を掃きながら故郷の歌をうたっていると、それを皇女が聞いて、自ら、そこへ連れて行くよう命じた。男は皇女を背負い逃走し、故郷へ帰った。宮廷では皇女を捜し、三か月たって公使が男を尋ねて来たが、皇女は皇居へ帰らぬといったので、天皇は皇女の望みを許し、男に武蔵国を預けた。皇女の住んだ家は、死後、寺とした。これが竹芝寺である(西鶴の研究　宗政五十緒)。

一三 近世では、天狗は翼があり、身体が人間のごとく、頭は獣のごとく、鼻が高く、耳長く、牙が長い(和漢三才図会四十四)と想像されていた。一四 不思議。一五 金剛峰寺から東方、奥の院へ行く道約四〇〇㍍の所で、小田原房教懐上人の房があったので、そこを小田原谷といい、この付近は町家が並んでいた。一六 杉の木地の細工。


檜物師
（人倫訓蒙図彙）

一七 杉の薄板を曲げて水指を作る。

後」と申しあぐれば、「我命惜しむにはあらねども、身の上に不義はなし。人間と生を請けて、女の男只一人持つ事、これ作法なり。あの者下々をおもふはこれ縁の道なり。お[一〇]の〳〵世の不義といふ事をしらずや。夫ある女の、外に男を思ひ、または死に[一一]別れて、後夫を求むるこそ、不義とは申すべし。男なき女の、[一二]一生に一人の男を不義とは申されまじ。又下々を取りあげ、縁を組みし事は、むかしよりためしあり。我すこしも不義にはあらず。その男は殺すまじき物を」と、泪を流したまひ、この男の跡とふためなりと、自ら髪をおろしたまふとなり。

命に替はる鼻の先

[一三]天狗といふものは、[一四]面妖、人の心におもふ事をそのままに、合点する物ぞかし。
　ある時に高野の[一五]小田原町に、[一六]檜物細工をする者、[一七]杉の水指をまげる、折ふし十二三のうつくしき女の子、何国ともなく来

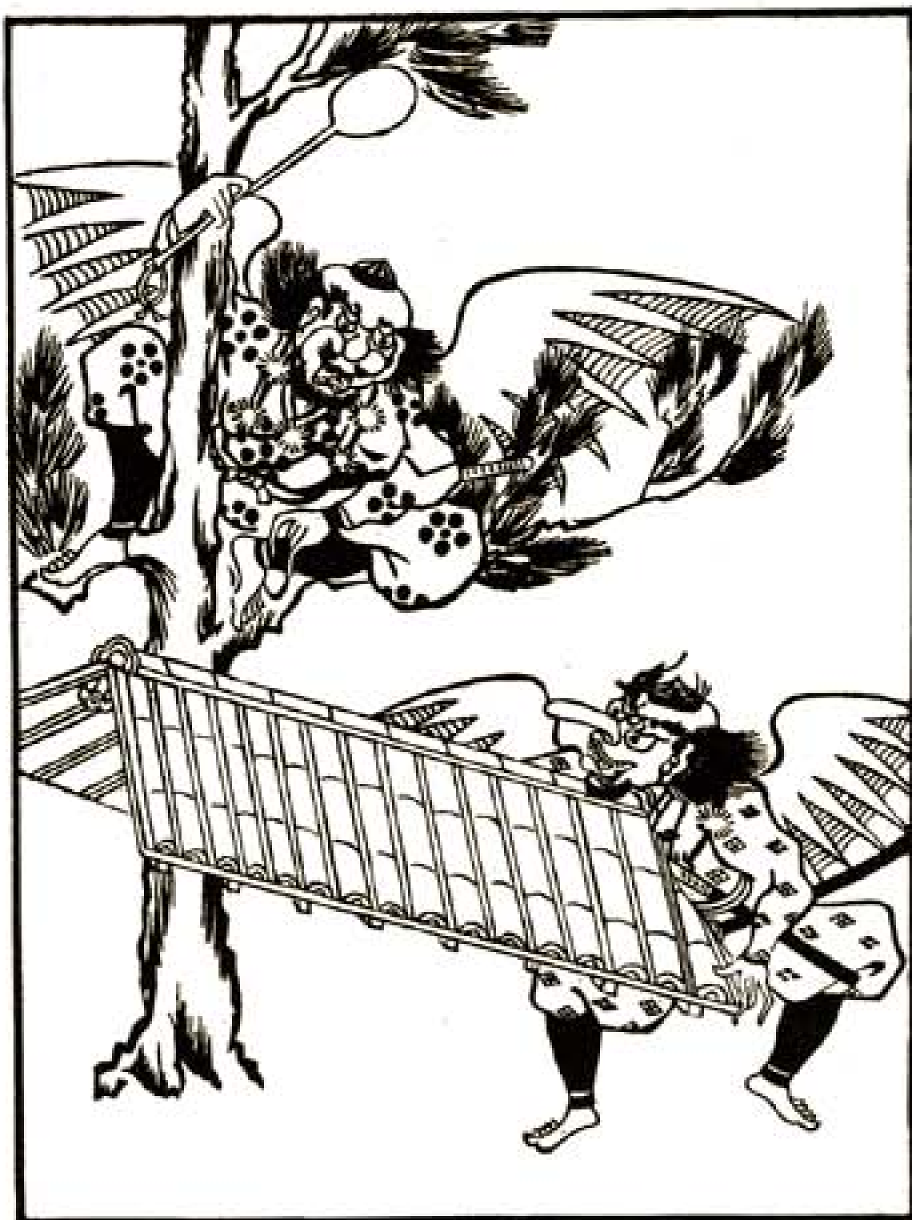
ころはありませぬ。人間と生れて、女が男をただ一人もつということは、これは定まったことです。あの者のような下々の者を思うのは、これは男女の縁の道というものです。あなたたちはこの世の不義ということを知らないのでしょうか。夫のある女がほかの男を思い、または死に別れた後に、後夫を求めることをこそ不義とはいうのです。男をもたない女が一生に一人の男を思うのは不義ではありません。また、下々の者を取り上げて縁組するということは、昔から例のあることです。私のしたことは少しも不義ではありません。その男は殺さないでもよかったのに」と涙をお流しになって、この男の亡き跡を弔うために、自分から髪をおろして仏道にはいられた、ということである。

命に替る鼻の先

　天狗というものは不思議に、人が心に思っていることをそのままに知るものである。
　ある時、高野山の小田原町に檜物細工をする者が杉の水指を曲げて作っていた。その時、十二、三歳の美しい女の子がど

一 高野山は、明治初年まで女人の入山が禁止されていた。
二 天狗は大杉に住む。
三 むかっ腹を立てる。なんとなくしゃくにさわる。
四 横槌。桶などのたがをはめるに用いる。
五 だまして急に。
六 檜物細工に使う刃物を研ぐために、檜物師が傍に置いている。
七 曲げた薄板を挟んで押えておく檜物細工の工具。
八 従者。家の子、家来をいう。
九 檜杉の木地細工人。
一〇 檜物細工の職人。
一一 午後四時頃。
一二 宝亀院は高野山の宿院で金剛峰寺の金堂の南方にあり、豊臣秀吉が御料を寄進して、高層の堂宇・楼門を造った。ここは、その院の住職。
❖ただし、杓子を持った弟子と共に昇天した僧は、明王院如法上人である。「○杓子が芝、付、松、荒川経蔵の前の芝を云ふ也、明王院如法上人、久安元年四月十日、白日に都率天に往詣し給ふ時、御沓のかた〳〵落ちて松の枝にかかれり、世に鞋懸の松と云ふは是れ也、御弟子帰従上人の御跡をしたひ、同じく天上し

りぬ。これもこの山[一]にてはめづらしく、気を付けて見るに、職人の見世のさきによりて、鉋屑をなぶり、「あたら杉[二]の木をきりて」と、これを惜しみ、いろ〳〵じやまをするを、しかれどもきかず。後は心腹[三]立ち、横矢[四]といふ道具をとりなほして、だまし[五]すまして、ぶたんと思へば、はや知りて、「それでうたるる間には、我も足があつて、にぐる」といふ。砥[六]石なげうちにとおもへば、「いや〳〵なげうちは、すかぬ事」と笑ふ。あきれはてて、分別するうちに、割挟[七]のせめといふ物、自然とはづれける。これは心の外なれば、鼻のさきにあ



宝亀院の冠木門の屋根を取り下ろす天狗。杉の枝に腰かけているのは杓子天狗。

こからともなくやって来た。このことは、この女人禁制の高野山では珍しいことであるが、気をつけて見ていると、檜物職人の店先に来て、鉋屑をいじり、「せっかく美しく育った杉の木を切って」とこれを惜しみ、いろいろの邪魔をするのを、叱っても聞き入れない。後には内心腹を立てて、横矢という道具を取り直して、だまして不意に打とうと思うと、早くもこれを知って、「それで打たれる間には、私も足があるから逃げますよ」と言う。砥石を投げ打ちにしようと思うと、「いやいや、投げ打ちは嫌いじゃ」と笑う。あきれてしまって、どうしたらよいものかと考えているうちに、割挟に使っていたせめというものが、自然とはずれた。これは心に思っていないことであり、女の子の鼻の先に当ったので驚き、姿を変え天狗になって、山に飛んで行き、一族の者大勢を集めて、「さてさて、世の中に、檜物屋ほど恐ろしい者はいない。二度とそこへ行ってはならぬ。思えば憎い。今日のうちにこの高野山を焼き払い、檜物細工人めを丸裸にしてやる」と火をつける場所を手分けして、すでに申の刻に火をつけることに手はずを決めた。

　ちょうどその時、宝亀院の院主が昼寝

たれば、おどろき姿を引き替へ、天狗となつて、山に飛び行き、数多の眷属を集め、「さても〱世の中に、檜物屋程、おそろしき物はなし。かさねて行く事なかれ。思へばにくし。今日のうちに、この御山を焼き払ひ、細工人奴をはだかになすべし」と、火の付け所を手わけして、既に申の刻にきはめける。

　折から宝亀院は昼寝をしてましますが、この声に夢覚め、当山やくべきとはかなしく、「我一山の身にかはり、魔道へ落ちて、あのせいとうをすべし」と一念、明障子二枚、両脇にはさまれしが、そのまま羽となつて飛ばれける。弟子坊主台所に、何か盛形をしてありしが、これも続きて飛びける。今にその時の形をあらはし、大門の杓子天狗とて、見る事たび〱なり。

　その後、不思議なる事は、その寺の冠木門、数百人しても、うごくまじきを、ある夜屋根ばかりを、海道におろし置きぬ。それより人絶えて、この寺天狗の住み所となりて、ひさしく内を見た人もなし。

をしていらっしゃったが、この天狗どもの声で眠りが覚め、この山を焼いてしまうとは悲しいことだと思い、「私が一山の身代りになって、天狗道へ落ちて、これをやめさせよう」と一念を起こして、明かり障子二枚を両脇にはさみになると、そのままそれが羽となって飛んで行かれた。弟子の坊主が台所で何やら食物を盛っていたが、これも続いて飛んで行った。今でもこの弟子たちはその時の姿を現し、大門の杓子天狗といってしばしば見られる。

　その後、不思議なことには、その寺の、数百人かかっても動かすことのできないほど大きな冠木門の屋根だけを、ある夜、街道におろして置いてあった。それ以後、この寺には人が住まぬようになり、天狗の住み場所となって、長い間、その内部を見た人もいない。

けると也、其の時いかがありけん、杓子と云ふ物を持ちてけるが、此処へものしけるを以て、此処の名とすと、俗にいひ伝へ侍る」(高野山通念集二)。

一三 この高野山。

一四 近世では天狗道をいう。天狗の世界。

一五 政道。禁じ戒めること。

一六 障子。

一七 料理の飯や菜を山型や杉型など種々の形に盛り作ること。

一八 前掲杓子の芝の伝説によるか。

一九 寺院の楼門のような、四つの柱のある門。

二〇 大門から奥の院に通じる大道。

❖この話は天狗に関する諸地方の民話に類話がある。「北国にいやしき工の飛騨山にゆきて、杉を採りて、へぎて生業とする者ありき、ある時、山中に杉をへぎて居けるに、ひとりの山伏の鼻の隆きが来りしを見て、心に『不思議のものかな、天狗にや』と思ふに、『汝はなにとて我を天狗と思ふぞ』といふ、『はやく去れかし』と思ふに、『汝はなど我をいとひて去れかしと思ふぞ』といふ、何にても心に思へば、はや知りてとがむる程に、後は是非なく、そのへぎし板の中くはへたる縮が撓めて縄して括らむとしけるに、心ならず取外して板はねける程に、其の板の末、天狗の鼻にしたたかに当りしかば、『汝は心根の知れぬ者かな、恐ろし』とて行去りぬる」(駿台雑話 一)。

驚くは三十七度

物は仕入れによつて何事も。

近年関東のかたに、友呼び雁[一]といふ物をこしらへ、広野にはなちがひして置きしに、空行く鳥をよびおろし、さま〴〵なつけて、後は殺生人[二]の宿につれて来て、骨をも折らず、とらへさす事あり。諸鳥までも、かく奥筋[三]はすすどし[四]。

ここに常陸の国、鹿島の片里に、目玉の林内といふ者、世

一 下総地方で、囮を使って雁をとらえること。『享和雑記』に詳しい。「其ノ法ハ群鴈ノ空中ヲ飛ブヲ看テ媒鳥ヲコナタヨリ放チヤレバ、其ノ跡ヲ追ヒ行キテ、竟ニ先ニナリテ輪ヲカケ〳〵シテ、次第ニ下ニ降リル、コノ媒鳥ニ連レテ数十羽ノ鴈、皆々下ニオリテ蒔キ置ケル件ノ餌ヲ求メテ食フヲ、其ノ好キホドヲ謀リテ網ヲ打カケテ捕フナリ」。囮の雁が猟師の家に連れ行くというのは西鶴の誇張であろう。挿絵により考えるに、網で捕獲するのであろう。また、林内の行動から考えても網猟であろう。

二 殺生を業とする人。ここでは猟師。

三 奥州筋。

四 抜け目がない。機敏である。



驚くは三十七度

ものは訓練しだいで、どんなことでもできるようになるものである。

近年、関東の方に、友呼び雁というものを作り、その雁を広野に放し飼いにしておくと、雁は空を行く友の雁を誘い下ろし、いろいろとなれ親しませて、後にはその雁を猟師の家に連れて来て、骨折らないで猟師にとらえさせる、ということが行われている。鳥類にいたるまでも、このように奥州方面は抜け目がない。

ここに、常陸国鹿島の小村に、目玉の林内という者がいた。世を渡る手段も多いが、林内は、冬の夜中の嵐もいやがらず、付近の若者たちと共に、毎日毎日、多くの鳥を殺す猟師を業としていた。連れ添っている女房は、心やさしくも、「こんな殺生なことはおやめください」とたびたび意見をしたが、林内は聞き入れずやめなかった。

女房はこれを悲しく思い、寝られぬままに、一人この世の無常を心に思っている時、寝かせておいた二人の子供が、夢うつつに声をあげて、びくっびくっと三



林内、雁獲りのさま。左下が友呼び雁の狩猟法。左上部に描く、地上に降りて来る雁を張ってある網にかけるのは「むそう網」の狩猟法。

五 雁は北方から、秋、日本に来て、春帰る。

六 現世で人間の生命のはかないことを心に思う。

七 眠っているのか覚めているのか判断できぬ状態をいう。

をわたる業もおほきに、冬の[五]夜のあらしをもいとはず、あたりの若者をかたらひ、明暮鳥の命をとる事、かぎりもなし。つれそふ女房は、やさしくも、「この事とまれ」と、異見する事たび〳〵なれどもやめず。

　これをかなしく、独りねられぬままに、[六]世の無常を観ずる時、寝させ置きたる二人の子供、[七]現に声をあげて、びく〳〵身のうごく事三十七度なり。次第おそろしくなつて、男を待ち兼ねるに、夜更けて門をたたき、「やれ今宵は、仕合せ」といふ。女泪を流し、「幾程うき世にあるべきぞ。むくいの

十七度身体を震わせた。しだいに恐ろしくなって、夫の帰って来るのを待ちかねていると、夜更けになって門をたたき、「やれ、今宵は運がよかった」と言う。女房は涙を流して、「あなたはどんなに長くこの世に生きていられるとお思いなのでしょうか。殺生の業による来世での報いをお考えください。今夜の鳥の数は三十七羽あるはずです。中鳥が八羽、大鳥が三羽です」と言う。籠を開いて数えてみると、締め殺した鳥の数に違いはなかったので、林内は横手を打って驚いた。そこで女房は、宵から子供が身体を震わせていたありさまを語ったところ、林内も身震いして恐れ、これより後すべての狩猟の道具を埋めて塚に築き、いろいろと鳥の供養をした。今でもそれが鳥塚といって残っている。

程をしりたまへ。今夜の鳥の数、三十七羽あるべし。中鳥八羽、大鳥三羽」と申す。籠をあけて見るに、締鳥[一]数違はねば、林内横手をうつ。宵より子どもがおどろくありさまを語れば、身ぶるひして、これより万の道具を塚につき色々供養[二]なし、今に鳥塚とて残れり。

夢に京より戻る

桜鯛[三]・桜貝[四]、春の名残[五]の地引き[六]、堺[七]の浦に朝とくかよふ魚売りども、目籠[八]を荷ひつれて行くに、大道筋[九]の柳の町[一〇]とおもふ時、うつくしき女郎の、たよ〳〵として、しをれし藤をかざし、人をもつれず只ひとり、先に立ちて行く。

いづれもさかんの若い者どもなれど、あまりあきれて[一一]、言葉をもえかけず、現のやうに、心玉をとられ行くに、この女朱座[一二]の門に立ち、または両替屋[一三]のおもてに立ち、戸の明かぬを、うらめしさうに見えける。「さてはいたづらものにはうたがひなし。いまだ夜もあけぬ、たのしみに、南[一四]のはしの小[一五]

夢に京より戻る

桜鯛・桜貝、春の暮れに地引網を引く堺の浜に、朝早く通う魚売りたちが、目籠を担って打ち連なって行き、大道筋の柳の町に来たと思う時、美しい女性がなよなよと、しおれた藤をかざして、下人も連れないでただ一人、前を歩いて行く。

皆々血気盛んな若い者たちだが、あまりのことにあきれてしまい、言葉もかけることができず、ぼんやりとして、魂を奪われたようになってしまって、ついて行くと、この女性は朱座の門に立ち、または両替屋の表に立ち、戸の開かないのを恨めしそうに見ていた様子であった。「さては浮気女に違いない。まだ夜も明

一 網でとらえて、締め殺した鳥。
二 それまでに締め殺した鳥の霊を弔うこと。
三 瀬戸内海沿岸で、桜の咲く頃寄って来る鯛。体色が薄紅色で、きわめて美味。
四 二・五センチぐらいの三角形をした二枚貝の一種で、南日本に多く産し、表面が薄紅色で光沢があり、美しいので貝細工に用いる。
五 春の終り時。
六 地引網漁法。浅い海で、海底に網を張って、船で岸まで網を引き、さらに網を陸上に引き揚げて魚をとる漁法。瀬戸内海では晩春の頃から、鯛・さわらなどをこの漁法でとる。
七 和泉国、堺の町の海岸。堺でとった魚を前魚といい、美味で知られる。
❖堺の浦は歌枕で、「行く春の堺の浦の桜鯛あかぬかたみに今日や引くらん」（藤原為家）の歌は『名所小鏡』などにも載り人々に知られている。この部分は右の歌をふまえている。
八 目を荒く編んだ籠。ここは魚荷の籠。
九 堺の町の中央を南北に通じる大通り。
一〇 大道筋の北部にある町。

宿にさそひゆかん」と、無分別をおもひ立ち、我も〳〵とちかより、「夜のお一人は心元なし。何方へなりともおくりとどけてまゐらすべし。その花一枝たまはれ」と申せば、「我がくるしむもこれゆゑなり。藤には春の雨風をだにいとひしに、ましてや人の手して折る事の情なし。昼見らるるさへ惜しきに、一六見ぬ人のためとて折りて帰りし人の、妻や娘のにくさに、かく取りかへしにありく」と、いふかとおもへば、いつともなう、影消えてなかり。

皆々不思議と、所の人にこの事をかたれば、「一七おもひあた



内裏の南殿の庭に移植された金光寺の白藤の精が、藤あやめの咲く頃、天皇の夢に現れたことを描く。

けない間の楽しみに、南の端の出合宿に誘ってやろう」と無分別に思い立ち、我も我もと近寄り、「夜、お一人で歩いていらっしゃるのは心配です。お宅がどちらでもそこへ送りとどけてさしあげましょう。その花を一枝ください」と言うと、「私が苦しむのもこのためです。藤の花には春のやわらかい雨風さえも嫌いますのに、それにもまして、人の手で折るのはつらいことです。昼間、人々に見られるのさえ惜しいのに、見ない人のためといって折り取って帰った人々の妻や娘が憎くて、このように取り返しに歩いています」と言うかと思うと、いつとなく姿が消えて、いなくなってしまった。

皆の者が不思議なことがあるものだと、この土地の人にこの事を語ると、「思い当った物語がある。昔、後小松院の御時、この土地の金光寺にある白藤の花房がすばらしく美しい、ということを院がお聞きあそばされて、藤を京都に移し、紫宸殿の前の大庭にお植えになったところ、春闌けても花の咲かないことを後悔なさっておられたが、ある夜、藤の精が院の御夢に現れて、ありありと歌を詠んだ。『思ひきや堺の浦の藤波の都の松に懸かるべきとは』とあったので、院は再びこ

一二 あまりのことにあきれて、の意。
上層の若い女性が供を連れないで夜中一人歩きすることは常識では考えられないので、こういう。
一三 朱および朱墨の販売を独占的に幕府から許可された商人の座で、堺では小田助四郎家の一家のみが、朱の製造を幕府に許されていた。
一三 手数料を取って、金(大判・小判・一歩金)と銀との交換を業とする家。多く金融業を兼ねる富裕町人。
一四 大道筋の南の端。
一五 男女の奉公人が密会する場所として使われた家。
一六 「田子の浦の底さへ匂ふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」(拾遺・夏)をふまえる。
一七 原本「思ひありし」。

りし物語のあり。むかし後小松院の御時、この里金光寺の白藤たぐひなき花房をきこしめしおよばれて、藤を都にうつされ、南殿の大庭に植ゑさせられしに、春ふかくなれども花の咲かぬ事をくやませ給ふに、ある夜藤の精、御枕の夢にあらはれて、まざ〳〵と詠みぬ。『おもひきや堺の浦の藤浪の都の松にかかるべきとは』と見えければ、二たびこの所へ、おくりかへさせ給ふと伝へしなり。もしもさやうの事か」と、夜明けておの〳〵、金光寺に行きて見るに、あんのごとく、見物折りてかへりし花どものこらず、もとの棚にあがりし。「さては名木名草の奇特」とて、その後は下葉一枚あだになさじとなり。

力なしの大仏

長崎半左衛門が、柄杓の曲づくしを、面妖とおもへば、京の樵木町に、若い者ども集まりて、たばね木山のごとくつみかさね、下よりは三間高し。上より、「茶が呑みたい」とど

の所に藤をお返しになったと伝えている。あるいはそのようなことであろうか」と夜が明けて、皆の者が金光寺に行って見ると、思ったとおり、見物人が折って持ち帰った花々は残らず元の藤棚に帰っていた。「さては名木名草の不思議のしるしのあらわれである」といって、その後は下葉一枚もむだに折り取ることはなかった、ということである。

力なしの大仏

長崎半左衛門が見せる柄杓の曲芸を、珍しいことと思っていると、京都の樵木町では、若い者たちが集まって、たばね木を山のように積み重ね、その高さ三間（約五・七メートル）の上から、「茶が飲み

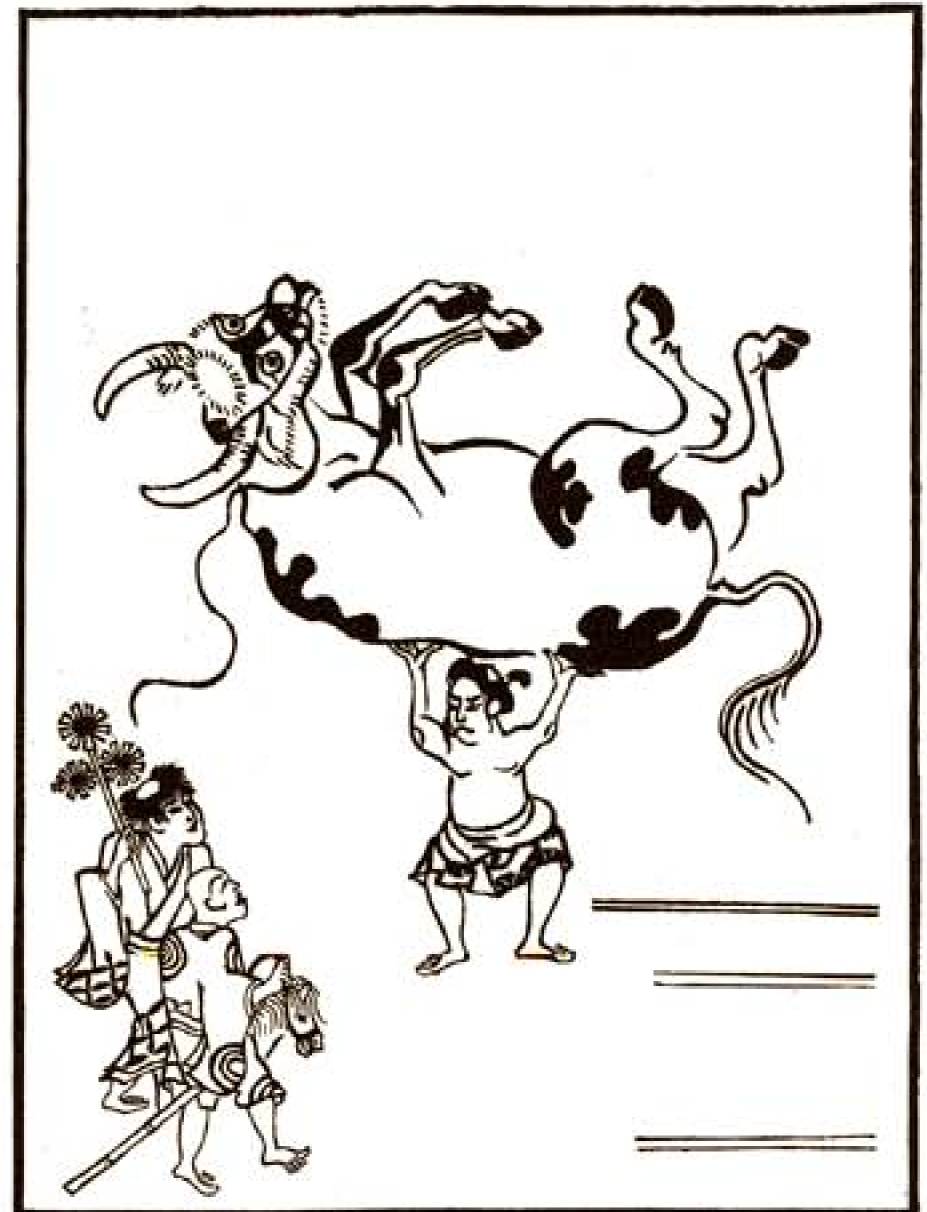
一 在位は一三八二〜一四一二年。室町時代。 二 堺市宿屋町（大道筋の北部にある町）にあった寺。承和年間（八三四〜八四八）創建。時宗の寺院で、俗に阿弥陀道場とも称した。 三 紫宸殿。 四 堺の浦の藤の花が都の松に懸かって咲くであろうとは思ってもみなかったことです（都に移植されようとは思わなかった）。 五 奇異のしるしがあること。 六 むだに折り取ることはしない。

❖地誌『堺鑑』中の金光寺の条に、「堂前ニ藤有リ、人王百一代後小松院ノ御宇ニ及ンデ、此ノ藤ヲ帝聞コシ召シテ即チ帝都ヘ移植ヱサセタマフニ、程ナク枯レニケリ、或ル夜、帝夢中ニ、思ヒキヤ堺ノ浦ノ藤浪ノ都ノ松ニカカルベキトハ、ト御夢想アリシニ依リテ、正シク彼ノ藤ノ精霊ノ、玉体ニ奏シ申シケルヨト、御感有リテ、勅筆ニ歌ヲ遊バサレ、又、御製ヲ添ヘサセ贈リ返シタマフヲ、植置キシニ程ナク栄エテ有リシ由ヲ帝、都ニ聞コシ召シテ、又、御詠吟ヲ下シタマフ…国俗ノ謡ヒ物ニ其ノ首尾ヲ書連ネ吟弄セルモノアリ」と伝説が見える。

七 長崎仕込みの曲芸師であろうが、未詳。 八 柄杓を使ってする曲芸。 九 不思議。珍しいこと。→一一一ページ注二四。 一〇 河原町の東、高瀬川の西側、三条の北の町並をいう。たきぎ、柴、炭、材木商が並んでいた。 一一 手代。 一二 天目形の茶碗。 一三 琵琶

湖をいう。一四 滋賀県高島郡の琵琶湖畔。白髭神社がある。一五 高い岩の上から、人が湖水中に飛び込み、浮上して、見物人から銭を得る見世物の一種。一六 奈良県吉野郡の宮滝で、高い岩上から川中に飛び込み、川下で浮上して銭を得る見世物の一種。両手を身体にそえ、両足を合わせて飛び込み、水中に三メートルほどはいって両手を広げて浮き上がる。一七 飛鳥井家は代々蹴鞠の師家。一八 烏帽子を着して正式にする蹴鞠。烏帽子の着用には約束事がある。一九 油売りは行商人で二桶を一荷に担い、京坂では油桶の上に箱を置き、この箱で量をはかって売る。買手の持参した油差しに注ぐこともあるから、小さい口の外にこぼさずに注ぐ技術をもつ。二〇 文字を知らぬこと。読み書きのできぬこと。二一 当時は小将棋(現在の将棋)のほかに中将棋・大将棋があった。二二 車をあつかう人。鳥羽の車貸しは牛車を使う。二三 京都の南方、淀方面から京都市中へ物資を運送するには、鳥羽の作り道を北行し、東寺の西側に出て市中にはいる。二四 京都市南区にある


油売り
(和国諸職絵尽)


大仏の子(小仏)が牛を宙差しにするさま。左下の子供は風車、竹馬遊びをしている。彼らと同一年齢の九歳頃の小仏の大力を示す。

よめば、天目に入れながらなぐる。すこしもこぼさず取る事、幾度にてもあぶなからず。また近江の湖にて、白髭の岩飛び、吉野の滝おとし、これ皆練磨なり。飛鳥井殿の、烏帽子付けの鞠を見て、油売一升はかりて、銭の穴より、雫も外へもらさず、通しけるとなり。「たとへば、無筆なる者、将棋の駒書くに同じ」と、功者なる人の申し伝へし。

　その頃、下鳥羽の車使ひに大仏の孫七とて、その生れつき、千人にもすぐれて、都がよひに、東寺あたりの小家へはいる事を、あたまつかへて、迷惑す。されどもすこしも力なくて、

たい」と大声で言うと、天目茶碗に茶をいれたままほうりあげるが、中にはいっている茶を少しもこぼさず受け取ることは、何度しても失敗しない。また、近江の琵琶湖の白髭の岩飛び、吉野の滝落しの業、これは皆訓練の結果である。飛鳥井殿の烏帽子をつけた人の蹴鞠を見ながら、油売りが一升(約一・八リットル)の油を量って、銭の穴から流すのに、雫一滴、外にこぼさず通したということである。「それは、たとえば文字を知らぬ者でも、将棋の駒の文字を常に書いている者は、それができるのと同じである」と物事に鍛錬した人が言い伝えている。

　以前、下鳥羽の車力に、大仏の孫七という者がいた。生れつき衆にすぐれた大男で、京都へ通う時、東寺付近の小さな貧しい家にはいるのに、頭がつかえて困惑するほど、背の高い男であった。しかし、力は少しもなくて、力仕事をするのに、人に劣ることがたびたびあった。孫七は米一斗(約一四キログラム)の重さの物が片手で上げられないので、世間の笑い者となっていた。この所の若者には米一石二斗を宙差しにする者も数多くいる。

　大仏は生涯、無念なことだと思っているうちに、男子を一人もうけたので、成

真言宗の本山。教王護国寺。この付近は貧民が多く住していた。二五 貧民の住む小さい家。二六 困る。

一 力わざ。
二 勝負に負ける。おくれをとる。
三 米一斗。約一四キログラム。
四 米一石二斗。約一六八キログラム。米俵は一俵に三・五斗入れるのが一般なので、三、四俵ということ。
五 宙差し。頭上に差し上げる。
六 幼児が物につかまって立ち上がること。生後約一年。
七 京坂では六尺三寸(約一・九メートル)を一間とする。天秤棒の長さ。
八 荒神は神道の説では竈の神。仏教の説では障害を与える神。誕生した牛の息災を祈願するために荒神に参詣する。
九 身体がかたまる。体格がしっかりとする。
一〇 非常に驚くこと。
一一 近世では、行政上の区分として、京都の四囲に土塀を築き、その内部を洛中と呼び、洛中に隣接した諸地域を洛外と呼んだ。両者とも京都町奉行支配地。

達者事に、ひけをとる事たび〳〵なり。一斗のおもめ、片手にてはあがらず、世間の笑ひものぞかし。この里の若者、一石二斗を、中差しにする者あまたなり。

大仏一代、無念におもふうちに、男子ひとり、まうけぬるに、おとなしくなる事をまちかね、はや取立ちの時分より、六尺三寸の棒を持ちならはせ、三歳の時は、はや一斗の米をあぐる。それより段々仕込み、八歳の春の頃、手なれし牛の、子をうみけるに、荒神の宮めぐりもすぎて、やう〳〵牛の子もかたまり、我と草村にかけまはるをとらへて、はじめてかたげさせけるに、何の子細もなく持ちければ、毎日三度づつかたげしに、次第に牛は車引くほどになれども、そも〳〵より持ちつづけぬれば、九歳時もとらへて、中差しにするを、見る人興を覚ましぬ。

後は親仁にはかはり、洛中・洛外の大力、十五歳より鳥羽の小仏とぞ名乗りける。

長を待ちかねて、やっと立ち上がることのできるころから六尺三寸の棒を使うことを習わせ、三歳の時には、その子ははや一斗の米を持ち上げることができるようになった。それからだんだんに仕込んで、八歳の初めの春のころに、使っていた牛が子を生み、その子牛が荒神の宮巡りの祝いを過ぎ、やっと体がかたまってしっかりとして、子牛だけで草原を駆け回っているのをとらえて、初めて担ぎ上げさせると、やすやすと担ぎ上げたので、それから毎日三度ずつ担ぎ上げさせているうちに、牛は車を引くほどの大きさになったけれども、初めから担ぎつづけていたので、九歳の時にも、その牛をとらえて宙に差し上げるので、それを見た人々は肝をつぶして驚いた。

後には父親に代って洛中洛外の大力といわれ、十五歳の時からは鳥羽の小仏と名のるほどの大力となり世間に知られるようになった。

一二 淀川でも、京都市伏見区の淀付近で捕獲する川魚は京坂では美味とされ、特に鯉は淀鯉とよばれ、その味は日本で最も美味とされた。
一三 はなはだ小さい船をいう。
一四 目印。見わけることができるような印。
一五 いつの間にか気づかぬうちに。
一六 鯉は鱗に十字の模様がある。これが変形したか。
一七 紋所の名。巴が一つ描かれている紋。


ひとつ巴

一八 鯉は水を離れてもなかなか死なない。
一九 鯉は十八年以上も生きると大きいものは一メートル数十センチにもなり、十四、五歳の女性の身長ほどになる。「鯉…老スル時ハ則チ鱗色稍黒也…一尺許リノ者ハ二年鯉…其ノ八須波(八年)ハ二尺一、二寸有リ、毎一年長ズルヤ一、二寸、三尺ニ近キ者希レ也、三尺有余ノ者ヲ呼ンデ尺ノ鯉ト曰フ」(和漢三才図会四十八)。
二〇 妻を求めること。
二一 年をとった内助自身も鯉を得てからすでに十八年経っているので、かなりの年齢であることが推測される。

鯉の散らし紋

川魚は淀を[一二]名物といへども、河内の国の、内助が淵のざこまで、すぐれて見えける。

この池むかしより今に、水のかわく事なし。この堤にひとつ家をつくりて、[一三]笹舟にさをさして、内介といふ猟師、妻子も持たず只ひとり、世を暮らしける。

つね〴〵取り溜めし鯉の中に、女魚なれどもりりしく、慥かに[一四]目見じるしあつて、それぱかりを売り残して置くに、[一五]いつのまかは、[一六]鱗に[一七]ひとつ巴出来て、名をともゑとよべば、人のごとくに聞きわけて、自然となつき、後には[一八]水をはなれて、一夜も家のうちに寝させ、後にはめしをもくひ習ひ、また手池にはなち置く。はや年月をかさね、十八年になれば、[一九]尾かしら掛けて、十四五なる娘のせい程になりぬ。

あるとき内助に、[二〇]あはせの事ありて、同じ里より、[二一]年がまへなる女房を持ちしに、内介は猟船に出しに、その夜の留守

恋の散らし紋

川魚は淀を名物とする、と世間にいうけれども、河内国の内助が淵は、ここにすむ雑魚までが、すぐれているように見える。

この池は昔から今にいたるまで、水の干上がるということがなかった。この堤の上に、内助という漁師が一軒家を造って、小さい船に棹さして日を送り、妻子も持たずただ一人住んでいた。

常日頃取り溜めていた鯉の中に、雌ではあるけれども元気がよく、はっきりと目印がついているのがあって、それのみを売り残しておくうちに、いつの間にか鱗に一つ巴の紋ができて、名をともえとよぶと、人間のように聞きわけて、自然となつき、後には水から出、一夜中でも家の中に寝させることができ、後には飯をも食べる習慣がつき、あるいは生簀にも入れ置いていた。そのうちにはやくも年月が経ち、十八年になると、頭から尾までが十四、五歳の娘の背丈ほどの大きさになった。

一 波がたちさわぐ様子を描いた模様。
二 男女が情を通じていること。また、その人。
三 又候や。またしても。重ねて。
四 始め終わり。一部始終。
五 納得してほしい。わかってほしい。

に、うるはしき女の、水色の着物(きるもの)に立浪(たつなみ)[一]のつきしを上に掛け、うらの口よりかけ込み、「我は内助殿(ないすけどの)とは、ひさ〴〵のなじみ[二]にして、かく腹には子もある中なるに、またぞろや[三]、こなたをむかへ給ふ。このうらみやむ事なし。いそいで親里(おやざと)へ帰りたまへ。さもなくば、三日のうちに大浪(おほなみ)をうたせ、この家をそのまま池に沈めん」と申し捨てて、行方(ゆきがた)しれず。

妻は内介(ないすけ)を待ちかね、おそろしきはじめ[四]を語れば、「さら〳〵身に覚(おぼ)えのない事なり。大(おほ)かたその方(はう)も合点(がつてん)[五]して見よ。このあさましき内助に、さやうの美人、なびき申すべきや。



内助が愛した鯉が、口から子の形をしたものを吐き出すさま。舟の右端の艫(とも)にあるのは魚籠(びく)。

ある時、内助に縁組のことがあって、同じ村から、年のいった女房をもらった。内助は漁をするために舟に乗って出たところ、その夜の留守の間に、美しい女が水色の立波模様のついた着物を上に着て、裏口から駆け込み、「私は内助殿とは長らく契りを結んでいて、このように腹には子もある仲ですのに、またしてもあなたを家に入れられました。この恨みはちょっとやそっとではありません。急いで親元へお帰りなさい。そうしなければ、三日のうちに大波をあげさせてこの家をこのまま池に沈めてしまいます」と言い捨てて、行方知れずになった。

妻は内助が帰ってくるのを待ちかねて、恐ろしかった事情(いきさつ)を語ると、内助が言うには、「全くそのようなことは身に覚えのないことだ。だいたい、おまえも考えてごらん。この貧乏な内助にそのような美人が恋い慕ってくるものか。もっとも、田舎(いなか)まわりの紅屋(べにや)や針売りの女なら思い当ることもある。それらはしかし、その時々に話をつけてあるから、心配はない。何かが幻となって現れたのではないか」とまた、夕暮れから舟に棹(さお)さして出ると、にわかに小波が立って荒れだし、浮藻(うきも)の中から大鯉(おおごい)が舟に飛び乗り、口から子の

もし在郷[六]まはりの、紅[七]や・針売[八]のかか[九]には、おもひあたる事もあり。それも当座〳〵にすましければ、別の事なし。何かまぼろしに見えつらん」と、又夕暮より、舟さして出るに、俄にさざ浪立つてすさまじく、浮藻中より、大鯉ふねに飛びのり、[一〇]口より子の形なる物をはき出し失せける。やう〳〵にげかへりて、生洲[一一]を見るに、かの鯉はなし。

「惣じて生類を深く手馴[一二]れる事なかれ」と、その里人の語りぬ。

形のものを吐き出して去って行った。内助はやっとの思いで逃げ帰って生簀を見ると、かの鯉はいなくなっていた。

「すべて、動物をあまり深くかわいがってはいけない」と、その村の人たちが語った。

六 在郷は都会から離れた土地。田舎。村々をまわって行商すること。また、その人。

七 紅その他の化粧品を売る商人。女性が行商する。

八 針売りの行商人。男性、あるいは年をとった女性が行商する。小間物も兼ねて売る。

九 卑しい者の妻の称。

❖紅屋・針売りの女性は行商するが、時には売色もする。その場合は、内助は、その時その時で金品を与えて後日に紛争の起こらぬようにしてある、ということを述べている。

一〇 内助は鯉の口を性の処理に使っていたのである。

一一 漁獲した魚類を水中に生かしたままで置く所。

一二 動物を手ずから育てて馴らすこと。手なずけて馴らす。

入絵

西鶴諸国はなし

五

巻五　あらまし

一　挑灯に朝顔　奈良の茶道者に、町の者が朝顔の茶の湯を所望するが、約束の茶会に遅刻する。そこで、亭主は提灯をともして出迎えし、また、花生けには芋の葉を生けてこれに対応した。茶道の心がなければ主客の楽しみはない。昔、茶の湯に招かれるに、庭の掃除がしていないので、客が席の趣向を推測するに、床に「八重葎……」の歌を掛けてあった。また、諸道具が唐物で、掛物が「天の原……」の歌を掛けた人がいた、という「茶の湯」譚。

二　恋の出見世　江戸、麹町の安倍茶問屋の独身の主人の新しい出見世へ、浪人が「美人」の娘を連れ来て、婿になることを頼み、娘の遣い金小判五百両と引出物としての刀・脇差を与えた。

三　楽しみの鱏鮚の手　鎌倉の金沢の流円坊という遁世者の庵につがいの鱏鮚が来て馴れる。ある時、久しく見えない一匹もやって来て紫の衣を差し出す。これは故郷伊勢大淀の円山上人の衣。上人遷化の由の通知が後にあったという、馴れた「生類」の話。

四　闇がりの手形　越後の侍、今川采女が人を討って女と逃亡する。道中手形無しで間道から信州に入って、山家に宿泊する。その夜、暴れ者が押し入って、暗がりの中で「横道」にも女を犯す。次の日、所の奉行に訴え出、犯人たちには背中に鍋墨の手形が付いていると、女が申し出、取り調べられ、仲間十八人が死罪になる。

五　執心の息筋　南部の鉄商人、仙台屋宇右衛門は、男子三人があった妻が没して、後妻をもつ。宇右衛門病死の後、継母が男子につらく当り三人とも死んでしまう。継母に男子の「幽霊」が現れて恨みの執念の息を吹きかけ焼き殺す。

六　身を捨てて油壺　河内、枚岡の美女が「後家」の老女となり、夜の灯油に不足して明神の灯明の油を盗みに行く。これを社人が不審に思い、夜、様子を見ると山姥姿である。妖怪と思い、雁股の矢を射て首を切る。身を捨てたその老女の首が火を吹いて空に飛ぶ。それよりこの所に「姥が火」が出現する。

七　銀が落としてある　江戸店を出して富豪となった商人が大坂に帰る。ある正直者が訪ねゆき、江戸に下って商人になろうと語る。富豪は、江戸はもう今では昔ほどではない、道で銀を拾うのがまだしもだと話す。正直者はこれを真に受けて下り、江戸市中の拾い屋になる。人宿の主人や近所の衆も小判を落としてやり、拾わせる。それから財を得、やがて大商人となる「正直」者成功譚。

近年諸国咄

大下馬　巻五

目録

一 奈良市の春日野の付近。

二 本店より分かれて他所に出した店。支店。

三 山の手の大通りで、半蔵門より四谷御門の外まで、十一町(約一・二キロメートル)あり、一直線で長く、町家があった。横町はおもに旗本屋敷。主人公の長兵衛が勤めていた主家があった。

四 猟虎の類か。「麻姑ノ手ノ爪ハ人ノ爪ノ如クナラズ、形皆鳥ノ爪ニ似タリ、蔡経(人名)心中私カニ言フ、若シ背大イニ痒キ時、此ノ爪ヲ得テ背ヲ爬カバ、当ニ佳ナルベキ也ト」(神仙伝・王遠)とある仙女に基づく。

五 神奈川県鎌倉市。鎌倉幕府の所在地であった。

六 横浜市金沢区にあり、鎌倉に近いので「鎌倉の金沢」と記した。真言律宗の名刹、称名寺があり、紅葉の名所として知られ、謡曲「六浦」に作られている。

㊃ [一]闇(くら)がりの手形　　横道(わうだう)
　　[二]木曾(きそ)の海道(かいだう)にありし事

㊄ [三]執心の息筋(いきすぢ)　　幽霊
　　[四]奥州南部(あうしうなんぶ)にありし事

㊅ 身を捨つる[五]油壺(あぶらつぼ)　　後家(ごけ)
　　[六]河内(かはち)の国平岡(ひらをか)にありし事

㊆ 銀(かね)が落としてある　　正直
　　江戸にこの仕合(しあは)せありし事

一「手形」は、女が鍋墨でつけた手の形と、女の関所手形とをかける。女の関所通行には手形が必要であった。女采女の連れの女はそれを持たず出奔し、間道を抜けて道中する。「くらがり」は夜の暗闇と不正とをかける。女の関所手形には人数・発着地・身分などを記す。越後では高田の城主が発行する。
二 木曾は信濃国の西部を称するが、信濃国全体をもいう。「木曾の海道」とは中仙道をいう。
三「執心」は深く思いをかけること。恨みのために吐く息が火炎となって継母を焼き殺した話。
四 岩手県盛岡市。南部氏十万石の城下町。付近から鉄を産出する。
五 灯油を入れた壺。
六 大阪府東大阪市の東部。枚岡神社がある。
七 文学・芸術などの情趣や美を理解する人。
八 和歌二首にからまる話を述べるために、まず和歌にふれた伏線。
九 みやびやかな芸術である和歌・書道・絵画・管絃・聞香・立花・茶の湯などをいう。
一〇 上品な魅力をもつことをいう。
❖名物茶入れの松屋肩衝(かたつき)を所有していた奈良転害今小路町に住む松屋

挑灯に朝顔

野は菊・萩咲きて、秋のけしき程、しめやかにおもしろき事はなし。[七]心ある人は[八]歌こそ和国の風俗なれ。何によらず、[九]花車の道こそ一興なれ。

奈良の都のひがし町に、[一〇]しをらしく住みなして、明暮茶の湯に身をなし、[一一]興福寺の、花の水をくませ、かくれもなき[一二]楽助なり。

ある時この里の[一三]こざかしき者ども、[一四]朝顔の茶の湯をのぞみしに、兼々日を約束して、万に心を付けて、その朝[一五]七つよりこしらへ、この客を待つに、大かた[一六]時分こそあれ、昼前に来て、[一七]案内をいふ。

亭主腹立して、客を[一八]露路に入れてから、[一九]挑灯をともして、むかひに出るに、客はまだ合点ゆかず、[二〇]夜の足元するこそ、をかしけれ。あるじおもしろからねば、花入れに土つきたる、[二一]芋の葉を生けて見すれども、[二二]その通りなり。兎角心得ぬ人に

挑灯に朝顔

野には菊・萩が咲いている秋の景色ほど、しみじみとおちついて情趣のあるものはほかにはない。風流の心のある人は和歌をもって第一の、日本特有の風流なならわしとする。しかし、何によらず風流の道はすべて人の興趣をわかせるものである。

奈良の都の東町に、品よく住み続け、毎日、茶の湯に身を打ち込み、興福寺の花の井の水を使っている有名な安楽人があった。

ある時、この町の小利口な者たちが、朝顔の茶の湯を望んだので承知し、前もってその日を約束して、万事に心づかいをし、その朝は七つの刻から準備をして、この客たちを待っていたところ、だいたい、朝顔の茶の湯には参会する時間にきまりがあるのに、昼前にやって来て、案内を請うた。

亭主は腹を立てて、客を露地に入れてから、提灯をともして迎えに出ると、客はまだ自分たちが無作法なことをしてい

の主人(源三郎・源之丞・甚十郎のいずれか)を暗に示すか。

一一 興福寺の西金堂。「東向、…此の堂のほとりに花の井とて名水あり」(奈良曝二)。

一二 安楽に生活する人。

一三 ちょっと利口である。生意気な。

一四 利休が露地庭に朝顔を多く植えて見事である由を聞いた豊臣秀吉が、これを見ようとして利休に朝の茶の湯を望んだところ、利休は、露地には咲いた朝顔を一輪も見せず、茶室の床の花生けにのみ朝顔の花を生けていた、という故事(智嚢)があり、千家では禁花。「朝顔ヲ入ルル事、今ノ人アマリセヌコトソウナリ、昔ハ朝顔ノ茶トテ一方ニナリテアリ」(槐記・享保十一年六月二十六日)。

一五 午前四時頃。

一六 事を行う時刻をいう。暁の茶の湯の席入りは七つか七つ半。茶の湯の参会などは風炉の火の加減や懐石(食事)などの都合もあって、普通には時間厳守。

一七 来訪を告げること。

一八 寄付の場所から茶室に至る間の庭をいう。

一九 暁の茶の湯では、席入り時はまだ暗いので提灯をとぼして亭主は迎えに出る。

二〇 夜道を行く歩き方。

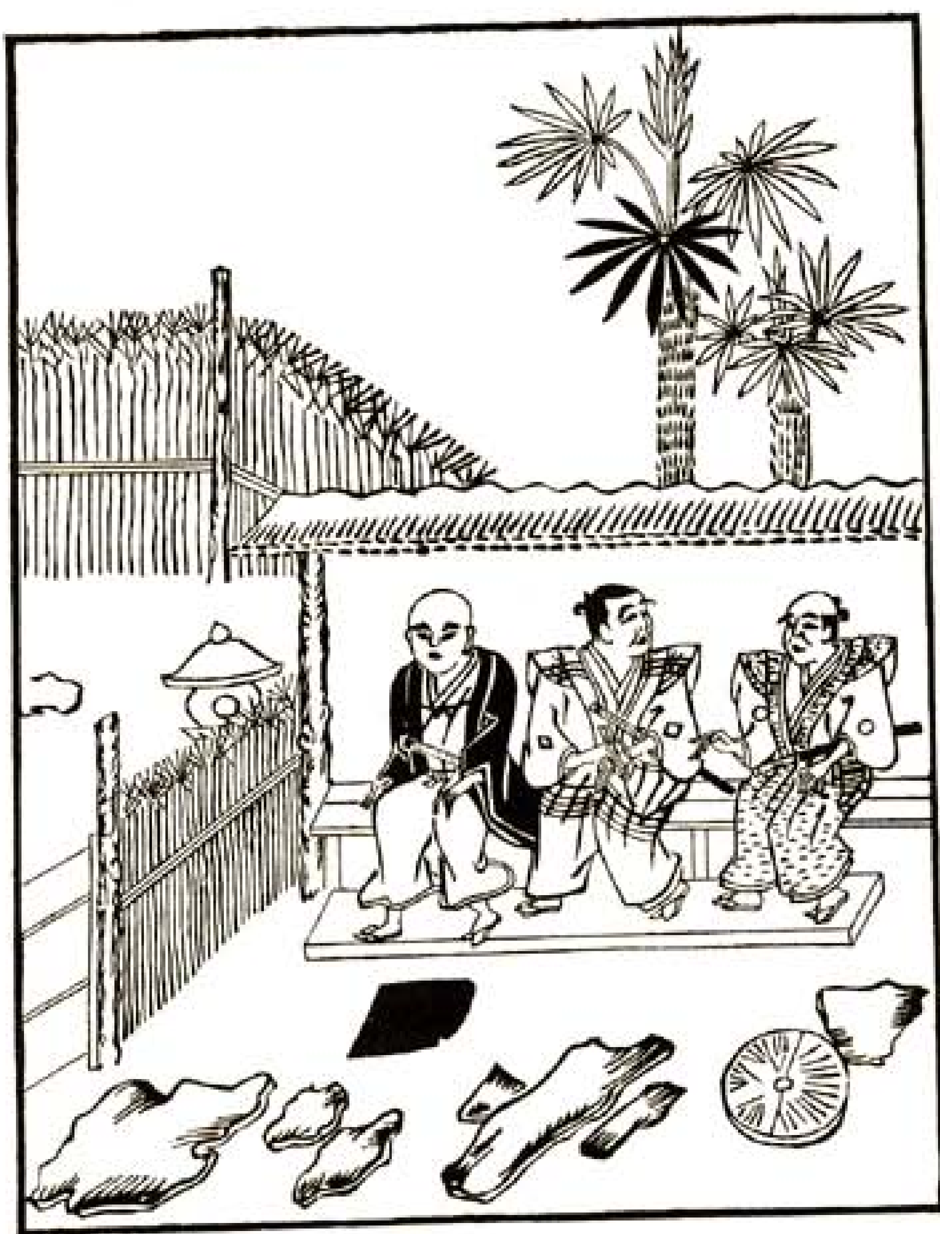
二一 さつま芋。さつま芋はヒルガオ科の蔓草で、花は昼顔のごとく朝顔に似る。

二二 別に不審に思わない。

は、心得あるべし。亭主(ていしゅ)も客も、心ひとつの数寄人(すきびと)[一]にあらずしては、たのしみもかくるなり。

むかし功者(こうしゃ)[二]なる、茶の湯を出されしに、庭の掃除(さうぢ)もなく、梢(こずゑ)の秋のけしきを、そのままにしておかれしに、客もはや心を付けて、いかさまめづらしき、道具出(いづ)べきとおもふに、あんのごとく、掛物(かけもの)[三]に、「八重葎(やへむぐら)[四]しげれる宿」の、古歌(こか)をかけられける。

またある人に、漢(かん)[五]の茶の湯を望みしに、諸道具皆唐物(からもの)をかざられしに[六]、掛物ばかり、阿倍仲麿(あべのなかまる)[七]が詠(よ)みし、「天の原(あまのはら)[八]ふり



るのに気づかないで、夜中に暗い所を歩くような歩き方をするのは、たいへんおかしかった。主人は内心おもしろくないから、花入れに土のついた芋(いも)の葉を生けて見せたが、客たちはその事にも不審を起こさなかった。とにかく風流の心得のない客には亭主の方の心得が必要である。亭主も客も同じ心になる数寄人(すきびと)でなくては、茶の湯の楽しみも十分ではないのである。

昔、すぐれた茶人が茶の湯をなされた時、庭の掃除もせず、庭木の梢(こずえ)も枯葉のついた秋の景色をそのままにしておかれたところ、客もこれにすぐ心をかけて、きっと珍しい道具が出るに違いないと思っていると、推測どおり床の掛物に、「八重葎(やえむぐら)しげれる宿」の古歌をかけられていた。

また、ある人に唐物(からもの)の茶の湯を望んだところ、諸道具はすべて唐物を用いられたが、掛物のみは、阿倍仲麻呂(あべのなかまろ)が詠んだ、「天の原ふりさけ見れば春日(かすが)なる三笠の山に出でし月かも」の歌をかけられた。客は皆感心して、「この歌は仲麻呂が唐の地から故郷を思って詠んだ歌である」と、しばらくの間、亭主の作意を示した道具飾りを観賞していたということであ

一 数寄は茶の湯を好むをいい、茶人。
二 諸芸に特に熟達した。ここは、その人をいう。
三 床に掛けた掛軸。
四 「八重葎茂れる宿のさびしきに人こそ見えね秋は来にけり」(拾遺・秋 恵慶)。この歌と後出の仲麻呂の歌とは「小倉百人一首」に選ばれており、その定家筆の色紙についてはつぎの逸話があって、茶の湯の掛物となった。「(小倉色紙屏風の)一双遺りて世に伝ふ、其れも(色紙)三十枚ばかりあり、(武野)紹鷗、天の原の歌と八重葎の歌とを表具し、掛物にすとなり」(老人雑話下)。
❖この話の原拠は、ある茶人が千利休を招待した茶の湯での出来事(『槐記』享保十三年三月二十二日の条に見える)。
五 唐物(中国製の道具)を用いてする茶の湯。
六 道具を茶室に飾り、その道具を用いて客に馳走すること。原本「かざれしに」。
七 奈良時代の人。七一七年に渡唐し、朝衡と改名して、玄宗皇帝に仕えた。官を辞し帰国しようとしたが、暴風のため果たさず、断念し、再び、粛宗・代宗に仕え、七七〇年、唐土で没した。
八 「もろこしにて月をよみける／天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」(古今・羇旅)。この色紙をかけて、利休が豊臣秀吉を茶の湯に招待した(槐記・享保十三年

三月二十二日)。

九 →注八の詞書。

一〇 作意。

❖以上、この章は茶の湯の逸話三話で巧みに構成されている。

一一 静岡県の安倍川地方を中心として産出する煎茶。「安倍に水窪と云ふ所あり、此の所に作る茶至つて極なり、然れ共木株少なし、是に差続きて水見色と云ふ所の茶よし、是れ大方に水窪に対する也、其の茶は茶料と云ひて幅三里長さ四十余里、此の所余の物を植ゑず都べて茶株也、是れ世にいふ阿倍茶也」(渡辺幸庵対話)。江戸で使用される茶としては名の通ったもの。

一二 物品を買い集めて、他の問屋や小売商に売る商人。ただし、江戸では直接に諸人に売る場合も多かった。

一三 中程度に富んでいること。



茶の湯の席入り前のさま。腰掛け待合で待つ客。正客は僧侶、二・三客は町人。刀脇差は茶室の外の刀掛けに置いてにじり口から席入りする。

さけ見れば春日なる三笠の山に出し月かも」の、歌を掛けられたり。いづれも感ずるに、「この歌は中丸、[九]唐土から古里をおもうて、詠みし歌なり」と、しばらく亭主の作[一〇]の程を詠めけるとなり。「客もかかる人こそ、この道をすかるる甲斐あれ」と、ある人の語りし。

恋の出見世

[一一]安部茶問屋[一二]して、江戸麹町に、[一三]よろしき者あり。年ひさし

る。「客もこのような人があってこそ、この茶の湯の道を好んでする甲斐があるというものだ」とある人が語った。

恋の出見世

安倍茶の問屋をして、江戸の麹町で中ぐらいの生活をしていた商人があった。

く遣ひし、[一]若いものに、長兵衛と申して、[二]たまかに商ひの道精に入りければ、親方次第に富貴になりぬ。はや[三]年も明けば、[四]下町に見世を出させ、[五]国元より母親をよびよせ、[六]うしろみさせて、よき商人にしたてける。いまだ定まる妻なければ、あなたこなたと聞き立てける。

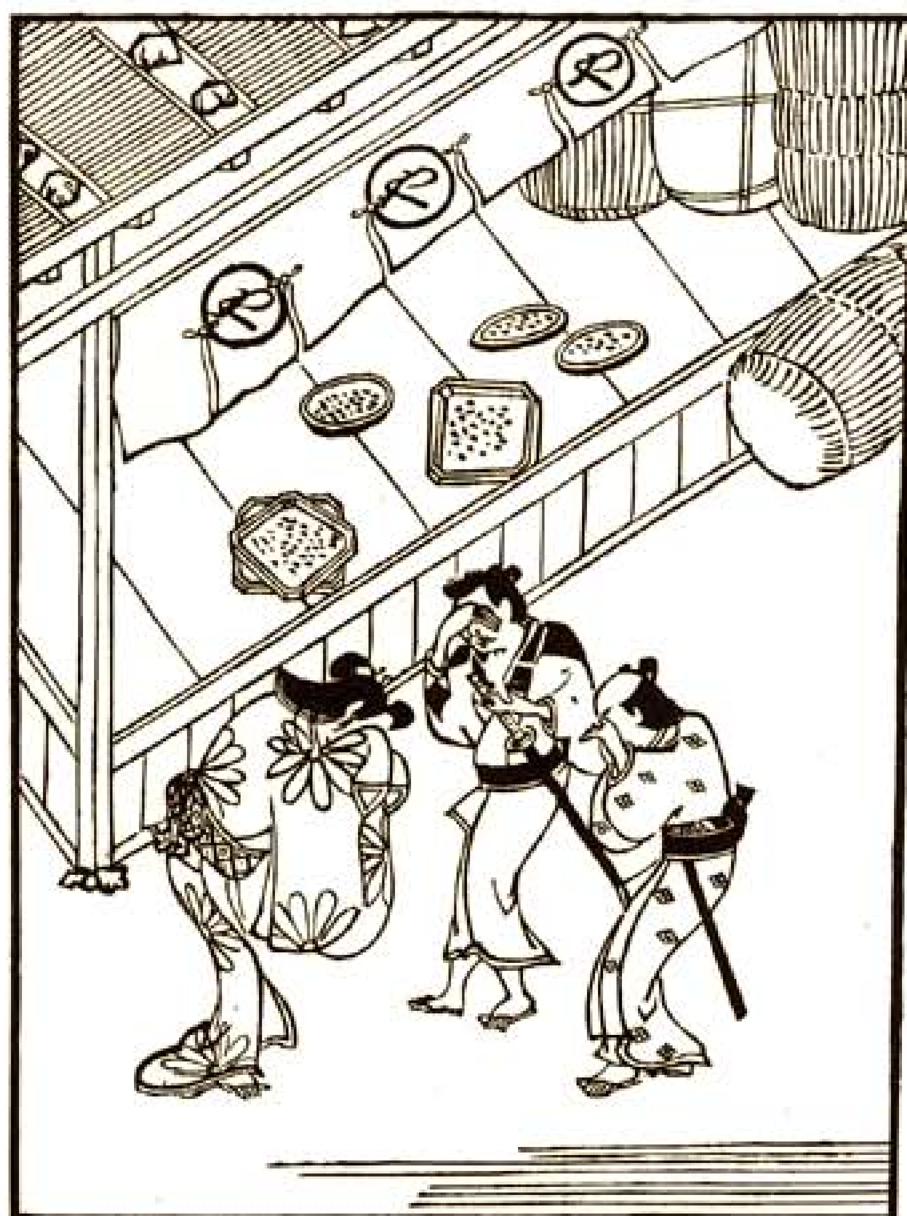
　折ふしは[七]極月のはじめつかた、[八]世間せはしき時分に、[九]素紙子ひとつに[一〇]深編笠着たる男、明けてより暮れまで、四五度門を通り、[一一]茶棚を見入り、しばし立ちとどまるを、亭主もこころえず、[一二]近所の者も気を付けて、「これは、[一三]ねだれ者なり。油断したまふな」と申す処へ、またかの男来つて、内に入り、「長兵衛殿と申すはこなたの事か。すこしの御無心にまゐつた」と申せば、「この方も[一四]世帯の取付きにて、御用に立つ程の事はなるまじ。少しの[一五]御合力はやすき御事」と申す。あたりの人、[一六]勝手にまはりて様子を聞くに、かの牢人の申すは、「[一七]御心入れかたじけなし。我等の望み、さやうの儀にはあらず。母親のなき娘ひとり持ち申し候が、我が子ながらさのみいやしからず。[一八]そのかたの心入れ、兼ねて聞きおよび候へば、

長年使っていた手代に長兵衛という、細かい点にもよく気のつく商売熱心な男がいたので、主人はしだいに富裕になった。すでに、奉公の年季も明けたので、主人は長兵衛に、下町に支店を出させ、国元から母親を呼び寄せ世話をさせて、立派な商人に仕立て上げた。しかし、まだ定まった妻もないので、あちらこちらと適当な相手を捜していた。

　ちょうどその時、十二月の初め頃で、世間の忙しい時分に、素紙子一枚を着て、深編笠をかぶった男が、早朝から日暮れまで、四、五度も店の門を通り過ぎ、茶棚を見守り、しばらく立ち止まる様子を、亭主も不審に思い、近所の者も気をつけて、「これはゆすりです。油断なされるな」と言っているところへ、また、その男がやって来て、内にはいり、「長兵衛殿と申すのはあなたのことですか。少し言いにくいことを頼みにやって来ました」と言うので、「こちらも店をもち始めたばかりですから、御用に立つほどのことはできません。しかし、少しのご援助ならやさしいことです」と長兵衛は答えた。近所の人々は、台所にまわって様子を聞いていると、その浪人が言うには、「ご心配はありがたい。しかし、わが望

一 手代。
二 細かに心を用いること。
三 年季奉公の期間が終わる。江戸時代は最長十年と限り、それ以上奉公を続ける場合は請状を改めた。なお、お礼奉公といって年季が終わった後、普通はさらに一年奉公する。
四 神田・日本橋・京橋などの低地域。商工人の多い町。主家がある麹町の山の手に対する。
五 駿河国であろう。
六 生活の世話をさせる。
七 十二月をいう。
八 大節季(大晦日)が近いので一般に気ぜわしくなる時期。
九 紙子は普通は柿渋を塗って日に乾かすが、柿渋を塗らないで製するのを素紙子という。京都清水坂の人が造ったので清水紙子ともいう。
一〇 藺草を編んで作った笠で、顔を隠すために用いる。
一一 茶を入れた壺を並べた棚。
一二 下町での新店なので、近所の者が教えたのである。
一三 ゆすりをする者。
一四 一家をもち始めた時。
一五 金銀や物品を他人に施し与えること。
一六 台所。
一七 心をくばること。
一八 原本「そのかた心入」。

是非に聟になりてたまはれ」と頼む。「それがし旦那[一九]もあれば、内談申しての上に、御返事」と申せば、「それまで間のなき事ぞ。申し掛かつて合点まゐらずば、これまでの命」とおもひ切るを、いづれも出合ひ、「ここは何とぞあるべし。我々に御まかせあれ」と申すうちに、乗物[二〇]・長持[二一]かき入れける。この娘の美人、東[二二]に見た事もない姿、おの／＼おどろきける。紙子袖より小判五百両取り出し、「これはむすめの遣ひ金なり。刀[二三]・脇指は引出物[二四]なり。今日より世に親ありとおもふな」と、いふ声の下より、髪をきれば、門より法師[二五]の、



長兵衛の店先。左から娘、浪人、長兵衛。俵は茶俵。板の間の丸盆・折敷は葉茶の見本。

みはそのような金銭のことではござらぬ。わが子なので言いにくいことながら、さほど醜い女ではござらぬ。あなたの商売熱心は前々から聞いていたので、ぜひ、娘の婿になっていただきたい」と頼んだ。長兵衛は、「私は主人もありますので、主人に内々話したうえで、ご返事をいたしましょう」と言うと、「それまでの時間はない。お願いしても承知してくださらぬのならば、自分もこれまでの生命でござる」と浪人は自害の覚悟を見せたので、近所の人々も出て来て、「ここはひと思案のあるところです。我々におまかせください」と言ううちに、乗物・長持を家の内にかつぎ入れてしまった。この娘の美しいことといえば、関東では見たこともないほどの姿であったから、皆々驚いてしまった。浪人は、紙子の袖の中から小判五百両を取り出して、「これは娘のつかい金です。刀・脇差は婿に差し上げる引出物です。今日からはこの世に親があると思うな」と言うやいなや、髪を切ると、門から法師の、「遅いぞ」と呼び立てる声に出て行き、行方知れずになってしまった。その後、いろいろとわけを尋ねたけれども、娘は泣きながら、

一九　従者・家来から主人をさしていう語。
二〇　江戸では嫁入りの際は町家でも駕籠に乗り、また、女乗物を大名家から借りてこれを用いることもあった。ここは侍の娘なので、知人の侍から乗物を借りたのであろう。
二一　嫁入りの時に嫁が持参する諸道具を入れる櫃。「一番の長持は水仕の棚の道具、二番の長持は黒棚の道具、それより次々の長持は呉服・夜の物、今は小袖櫃あり、その次の長持は手の道具いろ／＼、白長持には台所の道具、その次はつづら」（女重宝記二）。
二二　東国。江戸をいう。
二三　天和二年（一六八二）に町人が刀・脇指の両刀を帯びることが禁止された。
二四　婿引出物の略。婚礼の時に舅から新郎へつかわす贈り物。
二五　法体の男。

「おそい」とよび立て、行方しらずなりぬ。その後いろ〳〵子細をたづねけれども、泪にくれて、「名もなき者の娘なり」とばかり、かさねて物をも申されず。[一]この事申しあげけるに、[二]その通り済みぬ。

楽しみの鱆鮎の手

鎌倉の金沢といふ所に、流円坊と申して、[三]世を遁れたる出家あり。今は仏の道もふかく願はず、明暮、[四]丹後節の[五]道行ばかりを語りて、柴の網戸を引き立て、軒の松が枝に、蔦の葉のかかりて、紅葉するを見て、秋をしる。浪の月心をすまし、[六]雁のわたるを琴に聞きなし、只夢のやうに日を送りぬ。たくはへる物もなければ、露時雨の折ふしは、煙を立つる爪木もなし。

万その通りにして、死次第と、身を極めたまふ折から、入江にさざ浪たつて、見なれぬいきもの二疋、人におそれず近寄るを、よく〳〵見れば、鱆鮎といふものなり。一疋は、流

「名もない者の娘でございます」と言うだけで、それ以上はものを言われなかった。そこで、この事を町奉行に申し上げたところ、そのとおりに、長兵衛がこの娘の婿になるということで、落着した。

楽しみの鱆鮎の手

鎌倉の金沢という所に、流円坊という遁世者がいた。今は仏道も後世のことは深く願わず、この世の楽しみとして、毎日、丹後節の道行ばかりを語って、柴の編戸を閉じ、人と交際せず、軒の松の枝にかかった蔦の葉が紅葉するのを見て秋になったことを知るという生活であった。波に照る月影を見て心を澄まし、雁が列をなして渡って来るのを、琴を弾いているように聞き、ただ夢のように日を送っていた。たくわえたものとてもないので、少し時雨ると、食事を調えるための薪もなかった。

すべてをあるにまかせて生活し、生命が終わればそれだけのことと、流円坊が心をお決めになった折、入江に小波がた

一 町人の民事事件であるから、町奉行所に申し出たのである。
二 そのままに娘が長兵衛の妻になるということで落着した。
❖この話に出てくる、安倍茶問屋の主人はおそらく駿河出身であろうから、旗本屋敷の得意先が多かったと推測しうる。また、主人公の長兵衛は屋敷に近い商家の手代であったから、登場する浪人にもその人柄がしぜんと知られて、娘の婿にと望んだのであろう。
三 遁世者。
四 江戸の操浄瑠璃の開祖、杉山丹後掾(元和～寛文)の語った浄瑠璃節で、『洞房語園』によると、慶安の頃、江戸で流行した。
五 語り物で、通ってゆく沿道の名や光景、感想などを述べたもの。浄瑠璃ではこの部分の節はリズミカルな美しさをもつ。
六 雁が列をなして飛んでゆくさまが、琴柱を立てたように見えることをふまえる。

七 肉食を断ち菜食すること。
八「爪杖ハ桑木ヲ用ヒテ手指ノ形ヲ作リ、自ラ背ヲ掻ク所以ノ者、俗ニ之ヲ麻姑ノ手ト云フ、麻姑トハ仙女ノ名也、五車韻瑞ニ、麻姑山記ヲ載セテ云フ、王方平、蔡経ガ家ニ降リ、麻姑ヲ召シテ至ル、年十七八ノ女子ノ若シ、指ノ爪ノ長キ事数寸、経、其ノ痒キヲ爬クベキ事ヲ意フ、忽チ鉄鞭有リテ其ノ背ヲ鞭ツ、此ノ故事ヲ以テ名ヅクルノミ」(和漢三才図会二十六)。


まごのて
（和漢三才図会）


庵室の濡れ縁で流円坊に慣れた鰜鮎が耳をかいてくれているさま。鰜鮎は左下端のそれとで一つがい。

れ木をひろひ集めて抱へ、また一疋は、ほし肴を持ちて、物いはぬばかり、人間のごとく頭をさげて居る。この心ざし嬉しく、[七]精進をやぶりて、これをくひける。その後は手馴れて、淋しきとおもふ時には、かならず来て、よき友となりぬ。ことにたのしみは、身のうちのかゆさ、云はねど自然としりて、思ふ所へ手をさしのべ、そのこころよき事、命も長かるべし。今世上にいふ、[八]孫の手とはこれなるべし。

　次第になじみけるに、ひとつばかり来て、一疋はひさしく見えぬ事をなげき、「もしも命のをはりけるか」と申せば、

って、見なれない動物が二匹、人に恐れず近寄って来るのを、よくよく見ると、鰜鮎という動物であった。一匹は流木を拾い集めて手に抱え、また、一匹は干魚を持って、ものを言わないだけが人間とは違い、頭を人間のように下げていた。この気持をうれしく感じて、流円坊は肉食せず精進していたのを破り、この干魚を食べた。その後はなれ親しんで、淋しいと思う時には必ずやって来て、よい友となった。ことにうれしいことは、身体のかゆさを、流円坊が口に出して言わなくても自然と知って、かゆいと思う所に手を差し伸べてかいてくれる。その気持のよさは寿命も延びるほどである。今、世間にいう孫の手というのはこれである。

　だんだんとなじんでいるうちに、一匹だけやって来て、今一匹は長らくやって来ないので、これを悲しみ、「もしや生命が終わったのではないか」と聞いてみると、笑って沖の方を指さした。ますます合点がゆかない。それから百日ほど過ぎて、また、初めのように二匹連れだって夜中にやって来た。戸を開けると、なつかしそうに近く寄って来る。「どうして近頃は来なかったのだ」と聞くと、紫の衣をたたみながら差し出した。気をつ

笑うて沖のかたに指さす。いよ〳〵合点ゆかず。それより百日程すぎて、またはじめのごとく、二疋つれて、夜半にきたる。戸ざしを明くれば、なつかしさうに近くよる。「何としてこの程は見えぬぞ」とあれば、[一]紫の衣をたたみながらさし出す。心をとめて見るに、正しく我が古里にまします、伊勢の[二]大淀の上人、円山の御衣なるが、さても〳〵不思議なり。何とて物をいはぬぞ。この事きたしと、いろ〳〵おもふ甲斐なく、日数ふりしうちに、国元よりのたよりに、円山御遷化のよし、しらせける。[三]末の世のかたりくにかの御衣を持ちて、[四]伊勢の御寺にのぼりぬ。それよりこの所を、[五]衣の礒とぞ申しけるとかや。

闇がりの手形

[六]美女は身の敵と、むかしより申し伝へし。おもひあたる事ぞかし。

今川采女と申す人、[七]生国越後にて、[八]段々義理につまつて、

けてそれを見ると、確かに、わが故郷にいらっしゃる伊勢の大淀の上人、円山の御衣であるが、さてさて不思議なことである。どうしてものを言ってくれないのだ。これはどういうことなのか事情を聞きたいと、いろいろ思う甲斐もなく日数を過ごすうちに、国元よりの手紙に、円山がお亡くなりになった由を知らせてきた。後の世までの話の種にと、かの御衣を持って、伊勢の御寺に上った。それよりこの所を衣の磯と称するようになった、ということである。

闇がりの手形

美女は身の敵、と昔から言い伝えているが、思い当ることがある。

今川采女という人は、生国の越後で、一つ一つ不義理なことが重なっていって、ついに人を討って立ち退くようなはめに

一 僧侶の着る紫色の袈裟。朝廷で定めたもので、着用は勅許による。もと唐の制で、僧玄昉も唐にて着用を許された。日本では道元が建長元年(一二四九)、後嵯峨上皇より賜ったのが最初。
二 三重県多気郡明和町にあり、伊勢湾に面す。歌枕。
三 後の世まで伝わる話の種。「かたりく」は「語り句」で、語り草。慣用句。
四 円山の住んでいた寺。
五 所在不詳。
六 「美女ハ悪女ノ仇」(史記・外戚世家)の慣用句をもじった句。これに、「美女は命を断つ斧」(一代女一の一)という慣用句を合わせて句を作ったか。美女は自分にとって敵となり、難を与える。この章全体の内容を示す。
七 その人の生まれた国。
八 女のことから人々に不義理を重ねて、ついに殺人にまで至ったと考えられる。
九 この女は話の前後から見て、正妻ではない。
一〇 関所を通らずに、間道を抜けること。違法行為である。
一一 采女は越後の高田藩の侍を想定

人を討つてのきしに、親類のなき事、かやうの時のよろこびなりしに、なげきあり。この二とせあまり、[九]あひなれし女、この別れをかなしみ、「何国までも」と、袖にすがれば、是非なくつれて、只二人山越えに[一〇]立ちのき、やう〳〵と、あぶなき[一一]国元をはなれ、[一二]信濃路にさしかかりて行くに、[一三]追分より[一四]から尻をいそがせぬれど、この所は[一五]女房馬方にてはかどらず。心ざしぬる宿まで、日の暮れければ、定まりの泊り、外なる野外れの、ひとつ家のつねは、旅人をとめた事もなき、あるじにさま〳〵詫言して、情の一夜を明かすに、山風のはげしく、はやこの里は、九月の末つ方より、雪ふり初め、寒さもひとしほまされど、しのぐべき着替へもなく、[一六]木曾の麻衣の、ひとへなるをかさね、夜もすがら焼火して、[一七]いかき茶といふ物を呑むより、外のたのしみなし。世の憂き年貢のたらぬ事、「牛が一疋ほしき」など、咄し寝入りに、[一八]ゆるりの[一九]松かがり消えて、鼾ばかりなりぬ。

その頃、木曾の赤鬼と、[二〇]あざ名をよび、[二一]あばれ者のありしが、くみする若者、あまたあつめて、内談するは、「今日の

なった。親類のなかったことは、このような時には幸運であったが、また、不幸なことには、この二年余り親しんでいた女がいて、この女がこのたびの別れを悲しみ、「どこまでもお連れください」と袖にすがってせつに願ったので、しかたなく連れて、ただ二人、国境の関所を通らないで、立ち退き、やっと危険な越後の国内を離れて、信濃路にさしかかり、追分から空尻馬に乗り、道を急がせたが、この土地は女馬方で道がはかどらず、予定していた宿に到着せぬうちに日が暮れてしまったので、公許の宿屋ではない、野のはずれの一軒家で、常は旅人を泊めたこともない家に、主人にいろいろと頼み込んで、その情けで一夜を明かすことになった。山風が激しく吹き、すでにこの土地は、九月の末の頃から雪が降り始め、寒さもいちだんときびしくなったが、寒さをしのぐ夜着もなく、木曾の麻衣の単を重ねて着、一晩中焚火をして、いかき茶というものを飲むことよりほかには楽しみはなかった。生きているのがいやになるような、年貢不足とか、「牛が一頭欲しい」などの、話をしながら寝入るうちに、いろりの明り取り用に焚いていた割松も消えてしまって、いびきばかり

しているか。

一二 信濃国(長野県)の道。

一三 長野県北佐久郡軽井沢町にある中仙道の宿場。町家は約八十軒あった(岐蘇路記 貝原益軒)。宿の西から善光寺道が分かれる。越後の国境、関川から約一〇〇キロメートル。越後の高田から一二〇キロメートル。

一四 から尻馬の略。人を乗せる道中馬。ただし手荷物は五貫目(約一九キログラム)までは許される。人を乗せない場合は荷物を二十貫目まで乗せる。

一五 女馬方。

一六 「木曾の谷々、一谷に麻多くとり、つむぎて衣にす、綿をも入れずに幾重もこれを重ねて着す、男女の形もしか〳〵分明ならず、木曾の麻衣と云ふはこれを云ふかとなり」(遠碧軒記)とあるように、単の着物で、寒さを防ぐには重ね着をする。

一七 つり鍋に小さなざるを入れ、その中に葉茶を入れて煮た茶。

❖「世の憂き年貢」以下、農民にとって租税を完納しえないことは罪になるのでつらい。これを采女が侍であるので話した。追分付近は浅間山に近く、土地がやせている。牛は農耕の労働力として優れたものであり、それを欲しがっている農民の心理を示す。ただし、当時は東国では馬が使われ、牛は少なかった。

一八 「囲炉裏」のなまり。

一九 照明のために焚く割松。

二〇 人からつけられた異名。

二一 無法なことをする乱暴者。

暮方に、[一]屋敷女をつれて、旅の者の通りしが、さても／＼その姿、何とも言葉にはのべがたし。見そむるより、無理はおぼえて恋となり、命に替へてともおもふなり。幸ひ今宵は、宿はづれに泊れば、おの／＼が力を添へ、このおもひを晴らさしてくれよ」と、[二]鬼の目にも泪を流して頼む。無分別ざかりの若者、「それは[三]手に入りたる女なり。さらば皆々形をかへよ」と、いろ／＼[四]頭巾に顔かくして、かのかり宿の門に行きて、大勢声を立てて、「[五]人足出せ」とよべば、亭主かけ出るを、とつてしめ、かの男をはじめ、家内残らず縄をかけ置



になり、皆々熟睡してしまった。

　その頃、木曾の赤鬼とあだ名を呼ばれた乱暴者がいたが、彼は一味する若者を多数集めて内密の話をするのに、「今日の夕暮れに、武家方の女を連れて旅の者が通ったが、さてさて、その姿はなんとも言いようのないほどの美しさだ。初めて見てから無理とは思いながら、恋をしてしまった。生命に代えてもこの恋を成就させたいと思うのだ。さいわい、今宵は宿はずれに泊ったので、皆が力を貸して、この思いを晴らさせてくれよ」と、鬼の目にも涙という諺のように、涙を流して頼んだ。無分別盛りの若者が、「それは手にはいったも同然の女だ。それなら皆々変装しよう」と思い思いの頭巾に顔を隠して、かの采女が泊った宿の門に行って、大勢で声を上げて、「人足を出せ」と呼ぶと、亭主が外へ出たので、これを取って押え、この男をはじめとして家内の者に残らず縄をかけて、火打ち石の光で女を見つけ、さまざまにもてあそんで逃げて行った。

　思いもよらず、どうにもならない難儀な目にあったので、夜が明けるのを待ちかねて、土地の奉行へ訴え出たところ、「何も盗まなかったことが不審である。

一　武家方の女。女の姿かたちを武家女風にして国を一緒に逃げたのである。

二　諺。鬼のような剛勇の者や冷酷な者でも時には感情の動きによって泣くこともあるをいう。

三　手にはいったのも同様の。

四　頭巾は袋形に作り頭にかぶるもの。ここは覆面をすること。

五　役人が人足を徴用するように見せかけて戸を開けさせた。

き、火打の光に、女を見付け、さま〴〵[六]我がままして にげて行く。

おもひよらざる事、是非にかなはぬ難儀にあひ、夜の明くるを待ち兼ね、奉行へ[七]御訴訟申しあぐるに、「なにもとらぬ事の不思議なり。ひとりも見しらねば、何を以てせんさくの種もなし」と仰せける。その時、「それがし、覚えの候へば、この宿中男残らず、御前へ」と申しあぐる。一人ものこらずめされける。

女罷り出、「この内に二三人も、背中に鍋炭の手形あるべ



釆女ら二人が泊った家に暴れ者たちが押し入り、乱暴するさま。燭台、油皿、油差しが倒されているのは暗がりの中であることを示す。

一人も見知った者がいないのであるから、取調べをしようにも、何の手がかりもない」と奉行は仰せられた。その時、「私に思うところがありますので、この宿場中の男を、残らずご奉行の御前へ集めてください」と申し上げた。そこで一人残らず呼び寄せられた。

女が罷り出て、「この内に二、三人ほど背中に鍋炭のついた掌の形があるはずです」と述べた。男たちの肩を脱がせて取調べをすると、女の言うように、犯人が判明したので、奉行はこの仲間十八人を死刑に処された。さてもさても、火急の時にこれだけの機転をきかせたと、女の知恵を人々は褒めた。このような目にあったのも、これまでの悪因悪果だと、釆女夫婦は刺し違えて二人共に死んだ。

六　多人数でいろいろと女をもてあそんで。

七　刑事事件の訴えをすること。

し」と、肩を脱がして、せんさくするにあらはれて、この中間十八人、成敗[一]あそばしける。さてもせはしき中に、女の知恵をほめける。これまでの因果[二]と、夫婦指違[三]へける。

執心の息筋

継子も生長[四]しては、掛かる[五]物なるに、むかしより世界の人心[六]、これをにくむ事替はらず。

南部の町に、仙台屋宇右衛門と申して、所ひさしき、くろがね[七]の商人あり。仕合せよろづに、何の不足もなく、男子[八]ばかり三人まで持ちしに、世の無常とて、なじみ[九]に別れ、万事をうち捨てしに、語る人々、世間[一〇]をやめさせず、押し付けわざに、また妻を持たせけるに、何に付けてもおもはしからねど、堪忍して、はや五年あまりもすぎける。

宇右衛門もなが／＼わづらひて、今はうき世のかぎりの時、後妻を枕ちかくよびよせ、「我相果てし後、また浮世[一一]を立てたまはば、それがし息のかよふ内に、何[一二]にてもほしき物を、

執心の息筋

継子であっても成人すると、継母はこれに養われる者となるのに、昔からこの世の中の人の心の常として、継子を憎むことは今日でも変らない。

南部の盛岡の町に、仙台屋宇右衛門といって、土地に久しく住んでいる砂鉄商人があった。万事が運よく、富裕で何不足もなく、子供も男子ばかり三人まで持っていたが、この世の中は無常、という言葉どおりに、長年睦まじくしていた妻と死別した。そこで宇右衛門は世をいとい、俗世間のことをすべて捨ててしまおうとしたのであるが、親しい人たちは、彼に世をのがれさせず、押しつけるようにして、また妻を持たせたが、この妻は何につけても彼の心にかなわなかった。しかしそれも我慢して、はやくも五年余りが過ぎていった。

一 死罪にすること。
二 運命。
三 夫婦が互いに刃物で相手を刺して死ぬこと。
◆采女は殺人犯人であり、この章は悪因悪果の現報譚(現世で直ちに報いがくる話)。
四 成人する。
五 その人(継子)に養われる。
六 継子は、古今東西、継母から嫌われいじめられるのが通例で、説話には「継子いじめ」の型がある。
七 砂鉄を売る商人。
八 子に男子ばかり三人持つのは幸運。
九 長年慣れ睦んできた妻。
一〇 俗世間の生活をやめさせせない。世をのがれさせせない。
一一 この世で普通の人として暮らしてゆく。再婚する。庶民の妻は夫が死没した後に再婚しても、反倫理的な行為にはならない。
一二 離縁される時、妻は何でも欲しいものを一点持ち去ってよい、という慣習があった。

一三 うれしい。
一四 すべての財産を渡し。財産の管理権を妻にゆだね、長子は十九歳であり、この年齢の者を成年者と認める場合もあるが、この話では未成年者として家督相続をさせていない。
一五 仏教で、人の死後四十九日（七七日）を中陰といい、未来にまだ生をうけていない、とする。この間は七日ごとに法事をする。三十五日に当る日を小練忌ともいい、四十二日・四十九日の法事を切り上げて三十五日に合わせてすませる風習も民間にあった。京坂はこれを通例とする。ここはそれをいう。まだ中陰の法事も終わらぬうちに。
一六 死んでいった。
一七 はっきりせぬ病気。神経性の病気。
一八 貧乏な現状。

❖「我これまでくる道に」以下は、『宇治拾遺物語』巻十五の十一「後の千金の事」に和訳されている、荘子が監河侯に語った次のような比喩譚に基づく。これは『荘子』外物篇を原拠とする。荘子が家貧しくして、今日の食物もなくなった。隣に監河侯という人がいて、この人に今日食べる粟を乞うたところ、河侯は、五日後においでなさい、千両の金が得ら



継子の幽霊が現れて、継母に息を吹きかける。その息が火炎となって、継母の伸ばした髪に燃えつくさま。

とつてのきたまへ」といふ。女泪に袖をしたし、「かさねて夫を持つべきや」と、黒髪を切れば、「さては[一三]たのしき」と、三人の子どもをあづけ、[一四]万のたからを渡し、今は思ひ残する事もなく、むなしくなりぬ。

　いまだ[一五]三十五日もたたぬに、子ども二人[一六]すぎ行けば、人も不思議を立てける。十九歳になる兄息子にも、後程つらくあたれば、[一七]ぶら／＼とわづらひつきて、養生ためとて、遠く借座敷に出けるに、万事かつ／＼にあてがへば、[一八]かなしき様子申せど、ある物をやらず、「やう／＼年も暮ちかし。銭かね

　そのうちに、宇右衛門も長患いにかかり、今は臨終に近づいた時、後妻を枕近くに呼び寄せ、「私が死んだ後に、再婚しようと思われるならば、私の生きているうちに、何でも欲しいものを持ってこの家を去りなさい」と言った。妻は涙で袖を濡らし、「どうして再び夫を持ちましょうぞ」と、黒髪を切って、後家を通す気持を示したので、宇右衛門は、「それはうれしいことだ」と、三人の子供を後妻にまかせ、全財産を渡し、今は思い残すこともなく、世を去った。

　まだ三十五日の中陰の忌みも終わらぬうちに子供二人が亡くなったので、人々も不思議なことだと噂した。十九歳になる長男の息子にも、日が経つにつれて、つらく当るので、息子ははっきりとせぬ病気になり、養生のためといって、遠い所の借座敷に出したが、万事かつかつに、毎日がやっと送りうる程度にしか金を与えなかった。息子は生活の苦しい状態を訴えに、継母の所にやって来たところ、ある物も与えないで、「ようやく年の暮れも近くなりました。やがて貸金の取立てができたなら、あげましょう」と継母は言った。「今日一日さえも日を送りかねるほどの乏しさであるのに、ひどい

れるので、それを差し上げましょう、と言った。そこで、荘子が次のように述べた。『昨日道を罷りしに、あとに呼ばふ声あり、顧みれば人なし、唯、車の輪跡の窪みたる所に、溜りたる少水に、鮒ひとつふためく、寄りて見れば、少しばかりの水に、いみじう大なる鮒有り、何ぞの鮒ぞと問へば、鮒の曰く、我は河伯神の使に、江湖へ行くなり、それが飛び損ひて、この溝に落ち入りたるなり、喉乾き死なんとす、我を助けよと思ひて、呼びつるなりといふ、答へて曰く、われ今二三日ありて、江湖といふ所に遊びしに行かんとす、そこにもて行きて放さんといふに、魚の曰く、更にそれまでえ待つまじ、唯、今日一提ばかりの水をもて、喉を潤へよといひしかば、さてなん助けし、鮒のいひし事、我が身に知りぬ、更に今日の命、物食はずば、生くべからず、後の千の金更に益なし』とぞ言ひける、それより、後の千金といふ事、名誉せり」。

一 身持ちを悪くすること。

❖継子いじめの報復譚は『堪忍記』巻七「継子を育つる堪忍」あるいは『鑑草』巻五の一「慈悲報」第七話などを素材とする。

二 悲しい。つらい。 三 この年齢は米寿といい、一門が繁栄していると、子孫が集まって長寿を祝う。

四 人間は死のうと思っても容易に死

も取り集めたらば、遣はし申すべし」といふ。「今日さへおくり兼ねしに、口惜しきしかた」と、思ひ極め、「一言申し残すは、我これまでくる道にて、雪にあひし人ありて、我が傘の下へ頼むといふ程に、『我が宿はこれより、一里あまりあり。それまで行きてから、持たしてかすべし』と申せば、『その間にはぬるる』と申した」と、これを最後の言葉にてすぎ行く。

今は我が物と、むかしのごとく、継母髪をのばし、[一]いたづらを立て、世にさかゆる時、継子の幽霊きたつて、軒端より、息吹きかくるに、母の頭に火炎燃付き、いろ〳〵消してもとまらず、形も残らずなりぬ。

身を捨てて油壺

ひとりすぎ程、世に[二]かなしき物はなし。

河内の国、平岡の里に、昔はよしある人の娘、かたちも人にすぐれて、山家の花と、所の小歌に、うとふ程の女なり。

仕方だ」と息子は決心して、「一言言い残すことがあります。私がここまで来る途中に、雪に降られた人がいて、私の傘の下へ入れてください、頼みます、と言いましたが、『私の家はここから一里(約四キロメートル)余りありますので、そこまで行ってから、あなたに持たせて貸しましょう』と言うと、『その間には雪に濡れる』と申しました」との言葉を最後として世を去った。

今は全財産が自分のものになったと、継母は切った黒髪を、以前のように伸ばし、淫奔なことをし始め、派手にやっている時、継子の幽霊が現れて、軒端から息を吹きかけると、母親の頭に火炎が燃えつき、いろいろ消そうとしても止まらず、ついに継母は形も残らず焼け失せてしまった。

身を捨てて油壺

ひとりで世を過ごすほど、世の中に悲しいことはない。

河内国の枚岡の村に、昔は家柄のある人の娘で、顔かたちも人よりすぐれて、山家の花と、この土地の小唄に歌われた

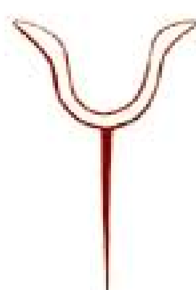
いかなる因果にや、あひなれし男、十一人まで、あは雪の消ゆるごとく、むなしくなれば、はじめ焦れたる里人も、後はおそれて、言葉もかはさず。十八の冬より、おのづから後家立てて、[三]八十八になりぬ。

さても長生はつれなし。以前の姿に引き替へ、かしらに霜をいただき、見るもおそろしげなれども、[四]死なれぬ命なれば、世をわたるかせぎに、[五]木綿の糸をつむぎしに、[六]松火も[七]とけなく、[八]ともし油にことをかき、夜更けて[九]明神の灯明を盗みてたよりとする。神主集まり、「毎夜〳〵、御灯火の消ゆる事を、不思議におもひつるに、油のなき事、いかなる犬・獣の仕業ぞかし。かたじけなくも、御社の御灯は、河州一国、照らさせたまふに、宮守どもの、[一〇]無沙汰にもなる事なり。是非に今宵は付け出し申すべし」と、[一一]内談かため、弓・長刀をひらめかし、思ひ〳〵の出立ちにて、[一二]内陣に忍び込み、ことの様子を見るに、世間の人しづまつて、[一三]夜半の鐘の鳴る時、おそろしげなる[一四]山姥、御神前にあがれば、いづれも気を取り失ひける。中にも弓の上手あつて、[一五]雁股をひつくはへ、ねらひすま

ほどの女がいた。どうした因果か、互いに好きになった男が十一人までも、淡雪の消えるように亡くなってしまったから、初めは恋い焦がれていた村人も、後には恐れて言葉も交さぬようになった。十八歳の冬から、しぜんと後家を通して、八十八歳になった。

さてさて、長生きするということはつらいものである。若い時の美しい姿に変って、頭は白髪になり、見るも恐ろしげな姿になったが、人間の生命というものは死のうと思っても自分からはなかなか死なれぬものだから、生活のための仕事として、木綿の糸を紡いでいたが、夜の明りとする薪の松の火では暗く、とはいえ灯火の油を買うこともできないので、夜更けて枚岡明神の灯明の油を盗んで仕事のための油火とするようになった。明神の社人たちが集まり、「毎夜毎夜、お灯明の消えることを不審に思っていたが、油がなくなるというのは、どんな犬や獣の仕業であろうか。もったいなくも、この御社のお灯明は河内国一国をお照らしになるのに、お灯明が消えるということは、明神に奉仕する宮守たちの落ち度にもなることである。どうしても今夜は、そのわけを見つけ出そう」と内々で話し

ぬことができぬ、の意の慣用句。
五 中河内の東部一帯は木綿の産地。
六 照明に用いる薪の松の火。
七 原本「とけなく」。まだるっこい。もどかしい。 八 灯油。
九 枚岡神社。生駒山麓にあって、天児屋根命・鸕鷀草葺不合尊・大国主命・天照大神の四座、および、若宮一座天押雲命、摂社五社を祀る。宮寺六坊があった。神武天皇が河内から大和にはいろうとして長髄彦にさえぎられた時、この社を祀った。神護景雲二年(七六八)この社から天児屋根命が大和に飛び移り春日大明神となる。ただし、この社の祭事は旧の通りに行う。貞観元年(八五九)神階正一位に叙せられる(和漢三才図会七十五)。 一〇 不注意。不用意。
一一 相談。 一二 社殿の中の祭神を祀ってある所。 一三 夜の九つ(午前零時頃)の鐘。 一四 深山に住む女性の怪物。「山姥とは山に住む鬼女とこそ曲舞にも見えて候」(謡曲・山姥)。
一五 矢じりが二股になっていて内側に刃がついており、的中すると、この刃で傷つく。「蟇股(カリマタ) 形蝦蟇(カヘル)ノ股ニ似ル。故ニ名ヅク。然レドモ俗以テ鴈股ト為ルハ非也」(和漢三才図会二十)。


かりまた
(和漢三才図会)

してはなちければ、かの姥が細首おとしけるに、そのまま火を吹き出し、天にあがりぬ。夜あけてよく〳〵見れば、この里の名立ち[一]姥なり。これを見て、ひとりもふびんといふ人なし。

それよりもよな〳〵出て、往来の人の、心玉をうしなはしける。かならずこの火に、肩を越されて、三年といきのびし者はなし。今五里三里の野に出けるが、一里を飛びくる事目[二]ふる間もなし。ちかく寄る時に、「油さし」[三]といふと、たちまちに消える事のをかし。



姥がかりまたの矢で首を射落とされ、その首の口から火を吹き出して天にあがるさま。烏帽子（えぼし）・狩衣（かりぎぬ）姿は枚岡明神の社人。

合い、弓・長刀を持ち、それぞれの服装で明神の内陣に忍び込み、事のありさまを見ていると、世間の人が寝静まって真夜中の鐘が鳴る時、恐ろしげな山姥がご神前に上がって来たので、皆々恐ろしさのために気を失った。その中に弓の上手な者がいて、雁股の矢をひっつがえて狙いをつけて射ると的中し、かの姥の細首を射落とした。すると姥の頭はそのまま火を吹き出して天に上った。夜が明けてよくよく見ると、この村で評判の立っていた姥であった。これを見て、一人としてかわいそうだという村人はいなかった。

その後も、姥の頭が夜な夜な出現して、往来の人を驚かせ気を失わせた。この火に追いかけられて肩を越された者で、三年と生き延びた者はいない。今でも、五里三里と野の方にも飛んで、出現するが、一里を飛んで来るには、わき見をする間もないほどの速さである。近くに寄って来る時には、「油さし」と言うと、たちまち消えるのはおかしいことである。

一 名の立っている老女。悪評判の婆。

❖この火を姥が火といい、中河内に出没した。「姥が火、此の因縁を尋ぬるに、夜々平岡の明神の灯明を盗侍る姥有りしに、明神の冥罰にやあるらし、彼の姥なくなりて後、山の腰を飛びありく光り物出で来て、折々人の目を驚かしけるに、彼の火炎の躰は死しける姥の首よりして吹き出だせる火の如く見え侍る故に、かの姥が妄執の火にやとて、則ち、世俗に姥が火とこそ伝へけれ、高安、恩知迄も飛行き、雨けなどには今も出ると也」（河内鑑名所記五〈延宝七年刊〉）。雨の夜に出る、一尺（約三〇センチ）ほどの火の玉で、これに遭うと恐怖のため死ぬ者があったが、貞享頃から絶えた（和漢三才図会七十五）。

二 目をちょっと横に振る間。きわめてわずかの間。

三 油皿に油を注ぐ急須形の器。これに、一切万法がことごとく成就するという五字陀羅尼の「阿毘羅吽欠」をかけた呪文。

銀(かね)が落としてある

物事正直(しやうぢき)なる人は、天も見捨てたまはず。

[四]難波人(なにはびと)ひさしく、江戸に棚(たな)[五]出して、一代世(よ)をわたる程儲(ほどまう)けて、二たび大坂にかへり、楽々と暮らされける。

折ふし、秋の草花(くさばな)などいけて詠(なが)める時、東の山里[六]より、紅(べに)[七]茸(たけ)のうるはしきを、おくりける折から、あたりの男きたりて、「何ぞ」といふ程に、「聖人(せいじん)の世にはえる、霊芝(れいし)[八]といふ物」と語れば、ありがたさうに手にも取らず見物する、律義者(りちぎもの)[九]なり。「けふ御見舞ひ申す[一〇]は、私も此処元(ここもと)[一一]の、しんだい[一二]おもはしからず。一たび江戸への心ざしなり。こなたには、数年(すねん)にて、勝手も御ぞんじなれば、今時は何商ひがよい」と申す。「[一三]今は銀(かね)ひろふ事がまだもよい」と申せば、この男まことにして、「これは人の気のつかぬ事なり。御影(かげ)にて、是非に拾うてまゐらう」といふ程に、これをかしく、[一四]道中の遣(つか)ひ銭(せん)もとらし、「[一五]其処元(そこもと)へ、かせぎにくだる者なり。万事頼む」のよし、念(ねん)

銀が落としてある

何事にも正直な人は、天もその人をお見捨てにはならない。

大坂の人で、長らく江戸に店を出して、一生生活してゆけるほど、財産を作って、再び大坂に帰り、楽々と暮らしている者があった。

頃は秋で、草花などを生けて眺(なが)めている時に、東の山里から、紅茸(べにだけ)の色美しいのを贈ってきたが、その折に近所の男が来合わせて、「これは何ですか」と聞くので、「聖人のいる世の中に生えるという、霊芝(れいし)というものだ」と語ると、ありがたそうに手にも取らないで見ている、この男はまっ正直な男であった。男は、「今日お伺いしましたのは、私も大坂では生業がうまくゆきませんので、一度江戸へ下って稼(かせ)いでみようと思います。あなたは数年間いらっしゃったので、江戸の様子もご存じでしょうが、今日(こんにち)では、どのような商売をしましたならばよろしいでしょうか」と言った。主人は、「今日では金を拾うことがまだしもよろしい」と言うと、この男はこれを本当だと思って、「これは人の気づかぬことです。お陰をもって私も、ぜひ金を拾い、財産

四 大坂の人。
五 商売の店を出す。江戸は、江戸時代初期は新開地であったので、この地に下って産をなす者が多くいた。
六 大坂の東方には丘陵地が続く。
七 紅色のきのこで、食用にもなる。
八 きのこの一種で、形は松茸に似て、『和漢三才図会』巻百一によると、赤色のものもある。猿の腰掛ともいう。おめでたい草とされた。ここは男を一杯はめたのである。
九 正直すぎる者をいう。馬鹿正直者。
一〇 訪問。
一一 この土地。大坂。
一二 身代。一身に属する資産、財産。生活が十分できるだけの収入が得られない。
一三 江戸初期と異なって、寛文・延宝期になると、江戸に下っても産をなすことが困難になっていることを述べた言葉。これを男は、文字どおりに馬鹿正直に理解して、江戸に下ったのである。
一四 大坂から江戸に行く道中の小遣銭。大坂から江戸までは、おおよそ十二、三日かかった。
一五 知人に紹介の書状を書いて男に持たせた。

比なるかたへ状を添へける。頓てくだりつきて、かの人宿の出居衆になつて、あけの日、股引・脚絆して出、日暮れてかへる事、十日ばかりなり。

亭主心元なく、「毎日何方へゆかるるぞ。身過の内談もなされず」といふ。この男ささやきて、「主様へは隠すまじ。それがしは此処元へ銀を拾ひにまゐつた」と申す。亭主腹をかかへ、また大坂から、この男をなぶつて、くだしける、とおもひ、「さて、日に〳〵出られて、拾はるるか」と申せば、「此処元へまゐつて、昨日ばかりが不仕合せ、その外は拾ひました。あるいは、五匁七匁、先をれの小刀、または秤のおもり・かたし目貫、何やかや取り集めて、四百色程拾ひける」。亭主きもをつぶして、「珍しきお客」と、近所の衆に語れば、「これためしもなき事なり。はる〳〵正直にくだる心ざし、咄しの種に拾はせよ」と小判五両出し合ひ、拾はせける。

それより次第に富貴となつて、通り町に屋敷を求め、棟にむね門松を立て、広き御江戸の正月をかさねける。

を作ってきましょう」と言うので、これをおかしく思い、主人は道中の小遣銭も与え、「そちらへ稼ぎに下る者です。万事よろしく頼みます」という旨の紹介状を、よく知っている人あてに書いて、男に与えた。やがて江戸に下り着き、紹介の人置き宿の出居衆になって、翌日には股引・脚絆姿で出て行き、日没後に帰る、ということが十日ほど続いた。

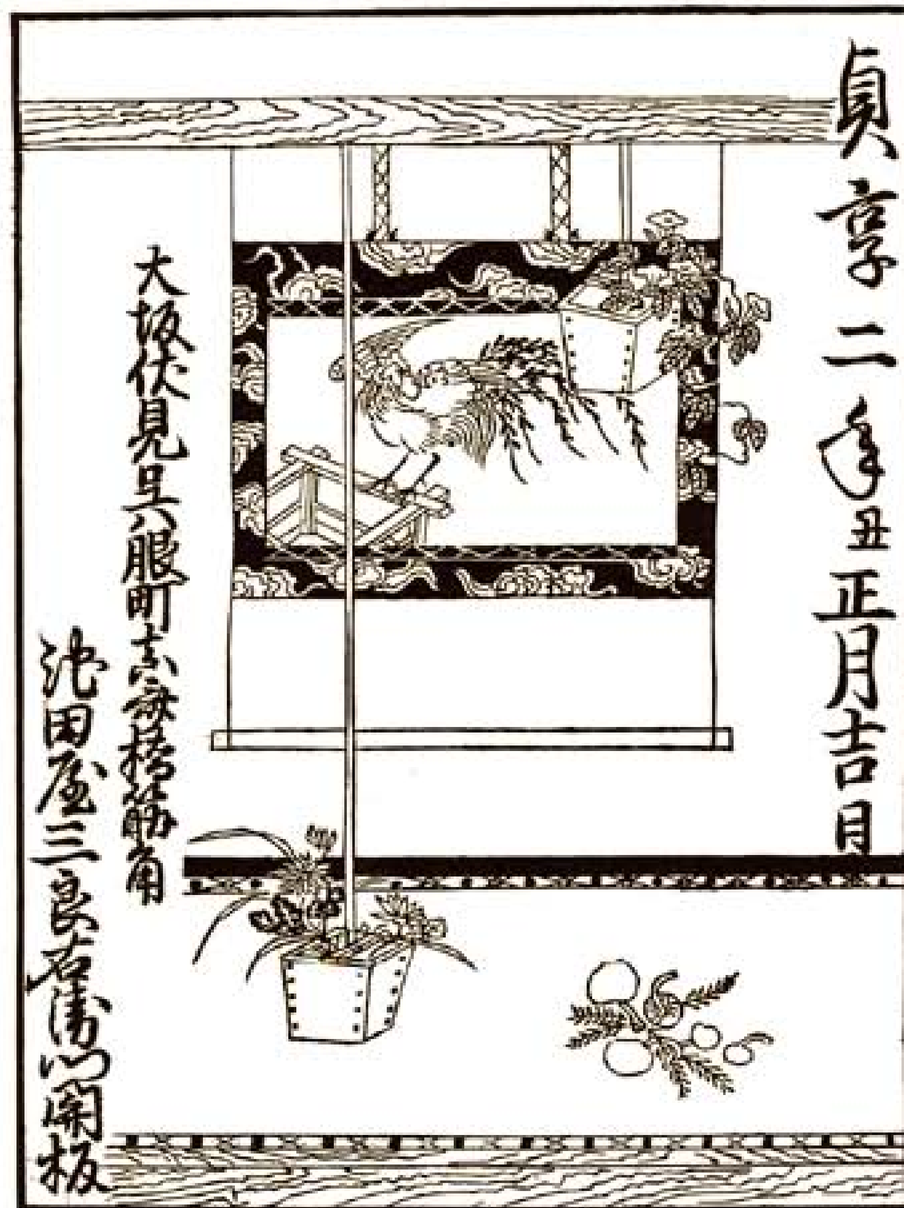
亭主は心配して、「毎日どこへお出かけですか。商売についての打ち明けた相談もなさらないで」と尋ねた。この男は小声になって、「ご主人には隠さずお話しします。私はこの土地へ金を拾いにやって来ました」と言った。亭主は腹をかかえて笑い、また大坂のあの男が、この男をなぶり者にして下したのだ、と思い、「それでは毎日毎日外出されて、お拾いになりましたか」と言うと、男は、「江戸にやって来て、昨日だけがうまくゆかず拾えませんでしたが、そのほかの日は拾いました。ある時は銀五匁、七匁、先の折れた小刀、または秤の重り・目貫の片方など、何やかや取り集めて四百色ほど拾いました」と言った。亭主は肝をつぶして、「珍しいお客だ」と近所の人々に語ると、人々は、「これは前例のない

一 書状。
二 人置き。奉公人の紹介所。この男を、この紹介所の主人に紹介したのである。
三 その家に寄宿して、自分が資本を出して商売する行商をいう。
四 行商人の服装。脚絆は長時間の歩行に疲れぬようにすねを包む布。
五 生活すること。ここは商売。
六 銀貨。
七 銀子の授受の時にはかる携帯用のはかり(釐等具)の重り。
八 一つ。対のものの片方。目貫は一刀で、ふつう二つある。
九 刀の柄が抜けぬように、柄の上から刀心の穴を貫く金具。この金具の頭部に金銀の装飾があり、それのみが別の金具になっているものもある。その場合、頭部の金具のみを目貫ということもある。
一〇 非常に驚いて。
一一 皆でこの男の商売の資本を出してやったのである。
一二 もと、日本橋を中心として、それに通じる大道という意味で、北は筋違橋から南は金杉橋より日本橋に至る間を称した。日本橋北通町・同南通町・京橋南通町・新橋南通町などの区分があり、これらを一括して通町と称したが、西鶴のいう通町とは、このうちの日本橋の南北通町のことであったらしく、北は筋違橋から京橋に至るまでをいったらしい(西鶴随筆　真山青果)。江戸で道幅の最も広く繁華であった通り。

一三　所有した家が幾棟も並んで。
一四　江戸は商家でも門松を立てた。
一五　この草紙は、正月に江戸でも売り出すことを予定されている。兼ねて、江戸の公儀に対する祝言としている。
❖馬鹿正直な者が、馬鹿正直を通すことによって立身出世する民話の類型をふまえた一篇。
一六　一六八五年。西鶴四十四歳。
一七　東区伏見町四、五丁目。
一八『好色二代男』以下、西鶴作の浮世草子六点を刊行した書肆。岡田氏。
❖刊記にある画幅と釣瓶は、古田織部の逸話(立花訓蒙図彙・三)をふまえる。

ことだ。はるばる正直に下って来た心がけ、話の種に拾わせよう」と小判五両を出し合って拾わせた。
　それから人に信用されて、しだいしだいに富裕になって、通り町に家を買い入れ、幾棟と続く家に門松を立て、広いお江戸で正月を重ねて栄え続けた。

貞享[一六]二年丑正月吉日
大坂伏見呉服[一七]町真斎橋筋角
池田屋[一八]三良右衛門　開板



江戸で成功した大坂商人宅の床飾り。掛軸の井筒に休む鳳凰は、聖人の世に出る。釣瓶（つるべ）形の花生けはその井戸に下ろしたという趣向。床の上の紅茸（べにだけ）は霊芝（れいし）が生えた趣向。

このページ（部分）は、著作権許諾の都合により
ジャパンナレッジではご利用になれません。

男色大鑑

暉峻康隆 校注・訳



板本表紙（早稲田大学図書館蔵）
初板黒色表紙本。縦26.3㎝×18.7㎝

本朝若風俗

男色大鑑

絵入

一

巻一　あらまし

一　**色はふたつの物あらそひ**　男色・女色の起源を説き、「男色ほど美なるもてあそびはなき」とし、男色にかかわる和漢の故事を引いて例証。ついで、四十二歳まで諸国をたずね歩き「衆道のありがたき事、残らず書き集め」た『若道根元記』を講説する男が登場、男色・女色の優劣を対比する二十三項を例示して「女を捨て男にかたむくべし」と強調し、多くの金銀を女に費した一代男を難じて「ただ遊興は男色ぞかし」と結論する。序文の意を補い、意図的に女色をおとしめ男色を称揚して読者の気を惹き、本書の導入とする序章。

二　**この道にいろはにほへと**　京の大町人の息子でありながら、女嫌いに徹して「加茂の山陰」に隠棲、時に女の姿を見かける北側の窓をふさいで、美少年のみを相手に「手習ひ屋」を開く「一道」なる男がいた。そこに通う篠岡大吉と小野新之助は、ともに九歳の若年ながら、すでに男色のたしなみが深い。その二人の美少年は、八十余歳の念仏の行者が自分たちに「後世を取りはづ」すほどの執心と聞いて、行者を訪れ思いを晴らさせるが、再び訪れると行者は身を隠していた。その後、新之助が十四歳で死ぬと、大吉は深く嘆いて出家した。

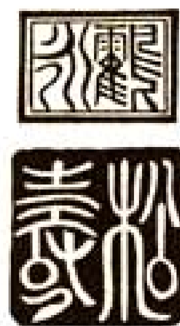
三　**垣の中は松楓柳は腰付**　大隅の浪人橘十左衛門の一子玉之助は、田舎には稀な美少年、江戸に出て奉公を望む。会津の太守の小姓となって会津に来た玉之助は、殿の御前の蹴鞠の折に発病、半年ほど病臥する。その間、日に三度ずつ見舞って真情を示した笹村千左衛門と男色関係となるが、それが殿に「もれ聞こえ」て二人は閉門を命ぜられる。二人は切腹を願い出るが、玉之助に元服を仰せつけられるのみの殿の温情。感激した二人は、二十五歳まで音信不通、会っても言葉を交わさず御奉公を勤めた。

四　**玉章は鱸に通はす**　出雲の家中の増田甚之介は文武兼備の美少年、同じ家中の森脇権九郎は、十三歳の甚之介に憧れ、人目を忍んで松江の鱸の口に恋文を入れて送り、深い男色の契りを結んで二年余りが過ぎた。同家中の「末の奉公人」半沢伊兵衛が甚之介に恋慕、甚之介はそれを権九郎に語るが、権九郎はまともに取り合わない。怒った甚之介は、権九郎の不義をなじる長文の遺書を送った後、半兵衛との果し合いに臨む。驚いた権九郎は甚之介の助太刀に来て、ともに半兵衛の一党十六人を切り退け、近所の永運寺の住持をたのみ切腹の沙汰を待つが、殿の温情で許されることになった。

五　**墨絵につらき剣菱の紋**　鹿児島の新参の侍島村大右衛門は、剣菱の紋所だけを記した手紙と毒薬の入った文箱を石仏の前に置く怪しい下人を捕えた。剣菱の紋は春田丹之介のものだったが、その文箱は、丹之介に恋慕して振られた岸岡竜右衛門が仕組んだもの。罪に落とされかけた丹之介は、大右衛門の機転によって難儀を救われた。その後丹之介は、偶然その身の難儀を救ったのが大右衛門であると知り、二人は念友の関係となる。大右衛門は、丹之介の屋敷の裏の大河を泳ぎ越えて通っていたが、ある時、大鳥と間違えられて、弓稽古の若侍に射殺されてしまう。その矢に記された藤井武左衛門という名から敵を知った丹之介は、武左衛門を大右衛門の墓前に連れ出し、相討ちで果てた。

日本紀[一]愚眼に眈けば、天地[二]はじめてなれる時、ひとつの物なれり。形葦芽のごとし。これ則神となる国常立尊と申す。それより三代[三]は陽の道ひとりなして、衆道の根元を顕はせり。天神四代よりして陰陽みだりに交はりて、男女の神いでき給ひ、[四]なんぞ下髪[五]のむかし、当流[六]の投島田、梅花[七]の油くさき浮世風に、しなへる柳の腰紅の内具、あたら眼を汚しぬ。これらは美児人のなき国の事欠け[八]、隠居の親仁の翫びのたぐひなるべし。血気栄んの時、詞をかはすべきものにもあらず。すべて若道[九]の有難き門に入る事おそし。

貞享四年竜集[一〇]丁卯陬日[一一]



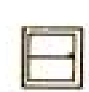
見識のない私ではあるが、日本書紀をのぞいて見ると、天地が初めてできた時、一つの物が現れたとある。その形は葦の若芽のようなもので、それがすなわち神となり、国常立尊といった。それから三代の間は男の神様だけで、男色の根元を表している。四代目から男女の神が現れて、みだらになってしまった。なんということであろう、それからというものは、ずっと昔は下げ髪、今では投げ島田を梅花の油くさい当世風に結い、しなしなとした柳腰に、紅の腰巻をちらつかせ、あたら男の眼をけがすことになった。これらは、美少年のいない国の間に合せで、隠居の親仁のもてあそびにすぎない。血気盛んな時に、口をきく相手ではない。何人もありがたい男色道に入門するのが遅すぎる。

貞享四年丁卯正月

一『日本書紀』の略称。
二「天地の中に一の物なれり。状葦芽の如し。すなはちなりませる神を国常立尊と申す」(日本書紀・神代)。
三 神世七代のうち三代までが一人神で、四代の宇比地邇尊(男神)と須比知邇尊(女神)以後、男女(陰陽)神となった。
四 係結びではなく「なんぞや」の省略。「なんぞかくし男をする女」(五人女二の四)。
五 すべらかしとも。髻をたばねて背後に垂らす。上流婦人の正装。
六 当世風の投げ島田。島田の髷をうしろへ倒れるようにそらした結い方。
七 梅花香。梅花の匂いのある髪油。
八 間に合せ。
九 若衆道。男色の道。
一〇 一年の意。転じて意義なく年号の下に記す語。
一一 正月の異名。「正月ヲ陬ト為ス、二月ヲ如ト為ス」(爾雅)。

男色大鑑　本朝若風俗　第一巻

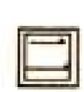
目録

 色はふたつの物あらそひ

神代のはじめは衆道の事

日本に隠れもなき女嫌ひの事

美道根元記口談の事

 この道にいろはにほへと

若道の手本書く事

都の花より里の前髪の事

情懸けし法師は行方しれぬ事

❖男性的な衆道を賛美した序文を補う形で、和漢の故事を引用しながら男色の優美を強調し、『好色一代男』を発表した翌天和三年(一六八三)、四十二歳まで諸国を巡って衆道のいっさいを書き集めたと、『色道大鏡』の凡例にならい、いかにも半生をかけた実地見聞の所産であるかのごとく見せかけ、最後に「物合せ」の趣向で男女の優劣を述べ、「なんぞ好色一代男とて、多くの金銀諸々の女につひ

目録終

やしぬ。ただ遊興は男色ぞかし」と、女色本位に書いた自作(好色一代男)を槍玉にあげての暴走ぶりは、読者の破顔を期待しての舞文である。『好色二代男』の序章に呼応している。

一 男色と女色。
二 天の浮橋。天地の間にかかっていたという。
三 鶺鴒の異称。
四 未詳。俗説であろう。
五 若道(男色)の契り。
六 蜻蛉の訓はアキツ。秋津国。日本国。
七 素戔嗚尊と結婚した奇稲田姫。
八 産婆。
九 原本「仲人目鼻」。目は口の誤刻。「卑賤の者の妻をカカと云、口鼻の字を訓り」(俚言集覧)。
一〇 やっかい。
一一 同類。仲間。
一二 原本「弥子瑕」。衛の霊公に寵愛された美少年(韓非子・説難篇)。
一三 漢の高祖お気に入りの家臣(漢書・佞幸伝)。
一四 漢の武帝お気に入りの家臣。その妹李夫人は同じく武帝の寵姫(漢書・李延年伝)。
一五 『伊勢物語』の主人公、在原業平。
一六 「業平伊勢が弟大門中将といへると好情ありといへり。然れどもその虚実安定ならず」(麓之色五)。伊勢は平安中期の女流歌人で三十六歌仙の一人。
一七 男色の交友。
一八 表面をこがした握り飯。

色はふたつの物あらそひ[一]

天照る神代のはじめ、浮橋[二]の河原に住める尻引き[三]といへる鳥のをしへて、衆道にもとづき、日[四]の千磨の尊を愛したまへり。万の虫までも若契[五]の形をあらはすがゆゑに、日本を蜻蛉[六]国ともいへり。素盞烏の尊、老いのことかきに稲田姫[七]にたはぶれ、それより世に姦しき赤子の声、取揚げ婆[八]・仲人口鼻[九]も出来、嫁入り長持・葛籠、二親のやか[一〇]ひとなれる。男色ほど美なるもてあそびはなきに、今時の人、この妙なる所をしらず。

されば若道のふかき事、倭漢にその類友[一一]あり。衛の霊公は弥子瑕[一二]に命をまかせ、高祖は籍孺[一三]に心をつくし、武帝は李延[一四]年に枕を定めたまふとなり。我が朝にも、むかし男[一五]、伊勢が弟の大門[一六]の中将と五とせにあまりての念友[一七]、この年月のうちに、花を見ぬ春、秋の月をわすれ、わりなき情には雪をかづき、嵐を袂に入れ、氷の橋をわたり、とがめる犬に焼食[一八]をあ

色はふたつの物あらそい

神々が空に輝いていた御代の初め、天の浮橋の川原に住んでいた鶺鴒という鳥に教えられて、国常立尊は衆道に基づいて日の千磨の尊をお愛しなさった。すべての虫までも、男色の体位をとっているので、日本を蜻蛉国ともいうのである。ところが素戔嗚尊が老後の間に合せに、稲田姫と仲よくなさってからは、この世にうるさい赤子の泣き声が響き、産婆や仲人嚊もあらわれ、嫁入りの長持や葛籠は、両親の頭痛の種となったのである。男色ほど優雅な遊びはまたとないのに、今時の人はその微妙な味わいを知らない。

さて男色の歴史は長く広く、和漢にその同類が多い。中国の衛の霊公は、美少年の弥子瑕に命をまかせ、漢の高祖は籍孺にうつつを抜かし、武帝は李延年を寵愛したという。わが国でも昔の在原業平は、伊勢の弟の大門の中将と五年あまりも愛し合った。その間には花を見ない春もあれば、月を忘れた秋もあった。やむにやまれない恋ゆえに、雪も嵐もいとわず、凍った橋を渡って通い、ほえる犬に

たへ、穴門のきびしきに相鎰をこしらへ、闇にも星の林をうらみ、蛍のひかりをもにくみ、下部の涼み捨てたる腰掛とやいふものに、足は蚊の血に染めなし、これにもあかず、曙をかなしみ、前髪の風にかはらぎ、ばら〳〵鶏の別れに、ふらぬ雨かとの泪、すぐに硯にそそぎ、筆におもひをはこび、通台集と名付けて、この事一巻に残せしに、いかにこれは見捨て、なんぞや女の事を物語につくり、うひかうむりせしも、奈良の都に、いかずの念者を見かぎり、若紫の帽子、これぞ野郎の元祖なるべし。なほうしろつき、陽桃の春をいためるよそほひ、垂柳の風をふくめるにひとし。毛嬙・西施も恥ぢぬべし。なほ男盛りになつて、業平も根本美少人をすけるに、浮世に陰陽の神などといふ事、草葉のかげにてさぞ口惜しかるべし。又、吉田の兼好法師、清少納言が甥の清若丸に、千度のかよはせ文は人も見ゆるし、一度の艶状たのまれて書きし浮名の、末の世までもやむ事なし。人皆おそるべきはこの道なり。

我生を請けて、その時今の智恵のあらば、女の乳は呑むま

は焼き飯を与え、用心の厳しい築地の小門は、合鍵で忍び込んだ。闇夜でも満天の星が恨めしく、蛍の光さえも憎み、下男が涼んでいた腰掛に、中将と一緒に腰をおろし、足は蚊に食われて血だらけになっても飽きることなく、夜の明けるのを悲しんだ。業平の前髪は風でぱさぱさになり、方々で鳴き始めた夜明けの鶏の声を聞いて別れを惜しみ、降らぬ雨のように流す涙を硯にそそぎ、筆に思いを託し、通台集と名づけてこの事を一巻に書き残したのであった。それなのに、業平はどうして男色を見限り、伊勢物語などという女の物語を書いたのであろう。その後元服して奈良の都へ出かけ、薄情に兄分を見限り、薄紫の帽子をかぶることになったが、これこそ歌舞伎若衆の元祖というべきであろう。その業平の後ろ姿は、美しい桃の花が傷つくことを恐れているようであり、しだれ柳が風をふくんでいる風情ともいえよう。これには毛嬙や西施も恥じ入るに違いない。業平はそれからいよいよ美しい男盛りになったが、元来は美少年好きであったのに、世間で陰陽の神などと言われるのは、さぞ草葉の陰でくやしがっていることであろう。また吉田の兼好法師が、清少納言の甥の清若丸にたび重なる恋文を送った事は、

一 築地を切り開いて設けた低く小さい門。
二 満天にまたたく星を林に見立てた歌語(万葉)。
三 乾いてつやがなくなる。
四 暁に方々で鳴き始めた鶏。「まだ短夜のばらばらどり、しののめ近くなりゆけど」(藍染川)。
五 原本「別まに」は誤り。
六 架空の書。
七 『伊勢物語』をさす。
八 「むかし男、初冠して、奈良の京春日の里に、しるよしして、狩にいにけり」(伊勢物語一段)。
九 「いけず」に同じ。薄情な念者。念者は男色における兄分。
一〇 前髪立ちをゆるされなくなった野郎歌舞伎時代になって、女方役者が月代を隠すためにかぶり始めた紫色の帽子。
一一 「かたちは陽桃の春をいためるよそほひ、垂柳の風をふくめる躰、毛嬙西子も面をはぢるほどなれば」(心友記〈寛永二十年刊〉)。『太平記』巻一に「天桃」とあるのが正しい。若々しく艶に咲いた桃の花。
一二 毛嬙は『荘子』斉物論に見える中国古代の美女。西施は春秋時代越国の美女で呉王夫差の寵姫。
一三 「本覚真如の身を分け、陰陽の神といはれしも、唯業平の事ぞかし」(謡曲・杜若)。陰陽は男女。
一四 清少納言の清をとった架空の人物。兼好と清少納言では時代が違う。
一五 兼好法師が高師直に頼まれ

て、塩谷判官の妻への艶書（ラブレター）を代筆した話は、『太平記』巻二十一に見える。『好色一代男』巻一の二は、そのもじり。
一六 摺粉は米の粉を湯にといた乳児の食物。甘物は甘葛を煎じた汁で、同じく乳児用。
一七 江戸。
一八 不明。特定の書物ではない、男色の本質をあらわしたもの、というほどの意か。
一九 鼻舌身に感受するを覚といい、意にあるを知という。すなわち人生の表裏を知るに至った四十二歳まで。作者の年齢とすれば天和三年（一六八三）、『好色一代男』脱稿の翌年に当るが、フィクションと考える。
二〇 以下、類似のものを左右に合せてその優劣を競う「物合せ」の趣向で、男色と女色の優劣を示す。
二一 癆瘵の。肺結核。
二二 歌舞伎若衆。
二三 「火雷は墜ちて必ず焼跡を留む。水雷は物を撃つて損傷すといへども火焼なし」（両儀集説六）。
二四 しっくりしないうちに。
二五 太夫・天神の次位の鹿恋女郎。もと揚代が銀十五匁であったゆえの表記。
二六 買置きは安価の時に商品を買い込み、高値で売って利を得る商行為。それとは逆に、値下がり必至の高値で買い込んだ場合をいう。
二七 旅稼ぎの陰間。

じ。[一六]摺粉・あま物にて、人間そだちたるためしあまたなり。
とかくは男世帯にして、住み所を武蔵の[一七]江府に極めて、浅草のかた陰にかり地をして、世の愁喜、人の治乱をもかまはず、不断は門をとぢて、朝飯前に[一八]若道根元記の口談、[一九]見聞覚知の四つの二の年まで諸国をたづね、一切衆道のありがたき事、残らず書き集め、男女のわかちを沙汰する。
[二〇]十一二の娘はや前後見ると、同じ年頃の少人歯を琢いて居ると。
女郎にふられての床と、痔のある歌舞伎子としめやかにかたると。
[二一]気のかたわづらふ女房あつかうて居ると、切々無心いはる若衆持ちて居ると。
[二二]子ども買うてあそぶ座敷へ[二三]水神鳴の落つると、傾城と[二四]しまぬうちに死んでくだされいと剃刀を出すと。
博奕にまけてのあくる日[二五]十五ぐるひすると、[二六]さがり口の買置して[二七]飛子を咄すと。
入り聟して宵から寝て次第にやせると、主の子を念比して

世間の人も大目に見たが、たった一度人に頼まれて恋文を代筆したために、後の世までも汚名を残すことになった。誰でも警戒すべきは女色である。
自分がこの世に生れた時、今のような知恵があったら、女の乳などは飲まなかっただろう。摺粉や、甘葛を煮た汁で、人の育った例は多い。そこで女っ気なしの男世帯をもって、武蔵の江戸に住みつき、浅草の一隅に借地して、世間の喜びや悲しみ、人の栄枯にかまわず、いつも門を閉めて、朝飯前に若道根元記を講釈することにした。人生の表裏を知るにいたった四十二歳まで、諸国を行脚して見聞を広め、ここに衆道のありがたいことをすっかり書き集めてみた。まず、男色と女色のけじめを述べることにする。
十一、二歳の娘が早くも色気づき、自分の姿の前後を眺めるのと、同じ年頃の若衆が歯を磨いているのとでは、どちらがいやらしいか、言うまでもなかろう。
以下、女郎に振られてしょんぼり寝ている床と、痔を患っている歌舞伎若衆としんみりと話しているのと。
肺病の女房をあしらっているのと、たびたび無心をいう若衆をもっているのと。
歌舞伎若衆を呼んで遊んでいる座敷へ水神鳴が落ちるのと、女郎と馴染にならない

昼ばかり顔見ると。

六十あまりの後家がくれなゐの脚布して小判読みて居ると、角前髪の木綿帯してむかしの誓紙を見てゐると。

島原通ひすぎて家質の流るると、道頓堀ぐるひ過ぎて御城米かりて切の近づくと。

百物語に若衆の化物出ると、去つた女房のねだりにもどると。

楽屋がへりの編笠のぞくと、道中にて禿にお位をとふと。

高野坊主の小姓になると、隠居の手懸け者になると。



見ながら聞いているが、左面には脇見をする者、右面上にはテキストを忘れて見せてもらっている者もいる。廊下には少年たちのお供の者がすわり、右下の地面には草履取りがひかえて、聞き耳を立てる。

ないうちに、心中してくだされと剃刀を出されるのと。

博奕に負けた翌日、安い鹿恋女郎と遊ぶのと、値が下がり始めた商品を買い込んでおいて、飛子買いするのと。

養子になって宵の口から寝て、しだいにやせていくのと、主人の子供と男色をして、昼間だけ顔を見るのと。

六十歳すぎた後家が、赤い腰巻をして小判を数えているのと、角前髪の若衆が木綿帯をして、過ぎし日の兄分との誓紙を見ているのと。

島原通いが過ぎて抵当に入れた家屋敷が流れるのと、道頓堀で役者買いをしすごして借りた御城米の返済期限が切れかかったのと。

百物語に若衆の化物が出るのと、離縁した女房がねだりにやってくるのと。

楽屋帰りの若衆の編笠をのぞくのと、道中している女郎の禿に位を問うのと。

高野山の坊主の稚児小姓になるのと、隠居の親仁の妾になるのと。

竈払いの巫女が、男だけの家をねらうのと、香木の油を売り歩く若衆が、しつっこい中間部屋をいやがるのと。

お歯黒をつける女の口元と、若衆が髭を抜いている手つきと。

知らない揚屋の門で雨宿りするのと、

一 腰巻。
二 元服前の十五、六歳の頃、前髪の額の両端の生え際を角に剃り込む習慣があった。半元服という。
三 家屋敷を抵当に入れる借金。
四 大坂道頓堀の茶屋で、歌舞伎若衆を揚げて遊ぶこと。当時の揚代は銀一枚(四十三匁)であった。
五 譜代の諸藩および天領の諸城に、変事や凶年・飢饉にそなえて貯蔵せしめた米穀で、御用米ともいい、平時は新陳代謝のため一般町人に貸し出した。
六 貸借の期限。
七 江戸時代、多く夏季に民間で行われた遊び。行灯に百筋の灯心をとぼし、怪談一話ごとに灯心一筋を引き、百話に達して闇となると怪異が出現するという仕掛けであった。
八 女郎が遣手・禿を従えて、親方の家から揚屋へ向かう道中で、禿にその女郎の位(太夫・天神・鹿恋)を尋ねること。野暮の骨頂。
九 諺に「高野六十那智八十」といい、女人禁制の高野山と那智山では、年寄りになっても若衆勤めをしたことをいう。
一〇 関西は「てかけ」といい、関東では「めかけ」といった。



浅草の片陰の家に引っ込み、美少年たちを集めて『若道根元記』を講釈する場面。見台にのせられた自作のテキストを横目でにらみつつ講釈する男の前には、前髪立ちの美少年八人がすわり、テキストを

竈払ひの神子男ばかりの内を心懸くると、伽羅の油を売る子が中間部屋をいやがると。

歯黒付くる女の口もとと、若衆の髭ぬく手もとと。

しらぬ揚屋の門で雨やどりをすると、子供宿から闇に挑灯かさぬと。

風呂屋者と知音すると、三十日切の若衆しのぶと。

遊女を請け出すと、野郎に家買うてやると。

吉原の太鼓に羽織かすと、川原のこんがうにこまがね預けて置くと。

一一 毎月晦日に巫女が民家を訪れ、お祓いをして竈を清めた。当時、売色を兼ねたことは、『好色一代男』巻三の七に詳しい。

一二 胡麻油に生蠟と丁字を加えて練った鬢付油の一種で、美少年が売色を兼ねて売り歩いた。

一三 大名・旗本屋敷内の中間部屋。粗暴で性的欲求が強い。

一四 少年俳優をかかえて客をとらせる宿。

一五 売色の湯女。『好色一代女』巻五の二に詳しい。

一六 馴染みになること。またその人。

一七 一か月契約。

一八 大坂新町廓内の吉原町は片側町で、貞享当時二軒の揚屋があり、下等で鹿恋女郎だけが出入りした。

一九 四条河原の金剛(役者の草履取り)。

二〇 細銀。小粒ともいう。一匁から五匁までの計量銀貨。

闇夜に役者の家で提灯を貸さないのと。

風呂屋女と親しくなるのと、月ぎめの歌舞伎若衆をかわいがるのと。

女郎を身請けするのと、歌舞伎若衆に家を買ってやるのと。

吉原町の揚屋で、太鼓持に返すはずのない羽織を貸すのと、四条河原の役者の草履取りに、細銀を預けておくのと。

新町へ金のかかる盆前に行って、女郎と馴染になるのと、顔見世芝居の前に歌舞伎若衆がにわかに情け深くなるのと。

茶屋女が酒を飲まずに菓子をほおばっているのと、香料売りの若衆が秤目をいじっているのと。

屋形船に女方の若衆の後ろ髪が見えるのと、花見帰りの女乗物に鹿の子の着物の褄先が見えるのと。

裃を着た若衆が下男に書物を持たせて行くのと、なよなよとした上女中が下女に時代蒔絵の文箱を持たせて行くのと。

大名の小姓が大広間にすわっている姿と、御所勤めの官女のしどけない立姿と。

元服した若衆に恋文をやって笑われるのと、大振袖の年増に惚れられて横目で見られるのと、どちらが優雅であろうか。

二者択一ならば、その女がどんなに美人で気立てがよくて、その若衆がどんなにいやらしくて鼻ぺちゃであっても、男色を選ぶ

一 盆買いは正月買いに次ぐ大紋日で、大坂新町では七月十四日から二十日までの続け買いであった(色道大鏡)。だから盆前に女郎に馴染むと、盆買いを押し付けられる。 二 遊女の異名。「米と書てボサツとよめり。菩薩の如くうつくしきといふことぞ」(俚言集覧)。 三 顔見世狂言。毎年十月、各劇場で役者を入れ替え、その一座で十一月初めて興行する芝居。役者は諸事物入りの時節。 四 香料を売り歩く売色の美少年。『好色一代男』巻二の六に詳しい。 五 川御座船。屋根つきの遊山船。 六 立女方。一座で最高の地位にある女方。 七 なよなよとした。 八 東山時代の蒔絵の書状箱。 九 大名の秘蔵する小姓。 一〇 築地(屋根のある土塀)はもと堂上方の邸にだけ用いたので、転じて堂上方をいう。すなわち御所女。官女。 一一 元服して野郎頭になり、詰袖を着た若者。元服後は念者(兄分)となるのが男色のルールであった。 一二 ながし目。色目。 一三 どちらか一つを選ぶというのならば。 一四 鼻がそぎ落としたように低いこと。鼻ぺちゃ。 一五 同列に。同じレベルで。 一六 「本朝にかく此道(衆道)のさかんになり侍るは、伝教・弘法の二大師渡唐の時、天親菩薩にならひ来りて、帰朝の後よりの事なりと理尽抄には書けり」(よだれかけ〈寛文五年刊〉)。 一七 序文の場合と同じく「なんぞや」の省略と考える。 一八 塩をとるために用いる海

新町へ盆前に行きてよねと念比になると、芝居の顔見世前に子供の情ふかうなると。

茶屋女の菓子食ふと、香具の若衆の秤目せせると。

川御座に太夫子のうしろ髪見ゆると、花見がへり女中乗物に鹿の子のつま先見ゆると。

上下を着たる少人の小者に書物もたせて行くと、ゆたやかなる腰元のはしたに時代蒔絵の文箱持たせて行くと。

大名御物の大書院に座したと、築地女郎のしどけなき立姿と。

脇ふさぎたる若衆に状をつけて笑はるると、大振袖の女におもひ懸けられ尻目で見らるるとはいづれか。

ふたつどりには、その女美人にして心立てよくて、その若衆なるほどいや風にして鼻そげにても、ひとつ口にて女道・衆道を申す事のもつたいなし。

惣じて、女の心ざしをたとへていはば、花は咲きながら藤づるのねぢれたるがごとし。若衆は、針ありながら初梅にひとしく、えならぬ匂ひふかし。ここをもつておもひわくれば、

に決まっているし、女色と男色を同列に論ずるなどは、もったいない話である。

すべて女の気持をたとえていえば、花は咲いていても、ねじれた藤蔓のようなものである。若衆は刺があっても初梅のように、えもいわれぬ匂いをふくんでいる。というわけで取捨するならば、女を捨てて男を取るべきである。衆道の味わい深いところを、男色の開祖、弘法大師がおひろめにならなかったのは、人種が尽きることを心配なさってのことで、後世の男色隆盛をお見通しなさったからであろう。男たるもの意気盛んな時は、男色のために命を捨てるべきである。どうして好色一代男は、多くの金銀をいろいろな女たちに費やしたのであろう。遊びは男色以外にはない。男色のさまざまな姿を、この大鑑にもれなく書き記そうと、難波の浅い入江の海藻のようにかき集めてみた。だがしょせん小耳にはさんだ話だから、聞き流されるのがおちであろう。

女を捨て男にかたむくべし。この道のあさからぬ所を、あまねく[16]弘法大師のひろめたまはぬは、人種を惜しみて、末世の衆道を見通したまへり。これさかんの時は命を捨つべし。[17]なんぞ好色一代男とて、多くの金銀諸々の女につひやしぬ。ただ遊興は男色ぞかし。さま〲の姿をうつし、この大鑑に書きもらさじと、難波浅江の[18]藻塩草、[19]片葉の蘆の[20]かた耳に、これみな聞きながしの世や。

この道に[21]いろはにほへと

[22]角屋敷ばかり六ケ所、[23]大名借の手形まで腹替りの弟に譲り、都は[24]地車のひびき、[25]天秤の音さへ物のかしましきに、朝夕[26]黒木売るも女の声に聞きあき、[27]賀茂の山陰に北を見おろし、[28]綾椙の村立ち、東に洞の蔦紅葉、西に自然と岩組みあつて[29]まかせ水の清く、南は松高く、夜は葉越しの月さぞとおもはれ、ここに見立てて軒は笹葺きをむすび、[30]心に懸かる雲もなけれど、折節の時雨に[31]ぬれの道は忘れてわすれず、今でも美少人

この道にいろはにほへと

角屋敷だけでも六か所、それに大名貸しの証文まで腹違いの弟に譲り、都は荷車や天秤の響きがうるさいうえに、朝夕、黒木を売りに来るのが女の声なのでいやけがさし、賀茂山の麓の北を見おろす所に隠れ住んだ人がいた。その辺には檜杜松が生い茂っていて、東の方には紅葉した蔦が洞のようにからまり、西には自然と岩が積み重なっており、筧で引いた水は清らかである。南には松が高くそびえ、夜は葉越しに見る月がさぞかしと思われる。こういう場所を選んで、この人は笹葺きの庵を構え、今では心にかかる雲もないが、時おり時雨が降るにつけても、忘れていた色の道を思い出すのであった。今でも美少年なら訪れてほしい。独り寝の淋しさは承知のうえだが、寝覚めに聞く千鳥の声はもの悲しく、川音は耳にせわしく聞こえてくる。石川丈山が、「老の波たつ影もはづかし」と詠んだ小川も、この奥から流れているのである。

小川の岸は広々として、野放しの牛が食い残した草までも枯れてしまい、雪で道もとだえ、豆腐や醤油にも不自由するほどである。格子戸を閉じて、四条河原の顔見世芝居もまもなくだが、さぞ美し

藻。掻き集めると同音を通わせて、書き集める(上文)にかけて用いる。「思ふことを誰に言はまし藻塩草かきつめてだに慰みやせん」(新続古今)。一九 水流のために片方の葉だけが繁った蘆。「難波にかぎらず、八幡、淀、伏見、宇治等にも片葉の蘆多し」(摂津名所図会四)。二〇 聞くとはなしに聞くこと。小耳にはさむこと。

❖富豪の長男でありながら、女嫌いゆえに財産を腹替りの弟に譲って、賀茂山に隠棲し、寺子屋を始めた男がいた。話は、その寺子屋の中で衆道の契りを結んでいる美少年二人を、鹿が谷に住む念仏の老僧が見そめ、それを知った二人が、ある日老僧を訪れて慰めたが、老僧はその翌日行方をくらまし、まもなく少年の一人は死に、一人は出家した、というもの。主題に一貫性のない失敗作である。

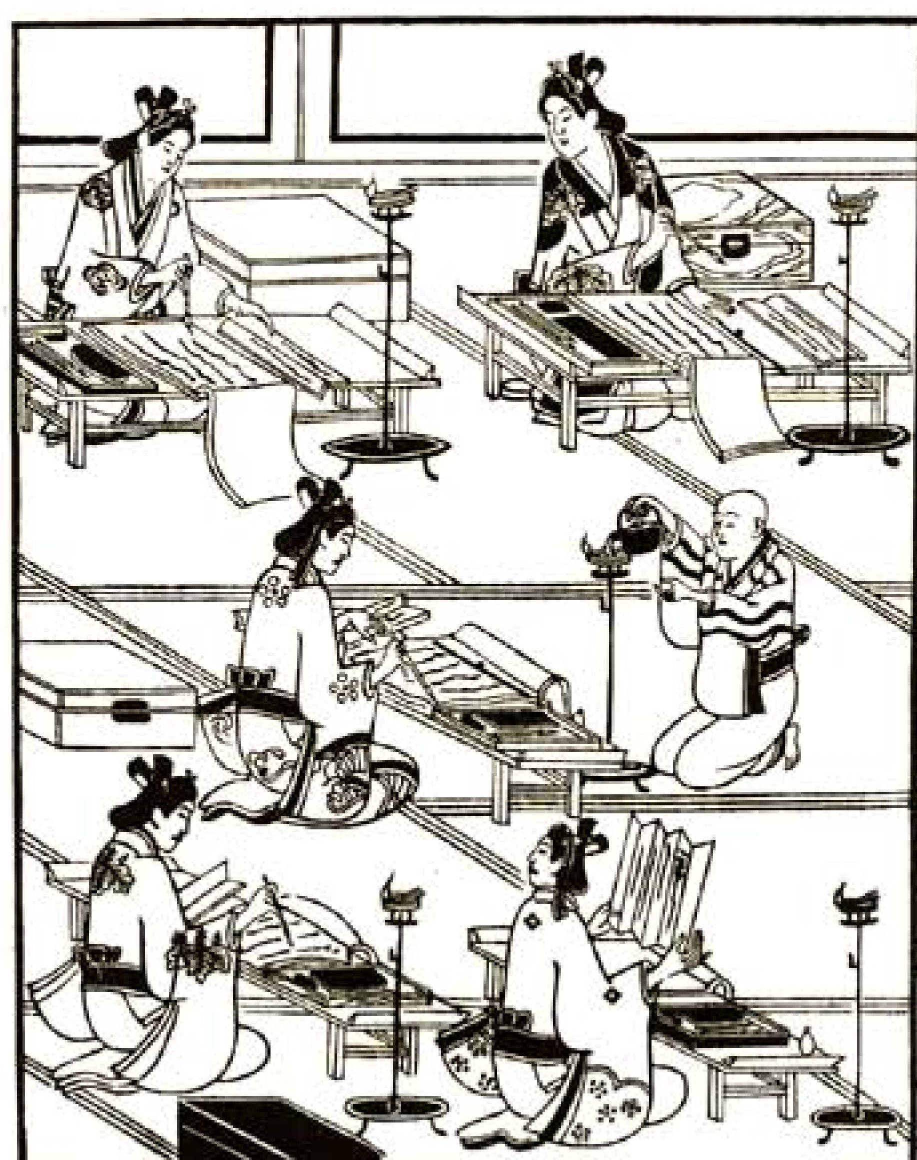
二一 手習いで最初に学ぶ文字。すなわち衆道への入門の意。二二 通り筋の曲り角にある町屋敷で、商いに有利なので、値段も高価。二三 大名相手の金融。多く、大名の蔵屋敷(物産の貯蔵・販売のための倉庫兼事務所)に関係する蔵元・掛屋などの一流町人が当った。当時、「借」は「貸し・借り」両訓(易林本節用集)。二四 車輪の四つある荷車。「地車のとどろとひびく牡丹かな」(蕪村)。二五 天秤の針口(針の平均を示す部

分)を小さな木槌で叩いて調節する音。二六 竈で蒸し焼きにした黒い薪。京都郊外の八瀬・大原の女(大原女)が頭にのせて売り歩いた。二七 賀茂山は京都市北区上賀茂の上賀茂社の東にそびえ、社地より六〇㍍高い。和歌に神山と詠む。二八 檜杜松・振杉ともいう。ヒノキ科の小低木。高さ三、四㍍。二九 引き水。三〇「今はゝや心にかかる雲もなし月をみやこの空と思へば」(新千載)。三一 濡の道。色道。

一「渡らじな瀬見の小川の清ければ老の波たつ影もはづかし」。瀬見の小川は京都市左京区下鴨の東部を流れる細流。洛北一乗寺の詩仙堂に隠棲した石川丈山(注二)が、後水尾天皇に召された時、固辞して詠んだ歌。
二 徳川家康の臣。大坂夏の陣に軍令にそむいて浪人し、洛北一乗寺に詩仙堂を営んで、詩書に余生を託した文人。寛文十二年(一六七二)没。九十歳。
三 格子に組んだ戸。
四 四条河原の顔見世芝居。→三〇〇ページ注三。
五 歌舞伎で青少年を演ずる役者。
六 裏白(しだ)の異名。正月用品。
七 歳末の請求書。

はとへかし、我が枕の淋しきは兼ねて合点の身にも、寝覚めの千鳥物かなしく、川音の耳にせはしく、老いの浪立つ影は恥づかし、と読まれし石川丈山入道の住めるも、この奥よりの流れなり。

岸根なめらかに、野飼ひの牛の残せし万の草までも枯れ果て、雪におのづと道絶えて、豆腐・醬油にもことをかくのみ。組戸さし籠め、川原の顔見世芝居も、今時なん、入れ替はる若衆方を思ひやるばかりに、その程を過ぎ、なほ冬めきて、人の足音もはやく、山草被きし者の声、餅突き、書出し、今



手習い屋一道の家の座敷で、手本を見ながら書写に励む美少年たち。手をとめて気遣わしげに隣の少年を見る右上の人物が大吉、隣が新之助。小坊主が灯火に油を補給し、夜であることを示している。

い若衆方が入れ替ることだろうと思ってみたりする。その時も過ぎて、なお冬めいてくると、人の足音もせわしくなり、裏白をかついで売り歩く声、餅つきの音、年末の請求書など、町家暮しのうるさい事を知らないですむのは、今の侘び住いの徳である。万事は闇の大晦日の夜も明けると、春を知らせる鶯のさえずる声に、梅の南向きの枝の蕾がほころび始める。今まで閉ざしていた障子を開けると、もう初霞がたなびいていて、気持も春めき、匂い油をみずから鬢になでつけた男振りは、見せる相手もいない。

春が深まるにつれて、山の浅いこのあたりにも、咲かなくてよい桜が咲き、人の嫁や後家らしい姿もまじって、清水や仁和寺の花だけでは見たりないのか、この辺鄙な所までやって来て、青々としたそこらの林を酒浸しにする。それさえ憎いのに、色っぽい女を塩を貰いによこす。「ない」と言って断ると、今度は箸を借りに来る。面を見ても返事もしない。ようやく夕方になると、栓をしない空樽をそのあたりに転がし、水風炉の残り湯を捨て、下男の久三が手っ取り早く道具類を片づけると、女どもはせかせかと木綿足袋を脱いで袂に入れ、銀の笄を抜いて代りに楊枝を挿し、櫛もはずして鼻紙袋

八 大晦日で月がなく、借金で心は闇。「世の定めとて大晦日は闇なる事、天の岩戸の神代このかたしれたる事」(胸算用一の一)。
九 鶯の異名。
一〇 「誰カ言フ春色東ヨリ到ルト、露ハ暖ニシテ南枝ノ花始メテ開ク」(和漢朗詠集)。
一一 自分で鬢髪を整えること。
一二 東山の清水寺と北山の仁和寺(御室の桜)。
一三 よこす。
一四 水風炉。携帯用の茶の湯の湯わかし器。茶弁当という。
一五 下男の通称。
一六 女の髷に挿す飾り具。金・銀・瑪瑙・水晶・べっこうなどで作る。
一七 鼻紙・薬・金子など入れて懐中する布または革製の袋。
一八 腰巻。
一九 首筋を抜き衣紋にして。
二〇 木地のままで塗らない葛笠。
二一 魚鳥類をつるす木製の鉤。
二二 祇園祭に月鉾を出す町。「月鉾、四条新町ノ東室町ノ西ヨリ出ル」(堀河の水〈元禄七年刊〉)。月鉾は月読尊の人形を飾る。

の徳はそれを知らずに、[八]万事は闇の夜もあけ、[九]春知らせ鳥の囀りに、[一〇]南枝はじめて障子を開き、霞のうちに匂ひの油、[一一]自鬢になでつけの男つき、誰にか見すべし。

　春深く山浅く無用の桜咲きて、人の嫁子・後家らしき姿まじりに、[一二]清水・仁和寺の花は見たらずや、この片陰に来て、青林を酒にひたし、それさへ悪きに、色ある女を塩もらひに[一三]おこす。「ない」とてやらず。その後箸借りにくる。つらは見て返事もせず。やう〳〵西日になつて、樽は口せずこかし、[一四]水風呂の湯も捨て、[一五]久三も取りまはしかしこく仕舞へば、女はさわがしく、木綿足袋をぬぎて袂に入れ、銀の[一六]笄を楊枝にさし替へ、櫛も[一七]鼻紙袋にをさめ、[一八]紅の脚布を内懐にまくりあげ、上着の衣裏をかなしみ、[一九]首筋を取りのけ、木の枝に懸け置きし[二〇]木地笠をとり〴〵に、いそぐや暮の面影、今朝とは見ぐるしく、町の女房のよろしからぬ事ばかり目にかかりぬ。帰るさに生垣よりのぞき、[二一]肴懸けを見て、「出家でもないが見ぬ顔をしをる」と、声高にしかる。そのはずなり。それがし女好めば、[二二]月鉾の町に歴々の入縁あれども、かつて取

におさめる。紅の腰巻を内懐へ手を差し込んでまくり上げ、上着の襟の汚れるのを悲しんで、首筋を抜き衣紋にし、木の枝にかけておいた木地の葛笠を、それぞれ取って帰って行く。その急ぐ夕暮れ姿は、今朝見た時とはうって変って見苦しく、町の女房のよくない点だけが目についた。女房どもは通りすがりに生垣から内をのぞき込み、台所の肴掛を見て、「坊主でもないらしいが、女の顔を見ないふりをしくさる」と、大声でののしって行く。それもそのはずである。もし自分が女好きであれば、月鉾の出る室町に、入婿する金持の家があったのだが、見向きもしなかった。それのみならず、近くの修学院離宮への行幸の際、天皇の御乗物に付き従っている官女どもが、四つ紋を置いた紫の帯を後ろに締めて、髪を玉結びにした姿の見えるのがいやで、北方の窓を塗りふさいでしまったくらいである。こうして日陰の草のような、生き甲斐のない身の上ではあったが、それはそれでやり方があって、あたりの村の子供たちに童子教を教え、手習い屋の一道と呼ばれて、年月を過ごしてきた。

　折から三月の十四日、空もおぼろな夕方から、夜学の子供たちが集まって来て、明晩差し出す清書の手習いをお互いに励

一 京都市左京区修学院にある修学院離宮への行幸。
二 下げ髪の先端を折り返して丸く結んだ上品な髪型。髷はない。


玉結び
（和国百女）

三 歌ガルタと読みガルタ（読みはかぞえるの意で、めくりガルタのこと）は似ているが、それぞれやり方があるとの意。
四 里近き童子に童子経を。経は教が正しい。『童子教』は僧安然著で一巻。江戸時代において『庭訓往来』『実語教』とともに寺子屋のテキストとして用いられた。
五 中旬の四日。十四日。
六 予習書き。
七 鯨差し。一尺が曲尺の一尺二寸五分に当る物差し。衣類の裁ち縫いに用いたので呉服尺ともいう。明治になって廃止。
八 京都市左京区下鴨。賀茂川と高野川との合流点の三角地帯。賀茂御祖神社鎮座。
九 土着の武士。郷士。
一〇 「浮雲」（易林本節用集）。

りあはず。それのみならず、[一]修学寺の御幸に、御所乗物につきぐ〜の、紫に四つ紋の後帯、[二]玉むすびの黒髪の見ゆるもうたてく、北の方の窓ぬりふさぎて、日影草のあるに甲斐なき身も、[三]歌と読みとあつて、[四]里ちかき童子経をしへ、手習ひ屋の一道と名によばれて年月をおくりぬ。

折節は弥生中[五]の四日の空、朧げなる暮がたより、夜習ひの心懸けは、明日のさらへ[六]書きを互に恥ぢぬ。文字を落とせば[七]鯨ざしの数を当てられ、又は机を負はせ門前をまはらす事もをかし。その日の当番は[八]下賀茂の[九]地侍、篠岡大吉九歳、小野新之助同年なりしが、この両人皆より先に来るに、道橋のたよわく、暮に渡るも[一〇]浮雲しと、大吉高からげして、新之介を負ひて川を越しいたはる風情、殊に筧の流れも手桶にはこびて、茶の間に焼き付け、落葉の煙をいとはず、座敷はくまでも独りはたらき、相番の人には万をゆるす。新之助は懐中鏡見て、前髪のおくれなで付け、身をたしなむ様子こざかしくおもはれ、空寝入りをして見るに、大吉が手をしめて、「日外の所は今に痛みますか」といふ。「これ程の事は」と肩を

むのであった。子供たちが文字を書き落とすと物差しでたたいたり、机を背負わせ門前を回らせたりするのも滑稽である。その日の当番は、下鴨の郷士の息子の篠岡大吉九歳と、小野新之助同じく九歳であった。この二人はほかの連中より早くやって来る途中、橋が崩れかかっていたので、夕方渡るのは危ないと、大吉は裾を高くからげて、新之助を背負って川を越し、何かといたわっている。ことに大吉は筧の水も一人で手桶に汲んで茶の間に運び、茶釜の下に焚きつける落葉の煙もいとわない。座敷も一人で掃き、相番の新之助には何もさせない。新之助の方は懐中鏡を見て、乱れた前髪をなでつけ、身だしなみをしている。その様子がいかにもこざかしく思われたので、一道が空寝入りして見ていると、新之助は大吉の手を握りしめて、「いつぞやの所は、今でも痛みますか」と言う。「これしきの事は」と言って、大吉が肩を脱ぐと、手習い草紙をとじる小刀で、兄弟分の契約の印に突いた傷跡が、紫立っている。新之助はそれを見て、「少しお顔がはれぼったいようですが、私ゆえに、大切な御身に傷をつけてしまいまして」と言って、二人は涙を流して悔やむのであった。一道はこの様子を見て、中国の鄭の荘公は、

ぬげば、草紙[11]錐封じ小刀にて、若道[12]の念約の印紫立ちて、「少し面はれたるを思へば、我ゆゑの御身の疵」と、泪四つの袖をしたし悔やむを見て、大唐[13]の鄭の荘公は、御年もまだしき時、子都を愛し給ひて、玉の袂より御手を取りかはし、細行[14]の道車を留めたまふ粧ひも、かくやと思ひ斗る。魏[15]の哀王は、竜陽君を念友に定まりて後、女乱[16]をさまり、国中衆道に諒あるを知るとかや。我この道を深好[17]するによつて、自然と若年にわきまへて、浅からぬ心ざし、末まで見届けけるに、連理[18]面々鳥のかたらひ、愚かに頭をならべ、暫時も離るる事なし。なほさかんになる時は、二人が美形にひかれて、僧俗男女にかぎらず、千愁百病となつて、焦れ死その数しらず。

　その頃、鹿[19]が谷の奥に念仏の行者住みたまへり。八十余歳をたもち、今となつてかの両若[20]の衆ざかりを見て、後世[21]を取りはづし、前生[22]を忘れたまふとや。ある人の語りければ、「いづれに御心のあるもしらず」とて、両人共にかの草庵に尋ね入るに、案のごとく花も紅葉も捨てたまはず、春秋よりの思ひをはらさせ給へり。残る言葉[23]もあれば重ねて音信れけ

まだ若い時、子都を寵愛されて、美しい袂から手を差し伸べて取り交わし、道行く車をとどめられたというのも、おそらくこんなありさまであったろう。また魏の哀王は、竜陽君と男色の契りを結んだ後、女による国の乱れが治まり、国中は衆道の誠あることを知ったという。自分がこの道を深く好むから、若い弟子たちも自然にわきまえて、こんな深い交りをするのであろうと、その後も注意して見ていると、連理の枝や一身両頭の命々鳥のように、いつでも愚かしく頭を並べ、しばらくも離れることはなかった。二人が若衆盛りになると、その美貌にひかれて、僧俗男女ともに恋いわずらい、焦れ死にする者が跡をたたなかった。

　その頃、鹿が谷の奥に、念仏の行者が住んでおられた。すでに八十余歳の老齢の今となって、かの二人の若衆盛りを見て、後生のことも前生のことも忘れて、夢中になってしまわれた。その事をある人が二人に話すと、「我々のどちらにお心があるのかわからないから」と、連れ立って行者の草庵を訪れると、思ったとおり花も紅葉もお捨てにならず二人を寵愛して、去年の春秋以来の思いをお晴らしになった。言い残した事もあったので、もうその二人が再び翌日訪れて見ると、

一一 手習草紙をとじる錐に使う封じ小刀(小柄)。
一二 男色の誓約に小刀で肱を突いた。「貫肉とは肘にても股にても刃のさきにかけて、肉むらを突き貫く事也。是衆道において、奴などのすべきはたらき」(色道大鏡)。
一三「むかし大唐の鄭の荘公は子都を愛し」(心友記〈寛永二十年刊〉)。子都は『詩経』や『孟子』に見える中国古代の美男子。鄭は春秋時代の国名で時代が合わない。
一四 そぞろ歩きの車の意であろう。道車は象牙で飾った車。
一五 曹操の子丕が漢の献帝の位を奪い帝を称し、魏と号した。五代四十六年で二六五年に滅ぶ。「魏の哀帝は竜陽君におぼれて坐臥をゆだね」(よだれかけ)などのエピソードは『戦国策』による。のち竜陽君は陰間の異名となる。
一六 女色による国の乱れ。
一七 原本ふりがな「しんしよく」。
一八 比翼連理の語らい。連理は二木の枝が連なって木理が通じていることで、契りの深いことのたとえ。面々鳥は命々鳥のなまりで、仏説にいう一身両頭の鳥。
一九 京都市左京区の地名。大文字山の西麓。俊寛僧都の山荘のあった所。
二〇 二人の若衆の若衆盛り。
二一 極楽往生の素志を見失い。
二二 現在の生は前世からの因縁に基づくという仏説。
二三 言い残したこと。

るに、はや御出家はましまさず、[一]世を思ひ葉の二またの竹に、「旅衣なみだに染むる[二]ふた心[三]思ひ切るよの竹の葉隠れ」。この老僧は何をか恥ぢたまへり。すぎにしや[四]真雅僧正の事も、「思ひ出るときはの山の岩つつじ言はねばこそあれ恋しき物」と、その竹を横笛二管に[五]細工のえものにおこさせ、寒夜の友吹きすれば、天人も雲より覗き、[六]無官の太夫もあらはれ、今の世の[七]庄兵衛など、息の出所を感ずる。

されば、はかなき人の身、詩人は[八]枕夢夕日と作れり。歌人は[九]仮のやどりの曙ともよめり。ああ現か幻か、新之助せめて霜ならば昼消ゆべきに、夜のあくるをも待たず[一〇]七つの鐘の鳴る時、目覚まして目をふさぎ、十四歳にして、末期にこの川水を残して、深く[一一]なげかすは大吉なり。「今は聞く人もなし」と、笛竹をうちくだき、これも煙となし、その身は[一二]常精進となつて、[一三]岩倉山にとり籠り、手づから剃刀にて惜しや黒髪を。

ご出家は姿を消しておられた。世間体を思われたか、葉付きの二股の竹に、「旅衣なみだに染むるふた心思ひ切るよの竹の葉隠れ」と、昨日の日付で書きつけてあった。この老僧は何を恥じられたのであろう。「思ひ出るときはの山の岩つつじ言はねばこそあれ恋しきものを」という恋歌を、在原業平に贈られたという真雅僧正の事も思い出されて、いよいよご出家が恋しくなった。二人は上手な細工人に頼んで、その二股の竹を二管の横笛に作らせ、寒夜に合奏すると、天女も雲からのぞき、無官の太夫敦盛も姿を現し、当代の森田庄兵衛などは、離れていても、吹く息の出所を感ずるほどであった。

ところで、はかないものは人の身の上、詩人はそれを「枕夢夕日」といい、歌人は「仮の宿りの曙」と詠んでいるが、まことに現か幻のようである。新之助がせめて霜ならば、昼間に消えるはずなのに、夜の明けるのを待たず、七つの鐘の鳴る時に目を覚ましたが、そのまま目をふさぎ、近くの川音を形見に十四歳でこの世を去った。大吉の嘆きはひとかたならず、「もう聞いてくれる人もない」と、竹笛を打ち砕いて燃やし、自分は出家の身となって岩倉山に閉じ籠り、みずから剃刀で、美しい黒髪を剃り落としてしまった。

一 世間体を思うと、思い葉の掛詞。「思ひ草、たしかなる事なし。一説に竹とあり」（匠材集〈慶長二年刊〉）。 二 二人の若衆を愛する浮気心。 三 思い切る世と（竹の）節よとの掛詞。 四「此歌北畠准后親房、古今抄に云、真雅僧都の業平につかはしける」（岩つつじ〈延宝四年刊〉）。歌は『古今集』恋歌一に「読人知らず」で収載。真雅は空海の弟で十大弟子の一人。承和二年（八三五）空海の示寂にあたって、東寺一の長者となった。 五 細工を得意とする者に作らせ。 六 平敦盛。有名な青葉の笛を所持した。須磨寺に伝える。 七「当世笛吹は森田庄兵衛」（人倫訓蒙図彙〈元禄三年刊〉）。 八 出典未詳。人の命のはかなさは、夕日の沈む間に見る夢のごとし、との意。 九 類歌「命まつ仮の宿りのうちにだに住み定めたる隠れがもなし」（風雅集）。 一〇 午前四時を告げる鐘。 一一「嘆く」に敬語の助動詞の「す」のついた形。お嘆きになる。古語。 一二 出家の身となって。 一三 京都市左京区岩倉付近の山。

❖大隈の浪人の一子玉之助が、会津の松平家に小姓奉公して寵童となった。ある日殿の御前で蹴鞠に興じている最中に発病して大病となった玉之助を、日に三度ずつ半年余りも見舞ってくれた侍と念友したことが知れて、双方とも閉門の身となって数年、切腹の願いを訴訟すると、お咎めなく二人とも許されたので、報恩

[14]垣の中は松楓柳は腰付

「世界一切の男美人なり。女に美人稀なり」と、安部[15]の晴明が伝へし。子細は、女の面は白粉に埋むのみ、唇に紅花[16]歯[17]を染めなし、額[18]を作り眉[19]の置墨、自然の形にはあらず。ひとつは衣装好みに人を誑かす事ぞかし。

[20]絹帷子の袖涼しき、風[21]の森近き里に身を隠し、生国の大隅にも長浪人は住みうし。栄花はむかしになりぬ。橘十左衛門とて武道すぐれての男、古主にも惜しみたまへども、家老職の者との口論、是非なく城下は闇に立ちのき、時節の朝日を待ちぬ。女は山城の国栗栖[22]の小野の奥そだちなりしが、年久しく一条[23]村雲の御所に宮づかひして、親里の碓の音も、今は玉琴[24]に聞き替へ、同じ油火も松明[25]進むと云ひなし、賤の家の糠味噌までも、酒塵[26]と言葉を改め、物ごとやさしく良きを見習ひ、風儀もそれにつれて都顔になりぬ。

十左衛門世にある時、この御所に筋目あつて、この女二十

垣の中は松楓柳は腰付き

「世界のすべての男は美しいが、女に美人は稀である」と、安倍の晴明が言い伝えている。そのわけは、女の顔は白粉で塗りつぶし、唇には紅をつけ、歯はお歯黒で染め、額の生え際を作り、眉は描いて、自然の形ではない。おまけに衣装をえり好みして男をたぶらかすのである。

さて、絹帷子の袖に涼しい風が吹いてくる、大隅の風の森に近い村に身を隠している侍がいた。大隅は生国なのだが、長の浪人暮しはやはりつらい。栄華の日々も遠い昔となってしまった。この男は、橘十左衛門といって、武道にすぐれた侍であった。主君も惜しまれたのだが、家老と口論したので、やむなく夜にまぎれて城下を立ち退き、世に出る日を待っていた。女房は山城国栗栖野の奥山育ちであったが、長い間一条村雲の御所に宮仕えして、実家の碓の音の代りに琴の音を聞く身となった。同じ油火をとぼすにも、御所言葉で松明進むといい、民家でいう糠味噌も酒塵というようになり、何かにつけて優しく上品な様子を見習い、行儀作法もそれにつれて都風となった。

十左衛門がまだ浪人ではない時分、こ

のため玉之助が二十五歳になるまでは音信不通で過ごしたという、衆道の義理と主従の義理を守った話。

一四 垣は鞠垣。鞠壺の垣は四本懸りが多く、松・桜・楓・柳を植えた。柳腰は細くしなやかな腰つき。 一五 平安中期の陰陽家。賀茂忠行およびその子保憲に従い、陰陽・天文に通じた。伝説が多い。 一六 べにばな。キク科の二年草。紅黄色の小花で、紅を製し、また染料として上品。一名末摘花。 一七 江戸時代、既婚の女性はすべてお歯黒で歯を黒く染めた。「歯黒は毎朝有べし。二日に一度は中、三日に一度は下なり」(女用訓蒙図彙)。 一八 「ひたいの事、きは墨はいかにもほのかにうす〳〵とあるべし。…今様のすり上げびたい、是も顔に応じてつくらん事肝要なり」(女用訓蒙図彙)。額の形には丸額・富士額・瓦灯口などがあった。 一九 「眉は貴賤おしなべて今は墨をひくなり。是遊女のうつしなり」(女用訓蒙図彙)。 二〇 生絹(練らぬ生糸)で織った単物。 二一 鹿児島県姶良郡隼人町姫城の地。「大隅国分、風の森」(名所方角抄)。 二二 栗栖野は京都市東山区(宇治郡山科町)の大字。「栗栖の小野の萩」は古来の歌枕。 二三 京都市上京区堀川通今出川下ルにあった瑞竜寺。日蓮宗。歴代尼宮で摂家より住持し、村雲御所という。現在は移されて、滋賀県近江八幡市宮内町にある。 二四 玉は琴にかかる美称。 二五 松明の音読。ともしび

を点ずるの意。御所の女房ことば。
三六 糠味噌の女房ことば。

一 十月の最初の亥の日。子孫繁盛を願い、亥の子餅を食して祝う。
二 どちらから見ても同じように美しく見える名玉を、面向不背の玉という。
三 見入れは執着。面向不背の玉を、讃州志度の沖で竜宮に取られたという謡曲「海士」によっていう。
四 東の武州。江戸。
五 譜代の若党（軽輩武士）。
六 積もる年月。
七 男色。衆道。
八 「大唐に幽信といひて大唐四百余州にかくれなき美少年あり。されども此人じひなさけの道をかつてしらざるなり。…宗玢といふもの楊州の守護なりしが、彼幽信が墓所のほとりを通り、一詩作りけるに、無情少年非耶レ是、幽信旧基見不レ愁と作りし事、旧代より今にいたるまで是かくれなし」（心友記）。

二の冬、[一]はじめての豕(あのこ)の日乞ひ請け、夫妻にして、この中に一子常ならぬ生まれつき、母自慢もまことにうるはしく、名をさへ玉之助とて、今は十五歳になりぬ。[二]面向不背(めんかうふはい)の髪の結(ゆひ)振り、[三]竜宮よりの見入れもあるべし。「この美形(びけい)の田舎(ゐなか)には惜しや」と、見る人の申せし。

今の[四]東武(とうぶ)に身代(しんだい)望みを懸け、[五]家ひさしき若党(わかたう)金沢角兵衛、[六]積年(せきねん)五十にあまれば、物のさばき慥(たし)かなるもの付けて、旅はじめの曙(あけぼの)いそぐに、名残(なごり)の姿を見送り、「かまへて武士の心懸けは、命ををしむ事なかれ」と、この一言(ごん)より外(ほか)はなし。母親は角兵衛が近くによりて、しばらく囁(ささや)き別れさまに、「中にも[七]その事をよ」と仰せられける。つき〴〵の者ども何の事かとおもふに、玉之助、角兵衛をまねき、「只今(ただいま)母人申されしは、我に執心(しふしん)の人頼むとも、文などの媒(なかだち)つかうまつるなど仰せけるか。誰人にてもこがれての状たまはるを、蟠(わだかま)りて届けずば、汝(なんぢ)恋しらずなり。我たま〴〵人界(にんがい)に生をうけて、しかも又世に悪(にく)まれぬ程の形にして、その情(なさけ)しらぬも口惜しし。[八]大唐の幽信(いうしん)が楊州(やうじう)にて、無情少年(むじやうせうねん)と宗玢(そうぶん)に作られしも、

の御所に縁故があって、この女が二十二歳の冬、十月最初の亥(いのこ)の日に貰(もら)って夫婦となり、やがて二人の仲にたいへん美しい子が生れ、母が自慢するのももっともであった。名前も玉之助とつけて、今年十五歳となった。面向不背(めんこうふはい)の玉のような髪の結いぶりなので、竜宮からも見込まれそうである。「田舎(いなか)におくのは惜しい美少年だ」と、見る人々は噂(うわさ)した。

玉之助は江戸で奉公させようと、昔から仕えている若党の金沢(かなざわ)角兵衛は、年も五十歳余で、物事のさばきも確かな者だったので、この者をつけて旅立たせることになった。朝早く出て行く息子の別れの姿を見送って、「武士の心がけはただ一つ、命を惜しむでない」と、父親はそれだけを言った。母親は角兵衛に近寄って、しばらくささやいていたが、別れ際に、「なかでもその事に気をつけておくれ」と言われた。召使いの者たちが、何の事かと思っていると、玉之助は角兵衛を呼んで、「ただいま母上が申されたのは、わたしに思いをかける人に頼まれても、恋文の仲立ちはいたすなと仰せられたのであろう。どなたでも恋い焦(こが)れて手紙を下さるのを、ぐずぐずして届けないようなことがあったら、そなたは恋知らずというものだ。私もたまたま人間と生

強顔き心からなり」と語りたまへば、角兵衛も分別して、「いづれおふくろ様のやうに御気づかひあそばしては、浮世に若道は絶え申すべし」と、大笑ひして行くに、夏海の静かに室津よりあがりて、須磨の関といふも恋ひせばつらかるべし。

相坂の関と聞くも、忍ぶ身ならばと思ひやられ、勧修寺のあたりより北を見渡し、母の古里もあの山陰ぞかし。今は所縁の人もなくて問はずうち過ぎ、梅の木の茶屋とて、和中散の売薬あり。汗をしのぐ冷水うれしく、江戸より御迎ひの男ここに出合ひて、御奉公のあらましを申せば、心よくて水無月はじめつかたに着きて、間もなく御目見え済みて、会津に御供申してくだりぬ。心ざし人に越え、おのづと御前よろしく、国中にありし少人の花は、皆入り日の朝顔となりぬ。

ある暮、風絶えて鞠垣の柳・楓もうごかず。岩倉主水・山田勝七・横井隼人・玉之助、いづれも色ある蹴出し、御前の御機嫌この時とまるべき所、玉之助手前にて落つる事度々なり。「日頃は家中一番の上手、飛鳥井の家にも生まるべき人と沙汰いたせしに」と見るうちに、俄に眼ざし替はり、身に

れ、しかも人々に憎まれないほどの姿をしていて、そういう情けを知らないというのも口惜しい。中国の幽信という美少年が、その死後楊州の守護であった宗玢に無情少年とのしられたのも、あまりにつれなかったからだ」と言うと、角兵衛もとくと考えて、「どの道お袋様のようにご心配あそばしては、この世に衆道は絶えてしまいましょう」と、大笑いして先を急いだ。静かな夏の海を渡って、播州の室津に上陸した。須磨の関といえば、恋する身にはつらい事であろう。あれが逢坂の関と聞くにつけても、人目を忍ぶ身であったならばと思いやられるのであった。勧修寺のあたりから北を見渡し、母の故郷はあの山陰にあるのだが、今では親類もいないので、訪ねずに通り過ぎた。梅の木の茶屋に、和中散という薬を売っており、汗の引っ込む冷たい水のあるのもうれしかった。江戸の藩邸からの迎えの男とここで出会い、ご奉公のあらましを聞いて玉之助は安心し、六月の初めに江戸に着いた。まもなくお目見えがすみ、殿のお供で本国の会津へ下った。人一倍心がけがよいので、殿の覚えもめでたく、国中の美少年は、みな夕日の前の朝顔のようにしおれてしまった。

ある夕方、風が凪いで、鞠垣の柳や楓

九「強顔（ツレナヒ）」（易林本節用集）。

一〇 兵庫県揖保郡の西南端にある港で、王朝時代から瀬戸内海航路の要港。

一一 西国街道に当り、畿内と山陽をつなぐ道の要衝だったので、王朝時代には関がおかれ、『延喜式』に「須磨駅十三匹」と見える。須磨関址がある。光源氏流離の地。

一二 京都市山科区勧修寺。伏見から大津への街道筋で茶店が多かった。

一三 草津と石部の間の六地蔵村の別称。滋賀県栗太郡栗東町。

一四 注一三の梅の木に、梅木是斎という名物の和中散を売る店があった。目まい・産前産後・時候あたりの特効薬。

一五 新参の奉公人が初めて主君に拝謁すること。

一六 会津藩二十三万石は、寛永二十年（一六四三）に松平正之が山形から移り、明治維新に至る。

一七 美しい若衆たち。

一八 色は、蹴上げた鞠のゆるやかな回転の具合をいう。たくみな鞠のけり方。

一九 飛鳥井氏は『新古今集』撰者の一人の雅経に始まり、和歌と蹴鞠二道の家として子孫相続いている。

一 「なかりき」の「き」の省略。「つねの人とは思ひ入れもふかかり」(六の二)。

二 この世にての生存。

三 重役のところを。

ふるひ手足青ざめて、装束ぬぎもあへず沓音絶えて、はや息の通ひもなかり[一]。おの〳〵おどろき、水いそぎ薬をあたへ、正気の時屋敷に送りて、色々医術をつくし給へども、更に甲斐なく、次第に浮世[二]の事極まりぬ。この一人のなげきに世間の鳴りをやめける。

　ここに、笹村千左衛門と申して、御領境の御番所あづかりて、御城下の人は見しらぬ程の末の役人なりしが、玉之助をあこがれ、明暮おもふに便なく、いつぞは書通に心を御知らせ申すべしと、おもひ込めしうちにかかる仕合せ、御命にさはる事あらば、なか〳〵世には住むまじく思ひ定め、玉之助玄関まで、諸人の見舞ひと同じう帳に付きて帰り、又昼機嫌をうかがひ、夜に入りて御気色を尋ね、日に三度づつ半年あまり勤めけるに、あやふき露命まぬかれ、塵汚を濯ぎ、月代をあらため、御前の御礼をはじめて仕舞ひ、年寄中[三]残らずまはりて私宅にかへり、角兵衛に見舞帳を取りよせ内見するに、笹村千左衛門と申す書付け、病気そも〳〵よりこのかた、毎日三度づつの見舞ひ、「これはいかなる御人ぞ」とたづね給

もそよともしなくなった。岩倉主水・山田勝七・横井隼人、それに玉之助の四人の小姓が巧みに鞠をけるので、殿も上々のご機嫌でご覧になっていると、玉之助の手前にたびたび鞠が落ちた。「日頃は家中一番の上手で、飛鳥井家に生れるべき人だと噂されていたのに」と見るうちに、玉之助はにわかに目の色が変り、震えがきて手足は青ざめ、沓音は絶え、装束を脱ぐまもなく気絶してしまった。人人は驚いて水を飲ませ、薬を与え、正気に返った時に屋敷に送り届け、いろいろ医術を尽したが、少しも効果がなく、生きる見込みはなくなり、玉之助一人のために、世間は鳴りをしずめて悲しんだ。

　ここに笹村千左衛門といって、国境の御番所をあずかる侍がいた。ご城下の人は見知らないほどの末の役人であったが、明け暮れ玉之助を恋い焦れ、言い寄る便りもないので、いつかは手紙で心をお知らせしようと思い込んでいるうちに、こんな事になってしまった。お命に障るような事があったら、自分も生きてはいまいと覚悟して、玉之助の家の玄関まで、人々と同じように見舞いに行き、帳面に記名して帰り、また昼も機嫌をうかがい、夜また見舞って、日に三度ずつ半年あまりも勤めた。玉之助は危うい命を助かり、

四 病後初めての外出。

へども、誰か存じたる者もなし。「御家に筋目もあつて御入り候やうに、いづれも存じ候は、御気分の御事しみ〴〵と様子をたづね、よきと申せばよろこび、あしきと語れば忽ちに眼色かはり、常の人とは格別のなげき、相見え申す」のよし御物語り申せば、「いまだ近付きにさへならぬ先に、頼もしき御方」とばかり云ひやみて、千左衛門屋敷ははるかなる所尋ね、「この程の御礼に御門前まで」と申し入るれば、かけ出、「こは有難き仕合せ。かかる野末までの御初足、またもや袖風の、尾花もさわがしきこの夕、ただ御帰宅」と申せば、



柳の木の植えられた鞠垣のかたわらで、鞠装束のまま倒れかかっている前髪の美少年が橘玉之助、介抱する二人と鞠を持って立ち心配そうに見ているのが、岩倉主水・山田勝七・横井隼人のつもりか。

身のけがれを洗い清め、月代を剃って、まず殿様にお礼を言上してから重役の所を残らず回って帰宅し、角兵衛に見舞帳を持ってこさせて一見すると、中に笹村千左衛門という名前があり、病気の最初から、毎日三度ずつ見舞いに来ている。「これはどういうお方だ」と尋ねたが、誰も知っている者がない。「お家に縁故があっておいでになるのかとみんな思っておりました。ご容態をしみじみとお尋ねになり、よいと申すと喜び、悪いと言いますとたちまち眼色が変り、ほかの人とは格別にお嘆きと見受けられましたので」と角兵衛が申し上げた。玉之助は、「まだお目にもかからないうちに、頼もしいお方だ」とだけ言ってその場をすませ、はるばると千左衛門の屋敷を訪ねて、「病中お見舞いのお礼に、ご門前までまかり出ました」と申し入れると、千左衛門は駆け出して来て、「これはありがたい仕合せです。病み上がりにこのような野末までご足労をいただいて恐縮です。尾花も騒がしい夕風の折から、早々にご帰宅なさいませ」と言うと、「人の命は稲妻のように、いつ消えるか知れませんから、つぎの機会を待ってはおられません。少しお話ししたい事がありまして、やるせない思いをいたしております。ま

「世は稲妻の暮またず、消ゆる身のかさねては待たれじ。すこし御咄し申す事、心にやるせもなし。まづそれへ」と書院に通り、二人より外には松ちかき端居して、「我らが胸の中あくる所はここなり。この程の御心づかひ思ひ合はすに、近頃卒爾ながら、数ならねども我に、もしも御執心あらば、今日より身をまかせんために、忍びてこれに」と語る。千左衛門赤面の泪、折節の紅葉に時雨あらそひ、後は下心のあらはれ、「とかく言葉では申しがたし。正八幡の内殿に所存を込め置く」の由申せば、すぐに参詣して、神主右京に子細をきけば、「御病のためとて日参、願状の箱納め置かれける」と申す。「それを」と開き見るに、貞宗の守り脇指に一通筆を尽くし、玉之助身の上をいのる。

「さては不定の命、この願力にてのがれける。いよ／＼見捨てがたく」と、念友するにはやもれ聞こえて、御仕置きの役人改めて、両方一度に閉門、はじめより死に身に定めければ、更になげかず、かかる時の便とて、状文の通ひも、片陰に忍び道を付けて、年月あまりかくありしが、「今は世にあき果

ずそちらに参りまして」と玉之助は押して書院に通った。二人のほかは庭の松だけの端近く座して、「私の思っております事は、このとおりです。病中のお心遣いを思い合わせてみますと、たいへん軽率ではございますが、数ならぬ私をもしやご執心ではございますまいか。もしそうでしたら、今日から身をおまかせしようと、忍んで参ったのです」と玉之助が言うと、千左衛門は赤面して涙をこぼし、折からの紅葉に時雨が降りかかるような風情で、後には本心をあらわした。「とかく言葉では申し上げられません。正八幡の内殿に、思うところを籠めてあります」と言うので、すぐに二人で参詣して、玉之助が神主の右京に事情をきくと、「ご病気平癒のためといって日参なされ、願状の箱を納められました」と言う。「それを」と開いて見ると、貞宗の守り脇差に筆を尽して玉之助の身の上を祈った一通の書状が添えてあった。

「さては自分の危うい命は千左衛門の願力で助かったのだ。いよいよ見捨てられない」と、衆道の契りを結んだ。早くもその事がもれて、お仕置きの役人が取り調べたうえで、両方一度に閉門を申しつけられた。二人とも初めから死ぬ覚悟をしていたので少しも嘆かず、こういう時

一 突然。軽率な様にいう語。

二 近江の人。鎌倉に下って正宗十哲の一人となる。正平四年(一三四九)没。また一説にいう肥前平戸の刀工貞宗は、天文年間の人。

三 武士や僧侶に科せられた江戸時代の監禁刑の中でいちばん重い刑。居宅の門を厳しく鎖し、窓を閉じ、昼夜の出入りも禁じられた。

四 横目付の略。諸侍の行跡・事務を監視する役人。

❖野間光辰所蔵の『古写本実録』によれば寛文四年(一六六四)三月二十六日の備前岡山池田光政家中の事件を、出

雲松江藩の事件とし、登場人物名やあらすじはそのまま借用し、独自の筆致で新しい作品に仕立てている。若衆増田甚之介の恋情と武勇、森脇権九郎の分別ある念者ぶりを、簡潔に、しかも情感豊かに描いた佳作である。

五「年々歳々花相似タリ、歳々年々人同ジカラズ」(和漢朗詠集)。
六 この一節は杜甫の「貧交行」の一節「手ヲ翻セバ雲オコリ、手ヲ覆エバ雨フル」による。男女とも十八、九歳の元服前は、八つ口を縫わない振袖を着用し、少年期が終ると脇をふさいだ詰袖を着た。
七 角前髪(二九八ページ注三)に同じ。半元服。
八 ↓三〇九ページ注九。
九 出雲国(島根県)の松江藩十八万六千石は、寛永十五年(一六三八)に越前宰相秀康の三男松平直政が松江城主となって以来、十代定安に至るまで居城して明治維新に至る。
一〇『古写本実録』によれば、親は六百石取りの弓大将、その子益田甚之介は側小姓で当年十六歳、以下、念者の森脇権九郎(二十八歳)、小者の伝五郎など、登場人物名は一致している。ただし、人物名と梗概を借りただけで、まったく新しく書き改めている。
一一「近年印行の一書云ふ。尼嫗の語り伝へに、十月出雲の大社に諸神あつまりて、男女の縁をむすび給ふといふ」(広益俗説弁)。

て申せば、三月九日に切腹仰せ付けられ候はば、有難かるべし」との訴状さしあげ、その日を待ちけるに、[四]横目まゐつて御意申し渡して、何の事もなく元服を仰せ付けられ、千左衛門も別の事なく御許されける。この上は、と互に申し合はせて、「二十五歳になるまでは、向後音信不通」とかため、顔見合はせても詞も懸けず、この御恩をわすれず御奉公を勤めけるとなり。

玉章は鱸に通はす

「[五]年々花は替はらず、歳々人同じ姿にあらず」といへり。ことさら若道の盛り、[六]脇塞げば雨ふり、[七]角入るれば風立ち、元服すれば落花よりは[八]強顔し。これを思ふ時は、情といふ事夢にたとへて見る間もなし。

ここに、[九]八雲立つ国の守に仕へし[一〇]増田氏の二男甚之介とて、美少自然の形、文武の諸芸十一歳の春はすぐれて、世の人、心を懸けざるはなし。「日本国中に又あらず」と、[一一]大社に神

の便りにと、かねてつけておいた忍び道から手紙をやり取りし、長い間そうして過ごしていた。やがて二人は、「今はもう生きる事に飽き果てましたから、三月九日に切腹を仰せ付けくだされば、ありがたい仕合せでございます」と訴状を差し上げて、その日を待っていると、横目役が来て、殿の御意を申し渡し、玉之助は何事もなく元服を仰せ付けられ、千左衛門も別状なく閉門をとかれた。このうえは、と互いに話し合って、「玉之助が二十五歳になるまでは今後音信不通」と約束し、顔を見合わせても言葉をかけず、ご恩を忘れずにご奉公を勤めたという。

玉章は鱸に通わす

「年々歳々花相似たり、歳々年々人同じからず」というが、ことに若衆の盛りはあっけない。十八、九歳で振袖を詰袖に着替えると、雨が降るように悲しむ人があり、半元服して角前髪になると騒ぎが起こる。元服すると落花よりも情けない。この事を考えると、男色の情けというものは、夢よりもはかないものである。

　さて、出雲国松江の城主松平氏に仕えていた増田氏の次男甚之介という若衆は、自然と美しく生れつき、文武の諸芸にす

一 もっぱらの噂。
二 念者（兄分）との縁。男色の契り。
三 松江湖（宍道湖）の鱸は名物。中国江蘇省の松江の鱸を面影としている。「巨口細鱗ニシテ状松江之鱸ノ如シ」（後赤壁賦）。
四 お城勤めの際に、供の者が主人の帰りを待っている部屋。
五 空梳き。髪油を用いずに、ざっと髪を梳き整えること。
六 「訕ソシル」（易林本節用集）。
七 『遊仙窟』の字訓。
八 歯の荒い梳櫛。
九 通り一ぺんの言いぐさだ。
一〇 時鳥。「ほととぎす人まつ山に鳴くなれば我うちつけに恋ひまさりけり」（古今）。

の集まってこれ沙汰[一]なり。
　この念縁[二]を同じ家中にむすび給へり。森脇権九郎、今年二十八歳にして、何事をも人に越え頼もしき侍なり。甚之介十三の秋より憧れ、草履取りの伝五郎にしたしみ、玉章書きておくるに、世間を忍べば松江[三]の鱸の口に入れて、供部屋[四]までつかはしけるに、その明くる朝、御髪をからずき[五]仕る御懐へ落とし懸けしに、鏡に常住の御顔うつれば、「御機嫌今申さでは」と、権九郎思ひ死のありさま、憐れにふびんに言葉に数をつくして申せば、その文はあけて見もやらず、硯せはしく筆を取り、「兼ねての御風情、いま伝五郎が申すと思ひ合はせて、最愛しさ嬉しさかぎりなし。今日より世の訕り[六]をかまはず、御因を申すべし」と、右の状もそのまま封じ込め、「わづかのうちも恋路はやるせなきに、この事しらせてよ」と仰せけるは、婀娜[七]しき御心入れと水櫛[八]捨てて立ち出、権九郎許に行きてあらましを語れば、「かたじけないとは大方[九]なる事ぞ」と、逢はぬ先より泪に袂を浸し、十四歳の夏の夜、人[一〇]に待たるる鳥も情懸け初めて、余所に洩れ聞こえてはと潜かに

ぐれて十一歳の春を迎え、恋い慕わない人はなかった。「日本国中にまたとあるまい」と、出雲の大社に神々が集まって噂されたほどであった。
　甚之介が男色の契りを結んだのは、同じ家中の森脇権九郎という、今年二十八歳の、何事も人にすぐれた頼もしい侍であった。権九郎は甚之介が十三歳になった秋のころからあこがれ、甚之介の草履取りの伝五郎に近づいた。恋文を贈るにも世間を忍ぶ事なので、松江湖の鱸の口に入れて供部屋へ届けた。その翌朝、伝五郎は甚之介の髪を梳く時、恋文を甚之介の懐にすべり込ませたが、鏡にいつものままの顔が映っていたので、「ご機嫌のよい今申し上げなくては」と、権九郎が焦れ死にしそうな様子が不憫だと、言葉を尽して訴えた。甚之介はその手紙をあけて見るまでもなく、せわしく硯をすって筆を取り、「かねてのご様子といい、今また伝五郎が申す事と思い合わせて、いとしさうれしさは限りありません。今日からは世間のそしりをかまわず、兄弟の契りを結びましょう」としたため、権九郎の手紙も一緒に封じ込めて、「わずかの間も待つ身はやるせないもの。早くこの事をお知らせしてくれ」と言う。優しいお心遣いだと、伝五郎は梳櫛を捨て

一一 一河の流れも他生の縁。同じ川の水をむすぶのも、前世からの因縁であるとの意。
一二 先約。すでに契りを結んでいる人。
一三 出会いしだいに。
一四 この世の煩悩。心の闇。
一五 松江市天神町（馬潟瀬戸の中の洲）のあたりであろう。
一六 未の時。午後二時頃。

戯れ、十五十六の秋までは、月より外には人もしらざりしに、

恋は[一一]一河の流れ、末の奉公人に半沢伊兵衛と申す者、甚之介を思ひそめ、若党新左衛門を無理頼みに、数通の文取りあげざれば、伊兵衛今はやめがたく、「我物の数ならねば、とかくの御報もなし。[一二]先契の方御知らせあるべし。さもなくば[一三]見合ひ次第に御恨み申すべし」と、一命捨てて申せば、今までは包めども、心得のためにもと思ひ権九郎に語れば、「下々なればとてあなどる事なかれ。世には命といふ物ありてこそ、互に楽しみもあれ。その心のやすまる返り事分別して見給へ」と申せば、甚之介忽ちに血眼となつて、「深く契約の上は、たとえば殿様の御意にもしたがひ申すべきや。思ひ極め、この男を討つて捨てん」と思ひしが、「まづ伊兵衛を武運にまかせ首尾よくしまひ、かへる太刀にて安穏には置くまじき物を」と、常の機嫌に宿にかへり、「内々の御恨み、今宵[一四]うき世の闇を晴らさせ申すべし。[一五]天神の松原に出合ひたまへ」と果し状をしたため、新左衛門に申し付け、早速伊兵衛方へつかはし、三月二十六日の昼[一六]にさがり、今日をかぎり

て駆け出し、権九郎の所に行って、あらましを語った。権九郎は、「かたじけないなどというのは、とおり一遍の言いぐさだ」と、逢わない先から涙で袖を濡らした。十四歳の夏の夜、人に待たれて鳴く時鳥のように、甚之介は権九郎に情けをかけ初め、人に知られてはと、こっそりと睦み合い、十五、十六歳の秋までは、月よりほかに知る人もなかった。

ところが、恋は前世からの因縁で、同じ家中の半沢伊兵衛という身分の低い侍が、甚之介を恋し始め、甚之介の若党の新左衛門に無理に頼んで、数通の恋文を贈ったが、甚之介が取り上げないので、伊兵衛ももはや引っ込めなくなり、「私の身分が低いので、ご返事も下さらないものとみえます。先約がおありなら、知らせていただきたい。さもなければ、出逢いしだいにお恨み申します」と、命がけの手紙をよこした。甚之介は今まで隠してきたが、いざという時の心得のためにもと思い、権九郎に話すと、「下々の者だからといって、侮ってはいけない。こうして命があってこそ、お互いに楽しむ事もできるのだ。相手の心が安まるような返事を考えてみなさい」と言った。甚之介はたちまち血眼になり、「深く契約したうえは、たとえ殿様の御意でも従

一　入相の鐘。日没時を知らせる鐘。
二　理責めて。筋道を立ててしたためた。
三　原本「見ゆるまじと」。
四　横目付の略。武家の行跡や政務を監視して、不正を摘発する役。
五　下男。
六　袖丈を短く、丸く仕立てた成人用の着物。

の入逢[一]の鐘、無常は兼ねての事なれば、今更夢におどろかず、いつよりは心よく二親にも姿を見せ、諸親類は残らず、したしみの方までも筆を残し、これが恨みの書きをさめと、権九郎かたへの一通、胸にある事ひとつ〳〵、ことわり[二]せめてぞ聞こえける。

　まことに初めより、身は我が身ならずと申せし事は、御方とかくある中を人知らば見ゆる[三]すまじと、不断ぞんずる折節かかる仕合せ、難儀とはおもはず。今晩山寺にて討ち果たすなり。年月の御よしみおぼしめさば、一所に御身を捨て給ひても、惜しかるまじき御事ぞかし。相馴れて以来の恨み、今申さでは末の世のさはりとおもへば、あらまし書き残す。

一、貴様御屋敷までは、遥かなる所を通ひ申し候は、三年のうちに三百二十七度、一夜も難にあはざる事なし。横目[四]夜廻りを忍び、姿を替へて、小者[五]の風情に丸袖[六]をかざし、杖・挑灯を提げて行く時もあり。又は法師の様にもなり、人こそ知らね、かくまで心をつくし、過ぎし年の霜月二十

うものか。覚悟して権九郎を討ち果たそう」と思ったが、「まず伊兵衛を武運にまかせて討ち果たしてから、返す刀でこの男も生かしてはおくまい」と腹をきめ、いつもと同じ機嫌で家に帰り、「内々のお恨み、今夜心の闇を晴らさせて差し上げましょう。天神の松原にお出向きください」と果し状を書いて、さっそく伊兵衛方へ届けさせた。三月二十六日の昼下がり、お城から退出したが、やがて聞く入相の鐘も、無常はかねて覚悟のうえだから、今更驚きもしない。いつもより機嫌よく両親にも姿を見せ、諸親類はもとより、親しい友人にまで書置をし、これが恨みの書き納めだと、権九郎方へも、胸にある事を一つ一つ、筋道を立ててしたためた。

　まことに初めから私の身は私のものではないと申しましたのは、あなたとのこういう仲を人が知りましたら、許すまいと、ふだん思っていたからです。そこへ、こういう事が起こりましたが、難儀とは思いません。今晩山寺で伊兵衛と果し合いをします。年来の好誼をお思いくださるなら、一緒に御身を捨てられても、惜しいはずはないと存じます。親しくなってからの恨みを今申さないでは、後の世の障りになると思

日の夜思ひ煩ひしに、宵は母人枕に離れざりしに、命は朝を待たず、逢はで果てなばとかなしく、更け行く月を恨み、乱れ姿にて笹戸の陰に忍びしに、我が足音と知らせられ、灯そのまま影なく、御物語りもやみぬ。さりとては心づよし、この時のお客うけたまはりたし。

一、この春、花軍[七]を狩野[八]の采女が書きし扇の裏に、「恨み[九]侘びほさぬ袖だに」の歌を、しどけなく筆染めしに、「恋はこの風に夏をしのがん」とおほせて、よろこばしたまふ間もなく、「この筆者代待[一〇]」と、落書をあそばし、下人吉介に取らせらるるのみ。又、ゑさし[一一]十兵衛方より御求めあそばされし雲雀、御秘蔵ながら、所望せしに給はらず、北村庄八殿へおくられし事、御家中一番の御若衆様なれば、今に浦山し。

一、当四月十一日に、奥小姓[一二]のこらず馬上仰せ付けられしに、節原太郎左衛門拙者の袴をひかへ、「後に土付き申し候」と払ひたまはりしに、御方は跡に立ち給ひながら御教へもなきのみ、小沢九郎次郎殿と目まぜ[一三]して御笑ひ、年頃

いますので、あらまし書き残します。

一、あなた様のお屋敷までは、大分の道のりがありますのに、三年のうちに三百二十七度も通い、一夜も難儀な目にあわない晩はありませんでした。見回りの横目役の目を忍び、ある時は下男の姿に変装して丸袖で顔を隠し、年寄りに化けて杖や提灯をさげて行った事もありました。また出家に変装したりして、人は知らない事ですが、こんなにまで気苦労をいたしました。去年の十一月二十日の夜、あなた様を思って病の床についた時に、宵の口は母上が枕元に付き添っておられましたので、人の命は明日を待たないもの、お逢いしないで死ぬようなことがあったらと悲しくなり、更けゆく月を恨みながら忍び出て、乱れ姿のままでお宅の笹戸の陰に忍びました。すると私の足音とご承知でありながら灯火を消し、お話もやめてしまわれました。なんと気強いお仕打ちでしょう。その時のお客はどなたか承りたいものです。

一、この春、狩野探幽が花軍を描いた扇の裏に、「恨み侘びほさぬ袖だに」の和歌を、私がいい加減に書きましたところ、「この夏の恋の暑さは、この扇の風でしのごう」と仰せられて、喜ば

七 男持ちの扇であるから、宮女に花の枝を持たせて戦わせた玄宗皇帝の花軍ではなく、白菊とおみなえしの精を中心に種々の花が位を争うという謡曲「花軍」に取材した絵であろう。

八 江戸初期の画家で、幕府の御用絵師となった狩野探幽。采女はその幼名。延宝二年(一六七四)没。七十三歳。

九 「恨み侘びほさぬ袖だにあるものを恋にくちなむ名こそ惜しけれ」(後拾遺)。

一〇 願人坊主の類で、日待ち・月待ち・庚申待ちなどに、その家の主人に代って行を勤め、寺社に参拝する者。依頼者があると持参の筆墨でその人の氏名年齢を書きとめるが、その筆跡が多くへたなので、へたな筆跡を代待手といった。「書初や庚申様へ代待手」(軒端の独活〈延宝八年〉)。

一一 餌差し。鷹の餌にする小鳥を、もち竿でさして捕えること。それを業とする者。

一二 江戸時代、将軍・大名の側近に侍する小姓。

一三 目くばせ。

の情にはさはあるまじ。

一、五月十八日の夜半過ぎまで、小笠原半弥殿にて咄し申し候を御腹立、その晩も御断り申す通り、謡稽古に小垣孫三郎殿・松原友弥殿同道にて参り、この外に相客はなし。半弥殿はいまだ御若年の事、孫三郎殿は私と同年、友弥御存じの通りのもの、毎夜の参会も、これは苦しかるまじきを、今に御嫌疑あそばし、折節の御当言[一]心懸かりにて、[二]日本の諸神、口惜しさこの時にいたりても忘れ難し。

一、[三]念契のこのかた、あかぬ曙の別れに、我が屋敷ちかくまで御送りあそばしてもの事を、村瀬惣太夫殿門前より御帰り、采女殿前の橋まで、年かさねしうちに二度ならでは御見送りもあらず。[四]おぼしめし入れの御方さまならば、虎狼の野辺までもとおぼしめさるべし。かれこれ御恨みあれども、これ程悪からぬ事は、大方ならぬ因果かと思ひ、泪より外はなし。只今までのよしみに、一遍の御廻向にあづかるべし。夢と思へば現、世のはかなき事を身にたぐへてのをかしさ。

せてくださいました。それなのにまもなく、「この筆者代待」と落書きをなさって、下男の吉介にやってしまわれました。また餌差し十兵衛方からお求めなさった雲雀を、ご秘蔵とは存じながら所望いたしましたのに、北村庄八殿へお贈りになりました。庄八殿は家中一番のお若衆様ですから、今でもうらやましゅう存じております。

一、この四月十一日に、奥小姓はすべて馬に乗るように仰せつけられました際、節原太郎左衛門殿が拙者の袴を押えて、「後ろに土がついている」と、払ってくださいましたが、あなた様は後ろに立っておられながら、教えてくださらないばかりか、小沢九郎次郎殿と目くばせしてお笑いになりました。年来の情けからして、あるまじき事です。

一、五月十八日の夜半過ぎまで、私が小笠原半弥殿方で話していた事をお腹立ちでしたが、その晩もお断り申しましたように、謡の稽古に小垣孫三郎殿・松原友弥殿と同道でまいり、その他に相客はございませんでした。半弥殿はまだご若年ですし、孫三郎殿は私と同じ年、友弥はご存じの通りの者ですから、毎晩参会しても不都合はありませんのに、今だにお疑いあそばし、時お

一 あてこすり。
二 誓文の詞。日本の諸神に誓って。
三 念縁(三一四ページ注二)に同じ。念者(兄分)との契り。
四 お気に入りのお方。



天神の松原で増田甚之介・森脇権九郎が、半沢伊兵衛の一党と決闘している場面。鉢巻をして相手を切っている中央の美少年が甚之介。上の鉢巻姿が権九郎、その大刀を受け止めている立髪の男が伊兵衛。

○花盛りおもはぬ風に朝顔の夕影またぬ露の落ちかた[五]

とばかり書き付け、「申し残したき事のみなれども、今日をかぎりの暮も近付けば、名残もこれまで。寛文七年三月二十六日」と留めて、「森脇権九郎方へ、今宵[六]四つの鐘の鳴る時分持ちて参れ」と、伝五郎に申し付けて、入相の太鼓うち出すとかけ出る。

甚之介装束は、浮世の着をさめとてはなやかに、肌には白き袷に、上は浅黄紫の[七]腰替りに五色の糸桜を縫はせ、[八]銀杏の丸の定紋しをらし。大振袖のうらに[九]こき入れし紅葉ほのかに、

り当てこすりを言われるのが心がかりで、日本の神々に誓って口惜しく、この期に及んでも、忘れる事ができません。

一、兄弟の契りを結んで以来、去りがたい明け方の別れに、私の屋敷近くまでお見送りくださってもよさそうなものを、いつも村瀬惣太夫殿の門前からお帰りになり、采女殿の前の橋までは、三年の間にわずか二度だけ送ってくださいました。お気に入りのお方様ならば、虎狼のすむ野辺まででも送ってやろうとお考えでしょう。あれこれお恨みがありますが、これほど慕わしいのは、並々ならぬ巡り合せであろうと思い、涙よりほかはありません。これまでの好誼に、一度でもよいから供養してください。夢現の人の世のはかなさを、自分の身に引きくらべてみるのもおかしなものでございます。

○花盛り思はぬ風に朝顔の夕影またぬ露の落ちかた

とばかり書きつけ、「言い残したい事ばかりですが、今日限りの夕暮れも近づきましたから、名残もこれまで。寛文七年三月二十六日」と筆を留めて、「森脇権九郎方へ、今夜四つの鐘の鳴る時分に持って行け」と伝五郎に言いつけて、入相

五 花や露の散る頃。また落ちる様。「花盛り有とやいはん朝顔の夕かげまたぬ露の命を」(古写本実録)を一部変改している。

六 午後十時の時を告げる鐘。

七 小袖の腰の部分を白く抜いたり、色変りにしたりしたもの。

八 銀杏紋は数々あるが、原形はみな丸形である。



銀杏紋
（中輪に三銀杏）

九「こき」は語を強める接頭語。「入れし」は染め込んだ。

一 地を厚く織った八重織の帯。
二 初代忠吉は肥前の刀工。藤原姓、橋本氏。壱岐守道弘の子。元和元年(一六一五)二月、忠広と改名。寛永九年(一六三二)八月十五日没。六十一歳。
三 刀の鞘の小刀櫃にさし入れる小刀。小柄。
四 人が死んで七日目に渡るというあの世の三途の川。
五 吉介のこと。介・助の混用は『本朝二十不孝』など他の作品にも例が多い。→二〇〇ページ注三。
六 「其辺近き在郷に永運寺を頼み」(古写本実録)。

鼠色の八重帯[一]、肥前の忠吉[二]二尺三寸、同作一尺八寸の指添へ、小刀[三]ぬき捨て目釘をあらため、城下より一里離れし天神の松原に行きて、大木の楠を後に、蔦かづらに形をかくせし岩に腰を懸け、相待つくれに、はや人顔も見えぬ時、大息つきて権九郎かけ付け、「甚之介か」と言葉をかくる。「腰抜けに近付きはもたぬ」といふ。森脇泪を流し、「この節申し分けにはおよばず。後の世の渡り川[四]にて心底を語らん」と申せば、「無用の助太刀頼まじ」と論ずるうちに、半沢伊兵衛、家中荒物を十六人かたらひ来る。

　四人一度に抜き合はせ、命の捨て所をここに極めて、入り乱れ切り立て、甚之介が手に懸けて二人、権九郎が太刀下に四人切りしき、十六人の内即座に六人、手負ひ七人、残る者行方しらず。身方にも、小者吉助[五]当座に相果て、権九郎も目の上に浅手、又、甚之介も右の肩先に二寸ばかりのかすり、首尾残る所もなく、この近在に永運寺[六]と申すあり。忍びて門に入り住僧を頼み、「両人切腹の跡を、御出家の御役に」と申せば、押し留め、「これ程までにあそばし、とてもの事に

の太鼓が鳴りだすと同時に駆け出した。

　甚之介の装束は、この世の着納めというので、肌着には白い袷、上着は浅黄紫で腰を白く染め残し、五色の糸桜を刺繡させ、銀杏の丸の定紋も可憐であった。その大振袖の裏に染め込んだ紅葉がほのかに見え、帯は鼠色の八重織で、帯刀は肥前の忠吉作二尺三寸の大刀に、同作一尺八寸の脇差、小柄を抜き捨て、目釘を調べてたばさみ、城下から一里離れた天神の松原に行き、大木の楠を背に、蔦葛におおわれた岩に腰かけて、相手の来るのを待っていた。日も暮れてもはや人顔も見えなくなった時、大息をつきながら権九郎が駆けつけ、「甚之介か」と言葉をかけた。「腰抜けに近づきはない」と甚之介が言うと、権九郎は涙を流し、「この場に臨んで申しわけはいたさぬ。あの世の三途の川で心底を語ろう」と言うと、「無用の助太刀は頼まぬ」と言い争っているうちに、半沢伊兵衛は家中のあばれ者を十六人語らってやって来た。

　主従四人、一度に抜き合わせ、ここを命の捨て所と、入り乱れて斬り結び、甚之介の手にかかって二人、権九郎の太刀先で四人を斬り伏せた。十六人のうち即死が六人、手負いが七人、あとは行方知れず逃げ失せた。味方も下僕の吉助が即

喧嘩の次第を老中[七]・大横目衆[八]まで申しあげて、諸人の中で腹切り給ひ、世に名を残し申されよ」と詞をつくし、それより番所にいそぎ、右の段々申せば、御詮議の後目付衆[九]をつかはされ、「切腹相待つべし」との仰せわたされ、その夜に城本[一〇]へ引取り、諸親類に御預けあそばし、疵養生仕れのよし、「相手は逃げ申す者、見合ひ[一一]に打捨て」と仰せ付けられ、手負ひ国中を船どめ[一二]して、せんさくあつて打たれける。

その後、甚之介事、御掟相背き申し、千万不届きにおぼしめしつれども、親甚兵衛忠孝の者、甚之介儀も兼ねて御奉公よく勤め、ことさらこの度の様子、若年には神妙なるはたらき、権九郎儀も、甚之介を御免あそばすに付き、子細なく御許し、ありがたき仰せ渡され、右のごとく番組[一三]に入りて、「当月十五日より罷り出候様に」とかさねての御意なり。

かの永運寺に行きて、その時のはたらきを見るに、刀に切込み七十三所、鞘にも切付け十八所、着類はただ紅に染めなし、左の袖下も切り落とされ、かかるはげしき場にして、その身は深手もおはず。又ためしもなき若武[一四]、いづれも袂を泪

七 老中は元来幕府の職名で、将軍に直属し、政務を総轄する重職をいう。よってここは藩の重役と解すればよい。
八 前出の「横目」の上位の役人。幕府では大目付という。
九 横目に同じ。
一〇 城下。「御城本は但馬国」（薩摩歌〈宝永〉）。
一一 出会いしだいに。
一二 船留め。船の出航を禁止すること。
一三 御城における宿直勤番のために編成された各組。
一四 若衆武士。

死し、権九郎も目の上に浅傷を負い、また甚之介も右の肩先に二寸ほどのかすり傷を受けた。思う存分に働き、その近所にあった永運寺という寺に忍んで訪れ、「我々両人切腹のあとは、ご出家の役によろしく」と頼むと、住僧はそれを押しとどめて、「これほどまで立派になされたのだから、いっそのこと喧嘩の次第を老中や大横目衆まで申し上げ、諸人の見る前で晴れて切腹をなされ、名を後世に残されよ」と言葉を尽して諌め、それから番所へ急ぎ、右の段々を届け出た。お調べの後、横目衆を遣わされて、「切腹を待て」と仰せ渡され、その夜のうちに城下に引き取って親類にお預けになり、傷養生をせよとのこと、「相手の逃げた者は見つけしだいに討ち捨てよ」と仰せ付けられ、手負いの者も国中を船留めして、詮索の末討ちとられた。

その後お上は甚之介を、掟に背き不届千万に思し召されたが、親甚兵衛が忠孝の者で、甚之介もかねてご奉公をよく勤め、特に今度の事は、若年にしては神妙な働きというので許された。権九郎も甚之介を御免あそばすにつき、わけなくお許しが出て、従来通りの番組に組み入れられ、「当月十五日から出仕するように」と、重ねてのありがたい御意であった。

一 寺院で回廊正面に設けられた南大門のつぎにある門。
二「森脇に十双倍の御心中伽羅益田甚之介さま」(古写本実録)。
三 水を田にくみあげる揚水機。車輪状で周囲に多くの板を横に仕掛け、二人が相対して回転し、水をくみあげる。形による名称。


竜骨車
(大和耕作絵抄)

四 諺「恋は闇」。ただし、ここは男女の恋はすたれての意。

❖薩摩藩の新参侍が、春田丹之介という若衆の難儀を救ったために念友となり、丹之介の屋敷の裏の大河を泳ぎ越えて通っているうちに、大鳥とまちがえられて、若侍どもに射殺されてしまった。丹之介はその矢に記してある姓名によって敵を知り、四十九日が過ぎてから、相手を念友の菩提寺へ誘い出して果たし合い、相討ちとなった。

五 意に従わぬ若衆を陥れるためのにせ手紙の奥に、墨絵でその若衆の剣菱の紋が描いてあったとの意。
六 着替えや身のまわり品を入れて、

になさぬはなし。この寺にて伊兵衛一味の死人を念比に弔ひしは、なほしをらしき心ざしとぞ沙汰せり。

　かやうの美少、すゑの世語りにも、せめてはこの御書置きなりとも黒焼きにして、こころの定まらぬ当代の若衆どもに呑ませたし。若道の名香としるして、なにものか中門[一]に張りおく。

[二]○森脇に十双倍の御心中伽羅にも増田甚之介殿

と書き付けて、諸人の言の葉にかかりぬ。よき事を見習ひ、国中の武士たる人の子はさもあるべし。秤なやむ町人の悴子、[三]竜骨車にたよる里童子、塩焼く浜の黒太郎までも、形こそその所作にいやしけれ、この道に一命をしまず。念友のなき前髪は、縁夫もたぬ女のごとく思はれて、時のすがたとて恋は闇[四]、若道は昼になりぬ。

　　[五]墨絵につらき剣菱の紋

[六]挟箱にたたみ船[七]を仕込み、取組めば三人乗りて、大河を越

　永運寺に行って、その時の甚之介の働きを見ると、刀に切り込み七十三か所、鞘にも切りつけが十八か所あった。着物はまっ赤に血で染まり、左の袖下も切り落とされていた。こんな激しい斬り合いの場で、その身は深傷を負わなかったとは、またとない若衆武士だと、感涙にむせばない者はなかった。またこの寺で伊兵衛一味の死人をねんごろに弔ってやったのは、優しい心がけだと人々は噂しあった。

　このような美少年の事は、後の世のために物語に書き残し、せめて権九郎あての書置なりとも黒焼きにして、心の浮わついた当世の若衆どもに飲ませたいものだ。「衆道の名香」としるして、何者かが永運寺の中門にこんな張紙をした。

○森脇に十層倍のご心中伽羅にも増田甚之介殿

　これがまた人々の噂の種となった。これを手本にして、国中の侍の子はいうまでもなく、秤で苦労する町人の倅や、竜骨車にとりつく百姓の子供、塩を焼く浜の黒太郎まで、姿かたちや動作は卑しくても、衆道に命を惜しまないようになった。兄分のない若衆は、夫をもたない女のように思われ、時勢とはいいながら、男女の恋は闇、衆道は昼となった。

すにためしあり。自然[八]の時は用にも立ちぬべし。その外浮[九]沓・棒火矢[一〇]を申し立てに、御合力分[一一]二百石くだしおかる。長の浪人なればまづ相勤め、兼ねての望みは時節と、待つ年もはや二十七歳になりぬ。

[一二]さしつぎの妹は丹波の笹山[一三]にありしが、夫に離れて後世を捨てて、河内の国道明寺[一四]に、十九[一五]の夏衣を墨に染めし以来、身[一六]の取置きの便もなかりしに、過ぎつる五月頃、音信の文書きて名物の花粉[一七]などを送る。心ざしは万里に届きて、今鹿児[一八]島の水に浮けて、折節の暑さをしのぎ、汗は泪に替はり、むかしをおもふ振袖の面影、地紅[一九]の帷子を好いて着た物をとなげきぬ。

その次の妹は十四歳になりて、いまだ定まる縁もなく、老母と一所に引き越して、しらぬ国里の住居も、武士の身ほど定めがたきはなし。若年にて父におくれしに、島村大右衛門といはるるも、これ皆母人のはたらき、あだにも存ぜず。朝の嵐をいたはり、夕の御寝間も末の女の手には懸けず、妹どもこれを見習ひ、真綿[二〇]引きさして御枕などまゐらせ、丸絎[二一]の

墨絵につらき剣菱の紋

挟箱に折りたたみ式の船を納めて、それを組み立てると三人乗りの船になって、大河を越す事ができた。まさかの時には役に立つだろう。そのほか浮沓と棒火矢を売物にして、さしあたって二百石の扶持を賜ることになった。長い浪人暮しだったので、ひとまずそれで勤めることにし、かねての望みがかなう時節を待っているうちに年ももう二十七歳になった。

すぐ下の妹は丹波の篠山に嫁いでいたが、夫に死なれてのち世を捨て、河内の道明寺で、十九歳の夏、墨染の衣を着る身となった。それ以来どうして暮しているのか、まるで便りがなかったが、去る五月頃手紙が届いて、道明寺名物の花粉などを送ってきた。その志は遠く離れたここまで届き、今その花粉を鹿児島の水に浮かべて、折からの暑さをしのいだ。妹のことを思うと汗は涙に変り、振袖姿が目にちらつき、紅地の帷子が好きでよく着たものだと昔をしのぶのであった。

そのつぎの妹は今年十四歳で、まだ決まった縁もなく、老母とともに鹿児島に越して来て、見ず知らずの他国で暮している。武士の身の上ほど不安定なものはない。自分は幼い時に父と死に別れたが、

従者にかつがせた箱。
七 折りたたみ式の携帯用の船。長持船ともいった。
八 万一の時。非常の際。
九 浮袋の一種。内空の木に漆をぬり、二尺(約六〇センチ)ほどの大筒一個は背に、一尺余の小筒二個は胸に当てて連ね結んだもの。
一〇 鉄製の筒に火薬をこめて発射した火矢の一種。
一一 さしあたっての扶持高。
一二 すぐ下の。
一三 兵庫県多紀郡の篠山藩六万石は、慶安二年(一六四九)から延享四年(一七四七)まで松平氏が篠山城に居城。
一四 大阪府藤井寺市にある真言宗の尼寺。聖徳太子の開基という。
一五 釈尊十九歳の出家をふまえた。「十九歳　出家にならねばならず」(一代男二の六)。「その年は十九、出家の望み哀れにこそ」(五人女一の一)、「今年十九出家になりて、二人を弔ひ給へ」(四の三)。
一六 暮し向き。
一七 花は美称。道明寺粉。糯米を蒸して乾かした道明寺糒をひいて粉にしたもの。夏季の飲料に風味をそえる。
一八 薩摩藩七十四万石。島津氏の城下町。
一九 紅染の単物。
二〇 衣類の中綿にするために、繭を塗り桶にかぶせて引き伸ばすこと。
二一 綿を入れて丸くくけた細帯。

一 さらさらと流れる浅い清流。
二 弘法大師作と伝える仏像は諸国に多い。
三 先祖の供養をする日。
四 承知のうえで。わざと。
五 たとえ下男でも、武家の従者を糾問したうえに縄をかけるという、二重の責任を問われるであろうことは顧みず。
六 捕縄。手早く縛る縄の意。

帯・数珠袋をも、置き所あらため孝をつくせり。人の親はかくあるべき事なり。

ある時、大右衛門、深沢といふ所に暮をいそぎて蛍見に行くに、町はづれなる野辺に一村の薄・花菖蒲の茂り、道ばたよりは見渡し近く、小細水の湧き出る埋れ井あり。その脇に、大師の作といひ伝へたる石地蔵ましまして、人心ざしの日は、この所に参詣で水を手向けぬ。

ここ通り合はす折節、侍の小者らしき男、新しき文筥ひとつ懐より取り出し、かの石仏の前に置き、跡先を見合はせ、覚えて忘れゆく風情、いかさま様子もあるべしと、その男を追つ懸け、「あの箱は何とて態とは捨て置くぞ」と尋ねければ、恐れて返事もせず逃げて行く。「これくせ者」ととらへて、里遠き野寺に引つ込み、色々責めても子細をいはず。重ねてのあやまりはかへり見ず、早縄を懸けて、迷惑がる住寺に預けて、右の文箱を取りに帰るに、はや里人不思議の詮議をして、そのまま奉行所にあがりぬ。

その夜諸役人集まりて、「上書はなくとも開け」とこれを

今こうして島村大右衛門といわれ、ひとかどの侍となったのも、これはすべて母上のお陰だと思うと、仇やおろそかには思えない。朝の嵐にも母をいたわり、夜具も下女にまかせないので、妹も兄を見習い、真綿をひく手をやめて母に枕を差し上げ、丸ぐけの帯や数珠袋などもよく整理しておいたりして孝行を尽した。人の親はこのようにもてなすべきである。

ある時大右衛門が深沢という所へ、日暮れに急いで蛍見に出かけると、町はずれの野辺に、一叢の薄や菖蒲が茂っていて、道ばたからほど近い所に、清水が流れ出ている埋れ井があった。その脇に大師の作と言い伝える石地蔵が立っていて、人々は先祖の供養をする日には、ここにお参りして水を手向けるのであった。

ここを通りかかった時、侍の下僕らしい男が新しい文箱を一つ懐から取り出し、石地蔵の前に置いて前後を見回し、わざと置き忘れて行く様子、何か事情がありそうだと、その男を追っかけて、「あの箱はどうしてわざと捨てておくのだ」と尋ねると、男は恐れて返事もせずに逃げて行く。「こいつ曲者だ」と捕えて、村はずれの野寺に連れ込み、いろいろ責めてみたが白状しない。重ねて責任を問われることは顧みず、捕縄をかけて迷惑が

見るに、「御内談申せし毒薬進上申し候。早々かの者どもに御あたへあるべし。この状、御内見あそばして後火中」と書き留めて、奥に丸の中に剣菱の紋所ばかりあり。外に一袋念を入れて見えける。[七]列座驚き吟味をするに、春田丹之介といふ人の定紋なり。ひそかに呼びよせ様子を聞けども、いささか身に覚えのなき大事を引き請け、まづ門を閉ぢける。

大右衛門聞き付け、かの男を夜更けて丹之介門外の駒寄[八]せに捕め付け、「この度の文箱の子細は、この者存じ候」と張紙してかへる。すでに夜明けて見るに、この男舌食ひ切りむなしうなれども、その形は隠れなく、岸岡竜右衛門下人なり。さてはと御詮議ある時、はや竜右衛門、屋敷を立ちのき行方しらず。その後丹之介をめして、「思ひ当たりたる事もあるか」と御尋ねあそばしけるに、何の事も存じ寄らざるよしを申しあぐる。この分にしては不埒におぼしめせども、「竜右衛門国遠[九]、身に謬りのあればなり。重ねて見合[一〇]はせ次第に申し付くべし」。丹之介は別義なく、御奉公を相勤めける。

その時過ぎて、[一一]うらなく語る友の尋ねけるに、隠さず申す

る住職に預けて、最前の文箱を取りに帰って見ると、すでに村人が怪しんで、奉行所へ届け出たあとであった。

その夜役人たちが集まって、「宛名は書いてないが開けて見よ」と、封を切って見ると、「内々ご相談にあずかった毒薬を差し上げます。さっそくかの者どもにお与えなさるがよい。この手紙はご覧になった後、火中へ」と筆を留めて、終りに丸の中に剣菱の紋所だけが書いてあり、ほかに念を入れた一袋が添えてあった。同座の役人たちが驚いて調べてみると、それは春田丹之介という人の定紋であった。そこでひそかに丹之介を呼び寄せて事情を聞いてみたが、少しも身に覚えがないという。だが事が事だけに、丹之介はとりあえず門を閉じて謹慎した。

大右衛門はその事を聞きつけて、捕えておいた男を、夜更けて丹之介の門前の駒寄せに縛りつけ、「このたびの文箱の子細は、この者が存じています」と張紙をして帰った。夜が明けてから見ると、その男は舌をかみ切って死んでいたが、その顔形はまぎれもなく岸岡竜右衛門の下男であった。さてはと詮議しようとすると、すでに竜右衛門は屋敷を立ち退いて行方をくらましていた。その後丹之介を召して、「何か思い当る事はないか」

七 原本「連座」とあり、「れつざ」とふりがな。

八 人馬の侵入を防ぐために門外に設けた柵。

九 遠国へ出奔すること。

10 見あたりしだいに。

一一 うらは表に見えないものの意で、心をいう。つつみ隠すことがない。

は、「兼ねて竜右衛門、我に執心の書通千度なれども、かかるあさましき心底見極め、取りあげざる恨みに、よしなき事をたくみぬ。されども恋よりの悪事なれば、この上ながら御前・世間をつつむ」と咄せば、婀娜[一]しき心入れ感じて自然と沙汰して、若道の随一と申すも愚かなり。
　この人七歳の時より、形さだまつて嬋娟[二]に一笑百媚[三]の風情、見し人男子とは思はず。今十五歳まで念人[四]のなき事は、すぐれたる美少これをゆるせり。「離家[五]の美花は人も折らず」と、李太白もつくれり。
　丹之介この度の難儀をのがれし事、竜右衛門下人あらはれしゆゑなり。我をかなしみ、この者門前につれて書き付けおかれし御方、色々思案めぐらすれども、知れざる事をなげき、諸神をいのる事大方ならず。
　その秋冬心懸かりに暮れて、明けの春山々の雪も松を見せて、日影に水かさまさりて、常なき滝を谷合に見て、細川のするゑに扇網[六]手ごとに小鮎汲むも慰みとて行くに、片里近き野辺に、色よき娘を母の親の先に立て、はしたまじりに茅華・

一 『遊仙窟』の字訓。
二 『遊仙窟』の字訓。
三 「眸ヲ回ラシテ一タビ笑ヘバ百媚生ズ　六宮ノ粉黛顔色無シ」（長恨歌）。
四 念者、男色の兄分。
五 この詩句は、現存の『李太白詩集』には見当らない。西鶴の思い違いか、フィクションであろう。李太白は盛唐の詩人。杜甫とともに李杜と併称される。
六 扇形のすくい網。

とお尋ねになったが、少しも見当がつきません、と申し上げた。このままでは納得いきかねるとお考えであったが、「竜右衛門が出奔したのは、身に誤りがあったからである。重ねて見あたりしだいに討ち果たせ」と申しつけられて、丹之介は別状なくご奉公を勤めることになった。
　それからしばらくして、親しい友達が丹之介に尋ねると、隠さず語った。「かねて竜右衛門は私に執心の手紙を何通もよこしましたが、あのようなあさましい事をする根性を見抜き、相手にしないのを恨み、つまらない事をたくらみました。けれども恋ゆえの悪事ですから、このうえとも殿様の手前や世間体を包むつもりです」と言った。友達はその優しい心に感心し、自然と噂したので、世間では衆道随一と評判したのは当然である。
　丹之介は七歳の時から容色が整って、しなやかな姿は一笑百媚生ず、の風情で、誰も男とは思わなかった。それなのに今十五歳まで兄分がないのは、すぐれた美少年であるために、人々がこれを許しているのである。「離家の美花は人も折らず」と、李太白も詩に作っている。
　丹之介は、このたび難儀をのがれられたのは、竜右衛門の下男が現れたからであると思うにつけて、自分を哀れみ、あ

土筆・雞腹摘むなど、都めきたる様子者、しばしば見るに、その人もこなたに目は隙なくありしが、何か囁きて、小硯に雫をそそぎ懐紙に書くよし。草の葉末にむすび捨てて、岩の陰道の奥ふかく入りぬ。

その筆の跡ゆかしく立ち寄りて読むに、「この野も人のしげく、これより藤見寺[七]の南の山原に御入り候。大ゑもんさま」と書きしは、跡より来る人に知らすべきためぞかしと、心を付けて見る程、女筆ながら日外の手にいき移しなれば、不思議と詠むる処へ、大右衛門来つて、この書付けをとつて行くに言葉を懸け、「大右衛門殿と申すは御自分[八]にてましますか。拙者は春田丹之介と申す者、同じ家中にありながら、いまだ御近付きにもならず。御尋ね申したき儀は、すぎし年の五月に、竜右衛門小者を御搦めくだされしは、御方様か」と申せば、「いかにもそれがし。よき折節出合ひ申して」と委細に語れば、「御心底の程、さりとはかたじけなし。存ぜぬ事とて年月うち過ぎ、砕石朽木[九]とおぼしめされんも口惜し」と泪を流す。「御知らせ申さぬ我、殊には新参者の儀な

七 架空の寺で、藤の名所の寺の意と解したい。

八 代名詞的に相手を敬っていう語。貴公。あなた様。

九 心ないもののたとえ。

の男を門前に連れて来て張紙をされたお方が、どう思案してもわからない事を悲しみ、ひたすら諸神に祈願をかけた。

その秋冬も心がかりのままで暮れて、年が明けると山々も春めき、雪も溶けて松の姿があらわれ、日の光に水かさが増さって、谷間にはふだん見かけない滝がかかったので、扇形の網をてんでに持って、小川で小鮎をすくうのも慰みだと、丹之介も人々と一緒に出かけると、小さな村の野辺に、母親が器量のよい娘を先に立て、下女たちと一緒に茅花や土筆や嫁菜を摘んでいる都風のしゃれた一行があった。丹之介がしばらく見ていると、娘もこちらをしげしげと見ていたが、母親に何かささやき、小硯に雫をうけて懐紙に筆を走らせそれを草の葉末に結んでおいて岩の陰道の奥深くはいって行った。

丹之介が心をひかれて、立ち寄ってその手紙を読んでみると、「この野も人目が多いので、ここから少し先の藤見寺の南の山原へ参ります。大右衛門様」と書いてあった。あとから来る人に知らせるためだろうと、気をつけて見るほど女の筆跡であったが、いつぞやの張紙の筆跡とそっくりであった。不思議なことだと眺めているところへ、大右衛門がやって来て、その書付けを取って行こうとした

れば遠慮を申し、さては大事の御心をつくさせける」と、ともに泪深く互に思ひ初め、何のかためもなく、おのづと念通[一]のしたしみ忍び〳〵に、丹之介屋形のうらなる大河を越してかよひぬ。

　いつとても不首尾はなかりしに、幾重[二]なりてある夜、隣屋敷の欠作り[三]の茶屋に、宵より中将棋[四]をさしてありしが、酒も数過ぎて跡は謡になりて、声さへ霜がれて、神無月中の四日の空照れば曇りて、定めなきは人の身ぞかし。大右衛門忍び姿、岸のむら蘆の陰に着物ぬぎ捨て、脇差一腰となつて、思ひ川[五]をこす浅い心にあらねば、瀬のはやき時には情の浪肩をこし、魂しづむ事幾度か。やう〳〵石垣に取りつき、約束の細引をたよりに、これぞ恋の道しるべにして、切戸[六]に立ち寄れば、手懸かり程あけかけ、灯もほのかに物静かなるは、いつに替はりてと、すこし聞き合はす時、内より丹之介障子けはしく引きあけ、「夢にしても今のは悲しや」と、独り言申して泪そぞろなるに、「大右衛門」と申せば、「うれしや」と、ぬれ身そのまま肌着の下に巻き込められ、これにうき事をわ

ので、言葉をかけ、「大右衛門殿とは、御貴殿のことでございますか。拙者は春田丹之介と申す者、同じ家中におりながら、まだお近づきを得ておりません。お尋ね申したいことは、昨年の五月に竜右衛門の下男を捕えてくださいましたのは、あなた様か」と言うと、「いかにも拙者です。よい時にお目にかかりました」と言って、大右衛門が委細を話すと、「お心尽しのほど、まことにかたじけなく存じます。知らぬ事とは申しながら、お礼も申さずに長い間過ごしてしまい、心ない木石とお思いなされた事でありましょう。それが残念です」と言って丹之介は涙を流した。「いや、悪いのはお知らせしなかった私です。ことに新参者なので遠慮したのですが、そのためにかえってご心配をかけました」と、大右衛門も貰い泣きした。それから二人は思い合い、特に兄弟分の契約もせず自然と男色の契りを結び、大右衛門は人目を忍んで丹之介の屋敷の裏の大河を越えて通っていた。

　いつもうまくいっていたのに、たび重なるうちにある夜、隣屋敷の懸作りの茶室に若侍たちが集まって、宵から中将棋をさしていた。酒も大分飲んでから、あとは謡になったが、その声もしわがれて聞こえる初冬十月十四日の空は、月が照

一　念契に同じ。男色の契り。
二　原本どおり。
三　懸造り。崖や川の上に張り出して造った建物。
四　室町時代初期から行われた将棋の一。盤面は縦横十二間、駒数は両軍合わせて九十二個。駒を取り捨てにして進む。
五　絶えることのない深い思いを川にたとえた歌語。
六　庭先の塀などに作った小さな出入り口。くぐり戸。

七 ここは午後の十二時。
八 江戸時代の最も一般的な時計は、櫓形の台の上に置いた櫓時計で、重りを動力とした。時刻を示す指針は不動で、文字板が回転した。また小型の枕時計もあった。
九 現、神戸市内の湊川の西の菟餓野(夢野ともいう)に、雄鹿と妻鹿が住んでいた。雄鹿には淡路の野島に恋鹿がいて、常に泳いで通っていた。ある時、妻鹿の夢占いに、矢で射殺されると出たが、そのとおり雄鹿は野島に泳ぎ渡る途中、船に出会って射殺された。よって夢野ともいうと、『摂津国風土記』に見える。妻鹿の妻は夫の当て字。
一〇 これ限りというわけではないので。
一一 鶴やこうのとりのような大形の鳥。
一二 行きとどいた潔い最期であった。

すれ、「最前の御悔みは何」とたづねければ、「今宵は待つも一入に久しく、[七]九つの[八]時斗を聞き寝入りにして間もなく、御身わたらせらるる川中に、流れ木御足本に横たへ、この難儀にて惜しき御命の捨つると、はかなき夢はいつの世に、誰見初めてうたてし。[九]海渡る妻鹿のむかしの事までも思ひ出さる」と、又泪にしづむ。「しかれば久しうあはぬ時、せめては夢に見る事、これ程たのしみはなし」と機嫌なほして、[一〇]かぎりにあらねば起き別れ、又丸裸も恋なればこそ。

川浪に面影の見ゆる程は跡をしたひしが、はるかになりぬ。隣の者どもこれを見付け、「[一一]大鳥なるぞ」と、弓稽古の若侍、おとらじと遠矢をはなつ。大右衛門横腹を通されながら、我が宿にかへり、態と乱気の書置きして、[一二]自害残る所もなし。明けの日国中に沙汰せり。

丹之介かけ付け様子を聞くに、母妹のなげき目もあてられず。「命あるゆゑにうき事も見し」と、死人に取りつき、刀に手を懸けし事二三度もせしが、心をしづめ、「その矢は」と取りあげ見れば、藤井武左衛門としるせり。「さてはこの

るかと思うとたちまち曇り、はかりがたい人の身の上のようであった。大右衛門は忍び姿で、脇差だけを帯びて、岸の群蘆の陰に着物を脱ぎ捨て、深い思いに胸を焦しつつ川を渡って行く。早瀬にさしかかると波が肩を越し、何度も胆を冷やして、ようやく石垣にたどり着いた。約束の細引を頼りに庭先の切戸に立ち寄ると、手がかりになるほどあけてあって、灯火もかすかに静まりかえっている。いつもとは様子が違っていると、しばらくうかがっている時、内から丹之介が障子を激しくあけて、「夢にしても、今のは悲しかった」と、独り言を言って涙ぐんでいる。「大右衛門だ」と言うと、「うれしい」とばかり引き入れて、濡れ身のまま肌着の下に巻き込んだ。大右衛門はつらかった事も忘れて、「さっき悲しそうだったのは、どういうわけです」と尋ねると、「今夜はいつもより待ち遠しく思っていましたが、九つの時計を聞いて床につくとまもなく、あなたがお渡りになる川中に、流れ木がお足元に横たわっていて、その難儀で惜しいお命をお捨てになった夢を見ました。はかない夢というものは、いつの世に誰が見始めたのでしょうか、ほんとうにつらい事です。海を渡る恋鹿の昔話も思い出されます」と言

一　帰依して先祖の供養を営む寺。禅宗や真言宗に松林寺という寺名はあるが、鹿児島県下にはない。

敵うたでは」と、愁ひにしづみ立ち帰る。
　何の事もなく、なきがらを頼みし松林寺におくりて、土中にして、憐れやきのふはむかしと過ぎ行き、それより丹之介毎日墓に参詣でて、「追付け御跡より参るべし」と、四十九日に当たる日を考へ、武左衛門を是非にさそへど、隙入るよし力なく、五十二日目に同道して、松林寺に入りて、山川を見めぐりて、大右衛門塚のまへにもなれば、両脇に新しい卒都婆二本立ちける。一方は藤井武左衛門としるし、一枚は春田丹之介と書き置く。「これは合点の参らぬ所」と申す。「御



松林寺の島村大右衛門の墓前に、大右衛門を射た藤井武左衛門を連れ出した前髪姿の春田丹之介。墓の後に、丹之介と武左衛門の名を記す新しい卒塔婆が二本立つ。丹之介には編笠を持った下男が付き従う。

って、丹之介はまた涙にむせんだ。「もしそうなら、久しく逢わない時は、せめて夢に見る事もできるではないか。これほどの楽しみはあるまい」と丹之介の機嫌を直した。これが最後ではないので、大右衛門は起き別れてまた丸裸になったが、それも恋なればこそである。
　丹之介は川波に姿の見える間は見送っていたが、そのうちにはるかに遠ざかってしまった。すると隣屋敷の若侍どもがそれを見つけて、「あれは大鳥だぞ」と、弓稽古中の若侍どもは、我劣らじと遠矢を放った。大右衛門は横腹を射抜かれたが、わが家に帰り、わざと狂気の書置を残して、いさぎよく自害してしまった。翌日、この噂が国中に広まった。
　丹之介が駆けつけて様子を見ると、大右衛門の母や妹の嘆きは目も当てられない。「命があるからこそ、こんな憂き目を見るのだ」と、死人に取りすがって、二、三度も脇差に手を掛けたが、心をしずめ、「その矢は」と取り上げて見ると、藤井武左衛門と記してあった。「さてはこの敵を討たなくては」と、丹之介は悲しみに沈みながら帰って行った。
　母と妹は何ということもなく、亡骸を菩提寺の松林寺に送って葬ったが、はかなくも昨日は昔と過ぎて行く。それから

不思議もつとも」とはじめを語り、「近頃おぼしめしの外の御仕合せながら、打ち果たしてたまはれ」と言葉を懸けて抜き合ひ、両人ともに夢まぼろしとなりぬ。住寺驚き御断り申して、詮議の後、三つ塚につき込みける。丹之介が思ひ入れ、又あるべき事にも非ず。

丹之介は毎日墓参りして、「まもなくお跡を慕って参ります」と誓いを立てた。大右衛門の四十九日に当る日にと考え、武左衛門をぜひともと誘ったが、その日は隙どる事があるというので仕方なく、五十二日目に同道して松林寺を訪れ、方方の景色を見めぐって大右衛門の墓前にやって来ると、墓の両側に新しい卒塔婆が二本立っている。一方は藤井武左衛門と記し、一枚には春田丹之介と書いてあった。「これは納得がいかない」と言うと、「ご不審はごもっともです」と、丹之介は一部始終を語り、「近頃思いがけない成り行きではございますが、果し合いをしていただきたい」と、言葉をかけて抜き合わせ、二人とも夢幻の身となった。住持は驚いて奉行所に届けたので、お調べの後、三つの塚を築いた。丹之介の志は、類のないものである。

本朝若風俗

男色大鑑

絵入

二

巻二　あらまし

一　形見は二尺三寸　さる大名の寵童中井勝弥は十八歳、殿の寵が他に移り、自害を思って反古を整理中、母の遺書を見出し、父の敵が吉村安斎と名を変え、筑後柳川の辺にいることを知る。殿に敵討ちを願い出て許され、寛永九年十月十二日に下人五人と出発、京で物乞いに落ちぶれている片岡源介に出会う。実は勝弥を慕う源介は身をやつして、影ながら勝弥の敵討ちを助けようとしていたのである。柳川で勝弥は、めでたく敵を討つが、源介の助力が多大であったことを知って、ともに江戸に帰り、殿に報告。殿も喜び、源介に三百石を加増、そのうえ勝弥を与えた。

二　傘持つてもぬるる身　身をぬらしても母が内職で作った傘を用いない孝心厚い美少年長坂小輪と出会った堀越左近に推挙され、小輪は明石の殿の寵童となるが、殿に可愛がられるのは本意ならずと公言する意気地を持っている。ある夜、古狸の怪異を退治、一層殿の気に入られるが、神尾惣八郎を念友とし、殿の寝所の次の間で契る。その事を「かくし横目」金井新平に見出され、小輪は殿に長刀で両手を打ち落とされ、首を切られて成敗される。一方、惣八郎は、新平の両手を切った後にとどめをさし、小輪の墓前で、小輪の定紋を腹に切り込み、切腹して果てた。

三　夢路の月代　無類の美少年好きの丸尾勘右衛門という剣術使いは、奈良の薪能の稚児若衆に堪能した次の日、郡山家中の多村三之丞という美少年と知り合い、送り送られして道すがら堅い念友の契りを交わし、三月一、二日に再会を約すが、二月二十七日に死んでしまう。三之丞は、それを知らずに訪れ、勘右衛門の供養をしていた左内に事情を聞き、勘右衛門の代りに左内と契りを結ぶ。その夢の中に勘右衛門が現れ、三之丞の鬢付きを剃り直してくれたが、夢がさめると、三之丞の月代は本当に剃られていた。

四　東の伽羅様　仙台の薬屋小西の十助の店先からもれる伽羅の香りにひかれて伴の市九郎という津軽町人は足をとめた。この男は、若道ぐるいに江戸に行こうとするところ、その姿に十助の子の十太郎が一目惚れ、狂気のごとくになって病に臥した。臨終も近い時、市九郎が来ると夢現にいう。市九郎が病床に招かれると、十太郎は元気回復、魂は市九郎に従って旅をしていたといい、その証拠にと幻の契りの折に渡した伽羅の割欠けを出す。それを市九郎所持の割欠けと継ぎ合わせると一つになったので、縁の深さを感じた市九郎は、十太郎を貰い受けて津軽へ下っていった。

五　雪中の時鳥　江戸桜田辺の大名の若殿がひどい疱瘡にかかった。時鳥の羽でなでればいいと言われたが、折悪しく冬で手に入らない。時鳥を飼う浪人島村藤内がいるのを聞き、お局の明石が使いに立つが、女嫌いの男はそれを追い返す。御小姓組の金沢内記・下村団之介なる二人の美少年が、命をかけて二羽の時鳥を貰い受け、屋敷の首尾はすむ。その夜、礼に訪れた二人は、「色道の念比」を願うが、藤内は「志の程も知れがたし」と拒む。が、切腹の用意までして来た二人の潔さを知った藤内は、二人に謝り、二人と衆道を取り結んだ。

男色大鑑　本朝若風俗　第二巻

目録

㊀ 形身は二尺三寸

中井勝弥母親書置初めて見る事
片岡源介非人の時執心かなへる事
筑後の国柳川敵うちの事

㊁ 傘持つてぬるる身

長坂小倫孝行の世わたりの事
桜茶屋化物うちとむる事
忍び男命にかへる事

一 後の本文「小輪」に同じ。

三 夢路の月代(さかやき)

薪(たきぎ)の能は昼のにしきの事

若衆(わかしゅ)忍ぶは菊の紋挑灯(もんでうちん)の事

是非念者(ねんじゃ)のかはりに立つる事

四 東(あづま)の伽羅(きやら)様

春の野は目違ひの事

申し子の種梢(こずゑ)より降る事

魂は袖(そで)に入るしるしの事

五 雪中の郭公(ほととぎす)

腥(なまぐさ)き坊主も女は嫌ふ事

命を無分別にくるる事

身はひとつ若衆は二人の事

目録終

❖さる大名の勝弥という寵童が、殿の寵の衰えた時に、父の敵が筑後の柳川にひそんでいる由の母の書置を発見し、殿に願い出てめでたく敵討ちの旅に出た。京都の四条河原で、

形身は二尺三寸[一]

世に遠州行灯[二]ほどの事も、又出来まじき物ぞかし。又次郎[三]といへる男、観世ごよりをはじめて、今重宝となれり。

捨たり行く反古さらへる中に、母の手して、「勝弥十三歳になる時、この封じ目を切つて、これを見るべし」と上書きあり。泪に包み紙をしたし内見するに、「父玄番をうちし竹下新五右衛門、吉村安斎と名を替へ、筑後[四]の国柳川の辺に身をかくし、表向きは児薬師[五]と見せ懸け、一家中軍の指南して渡世すと、委細に聞き出し、女の身ながら本望をとげぬべしと、思ひ極めし甲斐もなく相果つる時の無念さ。哀れ成人の後、この所存はやくやめさせ、草葉の陰の父母によろこばされよ」と書きつづけて、それより末々は、最後の筆と見えてさだかに読めがたし。

我今年十八歳になれり。母遺言とは、年月むなしう六年過ぎて今見る事、知らねば力およばず。某御家に住む事、十

形見は二尺三寸

遠州行灯のようなものでも、なかなか作りだせないものである。観世又次郎という男が、観世紙縒を作り始めて、今でも重宝している。

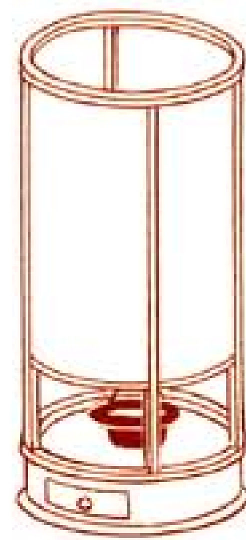
その紙縒に使ういらなくなった反古を整理している中に、母親の筆跡で、「勝弥が十三歳になったら、この封じ目を切って見るべし」と、上書きした書状があった。勝弥が涙ながらに読んでみると、「父の玄番を討った竹下新五右衛門は、吉村安斎と名を替えて、筑後国柳川のほとりに身を隠し、表向きは小児科の医者と見せかけ、実はその家中の軍学指南をして暮している、と詳しく聞き出し、女の身ながら本望をとげようと覚悟した甲斐もなく、むなしく死んでゆくのは無念である。そなたが成人のあかつき、首尾よく敵を討って、草葉の陰の父母を喜ばせてもらいたい」と書き続けて、それから先は死に際の筆跡と見えて、はっきりと読み取れなかった。

自分は今年十八歳になった。母が書置をしてから、むなしく六年の年月が経っ

江戸勤番中に勝弥を慕っていた、今では乞食におちぶれている片岡源介にめぐり逢い、その陰ながらの助太刀で首尾よく敵を討ち取り、両人ともめでたく帰参したという、衆道よりも敵討ちにウエートのかかった作である。

一 刀身二尺(約六〇センチ)以上のものを刀、二尺以下一尺以上のものを脇差といった。二尺八寸が普通。

二 「近世の制円にして内外三柱あり、上下輪を設け内なるもの揺がず、外なるもの能く旋開闔意に任す。或は云ふ小堀遠江守正一始て之を制す、故に俗に遠州行灯と曰ふ」(和漢三才図会三十二)。



遠州行灯
(和漢三才図会)

三 観世又次郎重次。秀吉と家康に仕えた小鼓の名手。新九郎豊勝の子。寛永四年(一六二七)八月二十四日没。七十歳。室町時代末期の文明の頃、当時の観世太夫が翁の烏帽子の掛け緒にこよりを用いたのに始まるとか、関ヶ原合戦の際、家康が軍用のこよりの配与を観世太夫に命じたので観世ごよりの名があるなど、諸説がある。

四 福岡県柳川市。元和六年(一六二〇)以後、立花氏十一万石の城下町。

五 小児科の医者。

四の四月十七日、武州上野黒門前[一]に、母方の姨をたのみてありしに、殿様、御駕籠の窓より、「あれは」と仰せらるる御声して、御そばちかき侍をひそかにつかはされ、筋目もあらましに御尋ねあそばされ、その日よりめし替への御馬にて御上屋敷[二]に入りて、御前をさらず、朝の雲に飛ぶ鳥落ちて[三]、たとへば烏を鷺[四]といふにも我にあらそふ人なく、夕には月をそねみ、気にいらぬ人には物をもいはず。これ皆お影、あだにも存ぜず。

ある時は寝姿のしどけなきに、はづれし枕をあてがはせら



左前から挟箱をかついだ二人の奴姿の男の後、毛槍をささげた足軽風の釣髭の男、お供の武士、殿の駕籠、乗替えの馬をひく足軽、と殿の行列が続く。右上は大名家の門のごとくだが、上野黒門のつもりか。

て、今この書置を見るのは残念だが、知らない事だからしかたがない。自分がこの御家に仕えるようになったのは、十四歳の年の四月十七日のこと、江戸上野の黒門前に住む母方の姨を頼って居候していた時に、通りかかられた殿様が、お駕籠ののぞき窓から自分をご覧になって、「あの子は」とおっしゃって、側近の侍をひそかにお遣わしになった。素姓などざっとお尋ねになったうえで、その日から殿のお召し替えの馬でお上屋敷に参り、御前を離れず勤めることになった。それからは、朝の雲に飛ぶ鳥も落とす勢いとなり、たとえば烏を鷺と言いくるめても、自分と言い争う者はなくなった。夕べには殿のお心を奪う月をそねみ、気に入らない人とは口もきかないくらい我儘にふるまったが、これもみな殿のお陰で、仇やおろそかに思ったことはない。

ある時は、自分がだらしなく寝ていると、はずれた枕をあてがってくださったり、はだけた胸を下着の白小袖でおおってくださったりして、もし風邪でもひいてはと気遣ってくださったことがあったのを、夢現の間にも覚えていて、身にあまるご寵愛がそら恐ろしく思われた。夜半に目が覚めると、「二人のほかには聞く人もない」と、若殿様にもおっしゃ

一　上野山内の南部、山の入口である表惣門の黒門前の元黒門町。

二　中屋敷・下屋敷に対し、武家で主人の常住する屋敷。

三　諺「飛ぶ鳥も落とす」。権勢のきわめて盛んなるをいう。

四　諺。理を非に、非を理に言いくるめることのたとえ。



江戸上野黒門前にたたずむ中井勝弥が殿様に見染められる場面。右下の前髪で釘抜き紋をつけた振袖の美少年が勝弥。駕籠の中の殿がお供の侍に何かを命じているが、勝弥を召すようにとの指示であろう。

れ、胸のあきたる所を、御下着の白小袖にてふさがせられ、[五]自然の嵐もがなとおぼしめさるる御心入れ、現のやうに覚えて、[六]冥加おそろしく、夢さめては、「ただ二人より外には聞く人もなし」とて、御家の大事、若殿様にも仰せわたされぬ御事どもまで仰せきけられ、[七]互にかはらじ松の葉の針にて、我が脇顔にありとは、人の見付けぬ程の瘊子も、御気にかかるとて手づからに抜かせられ、かれこれ有難き御事ばかりにて、昼夜をすごしぬ。せめてこの御恩に、大殿今にもの事あらば、[八]天下の御制禁は存じながら、いさぎよく殉死の心懸け、

らない御家の大事をお聞かせくださり、互いに心変りはすまいとおっしゃりながら、自分の脇顔に人は気のつかないほどの黒子があるのが気にかかると、松の葉の針で手ずからお抜きあそばし、かれこれありがたい事ばかりで夜昼を過ごしてきた。せめてこのご恩返しには、大殿にもしもの事があれば、天下のご禁制は承知のうえで、潔く殉死しようと覚悟し、無地の上下と小脇差を用意して、生きながら魂は書置とともに箱に封じ込めておいたのだが、世の中というものはわからないものだ。

自分の美しい若衆姿は今が盛りだと、いささかうぬぼれていただけに、くやしいことになった。前月の初め頃から、殿のお心は千川森之丞に移ってしまった。何事も偽りの世の中だとあきらめて、時雨の降る十月の三日に自害することに決めていたが、障ることがあって必ず七日にはと日延べしているうちに、母の書置を見つけだし、親の敵を知ったのも、まだ武運の尽きていない証拠だ。

殿様につまらない不満をもって自害してしまったら、その後悔は後世安楽の障りにもなったであろう。今にして思えば、自分はたいへん運がよい。もし自分が今の森之丞のようにご寵愛をうけている最

五　万一、嵐が吹きこんで風邪でもひいてはと。

六　知らず知らずのうちに神仏または高貴な人の加護を蒙ること。身にあまるご寵愛がそら恐ろしく。

七　互いに常磐の松のように心変りはすまいと松の葉の針で。

八　殉死の禁令が出たのは、寛文三年（一六六三）五月（玉露叢）。寛文八年八月、宇都宮城主奥平忠昌が卒した時、殉死した者があったので、長子昌能は二万石を削られて山形へ転封、殉死者の子弟は打ち首に処せられた。

[一]無紋の上下・小脇指[二]、書置箱に生きながら魂を入れ置きしに、世は知れぬ物ぞかし。

我がすがたの花は今を盛りと、すこしは自慢心の口惜し。去月はじめつ方より、千川森之丞に御心うつり替はりて、何事も偽りの時雨ふる[三]、初の三日には極めて、自害さはる事ありて、是非七日にはと相延べしうちに、この一通を見出し、親のかたきを知る事、武運はつきず。

よしなき殿様に野心を含み、生害におよばば、後悔後の世までのさはりともならなん。今思へば身の仕合せ多し。我、森之丞がごとく御寵愛の時、敵打ちたき御訴訟申し上ぐるとも、たやすく御暇は給はるまじ。

首尾この時と、所存書付けをもつて、ある日御機嫌を見合はせさしあぐれば、心底至極[四]におぼしめされて、御暇乞ひの御盃たまはりて上に、「目出たく安斎うつて帰参すべし」、五百石の御黒印[五]頂戴し、御納戸[六]より路金までたまはりて、寛永九年十月十二日に、竜の口[七]より、兼ねて心ざしふかき下人五人めしつれ、三田八幡[八]に参詣して、おもひ立つ日を重ね、

中に、敵討ちのお願いを申し上げても、容易にお暇はくださらなかったであろう。

今こそ潮時だと、敵討ちの願書をしたため、ご機嫌のよい日を見合わせて差し上げたところ、もっともな願いだと思し召されて、お暇乞いのお盃まで賜ったうえに、「めでたく安斎を討って帰参せよ」と、五百石のお墨付きまで頂戴し、お納戸から旅費まで賜った。寛永九年十月十二日に、竜の口から、かねて忠実な家来五人を連れ、三田八幡に参詣して旅立った。日を重ねて同月十九日に京都に着き、祇園祭に鯉山が出る町に知人があったので、そこへ草鞋を脱ぐやいなや、編笠を深くかぶって人目を忍び、大仏のあたりに住む鎖帷子の細工の名人小島山城を訪れた。幸い望みの鎖帷子があったので、それを求めて帰途につくと、大仏前の耳塚のかたわらに、今朝おりた霜の跡も平気で、竹の小笠で風をよけながら寝ている、見たところ物乞いにはなりそうもない大男が、卑下した口調で、「これもし、一銭恵んでくだされい」と言う。

顔を見合わせると首を縮め、腰をかがめて袖をかざす。様子がおかしいので、なおよく見ると、昔の傍輩の片岡源介であった。「こんなありさまにどうしてなられました。全くあさましいお姿です

一 無地(白または浅黄地)の麻上下。死に装束。
二 長さ一尺一寸九分(約三六センチ)までの短い脇差。一尺八、九寸までの大脇差の対。
三 十月三日。「偽りのなき世なりけり神無月たが誠より時雨そめけむ」(続後拾遺 定家)による。このレトリックを西鶴はしばしば用いている。
四 もっとも至極な願いだと。
五 令書の証として、黒色の肉を用いて捺した印、または花押。書き判ともいう。お墨付き。
六 武家の職名。金銀・衣服・調度の出納をつかさどる役。
七 現、東京都千代田区丸の内一丁目のあたり。江戸城西の丸下の和田倉門の東北の地名で、堀の水が道三堀へ注ぐ所をいう。
八 東京都港区三田四丁目にある御田八幡神社。もと小山町にあり、正保年中、現地に移る。
九 「鯉山　室町通六角下ル町、竜門の滝へ鯉のぼる体也」(京羽二重二)。祇園祭の山棚で現存。鯉の滝登りのほかに素戔嗚尊の人形を安置す。
一〇 京都市東山区大和大路通正面の天台宗方広寺の俗称。秀吉が奈良の大仏に模して創建した。
一一 「京ニテ具足屋井着込。大仏五丁

同十九日に京都につきて、[9]三条鯉山の町にしるべ者あり。馬よりおりもあへず、編笠ふかく忍び、[10]大仏の辺に、[11]小嶋山城とて[12]着込みの細工人の上手ありける。望みの鎖帷子ありて行くに、[13]耳塚の草枕、今朝置く霜の跡をもいとはず、[14]竹の小笠に風よけて、見た所がかくはなるまじき大男の[15]口をたれて、「これ一銭おくりやれ申せ」といふ。

顔見合はせば首をちぢめ、[16]三輪組みて袖をかざす。これ疑はれてなほ見かへれば、古傍輩の片岡源介なり。「この有様には何としてかは。世にあさましき風情」と様子をきけば、まづ泪ぐみて、「我望みあつて、俄に御暇を申し請けし事、[17]越後村上に立ち越え、[18]進退大方済みよる所に、頼みにせし片岡外記頓死仕り、これさへ嘆くに、いにし年の水無月の末より眼を煩ひ、[19]善峰に来て養生すれども、はかどらず。下人は渡り者とて見かぎり、人の因果は知れぬものなり。死なれぬ命ひとつ、ながらへて何にかはなるべし。[20]卞和が玉に泣き、[21]寗戚が角を扣きしもとおもはれ、身の捨たるよりも残る名の惜しまれ、一度生国[22]南部にくだり、おもふ子細もあり。まだ

ね」と勝弥が事情を聞くと、源介は涙ぐんで言った。「拙者は大望があって、にわかにお暇をいただき、越後の村上に参って、大方身の振り方も決まったところで、頼みにしていた片岡外記が頓死しました。それだけでも手痛い事だったのに、去年の六月の終り頃から眼病を患い、善峰寺に身を寄せて養生しましたが、はかばかしくありません。下男どもは渡り者のことですから、拙者を見限りました。人の運命というものは、わからないものです。死ぬに死なれぬ命一つをながらえても、何になるというのだろう。卞和が宝玉を認められずに泣き、寗戚が牛角を打って賤業に服する身を嘆いたという話を思うにつけても、身のすたれる事よりも、残る名が惜しまれてなりません。いささか思うところもあるので、一度生れ故郷の南部に下ってみるつもりです。目のほうも、もはや貴殿のお顔がはっきりと見分けられるほどによくなりました。それにしても貴殿のこのたびのご上京は気にかかります」と、長々と話しているうちに、朝の早い餅屋や煙管屋が姿を見せると、日のあるうちにと伏見の乗合船を目ざす旅人や馬方などが立ちどまって、まもなく見物人が山のように集まった。

目、鍛冶小嶋山城」(万買物調方記)。

一二 上着の上に重ねて着る防御用の鎖帷子。

一三 豊臣秀吉が征韓の役に際し、敵を殺した証拠に首級の代りにそぎ取らせた耳を埋めた塚で、大和大路の大仏前にある。高さ三間(約五・四メートル)。

一四 竹の皮をはった笠。

一五 卑下した口調で。「加判してもらへば五人組年寄に口をたれ」(西鶴織留二の二)。

一六 諸説あるが、西鶴は腰のかがんだ老人の姿の形容に用いている。「三輪組む姿の老女」(五人女二の一)。

一七 新潟県村上市。内藤氏五万石の城下町。

一八 身の振り方。去就。

一九 京都市西京区大原野小塩町にある天台宗善峰寺。長元二年(一〇二九)源算の開基。

二〇 中国春秋時代、楚の卞和は玉を山中に得て厲王に献じたが認められず、かえって左足を断たれた。厲王の没後、武王に献じてまた右足を断たれたが、哭泣すること三日三夜、ついに文王の認めるところとなり、世にこれを和氏の玉という(韓非子)。

二一 斉の桓公が、牛角を撃って明王に会わずして賤役に服するを嘆じている寗戚に出会い、召して士太夫となしたという故事(蒙求)。

二二 旧南部氏の領内。関ヶ原役後、十万石を領して盛岡に居る。よって盛岡を特に南部という。

一 目もよく見える。
二 川原の方面。ここは賀茂の川原。
三 乞食と違い、人別帳(戸籍)を削られた無宿の前科者。非人帳に載せられたものを抱え非人、浮浪の非人を野非人といった。職業をもつことを許されず、物乞いを原則とした。
四 以下、夜盗をなりわいとすることを表す。目振間は横目を使う間で、すばしこいことのたとえ。
五 賭博で低い数を引目といい、高い数を高目という。付目(狙った数)である引目の四と高目の九が出て勝った祝い。物は賽子。
六 もはや。
七 京都市中京区新京極桜之町にある浄土宗誓願寺。西山深草派の総本山。

二十六にこそ罷りなれ、はや御面影も、見付くる程にあきら[一]かなり。さて御自分この度の御上京心元なし」と申す内に、餅屋・煙管屋立ち出れば、伏見に暮いそぐ旅人・馬方立ちとどまり、程なく見る人山のごとし。「とかくは夜に入りて語るべし。それまではこの所に御入りあれ」と、泪に別れてのち、入り日を待ちかね、勝弥、人をもつれずたづね行くに、所をかへてありかを知らず。

これはかなしく、川原面[二]の非人[三]に言葉を懸け、「もし源介殿か」と尋ねければ、「いや、左様の人は知らず。これは相[四]鑰の三吉、目振間の虎蔵、貫穴の権といふ者ぢや」と申す。苫かり葺きの片びさしの内に、松火あかして、声をひそめ、「引き四九高目[五]の祝ひ」と物なげる音、何の事かは知らず。岸づたへ行けば、枯葉の柳陰に、かしらは霜をいただき、も[六]また極楽へ参りても惜しかるまじき老女の声して、「明日のいとなみ絶ゆれば、誓願寺[七]の門前に見つけし捨子の肌着をはぎに、夜半過ぎて行かん」と、世のうき事のみ。

川音の静まつて、人も寝時を過ぎて、焼火に流れ木を拾ひ

「詳しい事は夜になってから話しましょう。それまではここにいてください」と言って、涙ながらに別れて後、勝弥は日の暮れるのを待ちかねて、供も連れずに出かけて行ったが、すでに居場所が変っていて、ありかがわからない。

勝弥は困ってしまい、賀茂の川原にいる非人に声をかけ、「もしや源介殿では」と尋ねると、「いや、そんな人は知らない。ここにいるのは相鍵の三吉、目振る間の虎蔵、抜穴の権というものだ」と言う。苫を掛けた片屋根の小屋で、松火を焚き、内では声をひそめて、「うまく目当ての目が出てありがたい」と言いながら、物を投げる音がするのは、何の事かわからない。勝弥が岸伝いに行くと、枯葉の柳の陰に、頭は霜のようにまっ白で、もう極楽へ行っても惜しくないような老婆の声がして、「明日の食い物がなくなったから、誓願寺の門前で見つけた捨て子の肌着を剝ぎに、夜半になったら出かけよう」と言っている。このあたりは、世の中のあさましい事ばかりが目につく。

川音も静かになって、人の寝る時刻も過ぎた頃、ふと見ると、流れ木を拾い集めて焚火をし、石を据えて土釜をかけ、お茶で酒盛りのまねをしている。「再び代を取り会稽の恥を」と謡いながら天目



物乞いに身をやつしている片岡源介を賀茂の川原で探し当てた中井勝弥。右の若衆姿が勝弥。流れ木を拾い土釜で茶をわかし、柄杓で欠け茶椀に汲み上げようとしている薦被り姿の男が源介。

集め、石据ゑて土竈[八]をかけ、茶酒盛をはじめ、「二度代[九]を取り、会稽の恥を」とうたひながら、天目[一〇]をすすぎ、口拍子[一一]のききて、「笙の舌には鵜殿野[一二]の蘆にかぎりてよし。いづれ名物とて、浅沢[一三]・八橋の杜若は、花房むらさきすぐれて、むかし男[一四]の唐衣、今の紙衣[一五]」と、大笑ひする人を見れば源介なり。勝弥を見ても、さらに恥づる気色はなく、「奇特のお尋ねにあづかる」と申す。

　勝弥泪をかくし、「我この節西国にくだる事、父玄番敵の住み家を聞き出し、筑後路[一六]までおもひ立つ。身は定めがたし。

茶碗を洗い、なお調子に乗って、「笙の舌は鵜殿の蘆にかぎる。さすがは名物だけに、浅沢と八橋の杜若は、花房の紫がすぐれている。昔男の業平が、『唐衣きつつなれにし』と詠んだそうだが、今のおれは紙子の身の上だ」と大笑いしている物乞いを見ると、尋ねる源介であった。勝弥を見ても全く恥じる様子がなく、「これは珍しいお訪ねにあずかります」と言う。

　勝弥は涙を隠し、「私が今度九州に下りますのは、父玄蕃の敵の住所を聞き出し、筑後路まで出かける事になったからです。人の身の上はどうなるかわかりません。もし返り討ちにあったら、またお目にかかることもありますまい。お互いに江戸で勤番していた時、私にご執心のよしで、ありがたいお手紙を、何通もいただきましたが、大殿のご寵愛をお受けしている身の上でしたので、気にしながらもそのまま過ごしてしまいました。今またお目にかかって、こんなうれしいことはありません。かねがねこれも心がかりの一つでした。今夜は心残りなく語り明かしましょう」と言って膝枕をすると、源介は感激して、衆道のことなどはさておき、江戸で同じ長屋に住んでいた時の事など思い出して雑念を払い、十符の菅

八　土釜の当て字。土製の飯釜。
九　「しかるに勾銭は、二度代を取り会稽の恥をすすぎしも」(謡曲・船弁慶)。春秋時代、越王勾戦は呉王夫差と会稽山で戦って敗れたが、のちに夫差を破ってその恥をすすいだ(史記)。
一〇　擂鉢形の中型茶碗。もと中国浙江省天目山産出の茶碗を模した。
一一　調子に乗って。
一二　摂津国島上郡鵜殿(大阪府高槻市内)の蘆は、笙・篳篥の舌(リード)として古来珍重された(摂陽群談)。
一三　浅沢は大阪市住吉区にあった歌枕で、杜若の名所。八橋は現、愛知県知立市八橋町で、『伊勢物語』の東下りで杜若の名所として詠まれている。
一四　昔男が三河の八橋で詠んだ和歌「から衣きつつなれにしつましあればはるばるきぬるたびをしぞ思ふ」(伊勢物語九段)。唐衣は元来袖の大きい裾の長い中国風の衣服の意であるが、ここは立派な衣服の意。
一五　紙子。紙製の安価な着物。
一六　今の福岡県地方。

もし返り討ちにあひなば、又あふ事も絶えなん。互に江戸詰[一]めの時、それがしに御執心のよし、かたじけなき数通にあづかり候へども、大殿御座[二]をもけがす身なれば、おもひながらその時過ぎて、今又あひましてのうれしさ。兼ねてはこれも心懸かりのひとつなり。今宵一夜は残らずかたりまして」と、膝枕をすれば、この時のうれしさ、衆道の事は外になりて、長屋住居[三]の東の事をおもひ出し、心の塵[四]を払ひ、十府[五]のすがごも七婦には、君の御寝姿を見て、夢もむすばず、都の富士[六]に横雲の立ちしらみ、黒谷[七]の鐘もつげて、高瀬[八]さす人顔も見えて、あかぬ別れとなる時、ちぎれたるかますより仕込み杖の刀取り出し、「これ大原[九]の実盛二尺三寸」。この身になりても一腰ははなさぬ、心入れたのもし。「そも〱この刀は、先祖、信玄公[一〇]にめしつかはれ、信州川中島[一一]の一戦に高名いたせし事申し伝へてあり。これにて本意をとげたまへ」と勝弥にわたせば、辞退におよばずたまはりて、「追付け安斎うつて対面仕るべし。それまでの形身に」とて、我が指替へ[一二]を残し置き、立ちさまに左の袂から一包、金子百両ありしを、枕

薦をかぶっている勝弥の寝姿を見守って、夢も結ばなかった。比叡の山に横雲がたなびき、黒谷の鐘も夜明けを告げ、高瀬舟に棹さす人の顔も見え始め、いよいよ別れる時になると、源介はちぎれた叺から仕込み杖の刀を取り出し、「これは大原の実盛と在銘の二尺三寸です」と言う。こんなみじめな身の上になっても、一腰を離さない根性は頼もしいかぎりである。「そもそもこの刀は、拙者の先祖が武田信玄公に召し使われていた時、信州川中島の一戦で功名手柄を立てた刀だと言い伝えられている。この刀で本望をとげたまえ」と、勝弥に渡すと、遠慮なくいただいて、「まもなく安斎を討って、またお目にかかりましょう。これはそれまでの形見です」と言って、勝弥は自分の差替えの刀を残して置き、立ち去る時に左の袂から百両包みを取り出し、側に寝ていたいざりと盲人にささやき、「お前たちに頼みがある。この金を旅費にして、源介殿を国元へ帰してもらいたい」と言い置いて立ち去った。

　十月二十日に伏見から淀の昼船に乗り、夕方大坂に着き、翌二十一日に早船を借りきって、同じく二十八日、柳川に上陸した。こっそりと村に宿を借り、勝弥主従はそれぞれ商人に変装して、近国を捜

一　大名とその家臣が江戸へ参勤している時をいう。

二　寝所をともにする身。ご寵愛をうけている身。

三　江戸勤番の一般の家士は、大名屋敷門内の長屋に居住した。

四　煩悩。雑念。

五　十符の菅薦は編み目の十筋ある菅薦。「陸奥のとふの菅ごも七ふには君と寝させて三ふに我ねむ」(夫木抄)。

六　比叡山の異名。

七　京都市左京区八瀬にある天台宗青竜寺。比叡山西塔北谷の別所で、金戒光明寺を新黒谷というのに対して、元黒谷という。

八　京都市内の運河で、伏見をへて淀川に注ぐ高瀬川を運行する高瀬舟。底が平らで舳の高い運送用の川船。

九　伯耆(鳥取県)大原の刀匠。真守。嘉祥(八四八〜八五一)頃の人。一説に弘仁・承和(八一〇〜八四八)頃の人で、平忠盛の太刀抜丸の作者という。二尺三寸は約七〇センチ。

一〇　武田信玄。戦国の大名。当代一流の戦略家で、領国の甲斐国(山梨県)経営に成功し、その後、信濃・飛騨・駿河から北関東に進出して、大領国を形成した。天正元年(一五七三)没。五十三歳。

一一　長野市の南部、千曲川と犀川が合流する付近。北信濃の経略をめぐって、武田信玄と越後の上杉謙信が、数度にわたって争った。

一二　予備の刀。

近きゐざり、盲目にささやきて、「各々頼むなり。これを道のつかひにして、源介殿を国元へかへしてたまはれ」と申し置きて、

十月二十日の昼舟[13]、難波のくれがたに着きて、同二十一日に早舟を借り切り、同二十八日に柳川にあがりて、ひそかに里のかり宿、おもひ／＼の商人に身を替へ、近国をさがし、その年も暮れて、春の野は杉菜[14]・菫の咲きし頃、やう／＼在宅たしかに見届け、三月二十八日の夜討ちに定め、主従六人心をあはせ、かぎり[15]の酒宴過ぎて、暮方より退き道をかんがへ、南に谷川をかまへ、土橋[16]ひとつの通ひ、浪岩をくだきて、白竜のごとし。後は高山北は沼、人倫[17]の道絶えて難所なり。[18]八町こなたの辻堂に忍びぬ。

かかる時、源介ここに来たつて、かの土橋の中程を二間[19]あまり切り落とし、東の岸につなぎ捨てたる小船に櫓櫂を仕懸け、勝弥がはたらきを待ち合はすうちに、夜に入り里に帰る人、思ひよらず踏みはづして高浪にしづみぬ。又は牛引きながら落ちて、声をもたてず哀れを見る事四五度なれども、身

し回った。その年も暮れて、春の野に杉菜や菫が咲き始めた頃、ようやく敵の在宅をたしかに見届け、三月二十八日の夜討ちに決め、主従六人心を合わせ、最後の酒宴をすまし、暮れ方から退き道を考えながら出かけた。敵のすみかは南に谷川をひかえ、土橋一つで通じており、波は岩に砕けて、白竜のようであった。後ろは高山で、北には沼があり、人の通う道とてもない難所であった。一行は八町ほど手前の辻堂に忍んでいた。

その時、源介はここにやって来て、かの土橋の中ほどを二間あまり切り落とし、東の岸につないであった小船に櫓櫂をしかけて、勝弥の働きを待ちうけていた。夜になると、村に帰る人が思いがけなく道を踏みはずして、波に沈む者もあった。または牛を引いたまま落ちて、声も立てずに死んでしまうようなことも四、五度あったが、源介は身を縮めて隠れていた。

すでに寅の上刻と思われる時分、勝弥主従は忍び返しを切って押し入り、東西から笹葺きの軒に火をかけ、「中井玄蕃の敵討ち、同名勝弥なるぞ。新五右衛門出会え」と名のり、寝所の入口まで押し寄せて、敵にも覚悟をさせたうえで、存分に討ち取った。首入れの器まで用意していたのは、抜かりのないことであった。

一三　伏見・大坂間十三里（約五二キロメートル）の淀川を昼夜二回上下した乗合三十石船。下り半日。

一四　トクサ科の多年草。山野に自生。春、淡褐色の胞子茎（つくし）を出す。食用。

一五　今生における最後の酒宴。

一六　表面に土を盛った橋。

一七　人間。人々。

一八　一町（＝六十間）は約一〇九メートル。

一九　一間は約一・八メートル。

一 寅は午前四時頃。上刻は一時（約二時間）の三分の一の一刻（約四十分）を、さらに上中下刻に三分したその上刻。
二 塀の上にとがった竹や木などを取り付けた防御設備。


忍び返し
（武道伝来記）

三 抜かりのないことであった。
四 未詳。

をちぢめて隠れぬ。
すでに寅の上刻とおもふ時、忍び返しを切り入り、東西より笹葺きの軒に火を懸け、「中井玄番が敵うち、同名勝弥なるぞ。新五右衛門出合へ」と、寝間口まで仕込み、敵にも覚悟させて討ち取り、残る所なし。首入れの器兼ねて拵へ、手に入りたる事なり。
表門をひらき、二町ばかりも過ぐる時、一村たいまつ天をひからせ、「のがさじ」と声々に追つかくる。これまで、と心中を極むる時、くらがりより、「勝弥、のき道この方へ」といふ。声聞き違へて、「誰人」といふ。「源介忘れたか。まづこれへ」と船に取りのせ、川筋にさし出す。追手の者、切り落としの難儀、数百人是非なく跡にかへりて、評議とり〴〵なり。
舟磯伝へに、その夜三里半のがれて、脇の浜といふ所に、曙の前につきぬ。姿を見合はせ、今ぞ嬉しき涙をおさへ、「まことに先夜は、一大事の時節この所に御下向、あやふき命を御たすけ、勝弥が仕合せ」と申す。

勝弥主従が表門を開き、二町ばかり退いた時、村人たちが松明をふりかざし、「のがすな」と叫びながら追いかけて来た。もはやこれまで、と覚悟を決めた時、暗がりから、「勝弥、退き道はこちらだ」と言う者があった。声を聞き違えて、「誰だ」と言うと、「源介を忘れたか。まずこちらへ」と言って船に乗せ、川中へ押し出した。追っ手は、切り落とされた土橋で難儀し、数百人がやむなく引き返して、かれこれといたずらに評議した。
船は、その夜のうちに磯伝いに三里半のがれて、脇の浜という所に、夜明け前にたどり着いた。お互いに姿を見合わせ、今こそうれしい涙をおさえて、「まことに昨夜は一大事の折に、ここまでおいでくださって、危うい命を助けていただき、勝弥の仕合せ」と言う。
源介は笑って、「つまらないことを言うじゃないか。三条河原で別れてからというもの、朝から晩まで影身に添って、今日まで宿屋の軒下にうずくまり、昼は世間の様子に気を配り、夜は外回りの用心をかためてきたのだ。ある時そなたが久留米の城下まで敵を尋ね回り、柳川との間にある濡れせぬ山の麓にさしかかった時の事だ。降りしきる雪を払いかねて、家来も一緒に前後不覚となり、息も絶え

源介うち笑つて、「愚かなる事を申す人かな。三条川原にて別れし朝より、夕日をしたひ影身に添ひて、今日まで旅宿の軒下にかがみ、昼は世間を[五]見つくろひ、夜は外の用心をかため、ある時その方、[六]久留米の城下までたづねまはらせ、[七]濡れせぬ山の麓ふる雪、袖を払ひかねたまひて、小者も同じ枕に前後を忘じ、引き入る息のたのみすくなき時、人参口に入れて、岩もる雫を手してはこび、肌をあたため正気付けて、『いかなる御方様ぞ。御看病ありがたき』と申されし折は、名乗らうかとおもひしかども、知れぬを幸ひに、『道行き人』と申し捨てて、村竹の陰にかくれて、しばし様子を見るに、下人に力を付け、『今のは正しく氏神の化身なるべし』と、その所を立ち去り、しかも十二月九日の夜の道、我先に立ちて、里ばなれなる[八]すずしをはづして、所々に火を焼きて道しるべせし事、おもひあたりたまふか」と、過ぎにし十月より今月今日までの事どもをかたり、京都の別れに残し置きたまひし物をも、そのまま封じ目をきらず、この度かへしぬ。このことわりにせめられ、舟中感涙きもにめいじ、「又の世の

絶えとなった時、人参をそなたの口に入れて、岩から漏れる雫を手で運び、肌を暖めて正気づかせてやったが、そなたが、『どういうお方でございましょうか。ご看病ありがたく存じます』と申した時は、いっそ名のろうかと思ったが、気がつかないのを幸いに、『通りすがりの者だ』と言い捨てて、竹藪の陰に隠れてしばらく様子を見ていた。するとそなたは家来を励まし、『今のはまさしく氏神の化身であろう』と言いながら、そこを立ち去って行った。しかもその日は月の出の遅い十二月九日の夜道であったから、拙者が先に立って、村はずれにある稲むらを抜き取って所々に火を焚き、道案内をしたことを思い当らないか」と、この十月から今月今日までの事をあれこれと語り、京都で別れた時に勝弥が残しておいた小判も、封じ目も切らずにそのまま返した。この情理を尽した言い分に感激して、船中の一同は涙を流し、「後世の手本にもなることだ」と、いっせいに声を揃えて感嘆した。

「ついでに見送ってください」と、勝弥は源介に頼み、今こそ勇んで帰国の途についた。卯の花がまっ白に咲いた夏の初めに、駿河国足柄の関を越えて、十一日に江戸に着き、敵討ちの次第を主君に言

五　気をくばり。
六　福岡県久留米市。久留米藩有馬氏二十一万石の城下町。
七　『一目玉鉾』巻四の久留米と柳川との間に「ぬれせぬ山」とある。
八　山陰地方（鳥取・出雲）で、わらを積み上げたもの（稲むら）をいう。

ためしにも」と、自然と声を揃へぬ。

「とても御事に見おくりてたまはれ」と、今ぞいさみて帰国の袖、卯の花の雪見る時、富士足柄の関越えて、十一日に東武につきて、右段々申し上ぐれば、両殿御よろこびのあまりに源介をめし出され、三百石御加増、役なしに仰せ付けられ、その上勝弥をたまはり、名を源七とあらため、まことの兄弟分となりぬ。これ前代未聞、少人の鑑、かうなうては。

傘持つてもぬるる身

浦の初島浪あらく、武庫の山風はげしく、夕立雲の立ちかさなり、又朝盛も出べきけしき、程なく降つて来て、道行き人おもはぬ難儀となりぬ。

ここに明石より尼崎への使者、堀越左近といふ人、生田の小野の榎の木の陰に雨宿りしてありしに、かかる時十二三なる美少人、まだ夏ながら紅葉傘を持つて、ささで来にけり。左近を見懸け、「唐笠の御用に立つべし」と下人にわたしぬ。

上した。大殿と若殿はお喜びのあまりに源介を召し出されて、以前の知行のほかに三百石をご加増のうえ、当分無役と仰せ付けられた。そのうえ、勝弥を弟分として賜った。勝弥は名を源七と改め、まことの兄弟分となった。まことに前代未聞、勝弥こそ若衆の鑑、男色の契りはこうなくてはならない。

傘持つてもぬるる身

浦の初島は波荒く、六甲山の山風も吹きすさび、夕立雲が立ち重なって、またもや平知盛の幽霊が現れそうな景色となった。まもなく雨が降ってきて、道行く人々の思いがけない難儀となった。

さて、明石藩から尼崎藩への使者で堀越左近という侍が、生田の野道で榎の木の陰に雨宿りしていると、そこへ十二、三歳の美少年が、まだ夏なのにその名も紅葉傘を持って、ささないでやって来た。左近を見かけると、「傘をご用立てしましょう」と言って、供の者に渡した。

一 いっせいに声を揃えて感嘆した。
二 白い卯の花の盛りの卯月四月。
三 静岡県駿東郡の足柄の関は、醍醐天皇の昌泰二年(八九九)に設置されたが、まもなく廃関。ここは足柄峠を越えての意。
四 大殿と若殿。

❖母とともに拾われて大名の寵童となった浪人の遺児の長坂小輪は、殿の溺愛を衆道の本意でないと心服せず、自分が選んだ念者を殿の寝所の次の間に忍ばせて契ったが、隠し目付に発見され、三日過ぎての兵法稽古の座敷に召し出されて、殿の手にかかって果てた。念者の侍も隠し目付を討ち取り、小輪の墓前で割腹自殺したという、衆道の意気地物語である。

五 「浦の初島　川辺郡尼崎にあり。今民家市店と成て、辰巳と称す」(摂陽群談五)。歌枕。
六 神戸市の背後にそびえる六甲山の古名。歌枕。
七 謡曲「船弁慶」で幽霊となって大物の浦にあらわれる平知盛。清盛の第四子。壇ノ浦で自害。

「御志近頃かたじけなし。されども、さしあたつて不思議あり。それ持ちながら、その身雨にぬれたまふは」といふ。少人泪を流す。

「なほ子細あるべし。語りたまへ」と聞くに、「某は長坂主膳が悴子、小輪と申す者なり。父浪人して甲州を引き越し、[一三]豊前に立ちのきしに、船中にて病死。是非なくこの浦里に煙となし、所の人の情、あるに甲斐なき[一四]浜びさしをしつらひ、窓の[一五]呉竹世をわたるわざとて、傘の細工見なれて、母人の手して、[一六]男のすなる事を、思へば我が身ぬるればとて、天のとがめも恐ろしく存じてささず」といふ。

されば、[一七]売扇の祖母子は手に日をかざし、[一八]箕売り笠でひるのたぐひなるべしと、この心入れを感じ、母の住める里まで人付けて見届け、明石に帰りすぐに登城して、御返状をさしあげ、御機嫌の次手に、小輪あらましを御物語り申しあぐれば、「それつれきたれ」との仰せ。

左近喜悦の迎ひに、小輪母子ともに[一九]輦車して来り、御前に倡ひけるに、わざとならぬ顔ばせ、遠山に見初むる月のごと

「ご好意はまことにありがたいが、さしあたって納得のゆかないことがあります。傘を持っていながら、どうしてご自分は濡れておられるんです」と言うと、少年は泣きだしてしまった。

「きっと深い事情があるのだろう。話してみなさい」と左近がうながすと、「私は長坂主膳の倅で小輪と申します。父が浪人して甲州を立ち退き、豊前国へ参る途中、船中で病死しました。仕方なくこの村で火葬にし、土地の人の情けでそまつな浜庇を建てて、母と暮すことになりました。暮しのために母上が傘の細工を覚え、男のする仕事をなさっていることを思えば、わが身が濡れるからといって、天の咎めも恐ろしく思われて差さないのです」と言う。

なるほどこれは、扇売りの老婆は日よけに商品の扇を用いず、箕売りは箕の代りに笠を使うといったような事であろうと、左近は小輪の心がけに感心し、母の住んでいる村まで供の者をつけて住いを見届けたうえで、明石へ帰り、すぐ登城して、ご返事の手紙を差し上げ、殿のご機嫌を見合わせて、小輪のことをあらまし申し上げると、「その者をすぐに連れてまいれ」と仰せられた。

左近が喜んで迎えに行くと、小輪母子

八 兵庫県明石市の明石城は、寛永十五年(一六三八)大久保忠季六万石、慶安二年(一六四九)松平忠国六万石、延宝七年(一六七九)本多政利六万石、天和二年(一六八二)松平直明六万石が封ぜられ、以来世襲して明治維新に至る。
九 兵庫県尼崎市の尼崎城は譜代松平氏四万石の居城。
一〇 神戸市中央区にある生田神社付近の野。
一一 『我衣』によれば、貞享年間に作りはじめた傘で、たたんだ場合の上部三分の一が青土佐紙で、ほかは白紙張り、糸装束があって、柄は藤巻の精巧な傘。
一二 「蘆の屋の灘のしほ焼きいとまなみつげの小櫛もささず来にけり」(伊勢物語八十七段)。
一三 福岡県と大分県の一部。
一四 海岸の苫屋(菅や茅で葺いた屋根の小屋)。
一五 淡竹の一名。高さ一〇メートルに達する。呉と暮、世と節の掛詞。
一六 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」(土佐日記)。「女方もすなる土佐日記」(七の二)。
一七 「まい」は売の呉音。祖母子の「子」は接尾語。扇売りの老婆は日よけに商品の扇を用いないとの意。
一八 箕は穀類をあおって穀や塵を除く農具。「ひる」は「簸る」で、箕で穀物をあおる動作をいう。注一七と同意。
一九 正しくは「れんしゃ」。手車。手を組んで叩頭する中国式の礼法。

一 枝にとまっている鳥。
二 芙蓉の花のように美しいまなざし。「桃李の粧、芙蓉の眸気高うして」(源平盛衰記十九)。
三 鶯のさえずる声。
四 衆にぬきんでて用いられること。
五 寝をともにする寵童(小姓)。
六 目下の相手をさす代名詞。
七 日本国中の神に誓って。誓言。
八 「ちん」は唐音。あずまや。
九 前髪立ちの小姓。十七、八歳まで。→三五五ジペー挿絵。
一〇 諸国の名酒。「名所紙のあるにまかせて」(近代艶隠者・序)。
一一 星の群れを林に見立てた歌語(万葉)。
一二 兵庫県明石市人丸にある柿本神社。

し。髪は声なき宿鳥にひとしく、芙蓉の瞼じり、鶯舌の声音、梅すなほなる心ざし、次第にあらはれ、出頭日にまし、夜の友となりぬ。

御次に寝ずの番、聞き耳立てるは、御たはぶれあらけなくなりて、「我に命を捨つる」と仰せらるれども、さらにかたじけなきとは申さず、「御威勢にしたがふ事、衆道の誠にはあらず。やつがれもおそらくは心を琢き、誰人にても執心を懸けなば、身に替へて念比して、浮世のおもひでに、念者を持つてかはゆがりて見たし」と申せば、すこし御せきあそばし、座興に取りなしたまへど、「今申しあげし詞、日本の神ぞ偽りなし」といふ。殿もあきれさせたまひ、この強き心根にくからずおぼしめされて、

ある夕暮、風待つ亭に前髪あまためしよせられ、名所酒数かさなり、御遊興の折から、俄に星の林も影くらく、人丸の社の松さわぎて、風腥く雲引きはゆる中に、一眼の入道、軒端まぢかく飛び来たり、左の手を二丈あまりもさしのべて、一座の鼻をつまむ事興覚めて、まづ殿の前後をしゆごし、常

は、礼儀正しくやって来た。自然と生れついた美貌で、遠山にほんのりとかかった月のような趣であった。髪は枝に止まっている鳥のように黒く、眼は芙蓉のようであり、声は鶯に似て、気性は梅のように素直であった。その長所がしだいにあらわれ、日ましに殿の覚えもめでたく、やがてご寵愛をうける身となった。

お次の間にひかえている不寝番の侍が聞き耳を立てていると、殿のお戯れがしだいに激しくなって、「そちのためならば命も惜しまない」と仰せられても、小輪はそれをありがたいとは言わず、「ご威勢になびくことは、衆道の誠とは申せません。私もいよいよ心を磨き、どなたでも思ってくれる人がありましたら、命がけで親しくし、この世の思い出に兄分をもって、かわいがってみたいとぞんじております」と言う。殿もいささかいらだたれて、小輪の言ったことを冗談にしてしまおうとなされたけれども、「今申し上げたことは、日本の神々に誓って嘘ではございません」と言い切った。殿もあきれてしまわれ、その強い気性を、かえってかわゆく思われるのであった。

ある夕方、涼風を待つ庭前の亭で、殿は小姓を大勢お集めになり、諸国の名酒

の御居間に取り急ぎて入らせたまふ。跡、地ひびきして山も崩るるごとし。

夜半過ぎて、御築山の西なる桜茶屋[一三]の杉戸を破りて、幾年かふりし狸の首切りはなされて、今に牙をならし、すさまじき有様を言上申せば、「さては今宵の震動、そのわざなるべし。誰かしとめけるぞ」と、御家中詮議あれども、この手柄申し出る人もなく、あたら名を埋みぬ。

それより七日すぎての夜、丑[一四]の刻に、大書院[一五]の箱棟に小女の声して、「科なき親を殺せし小倫[一六]が身の上、おつつけあやふかるべし」と、三たびののしつて失せぬ。「さてこそ小倫がはたらき」と、感じ入らざるはなし。

その後御普請方[一七]の奉行、「狸のあらしたる板戸を修理仕るべし」と申しあぐれば、「むかし魏[一八]の文侯興に乗じて、『我が言葉のするゐ、何にても違へる事なかれ』とうたはりしに[一九]、師経といへる者、琴にてつきたふし、おごりをしづめぬ。文侯、まことある臣と、琴にくづれたる南壁を、ただささずおかれけるとなり。今又小輪が武勇を、諸人に見せしめんがためなり。

を飲んで楽しんでおられると、にわかに星空が暗くなり、はるかかなたの柿本神社の松林がざわめいて、吹く風もなまぐさく、たなびく雲の中に、一つ目の入道が軒端近く飛んで来た。左の手を二丈余りもさしのべて、その座の人々の鼻をつまんだので興もさめはて、小姓たちはとりあえず殿の前後を守護し、急いでふだんのお居間へお連れ申した。その後で地響きがして山が崩れるような音がした。

夜半過ぎてから、築山の西にある桜見の茶屋の杉戸を破って、切り離された古狸の首が転がり込み、今でも牙を鳴らしてものすごい形相をしているありさまを殿へ申し上げると、「さては今夜の地響きは、その狸の仕業であろう。何者が仕留めたのか」と、ご家中をお調べになったが、この手柄を名のり出る者がなく、せっかくの功名も埋もれてしまった。

それから七日目の夜の丑の刻に、大書院の箱形の棟で少女の声がして、「科もない親を殺した小輪の身の上は、まもなく危なくなるだろう」と、三度ののしって消え失せた。さては小輪の働きであったのかと、感心しない者はなかった。

その後、御普請方の奉行が、「狸が荒らした板戸を修理いたしましょう」と申し上げると、「昔魏の文侯が興に乗じて、

一三 桜林のほとりにある茶屋。

一四 午前二時頃。

一五 大広間の箱形に造った棟。

一六 「小輪」と同じ。

一七 普請奉行は武家の職名。土木建築工事の任に当る。

一八 『韓非子』に見える故事。魏の文侯ではなく、晋の平公の話である。平公が群臣と会飲している時、「人君たるより楽しきはなし。唯その言うがままにして違う者なし」と言った。時に侍坐していた盲楽師師曠（本文の師経は誤記）が、琴で平公をついて壁を破り、「ああこれ人に君たる者の言に非ず」と言ったので、平公は破れた壁をそのまま保存し、戒めとしたという。

一九 「うたはれしに」とあるべきところ。

一 母衣は五幅ほどの布を袋状に仕立てた防矢の具であったが、鉄砲の伝来により、江戸時代にはいると戦場での目標である指物となった。その母衣の事をつかさどる役人の長。
二 江戸時代の煤払いは、上下とも十二月十三日に行った。
三 歳末に、一門または家臣に時服を配り与える行事。
四 着下ろし。着古した着物。
五 結んだ形がカルタを並べた形になる男女の帯の結び方。近世初期から中期にかけて行われた。
六 穂先がまっすぐな槍。


カルタ結び（姿絵百人一首）

そのまま置くべし」と、かたじけなき御褒美あつて、御ふびんいや増しになりぬ。

時に、母衣大将[一]神尾刑部が二男に、惣八郎と申せし者、つねづね小輪心底を見すまし、文にてなげき、たがひに心をかよはせ、時節を待つ年も暮れて、十三日[二]は煤払ひ、御吉例の衣配り[三]の夜、着おろし[四]母の許へつかはしける葛籠に、小者が才覚にて惣八郎を入れて、御次の間までしのばせ、宵の程より、腹いたむのよしにして、自由に戸のあけたて、車の音も、はじめの程はとがめたまひしが、後は御鼾のみ。

「恋は今ぞ」と惣八にま見え、まづ何がなしに、かるた結び[五]の帯をもとかず、この上に外の事なき情かけたまひて、なほすゑ〴〵の詞をかため、「二世まで」といふ声、御夢をおどろかせける。御枕にちかき素鑓[六]の鞘はづし、「正しく人音のがさじ」とかけ出させたまふ時、小輪御袂にすがり、「これはもつたいなし。さらに人影は見えもわたらず。我が身のくるしさに心の鬼来て、かみころせと申すもよしなや。よし何事も御ゆるしあれ」と、さわがず申し上ぐるうちに、惣八柏

『どんな事でも私の言うことに背いてはならない』と言ったところが、側にいた師経という者が、琴で文侯を突き倒して、その驕りの心を諫めた。文侯は誠実な臣であるといって、その時琴で崩した南壁を直さずにおいたという。今また小輪の武勇のほどを諸人に見せるために、そのままにしておくがよい」と仰せられて、ありがたいご褒美があり、いよいよ殿のご寵愛は深くなった。

その頃、母衣大将の神尾刑部の次男の惣八郎という者が、かねて小輪の気性を見届け、恋文を送って互いに心を通わせながら、忍び逢う機会を待っていた。その年も暮れて、十三日はお定まりの大掃除、それがすんで吉例の衣配りの夜のことであった。小輪は着古しの着物を母へ届けた葛籠の中に、下男の才覚で惣八郎を入れ、殿のお寝間のお次の間まで忍ばせ、自分は宵の口から腹が痛むといって引き籠っていた。殿も初めのうちは、小輪がたびたび出はいりする戸のあけたてや戸車のきしむ音を気にしておられたが、後には鼾の音ばかりとなった。

「恋は今こそ」と、小輪は惣八郎と出会い、とりあえずカルタ結びの帯をしたまま身をまかせ、このうえもない情けをかけた。なお行く末までもと約束し、「あ

七 忍び返し（三四六ページ注三）に同じ。闖入者を防ぐために、塀の上に先をとがらした木や竹を植えつけたもの。

八 隠密。秘密監察官。

九 髷の元結が切れて乱れたさんばら髪。

の梢・矢切七を飛び越す面影を見付けたまひて、色々御穿鑿あそばしけるに、いささか身に覚えのなきよし。

「さては、すぎにし狸のなすわざか」と、御心やすまりしに、折節御前に、金井新平とて、かくし横目八さし出、「只今の足音、殊にはさばき髪九に鉢巻まで見届け候。忍び男にはうたがひなし」と申す。

又吟味の品かはつて、「是非に申せ」とあれば、「小輪に命をくれしもの、たとへば身をくだかるればとて、これを申すべきや。この儀、兼ねて御耳に立て置きしに」と、さらになげく気色もなし。

それより三日過ぎて、極月十五日の朝、兵法稽古座敷にめし出され、諸家中の見せしめに、御長刀にて、御自身、「小輪最後」と、御言葉をかけさせたまへば、につこと笑ひて、「年頃の御よしみとて、御手にかかる事、この上何か世に思ひ残さじ」と、立ちなほる所を、左の手をうち落としたまひて、「今の思ひは」と仰せける。右の手をさしのべ、「これにて念者をさすりければ、御にくしみふかかるべし」といふ。

の世まで」という声で、目をお覚ましになった殿は、枕元の素槍の鞘をはずして、「たしかに今のは人声だ。のがさぬぞ」と駆け出そうとなさった。小輪は殿のお袂にすがりつき、「これはもったいない。少しも人影は見えません。わが身の苦しさのあまりに心の鬼が来て、嚙み殺すぞと申しましたまでのこと。何事もお許しくださいませ」と、騒がずに申し上げているうちに、惣八郎は柏の梢から忍び返しを飛び越えて逃げ出した。その姿を見つけられて、小輪をいろいろとお調べになったが、少しも身に覚えがないと言い切った。

「さてはいつかの狸の仕業であろう」と、殿もご安心なさった時、御前にいた金井新平という隠密が乗り出して、「ただいまの足音はもとより、さんばら髪に鉢巻をしているところまで見届けました。忍び男に相違ございません」と申し上げた。

そこでお調べの様子が変って、「ぜひとも白状せよ」と問い詰められると、「あの男は小輪に命をくれた者、たとえ身を砕かれても白状はいたしません。この事はかねがねお耳に入れておきました」と言って、少しも驚く様子がない。

それから三日過ぎて、十二月十五日の朝、殿は小輪を武道稽古の座敷にお召し

飛びかかりて切り落としたまへば、くるりと立ちまはりて、「このうしろつき、また世にも出来まじき若衆、人々見をさめに」といふ声も次第によわるを、細首おとしたまひて、そのまま御涙に袖は目前の海となつて、座中浪の声、しばし立ちやむ事なし。死骸は妙福寺[一]におくりたまへり。

哀れ、露には消えつ。あしたの霜にはかなき朝顔の池[二]といふも、この所なり。むかし都のいたづら人[三]、須磨に流され、それにこりず入道[四]の娘を恋ひて、ここに通ひたまひし時読みたまへり。

一　明石に妙福寺はない。俗に朝顔寺というのは、兵庫県明石市鍛冶屋町にある浄土宗の光明寺である。元和七年(一六二一)開闢。
二　注一の光明寺にある光源氏の月見の池と称する池。作られた名所である。
三　光源氏。
四　明石入道の娘の明石の上。のち源氏との間に明石姫を生む。



す。肩から吹き出す血、振袖とともに右面にとぶ左手の描写が悽絶。手前の三人の若衆たちが目をふせ、廊下手前の二人が恐る恐る見る中で、廊下右上の侍は冷然と熟視。これが悪役金井新平か。

になり、家中へのみせしめにと、ご自身長刀をお取りになり、「小輪、最期」と、お言葉をかけられると、にっこりと笑って、「久しくご寵愛をいただいた身でございますから、お手にかかって果てるのは、このうえもない幸せ、思い残す事はありません」と言って立ち上がったところを、殿は左の手を打ち落とされて、「今の思いは」と仰せられた。すると右の手をさしのべて、「この手で兄分をさすりましたから、さぞかしお憎しみのことでございましょう」と言う。飛びかかってその手を切り落とされると、小輪はくるりと背を向けて、「この後ろつき、またと世にあるまい若衆ぶり、人々見おさめに」と言う声もしだいに弱るところを、細首を打ち落とされ、殿の袖はそのまま明石の海となり、居合わせた人々の泣き声もしばらくやむことがなかった。死骸は妙福寺にお送りになった。

はかなくも露と消えたが、朝の霜にははかなくしぼむ花の名の朝顔の池というのもこの寺にある。昔都の色好みの光源氏が、須磨に流されたことがあったが、それにもこりず明石の入道の娘を恋して、この地に通った時、つぎの和歌を詠んだ。

秋風に浪や越すらん夜もすがら明石の
岡の月の朝顔



神尾惣八郎との密会を咎められた長坂小輪が、兵法稽古の座敷で殿の処罰を受ける場面。長刀で左の手を切り落とされた若衆姿の小輪が、右の手を差し出し「これにて念者をさすりければ…」と意地を示

五秋風に浪や越すらん夜もすがら明石の岡の月の朝顔

この歌衆道にてよみたまはば、人も知るべきに、なんぞや女房事なれば、沙汰なしになりぬ。

「されば、小輪をころして、この念者いまに出ぬは、よもや侍にてはあるまじ。野良犬の生まれ替りぞかし」と、人のそ六しり草となりぬ。

明けの春十五日の夜、七左義長の場にて、惣八、新平が諸手をうち落とし、とどめまで刺して首尾よく立ちのき、小輪が母の行方をもふかくかくし、その身は八朝顔寺にかけこみ、塚

この歌も衆道の事で詠んだのなら、人人もはやしたであろうが、何しろ女出入りの歌なので、忘れられてしまった。「さて小輪が殺されても、その兄分がまだ名のり出ないのは、よもや侍ではあるまい。のら犬の生れ代りであろう」と、人々の悪評の種となった。

明けて正月十五日の夜、左義長の場で、惣八郎は新平の両手を打ち落とし、止めまで刺して首尾よく立ち退いた。そのうえ惣八郎は小輪の母の行方も深く隠し、自分は朝顔寺に駆け込んで、覚悟のほどを詳しく高札に書いて小輪の墓の前に立て、二十一歳を最期として、夢のまた夢、眠るように腹を掻き切って死んだ。明けて十六日の朝、人々がこのありさまを見ると、ありありと一重菱のうちに三段に切ってあり、それこそ小輪の定紋であった。「どうせ恋をするからには、こうあるべきだ」と、一七日の間というものは、国中の山を捜して手に入れた手向けの樒で、朝顔の池を埋めてしまったという。

五『一目玉鉾』巻四、人丸の社に続く朝顔寺の条に、この和歌が見える。俗伝である。

六 草は種。そしりの種、材料。

七 正月十五日または十八日に、青竹を束ね、正月の門松やしめ縄・書初めなどを添えて焼き、その火で焼いた餅を食えば、年中無病という。どんど焼きともいう。もと禁中の行事で、青竹に毬打三個を結んだので三毬打(左義長)と書く。

八 注一の光明寺の俗称。

一 一重の菱形の中に三本の横筋を表した定紋。三引は三引両の略。→三五五ページ挿絵。二 樒は仏前草ともいい、高さ約三メートル。仏前に供え、葉と樹皮で抹香や線香を作る。

❖大和郡山家中の三之丞という若衆が、奈良の薪能見物の帰途、武芸者の丸尾勘右衛門という衆道好きと近づきになったが、三之丞が約束の日に訪れると、勘右衛門はかりそめの風邪で死んでいた。供養していた左内という若侍と兄弟の契りを結んだその夜の夢に勘右衛門が現れ、三之丞の鬢つきを剃り改めてくれたが、夢がさめると、まことに剃ってあった。

三『和州旧跡幽考』(延宝九年序)添上郡興福寺の条に、「南大門は二王の像をすへたり。爰にして薪の能あり。四座(観世・宝生・金春・金剛)の太夫毎二月七日よりつとめて十四日にをはる」とある。四 高さ四、五尺、または二尺(約六〇センチ)ほどの四脚の腰掛。「薪の能は南大門の前、芝の上にてあり。…役者の後のかた脇正面には階のごとく高くくらかけして、見る人尻かけなみいる也」(京童跡追)。五 大和猿楽四座の一、金春座の能太夫。六 金春座付の幸流の小鼓方幸清五郎。七 似我流太鼓の祖金春又右衛門重家は安土桃山時代の人。この章の時代設定は、「後下り」や「吉屋づくり」などによって万治・寛文頃と思われるから、二代目か三

の前に、心底つまびらかに高札に書きしるし、今年二十一期として、夢また夢、眠れるごとく腹かき切つてうせぬ。あくれば十六日の朝、このありさまを見るに、あり〳〵と一重菱の内に三引を切りぬ。これこそ小輪が定紋なり。「とても恋にそまる身ならば、かくこそあるべけれ」と、七日がうちは、国中の山をわけて手向け樒、かの池を埋みけるとなり。

夢路の月代

南都南大門の暮いそぎて、鞍懸より詠めけるに、今春太夫が舞ひに清五郎が鼓、又右衛門が片撥、いづれか天下芸、これは見ずして、興福寺・西大寺の桟敷に児若衆の面影に気をうつし、入り日に名残を惜しみ、「あたら夜のにしき」と独り言、誰聞くとも知らず嘆く男を見れば、まだ三十にはなるまじ、頭つき後下りに髪先みじかく、上下黒き竜門に葉菊の五所紋、糸打ちの平帯、吉屋づくりの大小、いかさま衆道のわけらしき風俗なり。

夢路の月代

暮れ方から興福寺の南大門前で催される薪能見物に出かけて、腰掛にすわって眺めると、金春太夫の仕舞に清五郎の鼓、それに又右衛門の片手打ちの太鼓の撥、みんな天下芸である。ところがそれには目もくれず、興福寺や西大寺の桟敷に居並んでいる稚児たちの姿に見とれ、日が暮れて見えなくなることをくやしがり、「あたら夜の錦だ」と、人に聞かれるのも知らないで、独り言を言っている男をよく見ると、まだ三十歳にはなるまい。今はやりの後ろ下がりの髪を結って、刷毛先が短く、上着・下着ともに黒い竜紋で、葉菊の五所紋をつけ、絹糸で編んだ平打ちの帯を締め、伊達なよしや風の大小をたばさみ、いかにも衆道の通人らしい風俗であった。

このあたりでその名を知られた丸尾勘右衛門という武芸者で、古今稀な若衆好きであった。ともかく口説いてだますよりほかに、若衆をものにする手はないと

代目の又右衛門であろう。八 能楽における太鼓の特殊な打ち方。常は左右の両撥で打つが、時に右撥だけで打つをいう。九 天下に並びない芸。一〇 奈良市西大寺芝町にある真言律宗の総本山。一一 天台や真言の寺院に召し抱えられている少年たち。一二 美しいものもその甲斐がないとの意。一三 髪の形が後ろ下がりになるように月代を剃り下げた髪型。後上りに対す。「当世のはやりとて月代をうしろさがりにそりなし」(身の鏡〈万治二年〉)。髪先は刷毛先の髷の先端。一四 竜紋。艶のない平織の絹織物。もと中国・朝鮮からの舶来。一五 丸で囲んだ菊の葉の紋所。一六 絹糸の紐で平たく組んだ帯。一七 万治・寛文頃に流行した旗本奴よしや組の伊達風俗を「よしや風」「よしやがかり」といった。白柄の長い大小を反りを返して差した。一八 衆道の通人らしい風俗。一九 武芸者。二〇 だますのに対しては防ぐ手段がないとの意。二一 春日明神の春日祭は、二月と十一月の両度あり、その二月七日から十四日までの間に若宮で催された薪能(猿楽伝記)。二二『大蔵大夫家系図』によると、元禄十一年(一六九八)五月に六十二歳で没した大蔵大夫経喜の養子経通は若名求馬とあるが、時代が合わない。義父の経喜であろう。二三 世阿弥作の謡曲。四番目物。左衛門家次が七歳の時、天狗にさらわれた一子の花月にめぐり会うという筋。二四 春日明神の背

その名隠れもなき、丸尾勘右衛門といふ[一九]兵法づかひ、古今類なき少人好き、さま〳〵文書きて、[二〇]だますに手なし。夕暮をこがれ、あけの日は[二一]御社の能はじまつて、[二二]大蔵求馬、[二三]花月になつての姿、その美しさ、恋といふくせもの、諸人心を懸けざるはなし。

　次の日は、空曇りて、[二四]傘をさそなら春日山さびしく、昼の過ぎより[二五]蠅頭の釣針もたせて、[二六]岩井川の汀に、[二七]柳鮠など手もと隙なく[二八]かく時、[二九]郡山の家中に、多村三之丞といへる情少人、折節この水上に来て唾をはけば、川下の水手にむすび、雫もらさず咽筋をならすを見て、ちかう立ち寄り、「それにてお手水御つかひ候事おもひもよらず、無礼なる物をはき候。全く御許し候へ」と申せば、「只今の御つばき、[三〇]行く水につれて泡の間もなく消ゆる命と惜しみ、すくひあげて呑みつる物を」と申す。

　三之丞うち笑ひて、「人によろこばしたまふを、あだには聞かず」と云ひ捨てて、岸根づたひに帰り姿、素面自然の美男にして、又云ふべからず。「秦の始皇帝に、[三一]巫山の神女、

ばかり、いろいろと恋文を書き送っていた。薪能の始まる夕暮れを待ち焦れていたが、あくる日は春日神社の能が始まって、大蔵求馬が花月に扮したその姿の美しさ、恋には誰しも目がくらむもので、思いをかけない人はなかった。

　つぎの日は空が曇って、春日山も雨もよいでもの淋しい風情であった。勘右衛門は昼過ぎから作り物の蠅をつけた釣針を下男に持たせて岩井川に出かけ、汀で手元せわしく鮠を引っかけていると、郡山の家中の多村三之丞という若衆が、折から川上にやって来て唾を吐いたので、川下の水を手ですくい、雫も残さずごっくりと飲みほした。三之丞はそれを見て近寄り、「そこでお手水をおつかいなさるとは存じませず、失礼なものを吐きました。まっぴらお許しください」と言うと、「ただいまの御唾が、流れる水につれて泡と消えてしまうのが惜しくて、すくいあげて飲んだのです」と言う。

　三之丞はにっこり笑って、「人の喜ぶ事をおっしゃって。聞き流しにはいたしません」と言い捨てて、岸辺伝いに帰って行った。そのつくろわない姿は、生れながらの美男で、非の打ち所がない。「秦の始皇帝に巫山の神女が唾を吐きかけると、その跡が痣となって残ったとい

後の連山。中央正面は三笠山で、北は若草山、南は高円山に続く五峰から成る。社殿は三笠山の山腹にある。「傘をさそなら」は三笠山にかかる。
二五 疑似餌の一。釣針の先端に蝿の形を模した疑似餌をつけた釣針。
二六 春日山の南端の高円山の南麓を西流し、奈良市の南郊をへて佐保川に合流。 二七 硬骨目コイ科の鮠は、はえ・はや・やまべ・あかもちなど地方によって呼び名が違う。柳鮠も柳葉形による名であろう。 二八 疑似餌で引っかけて釣り上げる時。 二九 奈良県大和郡山市は郡山藩の城下町。大坂夏の陣後、水野勝成が封ぜられて六万石、元和五年(一六一九)松平忠明が入部して十二万石、寛永十六年(一六三九)本多政勝が入部して十五万石、延宝七年(一六七九)松平信定が入城して治世六年であった。 三〇「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」(方丈記)の文意をふまえている。 三一 楚の襄王と巫山(中国四川省)の神女が契り、「妾は朝に雲となり、夕に雨となる巫山の神女なり」といった故事は、楚の宋玉の「高唐賦」に見える。秦の始皇帝との話は作為であろう。

つばきをはきかけしに、その跡瘤となつて残れり。今又このつばき、我が口中に消えずあつて、甘露不断の楽しみもがな」とつぶやき、御跡したひ行くに、西は[一]秋志野や、外山に入る日、はや人の顔も見えずなりにき。

頃は二月十二日の夜道、宵は月見る心当ても違ひて、春も時雨めきたる雲の、生駒・葛城に立ち重なり、「今にも袖やぬれん」と、郡山に道いそぎしに、里の[二]水橋あやふき渡りて、荻の焼原に去年の苅蕪、足をちぢめ行くに、角落として、[三]きやうとき鹿の通ひ路、[四]火ともし狐・狼の臥し所、これには怖ぢず、[五]浮世の人の驚く煙立ちて、[六]隠坊の住めるひとつ庵を詠め過ぎ、[七]大安寺といふ里近くなりて、脇道より挑灯持つて、[八]取りまはしのかしこさうなる小者、頭巾引きかぶりて先に立ち行くを、幸ひの光もとめて、友とせし[九]針立ての道仁も思ひよらざる機嫌、「余所の小歌、こちの花見の肴となる」と、ささやく程もなく、郡山につきて、なほ[一〇]屋形町の末、わが住む門前まで来て、内に入るを見届け、かの男あとへ帰りぬ。

それまでは何の心もつかざりしが、三之丞、「不思議なる

う。今またこの唾が、自分の口中に消えずに残って、常に甘露を含んでいるような楽しい思いはできないものか」とつぶやきながら、勘右衛門が跡を慕って行くと、西の方の秋篠村に近い山に日が沈んで、もう人顔も見えなくなった。

二月十二日の夜道で、宵には月も見られようという心当てが違って、春というのに時雨めいた雲が、生駒や葛城の山々に立ち重なっている。「今にも袖が濡れそうだ」と、三之丞は郡山への道を急いだ。村はずれの崩れかかった橋を渡り、荻の焼原に残っている去年の切り株を避けながら行くと、角を切り落とされておかしな恰好になった鹿の通り道や、火をともす狐や狼の巣があったが、それは別に恐ろしくもなかった。浮世の人々の驚く火葬の煙が立ち上る隠坊の一軒家を眺めながら行くうちに、大安寺の近くまでやって来ると、脇道から提灯を持って、はしこそうな下男が頭巾をかぶって先に立って行く。幸いその光に足もとを照らされて行くと、三之丞が供に連れていた鍼医者の道仁も、思いがけず上機嫌で、「よその小唄が、こっちの花見の肴になるようなものです」とささやいているうちに、郡山に着いた。屋敷町の末にあるわが家の門前に来て、三之丞が内にはい

一 秋篠。奈良市平城の秋篠寺のある地。
二 河橋。
三 「けうとき」のなまり。うとましい。

四　狐火をともす狐。狐火は俗説。
五　人焼く無常の煙。
六　隠亡とも。火葬を職とする者。
七　奈良市にある真言宗の寺。南都七大寺の一。もと聖徳太子の創立で、熊凝寺という。
八　身のこなし。
九　鍼医者。
一〇　武家屋敷町。

一一　諺「恋は闇」。恋すると理性を失うの意。



若衆田村三之丞は、今日出会った兵法者丸尾勘右衛門に郡山まで送られた後、奈良へ帰る勘右衛門を再び追って出会い、手をとり真情を示す。奈良に近いことを示すべく鹿二頭が描かれている。

事かな」と、まづ二親に目見えして、「薪見物いたし、只今罷り帰る」と申し捨てて、追つかけ行くに、やう〳〵挑灯に近付き、見るに葉菊の紋所なり。さては昼見し侍をおもひ合はせ、忍びて送りけるに、奈良もちかくなりて、おのづから蠟燭たち消え、心は闇となりぬ。
「かく形を替へて見送るとは、よもやお若衆は知らせたまふまじ」といふを聞きて、「その御心入れ存じたればこそ、はるばる送りかへす」と、手をとらへてしめたまへば、勘右衛門夢のここちして、しばしは物をもえいはず、立ちすくみて、

るのを見届けて、その下男は引き返して行った。
　三之丞はそれまで何も気づかなかったが、「どうもおかしい」と思い、まず両親に逢って、「薪能を見物いたしまして、ただいま帰りました」と挨拶しておいて、下男の跡を追いかけて行った。ようやく提灯に近づいて見ると、葉菊の紋所がついている。さては昼間逢った侍だと思い当り、こっそりと送って行ったが、奈良も近くなって提灯の蠟燭も消えてしまい、二人とも心は恋で闇になってしまった。
　「こんなに姿を変えてお見送りしたとは、よもやお若衆はご存じあるまい」と、勘右衛門が言うのを聞いて、「そのお心を存じたればこそ、はるばる送り返したのです」と、三之丞が手を握り締めると、勘右衛門は夢心地になって、しばらくは口もきけず、立ちすくんでいたが、「それはほんとうでございますか。ありがたいお心です」と言い、変るな、変るまい、忘れるな、忘れまい、と押し問答しているうちに、西の京の八つの鐘が鳴りだした。数えてみるとまだ夜半なので、「しみじみと話して、明け方に帰りましょう」と、三之丞は早くも名残を惜しむのであった。「今夜ばかりではありません。ご両親の手前もどうかと思います。私を

「それは本でござりますか。ありがたき御心ざし」、かはるな、替はらじ、忘れな、わすれまい、といふうちに、西の京[一]の八[二]つの鐘、かぞへて、まだ夜ぶかなれば、「しめやかに語りて、明方にかへらん」と、はや名残を惜しむ。「これにかぎらず。まづ御首尾もいかがなり。我おぼしめさば、重ねての御情」と、なんの事もなう、それより又郡山へおくる。

道すがらの誓ひに、「人の命は知れぬ物ぞかし。八重桜まではまたじ。初桜の咲く頃、いつも見にまかる事あり。弥生[三]ひとへ二日には、かならず」の約束ふかく、別れての朝風、[四]着なれざる木綿袷の袖をもりて、かりそめの鼻声、次第に重りて、間なく二月二十七日の夜、春日野の土となりぬ。

三之丞は、知らず尋ね来て、これを嘆くにかぎりしられず。せめてはゆかりを聞けども、遠国の人とて、たれ跡とぶらふ方もなしとや。「その住みたまへる所は」と聞くに、むかし連歌師紹巴[五]の庵の跡とて、南市[六]といふ片陰に、檜木[七]の生垣物ふりて、下地窓[八]より供部屋をのぞけば、まだ七日もたたぬに、小者集りて、二文四文に読みうつ[九]など、扇拍子に声を惜しま

思ってくださるなら、もう一度お逢いください」と勘右衛門は言って、その夜は話をしただけで、それからまた三之丞を郡山へ送って行った。

その道すがらの誓いに、「人の命ははかないものです。八重桜の咲く頃まで、とても待ってはおられません。いつも初桜を見に行きますので、三月の一日か二日には必ず」と勘右衛門はかたく約束して三之丞と別れた。その翌朝、昨夜着なれない木綿の袷を着たためにひいた風邪がしだいに重くなって、まもなく二月二十七日の夜、春日野の土となった。

三之丞はそれとも知らず訪ねて来て、ひどく嘆き悲しんだ。せめて親類の人にでも逢いたいと思ったが、遠国の人なので、誰も跡を弔う者がないということであった。「その住んでおられた所は」と聞くと、昔連歌師の紹巴が住んでいた庵の跡で、奈良の南市にあるという。訪ねてみると、生い茂った卯木の生垣に囲まれていた。下地窓から供部屋をのぞいてみると、亡くなってからまだ七日もたっていないのに、下男どもが集まり、二文・四文と賭けたカルタをめくっている。かと思うと扇拍子で声をはりあげて、「昔用明天皇は、玉代の姫を恋いわびて」と、古浄瑠璃を語っている者もあり、ま

一 奈良の都(平城)の中央を南北に貫通する朱雀大路の西の右京、現在薬師寺のあるあたりをいう。
二 午前二時頃。
三 「ひと日」のなまり。
四 下男に変装したため。
五 里村紹巴は奈良の人で、十三歳で興福寺明王院の喝食となり、後、上京して里村昌休に従って一家をなした。桃山時代には天下七名人の一人に数えられ、連歌界を統率した。慶長七年(一六〇二)四月十二日没。七十九歳。
六 奈良市南市町。
七 卯木。高さ二メートルほど。五、六月頃、白花を開く。
八 壁の一部を塗り残し、下地の竹をあらわして、そのまま格子にした窓。
九 読みガルタを打つ。読みガルタは舶来のウンスンカルタから転化しためくりガルタで、札数四十八枚。「読み」は数えるの義。

ず、「[一〇]むかし用明天皇は、玉代の姫を恋ひわびて」とかたるもあり。又は[一一]宇和の郡の魚焼くかをり、「いかに下々なればとて、主の別れを知らざるや」と、断りなしに枝折戸をあけて入るに、床のかた脇に土器にもりて煙絶えず、しをれぬ樒を立てて、春雪道泉と戒名、ま見えし人はこれかと、袖顔に押しあて、しばし枕のあがらざりし所に、色よき男、[一二]うひかむりして間のなき風俗、白むくに浅黄の上下、袂しをれて、仏棚に拝して、はるか引きさがつて座して、愁ひにしづむありさまを見て、「[一三]そつじながら私は」と申し果てぬに、「三之丞殿にてましますか。勘右衛門息引きとるまで、御事のみわすれず、郡山へ送りて送られとばかり。つひにその身は野送りのかなしさ。夢ではないか。夢であるかな。夢とはおぼしめさずや」と、なげきかけてなげかせ、諸声をあげて、互に[一四]半時あまりの泪、軒もる玉水のごとし。

やう／＼春の日も影絶えて、雨戸をさす[一五]火宅の車の音におどろき、「かねて浮世とはおもひながら、この本意なさ、何ながらへて物うし。[一六]四十九日行く[一七]死出の麓にては追つ付くべ

たは伊予の干魚を焼いている者もある。「いくら下々の者だからといって、主人の死をなんとも思わないのか」と、三之丞が無断で枝折戸をあけて座敷に上がると、床の片脇に抹香を盛った土器があって、煙が立ち上っている。青々とした樒を供えた位牌には、春雪道泉という戒名がしたためてあった。お目にかかった方はこれであろうと、袖に顔をおし当てて、しばらくうつぶしている所へ、元服してまもない様子の美男がやって来た。白無垢の着物に浅黄の裃をつけ、涙ながらに位牌を拝み、はるかに引き下がってすわり、愁いに沈んでいる。三之丞が、「失礼ながら私は」と言い終らないうちに、「三之丞殿でございますか。勘右衛門は息を引きとるまで、あなたの事だけを忘れず、郡山へ送って送られてとばかり申しておりましたが、その身はついに野辺に送られてしまいました。この悲しさは夢ではないでしょうか。夢なのです。夢とはお思いになりませんか」と嘆きかけて三之丞を嘆かせ、声を揃えて半時あまり泣いた涙は軒の雨だれのようであった。

ようやく春の日も暮れて、雨戸をしめる車の音に驚いた三之丞は、「かねがねはかない浮世だとは思っていたが、このあっけなさはどうであろう。これ以上生

一〇 用明天皇と豊後のまのの長者の娘玉よの姫との恋物語の初見は、舞の本「烏帽子折」の中の挿話であるが、貞享以前に古浄瑠璃「やうめい天わう」があった。現存の刊本は元禄四年(一六九一)板であるが、題名・書形など古風なので、再刻本と考えられる。

一一 伊予国(愛媛県)の古郡名。宇和郡産の干魚を焼く匂い。

一二 初冠。元服。

一三 卒爾。突然で失礼ですが。

一四 今の約一時間。

一五 火宅は衆苦充満の現世を火災の家にたとえた仏教語。車の音は雨戸を受けた。

一六 人が死んで次の生を受けるまでの間。中有という。その間、七日ごとに法事を行う。

一七 死出の山の麓。死の苦しさを山にたとえた仏教語。

一 邪見の刃ともいう。自他を害する邪見な心をたとえた語。ここは具体的には脇差のこと。
二 あたりにいる人。後文にいう左内。
三 三笠山のように頼もしい後楯になってもらおうと。
四 道理を尽して。
五 よくよく納得して。
六 恋道は和訓の恋路に同じ。衆道の契りを結んでください。

し」と、心の剣をぬきて、見えわたりたる人に、「跡たのむ」といふ。

　飛びかかつて自害をとどめ、「我こそとくに死ぬべき身なり。子細は、前髪立ちの時、五とせあまりの念比、なほ年たけても、後立てには三笠山とも思ひしに、この情なき事、左内が心と引きくらべて見たまへ。殊に最後の時、『世の誰あつて香花手向くるかたもなし。我おもはば命ながらへ』との一言背かず、すゑ〲は出家にもなりぬべき心ざしなり。申しても御方には、かりそめの御言葉をかはしたるべき分なれば、逢はぬむかしと、何事も捨てたまへ」といふ。

「そなた様こそ、年頃心も残らぬ枕物語の、ありつくしての今なり。我は一夜もかたらぬ先の物うさ、これまでの露命」とおもひ切るを、左内、様々義理をつめてとどめければ、三之丞も至極して、自害をおもひとどまり、「この上はこなたに、勘右衛門殿となりかはつて、それがしと恋道のちなみなしてたまはれ」といふ。左内申すは、「それまでもなし。向後あだには存ぜず」といふ。

きながらえてもつらいだけだ。四十九日かかるという死出の山の麓で、あの方に追いつこう」と言って脇差を抜き、あたりにいる人に、「あとを頼む」と言う。

　左内というその若者は、飛びかかって自害をとめ、「私こそとっくに死ぬはずの身なのです。というのは私がまだ前髪立ちの時、五年余りもかわいがっていただき、なお元服してからも、三笠山のような頼もしい後楯になっていただこうと思っていましたのに、こんな情けないことになったのです。この左内の心と引き比べてごらんなさい。ことに最期の時、『この世に誰ひとり弔ってくれる者もない。自分を思ってくれるなら、生きのびてくれ』というお言葉に背かず、末々は出家にでもなろうと思っている私です。何と言っても、あなたはちょっとお話しなさっただけですから、逢わぬ昔と思い切って、何事もあきらめなさい」と言う。

「あなた様こそ、長年思い残すこともないほど仲よくなさったうえでの今なのです。私は一晩もかわいがっていただかないのですから、悲しくてなりません。これまでの命です」と思い切るのを、左内はいろいろと道理を尽して説得したので、三之丞も納得して自害を思いとどまった。「こうなったからは、あなたが勘右衛門

「その分にてはうれしからず。是非ねん比」といはれて、いやがならず申しかはして、さて、夜もすがら、左内、勘右衛門になれそめし以前をきくに、「堺昌雲寺[七]の庭をここにうつして、蘇鉄植ゑ替へらるる日、これなる岩に腰かけながら、[八]まかせ水を手に請けて、あまりをうしろに人のあるとも知らずまけば、『ぬれたい折節にかたじけない』と、声ひくうして言はれし勘右衛門殿いとほしく、その後いつともなくたはぶれて、世のそしりは大事か、親仁神前[九]の御番をかんがへ、遠き高畠[一〇]より忍びて通ひしに、うれしき事はわすれもやらず、風ふきて雪の夜、かならずまゐるのよし、昼より文つかはしければ、我が家居近くむかひに来たりたまひ、肩車にのせて、懐より具足着たる金平[一一]をたまはりける。道すがら切り合ひ事して、その夜は勘右衛門殿寝姿を馬にしてのれば、よき御大将と申されしが」と語り寝入りに、聞く人もともに同じ鼾をあらそふ。

　かかる時、勘右衛門現のかたちをあらはし、「このたび二人が嘆きの中に、兄弟分のかたらひ、うれしき事にぞありけ

殿になり代って、私と衆道の契りを結んでください」と言うと、左内は、「それまでしなくてもよいでしょう。今後あなたをおろそかには思いません」と言う。「それだけではうれしくありません。ぜひねんごろにしてください」とせがまれて、左内もいやと言えなくなって、三之丞と兄弟分となり、その夜は一晩中、三之丞は左内と勘右衛門が親しくなるまでの事を聞いた。「堺の昌雲寺の庭の造りをここに移して、蘇鉄を植え替えられた日のことでした。あそこにある岩に腰かけながら、筧の水を手にすくって飲み、後ろに人がいるとも知らず、余った水をまくと、『濡れたいと思っていた折から、かたじけない』と、低い声で言われた勘右衛門殿がいとしくなって、その後いつとなくねんごろになりました。世間のそしりなどなんとも思わず、親仁が春日神社へ宿直する日を見合わせて、遠い高畑から忍んで通って来ました。うれしかった事は忘れもしません。風の吹く雪の夜の事でした。必ず今夜うかがいますと、昼のうちに手紙を差し上げておきましたところ、わが家の近くまで迎えに来てくださって、私を肩車に乗せ、懐から鎧兜を着た金平人形を出してくださいました。道すがら肩の上で人形に斬り合いをさせ

七 大阪府堺市大町東四丁目にある臨済宗祥雲寺。沢庵に帰依した町人谷正安が寛永二年(一六二五)に創建、沢庵開山となる。寺庭の数十株の蘇鉄は妙国寺のものとともに有名。一部現存。

八 「まかす」は水を引くをいう。筧などによる引き水。

九 左内は春日禰宜の息子。春日神社の夜勤。

一〇 現、奈良市高畑町。春日野の南方低地。春日禰宜の宅地であった。

一一 近世初期に行われた勇壮な金平浄瑠璃の主人公の一人である坂田金時の子の金平。剛勇無双。

一 公式の記録によると、郡山藩が西鶴当時十九万石に近いのは、寛永十六年(一六三九)から延宝六年(一六七八)まで在城した本多氏十五万石である。
二 額を広く剃った鬢つきの「後下り」(三五七ページ注三)は当時の流行であるが、それが下がりすぎているとの意。
❖これは町人の衆道で、男色好きの伴の市九郎という津軽町人を見そめた仙台の薬屋の一子十太郎が、病床にありながら、「からだは宿に、魂は先々につき添ひて、人こそ知らね幻のたはぶれ」をもったという。多分、唐の『離魂記』をなぞったと思われる怪奇譚で、前章と同じパターンである。
三 関東(仙台)の香木のような美少年。主人公は事実伽羅をたしなむ美少年。四 寛文前後、仙台の宮城野名物の萩が一時根絶していたことについては『西鶴語彙考証』(真山青果)に考証がある。西鶴も『一目玉鉾』巻一の宮城野の条に、「今は一本も見えず、広野に小松ばかりありて秋をしらず」といっている。五「宮城野の本あらの小萩露を重み風を待つごと君をこそ待て」(古今)など古歌が多い。六 野遊びの馳走や道具類を入れる長持。七 平安末の歌人橘為仲が、陸奥守の任果てて都へのぼる時、十二棹の長櫃に宮城野の萩を入れて持参した話は『無名抄』に見える。八 加賀国(石川県)名産の菅笠。『我衣』に天和前後より流行とある。

る。三之丞面影、[一]十九万石の下に似たものもなし。されども、郡山風にて、[二]鬢つき下がりすぎて見ぐるし。左内、何と思ふぞ。すこし後をたてん」と、鏡にむかはせ、「このくらゐが良いか」といひ捨てて、そのまま夢はさめける。あたりに手だらひもなく、剃刀もなくて、月代はまことに剃りて残せり。夢はゆめながら、これは不思議ぞかし。

[三]東の伽羅様

[四]萩咲きし宮城野もむかしにかはり、今は一本も見えずなりて、世に[五]古歌ばかりのこれり。[六]野懸け振舞の長持は、[七]都への取りのこし十二さをの内かとおもはる。

折節、青み立ちたる草ばへに、たんぽぽ・土筆のをかしげなるを摘む人は、[八]加賀笠ふかく、[九]袖下ながく、後帯のやうすは、いづれも念者のありさうに、面影に立ちどまりて見れば、幕のうちより老女出て、「これおふじ様、およしさま」と、[一〇]呼ぶ声きて、「さては人の小娘め」と、つばきばきして行

まして、その夜は勘右衛門殿の寝姿を馬にして乗りますと、立派な御大将と申されましたが」と、左内が語り寝入りすると、三之丞も一緒に鼾をかきはじめた。

ちょうどその時、勘右衛門が生きていた時の姿で現れて、「今度二人が悲しみのうちに、兄弟分の契りを結んだことは、まことにうれしい。三之丞の姿は、郡山十九万石の家中に似た者もない。だが郡山風で鬢が下がりすぎて見苦しい。左内、どう思うか。少し後ろを上げよう」と言って、三之丞を鏡に向かわせ、「このくらいがよいか」と言ったかと思うと、そのまま夢は覚めた。あたりに手盥もなく、剃刀もなくて、月代はほんとうに剃ってあった。夢の中の出来事ではあったが、これは不思議なことである。

東の伽羅様

萩の名所の宮城野も、昔と変って今は一本も見当らなくなり、萩を詠んだ古歌だけが残っている。野遊びの馳走を入れる長持は、橘為仲が都へ帰る時、萩を入れて持参したという十二棹の長櫃の一つではないかと思われた。

折から青みがかった草むらに萌え出ている風情のあるたんぽぽやつくしを摘ん

九 振袖・後帯、いずれも前髪立ちの若衆の服装に類似。
一〇 唾吐き。人を忌み嫌うしぐさ。「つばけはきする姿見の山」(飛梅千句九　友雪)。
一一 仙台市の中心部で、国分町・南町の一路と、大町・新伝馬町の一路の交叉点。現、仙台市青葉区大町一丁目。藩祖貞山公が、芭蕉という虚無僧を忍者として用い、これに四辻の地を賜りしゆえの名という。
一二 香をかぎわけること。
一三 明暦から万治までの仙台藩主は忠宗の次子の伊達綱宗、寛文から享保までの藩主は伊達綱村。
一四 貴人の所有物。
一五 伊達家所有の伽羅の銘は白菊でなく、後出の柴船である。近世初期、長崎へ船載の伽羅(蘭奢待)の大木を、細川三斎と伊達政宗が切半して入手し、細川家では初音、伊達家は柴船と命名して秘蔵した。のち寛永三年(一六二六)九月六日、三斎の嫡子忠利が、後水尾帝に初音を献上した時、帝は「たぐひありと誰かはいはん末匂ふ秋より後のしら菊の花」という和歌によって、白菊と名づけられたという(翁草、牛馬問)。
一六 末枯り。余香。
一七 焼いて匂いを衣服に留める香木。
一八 伊達家秘蔵の柴船は、「世の中のうきを身につむ柴船のたかぬさきよりこがれつつ」の和歌による命名なので、「たかぬさきより焦れて」といった(翁草)。



仙台の薬屋小西十助の一子十太郎が、津軽の町人伴市九郎を見染め長刀の鞘をはずして狂乱。振袖にすがって鎮めようとしているのは姥、山伏善見院の覚伝坊が加持する。右上の両親はなすすべもない。

けば、仙台の城下に入りて、芭蕉[一一]が辻といふ所の町はづれに、小西の十助といへる薬屋のありける。

内へのかよひ口の暖簾もれて、一炷のかをり通りがけに聞[一二]くに、おそらくは、[一三]この国の守の御物[一四]、白菊[一五]にもおとるまじきすがり[一六]なり。留める袖ゆかしく、棚さきに立ちより、「留[一七]木などを調へたし」と、云うてたよりて、「奥ふかく聞こゆる木をも所望」といへば、「悴子がたしなみ伽羅なれば、おもひもよらず」と、親仁つれなき返事に、たかぬ[一八]さきより焦れて、柴船のしばし休らうて行く。

でいる様子は、加賀笠を深くかぶり、袖の長い着物を着て後ろ帯を締めている。その恰好はみんな兄分でもありそうな若衆に見えたので、立ちどまって見ていると、幕の中から老女が出て来て、「これおふじ様、およし様」と呼び立てたので、「さては人の小娘か」と、唾を吐いて行ってしまった男がいた。仙台の城下にはいると、芭蕉が辻という四つ辻の町はずれに、小西の十助という薬屋があった。

奥への通い口の暖簾から香木の香りがもれていた。男が通りすがりにそれをきくと、ここの国守のご秘蔵の白菊にも劣るまいと思われるほどの余香であった。この香を袖に留める人奥ゆかしく、店先に立ち寄って、「伽羅など買いたい」と言ってたより、「奥深くからもれてくる伽羅もいただきたい」と言うと、「悴がたしなんでいる伽羅ですから、お売りするなど思いもよりません」と親仁はつれない返事をしたので、男は名香柴船のいわれのように、炷かぬ先から持主を焦れて、しばらく店先に休んでいた。

この男は伴の市九郎という津軽町人で、まるっきりの男色好きであった。今度江戸を志したのも、近頃堺町で評判の高い若衆方出来島小曝を恋い焦れて、草履取りの作兵衛へ知人から紹介状を貰い、男

この男は伴の市九郎とて津軽町人、一念に若色あさからぬすき人、この度の江戸心ざしも、堺町に近年の出来嶋、見ぬこざらしをこがれて、奴作兵衛がもとへ、しるべの方より状を付けられて、若道ぐるひばかりにのぼる。かたへにはまれなる風俗なり。

このありさまを、十助が子の十太郎見初めて、「我かく前髪のさかりといふとも、五とせまでの花にもあらず。額に毛貫のかねに、散るべきもやがてなり。今まで数百人のかよはせ文つひにあけず、諸人に情しらずと名に立つも、気に入りたる兄分見えわたらぬゆゑぞかし。今の男この心入れをふびんとおもはば、身にかへての念比したし」と、俄に口ばしつて乱気の眼ざし、小脇に手飼ひのちんをいだき、刃物の鞘はづして持ちつれば、人あたりへ近づかず。

やう〱乳まゐらせたる姥、命を捨ててすがりつき、「今の旅人をよびもどして、御願ひのままになる事」と申せば、しばし心のしづまる時、旦那山伏、善見院の覚伝坊を頼み、壇をかざり鈴のひびき、錫杖の音あらけなく加持する。

色ぐるいのためだけに出かけたのであった。田舎には稀な伊達男である。

この様子を十助の子の十太郎が見そめて、「自分は今が若衆の花盛りといってみたところで、あと五年と続くわけではない。やがて角前髪に毛貫を当てるようになり、またその前髪を剃り落とす日も近い。今まで数百人から恋文を貰ったが、一遍もあけて見たことがない。人々に薄情者と噂されているのも、気に入った兄分が見当らないからなのだ。今の男がこの気持をかわいそうに思ってくれるのなら、命がけで兄弟分になりたい」と、にわかに口走って、気が変になったような目つきとなり、小脇にかわいがっている狆を抱え、長刀の鞘をはずして持ったので、人々はこわがって近づかない。

ようやく乳を飲ませた乳母が命がけですがりつき、「今の旅人を呼び戻して、お願いのとおりになりましょう」と言うと、しばらく落ち着いたので、ふだん信仰している善見院の覚伝坊という山伏を呼んで来た。護摩壇を用意し、鈴や錫杖を鳴らして、祈禱を始めた。

そもそもこの少年の生立ちは、十助がこの家の養子になってから三十五年間、六十余歳まで跡継ぎのないことを悲しみ、躑躅が岡の天神宮に、夫婦が参籠した結

一 男色。

二 旧、日本橋区内の町名。江戸歌舞伎座の始まりである猿若座、後、改めて中村座が慶安四年（一六五一）に禰宜町から移った。

三 「出来嶋、見ぬこざらし」は、まだ見ぬ江戸中村座の若衆方出来島小曝。→役者一覧。出来縞・晒とかけた。

四 奴は家の子、すなわち下僕の意。小曝の草履取り作兵衛。上方にては金剛という。

五 かたわき。地方。

六 半元服（角前髪）の剃り込んだ額の角に生える毛を抜くためにあてる毛貫金に鐘をかけ、花が散ると続けたレトリック。

七 帰依（信仰）している山伏。

八 仏陀の加護保持を祈禱する秘法。

そも〳〵この少人の出生は、十介[九]ここに入聟して三十五年、今年六十余まで屋継のなき事をなげき、躑躅が岡[一〇]の天神に、夫婦籠りての申し子[一一]、ある夜の夢に、神前の紅梅の梢より、緋縮緬のふんどし一筋落ちかかつて、胎内にやどると見しが、あけの日より青梅[一二]をくひたがりて、月日をかさね、この若衆を産み出す。

その後名誉[一三]は、五歳の時、習はぬ大文字を書きて、寺社の絵馬に懸け奉る[一四]。これを思ふに、いづみやさよ[一五]筆と同じ。又十三歳の時、夏の夜の短物語[一六]といふ草紙に、逢うて別れを惜しむ、恋無常のさかひを作らるる程のこころから、身の上を覚えず取り乱されしは、よく〳〵の機縁[一七]と、いとしさもまさりて、いろ〳〵いたはれども次第よわりの朝脈[一八]、夕のかしら煎じ[一九]もさらに効かず。大方はかぎりの浮世と極め、経帷子をぬはせ、早桶[二〇]をあつらへ、今宵の知死期[二一]を待つ時、はかなき枕を我とあげて、「うれしや、かのおもひ人、明日の西日の時分、かならずここを通りたまふ。それ是非に留めてあはせよ」といふ。

果、授かった子であった。ある夜の夢に、神前の紅梅の梢から、緋縮緬の褌が一筋落ちてきて胎内に宿ると見たところが、翌日から女房は青梅を食べたくなり、月日がたって、この若衆を産んだのである。

その後不思議なことには、五歳の時に習ったこともない大文字を書いて、寺社の絵馬にお掛けしたことがあった。この事を考えると、泉屋さよと同様の才能である。また十三歳の時、夏の夜の短か物語という物語を書いて、逢って別れを惜しむ恋のはかなさを創作したほどの情け知りであった。それが我を忘れてとり乱されたのは、よくよくの縁があるからだろうと、かわいさもまさって、いろいろ介抱したが、しだいに弱って朝の脈も細くなり、夕方の一番煎じも一向に効き目がない。いずれ死ぬだろうとみんな覚悟して、経帷子を縫わせ、棺桶を注文し、今夜の臨終を待っている時、十太郎はせつない頭を自分で上げて、「ありがたい、思うお方が、明日の夕方、必ずここをお通りになる。それをぜひお留めして逢わせてくれ」と言う。

これもたわごととは思いながら、仙台の町の出口の琵琶首という所に人をつけておくと、思ったとおりその人がやって来た。小西の家に案内し、親仁の十助が

九　前出の「十助」と同じ。
一〇　仙台市の東端、芭蕉が辻からおよそ二キロメートル、今、榴ヶ岡公園になっている。宮城野の西の高台で天神宮がある。
一一　神仏に祈って授かった子。
一二　妊婦は初期に酸味(青梅・夏みかんなど)を好む。
一三　面妖の転訛。不思議。
一四　絵馬の余白に「奉懸御宝前」と書く。
一五　未詳。少年少女の能筆の記録はままある。『摂陽奇観』寛政八年(一七九六)四月二十四日の条に「坂町天神にて金屋永次郎といふ四歳の男子能筆にて文字を書く」。また文政十年(一八二七)八月二十二日の条に「江戸芝切通医師山野辺鮫世娘鯤女、十三歳能書なり」など。
一六　御伽草子の男色物『秋の夜の長物語』のもじり。
一七　仏教語。機会と因縁。
一八　午前中は脈搏が平静で診脈に適当なので、江戸時代の医者は午前中に病家を回診するのを普通とした。
一九　煎薬の一番煎じ。
二〇　即製の棺桶。
二一　死期。臨終。

これもたはごととは思ひながら、町の出口琵琶首[一]と申す所に人を付けて置くに、案のごとくその人に逢ひて、小西の家にいざなひ、十介ひそかに初め終りを語れば、市九郎も泪を流し、「この上に十太郎自然の事[二]あらば、我各々もろともに出家となつて、その跡をとふべし。まづ病人にあひて、今生の暇乞ひ」と枕近くよれば、十太郎忽ち姿もとにかへり、市九郎に心底残さずかたる。

「[三]からだは宿に、魂は先々につき添ひて、人こそ知らね幻のたはぶれ、ことさら平和泉高館[四]の旧跡一見したまひて、光堂[五]の宿坊に一夜を明かしたまふ。旅夜着の下にこがれて、物いはぬ契りをこめ、左の袂に伽羅の割欠けを入れ置きしが、それは」と問へば、「いかにもこれにあり」と取り出し、「不審も今晴れてなほ不思議なり」といへば、「うたがはせ給はぬ印を見せ申すべし」と、かの木の欠けを取り出し、つぎ合はすればひとつなり。炷けば同じかをり、さては、と二世の契約ふかく、十太郎をもらひて、乗懸け[六]二疋の足音いさみて、五つ橋[七]を踏みならし、津軽にくだりけるとなり。

こっそりと一部始終を話すと、市九郎も涙を流し、「このうえ十太郎が死ぬような事があったら、私はもとより皆さんも坊主になって、跡を弔いましょう。まず病人に逢って、この世の別れを」と言って、病人の枕元に近寄った。すると十太郎はたちまち元通り元気になって、市九郎に思っていることをみんな話した。

「体は家におりましたが、魂はあなたのいらっしゃる先々に付き添って、人こそ知らね、幻の情交をいたしました。ことに平泉の高館の旧跡を見物なさって、光堂の宿坊にお泊りなさった夜、あなたの夜着の下にもぐり込み、言葉も交わさず契り、左の袂に香木のひと欠けを入れておきましたが、それは」と言うと、市九郎は、「いかにも、ここにあります」と取り出した。「今までの不審が晴れましたが、それでも不思議です」と言うと、十太郎は、「お疑いにならない証拠をお見せしましょう」と言って、香木のかけらを取り出したので、市九郎が継ぎ合わせてみると、ぴったりと一つになった。炷いてみると、同じ香りであった。市九郎は今こそ思い当り、次の世までもと兄弟分の契りを結び、十太郎を貰って、駄賃馬二匹の足音も勇ましく、五つ橋を踏み鳴らし、津軽へ下って行ったという。

一 現、仙台市大手町。

二 万一の事。死。

三 唐の陳元祐撰の『離魂記』によるか。王宙は、張鎰の女倩娘と相思の仲となり、赴任に際し、倩娘を伴う。後、帰郷すると、家に病臥中の倩娘と、伴った倩娘は一体となったという筋。

四 平泉は岩手県西磐井郡の北上川と衣川の間の町で、藤原氏三代および源義経の遺跡(高館)がある。

五 平泉中尊寺の金色堂の俗称。宿坊は参詣者を宿泊させる寺坊。

六 宿駅の駄賃馬。二十貫(約七五キロ)の荷物をつけて人ひとり乗る。

七 現、仙台市五ツ橋。「五つ橋入組し川の面に橋を五つわたされし」(一目玉鉾 一)。

❖桜田あたりの大名の若殿が疱瘡にかかったが、時鳥の羽で撫でるとよいということになった。冬のことで見当らない。下谷に住む浪人が時鳥を飼っていることがわかったが、あいにくの女嫌い、そこで二人の小姓が命がけでおしかけて二羽の時鳥を貰い、その後二人はまた訪れて、浪人と衆道の契りを結んだという。

八 希有なるもののたとえ。「南都にて六百韵するといへども、雪中の時鳥なり」(俳諧大句数・序)。

雪中の時鳥

越前の国湯の尾峠の茶屋の軒端に、大きなるしやくしをしるして、孫じやくしとて、疱瘡かろき守札を出す。又、河内の国岸の堂といふ観音の場に、いりまめを埋みていのる事あり。げにや人の親の、みつちやづらを嘆かぬはなし。

されども、女の子にはありてもさのみ苦しからず。欲の世の中なれば、それぐの敷銀にて一人もあまらず。ただかなしきは男の子なり。たまく人間の形はかはらず、顔ばかりのおもひどにて、一生のうち執心の懸け手もなく、物参りの道づれにさへ嫌はれ、十五にもたらず脇をふさぎ、世に惜しむ人もなく、常山の花の散るがごとし。あらき風をもよけて、今時の子をそだつるには心をつくし、大方なる姿も見よげになれる。

桜田あたりのさる大名の若殿、六歳にしてもがさの山は富士の気色かはつて、酒湯の跡一面に、薄むらさきの雲かかつ

雪中の時鳥

越前国湯尾峠の茶屋の軒端には、孫杓子といって大きな杓子を描いた看板を掛け、疱瘡の守り札を売っている。また河内国の岸田堂という観音堂では、いり豆を埋めて祈る風習がある。人の親として、子供のあばた面を悲しまないものはない。

しかし女の子には、あばたがあってもさほど困ることはない。欲の世の中のことだから、それぞれに持参金をつけるので、一人もあぶれる者はない。ただ悲しいのは、男の子だ。人間としての形は変らないが、顔だけの傷で、一生思ってくれる人もなく、寺社へ参詣の道連れにも嫌われる。十五歳にもならないうちに元服するのを、誰も惜しむ人はない。目立たない常磐の山の花が散るようなものだ。今時の子を育てる様子を見ると、荒い風もよけるように気を配るので、人並みの姿も見られるようになるのである。

桜田門のあたりのある大名の若殿が、六歳で疱瘡にかかり、今まで富士山のように美しかった姿が一変し、酒湯をあび

九 福井県南条郡今庄町の湯尾峠の茶屋で、疱瘡の守りの杓子を売った。孫杓子という。

一〇 『河内国名所鑑』(延宝七年)には岸田堂とあるが、『椀久二世の物語』上にも「岸の堂」とあるから、当時はなまって呼んだのであろう。大阪府八尾市渋川町にあった岸田堂長楽寺は本尊十一面観音で、「疱瘡を守り給ふと申伝ふる也」(河内国名所鑑)とある。

一一 あばた面。「俗にミツチヤといふは、痘痕のみに限らず、凡て物の浸面なるやうの事をいふ」(俚言集覧)。

一二 持参金。

一三 欠点。

一四 成人の証である元服は、およそ十五歳以上、十八、九歳までの間に行った。一般より早く元服して若衆姿の振袖をぬぎ、詰袖のおとな姿となる。

一五 目立たない常磐の山の花が散るようなものである。

一六 現、東京都千代田区皇居外苑に属し、宮城正門前から霞ヶ関に通ずる桜田門の付近を内桜田といい、特に内桜田の馬場先御門と和田倉御門の東通りを南北に貫く大名小路(現、日比谷通)には、左右に諸大名の上屋敷が並んでいた。

一七 疱瘡。疱瘡の俗称。山とは疱瘡にかかって発熱三日後に瘡が出そろって盛り上がった状態をいう。

一八 疱瘡が乾いた時、温湯に酒をまぜて浴せしめること。その湯。

て、雪見し肌を埋むがごとくなりて、一家中なげき[一]の雨待つばかりの夜、「ほととぎす[二]の羽にてこれをなづれば、御身やすかるべき」と申せば、「その鳥の飛ぶのを見よ」と仰せられける程に、所々に手分けしてたづねけるに、折節の深山木も落葉、池は氷に、水鳥のすむより外はなし。

　ある人、細工[三]を得たるものに、ひよ鳥のおもしろきに指羽[四]などさせて、御目にかけんとする時、出頭家老[五]のもとへ朝夕出入る小田原町[六]の九蔵とて、肴屋のありけるが、まゐりあはせてこの取沙汰を聞きて、「わたくし存じたる方に、幸ひ郭公の候へば、もらひ請けてさしあぐべし」と申せば、「それよ」と九蔵にふかく頼み、その身は御前に出、「只今まことのほととぎすがまゐる」と申し上ぐれば、御機嫌かぎりなし。近所にありあふ人も、「これ珍鳥」と申す。

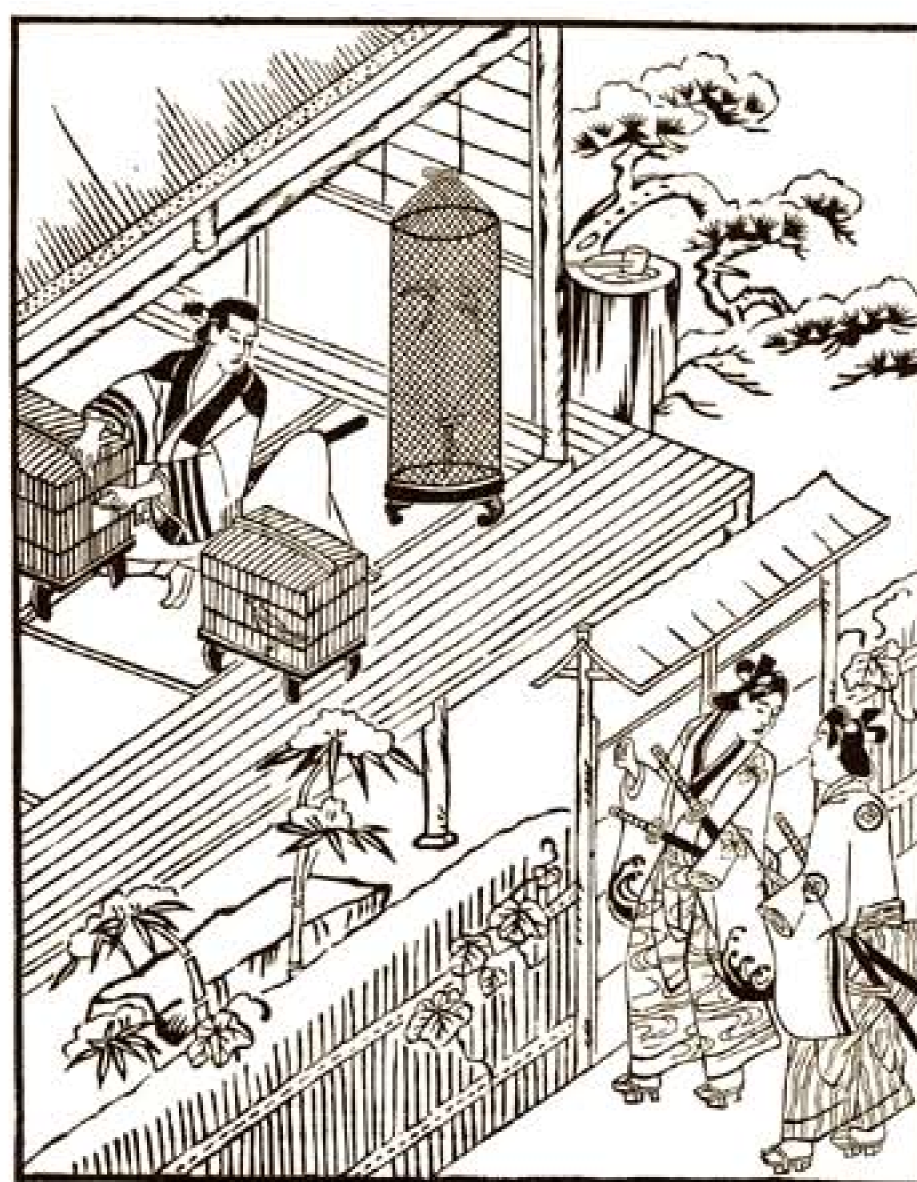
　肴売りは、すぐに小鳥をすかるる牢人の宿へ、すり餌[七]の焼き鮠などはこびて、こと次手に、「近頃御無心ながら、時鳥を一羽申し請けたき願ひあり。私の世悴、疱瘡のまじなひに入る事」をかたれば、「我も人も子のふびんを知らざらんや」

た跡は顔一面に薄紫の雲がかかって、雪のようであった肌はだいないしになってしまった。一家中は悲しみの涙にくれていたが、「時鳥の羽で撫でると疱瘡の跡がきれいになる」と申し上げた者があったので、「その鳥を捜して来い」と殿が仰せ出された。家中の者が手分けして方々を捜し回ったが、折から深山の木々も落葉し、池は氷にとざされて、水鳥が住んでいるくらいのものであった。

　ある人が細工の上手な者に言いつけて、姿のよいひよ鳥にほかの小鳥の羽をさし添えたにせ物を殿のお目にかけようとしていた時、一番家老の所へ、毎日出入りしている小田原町の九蔵という魚屋がやって来てその話を聞き、「私の知っている所に、幸い時鳥がありますから、貰って差し上げましょう」と言った。「それはありがたい」と、家老は九蔵にくれぐれも頼み、自分は御前に出て、「ただいま本物の時鳥がまいります」と申し上げると、殿はご機嫌うるわしく、お側にいた人々も、「それは珍しい」と言って喜んだ。

　魚屋はすぐ小鳥好きの浪人の家へ、すり餌にする焼き鮠などを持参して、話のついでに、「恐縮なご無心ですが、時鳥を一羽譲っていただきとうございます。

一「待つ」は「なげきの雨」と「ほととぎす」の上下にかかる。
二『和漢三才図会』その他に、時鳥の黒焼きの粉を服すると、よく痘瘡の熱毒を治すとある。
三 細工の得意な者。『本朝記聞』時鳥の条に、「ヒヨドリの大きさの如し」とある。
四 他の小鳥の羽をさし添えたにせ物の時鳥。
五 最も勢力のある首座の家老。
六 現、中央区築地六、七丁目。当時は日本橋の本小田原町に対して、築地の小田原町を南小田原町といい、一丁目に魚店があった。
七 小鳥の飼料。はや・鮒などの川魚の肉にいり糠・糝粉・野菜などをまぜてすったもの。


時鳥を飼養している浪人島村藤内宅を訪れた小姓の金沢内記・下川団之介。雪の積っている中、決死の覚悟の二人が振袖姿で足駄をはき、門扉をたたく。藤内は時鳥に餌を与えつつ様子をうかがっている。

と、心よくたまはる。

「かたじけなし」と立ち出しが立ち帰り、「今申せし事は偽りなり。さる御大名様へさしあぐるなり。定めて大分の御拝領あるべし。半分は進上申すべき」といふ。聞きもあへず取りかへして、顔色かはり、朱鞘の反[八]かへすを見て、やう〳〵逃げのび様子を申せば、老中いづれもおどろく。中にも申し上げし人、さしあたつての迷惑、口上よき使ひ番[九]の人橋[一〇]をかくれども、門を閉ぢてさらに渡りあはず。

せんかたもなく時をうつすうちに、「ほととぎす〳〵」と、

八 抜刀の姿勢。腰の刀の反りを裏返す。

九 武家の職名。使者役。口上・人品・骨格のすぐれた者が選ばれた。

一〇 ひっきりなしに使いを出すこと。

私の倅の疱瘡の呪いにぜひともいりますので」と頼むと、「誰しも子供はかわいいものだ」と、気持よく譲ってくれた。「ありがとうぞんじます」と魚屋は出かけたが、また戻って来て、「ただいま申し上げた事は偽りで、さるお大名に差し上げるのでございます。きっと多額のご拝領があるでしょうから、半分は差し上げましょう」と言った。浪人は聞くやいなや、時鳥を取り返して顔色を変え、朱鞘の反をかえしたので、魚屋はほうほうの体で逃げのびて、この事を申し上げると、重役たちはみんな驚いた。中でもこの事を殿に言上した家老は、さしあたって当惑し、弁舌のたつ使者をつぎからつぎへとさし向けたが、門を閉ざして逢おうとしない。

しかたなく時間がたつうちに、若殿は待ちかねられて、「時鳥、時鳥」と仰せられる声が、大殿のお耳にも達し、いろいろと評定が始まった。その時、世なれた明石という奥女中が、四、五人の美しい京都育ちの女中を着飾らせ、早駕籠で浪人宅を訪ねることになった。下谷通をはるばる行くと、さいかち原のほとりに竹藪があり、そこの門をはいると、左の方に草葺きの庵があって、軒には女人堂と書いた曝板の額がかかっている。窓か

若殿御待ちなさるる程に、大殿の御耳にも立ちて、さま〴〵詮議ある時、物になれたるお局の明石といふ人、色よき京女房をかざり立て、四五人早乗物にて所をたづね行くに、下谷通りはるかに、皁角刺原のほとりに、すこしの藪畳、門に入れば、左のかたに草葺きの庵あつて、軒に女人堂としやれ板に書き付け、窓より見こめば、高坊主墨の衣は着ずして、鶏の毛焼きする風情をかし。なほ奥ぶかに又門あつて、新高野山と額をうつて、松の嵐しん〳〵と、心もすみわたる折から、十四五なる前髪の、鬢付け・伽羅の油売るものと見えしが、上気して額に汗などをかき、後帯をそこ〳〵に結びながら、物にこりたる有様して、足ばやに逃げて行く。「これの旦那は」と、問へど答へず。門番の入道よびてあらましを語り、「おくへ案内」とたのめど、「女は、たとへば絵に書きても入るべからず。まして見苦しき抱へ帯、口紅・染め歯、かつて嫌ひなり。ひとりあるおふくろ様の、御見舞ひに御こしましますをも内には入れず、これまで逢ひに出らるるなり。女の取次ぎ申し上ぐるまでもなし」と、断りをもきき入れねば、

らのぞくと、背の高い坊主が衣を脱いで、鶏の毛焼きをしているのは、おかしな眺めであった。なお奥の方にまた門があって、新高野山と書いた額がかかり、松吹く風がしんしんとして、心も澄み渡る折から、鬢付や香木の油を売る者らしい十四、五歳の前髪立ちの少年が、顔は上気し、額に汗をかき、後ろ帯をそこそこに結びながら、こりごりした様子で足早に逃げて行く。それをつかまえて、「この旦那様は」ときいたが、返事もしない。坊主頭の門番を呼んで、あらましを話し、「奥へ取次ぎを」と頼んだが、「女と名のつくものは、たとえ絵姿でもここへはいれません。まして見苦しい前結びの帯を締め、口紅や染歯などうちの旦那は大嫌いです。たった一人のお袋様がお見舞いにおいでになっても、内には入れないで、門口まで逢いに出られます。女の取次ぎなど、とんでもない事です」と、いくら頼んでも受けつけない。明石も手のつけようがなく、「浪人に逢えたら、うまく丸め込んでやったのに」と思ったが、「こんな女嫌いも、世の中にあればあるものだ」と、やむなく屋敷へ引き上げて行った。

　一行がまだ帰りつかないうちに、お小姓組の金沢内記と下川団之介という十六

一 専用の部屋(局)をもつ武家の奥女中。
二 現、台東区の上野広小路。元禄以前は下谷町一、二、三丁目。
三 千代田区三崎町一丁目(旧鈴木町)に「さいかち坂」、同区永田町一丁目(旧井伊屋敷の堀端)に「さいかち河岸」、港区赤坂二丁目に「さいかち横町」などの地名があるが、下谷の「さいかち原」は見当らない。地名ではなく、さいかちの群生している原であろう。
四 竹藪。
五 女人禁制の霊地(高野山など)で、その境外に設けて女子に参籠せしめた堂。下文の破戒僧を諷した。
六 曝板。風雨にさらされて木目の現れた板。
七 背の高い坊主。大入道。
八 女人禁制の意。
九 「香具売り」といい、伽羅・沈香・丁子などの香料を売り歩く美少年で、男色をひさいだ。
一〇 しごき帯をもいうが、ここは前結びの帯。

明石も力およばず、「逢うたらば、天晴言葉[一一]でぬらして」とおもへども、「かかる女嫌ひも世に又あるものかな」と、是非なく屋敷へ帰りつかれぬうちに、

[一二]御小姓組に、金沢内記・下川団之介、十六・十七の器量者なるが、時鳥につき家老の無首尾を見かね、心を合はせ、早馬にてかけ付け、その庵二町ばかりこなたに下人を残し、ただ二人[一三]中門にはしり込み、あらけなくたたきあけて、竹縁にせはしくあがりて、「嶋村藤内殿とは、御自分の御事にて候か。[一四]卒爾ながら御命を、両人の者申し請くる」と申せば、藤内何とも合点はゆかねども、両を見るに花なり紅葉なり。「ああ一度は散らぬ身か。子細を聞くまでもなし。心やすかれ」と、[一五]着籠を三人前取り出し、[一六]大身鑓の鞘をはづし、「今にも追手来るべし。油断」と申せど、両人立ちもなほらずにつこと目まぜすれば、藤内いさむ心をしづめ、「これは様子を聞くべし」といふ。

両人口を揃へ、「いささか左様の儀にはあらず。貴様の御命は我々申し請けければ、この家内みな欲しきままなり」と

歳と十七歳の美少年が、時鳥のことで家老が困っているのを見かねて心を合わせ、早馬で浪人宅へ駆けつけた。その庵から二町ほど手前に下男を残し、二人っきりで中門まで駆け込み、荒々しく戸をたたき開けて、竹縁に駆け上がり、「島村藤内殿とは、御貴殿のことでございますか。失礼ながらお命を我々二人がいただきます」と言うと、藤内は何とも納得がゆかなかったが、二人を見るといずれ劣らぬ花と紅葉の美少年である。

「ああ、一度は散る命だ。事情を聞くまでもない。安心しなさい」と言って、三人前の鎖帷子を取り出し、大身の槍の鞘を払って、「今にも追っ手が踏み込むかもしれない。油断するな」と励ましたが、二人は立ち上がろうともせず、にっこりと笑って目くばせをした。藤内は勇む心をしずめて、「これには何かわけがあろう。聞きたい」と言う。

二人は口を揃えて、「けっしてそんな事ではございません。貴殿のお命を我々がいただいたうえは、この家の中はすべて我々の思いどおりです」と言う。「さてはこの鳥を所望と見えた。最前から命を差し上げてあるからには、なんで惜しかろう」と言って、二羽の時鳥を二人に渡した。「さっそくありがとう存じます」

一一 甘い言葉でたらしこんで。

一二 主君の側近に仕えて雑用・警固に当る若年武士の組。

一三 表門と書院(居間兼書斎)との間にある門。枝折戸。

一四 突然ではあるが。失礼ながら。

一五 鎖帷子。帷子に鎖を綴じつけた防御具。→三四一ページ注三。藤内は、二人から助太刀を頼まれたものと感ちがいしたのである。

一六 刃の長大な素槍。

申す。「さてはこの鳥の所望と見えたり。最前より一命を進じ置きたる上に、何が惜[一]しかるべし」と、二羽のほととぎす両人にわたせば、「さつそくかたじけなし」と、五色の房つきの丸籠をさげ、門外に出、下人をまねき、大挟箱[二]ひとつ藤内にあづけて桜田に帰り、その首尾残る所なし。

その夜また、団之介[三]・内記牢人屋敷へしのび来て、昼の礼儀ただしくのべて、「かりそめながら、これもちなむべき縁なり。向後この両人、お気には入るまじけれども、色道[四]の念比あそばしたまはれ」と申せば、「世にはこなたから心をつくす事のみ。かへつておの〳〵様より、ふがひもなき牢人ものを、人とおぼしめされ、近頃有難く候。しかれどもお二人のうち、いづれとさしづもならず。殊には御心ざしのほども知れがたし。とかくこの儀はお許しあれ」と申す。内記・団之介赤面して、「ふかく思ひ入れ申すしるしには」と、両人一度に肩をぬげば、左のかひなに、団之介は嶋村と入れ瘊子、おなじく内記、藤内と名名字を、「あはぬうちよりこれは」と見する。「それは女のしわざなり。まことは命をも惜しま

と、二人はその五色の房のついた丸籠を下げ、門外に出て下男を呼び、持たせていた大挟箱一つを藤内に預けて、桜田に帰り、万事抜かりなく運んだ。

その夜また団之介と内記は浪人宅へ忍んで来て、昼間のお礼をていねいに述べ、「ふとしたことですが、これもご縁と申すものでしょう。今後は私ども二人を、お気には召さないでしょうが、弟分としてかわいがっていただきたい」と言うと、藤内は、「世の中にはこちらからお願いすることばかりなのに、かえっておのおの方から、このふがいない浪人者を人並みに思っていただき、まことにありがたい次第です。しかしながらお二人のうち、どちらといってお選びすることはできません。ことにお二人のお気持もわかりかねます。ともかくこの事はお許し願いたい」と辞退した。内記と団之介は赤面して、「あなた様を深くお慕いしている証拠には」と言って、二人が一度に肩を脱ぐと、団之介は左の腕に島村と、同じく内記は藤内と入れ墨していて、「契らないうちから、このとおりです」と見せると藤内は、「それは女のする事だ。ほんとうは命も惜しまない人と見定めたうえで契約したい」と言う。

「さては我々が命を惜しむ者とでもお思

一 「惜しかるべき」とあるべきところ。「あらば何か惜しかるべしと」(永代蔵一の二)。
二 衣類・手回り品を納める大形の担ぎ箱。
三 原本は、以後、団之介をすべて「団介」と表記。
四 男色の弟分としてかわいがってください。

ぬ人をこそ、見定めての契約」といふ。

「さては我々一命捨てまじきものとや。その挟箱(はさみばこ)」と申しもはてず、蓋(ふた)をあくれば、この内に三方(さんぼう)ふたつ、[五]紙巻(かみまき)の小脇指(こわきざし)二腰、切腹の用意、「これは」と藤内おどろき、中に飛び入り様子をきく。「これは、最前ほととぎすをもらひうけずは、ただ帰らじ。いさぎよく、[六]死出(しで)の田長(たをさ)の鳥の事にさへ相果つる身にさだめしに、ましてやこのわけに捨て兼ぬべきや」と泪(なみだ)を流す。

藤内あやまつて、かず〳〵の言葉をさげ、「この上は何か二心(ふたごころ)あるべし」と、左右の小指を食ひ切り、ふたりに渡し、情となさけをひとつに合はせ、またためづらしき衆道(しゆだう)の取りむすびぞかし。

男色大鑑　巻二　終

いですか。その挟箱を」と言いも終らず、蓋(ふた)をあけると、中には三方(さんぼう)が二つと、紙巻(かみまき)の小脇差(こわきざし)が二腰(ふたこし)はいっていて、切腹の用意がしてあった。藤内は、「これは」と驚き、二人の間に飛び込んで事情をただすと、「これは、最前時鳥(ほととぎす)をいただけなかったら、無事には帰るまい。潔く果てようと思って用意したのです。小鳥の事でさえ切腹を覚悟しましたのに、まして衆道(しゅどう)に命を惜しみましょうか」と言って涙を流した。

藤内はあやまって、いろいろと詫言(わびごと)を述べ、「このうえは、なんの疑うことがあろう」と、左右の小指を食い切って二人に渡した。情けと情けを一つに合わせて、世にまた珍しい衆道の契りである。

五　腹切刀。俗に九寸五分(くすんごぶ)といい、柄を抜いて白紙で巻き、三方の上に置く。

六　ほととぎすの異称。語義について諸説がある。その一つに、ほととぎすは農繁期によく鳴くので、死出の山から来て農をすすめるゆえに名づくという。

本朝若風俗 男色大鑑

絵入

三

巻三　あらまし

一　編笠は重ねての恨み　契った男の数だけ鍋をかぶって女が神幸に供奉する筑摩祭を見物していた時、叡山根本中堂の阿闍利の寵童蘭丸の編笠の上に編笠をかぶせ、蘭丸に別の念者がいるのを諷した男がいた。井関貞助である。確かに蘭丸には、髪結いの白鷺の清八という念者がいたのだが、衆人環視の中で恥辱を受けた蘭丸は、清八にさりげなく別れを告げ、貞助を打ち果すものの、法師たちに捕えられる。難儀する蘭丸を清八が救い出し、二人は行方知れずになった。三年も過ぎた頃、鎌倉鶴岡八幡で修行者姿の二人が尺八を吹いているのを見たという人がいた。

二　嬲りころする袖の雪　伊賀の国守の小姓山脇笹之介は、すこぶる機転のきく美少年だったが、追鳥狩の折に、伴葉右衛門が庭籠鳥を下男に放させて笹之介に獲らせようとしたことを縁に男色関係を結んだ。西念寺の返り咲きの花見の時、葉右衛門が別の美少年の盃を受けたことを知って嫉妬した笹之介は、次に葉右衛門が訪れて来た時、厳寒の庭に立たせて入れなかったばかりか、雪の降る中で裸になるのを命じたりしてなぶり続けたので、葉右衛門は衰弱して死んでしまい、それを見た笹之介も切腹した。実は、寝間には床に二つ枕、酒盛りの準備までしてあったのだが……。

三　中脇指は思ひの焼け残り　駿河府中の京物棚の一子万屋久四郎と深い念友関係にあった半助は、はかなくも死んだ久四郎の骨を高野山に納めに行く。高野山の千本の槙の奥まで来ると、久四郎の死霊が現れ、中脇差を渡し、「これは自分の棺桶に入れた脇差だが、さる侍の重代の刀を取り違えて入れたもの、すぐ親元に返してくれ」という。府中に帰ると、久四郎の両親が侍から脇差の返還をせまられて難儀をしている最中。半助が脇差を渡し、その時の様子を語ると、皆々驚き、感嘆した。

四　薬はきかぬ房枕　何某の侍従に仕える伊丹右京は、見るもまばゆい美少年、それを慕って母川采女は恋煩いの床に臥す。采女の念者志賀左馬之助が取り持ち、采女は快気する。一方、新参の細野主膳も右京を慕い、茶坊主を仲立ちにして口説くが相手にされず、右京を恨んで討とうとする。寛永十七年四月十七日の夜、右京は逆に主膳を討つが、浅草の慶養寺で切腹を命ぜられる。事情を聞いた采女は、右京切腹の場に駆けつけ、その場で同じく切腹。左馬之助も遺書を残し、初七日の日に自害した。

五　色に見籠むは山吹の盛り　血気盛んな若侍田川義左衛門は、大名の寵童奥川主馬を見染め、後をつける。大名が参勤交代で江戸と出雲を往復する時も後を慕い、三年後には物乞いに落ちぶれて主馬の屋敷の門前に通った。主馬は、刀の試し切りと偽って義左衛門を呼び入れるが、見染めて以後の恋の思いが記された七十枚もの書き物を見て心を打たれる。主馬は、それを持って登城、このままでは不義に落ちるからと切腹を願い出るが、大名は閉門を命ずるのみ。その間に二人は思いを遂げるが、二十日目には閉門も許し、義左衛門を江戸へ送れとのみのありがたい仰せ。義左衛門は、葛城山の近くに隠棲、夢元坊と称して心清く過ごした。

男色大鑑　本朝若風俗　第三巻

目録

一「さなきだに重きが上のさよ衣わがつまならぬつまなかさねそ」(太平記二十一)による。「つま」は夫と褄の掛詞。

二 大小順次に組み入れるようにした鍋。入子鉢もある。

三 比叡山延暦寺の根本中堂の略。→三八一ページ注二。

三　中脇指(ちゅうわきざし)は思ひの焼け残り
　つき臼(うす)はむかしの面影の事
　死んでも女嫌ひの事
　古里(ふるさと)の難儀済ます事

四　薬はきかぬ房枕(ふさまくら)
　念比(ねんごろ)の中立ちの事
　春の夜は闇(やみ)打ちの事
　十六八の花一度に散る事

五　色に見籠(みこ)むは山吹の盛り
　四年(よとせ)の道中やつれの事
　情(なさけ)の命乞ひの事
　訴訟は思ひを種の事

目録終

❖叡山の阿闍梨の寵童蘭丸と、京都三条の髪結い白鷺の清八との衆道という、珍しくも僧房の男色である。中世の稚児物語とちがって、「それがし師の坊の弄びとなる事、これは情の道にはあらず。明暮京より通ふ人こそ、我に独りの念者」と言い、刃傷沙汰におよぶあたり、さすがに

編笠は重ねての恨み

丙午[一]の女は、かならず男を食へると世に伝へしが、それには限らず。近江の国筑摩[二]の祭をみしに、この里の風流女[三]縁なくてさられ、あるいは死に別れ、又は隠し妻[四]の顕はれ、重夫の数ほど鍋を覆かせ、所習ひにて御神事を渡す。

年長けたる女房の姿婀娜[五]しく、しかも面子[六]の何怜[七]しげなるが、鍋ひとつをかざして、これをさへ恥づるもあるに、いまだ脇明[八]の娘、歯も染めず、眉もありながら、大鍋七つ重ね、頭勝ちにして雲踏かりしに、後より母の親手を掛けて、孫を負うて抱きて、独りは手を引きて、はや子供も三人まで持つと見えて、諸人の笑ふもかまはずして、二柱[九]の陰榊の奥にかの面影見残し、心々に帰る野の道筋、紫は色薄く、菖蒲の沢水清く、岸の昼顔も西日に花の艶をうしなひ、人なほ頻りに汗をかなしみ、都の富士[一〇]といふ、時花出の大編笠をかづきつれたるは、叡山の児若衆、これこそ恋の根本中堂[一一]の阿闍梨[一二]の

近世的である。巻二の二の長坂小輪と同じパターン。

一 丙午の年は中世まで陰陽道で災年とされていたが、近世にはいって女の生年に結びつけた俗説が行われるようになった。

二 滋賀県坂田郡米原町の筑摩神社で、四月八日に行われた神事。筑摩の鍋祭という。氏子の女子は交った男の数だけの鍋をかぶって神幸に供奉した。二夫にまみゆることの戒め。祭神は大市比売尊。

三 美女。「上町に名のありし風流女に久米と云へるを」(椀久一世の物語下)。

四 妻は夫に同じ。かくし男。

五 『遊仙窟』の字訓。

六 『遊仙窟』の字訓。「面子逶迤にうまれ付きしとて」(一代女一の一)。

七 『遊仙窟』の字訓。原本「何怜」。「何怜しげなる当世男」(一代女一の一)。

八 十八歳未満の振袖を着た娘。「歯も染めず、眉もありながら」は未婚の証。

九 神殿の奥深く。筑摩神社の祭神は一柱。

一〇 比叡山の異名だが、ここは当時流行の富士山形の編笠の名。→三八二ページ挿絵。

一一 恋の根本と比叡山延暦寺の本堂である根本中堂との掛詞。延暦七年(七八八)伝教大師の建立。

一二 天台・真言・律三宗における高僧の職名。

編笠は重ねての恨み

丙午の女は、必ず男の命をとると言い伝えているが、そうとも限らない。近江国の筑摩の祭りを見ると、その村の美女で離縁されたものや、夫と死別したもの、または密通があらわれた女などに、関係した男の数だけの鍋をかぶらせて、土地の風習で行列に参加させるのであった。

姿が優しくて器量のいい年増女が、鍋一つをかぶって恥ずかしそうにしているのもあれば、まだ振袖を着た娘で、歯も染めず眉も剃っていないのに、大鍋を七つも重ね、頭が重くてよろよろとしているその後から、母親がかかえるようにして、孫を背負ったり抱いたり、いま一人は手を引いている。もう三人も子供をもっているのかと、人々が笑うのもかまわず、神殿の奥深い榊の陰に消えて行った。その姿を見残し、人々がそれぞれに帰る野道には、薄紫の菖蒲が咲き、清らかな沢水の流れる岸辺の昼顔は、西日に色あせていた。なおしきりに汗が出るのをいやがって、今はやりの都の富士という大編笠をかぶった一行は、比叡山の稚児若

夜の友、蘭丸その年もまだ十四とは見る人もなし。美形すぐれて、一山思ひを懸けざるはなし。

同じ院内に掛り人井関貞助、これも児法師にまじりて立ち帰る時、我が笠をぬぎて蘭丸の笠の上にかづけしに、透迤なる風情のをかしげになれる。それも興になして行くに、跡より指をさして、「女のすなる事を、男も念者の数に笠を覆かす」と、慟みつくつて笑ふ。蘭丸立ちとどまり、「我に念友の数ありとや。ここは是非の聞き所」と申せば、「人の口までもなし。下卑しき御心に尋ね見給へ」といふ。蘭丸忍笑み

一 寄食者。居候。

二 『遊仙窟』の字訓。原本「透逸」。↓三八一ページ注六。

三 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」(土佐日記)のもじり。「女方もすなる土佐日記」(七の二)。

四 『遊仙窟』の字訓。



ひそひそ話の体。左手には筑摩神社の鳥居、手前には鍋をかぶり小笠を手にした女たちの行列が続く。先頭が「大鍋七つ重ね…」の本文に対応する女とその母親、少しく滑稽な感じに描かれている。

衆で、これこそ男色の根源である根本中堂の阿闍梨たちの夜のお相手である。中でも蘭丸は、年ももう十四歳とは見る人もないほど可憐な美少年で、比叡山内で思いをかけない者はなかった。

蘭丸と同じ院内に居候している井関貞助という男も、稚児たちと同行していたが、帰る途中で自分の編笠を脱いで、蘭丸の笠の上に重ねると、その美しい姿がおかしげになった。みんながそれをおもしろがっていると、貞助は後から指さして、「女も知った男の数だけ鍋をかぶるが、男も兄分の数だけ編笠をかぶらせてやった」と言って、大声で笑った。蘭丸が立ちどまり、「私に兄分が何人もあるとおっしゃるんですか。ここは聞き捨てになりません」と言うと、貞助は、「ほかの者が言うまでもない。卑しいご自分の心に聞いてみなさい」と言った。すると蘭丸はほほえんで、「私が師の坊の慰みものになっているのは、ほんとうの愛情からではありません。いつも京都から通って来るお人こそ、私にとってただ一人の兄分なのです。今でも忘れられません」と言って涙ぐんだ様子は、少し気後れしたように見えた。しかしみんなは穏やかにとりなして、ほかの話にまぎらかしてしまった。一行が乗り込んだ船は、

て、「それがし師の坊の弄び(もてあそび)となる事、これは情(なさけ)の道にはあらず。明暮(あけくれ)京より通ふ人こそ、我に独り(ひと)りの念者。今も忘れぬ物を」と、泪(なみだ)に沈むは少しおくれたる様(さま)にも見えしが、なほ五おとなしくも沙汰(さた)して、いづれも外(ほか)なる事に取りなし、楫(かぢ)の音、帆(ほ)六の手せはしく、堅田(かただ)七の磯(いそ)をはしらかし、諸山の晩鐘(ばんしよう)告げわたる時、やう／＼御寺に帰りて、過ぎにし口論、何の子(し)細(さい)もなく済みぬ。

　この蘭丸、生国(しやうごく)は加賀の小松八の人、長谷川隼人(はせがははやと)と申せし方の末子(ばつし)なり。男子ばかり十二人持ちて、世に栄え家めでたく、



右面上は筑摩祭を見物する叡山の稚児若衆蘭丸の編笠の上に編笠を打ち重ねてなぶる井関貞助。振袖姿できっと見返した蘭丸の左手は太刀の反（そり）を返している。左面上の若衆と男は指さしして何やら

楫(かじ)の音や帆をあやつる手もともせわしく、堅田(かただ)の磯を走って、比叡の寺々の入相(いりあい)の鐘が響き渡るころ、ようやくお寺に帰り、最前の口論は何事もなくすんでしまった。

　この蘭丸の生れ故郷は加賀の小松(こまつ)で、長谷川隼人(はせがわはやと)という侍の末子(ばっし)であった。隼人は男子ばかり十二人の子持ちで、めでたく家は栄え、国営の橋の渡り初(ぞ)めにも選ばれたほどであったが、無常も続けば続くもの、ある年の春から散り始めて、秋はいよいよ梢(こずえ)が淋(さび)しくなり、その年の十一月(しもつき)までに九人の息子を失ってしまった。そこで隼人は三男の金兵衛に世を譲ったところが、金兵衛はまもなく同僚に頼まれて、引くに引かれぬはめとなり、同年十二月二十三日の夜助太刀(すけだち)して、これもむなしくこの世を去ってしまった。母親は女心のやるせなく、悲しみのあまり息が絶えて、七日もたたないうちにまた嘆きの種となった。隼人も、今は現世の楽しみを思い切り、弓矢の家を捨てようと、息子の金太夫に跡目をつがせ、弟の蘭丸は出家させようと覚悟を決めた。

　一人(いちにん)出家すれば、九代の親族が愛欲の罪を免れるという諺(ことわざ)のとおり、蘭丸を十二歳の秋に、叡山に登らせ、父は白山(はくさん)の麓(ふもと)に分け入った。その時、「墨染(すみぞめ)の衣(ころも)を着た姿を一目見せてくれ」と、父がくれ

五　穏やかにとりなして。

六　帆をあやつる手もと。

七　米原で乗船して湖を横切り、浮御堂で名高い近江八景の一、堅田の磯を経て坂本へ上陸。

八　石川県小松市は加賀前田藩の支藩で八万石の城下町。加賀三代の藩主前田利常が、寛永十六年(一六三九)に小松城に隠居したのに始まる。

[一]国橋の渡り初めにも択ばれしに、無常も続く物かな、春より散り初めて、秋は梢淋しく、その年の[二]霜見月までに、九人愁への煙となりぬ。三男金兵衛に世を譲りしに、間もなく同役に頼まれ、首尾[三]黙止がたく、同じ極月二十三日の夜、助太刀打ちて、これも見をさめの夢とはなりぬ。片親女心のやるせもなく、思ひに出入る息も絶えて、七日も立たざる中に又嘆きぬ。今は身の楽しみを捨てて、弓刀の家を遁れんと、一子金太夫に[四]名跡を残し、弟蘭丸は出家になしてと思ひ定めぬ。

[五]一人髪を断てば九族愛欲の罪をまぬかると、十二歳の秋[六]当山にのぼし、父は[七]白山の麓に分け入り給ひしが、その時の御詞に、「墨染の姿にかへて我に一目」と、くれぐれ仰せられける程に、過ぎし年も出家を望みしに、「[八]十五の春までは」と、情にとめられて情なし。

今宵貞助と打ち果たしなば、不孝の第一なれども、今日の野心の止めがたく、人も鼾に静まってのち、年月の通はせ文どもを取集め、今なつかしく重ねみしに、同じ筆にはあらず、ひとつひとつ文章もかはりぬ。これを思ふに、自ら書く事をえ

ぐれも言ったので、蘭丸は去年も出家を願い出たのだが、「せめて十五歳の春までは」と、師の坊の情けにとめられて、情けない思いをしていたのであった。

今夜貞助と果し合いをするのは、不孝第一であるとは思うものの、蘭丸は今日の事がどうしても我慢ならず、人々が鼾をかきはじめて、あたりが静かになってから、この年月、兄分から送ってきた恋文を集め、今またなつかしく重ねて見ると、筆跡が違い、文章も一つ一つ変っていた。多分自分で書くことができないので、その気持を人に話して書いてもらったのであろうが、そのたびの気苦労が、ひとしおいとしく思われた。自分が死んでしまったら、あとで兄分の嘆きや恨みは並みたいていではあるまい。しかし覚悟したからには、たとえ一日延ばしたからといって、初志は必ず貫こう。夜が明けたら京都に行って、かわいい男にもう一度この姿を見せ、添い寝しても詳しくは事情を打ち明けず、この世の名残にしようと、人知れず涙を流すのであった。

叡山の稚児たちは、人手がないからといって、柴刈り男の荒くれた手で髪を結わせるのは気に入らないといって、みんな遠く雲母越をして四里の山道を行き、三条の橋のたもとにある髪床まで出かけ

一 国営の橋の渡り初め。三代の夫婦が揃った家や子福者の家が選ばれる。
二 十一月の異称。霜月。
三 引くに引かれぬはめとなり。
四 跡目を継がせて。
五 「一人出家すれば九族天に生まる」という。九族は、高祖父・曾祖父・祖父・父・自己・子・孫・曾孫・玄孫にわたる九代の親族。
六 比叡山延暦寺。
七 富山・石川・福井・岐阜の四県にまたがる白山は、白山神社をはじめとする白山七社があり、古来信仰の名山である。
八 一般に、十五、六歳で元服(ここは剃髪)するまでは前髪立ちの若衆。

ずして心を人に頼み、度ごとの気づくし、一しほにあはれふかくぞ思ふ。我むなしうなりなば、跡にて嘆きも恨みもかぎりはあるまじ。思ひ定めし身の一日過ぎたればとて、一念はとぐべし。夜も明けなば都に行きて、可愛らしき男に今一たびこの姿をも見せ、かりなる横陳[九]して、細かに次第はかたらず、浮世の名残にもと、人しれぬ涙のやむ事なし。

この山の若衆[一〇]かづらを、柴男のあらけなき手して、ことか[一一]きに撫で梳きをさすも心に叶はずとて、おの〳〵雲母越[一二]はるかに、四里の山道を行きて、三条の橋なる床まで、髪を結はせに出ける。中にも上手とて鬢水のかわく間もなく、白鷺の清八とて、かかる下職[一三]には人皆惜しむ程の若き者なり。一生美道に身をなせば、手[一四]づまもすぐれて、折柳とて一流結ひ出し、髪先二の曲のきよらなれば、あまねくこの床にたよりて、曙より前後を争ふ。蘭丸を見ては、人のおもはくもかまはず、手すきを待ち兼ねし人をさし置き、櫛も外なるを取出し、心静かに靚粧[一五]をつくりまゐらせける。

ある時床を立ちはなれ、山下一里も歩み行くに、折節神送[一六]

るのであった。中でも上手なのは、鬢水の乾く間もなく結い上げる白鷺の清八といって、こんな賤職にしておくのは惜しいと、誰でも思うほどの若者であった。一生を男色に打ち込んでいたので、手先も器用で、折柳という新しい髪の結い方を工夫し、二つ折の髷の刷毛先がきれいだったので、みんなこの髪床に押しかけて、明け方から前後を争った。清八は蘭丸を見ると、人の思わくなどかまわずに、順番を待っている客をさしおき、櫛も特別なものを使って、ていねいに結い上げて差し上げるのであった。

ある時、稚児たちが髪床を出て、山の麓を一里ほど歩いて行くと、折から十月の空模様は険悪で、さまざまな雲が群がり立ち、雨はさほどでもなかったが風がひどく吹いて、落葉は肩をおおうほどに散りかかり、撫でつけた鬢の油もかさかさになった。稚児たちはせっかくの髪の形が変るのを惜しみ、綾杉の生い茂った東の山陰で袖をかざし、手で髪をおさえて、峰の晴れ間を待ちわびていた。するとそこへ三条から清八が蘭丸の跡を慕って来て、懐から櫛道具を取り出し、「お髪がそそけるだろうと気がかりで、ここまで参りました」と言って岩間の清水をすくい上げ、元のように稚児たちの髪を

九 『遊仙窟』の字訓。

一〇 若衆の髪を山の縁で葛と言い、柴男とうけた。

一一 事欠きに。人手がないからといって。

一二 京都市左京区の修学院の地から、比叡山へ登る急坂路。西塔・東塔へ至る近道。

一三 髪結職は、一銭職または一銭剃りともいい、賤職とされていた。

一四 毛爪、手妻。若衆の髪を結う手先も器用で。

一五 『遊仙窟』の字訓。「今でもこの靚粧、さりとては醜からず」(一代女一の一)。

一六 十月の空。諸神が出雲大社へ出かけるので、当月の空は荒れるという。「荒れ物と知ればたふとし神おくり」(鬼貫句選)。

りの空おそろしげに、五色の雲さわぎて、雨はやさしく風はあらけなく、落葉は肩を埋みて、撫鬢の油もかわらぎ、面影の替はるを惜しやと、綾椙のしげき東陰に袖をかざし、手して押へ、峰の晴れ間を待ち詫びしに、三条より清八御跡をしたひ来て、懐中より櫛道具など取出し、「御ぐしのそそけ侍るを思はれ、これまで」と、岩の小細水をむすび揚げて、元のごとくに児達を撫で付けまゐらせけるは、心根ふかくやさしく、蘭丸を恋ひ忍ぶやと、いづれもその色は見すかしにける。

これよりふびんと思ひ初め、清八に身をまかせ、行末もひさしく頼もしく思ひしに、今日は最後の暇乞ひとは、夢にも清八は知らねばこそ、いつにかはりて機嫌も悪しく、四五日絶えし音信を疑ひ、当言のさま〴〵。無情くは思ひながら、中宿にさそひ行きて心よく飲みかはして、酔の内は枕にまくら近く、無理のある程聞き暮れて、別れはいつとても泪ぞかし。

律義なる寺男めしつれて、かへりさまに、竹屋といへる細

撫でつけて差し上げた。心のこもったその優しいふるまいに、蘭丸を恋い慕っているのであろうと稚児たちは察した。

それから蘭丸は清八をいとしく思って身をまかせ、行く末長く頼もしく思っていたのに、今日は最後の暇乞いとなった。それとは夢にも知らない清八は、いつもと違って機嫌がわるく、蘭丸が四、五日尋ねてこなかったのを疑い、いろいろと当てこすりを言う。蘭丸は味気なく思いながらも、清八を出合宿に誘って行き、気持よく酒を酌み交わし、酔っている間は枕に枕を近づけ、無理のあるほどを聞き暮し、別れとなればいつも涙である。

蘭丸は供の正直な寺男を連れて帰る途中、竹屋という細工人の家に寄り道した。しばらくして出て行く姿を、不審に思ってこっそり跡をつけて来た清八が、その研屋にはいって様子を尋ねると、「事情は知りませんが、刀の目釘を打ちかえ、切刃をつけてさしあげました」と言う。「これは不思議だ」と清八は、まもなく身支度をして、蘭丸の跡を慕って行った。叡山の西谷への近道は、茨や葛が生い茂っていたので、足を痛め、息も絶え絶えになったが、まもなく日が暮れて、木々の梢も峰も見えなくなった。ようやく元三大師の灯火のもとにたどりついて休み、

工人の許に立ち寄り、しばらくありて出て行くを、見え隠れに心に掛ければ、かの砥屋に入りて様子を尋ねければ、「何かはしらず、一腰の目釘をうちかへ、切刃を付け参らせける」と申す。「これ不思議」と、間なく身拵へして、その跡をしたひ行くに、西谷の近道、茨・葛に足をいたませ、息も絶え／＼になる時、梢も峰も見えずなりにき。やう／＼に、元三大師の灯の影に休らひ、こしかたを思ひ、また蘭丸が心根をうたがはれ、昔日、慈鎮和尚のこの山の神姿に読み給へり。「我ならぬ人にもかくや契るらんと思ふにつけて濡るる袖かな」とは、うつくしき前髪に現じまみえ給ふさへ、又もや人に、と思はれし。ましてや我が恋人は、もろこしの鄧通、本朝の義治にもおとるまじければ、男色の輩は悩むべしと、心づかひのやるせなき所へ、寺中手炬を輝かせ、「蘭丸、貞助をうつて立ちのきし」と、早鐘・螺の貝を吹き立て、年月うらみの悪僧、手わけをしてぞさがしける。

　清八、さてはと跡につづきて東にさがれば、あらけなき法師の、六七人して蘭丸をとらへて、心任せに自害もさせず、

これまでの事を思い、また蘭丸の心を不審に思うのであった。昔慈鎮和尚はこのお山の神々しい姿を、「我ならぬ人にもかくや契るらんと思ふにつけて濡るる袖かな」と詠まれたそうだが、美しい前髪姿となって現れたお山をご覧になってさえ、またもや人にと思われたのであろう。まして自分の恋人は、中国の鄧通や、わが国の義治にも劣らない人だから、男色家連中が思いをかけないはずはないと、やるせなく思い悩む時、寺中の坊主がてんでに松明を輝かせ、「蘭丸が貞助を討って立ち退いた」と、早鐘をつき螺貝を吹き立て、日頃無情な蘭丸を恨む悪僧どもが手分けをして捜し始めた。

　清八、さてはと、その跡を追いかけ、東の方へ下って行くと、荒法師が六、七人で蘭丸を捕まえて、思うように自害もさせずに取り巻き、「どうせ打ち首になる身だから、何も思い残す事はないだろう。日頃は盃なりといただきたいと願っても、相手にされないですんでしまった。ちょうどいい機会だから、この若衆めを肴にして飲もう」と、坂の途中の小売り酒屋をたたき起こした。ありあわせの口の欠けた徳利を鳴らし、欠け椀で蘭丸の口に移し、「待てば時節とはよく言った。思う存分かわいがっていただこ

一　刀の身が柄から抜けないように目釘穴にさす竹釘。
二　実戦用に刀の刃を鋭く研ぐこと。丸刃に対す。
三　比叡山の西塔。延暦寺の三塔の一つで、釈迦堂・相輪樘・法華堂・常行堂の総称。
四　比叡山横川中堂(西塔の東北約四キロメートル)の四季講堂をいう。もと良源(私諡号は元三大師)の本坊で、大師堂ともいう。
五　慈鎮は慈円ともいい、平安末の天台座主。藤原忠通の子。『愚管抄』の著者。その和歌は『千載集』以後の歴代の勅撰集に入集、『新古今集』には西行についで八十九首が入集している。嘉禄元年(一二二五)九月没。七十一歳。引用の和歌の出典未詳。
六　漢の文帝が寵愛した美童。「文帝鄧通ヲ寵幸シ、賜フニ蜀ノ厳道山ノ銅ヲ以テシ、自ラ銭ヲ鋳ルヲ得シム」(漢書・鄧通伝)。
七　新田義貞の弟脇屋右兵衛佐義助の子息式部太夫義治。天下無双の美男で、山門の衆徒を初め、東山の天台宗の門跡寺妙法院の門主も恋慕したという(麓之色五)。
八　長さ約六〇センチばかりの手に持つ松明。

「とてものがれず打首あへる身なれば、何か思ひ残すべし。日頃は盃なりともと、おの〳〵ねがへどつれなく、その事もなくて過ぎぬ。折からなれば、この若衆めを肴にして呑め」と、坂なる請酒屋[一]をたたき起こし、口のかけたる徳利をならし、めげ五器[二]を持ちて人の手より口にうつし、「時節もある物かな。自由なる御情にあづかる」と、袖下より手を入るるもあり。「今までは人の言ふ事もきかずや」と、耳引くもあり。後帯をほどき、又はかしらに割紙を付け、いろ〳〵に嬲りけれども、左右の腕をひしがれ、是非なきうきめを見るに、又、法師のおのれが舌先口ちかくよする時、歯を食ひしめ黄[三]なる涙をながしける。清八かけつけ、入道切りちらし、蘭丸をいさめて行方しらずなりぬ。その通りに名ばかり残れり。

三年も過ぎて、ある人の語りしは、「執行[四]の身にかへ、つれぶきの尺八巣籠り[五]のなつかしや。鎌倉の鶴が岡にしてあひける」とや。

う」と、袖の下から手をさし込む者もいる。「今までは人の言う事も聞かなかったのか」と、耳を引っ張る者もおり、後ろ帯をほどき、または髷に引裂き紙を結わえたり、みんなでいろいろとなぶったけれども、蘭丸は左右の腕を縛られているので、どんなつらい目にあってもしかたがなかった。そのうえ、坊主の一人が舌を蘭丸の口に近づけた時、歯を食いしばってくやし涙を流した。そこへ清八が駆けつけて坊主どもを斬り散らし、蘭丸を励まして落ち延び、行方不明となった。世間にはそのとおりに、噂だけが残った。

三年もたってからある人が話した。「二人は修行者の姿になって、なつかしくも尺八で鶴の巣籠りの曲を合奏しているのを、鎌倉の鶴岡八幡のあたりで見かけた」ということであった。

一 造り酒屋から請けて売る酒屋。小売り酒屋。
二 欠け椀。
三 血涙に同じ。多く動物についていう。「獅子…黄なる涙を流しつつ」（太平記三十二）。
四 修業者（虚無僧）の姿になって。
五 尺八曲「鶴の巣籠」の略。下文の鶴が岡にかかる。

❖伊賀の国守の寵童の山脇笹之介は、念者の伴葉右衛門が、返り花見物の場で、さる若衆と親しく杯を交わしたことを知り、やがて訪れた葉右衛門を内庭に閉じこめ、降りはじめた雪の中で丸裸にして、ついに死にいたらしめたので、自分も同じ枕に切腹して果てた。寝間には床に二つ枕、香をたきしめた小袖も用意してあったという、若衆の嫉妬と意気地の物語である。

嬲[六]りころする袖の雪

炭売る声、踏皮屋の秋、鹿[七]の身の毛も立ちて、冬山のけしき白妙の曙、伊[八]賀の国の守、「初雪を夢に見しが、誠とは降りけるよ」と仰せられし。御前に小[九]扈従組あひつめし中に、山脇笹之介とてありしが、御[一〇]納戸に行きて、探[一一]幽筆の富士取出し、大[一二]床に掛け奉れば、即座の才覚、これぞ日本一の御機嫌ぞかし。

一[一三]条の院雪の朝に、「香[一四]炉峰の詠めは」とのたまはせければ、清少納言、北の軒端の御簾をまきける。「遺[一五]愛寺の鐘は枕をそばだてて聞き、香炉峰の雪は簾をかかげて見る」と、白楽天が詩の心を感ぜさせ給ふとや。今又雪の夢に、不二の絵をあはせ侍る事たぐひなし。それより近うめしつかはれける。いまだ江[一六]戸詰は御許されて、御参勤の跡は心まかせに暮らしぬ。

ある日、追[一七]鳥狩に前髪仲間四人、岡野辺に出て、目じるし

嬲りころする袖の雪

炭を売る声がして、革足袋屋も忙しくなると、鹿も身の毛がよだって、山々も雪景色となった冬の朝、伊賀の藩主が、「初雪の夢を見たが、ほんとうに降りおったわい」と仰せられた。御前に詰めた小姓組の中に、山脇笹之介という者がいたが、お納戸に行って探幽筆の富士の掛物を取り出し、大床にお掛けすると、即座の機転に殿も日本一のご機嫌であった。

一条院の御時、雪の降った朝、中宮が、「香炉峰の眺めは」と仰せられると、お側にいた清少納言が、北の軒端の御簾を巻き上げた。「遺愛寺の鐘は枕をそばだてて聞き、香炉峰の雪は簾を掲げて見る」という白楽天の詩の心を、とっさに生かした機知に感心されたという。今また雪の夢に対して、富士の絵を合わせたことは比類がない。殿はそれ以来、笹之介をお側近く召し使われることになった。まだ江戸勤番は許されて、殿のご参勤のあとは、国元で気ままに暮していた。

ある日、前髪立ちの仲間が四人、小鳥狩りに岡へ出かけたが、目印の松は雪に埋もれ、枯草の野道もはっきりせず、岩や切株を鳥と見まちがえて駆け回り、興がさめてしまった。小さなお宮の森の雀

六 「殺す」のなまり。
七 上文の、鹿皮を使用する革足袋屋の秋をうけていう。革足袋は近世初期から寛文・延宝頃まで行われた。男は黒・小紋、女は白・紫。ただし春秋は木綿足袋を使用。
八 慶長十三年(一六〇八)に藤堂高虎が伊賀・中部伊勢の国守となり、三重県津市に居城し、世襲して明治維新に至る。三十二万三千石余。
九 →三七三ページ注二。
一〇 納戸方ともいい、将軍・大名の金銀・衣服・調度の出納をつかさどる役向き。
一一 狩野探幽は狩野永徳の孫で、元和三年(一六一七)幕府の御用絵師となり、鍛冶橋門外に屋敷を拝領したので、その家系を鍛冶橋狩野という。延宝二年(一六七四)没。七十三歳。
一二 三幅一対を掛ける三間(約五・四メートル)の大床の間。
一三 一条院は一条天皇(九八六～一〇一〇)。関白藤原道隆の女である中宮(皇后)の問いに答えた清少納言の機転の話は『枕草子』に見える。下文の白楽天の詩は、「香炉峰下ニ新ニ山居ヲトス」という題で『白氏文集』十六に見える。
一四 中国江西省九江の西南の廬山にある名山。
一五 香炉峰の北にある寺。
一六 藩士が大名に従って江戸に参勤し、藩邸で勤務すること。
一七 山野で勢子に鳥を追い出させて狩りをすること。

の松も埋み、枯草の道も定まりなく、岩根・切蕪鳥に見懸けて、かけりまはりて、興をさましぬ。小宮の森の雀さへなく、おのおの立ち帰る時、玉笹の陰深く里人の[一]穂屋つくりて、瓜の番せし跡より雉子の飛び出れば、[二]鐘木・割竹におどろかせ、いづれも嬉しげにとらへ侍るに、続きて又雄の何羽も見えて、佳興この時、黠しき小者、かの草葺に便りて見るに、籠に雉子を入れて、え知れぬ男二人、身を隠してありしが、「御領内は鳥とる事かたき掟を知らずや」と吟味にかかる時、一人は笠に面を背けて逃げ行き、今独りを手籠に、命もあやふきに、[三]笹之助駆け付け、「身に替へて世をわたる種なれば、ゆるし給へ」と詫びて、暮ちかくなりて、「ただとる鳥の仕合せ」と、春待つ梅を折りて雉子を付けて、恋も哀れもしらぬ[四]わたり侍、供して帰る。

笹之助は、足いたむのよしして跡にさがり、かの鳥取りに尋ねけるは、「いかにしても、今日の忍べる有様、おのれ誠を語らずは宿に帰さじ」との眼ざしに[五]機をうしなひ、「私は伴の葉右衛門下人なるが、旦那先に逃げ侍る」と申す。「葉

さえいないので、みんな帰りかけた時、群笹の奥に百姓が造った草葺の瓜の番小屋の跡から、雉子が飛び出して来た。みんな杖や割竹で追い回し、うれしそうに捕えていると、続いてまた雄鳥が何羽も飛び出したので、いよいよおもしろくなってきた時、気のきいた下男が、その小屋に近づいて見ると、籠に雉子を入れて、得体の知れない男が二人身を隠していた。「ご領内で鳥を捕るのは、かたく禁ぜられていることを知らないのか」と、下男が調べようとすると、一人は笠で顔を隠して逃げて行った。残った一人を手痛い目にあわせ、命も危うくなった時、笹之介が駆けつけ、「命がけの商売だから、許してやるがよい」と、取りなしてやった。日暮れも近くなったので、「ただで鳥が捕れて仕合せ」と、春を待つ梅の枝を折って雉子を結わえ、恋も哀れも知らない渡り中間がお供をして、人々は帰って行った。

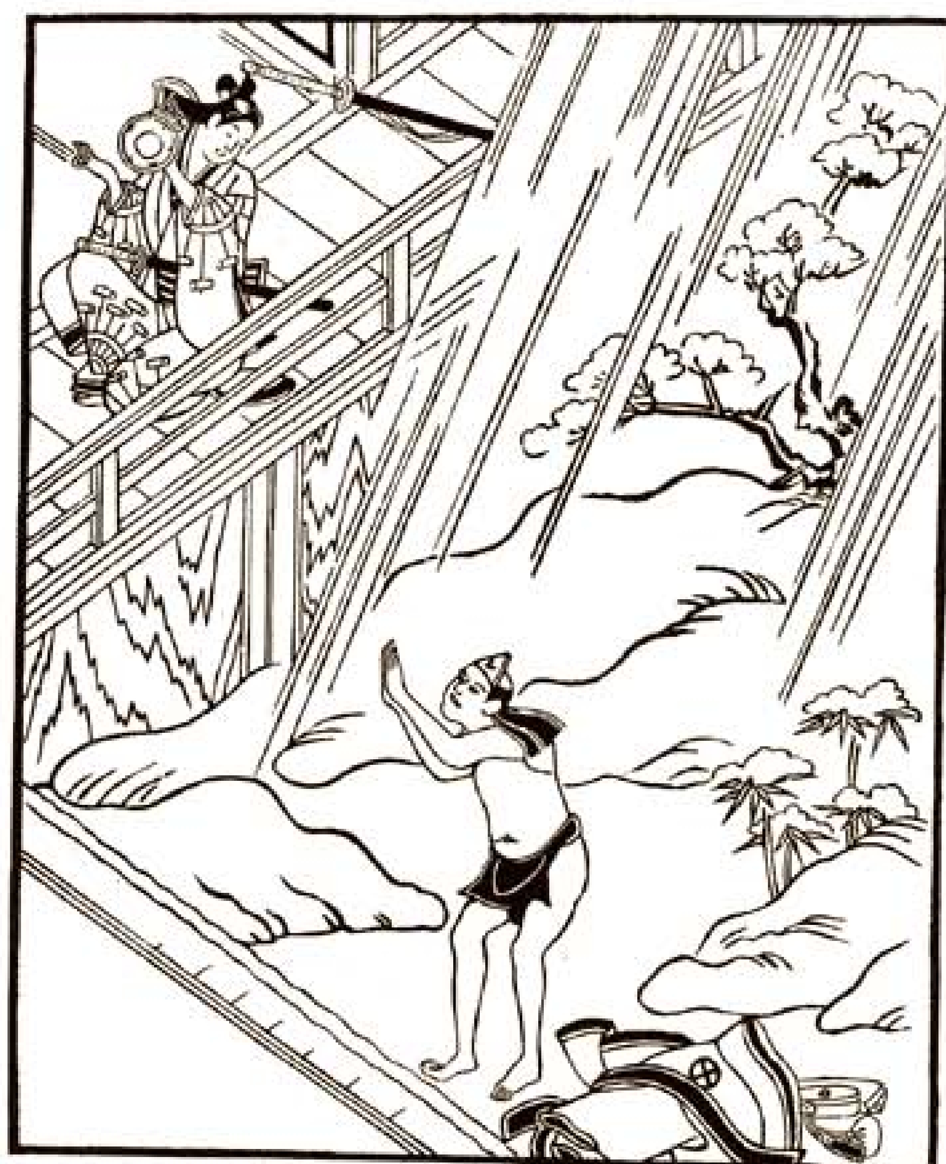
笹之介は足が痛むからといって、あとに残り、最前の鳥捕りに向かい、「どう考えても、今日忍んでいた様子がおかしい。ほんとうの事を白状せぬと、生きて家へは帰さぬぞ」と言う。その鋭い目つきにどぎまぎして、「私は伴葉右衛門の下男でございますが、旦那は先に逃げ

一 薄の穂でふいた小屋。
二 撞木のようなT形の杖。
三 「笹之介」と同じ。→三二〇ページ注五。
四 年季奉公の中間。
五 言いわけのチャンスを失い。へどもどして。

六　狩猟。

七　大きな庭籠に飼ってある鳥。

八　振袖の羽織。



山脇笹之介は、念者の伴葉右衛門が他の若衆から杯を受けたことに嫉妬し、自宅の庭で葉右衛門をさいなむ。素裸にされ額烏帽子をつけて震えながら詫びる葉右衛門、笹之介は小鼓を打って謡いつつ嘲笑。

右衛門は、我も人も存じたる方なり。何とて人には隠れ給ふぞ。これ不思議」とあれば、「山脇笹之助とやらんが殺生に[六]出けるが、毎日家中のさわぎに、今日は鳥のなき事を知らで、若衆の足もともいたまし。心よく慰みのためとて、庭籠鳥を[七]目通りへはなちける」と、ありのままに申せば、「さて〱その若衆の身にしては、悦び限りあるまじ。我もその方にあやかる祝儀ぞ」と、脇あけの羽織をぬぎて給はりければ、こ[八]れよりは二升樽もがなと思ふぞをかし。その後は、この中間文の便りとなつて、美道のかたらひ浅からぬ中、人も見ゆる

ました」と言う。「葉右衛門殿ならば、誰でも存じているお方だ。なぜ逃げ隠れなさったのか、どうも不思議だ」と言うと、「山脇笹之介とかいう者が、小鳥狩りに出かけたが、毎日家中の面々が荒らし回るので、今日あたりは鳥のいない事も知るまい。若衆の足もとが痛々しい。気持よく楽しむようにと、庭の鳥籠に飼ってある雉子を、皆様の目の前に放したのでございます」と、ありのままに話した。「そうか、そうか。その若衆の身にしてみれば、どんなにうれしいことであろう。拙者もそのお方にあやかりたいから、祝儀にこれをやろう」と言って、振袖の羽織を脱いでやると、下男はこんなものよりも、二升樽でもいただきたいものだ、と思うのもおかしかった。それからはこの下男が恋文の使いとなって、笹之介と葉右衛門は衆道の契りを結んで深い仲となったが、家中の人々も見ゆるしていた。

　ある時、長田山の西念寺の庭に、桜が狂い咲きしたので、一家中は春の気持になって見物に出かけた。美しい景色が嬉々たる胡蝶をとらえて離さない情景を見て、人々は詩的な気分になり、万物は生滅変化するものであることも忘れて、酒樽に飲み口をつけ、若衆も一緒に飲み

一 伊賀国(三重県)上野と伊賀川を隔てて西にある阿山郡長田村(現、上野市長田)の西蓮寺(天台宗真盛派の名刹)。
二 初冬十月頃、桜が狂い咲きすること。
三 出典未詳。栩々は喜ぶさま、うっとりとするさま。「栩々然タル胡蝶也」(荘子・斉物論)。「胡蝶も栩々として垣根をわたるに」(近代艶隠者三の五)。
四 詩を好む病。作詩の念をおこさせる魔力(間吟詩　白居易)。詩でも作りたい気分になり。「我も蛍に詩魔をつけられ」(近代艶隠者二の五)。
五 「臭腐(ごみ)ハ復タ化シテ神奇(美)ト為リ、神奇ハ復タ化シテ臭腐ト為ル」(荘子・知北遊篇)によるものと考える。すなわち、万物は果てしなく生滅変化するとの意。
六 通り一遍の挨拶で。
七 笹之介の事ばかり。
八 嫉妬で胸を燃やし。
九 両開きの戸。庭園の入口に用いる。
一〇 降り積もりそうな気配の雪。
一一 すっかり落葉してしまった青桐の木陰。

し侍る。
ある時、長田山[一]の西念寺の庭に復り花[二]咲きて、家中春の心になりて見にまかりぬ。美景栩々維二胡蝶一[三]、見る人詩魔[四]に便りを付けられ、樽の出し口を仕掛け、少人まじりに呑みかはし、半ばなる折節、葉右衛門花に来りしに、幸ひに留めて、五十嵐市三郎と申す人、杯にあましてさせば、世間言葉[六]にて、「かたじけない」と洒るるばかりうけて、酔のうちにも君が事のみ[七]。刀・脇指は忘れず立ち帰るに、はや笹之介に誰かは告げし、胸に火燵を仕出し[八]、はげしき風をいとはず、門外に立ちて葉右衛門待ち兼ね、手を取りて屋敷に入り、露路の猿戸[九]を錠おろして、雨戸も内よりかため、掃庭に葉右衛門独り立ちわづらはせ置く。
さては首尾心もとなくて、しばしば声をも立てず様子見合はすうちに、降り出しより積り気色の雪[一〇]、はじめの程は袖を払ひしに、梢老れたる桐梧の陰[一一]も舎りのたよりならねば、次第に絶えがたく、肺の臓より常の声も出ず、「やれ今死ぬるは」と慟めば、内には小坊主相手にして笑ひ声して、「いま

始めて、宴もたけなわのころ、葉右衛門が花見にやって来た。五十嵐市三郎という若衆が、これ幸いと引き留めて、杯もこぼれるほどに注いで葉右衛門に差すと、「これはありがたい」と、通り一遍の挨拶をして、だぶだぶの杯を受け、酔ってしゃべる事といえば、笹之介のことばかり。それでも刀・脇差は忘れずに帰って行った。早くも告げ口した者があって、笹之介は嫉妬で胸を燃やし、激しい寒風も平気で、わが家の門外に立って葉右衛門の来るのを待ちかね、来るとすぐに手を取って屋敷に引き入れ、路地の木戸に錠をおろし、雨戸は内側から固め、庭に葉右衛門をひとり立たせておいた。
葉右衛門は不安になって、しばらくは声も立てないで、様子を見合わせているうちに、積もりそうな気配の雪が降りだしてきた。初めのうちは袖を払っていたが、落葉してしまった桐の木陰も頼りにならないので、しだいに我慢できなくなった。いつもの声も胸から出なくなり、「おい、今死ぬぞ」と、わめくと、内では笹之介が、お茶くみの小坊主を相手にして笑いながら、「まだお付指の酔いはさめますまい」と、二階座敷から言う。「とんでもない。これですっかり懲りてしまったんだ。

一二 口をつけた杯を人に差すこと。情のこもったしぐさ。

一三 逆らったものの言い方をして。

一四 髻をほどいた散らし髪。

一五 額烏帽子。納棺の際、死人の額につける三角の紙。梵字を書く。↓三九一ページ挿絵。

一六 「をがむ」は訓。禅家にては「おな」という。「合掌シテ礼ヲ作スヲ和南と曰フ」(翻訳名義集)。

一七 「あら有難のおん弔やな」(謡曲・天鼓)。その他、謡曲に散見する文句。

一八 まばたき。

一九 三重ないし五重の、腰に下げる小箱。主として薬を入れた。梨地や蒔絵や堆朱など、精巧な工芸品。

だ御付指[一二]の温りも醒めざらまし」と、二階座敷より申す。「さりとては何の心もなき事なり。これに懲りぬといふ事なし。この後は若衆の跡をも通るまじき」と詫びても、なほ詞[一三]を嫌き、「しからばその二腰をこなたへわたし給へ」と請け取り、又指さして嘲哢り、「着物・袴ぬぎ給へ」と丸裸にして、「とても事に解き髪[一四]に」と申す。これもいやがならねば、頓て形を替ゆれば、梵字[一五]書きし紙を擲りて、「額に当て給へ」と申す。今は息絶えぐ\に、悲しさ身にふるひ出て、まことの幽霊声になりて、その後は手をあげて和南[一六]むより外はなし。笹之助小鼓をうつて、「[一七]ああありがたの御弔ひや」など諷ひ出して、下を覗けば、葉右衛門、瞬[一八]せはしく躑躅み、うき世のかぎりを驚き、印籠[一九]あくる間も、脈にたのみもなければ、同じ枕に腹かきさきて、只今の夢とはなりぬ。

是非もなき嘆きの中に不断の寝間を見れば、床とらせて枕ふたつ、焼きしめたる白小袖、あたりに酒事の器も見えわたり、この心根の程おもはれて、諸人横手うたざるはなし。

今後はほかの若衆の足跡も決して通るまい」と、詫びても、笹之介はなお逆らって、「それがほんとうなら、その大小をこちらへ渡しなさい」と言って受け取り、また指さしてからかい、「着物や袴を脱ぎなさい」と言って丸裸にし、「ついでだから、髪をほどきなさい」と言う。これもいやとはいえないので、葉右衛門が髪をほどくと、梵字を書いた三角紙をほうって、「これを額につけなさい」と言う。もはや息も絶え絶えとなり、悲しいことに体が震えだして、幽霊そっくりの声になり、それからは手を上げて拝むよりほかはなかった。笹之介は小鼓を打って、「ああ、ありがたの御弔いやな」などと謡いだし、下の庭をのぞくと、葉右衛門は激しくまばたきしながら立ちすくみ、息を引き取りそうになっていた。笹之介は驚いて、印籠の薬を取り出すまもなく、葉右衛門の脈は絶えてしまったので、同じ枕に切腹して、ただちに最期をとげた。

どうにもならない悲しみの中にも、笹之介のふだんの寝間を見ると、床をとらせて枕が二つと香木をたきしめた白小袖があり、枕元には、酒盛りの道具も用意してあった。笹之介の心遣いのほどが思われて、感動しない者はなかった。

中脇指は思ひの焼け残り

骨桶ふたつ風呂敷包みに取り添へ、今やなど無常は弁へがたき男の泪ぐみて、高野道を尋ねける。ここに摂泉河州の境に、三国の茶屋と云ふ所に休みしに、幸ひの同行二人語り合ひて行くに、時しも里は夏至に入りて、田植歌のをかしげなる、女の菅笠きたる様もこのもしくながめやるに、一人の男脇見して通り、「何事にもあり、女の業を見る事なし。世に若道より外はなきに」と云ふ。「我もそれよ」と男泣きにして、骨の曲物を手に据ゑ、「さりとてはうき世、ながらへてかひなき身」と、哀れにかなしく見えける。

「いかなる事ぞ」とあらましを聞くに、「この人、駿河なる府中の町に京物棚を出せし人の一子、万屋の久四郎とて、またならべて形の似たる者もなき若衆なりしに、情といふ事十三より深く、我に身をまかし、明暮水魚のかたらひなすに、定めなや泡と消えて、百ケ日も過ぐれば、この骨を奥の院に

❖巻二の四「東の伽羅様」と同じく町人の衆道。はかなく死んだ若衆久四郎の遺骨を高野山に納めに行った駿河府中の町人半助は、御山で久四郎の亡霊に会い、さる侍から預かった脇差をまちがえて早桶に入れて焼いてしまい、侍から催促されて親が難儀しているから、これを郷里へ、と一腰を渡され、ただちに帰郷して難儀を救ったという。「東の伽羅様」の場合と同様、怪奇譚でまとめたのは、町人の衆道に意気地や刃傷沙汰などの劇的要素が乏しいからであろう。

一 「長さ一尺二寸から一尺七寸九分までを中脇指といふ。大・小脇指に対す」(剣甲新論)。

二 三国の茶屋は、堺の北荘の東の野にあった。ちょうど摂津・河内・和泉の境に当る。

三 太陽が夏至点に達し、北半球で昼が最も長い時。毎年、新暦六月二十二日頃。

四 「何事にもあれ」とあるべきところ。

五 檜や杉などの薄板を円形に曲げて作った桶。「わげもの」とも。

六 現在の静岡市。府中は国府の所在地。

七 呉服物など京都物産を商う店。

八 離れがたい交り。

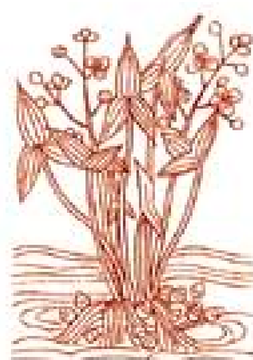
九 空海が入定した地。御廟・御供所・灯籠堂・経蔵・護摩堂がある。

中脇差は思いの焼け残り

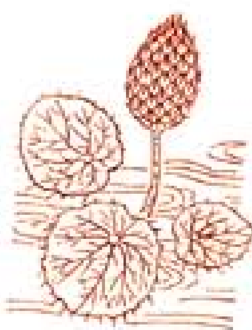
遺骨を納めた桶二つを風呂敷包みと一緒に持ち、まだとても人の世の無常などはわかりそうにもない男が、涙ぐんで高野山への道を尋ねている。休んでいる所は摂津と和泉と河内の境に当る三国の茶屋で、幸いに道連れがあったので、話しながら同行することになった。折から夏至に当り、村々では田植歌がおもしろく聞こえ、早乙女の菅笠姿も好もしい眺めであったが、連れの男は脇見をして通り、「何事でも、女のする事を見るもんじゃない。この世には衆道に優るものはないんだ」と言った。連れの男は、「私もそうだ」と言って男泣きに泣き、骨桶を持ち直して、「それにしても、生きていても仕方のないわが身だ」と言う様子が、ひどく悲しそうに見えた。

「どうしたんですか」と、訳を聞くと、「この遺骨の主は、駿河の府中で京都の物産店を出している人の息子で、万屋久四郎というものです。またとない美少年でしたが情けも深く、十三歳の時から私に身をまかせて、しばらくも離れたことのない仲だったのですが、はかなくも泡と消えてしまいました。百か日過ぎましたので、この骨を高野山の奥の院に埋め、

一〇 洲浜台の上に、松竹梅と鶴亀、それに姥・尉の作り物を配した祝儀用の飾り物。
一一 火葬にした遺骨。
一二 池や水田に自生。葉は箭形で、夏、長花茎を出して三弁の白花をつける。


沢瀉（和漢三才図会）

一三 鬼蓮の別名。スイレン科の一年生水草で池沼に生じ、葉は水面に浮かぶ。大きいものは直径二、三メートルに及ぶ。夏、紫色の花を開く。


水蕗（和漢三才図会）

一四 伏見からの三十石乗合船が着く大坂八軒屋からの高野道をたどると、堺へ三里(約一二キロメートル)、堺から茂津へ一里、茂津から三日市(大阪府河内長野市)へ四里をへて、橋本、清水、禿(学文路)を過ぎ、高野山京口終点の神谷宿に着く。大坂より十六里。


片肌ぬぎで臼の米をつく男を見ている男色好きの法師。前髪・振袖の若衆を連れ、挟箱持ちの男に命じて銭二百を与えた。今は尻つきの黒い米つき男も、昔はこの法師の寵童だったという挿話の挿絵化。

埋み、御山の土になして」と語る。「今ひとつの骨桶は」と尋ねけるに、「これも思ひは同じ。友とせし人内儀迎へしに、その夜盃事はじめて松竹の島台出し時、かの娘うつむきて、眠れるごとく息切れて空しくなりぬ。その人の骨をも、この度ことづかり行く」といふ。男笑うて、「愚かなる人や。女の焼灰なればとて、衆道を好ける人の手に持つ事は」と申せば、誤りて、かの女の骨は濁江になげ捨てしに、沢瀉・水蕗の葉がくれに沈みぬ。「かかる女色嫌ひもあるものか」と、なほ語り、三日市といふ所につきぬ。

お山の土にしようと思いまして」と語った。「もう一つの骨桶は」と尋ねると、「これも同じ思いの骨です。友達が女房を貰ったところが、祝言の晩に三三九度の盃がすんで、松竹を飾った島台が出た時に、その娘はうつむいて眠るように息を引き取ったのです。その人のお骨も、今度一緒に預かって来たのです」と言う。連れの男は笑って、「ばかな人だな。いくら骨になったからといって、男色好きの人が女のものを手に持つとはね」と言うと、男は連れにあやまって、女の骨桶を濁った小川に投げ捨てると、沢瀉や水蕗の葉隠れに沈んでしまった。「お互いにとんだ女嫌いだなあ」と、なお話しつつ行くうちに三日市という宿場に着いた。

折から高野山の住職らしい坊さんが、寺領の村の牛飼いの子を、無理に仕立てたような寺小姓を連れてやって来た。まだ耳の後ろには昔の垢が残っており、後れ毛の赤い髪を元結で巻き立てて二つ折に結わせ、袖を詰めた無地の浅黄帷子を、振袖めかして脇をあけて着せたと見え、袖丈が短い。奉納品の大小らしく、鍔が大きく柄は細い。そのおかしげな腰つきをお愛しなさるとは、感心なお坊さんだと見送っていると、その先の方に丈夫そうな男が、門口に臼を置いて、米もあら

折から、かの山の隠元[一]らしき御法師の、知行里[二]の牛飼童子を無理に拵へ、いまだ眀[三]には昔の垢の名残も見え、殿髪[四]の赤き巻立て[五]に結はせ、無紋の浅黄帷子[六]の丸袖を、脇あけて着すると見えて、振[七]みじかく、あがり物[八]の大小、鍔はおほきに柄細く、腰付をかしげなるを愛し給ふは、殊勝に見おくる、先に健かなる男、門に臼を立てて、米も大方に白む時、舂杵をなげ捨て、せはしく身を隠す。その尻付の黒きこそ見ぐるしけれ。

御坊、はるかに行き過ぎて立ちとどまり、めしつれの男に何か細語き給へば、挟箱に付けし石花[九]・干瓢もおろして立ち戻り、二百つなぎ[一〇]の銭を米突きに渡して、「あなたには過ぎにし事ども忘れ給はぬに、その後は何とて御寺に見えぬぞ。ちかきうちに」と申し残して別れぬ。跡にて様子きけば、「あの御法師さまに、年月情の身なりしが、かくもなる物か」と、小糠を払うて袖をしたす。

すける道とてこれをも笑はずゆくに、禿[一一]といふ宿の名もいやに、女人堂[一二]までは折々目をふさぎこして、花摘[一三]よりおのづから有難く、千本の槇[一四]の奥暮れて、仏法僧の声幽かに、白衣

かた白けた時分であったが、杵を投げ捨ててあわただしく身を隠した。その黒い尻つきが、ひどく見苦しかった。

坊さんははるかに行き過ぎてから立ちどまり、供の下男に何かささやかれると、下男が担いでいた挟箱に結わえつけた寒天と干瓢をおろして引っ返し、二百文つないだ銭を米つき男に渡し、「お坊様は昔のことをお忘れでないのに、その後はどうしてお寺に見えません。近いうちにぜひ」と言い残して別れた。あとで事情を聞くと、「あのお坊様には、長い間かわいがっていただいたのですが、今ではこんなありさまです」と、袖の小糠を払って泣いた。

好きな道の事だからと、これも笑わないで行くうちに、学文路に着いた。その名を聞くのもいやらしく、女人堂までは時々目をふさいで通り過ぎた。花摘の辺からしだいにありがたい気分になり、千本の槇の奥は暗くなって、仏法僧の鳴き声もかすかに聞こえてきた時、白衣を着た姿が現れたので、よくよく見ると、死に別れた若衆であった。悲しそうな様子で片手に中脇差を持ち、声がとどく程度に距離をおいて、自分の名を呼ぶのにあきれ、夢かと思いながらしばらく眺めていた。「こうしてまたお目にかかり、昔

一 院家のなまり。住職。
二 寺領の村。
三 耳のうしろの小高い骨。完骨。
四 ふだん髪油も使わず手入れしないので、髪の先端(おくれ毛)が赤茶けている。
五 若衆髷で、髻を元結で巻き立てて二つ折にした髪型。
六 成人用の無地の帷子は、脇をふさいだ詰袖で袖丈が短く、下部が丸い。それを振袖めかして脇を開けて着せた。
七 袖丈。
八 寺へ奉納した死者の遺品。
九 いずれも精進料理の材料。
一〇 銭二百文。百文以上ともなると、青緡といって紺染めの細い麻縄で繋ぐ。
一一 和歌山県伊都郡の中部で、紀の川の南岸。高野街道の京口に当る学文路(現、橋本市学文路)。「かむろ」を遊里の禿に見立てた。
一二 高野山金剛峰寺の総門である大門(西口)の側にある女子の参籠する堂。これより先は、明治初年まで女子の入山を禁じた。
一三 女人堂の付近に花摘という地名はない。京口終点の神谷から女人堂への坂道の花折坂の思い違いである。『椀久一世の物語』上でも、「是かや女人堂、一日の事ながら女を見ぬこと悲しく、花摘といふ所をすぎて」と記している。
一四 「千本の槇。五太尊の堂をさること十町余、懸崖のかたはらに数本あ

のすがたあらはれ、心を留むれば、別れたる少人、愁への片手に中脇指を持ちて、声の届く程へだたり、我が名をよぶにあきれて、夢とも現ともしばしは詠めけるに、「二たびまみえ、むかしを嘆くにつきず。我最後の時、早桶の内へ、この一腰を、何か惜しからじと入れられしが、これは[一五]重代を取り違へ、さる侍方より内証にて預り置きしなり。我むなしくなりて後、彼方より返せとのさいそく、世の難儀にあひ給へば、古里へこれを」と、云ふ声の跡なくて恋しさ、むかし拵への中脇指残りて、これぞ現に誠あり。唐土の[一六]湘妃玉琴弾くかと、見し面影の嫌疑はれ、夢心になつて、国本にて心ざしたる熊野にも参らず古里に帰れば、百ケ日も過ぎ行けど、二親のなげきはやまざる中へ、人橋を掛けて、「質に預けたる脇指もどせ」とさいそく、金銀つみて詫言を聞き入れず、「ありしままに返せ」とは、悲しさのあまりに[一七]無常野に行きて、埋みし灰までさがしても、その跡かたもなく、せんかたなくて、夫婦住みなれし家をすて立ちのく折節、[一八]念友の半助高野より下向して、かの一腰を渡し、久四郎がありさまを語れば、お

の事がなつかしくてなりません。私が死にました時、この脇差を少しも惜しくはないといって、親仁が棺桶の中へ入れてくれましたが、これは先祖代々伝わった刀ではなく、あるお侍から内々で預かっていたものなんです。私が死にまして後、先方から返せと催促され、親仁が難儀しておりますので、これを故郷へ届けてください」と言ったかと思うと、恋しいその姿は消え失せて、古風な拵えの中脇差だけが残っていた。夢幻にしてははっきりと、証拠が残っている。中国伝説の湘妃が現れて琴を弾いたのではなかろうかと、まざまざと見た少年の面影をいぶかしく思いながら、夢心になって、国を出る時に予定した熊野にも参詣しないで、急いで帰ると、故郷の府中では、百か日が過ぎてもまだ両親が久四郎の死を悲しんでいる最中に、つぎからつぎへと使いをよこし、「質に置いた脇差を返せ」と催促して、いくら金を積んで詫びても相手は承知しない。「元のままで返せ」という言い分に、親たちは悲しさのあまり墓場に行って埋めた骨まで掘り出して探したが、その跡形もない。夫婦は万策つきて、住みなれた家を捨てて立ち退こうとしている最中に、久四郎の兄分の半助が高野山から帰って来て、その脇差を夫

り。予倩々見るに、本一根より千株をむらがり出すこと、あたかも一瓶に数本の槇をさしはさめるに似たり」（高野山通念集〈寛文十二年序〉）。

一五　先祖より代々伝わった刀。

一六　中国古代の五帝の一人である舜の妃の娥皇と女英は、巡視中に死んだ舜のあとを追って、洞庭湖に注ぐ湘江に投身したので、時の人は湘江の神として湘妃と称した。『湘中記』に「湘妃怨」という琴曲があると記す。「湘妃の怨曲をきくかとあやしく」（近代艶隠者五の五）。

一七　墓所。

一八　男色の交友。→二九五ページ注一七。

の〱驚き、「定めなき世に、これぞためしなき人の形見を二たび見る事ぞ」とかたりぬ。

薬はきかぬ房枕[一]

万花[二]色あるをもつて自ら枝をうしなふ。ここに何がしの侍[三]従の御もとに仕へて、伊丹右京といへるあり。よろづ花車[四]の道にかしこく、形は見るにまばゆき程の美童なり。同じ流れ[五]に住みける母川采女といひて、これも十八になり、人柄もすくよかに当流の若き者なり。ある時、右京風情世にあやしく、心地まどひて、吾が魂もいたづらに、踏む足もたど〱しきまで面影見とれて、例ならぬ床に、昼夜のわかちもなく戸をさしこめて、その事[六]となく嘆きぬ。よわり行くをかなしみ、親しき人々、薬の事など沙汰し侍るに、折節、若い輩いざなひまかりて、病家をあはれみし人の中に、焦るる御方も見えければ、いとど乱れて、この奸[七]け人、色のあらはれ、言葉のすゑも人皆それとは聞きぬ。

婦に渡し、久四郎が現れたいきさつを語ると、みんなは驚いて、「このはかない世の中で、死んだ人の形見を再び見るとは前例のないことだ」と話し合った。

薬はきかぬ房枕

すべての花は美しいために、おのずから枝を失うことになるのである。ところで何某の侍従に仕えている伊丹右京という者がいたが、何事も風雅の道にすぐれ、その器量はまばゆいくらいの美少年であった。同じお家に仕えている母川采女という者も、今年十八歳で、人柄もすっきりした現代的な若者であった。ある時、右京の妖艶な姿を見て、采女は心をとり乱し、魂もうわの空で、足元もたどたどしくなるまでに見とれてしまった。そのまま寝込んでしまって、昼も夜も部屋の戸を閉め、恋煩いということを隠して、ひとり悩んでいた。親しい人々は采女がしだいに弱ってゆくのを悲しんで、薬の事などあれこれと心配していた。折から若い仲間が誘い合って、病室を見舞いに来た中に、恋しい人もまじっていた。素直でない采女もそれを見てひどく乱れ、顔色にも言葉の端々にもその気配が現れたので、人々はそれと気づいた。

❖浅草今戸の慶養寺に伝わる写本の実録『藻屑物語』を、約四分の一ほどに圧縮した、寛永期の江戸における衆道にまつわる刃傷事件。巻一の四「玉章は鱸に通はす」の場合と違い、これは写本を忠実になぞっている。変えた所は写本では死におくれて侍従の命で斬殺された念者の志賀左馬之助を、りっぱに自決したことにしている程度である。

一 房付きの坊主枕。

二 原拠の『藻屑物語』には「花は盛り色あるを以て自らその枝をうしなふ」とある。

三 「今の御代の御後見として殊に時めき給ふ桜川侍従」(藻屑物語)。侍従は、宮廷では天皇を補佐する職で、従五位下の相当官。江戸幕府にも侍従の職名を有する諸家があったが、家格によって与えられたもので、実務を伴わない名誉職であった。事件は寛永十七年(一六四〇)四月のことであるから、三代将軍家光の大老か老中の匿名である。

四 風雅(詩歌)の道。

五 「同じ流れを汲てしる舟川采女…是も十といふて又八つ許り」(藻屑物語)。

六 恋煩いということを隠して。

七 「佞人とは、くちききがましき人を云ふ」(歌林良材集)。すなおでない人。

[八]その中に、これも采女とかの道を浅からず申しかはせし志賀左馬之助、目とがめて、人は帰りし跡に留まり、なやめる枕にちかく小語きしは、「御身のさまいかにとも分けがたく、心に懸る事もあらば、我には隔て給ふまじ。今見えわたり給ふ人の御中に、思し召し入られし御方あるべし。さのみ[九]しふねき、罪ふかし」など尋ねけるに、「それには非ず」と、云ひまぎらして過ぎぬ。問へども後は物をもいはずして打ちふし、現の人となりぬ。

時に[一〇]暦の博士をまねき問はせ侍りしに、「この悩みにて玉の緒の絶えなん事はゆめ〳〵あるまじ。これは物のけ・[一一]窮鬼のたぐひなるべし。尊き聖に仰せて祈り加持し給へ」と申せば、上野の[一二]天海大僧正、浅草[一三]中尊権僧正を頼み、二夜三日の護摩を修し、母はまたその国の大社〳〵へ願を懸けしに、このしるしにや、少し枕もかるう見えし時、左馬之助しのび来て、「我との事を恥ぢさせ給ふにや。是非それがし便りして、思ひ人の御返しを取り、首尾は心やすかれ」など申せば、「今までのよしみとて、うれしき人の諫め」と、筆につくし

その連中の中にいた、これも采女と深く衆道の契りを結んでいた志賀左馬之助は、采女の様子を見とがめて、人々が帰ったあとに残り、悩んでいる枕もとに近づいてささやいた。「あなたの様子は、なんとしても納得がゆかない。気にしている事があったら、何事でも私には遠慮なく打ち明けてもらいたい。先刻来られた方々の中に、思いをかけているお方があるに相違ない。そんなに思い込むのは罪の深いことですよ」などと尋ねてみたが、「いや、そんな事はありません」と、采女は言いまぎらかしてしまった。それからはいくら尋ねてもものも言わず、夢現のように寝ているのみであった。

そこで、易を見る陰陽師を招いて問わせてみると、「この病気のために命を失うことは、ゆめゆめありますまい。これは物の怪か悪霊の類がとり憑いているのです。尊い聖を頼んで加持祈禱なさるがよい」と言うので、上野寛永寺の天海大僧正と浅草浅草寺の中尊権僧正を頼み、二夜三日の間護摩を焚いて祈ってもらった。采女の母は母で、その国の大社大社へ願を掛けたので、その験であろうか、少し気分がよくなってきた時、左馬之助がこっそりやって来て、「私との事を恥じておいでなのでしょう。ぜひ私が取り

八「かかる人々多き中に、志賀左馬助といふ者采女と浅からずいひかはせしが、急度目をつけ、人々かへりし後なやめる枕に近く摺よりて申けるは」(藻屑物語)。

九 執念き。執念深いことは。

一〇 正式には令制の陰陽寮の被官をいうが、ここは陰陽師。易者。

一一 悪霊。いきすだま。

一二 寛永元年(一六二四)に秀忠の旨をうけて上野寛永寺を創建した天台僧天海大僧正。家康の帰依をうけ、後事を託されて秀忠・家光の補佐役となる。寛永二十年没。「貴き聖をもとめ加持せられよと申ける。其頃天下に秀し上野の天海大僧正、浅草には中尊権僧正を頼み、二夜三日の護摩を修し侍る。母はまたその国の大社〳〵へ安穏の祈願をなしける」(藻屑物語)。

一三 浅草寺中興第二世中(忠)尊上人は、伊丹三河守政富の子で、権僧正にのぼる。寛永十六年没。

て包み込み、左馬之助に渡しぬ。

重ねし袖の間に入れて、何となく[一]時斗の間に出しに、右京なる人、花に[二]嘯むきおはせしが、左馬之助に近寄り、「過ぎし一日は、御前に[三]貞観政要の興行にいとまなく、今日も只今までは新古今を読めと仰せられて相詰めしが、少しの気晴しに、物をもいはぬ桜を友とせし」と仰せけるを、「幸ひにここにも物いはぬ哀れなる事の御入り候」と、袂に深く包みし物を参らせければ、「我が方へではあるまじきが」と笑はせ給ひ、庭木陰のこぐらき中へ入り給ひしは、文見んための心当てなるべし。しばしありて、「我ゆゑに悩みましますは見捨てがたし」と、その日返しを給はりて、采女に渡せば、うれしさ寝間をはなれ、夜にましむかしの気力になりぬ。

世にはまた[四]うたてしき事こそあれ。近きころほひに召し出されし[五]細野主膳とて、勇みを先として朝夕太刀の柄をならせば、人皆うとみ果てける。これも右京を恋ひて、[六]えびす心のやる方なさに、人して言ふべきにもあらず、花なる木のもとに立ち寄り、[七]蝉の耳かしましきまで、[八]泣きみ笑ひみ、さ

持って、恋人のご返事を貰ってきてあげましょう。安心してまかせなさい」と言うと、「今までの好誼で、うれしい事を言ってくださる」と、采女は思いのたけを手紙に書いて左馬之助に渡した。

左馬之助はその恋文を袖に入れて、何気なく時計の間に行くと、右京は桜を眺めながら詩歌をくちずさんでいたが、左馬之助に近寄り、「昨日は御前で貞観政要の講読で一日つぶし、今日もただいままで、新古今集を読めという仰せで詰めておりました。少し気晴しをしようと、ものを言わない桜を相手にしておりました」と言うと、「幸いここにもものを言わない哀れな事がございます」と言って、右京の袂深く恋文を差し入れると、右京は、「お門違いでしょう」と笑いながら、庭の小暗い木陰にはいって行ったのは、手紙を読むためであろう。しばらくたってから出て来て、「私のために悩んでおられると知っては、見捨てるわけにいきません」と言って、その日のうちに返事を下さった。それを采女に渡すと、うれしさのあまりに起き上がり、日ましに以前の元気を取りもどした。

それにしても世の中には、いやな事があるものだ。近頃このお家に召抱えられた細野主膳という侍は、武勇をもっぱら

一 江戸城内にあった土圭の間に同じ。寛永年中に設置され、土圭の間坊主がいて管理した。寛永当時はすでに和時計が製作されており、形は櫓時計で重りを動力とし、指針は不動で文字板が回転した。

二 詩歌をくちずさむ。

三 十巻。唐の呉兢撰。貞観(六二七〜六四九)年中、太宗と群臣が政治を論じた問答を類編したもの。為政者の必読書で、家康も、いち早く伏見時代に、三要元佶に木活字を与えて、出版せしめている。

四 「うたてき事」とあるべきところ。「さればかかる中に、世にもうたてしき事こそ出来侍りける」(藻屑物語)。

五 「近き頃召出されし細野主膳といふ者あり。…唯武勇をこととし、ややもすれば人を掠め、事もなきに太刀の柄を捻りければ」(藻屑物語)。

六 たけだけしい心。

七 うるさい蝉の鳴き声のように。

八 「み」は二つの連続した動詞連用形のそれぞれについて、動作の交互に行われる意を表す接尾語。

九「されば似たるを友とする世のならひ…御側の茶道の節木松斎といへるを頼み」(藻屑物語)。
一〇 茶の湯の諸道具。
一一 茶の湯で炭手前の時、炉や風炉に炭をついだあと、羽箒で塵を払う。
一二 人を巻き添えにする。海―淵。
一三「思ひ定めしは」とあるべきところ。
一四「頃は寛永十七年辰の四月十七日の夜なりけるが」(藻屑物語)。
一五 雪より白い。
一六 打ちちがえにして。交差して。
一七 引いて側へ寄せる。

まぐ〳〵嘆きしに、せめては言葉も懸け給はねば、なほやるせなく思ひ込みしに、[九]されば似るを友とする世の習ひ、節木松斎とて、[一〇]茶流の調度を預けおかせ給ふ坊主、この恋を請け取り、「命を懸けて情の御返事」と申せば、右京うち笑ひて、「法師の役は[一一]羽箒にて塵埃の心懸けあるべし。無用の媒なり。この文も壺のつめにもなりぬべき」と投げやり給へば、松斎是非なく、主膳にすすめて、右京を討つて他の国へ今宵中に立ちのくに極めければ、今日の夕を待ちて身拵へするを聞きて、はやのがれぬ所と思ひ定め、このあらまし采女にも知らせずしては、後の恨みも深かるべし、いはんもさすが武勇の甲斐はなし、我としづまる心の海、[一二]人を抱きて淵に沈む事あらじ、と[一三]思ひ定め、[一四]寛永十七年卯月十七日の夜なりけり。
折節その夜は雨もしきりに物淋しく、宿直人も眠りにおかされ、袖を敷寝して前後を弁へず、この時とうちむかふ、その様えもいはれず。[一五]雪ねたましき薄衣を[一六]引違へ、きよげに着なし、錦の袴すそ高に、常より薫物をかをらせ、太刀[一七]引きそばめ、しのびやかに立ちむかふにも、これは隠れなき匂ひに、

として、いつも刀の柄を鳴らしていたので、人々はみんな愛想をつかしていた。この男も右京を恋して、たけだけしい心をおさえかね、人づてに口説くべきではなかろうと、桜の木陰で右京をつかまえて、うるさい蟬のように泣いたり笑ったりしてかき口説いたが、言葉もかけてくれなかったので、主膳はいよいよやるせない思いに沈んだ。世の中は類をもって集まるというが、節木松斎という茶の湯の諸道具をお預けになっている坊主が、この恋を引き受け、「命をかけてお情けのご返事をいただきたい」と言うと、右京は笑って、「お茶坊主の役は、羽箒で塵埃を払っておればよいのに、いらぬ仲立ちだ。この手紙も茶壺の口の詰めぐらいにはなるだろう」と言って投げ出した。松斎は腹にすえかねて主膳をそそのかし、今夜のうちに右京を討って他国へ立ち退くことになった。主膳が夕方に備えて身ごしらえしていると聞いて、右京はもはや逃れられないと覚悟し、このあらましを采女にも知らせなくては、後で深く恨むことであろうと思ったが、打ち明けては武勇がすたると心を落ち着けて、人を巻き添えにすることもあるまいと決意したのは、寛永十七年四月十七日の夜のことであった。

寝覚め驚く人もありけれども、とがめずして通し侍る。主膳は広間をつとめて、鷹[一]づくし屛風に寄り懸り、持てる扇の要[二]はしるを、さしうつぶいて見る所を、はしり懸りて声を掛けて打つ程に、右の肩先より乳の下まで切り付けぬ。主膳も日来の勇みにたがはず、左の手にして腰の刀を抜き打ちに、しばし切り結びけれども、深手に痛み、「口惜しや」といふ声ともに倒れしを押し伏せ、二刀さし通し、かの法師めも一太刀と、灯[三]をしめし、すずろ[四]に時をうつしけるに、この太刀風に目を覚して、宿りの番組奥へ乱れ、御次[五]よりは口にかけ出、これぞ建久[六]のむかし、富士の狩場の周章もかくこそ。敷台[七]に[八]織田の何がし・建部四郎、いそぎ灯あらはし、右京を取りかこめ御前に出ける。

大殿あららかなる御声にて、「いかなる宿意[九]にてもあれかし、上をないがしろにしたる事いはれなし」。子細は徳松[一〇]主殿にあらためさせ給ふに、段々[一一]至極の始終を申しあぐるに、「御預り」との御意くだし給へば、右京を屋形の一間なる所をしつらひ、その夜はさま〴〵いたはりける。討たれし人の

ちょうどその夜は雨もしきりに降ってもの淋しく、宿直の侍たちも眠りにおそわれ、袖を枕に前後不覚のありさまであったが、この時とばかり打って出た右京の扮装は、言いようもないはなやかさであった。雪よりも白い絹の着物を清らかに着込み、錦の袴を裾短にはき、いつもより強く香木をたきしめ、刀を引き寄せて、こっそりと出て行ったが、隠しようのない匂いなので、気づいて目を覚ました人もあったが、とがめることもなく、無事に通した。主膳は広間に宿直していて、鷹尽しの屛風に寄りかかって、手にしていた扇の要のはずれたのを、うつむいて見ているところを、右京は駆け寄り、声をかけて斬りつけた。右の肩先から乳の下まで斬り下げたが、主膳も日頃の勇気を裏切らず、左の手で脇差を抜き放ち、しばらく斬り合ったが、深手に弱り、「残念だ」という声とともに倒れたところを、押し伏せて二刀で止めを刺した。仲立ちした茶坊主めも一太刀で、と灯火を吹き消してなんとなく時を過ごしている間に、この太刀音に目を覚ました宿直の侍たちが奥へ駆け込み、殿のお次の間に詰めていた侍たちは表の間に駆け出し、これこそ建久の昔の富士の狩場の騒ぎも、こうであろうと思われるばかりであった。

一　さまざまな鷹の姿態を描いた屛風。
二　はずれたのを。抜けたのを。
三　湿す。吹き消し。
四　わけもなく。なんとなく。そぞろ。
五　大名の居室の次の間で、そこに諸士が宿直した。後に御次番という。
六　曾我兄弟が富士の狩場に夜討ちをかけたのは、建久四年（一一九三）五月二十八日の夜。「建久四年のその昔、富士の裾野の御狩の夜、敵を討し騒動も、げにもかくやとしられけり」（藻屑物語）。
七　玄関先の板敷。
八　「かかりし所に織田の何某・建部四郎、ともし火顕し欠来り」（藻屑物語）。
九　年来の意趣。かねての恨み。
一〇　「植松主殿を召て事の起りたづねさせ給ふに」（藻屑物語）。
一一　すべて筋の通った一部始終。

親は、小笠原[一二]の家久しき細野民部なりしが、我が子の討たれし所へかけ込み、「腹切らんにはしかじ」と怒れる。母の親はさる御方の不便がらせ給ひ、常々歌の御会にも召しくはへられしに、夜すがらはだしにてかけ廻り、この事をふかく嘆き、「人を殺したる者、故なくたすけ、世に時めかせんの事は」と、泪袖にあまれば、見し人哀れをもよほし侍るに、御[一三]局宮内卿の子に、はじめは東福寺[一四]の首座たりしが、いつの頃還俗して後藤の何がし、馬に鞭をすすめ、しか〴〵の事申されけるに、道理に極まり、右京に切腹仰せ付けられければ、中立ちせし松斎も、吾と最後に及びける。

　釆女は、事のあらん前日より御暇申し請けて、神奈川の母の許にまかりけるに、左馬之助方より文いそぎて始終を書き付け、「この曙に浅草の慶養寺[一五]にて切腹」と申し遣はしける。返事に、「いちはやく御知らせうれしさ」のよし申して、その身は母に暇も乞はず、早舟をかりて御寺に着きしかば、夜も白々と明けぬ。

　山門廊下の陰にたたずみ、事の様子を聞くに、児・法師の

玄関の板敷に、織田の何某と建部四郎が急いで灯火をかかげ、右京をとり囲んで御前に連れ出した。

　大殿は荒々しいお声で、「どのような日頃の恨みがあろうとも、上をないがしろにするとは、もってのほかである」と仰せられて、徳松主殿に委細を調べさせられた。主殿がすべて筋の通った右京の仕業であったことを殿に申し上げると、「とりあえず、その方どもに預けおく」という仰せだったので、主殿は右京をお屋敷の一間に入れ、その夜はいろいろといたわった。討たれた主膳の親は、小笠原家に代々仕える細野民部であったが、わが子の討たれた所へ駆け込み、「腹を切るよりほかはない」と怒った。母親はさる高貴なお方がお目をかけられ、いつも和歌の会にお召しになっていたが、一晩中はだしで駆け回り、息子が殺されたことをひどく悲しみ、「人を殺した者を理由もなく助けて、無事に栄えさせては」と、さめざめと泣いたので、人々は哀れをもよおした。中でも御局宮内卿の子で、初めは東福寺の首座であったが、その後還俗した後藤何某は、馬で侍従のお家に駆けつけて、右の次第を言上されたところ、もっともな事だということになって、右京に切腹を仰せ付けられたの

一二 寛永当時の小笠原宗家は、寛永九年(一六三二)に播磨国(兵庫県)明石十万石から豊前小倉十七万石に移った小笠原忠真である。

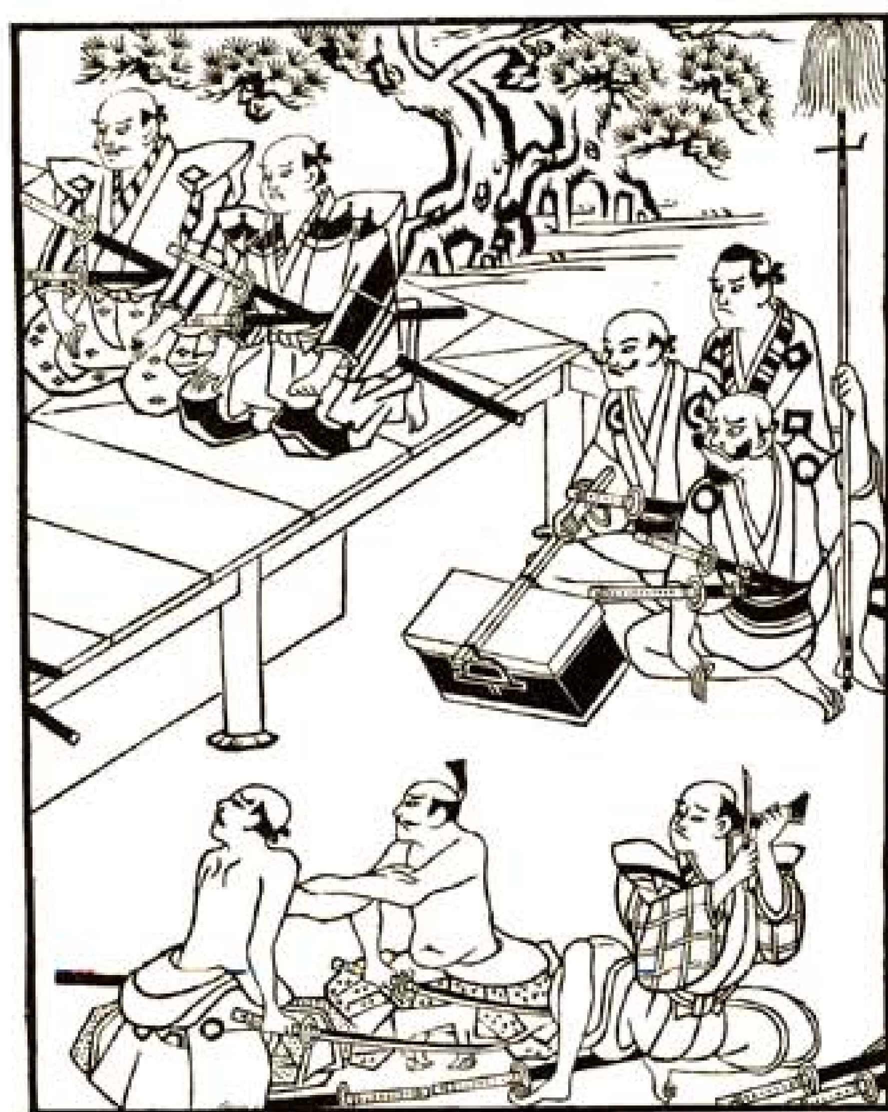
一三 「天樹院殿の御局刑部卿の御子に、初は東福寺の首座たりしが還俗して内藤正兵衛重信といふて、今御旗本に在けるが」(藻屑物語)。天樹院は、二代将軍秀忠の長女で、豊臣秀頼に嫁した千姫。

一四 京都市東山区本町にある臨済宗東福寺派の大本山。京都五山の一。「しゆそ」は禅宗六頭首の上に位する役僧で、第一座または座元ともいい、一山の座禅修行中、大衆の第一位に坐して模範となる僧。

一五 台東区今戸一丁目の慶養寺は曹洞宗。羽前国山形の竜門寺の末寺で、元和六年(一六二〇)、鳥越に創建。今戸に移ったのは貞享年中である。滝沢馬琴が文化六年(一八〇九)正月下旬にまた写ししたという『藻屑物語』の存否を慶養寺に問い合わせたところ、大正の関東大震災で焼失したという。

一 「斜め」はひととおり、世間並み。「かたほ」は不十分。世間並みであったり、できの悪い子供であったにしても。
二 あまりにも立派な仕打ちなので。
三 中国舶来の浮織りの綾。綸子の類。
四 露草は、夏、藍色の花をつける。古くからこの花で布を摺り染める。それらの総刺繍。
五 折目。

集りて、とりどりに沙汰しけるは、「今ここへ容顔なまめかしき若衆の腹をこそ切れ。げに[一]斜めにかたほなるだに、人の親の習ひいかが思ふめるに、まして[二]理に過ぎていみじければ、さこそ二人の嘆き給ふらん哀れさ」など言ふを聞くにぞ、いとど涙ふかきに、見物聞きつたへて集りければ、身をひそめて待ちけるに、新しき乗物、大勢つき〴〵ありて、外門にかきするゑてゆたかに出しけはひ、またなくはなやかなり。白うきよらかなる[三]唐綾の織物に、あだなる[四]露草の縫尽し、浅黄上[五]下織目ただしく、うららかにそこらを見渡し給ふに、卒都婆



女、伝令役の武士が正面に控える。右面左上の廊下にすわる武士二人は検死役。右下は右京の家臣三人、差し違えて殉死しようとする者、髻を切って出家しようとする者が、介錯の瞬間を待っている。

で、仲立ちをした松斎も自殺した。
采女は事件の前日から、お暇をいただいて神奈川の母の所へ行っていたが、左馬之助から一部始終を書いた急ぎの手紙で、「右京は今日の明け方に浅草の慶養寺にて切腹」と知らせてきた。「いち早くお知らせをいただき、うれしゅうございます」という返事を出して、自分は母に暇乞いもせずに早船を借りて、お寺に着いた時は夜も白々と明けていた。
采女が山門に近い廊下の陰にたたずみ、様子をうかがっていると、寺小姓や僧侶が集まって、いろいろと噂していた。「今ここへ美しい若衆がやって来て、切腹するそうな。世間並みであったり、またはできの悪い子であったにしても、親ともなればさぞ悲しい思いをするであろうに、ましてこの若衆の場合は、あまりにも立派な仕打ちなのだから、さぞご両親が嘆かれる事だろう。かわいそうに」と言っているのを聞いて、采女は涙にむせんだ。そこへ見物の人々が聞き伝えて集まって来たので、身をひそめて待っていると、大勢付き添った新しい乗物を寺の門前におろし、ゆったりと出て来た右京の装いは、このうえもなくはなやかであった。白く清らかな唐綾の着物に、隙間なく露草を刺繍し、水色の裃を折目正

[六]「寺中のこなたに咲おくれたる山桜、一際咲たるを見やりて、縦旧年花残レ梢、待ニ後春一是人心」(藻屑物語)。本文の「梢に残るを待つとも」は誤り。

[七] 介抱の意。切腹する人に付き添い、首を斬り落とす役。

[八] 畳み紙の音便。横に二つ、縦に四つに折った紙を幾枚も重ね、懐に入れておくもの。鼻紙や詩歌の詠草書きに用いた。

[九] 鬢の毛がまばらになったり、白くなったりすること。



左面は、江戸浅草の慶養寺で切腹する伊丹右京。脇差を突き立てた腹から血が吹き出し、後には介錯の吉川勘解由が太刀の鞘を払って控え、右には住職が経をとなえている。廊下に駆け上ったのは母川采

の数の立ちけるは家々の涙ぞかし。[六]寺中の左の方に、咲きおくれたるにやあるらん、山桜の残りすくなきを詠めて、「縦旧年花梢残待後春是人心」と吟じたるは、采女なる人をかこちていふなるべし。

　錦の縁取りし畳に座して、[七]介錯の吉川勘解由を招き、鬢の美しげなる、押し切り、[八]畳紙に包みて、「これなん都堀川の母の許へ、今はの形見と、便りに言ひ送り給はれ」とさし置く所へ、和尚紫衣をまくり手して、生者必滅の理をしめし給へば、「この世に長生をたもつ美人、[九]鬢糸をまぬかれず。

しく着て、大様にあたりを見渡すと、たくさんの卒塔婆が並んでいた。家々の涙の種であろう。境内の左の方に、咲き後れたのであろう、散り残った山桜のあるのを眺めて、「たとひ旧年の花梢に残るを待つとも、後春是人心」と右京が吟じたのは、あとに残る采女のことを悲しんでのことであろう。

　右京は切腹の座である錦の縁を取った畳にすわって、介錯の吉川勘解由を招き、美しい鬢髪を切り取って懐紙に包み、「これを京都堀川の母の所へ、私の臨終の形見といって、送り届けてください」と言って差し出した。そこへ和尚がやって来て、紫の衣の袖をまくり上げ、生者必滅の理をお説きになると、「この世で長生きする美人は、必ず髪が薄く白くなりましょう。容色が衰えないうちに切腹するのは、これこそ成仏と申すもの」と言って、右京は袂から青い地色の短冊を取り出し、静かに引き伸ばして硯を借り受け、「春は花秋は月にとたはぶれて詠めしことも夢のまた夢」と書き残すやいなや、腹を掻き切った。勘解由が介錯して立ち退く時、采女が駆け込み、「頼む」と言ったかと思うと、腹を掻き切ったので、これも首を打ち落とした。今年十六歳と十八歳を最期として、寛永の春の終

一容色新なる本意達して、自ら剣の上にふす事、これ成仏」と、袂より青地の短尺取出し、心静かに巻きかへし、硯を乞ひて、二「春は花秋は月にとたはぶれて詠めし事も夢のまたゆめ」と書き置きて、いなや腹かき切れば、介錯して立ちのけに、釆女走りかかり、「頼む」とばかり声して、腹搔き破れば、これも首かけて打ちぬ。今年十六・十八を一期として、寛永の春の床に闇とはなりぬ。年頃召し使はれし家の子ども、この哀れに思ひあひて、指し違へるもあり、また、もとどり切りて世を捨てて、主人の菩提を弔ひけるとなり。

今に至るまで、浅草の慶養寺に二人の墓を築き籠め、辞世の歌を三位牌に押して、東の空に名を高く残しぬ。四志賀左馬之助も、世にありてせんなしと、思ふ程を書き残して、七日に当り空しくなりぬ。色々哀れ、この時見る事ぞかし。

五色に見籠むは山吹の盛り

六長屋住ひの気晴しに、七虎の御門を出て行くに、果てしもな

りに、闇と消えてしまった。長年召し使われていた家来たちは、この哀れに胸を痛めて、刺し違える者もあり、髪を切って出家し、主人の菩提を弔ったという。

今にいたるまで、浅草の慶養寺に二人の墓を築き、辞世の和歌を位牌に書いて、関東の空にその名を高く残した。志賀左馬之助も、生きていてもしかたがないと、思いのたけを書き残して、初七日の日に自害してしまった。いろいろと哀れな事がまとまったものである。

色に見籠むは山吹の盛り

大名屋敷の長屋住いの気晴しに、虎の御門を出て行くと、果てしもない武蔵野の末に渋谷という村があり、金王桜は今を盛りと咲いていたが、そのように血気盛んなこの若侍は田川義左衛門といい、少年時代は四国にならぶ者のない美少年として、その名は松山で広く知られていた。事情があって浪人したが、幸運にもまもなく帰参がかない、元通りの知行六百石で召し抱えられた。

思うとおりに事が運んだこの春をうれしく思いながら、義左衛門が目黒の不動に行くと、境内の身を清める滝のそばに、風流な美少年がたたずんでいた。水色の

一「容色あらたなる時本意を達して自剣の上に臥す事、是即心成仏にあらずや」(藻屑物語)。「美人必ズ衰老ヲ免レズ、容色新ナル時情有ルベシ」(心友記〈寛永二十年刊〉)。『麓之色』巻五に鉄岩禅師の詩とある。二「春は花秋はもみちとたはふれて」(藻屑物語)。三「辞世を位牌のうらに彫つけ、今の世までも此寺に朽ぬその名を残しける」(藻屑物語)。四『藻屑物語』に、左馬之助は死におくれて逐電しようとしたので、侍従の命で殺害されたとある。

❖江戸詰めの津山藩主の寵童奥川主馬を見そめ、浪人して物乞い同様となった田川義左衛門を自宅に迎え入れた主馬は、見そめて以来の義左衛門の心の記録を見て、殿へ衆道の一分で念者にしなければならぬゆえ、お手討ちをと願い出たが、閉門の後許されたので、義左衛門は大和葛城山近くに隠遁した。

五色っぽい若衆に恋したのは。六大名屋敷は周囲を長屋造りにし、そこに下級の勤番侍を住まわせた。よって所々に長屋門があった。男ばかりの殺風景な暮し。七江戸城外郭の一門。現、千代田区霞ヶ関三丁目の東南部、虎ノ門の交叉点のあたり、「虎之門趾」の石碑がある。八現、渋谷三丁目の渋谷八幡宮の境内にあった名木で、源頼朝が藤原泰衡を討伐した帰途、渋谷土佐守家重の家に宿った時、その子金王丸の忠誠をよ

き野末に渋谷といふ里に、金王桜も今血気盛りなる若侍田川義左衛門とて、少年のむかしは四国にならびもなき美形なり。名は松山に高し。子細ありて浪人の首尾よく、間もなく、先知六百石にて済みぬ。

　思ひのままなる春をうれしく、目黒の不動に心ざしけるに、身を清むる滝のもとにして、風流なる美少、玉縁笠に浅黄紐の仕出し、髱髪の色ふかく、蕣染めの大振袖、ぬき鮫の大小、この取りまはしの小細なる腰支、左手に山吹の婀娜しく花をかざして、静かに豊かなるを、人間とは思はれず、姑射の神人牡丹に化すかと疑はれ、うか〳〵と御跡をしたひ行くに、いづれか大名の御慈愛と見えて、横目らしき坊主二人、めしつれられし若党あまた、馬も跡に引きつれば、大方ならぬ御身ぞと、万の事を忘れて行くに、両人の法師も酒機嫌の次第に覚えず小歌出て、程なく小六の宮の辺にて、桐紋ある御門に入り給ふ。辻番の者に尋ねければ、奥川主馬殿と申して、御小姓の由語りける。

　帰りてその夜も夢に両分の前髪見通し、明の日も御門先に

紐をつけた玉縁笠の下に艶やかな髱が見え、朝顔染めの大振袖を着て、抜き鮫鞘の大小を差した腰つきは、いかにもすんなりとして、左の手に優しく山吹の花をかざした静かに豊かな姿は、とても人間とは思われない。藐姑射山の美しい仙人が、牡丹の花に化けたのかと疑われるほどであった。義左衛門がうかうかと、その若衆の跡を慕って行くと、どこかの大名のご寵愛の若衆とみえて、お目付役らしい坊主二人と、若侍が大勢供をしていた。乗馬もあとに曳いているほどであるから、並々でないお身の上であろうと思いながら、茫然としてついて行った。そのうちに二人の坊主も一杯機嫌で小唄をうたいだし、まもなく赤坂の氷川神社の近くで、桐紋のついたご門に入って行った。辻番の者にきくと、奥川主馬殿といって、お小姓ということであった。

　義左衛門はその夜長屋に帰って寝た夢にも、その若衆の両分けの前髪姿を見続けた。翌日も若衆がはいったご門の前に立ちつくし、ご奉公もそっちのけになったので、にわかに仮病をつかってお暇をいただき、麹町二丁目の南横町に借家して、暇な浪人の身となった。三月二十四日から、同じ年の十月初めまで、毎日お屋敷に通ったが、二度と逢えず、手紙で

みし、桜を植えて金王桜と名づけたという。九 愛媛県松山市の松山城は、寛永十一年(一六三四)、徳川家康の異父弟久松(松平)定勝の子定行が伊勢桑名十一万石より入城、松山藩十五万石を領有して明治維新に至る。一〇 もと領していた知行(支給された領地)。一一 目黒区下目黒三丁目の目黒不動は天台宗寛永寺の末寺で滝泉寺といい、垢離をとる独鈷の滝がある。一二 万治の頃、江戸で流行した編笠。笠の縁を美しく組んだものとも、革で縁をとったものともいう(柳亭筆記)。一三 結髪の後ろへ張り出す部分。たぼ。一四 紺または、紫の絞り染め(括り染め)かという。一五 鮫皮の粒を砥石で磨き、下地の鮫の紋をあらわした鮫鞘。一六 原本「小細支」。腰支は、腰つき。「遊仙窟云、細細腰支 師説古之波勢」(和名抄)。一七『遊仙窟』の字訓。一八 中国で仙人の住むという想像の山。「藐ハカナル姑射ノ山ニ神人ノスメルアリ。肌膚ハ氷雪ノゴトク、淖約カナルコト処子ノゴトシ」(荘子・逍遥遊篇)。一九 行状監視の目付役。二〇 江戸赤坂、氷川大明神の俗称。慶長の頃、同所に住んでいた関東小六が明神を信仰して御堂を造営したための称(江戸咄)。二一 美作(岡山県)津山藩祖森忠政(寛永十一年没)は、初め豊臣秀吉に仕えて金山七万石、のち慶長八年(一六〇三)、徳川秀忠により津山城十八万六千石に封ぜられたが、森家は四代長成の

没後、元禄十年(一六九七)に改易となった。忠政は森蘭丸の弟。桐紋は秀吉より下賜。三二 江戸市中の武家屋敷の辻々に、大名・旗本が自警のために設けた番所。三三 若衆の前髪は二つに分けて結う。

一 参勤交代の任が終って。

二 身のまわりの。

三 日本橋から品川へ二里(約八キロメートル)、品川から川崎へ二里、川崎から神奈川(横浜)へ二里の道程。

四 神奈川県中郡大磯町の西端にある歌枕。「心なき身にもあはれは知られけり鴫立つ沢の秋の夕暮」(新古今 西行)。

五 静岡市と静岡県志太郡岡部町の境にある宇津の山にある峠で、東海道に当る。「うつの山のたうげは道せばく、一騎打ちのなん所なり」(諸国案内旅雀〈貞享四年刊〉)。よって袖摺り岩という。

六 『遊仙窟』の字訓。

七 『遊仙窟』の字訓。

八 『遊仙窟』の字訓。

立ち暮らし、御奉公も外になれば、俄に悩みつくりて御暇申し請け、麹町二町目の南横町に棚をかりて、身を隙になし、三月二十四日より同じ年の十月初めつ方まで毎日通へど、二たび御面影を見る事もなく、文して嘆く便りもなく、明暮恋に責めらるる中に、この国の守[一]御暇を下され、神無月二十五日に江戸御発駕に極まりぬ。

　何国までもと思ひ立ち、俄にかり宿仕舞ひ、見え[二]わたりたる諸道具を売り払ひ、酒屋・肴屋に済まし、小者にも暇をとらせ、独身となつて、かの御大名の跡しのび行くに、その日は[三]金川泊り、あけの日大磯に暮れて、[四]鴫立つ沢の辺に焦るる美少の駕籠を立てさせ、浜のかたの戸を半ば明けて、「心なき身にも哀れは」の古歌を吟じておはしけるに、眼を居ゑて見込めば見合はせ給ひ、ここを別れて又見る事もなく、寝ぬに夢路をたどり、[五]宇津の山の切通し、袖摺り岩の陰に隠れ、乗物窓を覗きて、思はずも[六]潸然みしに、恋君も心にかかり初めしや、[七]千嬌ある御顔ばせにて[八]婀娜しくも見かへり給へり。

　なほいや増しに憧れ、日を重ね行くに、それより拝顔もせ

思いを伝えるつてもなく、毎日恋い焦れるうちに、その大名は参勤の任務が終り、十月二十五日に江戸出発と決まった。

　義左衛門は、どこまでもついて行こうと決心して、にわかに借家をたたみ、身のまわりの諸道具を売り払い、酒屋や魚屋の借金をすまし、下男にも暇をやってひとりになり、その大名の跡をこっそりとつけて行った。その日は神奈川泊り、翌日は大磯で日が暮れた。鴫立つ沢のあたりで、恋する美少年が駕籠をすえさせて、浜の方の戸を半ば開けて、「心なき身にもあはれは」という古歌を吟じておられた時に、思いをこめて見つめると、若衆も視線を交えてくださった。ここで別れてまた見る事もなく、寝もしないのに夢見るような気持で、宇津の山の切通しにさしかかり、狭い袖摺り岩の陰に隠れて、若衆の乗物の窓をのぞいて思わず涙ぐむと、恋する人も気になり始めたのか、情のこもったお顔で優しく見返ってくださった。

　いよいよ恋い焦れて、日を重ねて跡を慕って行ったが、その後はお顔を見ることもなく、ようやく殿のお国の作州津山城下に着いた。義左衛門はほど近い出雲国に落ち着いて、暮しのためになれない天秤棒をかつぎ、その年も暮れていった。

ずして、やう〳〵作州の津山にて見をさめ、出雲の国に入りて、世を渡る業とて朸に肩をいたませ、その年も暮れ過ぎ、あくる卯月の初めに御参勤、また武州までの道中に御顔見合はす事、桑名の渡し場、汐見坂、鈴の森にて三たび見送り、又江戸詰め一年、毎日屋形の外より嘆き、姿もをかしくなりて、いかに恋なればとて、武士たる者の身の程をしらず、次第に憔悴とおとろへるは、又もなき因果なり。

あけの年又国本にしたひ行くに、見初めて三年その身を捨てければ、袖口も裂び、襟から綿をあらはし、脇指ばかりになつて、金谷の宿はづれにて、乗懸はるかに見入れける。主馬もこの男を見定め、さては我に執心を懸けつる事もと、気に移つて自然と哀れに思はれ、「横目の透もがな。尋ねて、せめては言葉をかはして、思ひ晴しに」と、中山の松陰に待たせ給ふに、男は追付きがたく、その後は行方もしれず。何心もなき折節に、この者の事思し出さるるこそ情ふかし。

御入国の十日も過ぎて、義左衛門出雲に着きしに、足をいたませ、むかしの形はなくて、浮世もかぎりに近し。露の命、

翌年の四月の初めに、殿はまた参勤交代で江戸へ向かわれた。義左衛門もまたお跡を慕い、道中で若衆と顔を見合わせたのは、桑名の渡し場と、汐見坂と、鈴ケ森の三か所だけであった。また江戸勤番の一年間、毎日お屋敷の外から恋い慕ったので、姿も変になり、いかに恋だからといって、武士ともあろうものが身の程もわきまえず、しだいにやつれていったのは、またとない因果である。

翌年もまた国元へ慕って行ったが、若衆を見そめてから三年間も身を捨てたので、袖口もほころび、襟からは綿がはみだし、脇差だけとなって、金谷の宿の出はずれで、馬上の若衆を遠くから見つめていた。主馬もこの男を見覚え、さては私を恋したのかと情が移って、なんとなくいとしくなった。「目付役の隙もないものか。せめては逢って話し合い、積もる思いを晴らしてやりたいものだ」と、佐夜の中山峠の松陰で待っていたが、男は追いつくことができず、その後は行方不明となった。主馬はなんでもない時に、ふとこの男のことを思い出したというが、まことに情けの深い若衆である。

殿様が帰国されて十日も過ぎてから、義左衛門も出雲に着いたが、足を傷つけ、以前の姿はなくなり、命も絶え絶えとな

九 岡山県津山市。津山藩の城下町。→四〇七ページ注三。
一〇 天秤棒。
一一 三重県桑名市。東海道の旅客は桑名から七里（約二八キロメートル）の海路を宮（熱田）へ渡った。
一二 静岡県湖西市にある東海道の坂路。「ここよりふじ山みゆる。又坂の上にのぼれば、とうとうみの灘みゆる名所なり」（諸国案内旅雀）。
一三 現、東京都品川区南大井二丁目。刑場で有名。
一四 痩せ衰えること。形容詞的に使用している。「憔悴とおとろへ果」（近代艶隠者一の四）。
一五 「ほころび」の転。「未だ脇の下のふくろびたが」（きのふはけふの物語）。
一六 静岡県榛原郡金谷町金谷。大井川右岸の宿駅。対岸は島田。
一七 静岡県掛川市の日坂と金谷との間にある険阻な坂路の佐夜の中山。

一 夜勤。

二 斬る理由のない人。

三 突然で失礼だが。

恋の種、かくなりてもこの身を惜しみ、おのづから袖乞ひとなつて、朝の霜を蓑笠によけ、夕の嵐に足をちぢめ、昼の内は野末に忍び、御[一]夜詰すぎて御帰り姿見るまで、これを楽しみに、毎夜御門前に通ひぬ。

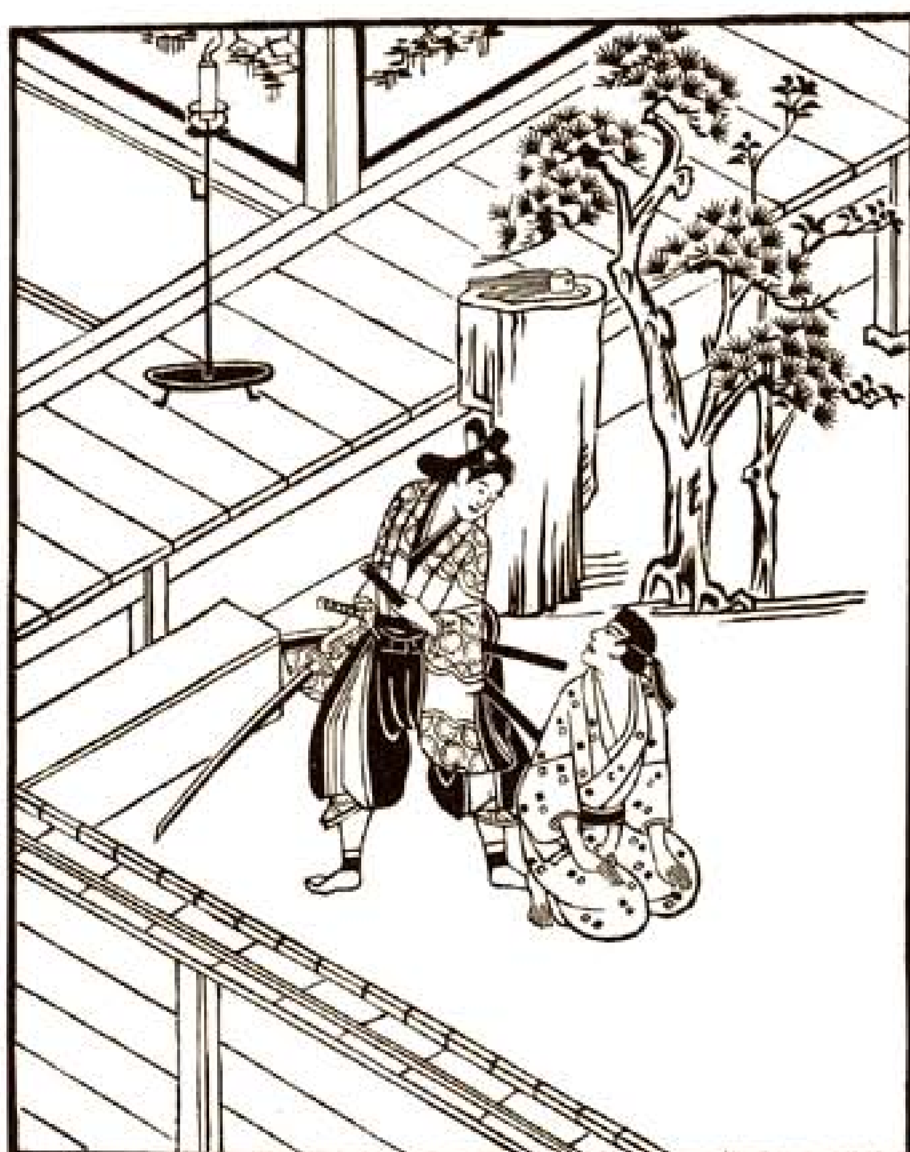
ある時、主馬、若党の九左衛門を潜かに時雨ふる夜の淋しさを語り、「侍の家に生れ、我いまだ人を手に懸けて切りたる事なし。その時にさし当りては心元なし。是非今宵の中に、心ためしさせよ」と仰せける。「御器量の程、常々見立て申すに、おくれさせ給ふ事には非ず。無道に人を切る、天のとがめもあるべし。時節を御待ち」と申せば、「[二]筋なき人を切るには非ず。最前むかひ屋敷の大溝を見るに、世にありて甲斐なき非人めに、何にても願ひを叶へ、その跡に命をくるるか問へ」と仰せける。「あの身にも惜しむは命」と申す。それより乞食が枕ちかく立ち寄り、「[三]卒爾ながら無心あり。世間の墓なき事を思ふに、人間の一生は、今降る雨の晴間も定めがたし。ことに其方醜い身となり、ながらへて益のあるまじ。我らが頼みし若旦那の望み、何にても三十日願ひのまま

っていた。どのみち露の命ではあるが、恋のためには、こんなになってもわが身を惜しみ、自然と物乞いになって、朝の霜を蓑笠でよけ、日暮れの嵐に足を縮め、昼間は野末に隠れて、夜更けに主馬がお城の夜勤を終えて帰って来る姿を見るだけを楽しみに、毎晩ご門前に通っていた。

ある時、主馬は若党の九左衛門をこっそり部屋に呼んで、時雨降る夜の淋しさを語り、「私は侍の家に生れながら、まだ人を手にかけて斬ったことがない。このままだといざという時に心細い。ぜひ今夜のうちに試し斬りをさせてくれ」と言った。「ご立派なご気性であることは、ふだんからお見受けしております。その場に臨んで気後れなさるようなことは決してございません。無理に人をお斬りになっては、天の咎めもありましょう。自然の時節をお待ちなさいませ」と九左衛門が言うと、「いや、斬ってはいけない人を斬るというのではない。最前、向かい屋敷の大溝を見ると、生きていても仕方のない物乞いがいた。そいつに、何なりと願いをかなえてやるから、そのあとで命をくれるかどうか問うてみよ」と言った。九左衛門は、「あんな身の上になりましても、惜しいものは命でございます」と言ったが、まもなく物乞いの枕も

四「奴我」の約。自分の謙称。

五 前文に「三十日願ひのままに暮らさせ」とあるが、ここは物乞いの望みにまかせ、の意と解したい。



大名の寵童奥川主馬を見そめて三年余、物乞いにまで身を落として慕い続ける田川義左衛門。試し斬りを口実に義左衛門を庭に引き入れた主馬は、その真情を知り心うたれる。抜刀した振袖の若衆が主馬。

に暮らさせ、その以後刀ためしになりなば、跡弔ひての御事」とあらまし語り聞かせば、この男少しも嘆かず、「とても春をまたぬ身の、寒夜の難儀しのぐに、息も絶え〴〵なり。[四]奴れは親類の末もなければ、かさねてとがむる人もなし。この方願ひの最後」と起きあがるを、屋敷につれてはじめを申しあぐれば、まづ行水をさせ、借着物に替へ着せ、中間部屋に入れて、[五]望み十日が間献立をとり、数々のもてなし、約束の日切なれば、広庭に夜更けて引き出し、「己命をくれるに偽りはなきか」。非人首さしのべ、「御手打ち」と申す。袴か

とに近寄り、「突然で失礼だが、頼みたいことがある。世の中のはかないことを思うと、人間の命は、今降っている雨の晴れ間よりも頼りない。ことにその方は、そんな醜い身となり、これ以上生きながらえてもしかたがあるまい。わしが仕えている若旦那のお望みなのだが、これから三十日間、何なりと願いのとおりに暮させ、その後試し斬りをさせてくれたら、あとは立派に弔ってやるという仰せだ」と、あらましを言い聞かせた。物乞いはそれを聞いて少しも驚かず、「この体では、とても春まで生きられそうもありません。この厳しい寒夜の難儀をしのぐのに、息も絶え絶えです。私めは親類のはしくれもございませんから、斬られた後でとやかく申す者はございません。願ってもない最期です」と言って起き上がるのを、屋敷に連れて行って、一部始終を申し上げた。主馬はまず物乞いに行水をさせ、着物を着替えさせて中間部屋に入れ、望みにまかせて十日の間馳走を調えてやり、いろいろともてなした。約束の日限がきたので、主馬は夜更けに、男を広庭に引き出し、「貴様、命をくれるというのはほんとうか」と言うと、男は首をさしのべて、「どうぞお手討ちを」と言う。主馬は袴の股立ちを取り、庭の白

一 切刃をつぶした刀。

二 表門と奥書院との間にある小門。

いとり、白洲に飛び下り切り付けられて、胴骨も動かず。この脇指刃引き一なり。いづれもこれを不思議の時、下々残らず中門二の外に追ひ出し、書院に座して、かの男に顔をあげさせ、「その方は見覚えたり。以前は侍ぞ」と尋ね給へば、町人の筋目を申す。「いや／＼隠し給ふな。我に執心浅からぬ思し召し入れ見請けたり。今となつて包み給ひ、いつの世に誰にか語り給ふぞ。さては我見違へか」と仰せける時、肌より竹の皮に包み込めし物を取り出しあぐれば、柿地の錦の守り袋をささげて、「恐れながら、心底これに」と申しも果てず、涙は玉をならべける。紫の緒を解きて見給ふに、薄紙七十枚継ぎて、目黒の原にて初恋より、今日までの思ひを筆につくしける。

　四五枚読み兼ね巻きかへし、かの男は九左衛門に預け置き、その身は曙早く登城して、御前に出、「それがし、ある人に思ひ込められ、念者にもたずしては若道の一分立たず。自由仕れば、御掟を背き、年来の御厚恩を忘れ侍る。とかくは御手打ちに」と申し上ぐる。「子細申せ」との御意の時、右

洲に飛び下りて男に斬り付けたが、びくともしない。その脇差は刃がつぶしてあった。家来どもがそれを不思議がる時に、主馬はみんなを中門の外に追い出して座敷にすわり、その男の顔を上げさせ、「その方は、見覚えている。以前は侍であったろう」と、尋ねると、町人の家柄を言う。「いやいや、お隠しなさるな。私を深く思ってくださる方とお見受けいたしました。この期に及んでお隠しになり、いつの世に誰にお打ち明けなさるのですか。さては私の見違えであったか」と主馬が言った時に、男は肌身につけていた竹の皮に包んだ物を取り出し、その柿色の錦の守り袋を差し上げて、「畏れながら、拙者の本心はこのとおりでございます」と言い終らないうちに、さめざめと涙を流した。主馬がその守り袋の紫の緒をほどいて見ると、薄紙七十枚を継いで、目黒不動で見初めてから今日までの恋心を、書き尽してあった。

　主馬は四、五枚読んだが、それ以上は読めなくなって、その男を九左衛門に預けておき、自分は朝早く登城して御前に出仕し、「私はある人に思われ、その人を兄分にしなくては、男色の意地が立ちません。といって我儘をいたしましては、御掟にそむき、これまでの厚いご恩を忘

の一巻を、大殿半時あまり、奥まで人しれず御読みあそばし、「まづ罷り帰れ。これより詮議の後申し渡すべし」と仰せられけるに、「私宅に御帰しあそばしては、そのまま不義仕るなれば、これにて切腹」とかさねて御訴訟、しばらく御思案あつて、大横目[三]に仰せ付けられ、閉門と申し渡され、主馬宿に帰りて、その日より浪人を衣類を改め、大小を渡し、命ぎりの戯れ、前代になき衆道ぞかし。身の取置きもして、死をまつ事何か思ひ出なるべし[四]。

それより二十日目に閉門御許され、その上丸袖[五]の時服五重、金子三十両頂戴して、思ひの外なる首尾なり。浪人の儀、「明日見立てて[六]江戸へ送り申せ」との御事、有難さ、「いつの世にかはこの御恩はおくるべし」と、朝をまたず旅の名残、十二月二十七日に馬をむけて見送る者ども、兵庫より国にかへし、東武には下らず、和州葛城の山近く、榎の[七]は井の水ある里に隠れ住居して、髪散切に夢元坊と名を替へ、物いはず外に出ず、笹垣の奥深く岩間づたひの筧の流れ、少時も住まらぬを慰みて、聖言[八]の跡を楽しみ、この心の清く涼しく、今

三 横目（お目付役）の長。

四 「何か思ひ出ならざらんや」とあるべきところ。どんなにか満足なことであったろう。

五 成人用の着物。時服はその季節相当の衣服。→三九六ページ注六。

六 日柄（その日の吉凶）を見立てて。

七 古代、奈良県高市郡明日香村の豊浦寺（現存せず）の近くにあった井戸。「葛城の寺の前なるや、豊浦の寺のにしなるや、えのはゐにしらたましづくや」（催馬楽・葛城）。

八 聖人の言葉の跡。

れることになります。どうぞお手討ちになさってください」と申し上げた。「事情を申すがよい」という殿の仰せに従って、男が差し出した一巻を差し上げると、殿は半時余り、こっそりと最後までお読みになり、「そなたはまず帰宅いたせ。これから取り調べて処分を申し渡そう」と仰せられた。すると主馬は、「私宅にお帰しあそばしては、そのまま不義をいたします故、これにて切腹を」と、再びお願い申し上げた。殿はしばらくご思案なさって、大横目に仰せ付けられ、閉門を申し渡された。主馬はわが家に帰って、その日から浪人の着物を着替えさせ、刀・脇差を渡し、命の限りと愛し合ったのは、またとない衆道である。身の回りの始末もして、死を待つだけの身には、さぞ満足なことであったろう。

　それから二十日目に主馬は閉門を許され、そのうえに丸袖の着物を五つ重ねと金子三十両をいただき、思いがけない結果となった。浪人もお咎めはなく、「明日、日柄を見立てて江戸へ送り帰せ」という仰せであった。義左衛門は感激して、「いつになったらこのご恩にお報いできようか」と、夜明けを待たずに旅立った。十二月二十七日に、馬で見送って来た人人を兵庫から国元へ帰し、自分は江戸へ

世に美を尽くす時花扇さへ持たず。

終

の道をかえて、大和の葛城山に近い、榎の葉井の水のあったという村に隠れ住み、髪を散切りにして、夢元坊と名を変え、ものを言わず、外に出ず、笹垣の奥深くに注いでいる岩間伝いの筧の流れが、しばらくもとどまらないのを眺めては慰んでいた。聖人の残した言葉を楽しみ、今世間で流行っている美しい扇も持たず、心清く涼しく生涯を送った。

本朝若風俗

男色大鑑

絵入

四

巻四　あらまし

一　情に沈む鸚鵡盃　かつては島原一の大臣客といわれた新在家の長吉が、遊女ぐるいをやめて、公家方の十六歳の美女藤姫に惚れ込み、妻として熱愛した。金のあるのにまかせて、思いのままの華美な暮し、桃の節句には鸚鵡貝の盃流しなどをしたりして、誠に華清宮の楽しみというべき栄華を尽していた。ところが、懐妊した藤姫が急死する。深く嘆いた長吉は出家しようとするが、親類に止められ、百日もたたぬうちに藤姫以上の美女を送られるが、長吉は、もはや女には飽きたと見向きもせず、その後は小姓を置いて男色に転じてしまった。

二　身替りに立つ名も丸袖　金沢の野崎専十郎は、女と見まごう風俗ながら心根強く、命を何とも思わぬ美少年。専十郎には、人知れず深い男色関係にある竹島左膳という念者がいた。その専十郎に今村六之進が恋慕して口説くが聞き入れられず、左膳との念比を知って無理にも左膳から貰い受けようとする。専十郎は六之進に「左膳を討てば言う事をきく」と偽り、左膳の身代りとなって六之進に討たれる。それを知った六之進は、専十郎に変装し、「六之進と専十郎があなたを裏切った」と下男に注進させて押しかけ、左膳に切られる。事実を知った左膳も、六之進の死骸に腰かけて自害した。

三　待ち兼ねしは三年目の命　和歌山に隠れなき美少年菊井松三郎は、瀬川卯兵衛と深い男色関係にあった。竜灯見物の折の誤解もとけ、二人は一層親しみあっていたが、卯兵衛の友人横山清蔵が横恋慕、松三郎を譲れとせまる。卯兵衛の迷惑これに極まり、決闘を決意するが、清蔵の申し出により、松三郎が元服する三年後に果し合いをすることを約し、親しく交りつつ平穏な日々を送る。三年目の十月二十七日、卯兵衛と清蔵は野寺に行き、位牌も用意して刺し違えて死んだ。事情を知った松三郎は、出家して二人を弔うことを勧められたにもかかわらず、いさぎよく自害した。

四　詠めつづけし老木の花の頃　江戸谷中の門前筋に住む二人の老人、いい後生友達かと思われたが、実は、昔筑前の城下で美少年の名も高き玉島主水と武芸の達人豊田半右衛門の二人が、主水に横恋慕した男を討ち果して世間をはばかり隠れ住んでいたのだった。二人は今六十三歳と六十六歳、それでも昔に変らぬ心情を持って深く心を交わし合い、女の顔も見ずにこの年まで過ごして来た。折柄三月、上野の花見に来てにわか雨にあい軒先を借りた女たちが、家の中をのぞくと、手もとの竹箒をひっさげて追い払うほど。広い江戸にも稀な女嫌いであった。

五　色噪ぎは遊び寺の迷惑　尾張熱田神宮の神主大中井兵部太夫の一子大蔵と、高岡川林太夫の子外記とは、深い男色の契りを結び、いつも二人一緒だった。ある時、若衆友達大勢が寺に集まり、住持の留守を幸いに、芸尽しなどで大騒ぎ、その後、歌舞伎狂言の真似をしていた時、外記が誤って大蔵の首を打ち落としてしまう。外記は自害しようとするが止められる。大蔵の親兵部太夫は、我が子の事は外にして国守に外記の命乞いをし、外記の許嫁であった娘とともに貰い受けて祝言させ、家を譲って親子の語らいをなした。

男色大鑑　本朝若風俗　第四巻

目録

一　女郎。遊女。

二　産婆。助産婦。

三 待ち兼ねしは三年目の命

恋詩のうたがひ晴るる事

武士は情と義理とやめぬ事

位牌取りかはして身をしる事

四 詠めつづけし老木の花の頃

年は寄る物ながら心は昔の事

生れつきの丸額も物ずきの事

竹箒に女は散り行く桜見の事

五 色噪ぎは遊び寺の迷惑

現の太刀さきいかなる因果といふ事

外記が命乞ひふたつ物がけ[一]の事

覚えなき美女身捨つる心中の事

目録終

一 二つに一つの、あぶない勝負。「追付け、生死の二つ物掛け、これぞあぶなし」(五人女三の二)。

❖これも町人の男色が主題であるが、町人とはいえ公家から愛妻を得た上層町人で、その愛妻を失った悲しみから、小姓をかかえて男色ですますというのであるから、衆道物語とはいえない。

二 おうむ貝(直径二〇センチほど)の背を

情に沈む鸚鵡盃[二]

今の都室町通りに、表口もさのみ広からぬ屋づくりを、柱は真檜、椙丸太、松の皮付き、欅の八角、又は唐木[三]をつかひ、ひとつひとつ品を替へ、色々の椽鼻[四]、壁も五色に、格子も世にある程の竹を揃へける。よろづを嶋[五]の勘左衛門と言ふ古筆[六]見と指さしてをしへける。同じ京には住みながら、かくれもなきこの者を知らず。子細は、松原通り[七]を西へ大宮丹波口の方へ日参して、ありがたき事ここより外はと、黒谷[八]は浄土宗やら、祇園殿[九]の社は南むきやら、玉鉾[一〇]の道を一筋に女郎ぐるひに悩み、世々の遊女の筆跡、かたのごとくに集め置きしが、「我が見ぬ世の艶文もあれば、疑ひなく正筆を極めたし」といひけるにぞ、おのおの興を覚しぬ。

　この男、その頃は西島[一一]第一の大臣、新在家[一二]の長吉様と名によび、花は咲き[一三]はじめの吉野を手に入れさせ給ひ、後は桜の峰つづき葛城[一四]といへる太夫も中絶えて、さる御所方[一五]の本恋に

情に沈む鸚鵡盃

今の都の室町通に、表口はさほど広くない構えであったが、柱は槙、杉丸太、皮付きの松、八角の欅、または唐木を使い、一本一本趣を変えてある家があった。椽もそれぞれ違い、壁も五色にいろどり、格子もあらゆる竹を揃えてある。これは島の勘左衛門という、どんな古い筆跡でもわかる鑑定家の住いだという事であった。同じ京都に住みながら、この名高い人物を知らない男がいた。というのもこの男は、松原通を西へ向かい、大宮通の丹波口を西へはいる島原へ日参して、ありがたい事はここよりほかにはないと思い込み、黒谷は浄土宗やら、祇園の社は南向きやら一向に知らず、ただ一筋に女郎買いに打ち込み、そして人並みに代々の遊女の筆跡を集めていたが、「自分にはわからない昔の恋文もあるから、その真偽を確かめたい」と言いだしたので、これには人々もあきれてしまった。

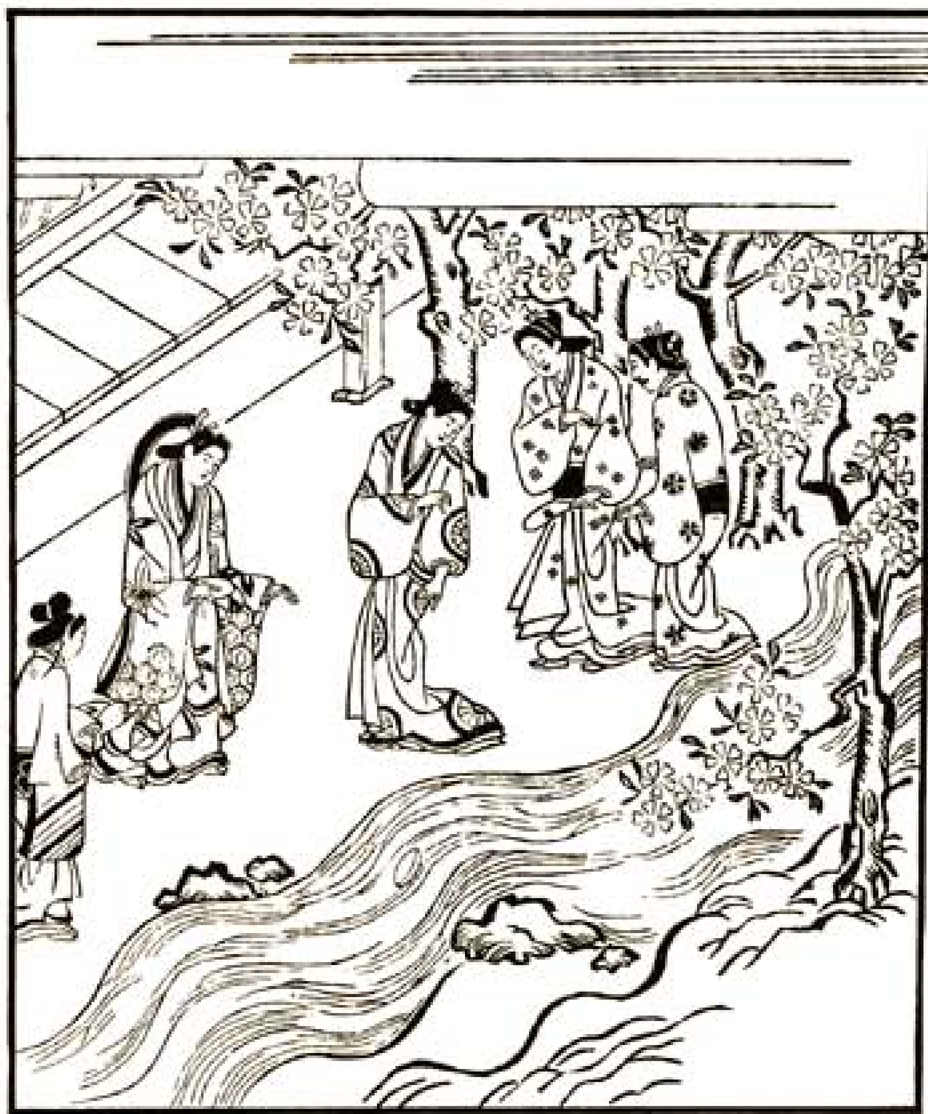
　この男はその頃、島原第一の大尽客で、新在家の長吉様といわれていた。初代の吉野太夫を手に入れ、その後は葛城という太夫に馴染んでいたが、この女郎との仲も絶えて、今度は、御所方から迎えた妻女にうつつを抜かし始めた。月を眺め

うがって作った杯。↓五四ページ注八。
三 中国から舶来の紫檀・黒檀・タガヤサン(鉄刀木)などの総称。
四 棟から軒にわたして屋根を支える材の先端。
五 『万買物調方記』(元禄五年刊)に見える「室町三条下ル古筆勘兵衛」をいうか。
六 古い筆跡の鑑定家。
七 注一二の新在家から烏丸通を南下して松原通に突き当り、それを西へ進んで大宮通に出て南進し、丹波口を西へはいる、島原の廓へ日参すること。
八 左京区黒谷町にある法然上人建立の金戒光明寺。黒谷浄土宗の大本山。↓三四四ページ注七。
九 祇園八坂神社の本殿は南向き。現社殿は承応三年(一六五四)、四代将軍家綱の造進。
一〇 道の枕詞。
一一 京都の西部にある島原。
一二 烏丸通と東洞院の間、現在の京都御所御苑内にあった町で、連歌師・能役者・呉服所などの上流町人の居住地であった。
一三 初代の吉野太夫。秀吉時代の京都二条柳町廓の名妓。
一四 『好色一代男』巻一の一にも出ている京都六条三筋町(慶長七年、二条柳町より移る)の名妓。吉野(山)の縁。「岩橋の夜の契も絶えぬべし明くるわびしき葛城の神」(拾遺)の一首によって「中絶えて」といった。
一五 公家出身の女性とのまともな恋。

身をやつし、明暮の詠め月薄く、蛍をあだに梢の艳をわすれ、軒ばの雪もいつとなくしらけて、こたつぶとんの下こがれ昼寝の房枕、夜すがらの[一]調謔、この上臈十六の[二]春の色、藤姫とかや名高き御方のおとし子といへり。妓婦さ[三]花の色は移りに絵に書きし小町も何としてならぶべし。歌道はその家の流れに心ふかく、玉琴常住のもてあそび、[四]時勢粧をうたはれしは、[五]地下人の唇うごかし、[六]投節・[七]伊勢かはりなどとは格別にして、音曲さへかく豊かにおもしろければ、まして情の道、偽りなくて深し。なほ年月重ねての契り、たがひの心ざし通じて、

ようともせず、蛍も見捨て、梢の紅葉の美しさも忘れ、軒端の雪に目をやることもなく、昼間は房枕をして火燵布団にもぐり、夜は夜もすがら愛し合っていた。この貴婦人は十六歳の春を迎えたばかりで、藤姫とかいう、有名なお方の落胤だということであった。その美しさは、「花の色は移りにけりな」と詠んだ小野小町を生き写しにした絵姿も、問題にならないほどであった。歌道は実家の流儀にしたがってたしなみ深く、いつも琴をもてあそび、新しい琴歌をおうたいになると、一般の女たちが投節や伊勢節の替え歌をうたうのとは違って、格別の趣があった。音曲さえそのように豊かなたしなみがあったので、まして情けは深く、誠がこもっていた。何年も愛し合ったので、お互いの心も通じて、世間並みの夫婦仲ではなかった。大勢の侍女や腰元などが着飾って仕えるありさまは現代の御所風で、こんな貴婦人がほかにあろうとは思われなかった。ちょうど庭前の芙蓉の花が、しなやかな枝の葉隠れに八重の蕾をつけ、雨を待って今にも開きそうな風情であった。色っぽい盛りを見ながら、他人は人の花だから手折るわけにはゆかない。亭主はわが物だから、明け暮れこれを

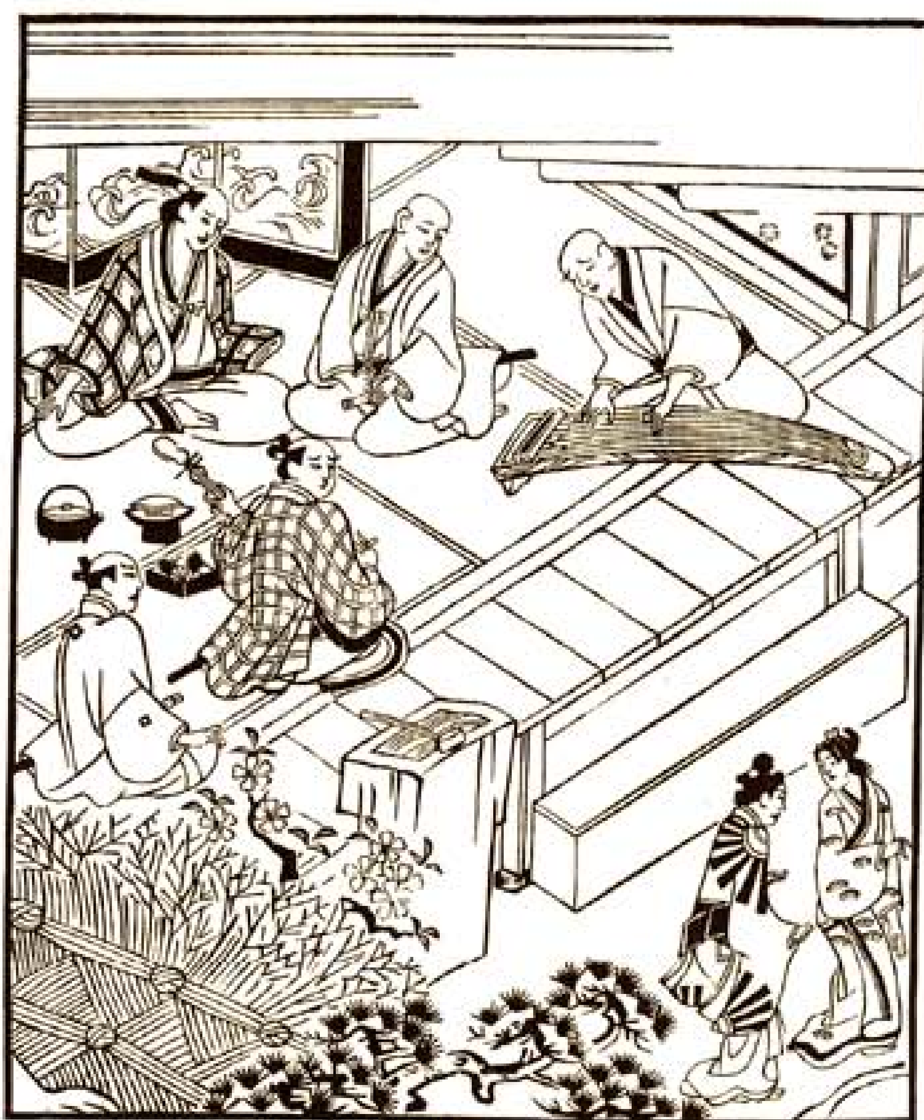
一 下文の「妓婦」とともに『遊仙窟』の字訓。
二 「立ちかへる春の色とはうらむともあすや形見の池の藤浪」(新勅撰)。
三 「花の色は移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに」(古今 小野小町)。本文「移りに」は、生き写しに、の意。
四 当世流行の歌曲。
五 官位のない庶民。
六 明暦の頃、島原でうたい始め、貞享・元禄頃まで流行した廓唄。三四・四三・三四・五の詞形で、歌の末を「やん」と投げ捨てるようにうたったゆえの名。
七 明暦頃から元禄にかけて流行した伊勢節の変調。歌詞は『吉原はやり小唄惣まくり』などに見える。



いる。庭には、桃の造花の間に曲水の宴を模した流水が造られ、その水際に立ち並ぶ美女たちが「恋の言葉だくみ」をしているのであろう。流れの中央には、鸚鵡貝らしき大盃が一つ描かれている。

尋常のかたらひにはあらず。あまたの侍婢[八]・御梳[九]、又は表使[一〇]ひの女・腰元、色作りたる風俗は、当流の御所[一一]がかり、外にあるべき女とは思はれず。さながら階前[一二]の玉芙蓉[一三]、たよわき枝に葉隠れの八重つぼみ、雨まちて今なりと開くべきよそほひ、濡れ[一四]の直中、うまき事を見ながら、人は人の花とて手折りがたし。

あるじはわが物とて、これを明暮の遊山所、嵯峨の山陰に座敷をしつらひ、都を目の下に詠めおろし、嵐の山を庭に取り、大井川[一五]を泉水に仕掛け、弥生の三日ここに噪ぎて、いま



京の富裕な町人、島原で新在家の長吉（ながよし）と称された人物の嵯峨別邸での遊興のさま。左座敷の奥にすわる人物が長吉。太鼓持が侍り箏を弾じ、三味線をひく芸人などがとり囲んで座を盛り上げて

かわいがり、嵯峨の山陰に別荘をこしらえて、都を目の下に眺め、嵐山を庭に取り入れ、大堰川を泉水に引き入れた。雛祭りの三月三日の日は、この別荘で遊んだが、その年はまだ桃の花が咲いていなかったので、これでは今日の遊びがつまらないからと、北野の紙細工人を何人かにわかに呼び寄せ、桃の造花を作らせた。庭の流れにおうむ貝の杯を流し、美女が左右の岸に立ち並び、詩歌を詠むという曲水の宴のしきたりも古くさい事だと、恋の言葉を言い争わせることにした。女たちを二人ずつ向かい合わせ、わが身の恥もかまわず、ずいぶん色っぽいことを、ずけずけと言い争わせ、言葉に綾がなくて言い負けたほうを、色道修行がたりない女だとして、奥様のお目通りで丸裸にし、腰巻まではずして広庭を追い回すのは、いくら女中仲間とはいえ、追うほうも情けない思いであった。広間には懇意な出入りの者や、かかりつけの医者、楽隠居などが居並んでいて、それを見て手をたたき、どっと笑いくずれている。どんな人でも女の裸をなまで見ると、取り乱してたわいのないものである。

日が暮れると小風呂に男女が入り混じり、奥様以外の女とは好き勝手に戯れることを許された。これこそこの世にまた

八 御許人。天皇など貴人に近侍する女官。侍女。
九「御髪上げ」の音便。貴人の髪を結う人。
一〇「表使ひ」は幕府大奥の職名。表向きの用を弁じ、諸役人と応対する女中。
一一 御所風。
一二 階前は庭前。
一三 玉は美称。芙蓉は中国では蓮の別称である。ここはアオイ科の芙蓉で、夏・秋に大輪の淡紅・白の花を開く。
一四 色盛り。
一五 嵐山の下を流れる大堰川。

一「桃李たう」とあるべきところ。「桃李モノイハズ、春イクバクカ暮レヌル」(和漢朗詠集)などが念頭にあったのであろう。
二 虚花(造花)の当て字。
三 行く水の音読。三月三日の曲水の宴は、上流から流した杯が自分の前を過ぎぬうちに詩歌を詠ずる。
四 恋の言葉を言い争わせることにして。五 色っぽいことを。
六 綾がなく。言いまわしがへたで。
七 腰巻。並幅の二倍の二幅の布で作るのでいう。
八 かかりつけの医者。侍医。
九 若いうちに法体した楽隠居。
一〇 女の裸をなまで見ると。
一一 この世の、またとない楽しみ。
一二 灸をすえたあとの黒蓋が落ちると化膿するので、膏薬をひいた紙片をはる。
一三 中国陝西省驪山の下にあった唐の太宗の離宮。玄宗が華清宮と改め、楊貴妃と遊ぶ。「春寒クシテ浴ヲ賜フ華清ノ池、温泉水滑ラカニシテ凝脂ヲ洗フ」(長恨歌)のやつし。
一四 牛車の俗称。
一五 牛若丸と浄瑠璃姫との情交のまね(十二段草子)。
一六 平教盛の子通盛。平家の武将。一の谷の出陣に際し、その妻小宰相と別れを惜しんだ場面(謡曲・道盛)による。
一七 男が碁盤に腰かけての情交。
一八 男女が相対し、首に帯をかけて行う秘戯の絵。

だその年は桃花もまだしく、今日の風情の興なきとて、北野なる紙細工幾人か俄によびよせ、桃の唐花をつくらせ、行水に鸚鵡貝の盃を流し、美女左右の岸根に立ちならび、詩歌もふるき事なりと、恋の言葉だくみにして、二人づつ立ちむかひ、身の上の恥をかへりみず、随分小気味のよき事をあらけなく言ひあらそはせ、詞しな少なく言ひ負けたる方を、色道執行のたらざる女と、奥様の御目通りにて丸裸になされ、二幅まではづされ広庭を追ひまはるは、同じ女中間もうたてかりき。書院には御心やすき出入りの者・不断医者・楽出家まじりに横手を打ち、慟みをつくつて笑ふ。いかな人も生で見ては取乱し、何のわけもなかりき。

暮れては小風呂に入りまじり、奥様より外は、思ひ入れ目好きに、自堕落御許されて、これぞ浮世思ひ出、やはらか御手に灸の蓋しかへてもろふなど、誠に華清宮のたのしみ、これにはありがたき夢をみる事ぞかし。されば、世間に欲しきは金銀なり。この旦那殿も人にかはらねども、この自由は皆小判がさす事と、よく〳〵思ひまはして、銀の利を取りて一

となない楽しみ、やわらかい手で灸の膏薬を張り替えてもらうなど、華清宮の栄華のようであった。みんなさぞかしありがたい夢を見ることであろう。だから、この世で欲しいものは金である。この旦那殿も、特に人と変った点はないが、この自由はみな小判がさせる事だと、よくよく考えてみると、金利で一生を暮すほどよいことはない。わが家でどんな栄華をしようとも自由で、たとえば御所車に乗っても、人はとがめない。烏帽子をかぶって牛若丸が浄瑠璃姫と仲よくしているところをまねたり、鎧兜を身につけて平通盛の忙しい情交を再現したり、ある時は碁盤の上に腰かけて情交るのもおもしろい。今日はまた首引きの絵を見合わせてやるというありさま、昼日中髪がほどけても、大声をあげて泣かれても、ご自分の奥様のことゆえ思うままである。

そういう交りがいつしか実を結んで、奥様は青梅を好まれるようになり、ただならぬ身となられた。早くも岩田帯を締めるお祝いをすまし、月日のたつのを指折り数え、お産の部屋を建てて作法通りにお祓いをした。これで跡継ぎができたと大喜びで、女中を遠方の安産の地蔵へ代参させたりした。素姓を調べて守乳母を雇い、乳を飲ませる本乳母も決め、産

生暮らす程よき事はなし。我が内の栄花、たとへば御所車[一四]に乗りても人はとがめず、烏帽子を着て牛若丸[一五]のまね、具足を肩にかけて道盛[一六]のいそがしわざを移し、ある時は碁盤[一七]の上に座したるもをかし。今日は首引き[一八]の絵を見合はせてのやりくり、銘々の奥様なれど、昼髪がほどけましても、高声あげてなかしやりましても、おぼしめすままの御首尾、

いつの頃か和合して、青梅[一九]好み給ひ、その身なやませられ、はや帯[二〇]の御祝ひ、なほ日を折り月をかさね、産の間を立てさせられ、式法のまつり事ありて、これぞ家継のはじめ、と喜悦のあつて、はるかなる腹帯[二一]の地蔵に代参りせし女もあり。筋目をただし、抱嫗[二二]かかへ御乳[二三]を定め、御広袖のゆたかなるに箔置[二四]の千年鳥、縫の松竹、生まれぬさきの襁褓[二五]さだめ、待つに時をえてしきりに御腹いたみ出、取揚げ祖母、玉襷[二六]かけて御腰を抱く。役人、右の御手に子安貝[二七]、左の御手に海馬[二八]をにぎらせ参らせ、御次には産後産前の名人、銀鍋に蚤め薬[二九]を仕掛け置きぬ。表には叡山祈禱坊・稲荷[三〇]の神主、諸願成就今や〳〵と待ちけるに、夢なれや、眠れるごとくに息絶え脈[三一]あ

着はゆったりとした広袖で、金銀の箔で鶴の模様を置き、松や竹を刺繡し、生れない先から用意万端をととのえた。待っているうちに時が来て、奥様の陣痛が始まった。産婆は襷がけでお腰を抱き、付添いの女は奥様の右のお手に子安貝を、左のお手に海馬を握らせ、お次の間にはお産専門の医者が、銀鍋に早め薬を用意していた。表の間では比叡山から招いた祈禱の坊主や伏見稲荷の神主が、諸願成就を祈り、今か今かと出産を待っていた。ところが奥様は、夢のようにはかなく、眠るように息が絶え、脈がとだえてしまった。女中たちは泣きだし、台所の連中もびっくりして、いろいろと心配したけれどもその甲斐がなく、ついに息を引き取ってしまわれた。亡くなったことを悲しんでみても、そのままにしておくわけにもゆかないので、その夜鳥部山の葬所に送った。夕方火葬にして、今朝はもう灰も塵も残らないのが人の身である。他人の悲しむのは、義理だけの念仏で、泣くのもその場限り、まもなく忘れてしまうのが、世の中というものだ。ところが長吉は夫婦仲が特別よかったので、悲しみもひと通りではなかった。万事を捨てて出家をするという身のおさめ方を親類が知って、しきりに嘆いて引きとめた

一九 妊娠の初期、妊婦に嗜好の変化が起こり、酸性の食物(青梅・夏蜜柑など)を好むことのたとえ。

二〇 妊娠後五か月目に、妊婦が岩田帯(白布)を腹にしめる祝儀。胎児の保護のため。

二一 東山清水寺楼門前にある泰産寺の子安観音(安産の霊験ある観音)を、俗に誤って子安地蔵といった(京童)。

二二 抱き乳母。子守専門の乳母。

二三 御乳の人。授乳専門の乳母。

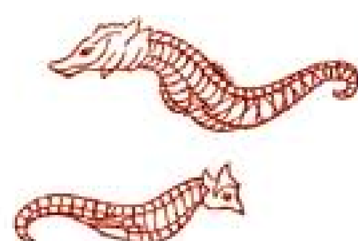
二四 金銀箔を置いた鶴の模様。

二五 諺。物事を先走ってすることのたとえ。

二六 玉は美称。

二七 八丈宝の異称。産婦がこれを右手に握っておれば安産するという。

二八 たつのおとしごの異名。子安貝と同じく、産婦が手に握る安産の守り(女重宝記〈元禄四年刊〉)。「千代の腹帯、子安貝、左の手に握るといふ海馬」(胸算用二の二)。


海馬
(女用訓蒙図彙)

二九 催生薬。「催生散、難産ならびにゑなのくだらざるを治す」(昼夜重宝記)。

三〇 伏見稲荷。

三一 脈がたえて。「まだどうぞといふうちに、脈があがるとや」(五人女一の二)。

がりて、女中泣き出し勝手[一]に驚き、さま〲心をつくせどもその甲斐なくて、つひに世のかぎりとはなりぬ。生死さかひ、なげきの今、このまま置くべきにあらねば、その夜鳥部山[二]におくりて、宵は煙りて、今朝は灰塵も残らぬは人の身、他人のかなしむは義理一遍の念仏、泪は当座の形身の袖、程なう忘るるを世のならはし、夫婦よしみ、殊更に御悔みも浅からず、万事をすてて出家の願ひ、身[三]の取置きを見出し、親類目前の嘆きに、この道も思ひとどまり給ひぬ。

　百日の立つ事間なく、精進事をはりてから、人々の内証にてはじめに見増さる美君をまねき、長吉の御方へつかはされけるに、各々の心ざしをもそむかず、この上臈をそのままに置きながら、とかくのささめごと[四]もなく、不便やこの人、生きながらの若後家なり。しかれども色はやめがたく、女はふつ〲と飽きて、その後は小姓を置かれける。これでも埒のあく事にぞ。

ので、出家は思いとどまった。

　百か日のたつのは早いもので、まもなく精進も終った。親類の者たちが内緒で、亡くなった奥方よりも美しい婦人を捜して、長吉のもとに送り届けると、皆の好意を無にしないで、その婦人をそのまま屋敷にとどめて置いた。しかし愛をささやくこともなく、かわいそうにこの婦人は、生きながら若後家になってしまった。だが色の道だけはやめられず、女はふっつりと飽きたといって、その後は小姓を抱えて男色ですました。これでもかたはつくものである。

身替りに立つ名も丸袖

　加賀名産の菅笠をかぶった美しい姿は誰かといえば、金沢の家中に美少年が大勢いる中で、ひときわ目立つ野崎専十郎という若衆であった。こんなに美しく生れついた少年が、この世の中にいるものかと、女もそねむほど弱々しい姿であったが、性根の強い若衆であった。

　それについて世なれた好色の男が噂した事がある。「だいたい女というものは、女々しくしているよりも、きりっとしているほうが好ましい。だから若衆が男らしく鋭いほうがよいのは当然だ。ちょっ

一　台所。

二　東山清水寺の西南、清水坂と小松谷との中間の丘。古来の葬所。

三　身のおさめ方を親類が知って。

四　私語。むつごと。

❖加賀百万石随一の若衆野崎専十郎には、竹島左膳という地方役人の念者があった。すると今村六之進という侍が専十郎を恋し、左膳の存在を知って無理に所望したので、専十郎は左膳に変装して六之進に討たれた。

それと知った六之進は感動し、今度は自分が専十郎に変装して、「六之進と専十郎が衆道の契りを結び、邪魔者のあなたを討ちに来る」と下男に注進させておいて押しかけ、左膳に討たれたが、左膳もまた死骸に腰かけて割腹して果てた。潔い自己犠牲のモラル。

五 袖の外側の下部に丸みをつけた成人用の衣服。振袖に対す。
六 加賀名産の一文字笠(菅笠)は、武家が外出用としておもに用いた。
七 俗にいう百万石加賀藩の城下町。
八 勇み立たないのを。いきり立たないのを。
九 足利時代からの刀剣鑑定の家元。近世初期の本阿弥光悦は特に有名。転じて各種の鑑定家(目利)をいう。
一〇 折紙(鑑定書)つきの名物道具。
一一 豊臣秀次の小姓で、美少年として有名。→一代男巻一の四。
一二 貴人の所蔵品。
一三 嵐に花の散るをいとわぬように、命をなんとも思わぬ様子。
一四 恋しても相手にされないことが見えすいているので。
一五 「山吹のきよげに、藤のおぼつかなきさましたる」(徒然草十九段)のもじり。
一六 以下、「とまりなりし」まで竹嶋にかかる序詞。竹—鶯(類船集)。「朝な〳〵かすみも深き谷の戸に声埋もれぬ春のうぐひす」(新続古今)。
一七 後出の「左膳」と同じ。「善」と「膳」の混用。

身替りに立つ名も丸袖[五]

[六]加賀笠きたる姿や誰、金沢[七]に若道さかりの人あるが中に、野崎専十郎、かくも生れ付く美児世にはある物かと、女のそねむ風俗よわ〳〵しく心根つよし。

この沙汰、物になれたる好色のいへり。「惣じての女は、女のそなはる形気よりしやんとしたるをよし。若衆の男らしく利なるは勿論なり。うち見は豊かに進まぬ[八]を上作物と、この道の本阿弥[九]の極めし」。

さてはこの専十郎折紙道具[一〇]、不破[一一]の万作に八割まし、御物[一二]にもなるべき人を、錦の袋にも入れずして、目の利かぬ念者に見する事の口惜し。されどもこの子に第一の疵あり。常々[一三]命を散らぬ花に風をいとはぬ気色、恋の山[一四]さながら見えすきて、皆人おそれて、そのなりけりに十七の春を過しぬ。

[一五]山吹のあだに藤のしぼめるをこの君にたとへて嘆きしに、人こそ知らね、谷の戸[一六]ふかく鶯のとまりなりし竹嶋左善[一七]とい

と見たところはゆったりとしていて、いきり立たない若衆が最高であるとは、この道の家元の鑑定である」。

してみるとこの専十郎は、折紙付きの逸品で、不破の万作より八割方もすぐれた若衆である。大名の持ち物にもなるべき人を、錦の袋にも入れないで、値うちのわからない連中に見せるのは残念なことだ。しかしこの若衆には、大きな疵があった。かねてから嵐に花の散るのをいとわない激しい気性であった。だから恋してみても相手にされないことが見え透いているので、恐れをなして手を出す者がなく、専十郎は兄分ももたないで十七歳の春を迎えた。

山吹がむなしく散り、藤の花が手折る人もなくしぼんでゆくのをこの若衆にたとえて、人々は嘆いていた。ところが人こそ知らね、谷の奥深く鶯がとまるように、専十郎は竹島左膳という男と、長い間親しくしていた。世間の人々が見とがめなかったのも道理で、左膳は城下から四、五里も離れた山陰に住んでいる、村村を支配する役人であった。二人が契りを結んだのは、つぎのようなことからであった。その村の左膳の屋敷の隣に、専十郎の姨に当る人が住んでおられた。梢の秋がひとしお淋しく哀れになったので、

[一] 諸藩の蔵入地(領主の直轄地)の地方役人を、郡代または郡奉行といい、その属僚に手付・手代があった。
[二] 屋形は武家屋敷。左膳の屋敷の隣に。
[三] 「姨 一名従母」(和漢三才図会八)。
[四] 『遊仙窟』の字訓。
[五] 加賀産の絹布で、多くは染めて裏地に用いた。「是なん加賀絹の在所にて、家毎に女糸機の業」(好色三代男三)。蟋蟀(キリギリスの異称)と機織の掛詞。
[六] 即席の発句を望み、脇句(第二句)はどうであろうかと。
[七] 西順編。五巻五冊。近世初期の写本がある。寛文年中刊。寛文十二年(一六七二)刊の書籍目録に、高野直重著の『歌林名所追考』が見える。詠歌上に必要な名所および例歌を列挙考証した書。
[八] 枡に木片の支えを仕掛けた鼠取り。

ふ男と年月の念比、世間に見とがめぬはもつともなり。城下より四五里も遠山陰にありて、里々村々[一]を勤むる役人なり。この取り結びしはじめは、その里の屋形[二]ならびに専十郎姨[三]たる人のましまし、梢の秋一しほ物さびしくあはれなるを、月見るために漂行[四]くに、東の方によしなや峰の松くろみ、宵の程はもりくる影を待ち兼ね、南はさはりなく浮雲も心ありげに、晴天の思ふままなる詠め里、遠の砧のみつ拍子、賤も打つやとやさしく、所がらの加賀絹[五]も蟋蟀・鈴虫のほそ声、はや露霜にいたむかと、草の葉末の風をだに我が袖によけて見るは、人はなき野菊も夜明けなば道行く人の目やとまらんと、世のあり様まで心にふくみ、情はこの美童にありぬべし。

その夜竹嶋左善は、里はづれなる観音堂を守りし法師と、常にも俳諧の友なれば、今宵の月いかに見給ふ、発句も種つきて、当座[六]も脇聞くためとここに来にけるに、庵主は戸を引きたて、いかなる方へか行かれける。灯の光幽かに北の紙窓に移るに、内を覗けば、歌林名所考[七]など取りひろげて、今まで見られし跡なれや。膳棚のはしに枡落し[八]をしかけ置かれし

専十郎は月を眺めようと、姨を訪ねて行った。東の方にはあいにく峰の松が黒々とそびえていて、宵の口は月の光を見る事ができなかったが、南の方は開けていて、雲もほどほどに浮かび、晴れた空の月を思うように眺めることができた。遠くから聞こえてくる砧の三つ拍子は、心ない田舎の女も打つのかと優しく思われた。お国柄の加賀絹を織るのかと思われる蟋蟀や鈴虫の鳴き声のか細いのも、はや露霜に痛められているのかと、草の葉末の風さえも、自分の袖でよけてみたりした。今は見る人もない野菊も、夜が明けたら道行く人の目にとまるであろうと、人の世のあり方まで思いやる、まことに情けの深い美少年である。

その夜竹島左膳は、ふだんから俳諧仲間である村はずれの観音堂を守っている坊主を訪れた。今夜の名月を題にして即席の発句を望み、脇句はどうであろうかと、発句の種も尽きたので、ここにやって来たのだが、戸がしめきってあって、庵主はどこへ行かれたのか不在であった。灯火の光がかすかに北の紙窓に映っているので、内をのぞいて見ると、ついさっきまで見ておられたのであろう、歌林名所考などが取り広げてあった。膳棚のはしに枡落しが仕掛けてあるのは、出家の

九「家に鼠あり、国に賊あり」(徒然草)。
一〇「今もかも戸ざしやささぬ旅人の道ひろき世にあふ坂の関」(続千載)。「四海治まりて人家戸ざしを忘れしも」(謡曲・小鍛冶)。
一一 携帯用の懐中硯。
一二 仏家の食事。
一三 越前(福井県)の国府武生の名産。墨流しは水面に墨汁や顔料などで波紋を作り、色紙や短冊や奉書紙に染めつける手法。鳥の子は上等の和紙。



俳諧の友である観音堂の法師を訪れた竹島左膳が、法師留守のため、芭蕉の葉に伝言を書く場面。それを見守る前髪・振袖姿の美少年が野崎専十郎。ともに小者を召し連れている。

は、出家の身にも荒れる鼠はうるさくや。[九]「国に盗人」とはいへど、[一〇]錠もおろさぬ入口、いづれ治まる時津風、消えかかる挑灯のしんとらせて、[一一]懐硯に雫をそそぎ、軒ちかき芭蕉のひろ葉に書き残せし。「松に声あつてあるじの行方をこたへず。むなしく見すてし寺前の月、罷り帰つて寝酒のたのしみ、夢覚めての明けの日は、私宅にて一菜の[一二]斎まゐるべし。茂右衛門後家の跡の儀、いよ／＼勝手に相済み、貴坊も御満足たるべし。種申し請け候朝顔、今朝よりして見事に咲き初め候。近日越前へのたよりに、[一三]墨流し幅広の鳥の子三十枚、御申し

身でも鼠の荒れるのはうるさいものとみえる。「家に鼠あり、国に賊あり」と徒然草にあるが、ここでは入口に錠もおろしてない。いずれよく治まった御代だからであろう。左膳はそよ風に消えかかる提灯の蠟燭の芯を供の者に切らせ、懐中硯に雫をそそぎ、軒端近くの芭蕉の広葉に、庵主への便りを書き残した。「松吹く風の声が聞こえるが、主の行方をこたえてくれません。むなしく寺前の月を見捨てて帰り、寝酒を楽しみます。夢の覚めた明日は、拙宅で一菜の食事を差し上げましょう。茂右衛門後家の死跡は、たいへん都合よく事が運び、貴坊もご満足のことでしょう。種をいただきました朝顔は、今朝から見事に咲き始めました。近日越前へお便りの際、墨流し幅広の奉書紙を三十枚、注文してください。一昨日は煮梅をありがとうございました。さて内々お話しいたしました矢田二三郎は、若衆の心意気を持ち合わせておりません。というのは、兄分の拙者を迷惑がり、まだ十七歳の若衆盛りなのに、あたら前髪を剃り落とし、私方へいろいろと詫びを入れてきましたが、あまり片腹痛いので、その通りに許してやり、昨夜は友人が集まって、大笑いで夜を明かしました」と、思う事ばかりをあれこれと、筆の終りも

一　誓いの言葉。神かけて。

遣はし頼み入り候。一昨日は煮梅かたじけなく候。さて内々御物語り申し候矢田二三郎事、若衆の心底にあらず。子細は、念友を迷惑がり、いまだ十七花なるにあたら前髪おろし、我ら方へさま〴〵の詫言をかしく、その通りにしてゆるし、夜前はいづれもうちより、大笑ひして明しける」と、心にある事のみ取りまぜ、筆のとまりを定めずあらましに書き置きぬ。

折節、ここに専十郎来つて、芭蕉に何事をか書かれし、今宵の事なればゆかしく思はれ、立ち添うて見しに、詩歌にはあらずして心当てとは違ひぬ。されども、書きをさめに衆道の事をかしくて、先立つ左膳が耳に入る程の声して、召しつれし小者に、「何と世の中の思ふままならぬとはかかる事なるべし。執心を掛けられ、若衆の身としてそれをあだになす、恋を知らぬといふ物ぞかし。誠ある念者ならば、命ををしむは無念なり。姿こそかくはいやしけれ、情知る我を問ふ人なし。神ぞ〳〵この道に夜露はいとはじ」と、菅笠ぬぎ給ふを、左膳見しより魂飛びかかつて、覚えず御手を摑んで、「只今の御言葉に偽りなくば、これ拝みます〳〵、人間一人御助け

はっきりせずに、あらましを書き残した。

ちょうどそこへ専十郎がやって来て、芭蕉葉に何を書かれたのであろう、名月の今夜の事であるからさぞかし、と奥ゆかしく思われ、立ち寄って見ると、詩歌ではなかったのであてがはずれた。けれども書き納めに衆道の事が書いてあったので心が動き、先立って行く左膳に聞こえるほどの声で、供の下男に話しかけた。「なんと、世の中で思うままにならないというのは、こんな事をいうのであろう。思われていながら、若衆の身としてそれを仇にするとは、恋知らずというものだ。誠実な兄分ならば、その人のために命を惜しむとは残念なことだ。自分は姿こそこんなに卑しいけれども、情けはわきまえているのに、誰も相手にしてくれる人がない。この道のためなら、夜露などいとわない」と言って菅笠を脱いだ。左膳はその顔を見るなり魂が消し飛び、思わず飛びかかって専十郎の手をつかみ、「ただいまのお言葉がほんとうなら、これ、このとおり拝みます、拝みます。人ひとりお助けくださる如来様」と、前後不覚でかき口説いた。その哀れな様子が痛ましく、男振りもよかったので、専十郎は冗談だったとも言えなくなり、立ったままで、「あの世までも」と固く約束

の如来様」と、前後弁へず嘆くにぞ、つひ哀れに痛ましく、男振りに好ける所もありて、てんがう[二]にとは言ひがたく、立ちながら、「二世ぞ」と、詞をかため帰りければ、南請[三]けの里の屋に名月を知るもしをらし。塩煎の芋に口欠けの徳利、かをりは石流菊[四]といへる山路酒、これを見かけ近付きならぬ無理所望して、盃中も宿までを待ちかね、恋にせはしき兄弟けいやく、その後は身を左膳に任せ、夢にも面影を見し程になりぬ。

おのづから若衆しとやかに、形の花も見よげなれば、城下にかくれなきこの道をもてあそびぬる今村六之進といへる男、専十郎を思ひ初めて数通を投げ入れしに、心づよく取りあへず。しかれども、武士の申し懸けしをこのままにはやめがたく、程なく至極[五]になつて、左膳と念比を尋ね出し、念者に押してもらふべしと心中定めし時、専十郎分別して、「六之進と打ち果たすは思ひまうけし事なれど、左膳跡にて堪忍なるまじ。とかくいとしき人の命永かれ」と思ひ極め、ひそかに六之進屋形にたづね行き、「この程の御心遣ひ、外[六]に聞くに

して帰る途中、南向きの村の百姓家で、しおらしくも名月を眺めていた。塩煮の芋を肴に徳利の口は欠けていたが、酒はさすがに加賀名産の菊酒だけあって香りが高い。二人はこれを見かけて、知り合いではなかったが無理に頼んで酒をくみかわした。その間も家に帰るのが待ち遠しく、せわしく兄弟の約束をして、その後専十郎は左膳に身をまかせ、夢にもその姿を見るほどになった。

おのずから専十郎の若衆姿はしとやかになり、花が咲いたように美しくなったので、金沢の城下に隠れもない衆道好きの今村六之進という侍が、専十郎を見初めて何通も恋文を送ったが、心強く取り合わなかった。しかし六之進としては、武士がいったん言いだした事を、そのまま引っ込めるわけにはゆかない。まもなく思い詰めて、左膳と兄弟分になっていることを調べだし、兄分からいやおうなしに専十郎を貰い受けようと覚悟した。それと知った専十郎はよくよく思案して、「六之進と果し合いをするのは覚悟の前だが、左膳が後で知ったら我慢できまい。ともかくいとしい人は生きながらえてもらいたい」と思い、こっそりと六之進の屋敷を訪ねた。「この間からのお心づかいを、あだやおろそかに思っているわけ

二 転合・転業と当て字。わるふざけ。冗談。
三 南向き。
四 山村で飲む菊酒。菊酒は加賀の名産で、菊花の煎じ汁を加えた酒(本朝食鑑)。
五 思い詰めて。
六 無視しているわけではない。

はあらず。しかじ、申しかはせし事慥かならねども、竹嶋左膳のがれぬ難儀申しかけ、口惜しきひとつ、又は心ざし誠なき男、かれこれたいくつの折から願ふ所の御後達、左膳を人しれず打ち給はば、我が身は御方へ預け参らす」といへば、六之進浅からずよろこび、「今夜の内に」と進みける。「しからば榎木原の在郷道、いつとても四つの時分通ふなれば、辻堂の前にして、夜の編笠を左膳がしるべにうちて給はれ」といへば、六之進請け合ひ、その用意して野道に出しは、是非もなき浮世ぞかし。

専十郎私宅に帰り、行水の後色を作りて、丸袖の羽織・編笠ふかくこの事を隠し、左膳姿になり替はり、申しかはせし野路に出、人を忍べる風情にさし足して並木隠れに行くを、六之進待ち合はせ、後より立ちかかつて打ちつけしに、声もせず、まして柄に手も懸けず、さりとは最後腑骸なかりき。止目もさしつれど、心のせくままに所を定め兼ねて、まづ立ち退き、玉笹の茂みに入りしに、たよりなき声して、「我はかくなり行きても、左膳殿堅固なれば」と言ふに驚き、小者

一 副詞「しか」に打消の助動詞「じ」が添うた形。「しかじ、何々するに」の形になるはずだが、西鶴は「たしかにそうだ」という、強めの意でもっぱら用いている。巻四の三(四三五ページ注一五)、巻六の二(四九九ページ注二四)にも同じ用例がある。

二 田舎道。野道。

三 午後十時頃。

四 身じまいをして。

五 落ち行く先を決めかねて。

ではありません。竹島左膳とはたしかに約束したわけでもありませんのに、どうにもならない難題を吹っかけられましての兄弟分で、くやしくてなりません。それにふまじめな男で、いずれにせよ閉口の折から、願ったりかなったりの後楯です。左膳を人知れず討ってくだされば、私の身はあなた様へおまかせいたします」と言うと、六之進はひどく喜んで、「今夜のうちに」と勇み立った。「それでは榎木原の野道を、左膳はいつでも夜の四つ時分に通りますから、辻堂の前で、編笠を目印に討ち取ってください」と言うと、六之進は請け合ってその用意をし、野道に出かけて行ったのは、やむをえないなりゆきであった。

専十郎は自宅に帰り、行水を使ってから身じまいをして、おとなの丸袖の羽織を着て編笠を深くかぶり、左膳になりすまして約束の野道に出かけ、人目を忍ぶ様子で、足音を忍んで並木隠れに歩いて行った。待っていた六之進が後ろから斬りつけたが、相手は声も立てず、まして柄に手もかけず、ふがいない最期であった。止めを刺したけれども、気がせくままに、落ち行く先を決めかねて、ひとまず立ち退き、笹の茂みに身を隠すと、頼りない声で、「自分はこんなになっても、

に忍び火をうたせ、二たび立ち添ひてみるに、これはしたり専十郎なり。しばらくこの心底の程を感じて、「又の世にもあるまじき美道[六]のかたまりこれぞ」、恋塚[七]のむかしを思ひ出、袖に玉をつらぬき、男泣きして甲斐なく、「世上に知らねばとてながらへて嬉しからず」と命の限りを極め、小者におもはくを念比に申しふくめ、専十郎が振袖に着替へ、かしらは編笠にしのび、竹嶋左膳が里に行きて、小者にあらけなく門をたたかせ、「注進の者」と声せはしく申すにぞ、左膳枕をあげて、四五度も聞きすましてその身をかため、する〴〵の者を起こし、素鎗[八]の鞘はづし、物見[九]より様子を吟味して、さて門をひらけば、小者一腰をあらためぬさき[一〇]に渡して、「私は今村六之進奴僕万七と申し候。主人六之進・野崎専十郎、昨今衆道念比申しかはし、さま〴〵の誓紙の上に、心懸りは竹嶋左膳なり。これを謀にてうつべき、と内談の定まり、役にも立つべき下人をすぐりて、あらましを申しわたさるる時、拙者は胸[一一]にあたはざる顔つき、年月の恩を知らぬやつがれとて、諸人中にて蹴立てられ、手打ちにせんといさまれし

左膳殿さえご無事なら」と言うのに驚き、下男に火打ち石を打たせ、再び側に寄って見ると、思いがけなくも専十郎であった。六之進はしばらく専十郎の心意気に感激し、「またとあるまい衆道の生粋はこれだ」と、鳥羽の恋塚の昔話を思い出して、袖を濡らして男泣きしたが、その甲斐もない。「世間が知らないからといって、生きながらえてもうれしくない」と、六之進は死を覚悟した。下男に自分の考えをとっくりと言いふくめ、専十郎の振袖に着替えて、月代頭は編笠で隠し、竹島左膳の村に行って、下男にその門を荒々しくたたかせ、「注進の者です」と、あわただしい声で呼びかけさせた。左膳は起き上がって、四、五度もその声を聞きすましてから身仕度をし、家来どもを起こし、自分は槍の鞘を払って、物見台から様子を見届けて門を開かせた。すると一人の下男が、詰問されない先に脇差を渡し、「私は今村六之進の下男で、万七と申します。主人の六之進は野崎専十郎と近頃衆道の契りを結び、いろいろと誓紙を取り交わしたうえで、気がかりなのは竹島左膳であるから、これを計略で討ち取ろうと相談が決まりました。役に立ちそうな家来をえりすぐって、あらましを申し渡されました時、私が腑に落ち

六　衆道の生粋。
七　鳥羽の恋塚の昔物語。平安末期遠藤武者盛遠（後の文覚上人）に横恋慕された渡辺渡の妻袈裟が、夫の身代りになって盛遠に討たれたので、盛遠は発心して鳥羽に恋塚を築いたという。
八　穂先のまっすぐな槍。
九　外部の情勢を見渡せるように、屋敷内に設けた展望台。
一〇　詰問されない先に。
一一　納得のゆかない顔つき。

一 あなた様も。

二 存念(かねての恨み)を晴らされないのを。

三 納得しかね。

四 物の道理を知らぬやつ。義理知らずめ。

うちに、やう〳〵かけぬけ、これに参るのうへは、命を御すくひ給はれ。いかに下人なればとて、主命そむくべきにはあらず候へども、武道ににあはざるたくみ、こなた[一]にも御侍(さぶらひ)なるに、白中(はくちゆう)名乗りあひ、ぞんねん[二]晴らされんを見かぎり、かへつてこの屋形へかけ込む、すゑを頼み奉る」と申せば、左膳思案におとしかね[三]、「何事も夜明けてのせんぎ、それまではその者汝等(なんぢら)に預け置く」と立ち入るを呼びかけ、「ちかい証拠には、専十郎殿しのびて先に立ち、追付(おつつ)けこれへ御入りあるはず」と申せば、今は分別かはりて、我おくれじ、と下人あまたつれて、木陰より道筋に出れば、小者(こもの)が申すごとく、専十郎が面影にうたがひなく、大振袖(おほふりそで)のしのび姿、悪(にく)やとばかり思ひ込み、「物知らずめ[四]」と、一討(ひとう)ちに枯木(かれき)が陰に切り伏せ、「一(ひと)たび兄ぶんのけいやく、天命のがるべきか」とさしとどめ、その後篝(かがり)に出してみれば、今村六之進なり。「これは」と驚き、最前の小者を引き出し、ことの子細(しさい)を尋ねしに、段々始めを語るにぞ、泪(なみだ)を肌(はだへ)までしたし、「専十郎が我が身に替はりし心の程、六之進が身を捨つる心ざし、それが

ぬ顔つきをいたしますと、長年の恩を知らないやつだと、大勢の中でけとばされ、手討ちにするといきり立っているうちに、ようやく抜け出してここへ駆け込みましたうえは、命をお助けください。いかに下郎(げろう)だからといって、主命に背くべきでないとは存じますが、武士道に似合わないたくらみに組することはできません。あなた様もお侍でございますのに、白昼堂々と名のりあって、かねての遺恨を晴らそうとなさらないご主人を見限り、このお屋敷へ駆け込んでまいったのでございます。行く末をお頼み申します」と言った。左膳は納得しかね、「何事も夜が明けてから取り調べることにいたそう。それまではその者をお前たちに預けておく」と家来どもに言いつけて、家にはいろうとするのを、下男が声をかけ、「近い証拠には、専十郎殿がこっそり先に立ち、まもなくここにおいでになるはずです」と言った。左膳はそれを聞いて考えが変り、おくれてなるものかと、家来を大勢連れて、木陰から道筋へ出ると、下男が言った通り、大振袖(おおふりそで)を着て人目を忍んでいる姿が見えたので、左膳は憎いやつだ、とばかり思い込み、「義理知らずめ」と、ひと討ちに枯木の陰に斬(き)り伏せた。「兄弟の契りを結んでいながら、天

しながらへて益なし」と、死骸に腰懸けて、今年二十八歳の秋の末、夜の紅葉を刃に散らし、はかなや朝は露となりぬ。

前代ためしなき三人が思ひ入れ、世の取沙汰[五]七十五日にもやまず、語るに涙、聞くに哀れ、恋知る人は言ふに及ばず、心なき野夫・馬方までも、今に専十郎が最後の土はよけて通り、この道は知るぞかし。かねのわらんぢはきて諸国さがしても、又はあるまじきといへり。

待ち兼ねしは三年目の命

和歌の浦の久しきためし、いつの世の種二葉に栄えて、布[六]引の松古今の色に、なほ行末の静かなる時津海[七]、七月十日の夜に定まりて、毎年この所より竜灯[八]のあがる事うたがひなし。この夜は諸人あそび舟を仕立てて、新堀より乗り浮かれて、都まさりの女中、御座[九]幕の物見[一〇]に面影移り、浪に声あつて、小歌松に音して、琴・三味線・大盃も出水[一一]が酒呑み掛けて川下に行くに、山[一二]の姿も妹背の中、蘆辺の思ひ葉[一三]わけて、こ

の咎めをまぬかれるはずがない」と言って止めを刺し、その後篝火で照らして見ると、今村六之進であった。「これは」と驚いて、最前の下男を引き出し、事の次第を尋ねると、一部始終を語ったので、左膳は肌まで涙で濡らし、「専十郎が自分の身代りになった心根や、六之進が身を捨てた心意気を思うと、自分も生きていてもしかたがない」と、六之進の死骸に腰をかけ、今年二十八歳の秋の末、夜の紅葉を刃に散らし、朝の露と消えた。

かつて例のない三人の心意気は世間の評判となり、人の噂も七十五日というのに、いつまでもやまなかった。語るも涙、聞くも涙で、恋を知る人は言うに及ばず、非情な百姓や馬方までも、今に専十郎が最期をとげた所の土はよけて通るのを見ると、衆道の心意気はわきまえているのである。金の草鞋をはいて諸国を捜しても、またとあるまいということであった。

待ち兼ねしは三年目の命

和歌の浦に久しく栄えている布引の松は、いつの代に芽生えたのであろうか、今なお古今に変らぬ緑を見せている。いよいよ波の穏やかなこの海には、毎年決まって七月十日の夜、竜灯が上がるこ

五 諺「人の噂も七十五日」。世人の忘れっぽいことをいう。

◆紀州藩の美童菊井松三郎には、瀬川卯兵衛という兄分があった。卯兵衛の友人の横山清蔵という侍が松三郎を恋し、卯兵衛に無理に所望したので、二人は果し合うことになったが、松三郎が元服するまであと三年、花の散るまで果し合いを延ばそうという清蔵の提案通り、松三郎の元服を見届け、野寺で刺し違えて死んだ。それと知って松三郎も寺へ駆けつけて自害した。これもまた三角関係の潔い決着である。

六 和歌の浦の南部、毛見浦にあった布引の松原の松。

七 順風の吹く常に平穏な海。

八 海中の燐火が光るのを、竜神の捧げる灯火という伝説が諸国にある。「布引の松千代ふりて、毎年七月十日の夜竜灯の光鮮なる」(懐硯三の二)。

九 御座船(屋形船に同じ)にめぐらす幕。

一〇 幕の縫い目の部分につけてある物見の穴。

一一 京都の油小路出水通北の酒屋で製した白酒(雍州府志六)。

一二 山も夫婦のように寄り添っている。妹背山は和歌の浦の潟の中にある山で、一名を郭公山といい、三断橋で通じている。

一三 重なり合い、また向かい合っている葉。相思のたとえに用いる。

一「世の中を渡りくらべて今ぞしる阿波の鳴門は浪風もなし」(一目玉鉾四)。
二 このうえもないもの好き。
三 船棚のない小舟。
四 川風が編笠を吹き上げると、地名の吹上の掛詞。和歌山市の西南部より雑賀崎に至る海浜の古名を吹上浜という。
五 現在の玉津島神社の地。神亀元年(七二四)、聖武天皇が和歌の浦に行幸の際の仮宮の地。
六 はなやかな船。
七 数人で一画ずつ書いて、思いがけない文字や絵を作る遊び(嬉遊笑覧)。
八 たたんだ扇の両端を互いに親指と人さし指ではさんで引き合う遊戯。
九 船尾の櫓。

この百景詠めにあまりて、今日も入日の鳴戸、浪風もなき人の心、よろづにつけて至りぜんさく、刃物鞘にをさまりしるしぞかし。
　時しも磯辺をみれば、棚なし小舟に素人棹さしのべて、美童深編笠の内のゆかしきに、川風吹上げに立てり。菊井松三郎とてかくれなき情人、兄分のかためもふかき瀬川卯兵衛と、しばしもはなるる事のなかりしに、今日にかぎりその身ばかり、殊更人を忍ぶ気色、不断の子細を知る人は、見るにふしぎの晴れがたし。
　それより玉津嶋の入江にうかれよるに、若衆七八人の花舟、外とは替はり謡・鼓の音もなくて、それ〳〵に念比らしき男ふたりづつかた寄りて、耳ちかく小語く風情、あるいは添ひ寝、又は一画付けの筆慰み、さては扇引きするもあり。思ひあうての恋舟、これより浦山しきはなし。
　その中に美児ひとり、はなれ物にて艫櫓にあがり、柿地の団を手ふれて、それに書き付けし詩を幾度か吟じ、後には諳ずる程になりぬ。松三郎小舟さし寄せしのびて聞きしに、

となっている。この夜人々は遊山船を仕立てて、和歌山城下の新堀からうきうきと乗り出す。都の女にまさる美人が、屋形船の幔幕の物見の穴から姿を見せ、波の音にまじって小唄の声が聞こえ、松吹く風に乗って琴・三味線の音じめが流れてくる。大杯で京都出水通の名酒を飲みながら、川下に下って行くと、妹背山は、夫婦のように寄り添って立っている。茂った蘆を押し分けて漕ぎ進み、ここのさまざまな風景を眺め暮しているうちに、今日も夕日の沈む鳴門のあたりは、波風もない。当節は人の心も落ち着いて、何かにつけて贅沢になってきたのは、刃物も鞘に納まった泰平のしるしである。
　折から磯近く、素人が棹さしている小船に、深編笠の若衆が乗っていた。川風が編笠を吹き上げると、菊井松三郎という誰知らぬもののない美少年であった。深く契った兄分の瀬川卯兵衛とは、わずかの間も離れていることはなかったのに、今日に限ってただ一人、ことに人目を忍ぶ様子である。ふだんの事情を知る人は、不思議でならなかった。
　それから玉津島の入江に松三郎が船を寄せると、若衆が七、八人も乗り込んでいるはなやかな屋形船が浮かんでいた。ほかの船と変って、謡や鼓の音もせず、

「[一〇]花質紅顔無二筆口一、[一一]夙縁薫処契二同床一、只看夜々多情の夢、[一二]二六時中曾不レ忘」、「我もこの詩はわすれず。兄弟けいやくふかき卯兵衛殿に、先月の十七日の夜、いつよりは首尾よく逢うての別れに、即座にあそばし、手水手拭に書き残されし。その人と我より外にこの詩の洩るべきにあらず。殊に若衆の手にわたりふかく感心のありさま、これただ事にあらず」と、俄に赤面して、[一三]台所舟なる小者に、その若衆の御名をたづねけるに、岩橋虎吉殿と、その屋形までこまかに語るを聞き届け、[一四]紀三井寺の入相つく頃屋敷に帰り、すぐに卯兵衛かたへ尋ねけるに、「機嫌よろしからぬは、同船いたさぬゆゑか」と、是非もなき隙入の段々断り申すを、更に聞き入れず、「御自分侍にてはあらず。その子細は、申しかはせし情のあまりにこの身の事を御一作、又もなくうれしかりしに、御心おほくて外なる方へもその詩をつかはされしや。[一五]しかじ、我らよりとくにその君に奉られしも知らず」と、皆まで語りもあへず、「口惜しき」と泪に沈み、その後は命もあやふかりしを、「いかにも〳〵、一通り聞き届けし」と、松三郎に

一〇 その美しさは筆をもって表しがたい。
一一 宿縁。前世からの縁。
一二 一時は約二時間。十二時で二十四時間。二六時中は昼夜ともに、の意。
一三 本船に付随する料理船。
一四 和歌の浦を前景とする名草山にある西国三十三所観音の第二番の札所。
一五 たしかにそうだ。→四三〇ページ注一。

それぞれに親しそうな相手と二人ずつ寄り添って、ささやき合っている。添い寝をする者もあれば、一画付けという筆の遊びをしたり、さては扇引きをする者もある。これこそ思い合った同士を乗せた恋船で、こんなうらやましいことはない。

その中でたった一人、相手のない美少年が船尾の櫓に上がり、柿色の団扇を手に持って、それに書きつけてある漢詩を何度も吟じ、後には暗誦するほどになった。松三郎が小舟を漕ぎ寄せて、こっそりそれを聞くと、「花質紅顔筆に口無し、夙縁薫ずる処同床に契る、只看る夜々多情の夢、二六時中曾て忘れず」という詩であった。「自分もこの詩は忘れられない。兄弟の契りも深い卯兵衛殿に、先月の十七日の夜、いつもより楽しく逢って別れる時に、即座に作って手水の手拭に書き残された詩だ。あの方と自分以外に、この詩のもれるはずがない。ことにそれが若衆の手に渡って、ひどく感心している様子は、これは只事ではない」と、松三郎はにわかに顔を赤くして、屋形船につないである料理船の下男に、その若衆の名前を尋ねると、岩橋虎吉殿ということで、その屋敷まで詳しく話してくれたのを聞き届けて、紀三井寺の入相の鐘の鳴る頃に屋敷に帰り、すぐに卯兵衛方へ

魂をおとし付けさせ、「さりとては若年のいたりなり。惣じて詩歌はかならず等類[一]もある物ぞかし。李太白[二]が古郷の妻を思ひやりての詩に、呉州如看レ月、千里互相思と作れば、杜[三]子美も又、今宵武州月、閨中唯独看と、心は同じ唐土人もかくは通へる事もあり。和朝の人も、『[四]月見ばとちぎりて出し古郷の人もや今宵袖ぬらすらん』とはよめり。その詩はいかなる若衆の吟じ給ふぞ」と、心静かにたづねける。松三郎聞きもあへず、「そのさきの御方様は、我ら申すまでもなし、御合点なるべし。思し召しあはされよ」といへば、卯兵衛分別にあたはず、「とかくはその人をしらせ給へ」といふ。「よそ〱しき御風情、いよ〱心外に存ずるなり。岩橋虎吉といへるうつくしき御若衆様につかはされける」といひけるに、卯兵衛大笑ひして、「いまだ知らずや、その虎吉は我らが姉の子なるは」と、ざつと機嫌をなほして、「よしなき事をうたがひ、今更恥づかしや」などいへば、「深く思ふからなり」と、なほ意気地をみがきあひて親しみけるを、人もやさしく見ゆるしけるに、世には又恋しらずあり。

訪ねて行った。「機嫌がよくないようだが、私が同船しなかったせいか」と、卯兵衛はやむをえない用事で隙どった次第を説明したが、松三郎はいっこうに聞き入れない。「あなた様は侍ではない。と申すのは、先月私をかわいがってくださったあとで、この身の事を詩に作ってくださったのを、たいへんうれしく思っておりましたのに、気の多いあなた様は、ほかの方へもその詩をお遣わしになったようです。いや、たしかにそうです。私よりも先にそのお方に差し上げられたのでしょう」と、語り終らぬうちに、「くやしい」とばかり泣きだして、その後は自害もしかねないありさまであった。「なるほど、なるほど、話はひと通り聞いた」と卯兵衛は松三郎を落ち着かせておいて、「そんな事を言うのは、若気の至りというものだ。だいたい詩歌というものは、必ず似通った作があるものなのだ。李白が、故郷の妻を思いやって作った詩に、『呉州如月を看ば、千里互に相思へ』というのがあるが、杜甫もまた、『今夜武州の月、閨中只独看るらん』と作っている。中国の人も心は同じで、こんなに似通っていることもある。日本の歌人も、『月見ばとちぎりて出し故郷の人もや今宵袖ぬらすらん』と詠んでいる。

一　同種類。とくに詩歌の同内容のものをいう。
二　この等類の例話、李太白の詩・杜子美の詩・西行の和歌の件は、『百物語』(万治二年刊)の巻下三十七による。盛唐の詩人李白(太白は字)のこの詩は、「張舎人江東ニ之クヲ送ル」と題した詩の一節で、「呉洲好見レ月　千里幸相思(呉洲好月ヲ見バ　千里幸ニ相思ヘ)」とある。ただし張舎人は男の友人。
三　杜子美すなわち盛唐の詩人杜甫のこの詩は、「月夜」と題し、「今夜鄜州月　閨中只独看　遥憐小児女　未レ解レ憶ニ長安ニ(今夜鄜州ノ月　閨中只独リ看ル　遥ニ憐ム小児女　未ダ解セズ長安ヲ憶フヲ)」。鄜州を武州と作るは、『百物語』によった証。
四　『新古今集』羇旅歌、西行法師の和歌。

五 無理に譲ってくれとの手紙。
六 かねて覚悟のほどをあらわし。
七 時取り。時刻を予約して。「七つの時取りをして、灰寄せに行くに」(西鶴諸国ばなし三の二)。
八 元服して(前髪を剃り落として)一人前の男になる。
九 何か浮世の思い出あらんや。浮世に何の未練もない。
一〇 よくぞ申してくれた。

横山清蔵といひし男、松三郎を執心かけ、卯兵衛とも近付きなるに、[五]無理所望の状を付けけるこそうたてけれ。卯兵衛身にしては迷惑これに極まれり。この恋ちとせせと思ふ松三郎事、思ひも寄らず、との返事、いひ懸けて引かれぬ所、清蔵身拵へして、卯兵衛屋形に行きて、うち果たすべき願ひ申せば、[六]思ひまうけし心底をあらはし、「時節のべてはせんなし。今宵和歌の松原に出合ひ、死出の同道二人」と、[七]時とりをいひ合はせて門外に出しが、清蔵立ちかへりて申しけるは、「我しばらくこの事を思ふに、松三郎今年は十六歳、衆道の花とは今から末々なり。いかにしても其方が詠めすてて行く事、ほいなかるべし。今三年待ちなば、[八]前髪もおろし、その時は世に心懸りもあるまじ。三年が間はこれを待つべし。武士のたがひに申し合はせし言葉、かならず反古にはなさじ。三年過ぎての今月今日、この胸晴らすべし」と申せば、卯兵衛満足し、「その時は[九]何か浮世の思ひ出、[一〇]かく申せし心根、いさぎよく太刀先にて埒明けん」といへば、かた〴〵約束して清蔵は私宅に帰りぬ。この事外には知る人もなかりき。

その詩はどういう若衆が吟じていたのだ」と、心静かに尋ねた。松三郎は聞きもあえず、「そのお方様は私が申すまでもありません。あなたがよくご承知のはず、お考えになったらよろしいでしょう」と言うと、卯兵衛は何だかわからず、「ともかくその人の名を知らせなさい」と言う。「そらぞらしいご様子、いよいよ残念に存じます。岩橋虎吉という美しいお若衆に遣わされましたでしょう」と言ったので、卯兵衛は大笑いして、「なんだ、まだ知らなかったのか。その虎吉は拙者の姉の子だよ」と言ったので、松三郎はあっさり機嫌を直して、「つまらない事を疑い、今更お恥ずかしい」と言うと、「それも深く思っているからだ」と、それからはいっそう衆道の意気地を磨き合って親しんだ。それを人々も優しく見のがしていたのに、世間にはまた恋知らずがいるものである。

横山清蔵という侍が松三郎に横恋慕し、卯兵衛とも懇意な仲であるのに、無理に貰い受けたいという無心の手紙を突きつけたのは情けないことであった。卯兵衛の身にとって、こんな迷惑なことはない。いついつまでもと思う松三郎のことであるから、譲るなどとはもってのほかだという返事をした。清蔵も、言い出したか

一　元服させ。

二　身の回り品を入れて棒でかつぐ箱。

松三郎にもふかく隠して、常の念比かはる事なし。その後は卯兵衛・清蔵ふしぎの縁となりて、朝暮かたりて日数をふり、ただいつとなく三年も立つ事やすし。卯兵衛、松三郎が元服申せば、「今一年の春にもあふ事」といふを、是非にすすめて男になし[一]、首尾この時とよろこび、十月二十七日にあたりて、「過ぎにし年申しかはせし月日なり」と、早天より両人ともに野寺に行きて、つらく〳〵最後の物語り、庵主をはじめ下人ども、かかる事ぞとは夢にも知らず、現といへば幻の世や。今ぞと思ふ時、卯兵衛挟箱[二]を明けさせ、位牌を



野寺の庵室で自らの位牌を拝する瀬川卯兵衛と横山清蔵。菊井松三郎への恋の鞘当てから松三郎の元服を待って果し合う約束をした当日である。二人の死の直後に松三郎はその場に馬で駆けつける。

らには退かれぬ所だと、身仕度をして卯兵衛の屋敷へ出向き、果し合いを申し込んだ。卯兵衛も覚悟のほどをあらわし、「時をのばしても仕方がない。今夜和歌の松原で落ち合い、死出の道連れになろう」と言う。清蔵は時刻を打ち合わせて門外に出たが、また引き返して来て、「しばらく考えてみたが、松三郎は今年十六歳、若衆盛りはこれからだ。その方が、この花を見捨ててあの世に行くのは、何といっても不本意なことであろう。あと三年待ったら、松三郎も元服するから、その時はこの世に心残りもあるまい。三年の間は待つことにしよう。武士が互いに約束した言葉は、必ず反古にはすまい。三年たった今月今日、この胸の思いを晴らそうではないか」と言うと、卯兵衛も満足し、「その時はもはや浮世に何の未練もない。よくぞ申してくれた。潔く太刀先で始末をつけよう」と言って、互いにかたく約束して、清蔵は私宅に帰った。この事をほかに知る者はなかった。

　卯兵衛は松三郎にも深く隠して、いつものとおり親しくしていた。その後卯兵衛と清蔵は不思議な縁で親しくなり、毎日語り合うようになった。月日のたつのは早いもので、いつしか三年目を迎えた。卯兵衛が松三郎に元服を勧めると、「も

三 折からの時雨のように涙で袖を濡らし。「偽のなき世なりけり神無月たが誠よりしぐれそめけむ」(続後拾遺　定家)による。「看板に偽のなき神無月／時雨ふり置うらやさん也」(大坂独吟集　鶴永)。

四 釈尊十九歳の出家をふまえている。「十九歳　出家にならねばならず」(一代男二の六)。

五 和歌山県海南市藤白山にあったという名松(和漢三才図会七十六)。画家も描きえず筆を投ずるとの意。

❖黒田藩士の玉島主水(若衆)と豊田半右衛門は深く契っていたが、主水に横恋慕した相手とその仲間を討ち果たして脱藩し、今、主水六十三歳、半右衛門は六十六歳、江戸谷中の門前町で、昔と変らず念友として暮している。これも三角関係の結末ではあるが、脱藩者という日陰者であることも手伝って、念友として生涯を過ごすという特異なケース。

六 間口一間(約一・八㍍)の店。

七 今の障子のこと。

八 寛永八年(一六三一)に幕府の右筆となった大橋重政(寛文十二年没)が始めた和様書道。松花堂昭乗などに学んだ御家流の一派。官府文字として重んぜられた。

二つ取出し、兼ねて二人が俗名・月日までほり付け、たがひにとりかはし、香花を手向け、しばしが程は物をもいはず心底をかんじあひ、袖は[三]折節の時雨して、偽りのなき仏の利剣をぬき持ち、卯兵衛は二十三、清蔵は二十四、惜しや花散り月くもり、跡に残りし松三郎は心の闇にまよひ、その夜半に聞き付け、御寺にかけ入り、「[四]今年十九出家になりて、二人を弔ひ給へ」と皆々すすめても聞き入れず、同じ枯野の霜とは消えぬ。

さても弓馬の家にそなはりし人は、後代にほまれを残し、情かかる命のすて所、こまかに書き留めて世語りと思ふに、あまり義理ふかく、哀れさきだちこころしづみ、ここにて[五]筆すての松は残りし。

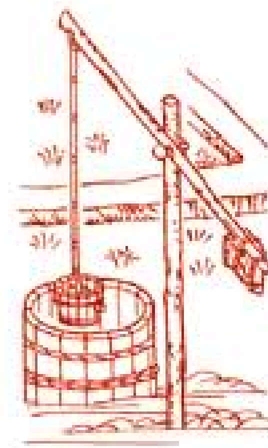
詠めつづけし老木の花の頃

「御痔の薬あり、万によし」、板きれに書き付け、[六]一間見世に[七]明り障子・簾をかけて、[八]大橋流の売手本、老筆なれば好く

う一年このままでいたい」というのを、無理に勧めて前髪を剃らせ、時こそ来たれと喜んで、十月二十七日になると、「かつて約束した月日だ」と、早朝から二人揃って町はずれの寺に行き、しみじみと最後の話をした。住職をはじめ下男どもは、そんな事とは夢にも知らない。現実かと思えば、実は幻の世の中である。今こそ刺し違えようという時に、卯兵衛は下男に挟箱を開けさせて、位牌を二つ取り出したが、それには二人の俗名と月日まで彫りつけてあった。お互いの位牌をとり交わして香花を手向け、しばらくはものも言わないで、互いの心意気を感じ合い、折からの時雨のように袖を涙で濡らし、誠のこもった刀を抜き払って、卯兵衛は二十三歳、清蔵は二十四歳の命を、惜しくも散る花や曇る月のように捨ててしまった。後に残った松三郎は思い悩み、その夜半にお寺に駆け込んだ。「あなたは今年十九歳、ぜひ出家なさってお二人の跡を弔いなさい」と、みんながすすめたけれども聞き入れないで、同じ枯野の霜と消えた。

さても弓馬の家に生れた人は、後世に誉れを残すべく、このような潔い死に方をするのである。この事を詳しく書き留めて、世間の話の種にしようと思ったが、

一 上野の北方の谷中には寺院が多く、たとえば玉林寺門前町・観音寺門前・感応寺古門前町など、門前町が多かった。
二 中国原産の蔓性落葉樹で、高さ一〇メートルに及ぶ。夏、橙赤色の大花を開く。観賞用。
三 柱の上に横木を渡し、一端に石を、一端に釣瓶をとりつけて、石の重みで釣瓶をはね上げて水を汲むようにしたもの。


はねつるべ
（和漢三才図会）

四 烏の縁。おちぶれてみすぼらしい姿の形容。
五 『三体詩』に収録された唐の詩人許渾の詩「秋思」の一節。
六 さんさ節。貞享・元禄当時のはやり唄。「宵は月にもまぎれてすむが、ふくる鐘には、さんさ袖しぼる、よしなの思ひ」（松の葉）。
七 『遊仙窟』の字訓。
八 念仏仲間。
九 福岡市。黒田藩五十二万石の城下町。
一〇 城下に「在りし」と「ありし昔」（過ぎ去った昔）の掛詞。
一一 博多小女郎。近世初期、筑前博

人稀に、世渡るたよりにはなりがたし。

幽かに住みなせる所は、谷中[一]の門前筋に、軒端は松ねぢけて、凌霄[二]かづら花のやさしげに咲きみだれ、庭に夏菊作りなして、井の水清げに、匕釣瓶[三]の立木にとまり烏のをかしく、尾羽[四]をからせし浪人者、若い時より奉公の望み絶えて、貯へし諸道具を売り食ひに一日を暮らしける。朝夕の友とては同年の頃なる老人、碁の相手となり、その外にはまだらの狆一疋もてあそび、仮にも問ひくる人もなし。

ある日、しきりに帷子の袖をしたし、風の扇も手のたゆく、暮をいそぎて行水しけるに、独りの親仁身の汗を流しけるを、友とせし年寄、後姿を見て、「かくもなる物か」と、背骨のふしくれ立ちしを撫でおろし、腰より下の皺を悲しみ泪にしづみ、「高歌[五]一曲掩二明鏡一、昨日少年今日白頭」と作りしも、この身のかはるに思ひくらべて悲し。過ぎにしや、さん[六]さぶしをうたはせて調謔[七]れし事も」と、手に手を取りかはし、湯の水になるまでなげくを、よき後生[八]友達と思はれしに、子細を聞けば、この人々の生国は、筑前[九]の城下にあり[一〇]しむかし

あまりにも義理に詰まった哀れな話なので気が沈み、筆捨て松の名のとおり、筆を捨てて嘆くのみである。

詠めつづけし老木の花の頃

「御痔の薬あり、万によし」と書きつけた板切れを軒にぶら下げた一間間口の店に、障子を立てて簾をかけてある。本職は大橋流の習字の手本を売っているのだが、枯れた老人の筆跡なので、好く人もめったになく、暮しのたしにはならない。

そのみすぼらしい住いは、谷中の門前町にあって、軒端の松はねじけ、凌霄花の花が優しく咲き乱れていた。庭には夏菊を作り、きれいな水をたたえた井戸のはねつるべの柱のてっぺんには、烏がおかしげに止まっている。亭主は貧しい浪人者で、若い時から奉公の望みを捨て、貯えていた諸道具を売り食いにして、毎日を暮してきた。親しい友達はといえば、碁の相手をする同じ年頃の老人ひとり、ほかには斑の狆を一匹飼っているだけで、かりにも訪ねて来る人はなかった。

ある日、汗が帷子を濡らし、あおぐ扇の手もだるくなったので、日暮れを待ちかねて行水を使った。亭主が一人で汗を流している後ろ姿を、友達の老人が見て、

は玉嶋主水とて、美形に飛ぶ鳥おちて、[一一]博多小女臈かと、見し人うたがふ程なり。又の独りは、豊田半右衛門とて武芸おろかならぬ人なりしが、主水にふかく悩めば、又半右衛門心ざしに思ひ付き、十六十九の年より若道のかたらひふかく、互に[一二]海の中道ふかく思ひを重ねし中に、外より主水を執心、この事やむにはあらず。[一三]竈山の火桜、焼きつくる人あまたありて、両方ともに申しかはし、闇を[一四]幸ひの橋に出、首尾よく相手を、助太刀残らず打ちすまし、その夜忍びて[一五]木の丸の関を越えて、[一六]身のうき浜より舟に取り乗り、[一七]世間をはばかる身となり、今ここに隠れぬ。

　今年主水は六十三、半右衛門は六十六まで、昔に替はらぬ心づかひ、二人ともに一生女の顔をも見ず、この年まで世を過せしは、これ恋道、児人を好ける鑑ならん。今もまだ主水を若年のごとく思ひつづけて、黒き筋なき薄鬢に[一八]花の露をそそぎ、[一九]巻立てに結ひなすもをかし。気をとめて見しに、この人は[二〇]角を入れたるよしもなく、生れ付きの丸額これぞかし。不断も以前を忘れずして、[二一]壺打ちの楊枝手ふれて歯をみがく

「こんなにも変るものか」と、節くれだった背中を撫でおろし、腰から下の皺を悲しんで涙にむせび、『高歌一曲明鏡を掩ふ、昨日は少年今日は白頭』と中国の詩人が作ったというが、自分たちの身が変ったことと思いくらべて、悲しくてならない。昔はそなたにさんさ節をうたわせて遊んだ事もあったのに」と、二人は手に手を取って、行水の湯が水になるまで嘆くのであった。それを見た人が、似合いの念仏仲間だと思って、事情を聞いてみると、この人々の生れ故郷は、筑前福岡の城下で、その当時、その一人は玉島主水といって、飛ぶ鳥も落とすほどの美少年で、博多小女郎ではないかと疑われるほどであったという。もう一人は豊田半右衛門といって、武芸の達者な侍であった。主水を深く恋すると、主水も半右衛門の気性に惚れこんで、主水が十六歳、半右衛門が十九歳の年から、深く衆道の契りを結んだ。海の中道のように、互いに深く愛し合っているうちに、ほかの侍が主水に横恋慕し、あきらめる様子はなかった。竈山の火桜ではないが、たきつける人が大勢あったので、双方果し合いの約束をし、闇夜を幸い橋で落ち合って、主水と半右衛門は首尾よく相手を助太刀の者までも一人残らず討ち

多柳町の廓に実在した遊女。

一二　福岡県糟屋郡の西海と志賀島を結ぶ砂州。延長約一二キロメートル。

一三　福岡県太宰府市にある山。「応神生湯を此山にて召されしより竈門山とも申すなり。火桜（緋桜）をよめり」（名所方角抄）。火桜—焼きつくる。

一四　『名所方角抄』筑前国分に、「幸の橋　是も所在不分明、名寄に当国にみえたり」とある。

一五　木の丸は丸木で造った殿舎。筑前国朝倉郡の山中に斉明天皇が新羅親征のために駐軍した時の殿舎を、朝倉木の丸殿というので、朝倉関の別称と考える。

一六　『名所方角抄』豊前国分に、「身の憂浜　かつらがたより南也。西は海也。間三里の浜なり」とある。桂潟（勝浦）は福岡県宗像郡の西北海岸。

一七　刃傷沙汰による脱藩は、事情によっては上意討ちをかけられる事もあった。うまく逃げおおせても、再仕官の道は閉ざされていた。

一八　「寛永の末、芝神明前にせむし喜右衛門と云ふ者、花の露と云ふ薬油を製す。面部のふき出物によし。面につやを付る匂ひ油なり」（我衣）。

一九　→三九六ページ注五。

二〇　十五、六歳で半元服といい、前髪立ちのまま額の両すみを角に剃り込むのを、角を入れるという。

二一　先端を打ちくだいて総のようにした楊枝。打楊枝ともいう。今の歯ブラシと同じで歯みがき用。

一 貴人の秘蔵するものを御物という。かつて大名に寵愛された小姓あがりの侍。

二 少年の草履取り。男色の相手。

三 精白米で造った清酒。

四「花ノ時天酔ニ似タリ」（和漢朗詠集　菅丞相）。

五 物ねだりをしそうな。

六 諺「六日の菖蒲十日の菊」による。九月九日の重陽の節句（菊の節句）がすむと、菊も味気ないとの意。気の抜けた味気ない気持。

七 美しい姿。美人の形容。ここは、美しく着飾った女たち。

など、髭をぬき捨て、知らぬ人の見ては、かかる分とはよもや思ふまじ。されば大名の御情のふかき[一]御物あがり、妻子のある後までも、何となく若道の時を忘れさせ給はぬこそいと殊勝なれ。これを思ふに、女道とは格別なる色あり。女は仮なるもの、若衆の美艶は、この道にいたらずしてわきまへがたし。さりとてはうたてき女の風俗と、世に住みながら東隣とは火の取りかはしもせず。人心とて、自然の夫婦いさかひに鍋釜わるにも、おのれらが損よ、とここに出合ふ事思ひもよらず、壁越しに力を添へ、「亭主、たたき殺して[二]小草履おけ」と歯切りをするもをかし。

　折節は弥生山、上野の桜人をまねき、池田・伊丹・鴻之池よりの[三]諸白もこの時売り切るべし。[四]天も酔へり、地に[五]ねだりくさき足音、内より男女を聞きわけ、男の時は、もしもや若衆かとはしり出詠め、女の時は戸口をさしこめ、[六]十日頃の心になりてしづまりぬ。

　春も時雨の定めなや、俄にふりくれて[七]姿の花もちり〳〵に、今日の名残を惜しまれしに、女中一むれ立ちさわぎ、かの牢

果たし、その夜城下を忍び出て、木の丸の関所を越え、豊前の海岸から船に乗って脱藩したので、人目を忍ぶ身となり、今ここに隠れ住んでいるのであるという。

　今年主水は六十三歳、半右衛門は六十六歳まで、昔と変らず愛し合ってきた。二人とも一生女の顔を見ることもなく、この年まで生きてきたのは、これこそ衆道の鑑というべきであろう。半右衛門は今でもまだ主水を若衆のように思い続け、白髪になった薄い鬢髪に、花の露という香油をふりかけ、巻立に結わせているのもおかしかった。注意して見ると、主水の額は若衆の時のままで、半元服した跡もなく、生れつきの丸額であった。ふだんも若衆時代の身だしなみを忘れず、房楊枝で歯を磨いたり、髭を抜いたりしているのだが、事情を知らない人が見ては、とても衆道の仲だとは思うまい。ところで、大名に寵愛された小姓が、成長して妻子をもった後までも、殿がなんとなく当時のことをお忘れにならないというが、そうありたいものである。この事を思うと、女色と違って男色は、格別に味のあるものである。女はその場かぎりのものだ。若衆の色香というものは、この道に徹しなくてはわかるものではない。全く女の風俗はいやらしいものだと、この二



上野の花見帰りの女たちがにわか雨のため軒先を借りようとするのを、竹箒で追い立てる女嫌いの老人豊田半右衛門。六十六歳の半右衛門は六十三歳の玉島主水と今も念友関係、谷中門前のこの陋屋に住む。

人の軒陰を便に、「かかる所に近付きもがな。せんじ茶涌させて晩方まであそびて、傘を借りて、様子によつて夕食も振舞はば食うて帰るべきに、ここらに心当てなき」と、こいき[八]すぎたる女、戸を少し明けて内を覘きける。面影を見しより、手もとなる竹箒を提げ出、「むさしきたなし、立ちのけ」とあらけなく追つ立て、その跡にかわき砂を蒔きて、四五度も地を改め、塩水[九]をうち清めし。これ程女嫌ひ、江戸広しと申せども、又見た事もなし。

八　出しゃばり女。

九　穢れを清める時、塩をまき、また塩水を打つ。「走り入れば叩き出し、難なく辻へ打出し、打つて清めの塩水や」(心中刃は氷の朔日〈宝永七年〉)。

人は、人の世に住んでいながら、東隣とは火の貸し借りもしなかった。なりゆきで夫婦喧嘩が始まり、鍋釜を割るようなことになっても、自分たちが損をするだけよと、かりにも仲裁などしなかった。それどころか壁越しに力を添え、「亭主、女房をたたき殺して、若衆の草履取りをおけ」と歯ぎしりするのも、滑稽であった。

　上野の山に春がおとずれて、花見の群衆をまねき、池田・伊丹・鴻之池からの清酒も、この時、売り切れてしまいそうな賑いであった。天も酔っぱらい、地にはもの欲しそうな足音がする。二人は家の中で男女の足音を聞きわけ、男の時はもしや若衆ではないかと走り出して眺め、女の時は戸口を閉めて、味気ない気持になってじっとしていた。

　春も空模様は変りやすく、にわかに雨が降り始め、美しい女たちも、散り散りになり、今日の名残が惜しまれた。一群れの女たちががやがやと、この浪人の軒下に雨宿りし、「ここらに近づきの家があるとよい。煎じ茶をいれさせて晩方まで遊び、傘を借り、都合で晩飯でもふるまってくれたら、食べて帰るのに。この辺に心当りがない」と言いながら、出しゃばり女が戸を少し開けてのぞき込んだ。

❖これは珍しく尾州熱田神宮の神主の子供たちで、外記(念者)と大蔵(若衆)を主人公としているが、衆道よりもむしろ、外記が大蔵を誤って殺した後の外記と許嫁の結びつきにウエートをおいているので、衆道物語とは名ばかりである。

一『勢語図説抄』に、はかなき事を互いにくらべること、とある。

二 不老不死の仙人が住むという伝説の蓬萊島。ここは下文の尾州熱田の宮の異称「蓬が島」をかけている。「熱田宮　此処を蓬が島とも申す也。仍て蓬萊山とて、社頭より西鳥居の外につき山あり。形は亀に似たり」(名所方角抄)。

三 名古屋市熱田区伝馬、裁断橋の南に姥堂があり、座像丈八尺一寸(約二・四五メートル)。「町の入口左のかたに三途川の姥あり」(一目玉鉾三)。姥は冥土の三途川のほとりの衣領樹の下にいて、通りかかる罪人の衣をはぎとるので、奪衣婆という。

四 半元服。元服して前髪をおとすまでは、男色における弟分というのがしきたり。→四四一ページ注三〇。

五 八剣神社。熱田大明神の南にあり、下宮という。

色噪ぎは遊び寺の迷惑

一化競べとや、月の夜の雨、花盛りの風、これは又見るべき春秋もある世のためしなり。人の身の義理死程つれなき物はなかりき。知れぬ後の世の事は覚束なし。長生きのたのしみ、二蓬が嶋の甘い物を食うて年月暮らすは、何か心の罪なし。尾州熱田の宮の宿はづれに、三三途川の姥、木像にして立ち給ふが、この所往来の人しげきに、死出の旅人ならねば、この姥の削ぐ事もならず。一日も浮世に住む徳ぞかし。

ここに、はかなき人の身の程、朝顔の種、若衆の花盛りに生じけるかと疑はれし。当社西の御門に、神役の家高き大中井兵部太夫一子に、大蔵といへるあり。同じ神職に高岡川林太夫と申せし人の子に、外記とて、今年十八の角前髪、四いまだ美童ただなかなるに、その身ははや念者にかはり、大蔵と申しかはし、二年あまりの心底、五八剣に命を懸けて、誓紙たがひに偽りなく、明暮身に影の添ふごとく、しばしも独りは

老人はその顔を見るなり、手元にあった竹箒を引っさげて駆け出し、「きたない、けがらわしい、立ち退け」と、荒々しく追い立て、その跡に乾いた砂をまき、四、五度も地面をならして、塩水を打って清めた。これほどの女嫌いは、江戸広しといえども、他に見た事がない。

色噪ぎは遊び寺の迷惑

仇競べにある名月の夜の雨、花盛りの風は、また見ることのできる春秋があるが、取返しのつかない人の義理死にほど悲しいものはない。立派に死んでみたところで、後の世のことは誰も知らない。長生きを楽しみ、蓬萊山のうまいものを食って暮すほど気楽なことはない。俗に蓬萊山といわれる尾張熱田の宿はずれに、三途の川の奪衣婆の木像が立っている。ここは往来の激しい所だが、冥土への旅人ではないから、この婆も着物をはぐことができない。一日でも浮世に住んでいるお陰である。

まことにはかない身の上で、朝顔の種が花盛りの若衆と生じたのではないかと思われる人があった。熱田神宮の西のご門のかたわらに、大中井兵部太夫という格式の高い神主が住んでいて、大蔵とい

六 浮かれだして。
七「延宝年中、長崎ヨリ来ル。小鷹和泉・唐崎竜之助アリ。二人始メテ大坂ニ於テ此技ヲ為ス。見ル者驚感セザルナシ。竹籠口径尺半、長サ七、八尺ヲ用フ」(和漢三才図会十六)。→七五ページ注一。
八 銅鑼。撥で打鳴らす銅製の楽器。
九 皿のように平円で、中央の突起部に紐をつけ、二枚を打合せて鳴らす。
一〇 鶴は千年、亀は万年。
一一 急事を知らせるために、早くはげしくつき鳴らす鐘。
一二 寛文・延宝期の上方の歌舞伎作者福井弥五左衛門作の「非人敵討」。寛文四年(一六六四)、大坂の荒木与次兵衛座で初めてこの続き狂言を上演。これが上方歌舞伎における続き狂言の始りとなったという。
一三 住職。

見えず。

ある時、木隠れの遊び寺に若衆友達あまた集り、住持の留守をうれしく、「今日こそしたい事してさわげ」とて、俄に[六]諷り出して、[七]小鷹和泉が軽業・籠抜け、[八]鉦・[九]鐃鉢を打ち鳴らし、本堂・客殿轟かし、仏も動き出させ給ひ、後光・台座を踏みわられ、蠟燭立の鶴亀も、[一〇]千代万代といはさず細かにくだかれ、作り庭をあらし、[一一]早鐘に近所を驚かし、その後は狂言替はつて、[一二]非人物語三番つづきをはじめ、石塔の陰より手負ひのまね、興に乗じて身を忘れ、外記木刀を捨てて、まことの脇指抜きもち、目をふさぎこけかかるを、大蔵はしり寄りて、「これは何とあそばした」と、取りつく所を覚えずうちける程に、大蔵が首ころりと落ちて、なげくにかひはなかりき。いづれも泪にくれて前後忘じ、しばらく言葉をかくる人もなし。されども外記は胸をするゑ、「すこしもながらへてせんなし。大蔵、只今まゐるぞ」と、死骸に寄り添ひ切腹するを、大勢取りつき、時節を延ばしけるこそうたてけれ。

折節[一三]長老かへり給ひ、子細を聞き届けて、「その方命にあ

う一子があった。同じ神主の高岡川林太夫という人の子に、外記といって今年十八歳の角前髪がいた。まだ美少年のまっ盛りなのに、もう兄分の立場に立って、大蔵と兄弟の契りを結び、この二年あまり、八剣の宮に納めた命がけの誓紙に偽りはなく、いつも身に影が添うように、しばらくもひとりではいなかった。

ある時、林の中の遊び寺に、若衆仲間が大勢集まった。住職の留守をうれしく、「今日こそしたい事をして騒げ」と、にわかに浮かれだした。小鷹和泉の籠抜けのまねをして、銅鑼・鐃鈸を打ち鳴らし、本堂や客殿をとどろかし、仏様も動き出されて、後光や台座を踏み割られ、蠟燭立ての鶴亀も千年や万年どころではなく、細かく砕かれてしまった。庭を荒らし、急を告げる早鐘をついて近所を驚かしたりした。その後は遊びが替って、非人敵討の三番続きの狂言を始めた。外記が石塔の陰から手負いのまねをして現れ、興に乗じて我を忘れ、木刀を捨てて本物の脇差を抜いて持ち、目をふさいで倒れかかる所へ、大蔵が走り寄って、「これはどう遊ばした」と言ってすがりつくところを外記が思わず斬りつけたので、大蔵の首がころりと落ちた。今更嘆いてもしかたがない。みんな泣きの涙で前後不覚

らねば、この段大蔵親達にも因果かたり、思ひを晴らさせ、自分の親にも浮世の暇を乞ひて、すみやかに相果て、名を末の世に残し給へ」と、その理をつくしていさめければ、「いかにも我が身ながら命はあづかり物、この上は御僧次第に最後を待つ間も口惜し」と、諸袖をしたしける。この心ざし哀れに物がなしく、その座にありし美児、いづれか命を惜しむはなし。親類の末々までこの寺に来たり、大蔵がなりゆく有様に涙をつらぬき、寺前の松柏も枯れぬべし。

兵部は我が子の事は外になして、外記が命の程をかなしみ、



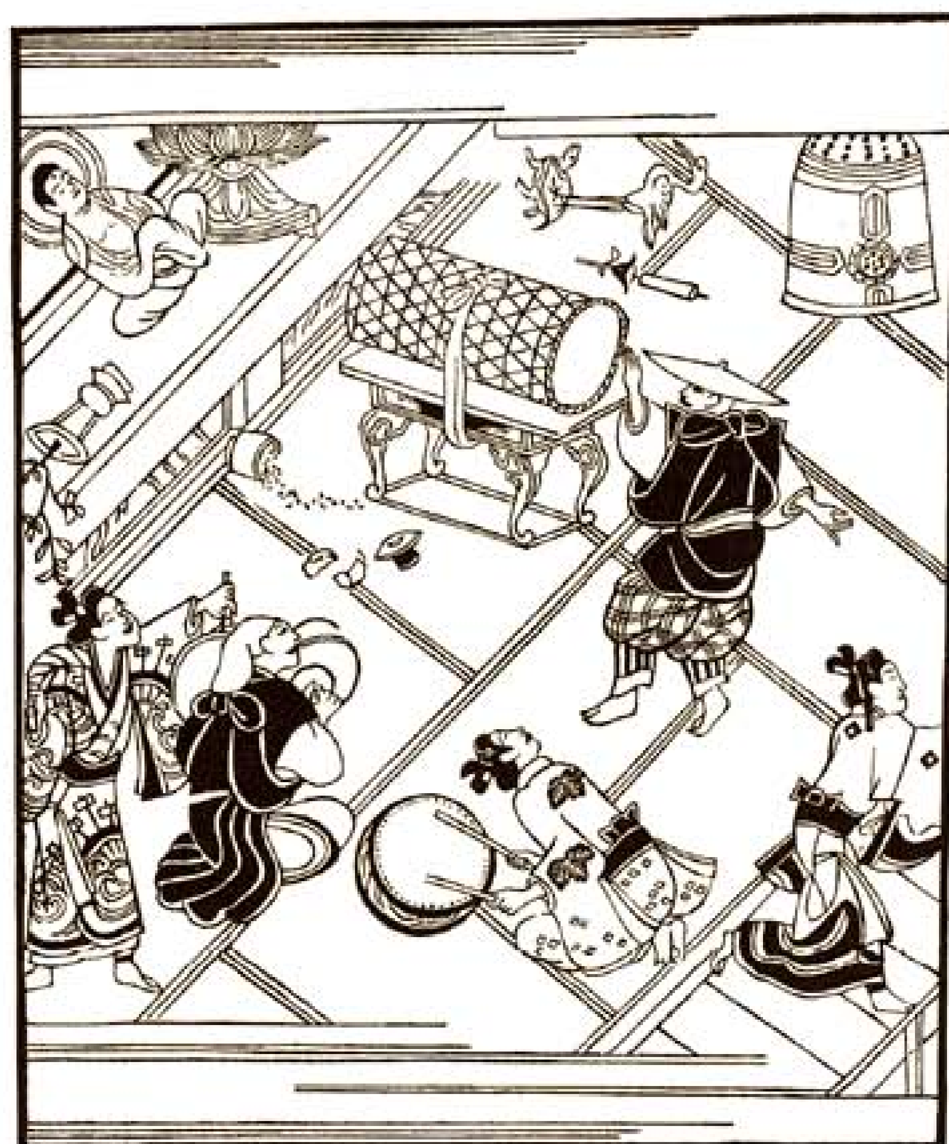
き」の真似をしている場面。輿に乗り真剣を抜いて石塔から倒れかかった高岡川外記が、誤って、男色関係にある大中井大蔵の首を切り落としたところである。二つの場面が異時同図法で描かれている。

となり、しばらくは言葉をかける人もなかった。しかし外記は覚悟して、「少しも生きながらえていたくない。大蔵、今行くぞ」と言って死骸に寄り添い、切腹しかかるのを大勢が取りすがって時節を引き延ばしたのは、あいにくであった。

ちょうどそこへ住職が帰ってこられて、事情を聞き届け、「こうなってはもうそなたの命ではないから、思いがけないなりゆきを大蔵の親たちにも話してさっぱりさせ、自分の親にもこの世の暇乞いをして、立派に切腹し、名を後世に残しなさい」と、道理を尽して諫めたので、「おっしゃる通り、わが身ながら命は預り物、このうえは御坊のお言葉に従います。こうして最期を待っている間も残念でなりません」と言って、外記は涙で両袖を濡らした。その覚悟のほどはいかにも哀れで、その場にいた若衆も、命を惜しむものはなかった。両家の遠い親類までもこの寺に来て、大蔵の変りはてた姿に涙を流したので、寺前の松や柏も枯れてしまうかと思われるほどであった。

兵部はわが子のことなどかまわないで、外記が命を落とすことを悲しみ、大蔵の代りに自分の子にして跡目を継がせたいという願いをいろいろとお上に申し上げたが、お調べの後、お許しになるわけに

住持を頼み、大蔵がかはりにわたくしが子になして名跡つがせたき願ひ、いろ〳〵申し上げしに、御詮議の後御許さるる事かたくて、「切腹いたさせよ」との仰せに任せ、その段申し渡しけるに、かくあるべしと思ひ極めし身なれば、今更心にかかる事もなく、その用意をしておの〳〵に申しけるは、「大蔵相果てし所なれば、この寺にして最後と存ずるなれども、それがし願ひに任せ、年頃頼めし浄蓮寺にて」と申しけるにぞ、心まかせにともなひ行き、大乗物の戸ざし両方ともにうち明けて、白装束に無紋の浅黄袴をゆたかに、大前髪を



住職の留守を幸いに、寺の中でふざけ尽している若衆たち。左面の座敷では仏像・花立て・蝋燭立てが倒され、太鼓・鐘・銅羅をたたいての乱痴気騒ぎ。右面は、「その後は狂言替はって非人物語三番つづ

はいかず、「切腹いたさせよ」という仰せに従い、外記にその事を申し渡した。もとより覚悟していた身であるから、今更心にかかることもなく、その用意をして人々に頼んだ。「大蔵が命を落とした所ですから、この寺で最期をとげたいとは思うのですが、私が年頃帰依してきました浄蓮寺で」と言ったので、望みどおりにその寺へ連れて行った。大乗物の戸は両方ともに開け放してあった。白装束に無地の浅黄の袴をゆったりとはき、大前髪を結った外記の姿は今日ことに美しく、見送る人々は気も魂も失い、「さらば、さらば」と言う声も、しだいに遠ざかって行った。外記は道すがら、いつもより早く筆を走らせ、大蔵の両親へ面目もない次第を返す返すも書き残した。ほどなく乗物がお寺に着くと、外記は和尚から心静かに臨終の心得を授かり、切腹用の畳の上にすわって、人々に礼儀を述べた。小脇差を持ち直して、今こそ最期と見えた時、白い練絹の被衣をかぶった十四、五歳の美少女が駆けつけて外記にとりすがり、「わたくしもあとには残りません」と、覚悟の様子であった。

　外記はその女にまるで見覚えがなかったので、さしあたって迷惑し、「いったいどうしたことだ」と咎めてから、事情

一　帰依している。
二　未詳。
三　無地の浅黄（薄青）袴は白装束とともに死に装束。

結はせたる風情の今日殊にうるはしく、見送る人魂はなく、「さらば〳〵」といふ声も遠ざかり、道すがら硯紙に筆を常よりうごかせて、大蔵親たちへ面目もなき言の葉、かへすがへすも書き残し、程なく御寺になれば、心静かに臨終の一大事をさづかり、敷畳[一]の上に座して、皆々に礼儀を相述べ、小脇指を取りなほし、今ぞと見えし所へ、十四五なる美女の、白き練被[二]せしが、外記に取りつき、「自らも跡には残らじ」と思ひ極めし有様、

外記はかつて覚えなくて、この首尾さしあたつての迷惑、「いかなる事ぞ」ととがめ捨て、次第を聞きしに、外記親林太夫涙をおさへ、「その方夢々知る事にはあらず。この息女は、塚原清左衛門といひし浪人衆の娘、我等ともすこし[三]のがれぬ中なれども、つれ添ふ汝が母と不合[四]なるによつて、年久しく忍びて往来をもせしなり。いかにしてもおとなしき所を幾度か見届けしによつて、是非に我が嫁に約束し、来年の春の頃は女房が手前をも申しなだめ、目出度よび入れてその方が妻にせんと、思ひし事もあだになり、さだめなき世のかな

を聞こうとした。すると外記の親林太夫は涙をおさえ、「その方はゆめゆめ知らぬ事だ。この息女は塚原清左衛門というご浪人の娘で、それがしとも縁続きの仲であるが、その方の母と仲がわるいので、長い間こっそりと往来をしていた。たいへんおとなしい娘であることを十分に見届けたので、ぜひともわが家の嫁にと約束し、来年の春の頃には家内も説得してめでたく呼び迎え、その方の妻にしようと思っていた事も仇になってしまった。ままならぬ世が悲しい」と話したので、このもっともな話を聞いた人々は、また涙を新たにした。「またとない女心だ。これは命を捨てさせるわけにはいかない」と、人々が声々に娘の命を惜しんだので、大蔵の親兵部太夫は、命がけで重ねてご訴訟申し上げ、願いどおり外記の命をいただいてわが子とし、その娘を貰って祝言を急ぎ、家を譲って親子仲よく暮した。

一 切腹の場として、庭前に砂をまき、畳二枚を敷くのが作法。

二 生糸を経、練糸を緯として織った練貫の絹で製した被衣。被衣は女子の外装として、頭からかぶる小袖。

三 親類。

四 不和。仲の悪いこと。「御姫君も二人出来させ給へども、御ふあひにもありつるか」(三河物語下)。

しや」と、この断りを聞く人、又あらためて涙となり、「ためしなき女心、これを命はとられじ」と声々に惜しむにぞ、大蔵が親兵部太夫、一命に掛けてかさねて御訴訟申し上げ、願ひのまま命を乞ひ請け、外記を我が子になし、則ちかの娘をもらひて、祝言の事どもとりいそぎ、その家をゆづり、親子かたらひをなしける。

本朝若風俗 男色大鑑

絵入

五

巻五　あらまし

一　泪の種は紙見世　昔は舞台子の花代も金一歩（銀十五匁）と安かったが、妙心寺関山国師三百五十回忌の折に諸国の裕福な僧が集まり役者買いをした時から銀一枚（約四十三匁）と定まって、今に至っている。さてその頃、村山座の花形役者藤村初太夫は、東山の花見帰り、酔った男にからまれて難儀しているところを、いろはの十郎右衛門の見事なさばきで救われた。それが縁となり、二人は二年余り深い契りを結ぶが、親戚と継母にうとまれた十郎右衛門は行方知れずになる。初太夫は引き籠って役者もやめ、一時紙見世を出すが、十九歳で出家して高野山に隠棲、はるか後、十郎右衛門が天の橋立で死んだことを知って、ねんごろに弔った。

二　命乞ひは三津寺の八幡　若衆歌舞伎時代の塩屋九郎右衛門座の平井しづまは、末代にもあるまじき美少年。ある時、長崎商いで成功した堺の七十余歳の老人が、その芝居を見物、茶屋の亭主に頼み、しづまへの思いを遂げさせてくれという。しづまが応じ、老人と茶屋で出会うと、老人は恋煩いの息子に会ってくれと頼む。承知して待つしづまの前に現れたのは十四、五歳の美少女、意外だったが一夜の契りを込めて別れた翌日、女は病死した。七日後それを聞いてしづまも病となり、三津寺に祈って命乞いをしたが、その日の夕刻に死んだ。

三　思ひの焼付は火打石売り　玉川千之丞は小唄も芸もすぐれた名女方、十四歳で都の舞台をふんで四十二歳の大厄まで振袖をきて、一日も見物人に飽かれることがなかった。そのため千之丞におぼれて家財を蕩尽した人も多かったが、尾州に隠れなき三木と呼ばれた風流男もその一人、行方知れずになった後、拾い集めた火打石を売って五条河原を宿とする物乞い暮し。それを知った千之丞は、川原を訪ねて三木に出会い、情けをかけるが、三木はいずくかへ身を隠してしまう。それを嘆いた千之丞は、残った火打石を集めて塚を築き、法師に守らせた。それをある人が、新恋塚と名づけたという。

四　江戸から尋ねて俄坊主　高野山と山続きの玉手の里の老和尚の弟子可見という美僧は、もと江戸の人気役者で芸にもすぐれた玉村主膳、三年ほど草庵を結んで修業に励んでいた。そこに江戸で抱えていた浅之丞が訪ねて来たが、一夜語らい、もてなすだけで関東へ帰らせてしまう。浅之丞は、一度関東に帰った後、元結を払って再訪、主膳とともに修行に励む。浅之丞に恋していた村娘も、その出家姿を見て狂気するが、心をおさめて自ら髪を切って出家する。その後、山本勘太郎という美少年も、竜田の紅葉見の帰りに主膳・浅之丞を訪れ、その殊勝さを見て出家した。

五　面影は乗掛の絵馬　都の男はもとより、人の女や娘に恋死にの思いをさせた玉村吉弥は、春狂言の仕組に行く途中、自分をじっと見つめる田舎男がいるのに気付き、手もとの楊枝を男の袖口に投げ入れて喜ばせた。男は狂乱の心となり、金さえあればこの恋も叶うと思って、ただちに本国佐渡島に帰り、金銀をため、金山を掘り当てて大金持となり、五年後に都に上った。吉弥はもはや若衆姿をやめ、元服して大きな男になっていたが、男は昔に変らぬ心ざしに感じ、一生暮しに困らぬほどの大金を与えて、佐渡に帰った。

男色大鑑　本朝若風俗　第五巻

目録

一　涙の種は紙見世
　芝居子銀一枚になる事
　都人も桜に狼藉の事
　花崎初太夫出家する事

二　命乞ひは三津寺の八幡
　平井しづま衆道の外の情の事
　銀ためし親仁はじめて芝居見る事
　境の娘逢うての恋を捨つる事

一　藤村初太夫　→役者一覧。

三 思ひの焼付(たきつけ)は火打石(ひうちいし)売り

玉川千之丞(たまがはせんのじよう)内証帳の事

嵐をしのぐ手づから燗鍋(かんなべ)の事

都に新恋塚(しんこひづか)をつく事

四 江戸から尋ねて俄坊主(にはかばうず)

道なしの笹(ささ)の庵(いほり)に住む事

玉川主膳(たまがはしゆぜん)心をくむ内井戸の事

里の女はすがたにまよふ事

五 面影(おもかげ)は乗掛(のりかけ)の絵馬(ゑむま)

霜先(しもさき)の狼(おほかみ)恋に命とらるる事

玉村吉弥(たまむらきちや)かくれもなき情(なさけ)しりの事

前髪(まへがみ)のなきも世の仕合せになる事

目録終

❖野郎歌舞伎初期の京都の女方藤村初太夫(巻七の一の主人公藤村半太夫と同一人)が、東山で初太夫の携えた桜の枝を強請する男伊達をこらしめてくれた優男と二年余り契ったが、男が一門に追われて行方不明となったので、高野山で出家した。時に十九歳というが、これはフィクションである。→巻七の一。

一 若衆歌舞伎の制禁は、慶安四年(一六五二)八月の江戸におけるそれを初めとし、翌承応元年七月には、三都ともに制禁されている。男色に基づく歌舞伎座にての刃傷沙汰が主なる原因。しかし早くも翌二年三月には、前髪をおとし、「物真似狂言尽し」の看板を掲げることを条件に許可されている。以後、野郎歌舞伎という(歌舞伎年表、南水漫遊)。

二 →役者一覧。

三 承応二年三月に再許可以後は、「芝居木戸口の上に将棋の駒の如く成札に物まねと書く」(南水漫遊)よ

うになった。「物まねとは声色を似するにあらず、老若男女貴賤僧俗それ〴〵の物を真に似する事」(南水漫遊)であるという。
四 将来、立女方になるべき少年俳優。
五 舞台をふむ少年俳優。
六 一夜の揚代金一歩(銀十五匁)。
七 旅稼ぎの陰間。
八 大一座で供応すること。
九 銀の一両は四匁三分。すなわちここは銀二十一匁五分。
一〇 小粒・豆板ともいう。一匁から五匁前後の指頭大の銀貨。
一一 諸雑費。
一二 当時の芝居興行は、明六つ(午前六時頃)に始まり、暮七つ半(午後五時頃)にはねた。
一三 人形の台の下に仕掛けた竹の串を膏薬ではりつけ、しばらくしてははね返るようにした張子人形(嬉遊笑覧)。
一四 二色以上を染めわけた手拭。
一五 歯磨粉。
一六 銀四、五分。
一七 関山のふりがな「かいさん」は、関山慧玄禅師が、事実開山であるから誤りではない。京都市右京区花園妙心寺町の臨済宗妙心寺派の大本山妙心寺の開山関山禅師の三百五十年忌は、宝永六年(一七〇九)で、ここは万治二年(一六五九)の三百年忌の誤り。
一八 裕福な僧。
一九 劇場地帯で男色の本場である四条河原。

泪の種は紙見世

「今の京には何が時花る」といへば、「始末して銀を溜める事ぞ」と語る。それは常なり。大歌舞伎御法度の後、村山又兵衛が物まね狂言づくしに仕掛け、太夫子あまた集めしに、その頃までは、都にも舞台子のあそびは稀に、花代も一歩づつになべて極め、今の世の飛子同前に客を勤めぬ。誰かは始めし、太夫なりとて、惣役者を東山にして座振舞の後、銀五両になしぬ。万心やすき世や。草履取りにも細銀二匁とらし、茶屋へは銀二両程の集礼なれば、芝居の果てより夜の明くるまで、我が物にしてさばきぬ。その時の子供はまことの子供にて、恋をかさねてあへども、御無心云ふ事もなく、もてあそびとて飛人形、又は染め分けの手拭、琢き砂、やう〳〵四五分が物をとらすに嬉しがりしに、一年、妙心寺関山国師三百五十忌の時、諸国諸山の福僧京着して、御法事の後、色河原を見物しけるに、田舎には見馴れぬ児人に思ひこがれ、

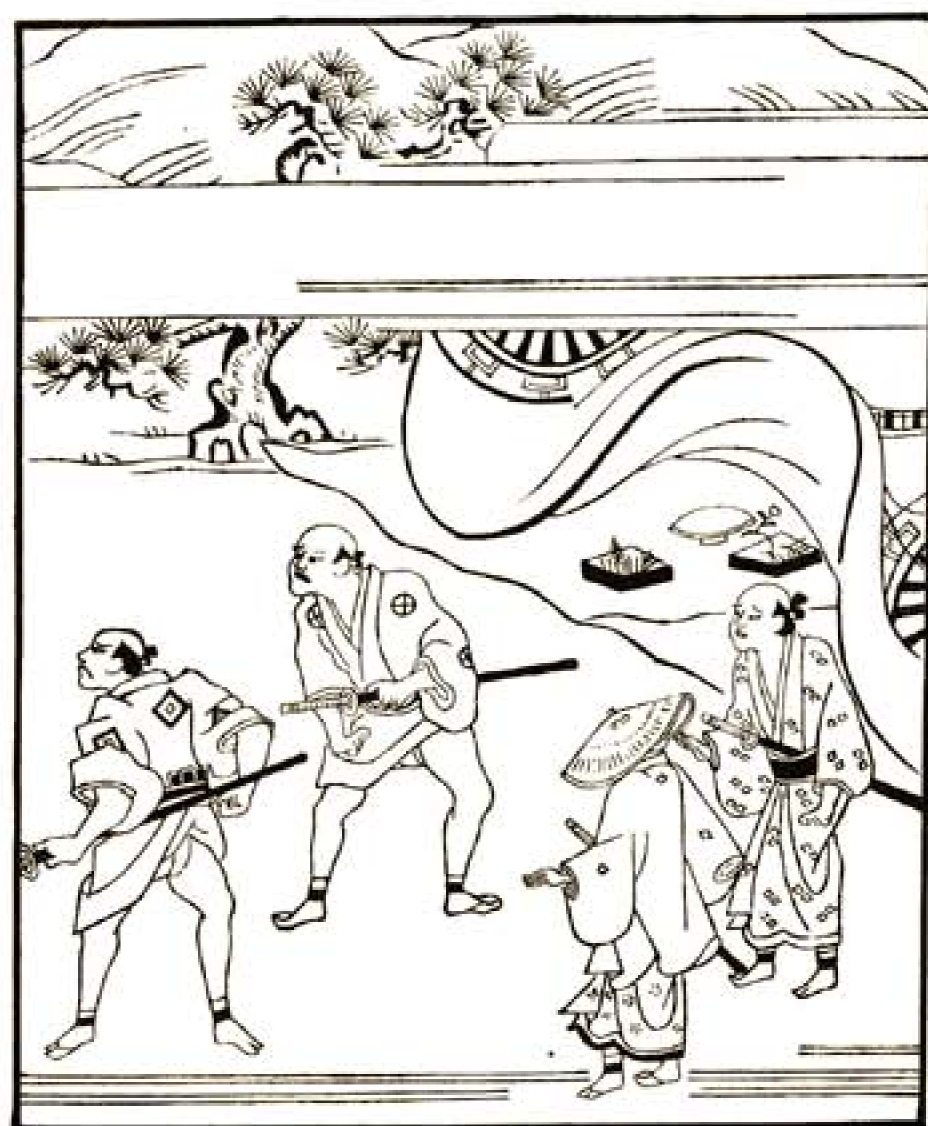
泪の種は紙見世

「今の京都で何が流行るか」というと、「倹約をして銀をためることだ」と言う。それは今に始まったことではない。若衆歌舞伎が禁止された後、京都では座元の村山又兵衛が、世態人情を写す「物真似狂言尽し」の看板をあげ、歌舞伎若衆を大勢集めて、芝居を再興した。その頃までは都でも、歌舞伎若衆相手の遊びは稀であった。花代は、どれでも金一歩と決まっていて、今の世の陰間同然に客をとったものである。それなのに、誰が始めたのか知らないが、これは一座のおもだった若衆だと、その座の役者を一人残らず東山で馳走してから、花代を銀五両取ることにした。まことに気楽なご時勢で、若衆の草履取りには細銀で二匁やり、茶屋には銀二両ほどの勘定を払えば、芝居がはねた夕方から夜の明けるまで、若衆をわが物にして遊べたのである。その頃の歌舞伎若衆は、勤め気を離れたほんとうの若衆で、馴染んでからも別に金の無心をする事もなく、飛び人形の玩具や染め分けの手拭、または歯磨粉など、せいぜい四、五分ほどの物をやると、うれしがったものである。ところが、ある年、

一 天和・貞享当時の野郎の揚代。銀一枚は四十三匁。
二 →役者一覧。
三 『遊仙窟』の字訓。原本「何怜」。
四 当世風の舞。
五 塩竈桜。八重桜で、「葉まで（浜で）美し」との洒落という。
六 「田子の浦のそこさへ匂ふ藤なみをかざして行かむ見ぬ人のため」（拾遺）。「藤の八房つらなりしをかざし、見ぬ人のためといはぬばかりの風儀」（五人女三の一）。
七 京都市左京区吉田神楽岡町にある丘。吉田山といい、西腹に吉田神社がある。
八 おしゃれをした。

万事をやめて買ひ出す程に、前髪のありて目鼻さへつけば、一日も隙なく、これより昼夜に売り分け、花代も舞台踏むは[一]銀一枚に定めぬ。この法師等、かぎりある都あそび、万の物入りをかまはず、今の世の噪ぎ人の気の毒とぞなれる。

　その頃、村山座の花ざかり[二]藤村初太夫、すぐれて[三]何怜しく、[四]時勢粧を舞ふ事をえたり。見し人これに悩まざるはなかりき。ある日東山の桜に行きて、さかりに近き[五]塩竈の一枝を初太夫持ちて帰り、[六]「見ぬ人のためにも」と、やさしき心ざしふかし。[七]神楽岡の辺りに[八]色作りたる男集りて、昼からの酒事と見

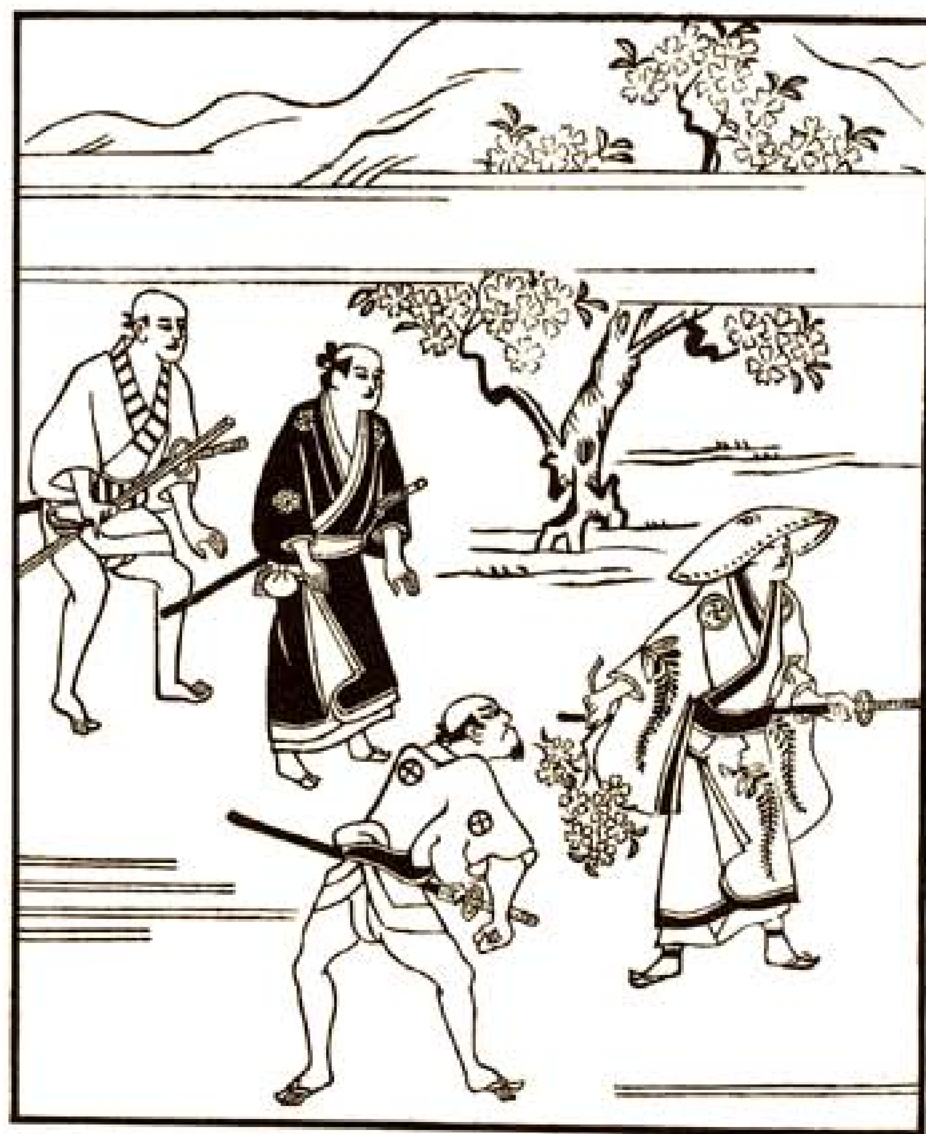


の中から飛び出して来た体。左上の黒羽二重姿の男が、いろはの十郎右衛門、供に奴一人を連れている。ここでの十郎右衛門の見事なさばきぶりがきっかけで、初太夫と衆道の縁が結ばれることになる。

妙心寺の開山関山禅師の三百年忌があって、諸国の寺々の裕福な坊さんたちが京都にやって来た。ご法事がすんでから、坊さんたちが四条河原の芝居見物に出かけると、何しろ田舎では見なれない美少年ばかりなので恋い焦れ、万事を投げ出して役者買いを始めた。そのお陰で、前髪があって目鼻さえついておれば、どんな若衆でも暇な日がなくなった。それからというもの、昼と夜に分けて売るようになり、花代も舞台をふむ若衆は、銀一枚ということになった。この坊主どもは、京都での遊びも日が限られていたので、遊興費に糸目をつけず、お陰で今の世の遊び人が迷惑することになった。

　その頃、村山座の花形の藤村初太夫はたいへん美貌で、当世風の舞が上手であった。一目でも見た人はみな思いをかけた。ある日初太夫は東山の桜見に行き、盛りに近い八重の塩竈桜の一枝を持って帰ったのは、「まだ見ない人のために」という優しい気持からであった。その途中、神楽岡のあたりにしゃれた男たちが大勢集まり、昼から酒盛りをしていたとみえて、もう幕をたたませ、夕日が映えてまっ赤になった顔をさらけだし、人の見るのもかまわないで、底の深い提重箱で酒を汲み交わしていた。喧嘩を肴にし

えて、幕をたたませ、夕日にうつりて紅したる顔を、あらはに人の見るをもかまはず、九提重のふかきにて酒呑みかはし、喧嘩を肴にしてありしが、初太夫かざせし桜を見かけ、情しらずの男達ちかく寄りて、「その花を給はれ。今日の一〇つまり肴に酢味噌でたべる」といふ。「それ一一花に嵐をだに、人間の手して折りかへるをさへ心なきに、ましてやむごき言葉の末、さら〳〵花は惜しからねど、所望の仕掛け気にいらねば、進じ申すまじき」といひ捨てて通りしに、「この分にては男たたず」と、「是非にもぎとらん」といふ。やれば初太夫も若



東山の花見帰り、桜の一枝を持つ藤村初太夫が、男伊達にからまれている。見開き中央の編笠・振袖姿が初太夫。左で初太夫を守ろうとにらんでいるのが金剛の火神鳴の久蔵。右面の男伊達二人は、花見幕

ていたのか、初太夫が持っていた桜を見かけて、荒っぽい男伊達が近寄り、「その花をいただきたい。今日のしまい肴に、それを酢味噌で食べたい」と言う。「花に嵐というが、人間の手で折って帰るのさえ心ない事なのに、まして酢味噌で食べるなどとはむごい言い草だ。花はちっとも惜しくないが、所望の仕方が気にくわないから差し上げるわけにはまいりません」と言い捨てて、初太夫が通り過ぎようとすると、「このままでは男が立たない。是非とももぎ取ってみせよう」と言う。花をやれば、初太夫も若衆の面目がすたる。一生の一大事はここである。「京都にもこんな横車を押すやつがいるのか」と、牛車を止め、駕籠をおろし、それに往来の人が群集して、この危ない一件の決着を見守っていた。草履取りの火神鳴の久蔵も命を捨てる覚悟であったが、初太夫のことを思うと、残念ながら胸をおさえ、知り合いの人がいたら太夫を預けておいて、大勢を相手に喧嘩してやろうと思っていると、そこへ、柔和そうな好男子がやって来た。共裾の紫縮緬の下着を着込み、上には表も裏も同じ黒羽二重の着物を着て、彩色した小さな人形の紋をつけている。芯のない枯茶色の渋い畳帯をしめて、赤い珊瑚珠二つを

九　提重箱の略。携帯用の重箱。
一〇　酒肴が尽きた窮余の肴。「つまり肴と見ゆる鯛の尾」(若葉合〈元禄九年〉)。
一一　花に嵐をいとうだにあるに。

衆すたり、一代の身の大事ここなり。
「京にもかかる横に車」と、牛[一]引きとどめ駕籠をたて、往来の人更にまた山をなして、この済み口を見るはあやふかりし。金剛[二]の火神鳴の久蔵も、一命はすてけれども、太夫を思へば無念ながら胸をおさへ、しるべの人あらば預け置きて、大勢相手思ふ折節、物やはらかにうつくしげなる男の、下には紫ちりめんの引[三]つかへし、上に黒羽二重の両面[四]、けし[五]人形の加賀紋[六]、宗伝[七]から茶の畳帯[八]、ふたつ[九]珊瑚珠の色よく、ぬき[一〇]ざめの大脇指、素足に藁草履はきて、跡より髭なし奴に替へ雪踏、樫の木の角杖もたせて静かに来りしが、この様子をききて、「ここはそれがしがあつかふべし。お若衆へもらひかけられし花、跡は何にならうともつかはされたがよい」と、さま〴〵申せば、初太夫すこしせき心なれども、この詞をそむかず、あたら桜をわたしける。
あばれ男、「酢味噌の桜」と持ちて行くを、風流男袖を引きとめ、「その桜、すぐに此方へもらかし[一一]給へ」といふ。「只今の事、いまだぬくもりも覚めぬに、無理なる申し事」と、

根付にした印籠を下げ、粒を磨き落とした鮫鞘の大脇差をさし、素足に藁草履をはいている。あとに従った髭のない下男に、替雪踏と樫の木の角杖を持たせて、静かにやって来たが、この場の様子を聞いて、「ここは私があつかいましょう。お若衆へ所望されなすった花は、あとはどうされようとも、おやりなさるがよい」と、いろいろと説得した。初太夫は少しいらだったが、男の言葉に背かず、あたら桜をやってしまった。
　あばれ男は、「酢味噌の桜が手にはいった」と、持って行こうとするのを、仲裁にはいった優男が、その袖を引きとめて、「その桜を、すぐにこっちへ貰いたい」と言う。「たった今、くれると言った舌の根も乾かぬうちに、無理を言うな」と、あばれ男が少し気色ばむのを、優男は少しも騒がず、「今の都ではこんな無理が流行る。おのれ、その桜を首にかえる気か」と言うと、相手は恐れて桜を返した。初めの勢いはどこへやら、ひどく見苦しかった。
　優男は桜を初太夫に返し、あばれ男をつかまえて、「言いたい事があるが、酔っているようだから、別な日の素面の時にわしを訪ねて来て、この恨みを晴らすがよい」と言って、懐から石筆を取り出

一 上文の車を受けている。伏見・京都間の運送にあたる牛車の牛を。
二 役者の草履取り。大形の丈夫な草履を金剛草履といったゆえの名。
三 着物の裾まわしに表と同じ布を用いること。共裾。
四 表裏とも同じ布で仕立てた着物。
五 芥子粒のように小さい衣装人形。
六 「加賀紋　衣服の紋にしほらしき花あるひは器財などを小さく書て、生臙脂などにて彩色したるもの也。此上絵は加賀よりおこれり。故に名づく」(俚言集覧)。
七 近世初期、京都の人宗伝が始めた茶染。枯葉色。
八 芯を入れないで、一枚の布を二つに折ってしめる帯。
九 印籠の根付の二つ珊瑚珠。
一〇 →四〇七ページ注一五。
一一 貰えるようにする。貰わしていただきたい。「我おとしけるにもらかし給へといふ」(西鶴織留三の四)。

少し気色を、なる程さわがず、「今の都にかやうの無理がはやる。おのれその桜を首にかゆるか」といへば、おそれてわたしぬ。はじめと違ひ見苦しかりき。

桜は初太夫へかへして、かの男とらへ、「申し分あれども、酔ひたる風情も見えつれば、かさねての日酒機嫌になき時、我を尋ねてこの意趣を晴らせよ」と、懐より石筆取り出し、所書たしかに、いろはの十郎右衛門と、名までしるしてわたしぬ。「さりとては落ちつきたる仕方なり」と、見とめし諸人、これをほめざるはなし。

かりそめの事ながら、初太夫身にしてはうれしさ忘れず、その夜より客の勤めもすてて、十郎右衛門宿は東の洞院までしのびて、「もしも最前の男達ども切り込まば、我さきに立つて身を捨てて、人に難儀は掛けじ」と思ひ定めし心ざし、自然と十郎右衛門に通じて、なほ見すてざり。かの馬鹿者も、その後はとがむる事なし。

今は心もゆりて、これより衆道の縁となりて、互に思ひをつくし、二年あまりの契りのうちに人のなるまじきたはむれ、

し、住所をはっきりと書き、いろはの十郎右衛門と名まで認めて渡した。「それにしても落ち着いたさばきだ」と、それを見ていた人々でほめない者はなかった。

行きずりの出来事であったが、初太夫としてはこのうれしさが忘れられず、その夜から客勤めを捨て、東洞院の十郎右衛門の家をこっそりと訪れた。「もしも昼間の男伊達が斬り込んで来たら、自分が先頭に立って身を捨て、十郎右衛門に難儀はかけまい」と覚悟したその気持が自然と通じて、十郎右衛門はいよいよ初太夫を見捨てられなくなった。例のばか者は、その後文句を言ってこなかった。

今は張り詰めていた心もゆるみ、改めて衆道の契りを結び、互いに深く愛し合い、二年余り親しんでいるうちには、人にはできそうもない逢い方をし、いろいろと誓い合った。十郎右衛門は、ほかの若衆には見向きもせず、ひたすら初太夫に打ち込んだので、一門に見限られて身の置き所もなくなった。ことに継母だったので居づらくなり、恨みをひととおり書き残して、行方をくらましてしまった。初太夫は悲しんで、いろいろと神に祈って行方を尋ねたけれども、皆目わからなかった。思い悩んでいては舞台に立つ気にもなれず、引き籠っていたが、後には

一二 少し気色ばむのを。

一三 紫黒色の蠟石を筆の穂の形に削り、管にはめて用いた(和漢三才図会)。

一四 東洞院通。御所の南に連なる南北の通り。西隣が車屋町通、烏丸通である。

一五 「見すてざりき」の省略。

一六 うちとけて。ゆるんで。

一 打ち込んだので。
二 世間体を考えて店を出し。
三 四条河原の役者勤め。
四 「惜しかるべき」とあるべきところ。慣用語法。
五 釈尊十九歳の出家をふまえた。四三九ページ注四。↓

❖若衆歌舞伎末期の大坂の平井しづまが、堺の金持の親仁にはかられて、しづまを慕う十六歳のその娘と心ならずも契ったが、その翌朝娘は死に、まもなくしづまも乱気して死んだ。女の執念にとり殺されるというパタ

かず〳〵のかため、外なる色ぐるひをやめて、初太夫に気をはこび、一門のそねみふかく、身の置き所も定めかね、継母なれば一通りの恨みを書き残して、行方もしれずなりにき。初太夫これをなげき、色々神をいのり尋ねけれども、御行衛のしれざれば、思ひわづらひ、中々舞台身にそまずして引き籠りてありしが、後は美形もかはりぬ。この理りを親方に申しわけて、首尾よく隙をもらひて、難波の裏町に住み所をもとめければ、次第に気分もよろしくなりて、世間むきの見世つきとて紙を商売させて、その年はおくりぬ。

「その身出家にもならず、河原の勤めをもやめけるは、いかなる思ひ入れぞ」と、むかしよしみのある役者たづねけるに、「我が黒髪の何ゆゑに惜しかるべし。世に思ひ人ましまして、もしもこの姿を見たくもおぼしめさば、見せましてからのうへに、髪をも剃りすてんと思ふ甲斐なく、今までは待ちぬれども、人に問はれて口惜しや」と、その座にして髻をはらひ、惜しや十九出家の望み、それより高野山にかくれて、都の人の訪ふにもあはず、朝は谷より水をむすびあげ、夕は落葉を

その美しい姿もやつれてしまった。初太夫は事のなりゆきを親方によく話して、首尾よく暇をもらい、大坂の裏町で暮すことになった。しだいに気分もよくなってきたので、世間体を考えて店をもち、紙商売をしてその年は過ごした。

「出家するわけでもないのに、役者勤めをやめてしまったのは、どういうつもりなのだ」と、以前親しかった役者が、初太夫に尋ねると、「黒髪が惜しいわけではない。好きなお方がこの世にましまして、もしこの姿を見たいとお思いになったら、一目お見せしたうえで髪を剃り捨てようと思い、今までこうして待っていた甲斐もなく、人に聞かれて口惜しい」と言って、その場で髪を切り捨て、十九歳の若さで出家することになった。初太夫はそれから高野山に隠れ、都の知人が訪ねて来ても会わなかった。朝は谷から水を汲み上げ、夕べは落葉を掻き集めて、仏道修行にいそしんでいたが、一年あまりたってから、恋しい人は丹後の天の橋立という所で行き倒れとなり、松よりほかに知るものもない島崎ではかなくなったという事を、だいぶ過ぎてから聞いた。すぐにそこへ訪ねて行き、一七日の供養をして、その後は全く浮世を捨て、再び人に会うことはなかった。

集めて行ひすましけるが、一年あまりすぎて、こがれし人は、丹後の国天の橋立といふ所に行き暮れて、哀れは松より外にしらぬ島崎にてはかなくなりし身の事、はるかにすぎて聞きしより、その所にたづねくだりて、一七日の弔ひなして、その後その身はうき世をすて、二たび人にもあはざりき。

命乞ひは三津寺[六]の八幡

こはいかになりぬる世の姿、難波のむかし、太夫蔵人[七]・お国[八]が女歌舞伎も絶えて、若衆をあまたかかえ、これぞ世界の花踊り、塩屋[九]九郎右衛門座に見し岩井[一〇]歌之介・平井[一一]しづまなど申せしは、末代にもあるまじき美児なり。この外四十五人舞子[一二]ありしが、いづれかいや[一三]形気なるはひとりもなかりき。

その頃までは、昼[一四]の芸して夜の勤めといふ事もなく、まねけばたよりて酒事にて暮らし、執心かくれば世間[一五]むきの若道のごとく、その人に念比すれども、誰とがむる事もなし。太[一六]夫もとにも欲をしらず、物にもならぬ客をうかうかもてなし、

命乞いは三津寺の八幡

これはまあ、なんと移り変る世の姿であろう。昔々、京都から大坂に下って来た女歌舞伎の太夫蔵人や、出雲お国の女歌舞伎も絶えてしまった。その後、道頓堀の塩屋九郎右衛門座で、若衆を大勢抱え、これこそこの世にまたとない花踊りを催した時に見た、岩井歌之介や平井しづまなどという若衆は、後世にもまたとあるまい美少年であった。そのほか四十五人の歌舞伎若衆がいたが、いやらしい子は一人もいなかった。

その頃までは、今のように昼は舞台を勤め、夜は客を取るというようなことはなかった。昼でも招くとやって来て、酒盛りで日を暮し、好きになると世間並みの衆道のように、欲得をはなれてその客と親しくなるのだが、誰もとがめる者はなかった。太夫元のほうでも欲がなく、物にならない客をうかうかともてなして、その年の暮れには、丹後の塩鰤一本と塗り樽入りの酒三升、盆前には大和の三輪素麺を十把貰って、それにさえ礼状を出すのであった。また若衆に近づきになる時は、暮れ方の芝居帰りを道頓堀の河岸の茶屋の嚊に呼び込ませ、ざっと酒にして、声のいい若衆には小唄など所望して、

ーンである。

六 大阪市中央区心斎橋筋にある真言宗の三津寺。本尊は十一面観音であるが、神亀年間に行基が八幡大菩薩の本地堂を営んだのが起源(三津寺八幡宮記)というので、三津寺八幡とも称した。

七 →役者一覧。

八 出雲のお国の女歌舞伎であるが、太夫蔵人の元和当時は二代目お国であった。お国 →役者一覧。

九 大坂における歌舞伎の名代。初代は塩屋九郎次。寛永年中、京都から大坂に下り、道頓堀浜側で歌舞伎芝居の興行権を得た。承応元年(一六五二)、名代検定を得て南側に転じ、大芝居の櫓主として幕末に至る。九郎右衛門は三代目。

一〇 →役者一覧。

一一 →役者一覧。

一二 承応以前の若衆歌舞伎時代の歌舞伎は、文字どおり舞・所作を主としたので、舞子という。

一三 いやらしい性質。

一四 当時の歌舞伎は昼間興行で、暮七つ半(午後五時頃)にはねて後、色茶屋で揚代を取って夜の勤めをするようになったのは、承応以後の野郎歌舞伎時代にはいってからである。

一五 一般町人社会の非職業的衆道。

一六 役者および衣装・小道具・かつらなどの裏方を抱えて組織した一座を所有し、各地の金主や座主に売りこんで興行する者。多く座元が兼ねた。

その年の暮に、丹後鰤[一]一本に塗樽に入りし酒三升、盆前になれば三輪素麵[二]十把もらひて、これにも礼状を遣はしける。また、子供にはじめて近付きになるも、芝居かへりを浜の水茶[三]屋のかかに呼び込ませ、かりそめの盃して、声のある子には小歌所望して思ふままの遊興、その後あそび仲間より集めて、[四]銀一両おくれば、[五]釣髭のある男が太夫殿より礼にきて、「只今は千万かたじけなき仕合せ」と、[六]三指突きて長口上申したりけり、と大笑ひして暮らせしに、今時の[七]金剛に[八]二角づつとらしても、さのみうれしがる顔つきをもせず、すこし[九]露うつ間がおそければ、ながき秋の夜を[一〇]四つ前から呼び立て、「明日の舞台[一一]かくる」などいふ。恋の最中に気の毒きく事ぞかし。

とかくは今の世間に、[一二]野等犬の子と金銀のたくさんなる故に、万事奢りて物をつかひ侍る。それまでは、舞台衣装も唐[一三]木綿に[一四]さらさの置形、[一五]地衣装は[一六]加賀絹に[一七]中紅の裏をつけ、[一八]浅草縞にむらさき付くれば、見る人おどろき、「この上又もあるまじき」と沙汰する程の事なりしに、近年の[一九]唐織・[二〇]金入り・[二一]毛類を着る事、いかに役者なればとて、身の上しらぬぞ

思うままに遊興する。その後、遊び仲間から集めた銀一両をおくると、髭の先をはね上げた草履取りがお礼にやって来て、「ただいまは千万かたじけない仕合せにございます」と、三つ指をついて長々と挨拶したと、あとで大笑いしたものであった。ところが今時の草履取りに金二歩ずつやっても、たいしてうれしそうな顔もせず、少し祝儀をやるのが手間どると、秋の夜長を四つ前から迎えに来て、「明日の舞台が勤まりません」などと言う。恋の最中に気の毒なはなしだ。

いずれにせよ今の世の中は、野良犬の子と金が多すぎるから、何かにつけて贅沢になり、むだづかいをするのである。その頃までは、舞台衣装も舶来の木綿に紙型で更紗の模様を置いたものを着ていたし、ふだん着は加賀絹に安物の紅裏をつけたり、浅草縞に紫絹の裏をつけたりすると、人々はそれを見てびっくりし、「これ以上の贅沢はあるまい」と噂するほどであった。ところが近頃は舶来の金襴や毛織物などを着るようになった。いかに役者だからといって、身のほど知らずというものである。ずいぶん給金を取りながら、つまるところは借金で首が回らなくなるというのが、道頓堀の習わしである。給金の安かった昔は、役者で暮

一 丹後名物の塩鰤は、上方の歳末における贈答品であった。 二 大和国磯城郡三輪町(現、奈良県桜井市三輪)産の名物。 三 大坂では河岸を浜という(守貞漫稿)。ここは道頓堀河岸の茶屋で、水茶屋は色茶屋に対して普通の茶屋をいう。 四 銀四匁三分。→四五五ページ注九。 五 中間・奴などが威を添えるため、口髭の先端をはね上げた。墨で描く場合もあった。 六 親指・人さし指・中指をついて、ていねいに礼をすること。 七 役者の草履取り。→四五八ページ注三。 八 金二歩。一歩金は長方形なので一角ともいう。 九 祝儀をはずむ間。遊里で銀貨を露といった。 一〇 午後十時前。 一一 舞台が勤まらない。 一二 犬公方といわれた五代将軍綱吉の生類憐みの令の結果、のら犬が巷にあふれた事実をさしていう。貞享四年(一六八七)にも、再度の法度が出ている。 一三 舶来の綿布。 一四 紙型を使って模様をつけた更紗。 一五 舞台衣装に対してふだん着をいう。 一六 →四二六ページ注五。 一七 紅花染の本紅に対して、蘇芳で染めた安価な紅をいう(雍州府志)。 一八 武蔵国八王子産のしけ糸(まゆの外側からとった屑糸)と木綿糸で織ったそまつな紬縞(万金産業袋)。その浅草縞に紫絹の裏をつけると。 一九 舶来の織物。 二〇 金襴の別称。 二一 オランダ舶来のラシャなど。 二二 貞享三年十一月刊の『難波立聞昔

話』によれば、若女方の上村辰弥は給金百三十両。実方の山下半左衛門は二百両などである。
二三 道頓堀。
二四 堺の中央を南北に走る通り筋。
二五 長崎で、中国とオランダからの輸入品を入札し、国内で売りさばく商い。特に堺は堺船といい、舶来品を専門に運ぶ船が就航。
二六 古風な物堅い親仁。
二七 台所の土間を庭といった。
二八「すこし小作りなる女は、機まで織つて十五匁から銭一貫、近江嶋の帷子ひとつで済みける」(西鶴織留五の二)。
二九 世間づきあい。社交性。
三〇 延宝五年(一六七七)に江戸の中村・市村の両座の新築に際し、土間の一部の屋根に板葺を許可した事実があるから、延宝以前の客席の屋根は、まだ多くよしずなどの仮屋根であったと推定される。
三一 若衆歌舞伎時代の舞台は、三番叟で始まり、つぎが脇狂言、つぎが一幕物の二番目、最後に二幕ないし三幕物の三番目。切狂言を上演するようになったのは寛文以降である。
三二 狂女物の謡曲「桜川」を所作事に仕立てた狂言であろう。桜子という幼い娘が、貧しい母のために人買いに身を売って、関東に下ったので、母は狂乱して跡を追い、常陸の桜川でめぐり逢うという筋。『松平大和守日記』寛文二年(一六六二)八月十八日の記事に、いにしえ座の演目中に「桜川」がある。

かし。大分の金銀取りながら、つまる所は借銭の淵とは、この堀のならひなり。給分のやすきむかしは、芸者も世を暮らしかぬると云ふ事なし。その時は面白からず、物毎をかしきは今なり。されども欲なしに子供の本情は、平井しづまなど末の世がたりにもすべし。

　ある時、境の大道筋に、長崎商ひして家栄えたる人のありしが、このあるじ、時代男にて、七十余歳まで風をもひかず、薬ものまず、屋賃・銀の利の算用ばかりして、生れてこのかた色ある町をも見ず、庭働きの下女も姿にかまはず、布さへ織れば一匁でもやすきを好み、恋などする事思ひもよらず、門より外に出ず、世間むきのかけたる男、はじめて芝居を見られしに、人も不思議を立てにける。しかもその日雨降りて、見物は立ちさわげども、この親仁ひとりすこしもおどろかず。「三番目の桜川の狂言に、しづまが出るとや。これを見ずには帰らじ」と、声のつづく程は、「東西〳〵」いうて、袖は濡れながら、桜川果つるまで見とめて、楽屋口にまはりて帰りを待つに、軒の玉だれも袂によけず、さしかけ傘下行く御

しに困るという者はなかった。だがその時分は、これというおもしろいこともなかった。何かにつけておもしろいのは、やはり当節である。けれども無欲な歌舞伎若衆の駆引きのない情けもないわけではない。平井しづまなどは、後世の話の種にしてもよい若衆である。

　ある時、堺の目抜き通りの大道筋に、長崎商いをして、富み栄えていた人が住んでいた。この親仁は古風な男で、七十余歳まで風邪もひかず、薬を飲んだこともなく、家賃や貸金の利息の計算ばかりして、この世に生れて以来、色町に出入りしたことがなかった。台所の土間で働く下女も、器量などはどうでもよく、布を織ることさえできれば、給金が一匁でも安い女を選ぶというふうであった。恋をすることなど思いもよらず、外出したこともなく、全く社交性の欠けた男であった。この親仁が、ある時初めて芝居見物に出かけたので、人々は不思議に思った。しかもその日は雨が降って、天井がよしず張りの客席では見物人が大騒ぎしたが、この親仁一人は少しもあわてなかった。「三番目の桜川の狂言に、しづまが出るということだが、それを見ないでは帰られない」と、声の続くかぎり「東西、東西」と、わめいていた。雨の雫で

一 道頓堀の芝居裏にあたる、中央区千日前の千日寺(法善寺)。墓所。人殺し―墓。
二 「山吹の花色衣ぬしや誰問へど答へずくちなしにして」(古今・雑歌)。
三 いつの芝居でも入場できる、芝居関係者の所持する入場券。
四 大坂道頓堀の戎橋と新中橋との間に架した橋。法善寺前。
五 塩屋九郎右衛門座。→四六一ジペー注九。

風情、これは今の世の人殺し、墓[一]の寺の前まで跡より付き添ひて、いはで物思ふ有様を、見しよりしづま心に掛け、「親仁殿はどこの在所衆」と、問[二]へどこたへず、「恋といふ事、いつの時に誰かし初めて、かかる物うき事ぞ」と独言いふ。しづま、鼻紙の間より定札[三]六七枚もつづきしを取り出し、「又ちかき程に見物し給へ」といへば、この親仁うれしさあまりて、かねて思ひし御執心の一言、いひも出さずただに過ぎぬ。

暮れやすき冬の日の虹うつろひて、太左衛門橋[四]を渡れば、川風心もなく吹きて、しばしはここに立ちすくみしが、君も太夫本入らせ給へば、せんかたなくてその辺りの茶屋にたよりて、それとは知らせず、雨の晴れ間待つとばかりに、塩屋[五]の内を見入れて物あんじの顔ばせ、亭主見とがめて尋ねけるに、語らねばならぬ首尾になりて、しづまに思ひ入りて命せまる身の程を申せば、あるじ聞くに哀れふかく、この事しづまに耳語きしに、はや情かけて、「我を思ふその人、いかに老いたる身なればとて、それ見捨てがたし」と、俄に衣装好

袖が濡れるのもかまわず、桜川の狂言の終るまで見届けたうえで、楽屋口に回ってしづまの帰りを待っていた。袂に落ちる軒の雨だれもよけず、悠然と草履取りが差しかけた傘の下を行くしづまの風情は、今の世の人殺しともいうべきものであった。親仁は芝居裏の千日寺の前まで跡をつけ、ものも言わずに思い悩んでいる様子を見たしづまは、「親仁殿はどこの村の方ですか」と尋ねたが答えないで、「恋というものは、いつの世に誰がし始めて、こんなにつらいものなのだろうか」と独り言を言っている。しづまは鼻紙の間から、六、七枚も続いた入場券を取り出し、「また近いうちに見物においでなさい」と言うと、この親仁はうれしさのあまり、かねての思いをひとことも言い出さないでしまった。

暮れやすい冬の空に虹のかかるころ、親仁が道頓堀の太左衛門橋を渡っていると、寒い川風が容赦なく吹きつけてきたので、しばらく立ちすくんでいた。その間にしづまも太夫元の塩屋の家にはいってしまったので、親仁は仕方なくその辺の茶屋に寄り、それとは言わず、雨の晴れ間を待っているようなふりをして、塩屋の家をのぞきこんで、心配そうな顔をしていた。茶屋の亭主がそれを見とがめ

みして、肌に明暮といへる名香を焼きしめ、かの茶屋に行きてみるに、鬢は黒き筋なき男の、滝縞[六]の着物に、梅がへし[七]の袷羽織に胸高に紐付けて、割胡桃[八]のはなち目貫の小脇指に、[九]むかし印籠になめし革の巾着に駒引[一〇]の根付をさげ、このいやなる風俗、そもや若衆に心をよする事おもはく外なり。

　二間ある座敷の奥に通りて、この親仁ちかう呼びて、「亭主のあいさつまでもなし。こなた様には私に御執心のよし、最前芝居を帰る折からより見請け、心懸りありしに、縁はをかしや」と盃事して、酔を恋の種として、身に添ひ臥しを仕かけ、うれしがる事どもに気をつくしけるに、この親仁、かたじけないとも言はずして、口のうちにて念仏をとなへて居る。しづまが上手[一一]にとはれて、この男語りけるは、「さても〳〵やさしき御心入れ忘れがたし。そなた様に思ひ入りしは、私のひとりある悴子なり。はやこの程は御身の事ばかり申し暮らし、命もせまるをふびんに、子おもふ親の身にてかく申すを、とてもの御情に、しばしが程まみえて給はれ」と申せば、しづまなほ哀れまさりて、「今となっていなとは申

てわけを尋ねたので、話さねばならないはめになって、しづまに惚れこんで命も危ないほどだと身の上を語った。亭主はすっかり同情して、この事をしづまに耳打ちすると、すぐ情けをかけ、「私を思ってくださるそのお方が、どんなお年寄りであろうと、見捨てるわけにはいかない」と言って、にわかに気に入った衣装に着替え、肌に明け暮れという名香をたきしめ、その茶屋に出かけて行って見ると、鬢はまっ白で、滝縞の着物に紅梅色の袷羽織を着て、胸高に紐をつけ、胡桃の殻を二つに割った飾り目貫をつけた小脇差をさし、腰には古風な印籠と、駒引銭の根付をつけたなめし革の巾着を下げている。そのいやらしい身なりといったら、とても若衆に心を寄せるどころの騒ぎではない。

　しづまは二間続きの座敷の奥の間に通って、この親仁を近く呼び寄せ、「この家の亭主が取り次ぐまでもなく、あなた様が私に思いをかけておられる事は、最前芝居の帰りにお見受けして、気にかかっておりました。まことに縁は異なものです」と言って、杯を取り交わし、酔いにまぎれて恋を仕掛け、添い臥しするように持ちかけて、いろいろとうれしがるようにしてみたが、この親仁はありがた

六　縦縞の一種。経糸の細い縞から漸次に太く、さらにまた細く縞模様をあらわしたもの。
七　紅梅色の染色。
八　胡桃の殻を二つに割って作った飾り目貫。目貫は目釘の頭を覆い飾る具。「藤巻柄に胡桃の目貫の相口一腰」(永代蔵五の三)。
九　蒔絵などしない古風で質実な印籠。
一〇　面に種々の駒を引く図のある絵銭。銭座の冶金の神に奉納する絵馬の代りに鋳造したもの。いずれも廃物利用の野暮なアクセサリー。
一一　しづまの上手な話し方で問いただされて。

さじ。我が身はあづけ置く」と申せば、親仁よろこび、「しからば今宵更けてから、これへともなひ申すべし。かまへて〳〵沙汰なしに頼むなり。長町[一]のかり座敷までつれきてある」よしを申し捨てて帰る。

しづまは待ち詫びしく、袖を枕に夢見かかる時、病人乗物しづかにかき入れける。この足音にしづま目覚めて見し。十四五なる美女の肌小袖白く、中[二]に薄花の桜色なるに、浅黄鹿の子の両面[三]に切付け[四]の色紙、歌模様[五]の紋所、帯は二重菱[六]の柿地を、つひ引きさきまはし結びもせず、髪はさばきながら、中程より下を引きさき紙にて結び、このうつくしさ、皆いふまでもなし。人を恥ぢらはず、ひた〳〵と寄りて、おもはず、「うれしや」と声をあげて、すこし笑うて顔見あはせしは、ぞつとして、うき世の人ともおもはれず。しばらく物をもいはずありしが、しづまおどろき、我は衆道[七]のやくそくせしに、これはおもひよらず、人のいふべき事もかなしく、物思ふこそ誠なれ。今時の若衆ならば、後家にてもただは通さじ。しづまとやかく分別して、「身を立つる理り[八]つれなく申せば、

いとも言わず、口の中でもぐもぐと念仏を唱えている。やがてしづまの上手な話し方で問いただされて、親仁はやっと口を割った。「なんという優しいお心遣いでしょう。忘れる事はできません。あなた様をお慕いしているのは、実は私のひとり息子でございます。もう近頃はあなたの事ばかり言い暮して、いつ死ぬかわからないありさまです。親の身として子がかわいさに、こんなお願いをいたします。とてものお情けに、ほんのしばらくでも逢ってやってください」と言うと、しづまはいよいよ憐れになって、「今となって否応はありません。私の身はお預けします」と言うと、親仁は喜んで、「それでは今夜更けてから、ここへ連れて参ります。どうか他言はなさらないでください。長町の貸座敷に連れて来ております」と言いおいて帰って行った。

その夜しづまが待ちわびて、手枕をしてうとうとしているところへ、病人の乗物を静かに庭先へかきこんだ。その足音でしづまが目を覚まして見ると、十四、五歳の美少女であった。白い肌小袖を着て、中着は薄い桜色、表裏とも同じ生地の浅黄色の鹿の子の上着に、色紙の切付模様を散らし、歌模様の紋所をつけている。二重菱の模様の柿色の帯を無造作に

一 現、大阪市中央区日本橋筋をいう。当時の長町は一丁目から九丁目まであり、下屋敷や貸座敷などがあった。
二 中着。
三 表裏とも同じ生地を用いた着物。
四 切付模様の略で、和歌をしたためた色紙模様を着物にかがりつけた。今のアップリケ。「玉虫色の繻子に孔雀の切付」(五人女三の一)。
五 和歌の上の句や下の句を丸く紋様化した伊達紋。
六 大小の菱形を二重にした紋様。
七 衆道で身を立てている者が、女に関係したという世間の非難。
八 若衆として女と親しくしてはならないのだという道理。



堺大道筋の大町人に頼まれ、その息子と会うつもりで大坂長町の貸座敷に呼ばれた平井しづま。乳母を連れて駕籠でやって来たのが十四、五歳の美少女。口説かれて契りを結ぶが、娘は翌日世を去った。

あのうへにまたもや病気も」と思ひ、心にそまぬ乱れ姿となり、「我事、今よりまかせたる身なれば、御心よくならせ給ひてから、いつにても又の世かけて、たがひに忘れじ」と、かりそめながら浅からぬ詞かはして別れしに、露よりもろき命、その夜明けて、惜しきは十六、眠れるごとく世を去りける。生死はのがれぬ事なれど、ひとしほ哀れさもまさりぬ。

七日たちて後、この娘の母親、「せめてはこがれ果てたるその若衆を見て、うきをはらすべし」と、大坂にたづねて、形見の品々しづまに渡せば、更にまた涙にしづみ、それより

巻きつけて結びもせず、洗い髪の中ほどから下を、引裂き紙で結んでいる。その美しさはいちいち言うまでもない。娘は恥じる様子もなく、しづまにぴったりと寄り添って、「うれしい」と思わず声をあげ、少し笑って顔を見合わせた。あまりの美しさにしづまはぞっとして、この世の人とも思われず、しばらくものも言わないでいた。しかしふと気づいて驚き、自分は衆道の約束をしたのに、これは思いもよらない。それにきっと非難されるに違いないと悲しく、あれこれと思い悩んだのは、立派な心がけである。今時の歌舞伎若衆ときたら、相手が後家でもほうっておかないだろう。しづまはいろいろと考えて、「若衆として潔くありたいという道理をつれなく言ったら、あのうえにまた病気が重くなるに相違ない」と思い、心にもなく娘と寝て、「私の身は今からあなたにおまかせしますから、お元気になられてから、いつでもお逢いしましょう。後の世までも互いに忘れますまい」と、一夜の情けではあったが心のこもった言葉を残して別れた。露よりももろいのは人の命である。あくる朝、十六歳という惜しい若さで、娘は眠るように死んでしまった。生死はのがれられない事ではあるが、ひとしお哀れであった。

一「人の命を取りけるよと。二「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり」(新古今　西行法師)。三「ながむれば覚えぬこともなかりけり月や昔のかたみなるらん」(金葉)。

❖野郎歌舞伎の初期の京都の名女方玉川千之丞を深く愛した尾張の三木という大尽が、今では火打石売りとなって五条河原で起き臥ししている事を知って、ある夜訪れ慰めたが、三木はまた行方をくらましたので千之丞は残っていた火打石を集めて今熊野に塚を築き、日蓮宗の坊主に守らせたという野郎情話。

四 主人公玉川千之丞の恋の思いの火をたきつけたのは、火打石売りにおちぶれた男であったとの意。「焼付」の読みは、目録(四五四ページ)の「たきつけ」が正しい。五 六玉川の誤り。歌名所として知られた全国六か所の玉川。山城の井手の玉川、摂津の三島玉川、近江の野路玉川、紀州の高野玉川、武蔵の調布玉川、奥州の野田玉川。六 小唄の名人。「かん三郎座　玉河千之丞。女がた古今むるい也。…小うたすなをならずしておもしろし」(剝野老〈寛文二年〉)。七 玉川千之丞　→役者一覧。八「風吹けば沖つしら浪たつた山夜半にや君がひとりこゆらむ」(伊勢物語二十三段)。河内通いの狂言に呼応。九 白声。うわずった金切り声。一〇 舞台上に設置した住家の御簾。一一 昔

うかうかとなりて、「おもはざる事に人の取りけるよ」と、我も仏神に祈りて命乞ひしけるに、世のためし世のふしぎ、ある日三津寺に参りて下向に、しづまはつねの着物なりしに、「白衣の袖薄く面影たよりなし」と、見し人取沙汰して、「いかなる事、もしも乱気なるか」といふその暮方に、難波の夢とはなりぬ。いまだ春まつ雪の梅、あたらつぼみを散らして、月やむかしの物がたりとはなりぬ。

思ひの焼付は火打石売り

七玉川のほかに、小歌の名所に千之丞がむかし、風ふけば興津しら声にてうたひ出して、家体の御簾を明けての面影、まことの女井筒も、何としてこれには立ちならぶべし。十四の春よりも都の舞台を踏みそめ、四十二の大厄まで振袖をきて、一日も見物にあかれぬ事、末の世の若女形これにあやかるべし。河内がよひの狂言ばかり、三年が間江戸の人をなびかせ、なほほめ草、野郎虫にもこの身の事あだには書かず。

七日たってから、この娘の母親が、「せめては娘が焦れ死にした若衆を見て、憂さ晴しをしよう」と、大坂にしづまを訪ねて来て、形見の品々を渡した。しづまはいよいよ涙に沈み、それから気抜けしてしまった。「思いがけなく人の命をとってしまった」と悔やみ、神仏に祈って我とわが身の命乞いをしていると、世間にためしのない不思議な事が起こった。ある日、三津寺八幡に参詣した帰り道、しづまはふだんの着物を着ていたのに、それを見た人が、「白衣の袖も寒々として、頼りない顔つきであった」と噂して、「どうしたのであろう。ひょっとして気でもおかしくなったのか」と言ったその日の暮れ方に、しづまは難波の夢と消えてしまった。まだ春を待つ雪中の梅のような若さであったのに、あたら蕾を散らし、月を眺めて昔をしのぶ物語となってしまった。

思いの焼付は火打石売り

世に知られた七玉川のほかに、小唄の名所として玉川千之丞がある。昔その千之丞が、河内通いの狂言で、「風ふけばおきつ白波」と、甲ばった声でうたいながら、舞台の家の御簾をあげて出て来る

男業平とは幼馴染みの筒井筒の女（伊勢物語二十三段）。「筒井筒の女とも聞えしは、有常が娘の旧き名なるべし」（謡曲・井筒）。 一二 陰陽家にて男の四十二歳を大厄とする。俗に四二は「死に」に通ずるゆえという。千之丞は三十五、六歳で没している。 一三 「河内通」は一名「高安通」ともいい、『伊勢物語』の昔男が大和から河内の高安の女のもとへ通った話を脚色したもの。千之丞はこの狂言をもって、江戸堺町勘三郎座で名声を博した。 一四 寛文元年（一六六一）から同三年まで。同四年上方に帰る。 一五 役者評判記。 一六 万治三年（一六六〇）四月刊の役者評判記。現存の評判記としては最古。京都四条河原の役者四十一人の評判。巻頭に村山座の千之丞を評判し、「面体芸いづくを難ずべきやうなし」とある。 一七 「四つ竹長崎の一平次といふ者しはじめ、有得なるものにてありしが、芸は身をたすけぬ。…四つ竹ゆへに大坂にのぼり、芝居はられたり」（人倫訓蒙図彙〈元禄三年刊〉）。 一八 四枚の竹片を両手の指間に二枚ずつはさみ持ち、曲節に合わせて打ち鳴らし、うたいかつ踊る。 一九 『嬉遊笑覧』に内匠の


四つ竹
（近代艶隠者）

承応元年秋の夜の曇影をうしなひ、物の淋しき折節、ある御所方の南おもてに、宵の程は笙をふかせられけるが、更けて御なぐさみかはりぬ。その頃、長崎より一平次[一七]といへる男来りて、四竹[一八]と云ふ事を初めて、手拍子犬うつ童子まで世にこれを時花らかし、貴人の御手にふれらるる物にはあらず。鳴り音しづめて、ひとりの仰せられけるは、「河原の野郎若衆、聞きしばかりにて見ぬ事ぞかし。せめてその姿ありのまま移せよ」と、浮世絵の名人花田内匠[一九]といへる者、美筆をつくしける。

かりの事ながら、太夫子ども我をあらそひ、絵師に伽羅をとらし、又は差しふるびし小柄、着なれし羽織をとらせば、これに目の見えぬ世の中、花に風、月に村雲のさはりをのけて、思ふ人の鎰鼻をなほし、思はぬ人の出額をも見よげに書けば、いづれかあしからず。千之丞は、しれて形自慢なれば、身の上頼むべき事にもあらねば、中にもこの人、そのさまいやしく腰などをかがめて書けり。これを思ふに、唐国の王照[二〇]君が画師にまひなひせざりしに同じ。

姿の美しさといったら、本物の女井筒も、これにはとても及びそうにない。千之丞は十四歳の春から京都の舞台に立ち、男の大厄の四十二歳まで振袖を着て勤め、一日も見物に飽かれたことがなかった。末の世の若女方は、これにあやかるがよい。河内通いの狂言だけを三年も続けて上演し、江戸の観客をうならせたが、評判記のほめ草や野郎虫にも、口をきわめてほめている。

承応元年の秋の夜の事である。その夜は曇って月も照らず、もの淋しい晩であった。ある御所方の南向きの客間で、宵の口は笙を吹いておられたが、夜が更けるとお慰みの趣向が変った。その四つ竹はその頃、長崎から一平次という男が上京して来て流行らせたもので、犬を追い回す子供までも、その手拍子を見習うほどであったが、とても貴人の御手に触れられるようなものではない。その鳴り音をしずめて、公卿の一人が、「四条河原の歌舞伎若衆のことは、噂に聞いただけで見たことがない。せめてはその姿をありのままに写させよ」と仰せられたので、浮世絵の名人の花田内匠という者が、筆をふるうことになった。

たいした事ではなかったが、若衆たちは我がちに絵師に香木をやったり、また

名がみえるが、出所は『男色大鑑』である。内匠筆の絵は一点も存在しないので、架空の人物であろうと考えられている(日本の浮世絵師)。二〇 後漢の元帝は後宮(宮女)が多かったので、画工に描かせた肖像画を見て寵したところ、宮女は争って画工に賄賂したが、ひとり昭君は賄賂しなかったので醜女に描かれ、ついに匈奴の王単于に配せられたという。この話は『西京雑記』などに見えるが、わが国では謡曲「昭君」がある。

一 一座のしこなし。
二 京都市右京区梅ヶ畑高雄町の真言宗高雄山神護寺。
三 左京区南禅寺福地町の臨済宗南禅寺派の総本山南禅寺。
四 東山区本町の臨済宗東福寺派大本山東福寺。
五 代々の名僧の筆跡。
六 室町時代から江戸時代にかけて、幕府は寺社領内の山林竹木を、修造・採薪の目的のために伐採する特権を寺社に免許した。その特権を濫用したのである。
七 退散して。傘にかかる。
八 諺に、僧が寺を追放せらるることを「傘一本」という。「お住持の不義はへちまの皮袋／からかさ一本女郎町の湯屋」(大坂独吟集　意楽)。

その後品定めの時、玉川するゐにえり出されて、これには狂歌をあそばす方もなく、あたら名を埋むこそ惜しけれ。その秋のはじめより、京都に筋骨をいためる時花病、千之丞殊更になやみて、自然と腰付きふつつかに、思ひもよらぬ出尻となる事、最前の姿絵に思ひあはせてをかし。

されども、この人万よきに極まればこそ、夜の勤めをかかず、客は前後をあらそひ、十日も前より御来駕を待つ事なり。俄には盃も及びがたし。すこし酔ひての座配、紅葉のあさき脇顔、見しに恋をもとめて、高尾・南禅寺・東福寺にかぎらず、諸山のうき坊主、代々の筆のものを売りはらひ、又は山林竹木までを切り絶やし、皆この君の御為となし、後はひらきて傘に身をかくしぬ。あるいは商人の手代、その親方をだしぬき、かぎりもなく金銀をつひやし、かりなる御情に家をうしなふ人、その数をしらず。

ある時、千之丞内証の文庫をあけし事ありて見るに、かりとぢにして手日記、この上書に初枕としるせり。いかさまにもをかしく思はれて見るに、案のごとく、元日よりその年の

は使い古した小柄や着なれた羽織をやったりした。欲には目の見えない世の中のことだから、花に嵐、月に村雲といったような障りがあっても、それをよけて、好き嫌いなしにかぎ鼻をまっすぐに描いたり、出額も見られるように描いたので、みんな美しかった。千之丞は知ってのとおり器量自慢であったから、特に頼もうともしなかった。すると絵師は千之丞の姿を醜く、腰などをかがめて描いた。これはつまり器量自慢であった中国後漢の王昭君が、絵師に贈り物をしなかったために、醜女に描かれてひどい目にあったという話と同じ事である。

その後、公家で絵姿を品評なさった時、千之丞はどん尻に選ばれて、その絵姿には狂歌の賛をなさるお方もなく、あたらその名を埋めてしまったのは、惜しいことであった。その年の秋の初め頃から、京都に筋骨の痛む病気が流行り、千之丞はひどくやられて、自然と腰つきがおかしくなり、思いもよらない出っ尻になってしまったが、絵師の描いた姿絵と思い合わせて、なんとなくおかしかった。

しかし千之丞は万事にすぐれていたからこそ、夜の勤めも客が前後を争い、十日も前からご来駕を待つほどで、突然の申し込みでは、杯をいただくこともでき

暮まで参会せし人の首尾を、あらまし読むに、[九]たけき武士のつきあひ、鬼のやうなる男だてをやはらげ、百姓にあへば土気をおとさせ、神主には[一〇]厚鬢をおろさせ、[一一]長老に袴を着せ、一座きりに興をあらせ、客を自由に手に入れ、我がなぐさみになせり。奥程ゆかしきを、そのままに読み捨てぬ。これまで心のつく事、何か[一二]あしかるべし。執心掛けし末々の者には人しれぬ情ふかく、数かさなりて世にあらはるるをいとはず、[一三]瀬々のしき浪、名の立つやむ事なし。

風のはげしき夕暮、しかも雪日和にして、はや北山は松の葉しろく見わたし、物のさわがしき道橋の下、五条の川原を夜の臥し所として、渡世夢のやうに極めて、まことに石火の光、朝に[一四]鞍馬川の火打石をひろひ、洛中を売り廻りて、残れば夕に捨てて、その日暮しの思ひ出、これを都の今賢人といへり。この身も美道はやめがたく、[一五]玉川心淵集とて全部四巻に、千之丞四季の身持ちをつくれり。衆道の心掛けある人は見るべき書物なり。身に灸の数、蚤の食ひ所まで知る事のをかし。

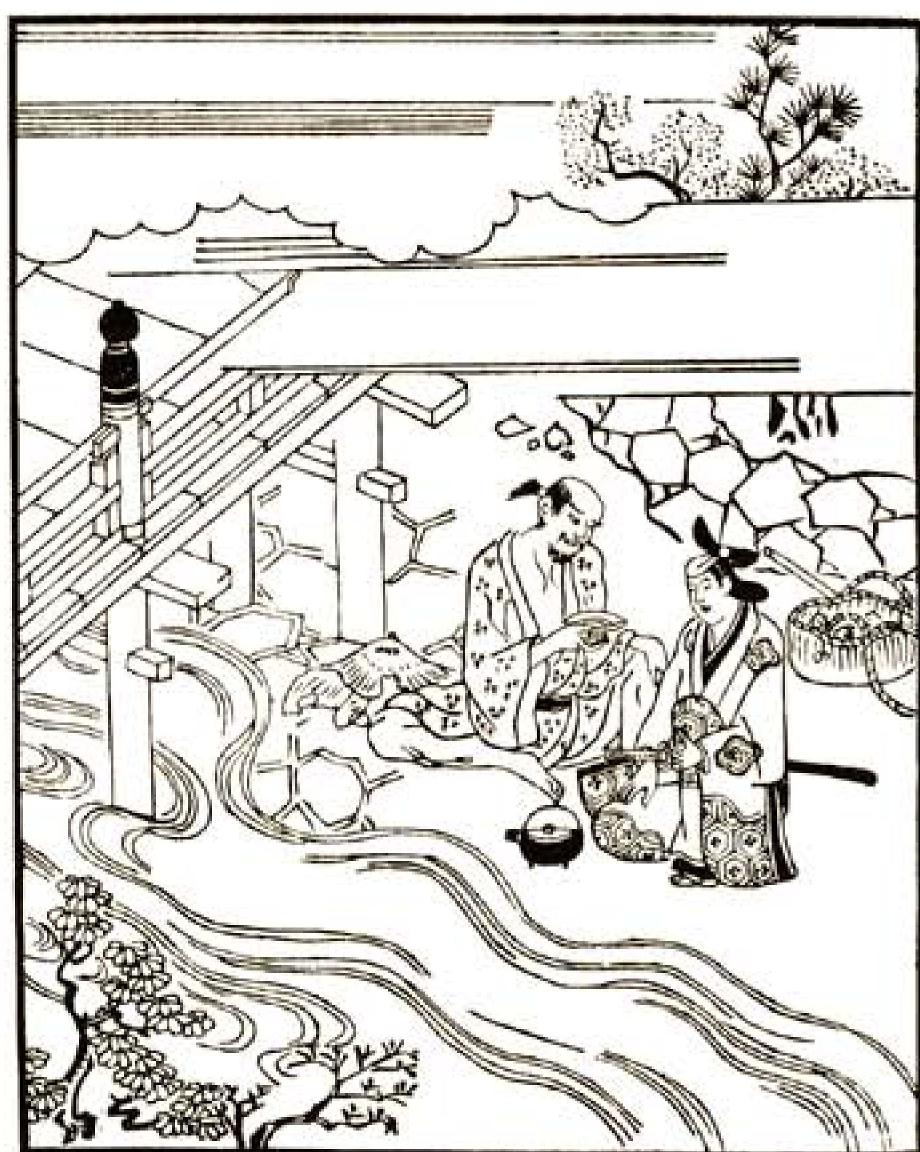
なかった。少し酔って座の取持ちをする風情は格別で、うっすらと紅葉した横顔を見て恋い焦れる者が多かった。高雄の神護寺や南禅寺・東福寺などの名刹にかぎらず、方々の寺の浮かれ坊主どもは、代々伝わる筆跡を売り払い、または寺領の山林の竹木まで切売りしてしまい、皆この君に入れ上げ、あげくの果ては傘一本あてがわれて寺を追い出されるのであった。あるいはまた商人の手代は、その親方の目を盗んでむやみに金を遣い込み、君のかりそめのお情けに身を過つ者が数知れずあった。

ある時作者は、千之丞が内緒にしている手文庫を開けて見たことがあった。中に仮綴じの日記があって、その表紙に初枕と記してあった。いかにもおもしろそうだったので開いて見ると、思ったとおり元日からその年の暮れまでに逢った客との首尾が書いてあった。あらまし読んでみると、たけだけしい侍や鬼のような男伊達を骨抜きにし、百姓に逢えば泥くささを消させ、神主には野暮な厚鬢をやめさせ、和尚には袴をはかせたりして、その場限りにおもしろおかしくもてなし、客を自由にあしらって、自分の慰みにしている。なおその先がおもしろそうであったが、そこまで読むのをやめにした。

九「目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ…猛き武士の心をも慰むるは歌なり」(古今・序)による。
一〇 神主や公卿は冠を着用するので、鬢を厚くしていた。上品だが野暮な髪形。それを粋に薄くさせ。
一一 寺の住職どもに素人の風をさせ。
一二「あしかるべき」とあるべきところ。慣用語法。
一三 和歌用語。しき浪はしきりに打ちよせる波。「宇治川の瀬々のしき波しくしくに妹が心に乗りにけるかも」(万葉)。また上文の「あらはるる」を受けている。「朝ぼらけ宇治の河霧たえだえにあらはれわたる瀬々のあじろ木」(千載)。
一四 鞍馬川は鞍馬山の東を流れ、貴船川と合流して西流し、賀茂川にはいる。古来、火打石の産地。
一五 未詳。写本が実在したのであろう。

一　若女方になりたての時分から。

この人のむかしを聞けば、尾州にかくれもなき風流男なり。千之丞太夫なりの時分より、深く申しかはして逢ひぬ。身をかくし給ひて、久しく御行方のしれざる事を嘆きしに、ある人伝へて、「五条の河原に浅ましき形にてまします」と語れば、太夫泪ぐみて、「人の行くするゑ程さだめがたき物はなし。とくにも知らせ給はらば、都の中にて人に指はさすまじ。知らねば何事もぜひなき世なり。事は思ひもよらず。御国がたへはたよりの文して幾度かとひまゐらせしに、かへり事のなきは我を見かぎり給ふかと、ま



玉川千之丞と深く言いかわし、尾張の三木様と称された風流男も、今は五条の橋の下の川原に住む物乞いの身。それを聞いた千之丞が、五条河原にその男を訪ねて盃を交わしている場面である。

これほどまで気を配っているのであるから、何かにつけて悪かろうはずがない。恋い慕う賤しい者にも、こっそりと情けをかけ、たび重なって噂が立つのもかまわない。瀬々の打ち寄せる波のように、いつも浮名が立っていた。

風の激しい夕暮れ、しかも雪模様で、もう北山は松の葉が白くなっていた。人通りの多い五条の橋の下の川原を寝所にして、この世を夢と思い、まことに電光石火のようにはかない世渡りをしている者がいた。朝のうちに鞍馬川の火打石を拾って京都市内を売り歩き、残れば夕方に捨ててしまうというその日暮しに満足していたので、人々はこの男を都の今賢人といっていた。その身の上になっても男色は忘れず、玉川心淵集という全部で四巻の書に、千之丞の四季の暮しぶりを書き記した。衆道を嗜む人の必見の書物である。体にある灸の数、蚤の食った跡まで記してあるのはおかしかった。

この男の素姓を聞くと、尾張で有名な伊達男であった。千之丞が若女方になりたての時分から、深く言いかわして逢っていた。その後この男は身を隠し、久しく行方が知れなかったので、千之丞が悲しんでいると、「そのお方は五条河原にあさましい姿でいらっしゃいます」とあ

まならぬ身をうらみて過ぎにし事ぞ。惣じて、勤めけるうちには、これにかぎらずかかる事あまたあり。二それからそれまで」とつれなく申して、その夜のお客を大事に機嫌とりて、床もしめやかに、思ひを残さぬほどに起き別れて、曙霜夜身にこたへて、嵐もはげしき河原を思ひやりて、袂に盃を入れ、三燗鍋を提げて、人をもつれず岸根の小石を踏みこえて、水鳥の浪の瀬枕をさわがし、はるかなる橋の下に行きて、「尾張の三木様」と、むかしの名を呼べども知れず。ころは霜月二十四日の曙前、いまだ人顔も見えわかず、浅ましき寝姿のあまたあれば、いづれかその人様とたづねけるに、過ぎにし事を思ひ出しに、左の鬢先に切疵ありしと、ひとり〳〵の野臥の顔をさぐりてみしに、案のごとくさがして、「最前より声を掛けしに名乗らせ給はぬは、さりとはふかく恨み参らす」と、泪又俄川かと思はれ、しばし過ぎにし事を語りて、手づからもりし酒に明方の風をしのぎ、東の空もしらみて、「御有様をみるに、風俗の残りし所はひとつもなし。かくも又替はる物ぞ」と御足をさすれば、あかぎれより紅乱してなほ

る人が伝えてくれた。すると太夫は涙ぐんで、「人の行く末ほどわからないものはない。早く知らせてくださったら、都の中で人に後ろ指をささせまいものを。知らないという事はいたし方のないものだ。ついこの近所においでなさったとは、思いがけない事であった。お国元のほうへは何度もお便りをして安否をお尋ねしたのに、ご返事がないのは、自分をお見限りなさったのかと、ままならない身を恨んで過ごしてきた。およそ勤めている間には、これに限らず、こんな事はままあるものだ。こうなったからにはしかたがない」と、わざとすげなく言った。千之丞はその夜のお客を大事にして機嫌をとり、床もしんみりと思いを残させないほどに勤めて起き別れた。霜夜の明け方の寒さが身にこたえたので、川原はさぞ嵐も激しいことだろうと思いやって、千之丞は袂に杯を入れて燗鍋を下げ、供も連れずに岸の小石を踏み越えて、川瀬に眠る水鳥を驚かしながら、はるかな五条の橋の下にたどり着いた。「尾張の三木様」と、以前の名を呼んでみたがわからない。ころは十一月二十四日の夜明け前で、まだ人顔もはっきり見えない。あたりにあさましい寝姿がたくさん並んでいたので、どれがその人かと尋ね歩いてい

二　こうなったからにはしかたがない。

三　手提げ用のつるのある酒の燗をする鍋。→四七二ページ挿絵。

いたましきを、ひとつ〳〵いたはりて添ひ臥ししてありしが、旅立つ人も橋踏みならし、芝居の太鼓うつ程ちかければ、しのぶ身のかなしさは別れ、「今日の夕暮をまたせ給へ。御迎ひに」といふ声も跡なくなりぬ。この世捨て人、これを更にうれしくは思はず、「よしなき人の尋ねきて、我が楽しみのさまたげなり」とうたてく、ここをもまた去りて、何国へか行き給へり。

その後千之丞この事をなげきて、都の中をたづねしにその甲斐もなく、残れる火打石を取り集めて、東山新熊野の片陰にはこばせて、枯葉の小笹が奥に塚をつき、その御方の定紋なれば、しるしに桐の一木を植ゑおき、世になき人を弔ふごとく、辺りに草庵をむすび、日蓮の口まねをせられし法師をするて、ここを守らせける。ある人名づけて、これを新恋塚といへり。

江戸から尋ねて俄坊主

るうちに、たしか左の鬢先に切り傷があったはずだと、昔の事を思い出して、ふせっている物乞いの顔を一人一人さぐって行くと、案のごとく捜し出した。「先ほどから声をかけましたのに、名のってくださらないとは深くお恨みに存じます」と、流す涙は川のようであった。しばらく以前の事を話しながら、手酌の酒で明け方の風をしのいでいると、東の空も白んできた。「お姿を見ると、昔の風俗は何一つ残っていない。こんなにも変るものか」と、千之丞がお足をさすると、皹から血がにじみ出て、いよいよ痛ましい思いをした。いろいろといたわりながら添いぶししていたが、早発ちの旅人が橋を踏みならし、芝居の太鼓を打つのもまもなくなので、人目を忍んでいる身は悲しく、「今日の夕方まで待っていてください。お迎えにまいりますから」と言い残して姿を消した。この世捨人はそれを少しもうれしく思わず、「つまらぬ人が訪ねて来て、自分の楽しみの妨げだ」とうるさがり、そこもまた立ち去って、どこかへ行ってしまった。

その後、千之丞はこの事を悲しんで、都の中を捜し回ったが、その甲斐もなかった。そこで残っていた火打石をかき集めて、東山の今熊野のほとりに運ばせ、

一 当時の芝居は明六つ(午前六時頃)の開場。

二 今熊野。京都から山科へ通ずる滑石越の西麓。新熊野観音寺がある。

三 桐紋は武家に多く、『寛政重修諸家譜』によれば、大名・幕臣のうち四百七十三家、二〇ページを越している。五三の桐、五七の桐、五四の桐、九七の桐、七五三の桐その他種類が多い。

四 伝説の鳥羽の恋塚(四三一ページ注七)に対していう。

❖野郎歌舞伎初期の江戸の若女方玉川主膳は、延宝初年、河内の寺で出家して可見と称した。その主膳が愛した抱え子の玉井浅之丞も、はるばる訪れて来てともに出家、若衆方の山本勘太郎も、竜田の紅葉見の帰りに二人を訪れて発心し、ともに出家したという。衰える美貌と薄命の身を嘆いての出家話は、遊女にも多い。

五 「御廟所。仏法僧の鳥の事は、霊窟の閑林のうちにて、暁がた一夏の

仏法僧の鳥は、[五]高野、[六]松の尾、河内の国[七]高貴寺にかぎりて、夏中しかも真の闇に鳴くなり。この声たまさかに聞く人心をすまし、殊勝さもここ、弘法大師の開起の霊地なり。この山つづき、御法のはやし年ふりて、[八]玉手と云ふ里に念仏の老和尚ましまし、あまたの御弟子のある中に、可見といへる美僧あり。

　人のむかしを尋ねけるに、江戸の芝居太夫[九]玉村主膳と[一〇]一枚看板に名を広め、人の命をとる程の女方、よろづの[一一]拍子事、またの世にも出来まじき名人、ことに若道のたしなみふかく、心を掛けざるはなし。

　日を重ねて姿の花もをしまれ、月は[一二]二十日あまりの空と詠めし年の頃、[一三]おもひ入りし山に隠れ、髻を払ひ形をかへて、諸国執行して今この所に来て草庵をむすび、萩垣のまばらなるに蔦の枯葉のまとひ、窓は南に月を友とし、[一四]朝夕の勤め隙なく、かくて三年が程は身のありかもしらせず、古里の事をも忘れけるに、世にありし時かかへ置きたる子に、[一五]浅之丞と申せしは、すぐれてうるはしく情もふかく、諸人の恋種とな

枯葉の小笹の奥に埋めて塚を築き、その方の定紋なので、印に桐の木を植えた。そして亡くなった人を弔うように、近くに草庵を建て、法華宗の坊主を置いて、そこを守らせた。ある人がこれを名づけて新恋塚といった。

江戸から尋ねて俄坊主

　仏法僧という鳥は、紀州の高野山、山城の松尾神社、河内の高貴寺に限って棲み、夏の間、しかも真の闇夜でなければ鳴かない。たまたまこの鳴き声を聞く人は、心が澄むというが、ことに高野山は弘法大師開基の霊地であるから、格別にありがたく聞きなされるのである。この山続きの河内国玉手という村の古い寺に、浄土宗の老和尚が住んでおられ、その大勢の弟子の中に、可見という美僧がいた。

　この人の昔を尋ねたところ、玉川主膳という有名な江戸歌舞伎の一枚看板であった。人の命をとるほどの美しい女方で、すべての歌舞音曲は希代の名人であった。ことに衆道の嗜みが深く、思いをかけない者とてはなかった。

　月日がたつにつれて、花の姿も惜しまれるようになり、年頃も二十日あまりの月のようになった頃、かねて思い込んで

間啼くと也」(高野山通念集)。

六 京都市西京区の松尾山。松尾神社がある。この山の仏法僧をうたった藤原光俊の和歌(新撰六帖)は、『雨月物語』にもひかれている。

七 大阪府南河内郡河南町平石の神下山にある高野山真言宗の高貴寺。『河内国名所鑑』巻一に、弘法大師の仏法僧の詩、後鳥羽院熊野行幸の途次の仏法僧の御製を掲げている。

八 大阪府柏原市玉手町の浄土宗安福寺。大宮玉手の山上にある。廃絶していたのを、寛文十年(一六七〇)、珂憶上人(念仏の老和尚)が中興、現在に至る。

九 玉川主膳 →役者一覧。 一〇 上方歌舞伎劇場における外題看板の通称。江戸では大名題という。転じてこの看板の上部の絵組に書かれる大立物の役者をいう。

一一 歌舞音曲に伴う太鼓・鼓・笛・三味線などの総称。

一二 若衆の盛りを過ぎた二十歳あまりの頃。欠けた二十日過ぎの月にたとえた。「すさまじきものにして見る人もなき月の、寒けく澄める廿日あまりの空こそ、心ぼそきものなれ」(徒然草十九段)。

一三 かねて目星をつけておいた寺。「世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にもしかぞなくなる」(千載)。

一四 「ながむるに慰むことはなけれども月を友にて明かす頃かな」(新後撰　西行)。

一五 玉井浅之丞 →役者一覧。

一 客勤め（男色）。

二 この世に生きているともいえないような身の上。

りぬ。主膳の時これをなびけて、外[一]の勤めはおのづからやめて、互にかはるまじきとの約束せしに、墨染にかへ姿を知らせ給はぬをうらみ嘆き、はる〴〵のむさし野に道をつけて、今ここに尋ねよりてみるに、むかしの面影は水の泡に消えて、埋れ井を手づからはね釣瓶のいとなみ、泪は桶にあまりて、「この御有様は」と衣にすがりて、人目も恥ぢず袖をしたしけるこそ、至極の心ざしなれ。

「されども我出家して、世[二]にあるとも定めぬ身なれば、かさねて逢ふ事稀なるべし。年月のよしみとてこの度尋ね給ひし



江戸芝居の大立物玉川主膳は、高野山に続く玉手の里の老和尚に従って出家、可見と称して修行中。法師姿で今水を汲む可見を訪れて来たのが、昔抱え子であり念友でもあった玉井浅之丞。

いた寺に身を隠し、剃髪して出家となり、諸国を修行して回ってから、今ここに来て草庵を結んだのであった。まばらな萩垣に蔦の枯葉がからみ、窓は南にあって月を友とし、朝夕の勤行を怠らず、そうして三年ほどは人に在所も知らせず、古郷の事も忘れていた。ところが、主膳が役者であった時に抱えていた子に、浅之丞というたいへん美しい子がいて、情けも深かったので、人々の思いの種となっていた。主膳がこれを口説き落としたので、浅之丞はほかの客勤めをやめて、互いに心変りすまいと約束していた。それなのに主膳が出家して、行方を知らせないのを恨み嘆き、はるばる武蔵野から道をたどって、今ここに尋ねて来てみると、主膳の昔の面影は水の泡と消えていた。埋れ井ではね釣瓶をたぐり上げていたので、浅之丞の涙は桶にあふれ、「このありさまは何事です」と、衣の袖にすがりついて、人目も恥じないで泣いたのは、もっともなことであった。

「だが私は出家して、この世に生きているとも言えないような身の上だから、また逢うこともめったにないだろう。年月の好誼で、こうして訪ねてくださったお志は忘れません。そなたはまだ花盛りだから、江戸の人々も眺めを惜しんでいよ

心底、なほ忘るまじ。その方はいまだ盛りといへば、江戸桜[三]の人も詠めに惜しむ程なり。殊更熊谷[四]にまします二親の嘆き、かれこれ思ふに、まなく東に帰り給へ」。名残も今宵ばかりのもてなしに、木の葉の煙を立てて、茶釜のぬくもるもとけ[五]しなく、天目[六]二つの外器とてもなく、しのべ竹[七]ならべたる仏棚に表具なしの六字[八]を掛け、欠け徳利に夏菊をいけて、風をたのしみの種とし、夜をしのぐ蚊屋もなければ、団隙なく枕おどろかして過ぎし事語るに、涙に音ありて口に声絶えて、夢に現を見るここちして暁の鐘、「一番鶏[九]の鳴かば、関[一〇]の東へおもむき給へ。これより後は、無事をしらする文もむつかし。たより[一一]ありともその事なかれ。せめてはこれを形見」と、持ち馴れし浄土珠数[一二]をわたせば、又泪玉[一三]をつなぎとめたる風情ぞかし。やう〳〵明方の雲晴れて、夏山もあらはに見ゆる時、「とかくは御心にまかし帰る」と、立ち行く姿しばし見送りて、山はしげり木の陰に、はや見えずなりにき。

　今は思ひを晴らし、笹戸さし籠め、うきを忘るるばかり念仏に気をうつしける折節、又戸をたたくはあやしく、立ち出

う。ことに、熊谷にいらっしゃるご両親もお嘆きだろうから、かれこれ思い合わせて、すぐに江戸へお帰りなさい」と、名残も今宵ひと夜のもてなしに、主膳は木の葉を茶釜の下にたきつけたが、なかなかはかどらない。茶碗二つのほかには道具とてもなく、忍竹を並べて作った仏棚に、表装してない六字の名号を掛け、欠け徳利に夏菊をいけて、涼風がせめてもの楽しみであった。夜を過ごす蚊帳もないので、しきりに動かす団扇の音に目を覚まして、過ぎ去った事を語り合って涙にむせび、言葉もとだえて、夢現のように過ごしているうちに、夜明けの鐘が響いてきた。「一番鶏が鳴いたら、関東へ旅立ちなさい。これからは無事を知らせる手紙もほしくない。つてがあってもやめなさい。せめてはこれを形見に差し上げよう」と言って、可見が持ちなれた浄土数珠を渡すと、また二人はつないだ玉のように涙を流すのであった。ようやく明け方の雲が晴れて、夏山がはっきり見えるようになった時、「ともかく仰せのとおりに帰ります」と言って出て行く浅之丞の姿を、しばらく見送っていたが、まもなく茂った山の木陰に隠れて見えなくなった。

　可見も今は胸が晴れ、笹戸を閉ざして、

三 江戸桜をソメイヨシノとする説があるが、ソメイヨシノは、江戸末期、巣鴨村染井の植木屋によって広められた一品種である。『しをり草』に「江戸桜。遅桜也。葉少し赤し。花大輪にして茎長く下にたる。この種関東に多き故に名とすと云ふ」とある。
四 現、埼玉県熊谷市。
五 もどかしい。じれったい。
六 朝顔形の抹茶茶碗。日常にも用いた。中国浙江省天目山の原産。
七 忍竹。茎細く、葉の大きな女竹で、垣の材とする。
八 南無阿弥陀仏の六字の名号。
九 早暁、最初に鳴く鶏。
一〇 逢坂の関の東へ。関東へ。
一一 つてがあっても便りをするな。
一二 浄土宗で用いる数珠は、珠かず三十六、二重にして持つので俗に輪違いという(和漢三才図会)。
一三 つないだ玉のように涙を流した。数珠の縁語。

一 夢の浮世と悟ったからには、何も思い残すことはないであろう。

二 現、大阪府羽曳野市に属す。応神天皇や安閑天皇の御陵がある。

てみれば、浅之丞うるはしき髻を払ひ、「御言葉にしたがひ東にかへりて、又参りたる」と申す。

あたら形を悔やめども甲斐なく、この事和尚に申せば、[一]「夢をしる世のおもひ出、何か残らじ」と、同じ衣の墨にそめて後の世の事のみ、まことある道心これなるべし。朝に山の井をむすび、夕に柴木をはこび、執行の身のたのしみ、ありがたくぞ見えける。

この里つづき[二]古市といふ所に、野人の娘にはその様やさしかりけるが、浅之丞旅姿を見しより魂とび出、大方は狂乱になつて跡より御寺に行くを、召使ひの女ども取りつき、いさめて宿に帰りしに、この恋やるせなく、その夜忍びて通ひ、松火幽かなる庵室を窓より覗けば、思ひし人は法師となつてありける。かなしき声をあげて、「あの若衆を何とて出家にはなす事よ」と、絶え入るばかりなげきぬ。

かつて思ひよらざれば取りあへざりしが、女のあらけなきののしりに一山の坊主おどろき立ち集りて、これを見しる人もあまたありける。「はしたなき仕業」と色々いへるも聞き

世の憂さを忘れるほどに念仏を唱えていた。するとまた戸をたたく者があったので、いぶかしく思って出て見ると、美しい髪を剃り落とした浅之丞が立っていた。「お言葉のとおり江戸に帰って、また出直してまいりました」と言う。

美しい姿をこんなありさまにしてしまって、と可見が悔やんだが、今更しかたなく、この事を和尚に申し上げると、「夢の浮世と悟ったからには、何も思い残す事はないであろう」と、和尚は浅之丞をそのまま出家させた。ひたすら後生の安楽を願う身となったが、これこそまことの求道者というべきであろう。朝は山の井をくみ、夕方は柴木を運んで修行にいそしむ様は、ありがたく思われた。

この村続きの古市という所に、百姓の娘にしては優しい娘がいた。浅之丞の旅姿を見るやいなや魂が消し飛んで、半狂乱となり、跡をつけてお寺に行こうとした。召使いの女たちが引き止め、なだめて家に連れ戻ったが、娘はなんともやるせなく、その夜こっそり忍んで行った。松明の明りがかすかにもれている庵室の窓からのぞいて見ると、思う男は坊主になっていた。娘は悲しそうに声をふりしぼり、「あの若衆をどうして出家にした」と、息も絶えるほどに泣きわめいた。

入れず、ただ、「この人を誰が髪をおろしけるぞ。その人うらみなる」と、狂人うたがひなし。

親里に云ひやりて、したしき人のきたつて、「さりとは世のそしりもあり。出家の身なれば思ふにままならず。かさねて逢ひみる事の時節もありなん」と、心を静かにせさせけるに、「今までは浅ましき心ざし、我こそまよへ、[三]人は何とも思ひ給ふまじ。よし／＼かかる恋路もさだまる[四]種なり。みづから十四歳まで、わづかに散るをも惜しみし黒髪、今日より[五]道の捨て草」と、手づから切り払へば、せんかたなくこれも出家になして、西の方の山陰にひとつ庵を結び、明暮鉦の音ばかりにして、その後は形を見たる人もなし。恋より思ひそめて、恋をふつと忘れけるとなり。

又二人の法師も、[六]浮世者にて浮世の事をすて、今にこの山をはなれず、勤めすまして住みける。さかんの時江戸にて相馴れし人の、むかしゆかしくてたづぬる方もあまたなりしに、つひに戸ぼそをあけず、門は[七]すひかづらのとぢて、[八]根笹はおのれと埋もれ、道筋もなかりき。

思いがけない事だったので、取り合わないでいると、女が荒々しくののしる声に驚いて、寺中の坊主どもが集まって来た。中にこの娘を見知っている僧も大勢いたので、「はしたない事だ」といろいろ諫めたが娘は少しも聞き入れない。ただ、「このお方の髪は誰が剃ったのですか。その人が恨めしい」と繰り返すだけで、全くの狂人であった。

親元に知らせたので、身寄りの者がやって来て、「世間のそしりもあることだし、それに出家のお身の上だから、どうしてあげようもない。またいつかお目にかかれる時節もあるだろう」と、娘の心を落ち着かせると、「ほんとうにあさましいことでした。私がいくら迷っても、あのお方は何とも思ってはくださらないでしょう。こういう恋をするというのも、前世から定まった私の運命なのです。私も十四歳のこの年までは、少しの抜け毛も惜しんできましたが、今日からこの黒髪は仏道にはいるために捨ててしまいます」と言って、みずから切り払ったので、やむなくこれも出家させて、西の方の山陰に庵を造ってやった。それからは明け暮れ鉦の音が聞こえるだけで、姿を見た人はなかった。恋から発心して、恋をふっつりと忘れたということであった。

三　あのお方（浅之丞）は。
四　前世より定まる因縁。
五　仏道にはいるために捨てよう。
六　派手な暮しをする芸人。
七　忍冬。山野に自生。初夏、芳香ある淡黄色の唇形花を開く。冬でも葉がしぼまないので、この名がある。
八　山野に自生する小形の竹の総称。

その後山本勘太郎といへる美児人、竜田の紅葉見にまかりて、色ばかり好めるかへさに、ここにたよりて哀れに殊勝に思ひそめて、まことに夢の夢と、これも発心の身となりぬ。よく／＼の思ひ入れ、惜しや前髪ざかりに。

面影は乗掛の絵馬

いづれの工か削りなして、野郎紋楊枝といへるを初めて、世にもて時花らかしぬる。うき世の世の字は、ならべてなきひとつ紋、えびすやのかかへ玉村吉弥とて、その頃都の男はいふにたらず、人の女または娘にかなはぬ思ひをさせ、かぎりもなく舟岡・鳥部山の煙とはなしぬ。殊更楊貴妃の狂言に弄の顔つき、それは／＼もろこしを見ねばこそなれ、絵姿などのおよぶ事にもあらず。いつまでもこのままの児人ならば目出たかるべし。「若衆と庭木と大きにならぬものならば」と、物ずきのよき遠州も申されしとなり。

何事もなげくまじきは世の有様ぞかし。一とせ難波の芝居

一→役者一覧。二 奈良県生駒郡の南部(現、斑鳩町)竜田川に沿い、古来、紅葉の名所。

❖野郎歌舞伎の初期、京都の若女方玉村吉弥を見そめた狼の黒焼き売りの佐渡の山男が、発奮して金山で成金となり、五年後に江戸に下っていた吉弥を坂東又九郎座に訪ね、今では大男の吉弥に一生暮せるほどの金を与えたという、魅力抜群の吉弥の逸話。

三 主人公の玉村吉弥が、乗掛け馬に乗った絵馬を、江戸中の寺社に奉納したという結びの話をさす。乗掛け馬は宿駅の駄賃馬で、人一人と二十貫目(約七五キログラム)の荷物を乗せた。四「何レノ工カ青巌ノ形ヲ削リ成セル」(和漢朗詠集下、謡曲・山姥)。『好色一代女』巻三の二や『日本永代蔵』巻三の三にも用いる。五 野郎(歌舞伎若衆)の定紋をつけた楊枝。「風青く楊枝百本けづるらん　桃青／野郎ぞろへの紋のうつり香　信章」(江戸三吟)。六 丸の中に世の字は、主人公玉村吉弥の定紋(野郎大仏師)。→役者一覧。七 京都の歌舞伎座の名代夷屋吉郎兵衛。若衆歌舞伎時代から野郎歌舞伎時代にかけて(承応・明暦)、女方の名優でもあった。八→役者一覧。九 京都市北区の船岡山と東山の西腹にある鳥部山。古来の葬所。一〇 玉村吉弥が万治の頃、夷屋座で楊貴妃に扮して評判をとったことは『野郎虫』の記事で知ら

また二人の坊主も、派手な芸人でありながら浮世を捨て、今でもこの寺を離れず、行い澄まして住んでいる。全盛時代に江戸で馴染んだ人が、昔をなつかしがって大勢訪ねて来たが、ついに戸をあけようとはせず、門は忍冬に閉ざされ、根笹ははびこって道筋を埋めていた。

その後山本勘太郎という美しい若衆方が、大和の竜田川に紅葉見物に行き、色に浮かれて帰る途中、この庵室を訪れた。二人のありさまを見て心を打たれ、まことにこの世は夢のまた夢のようなものだと、この若衆も出家してしまった。よくよく思い込んだものであろう。それにしても若衆盛りに惜しいことをしたものだ。

面影は乗掛の絵馬

どういう細工人が作り始めたのであろう、役者の紋をつけた楊枝を削って、世間に流行らしている。浮世の世の字はまたとない一つ紋で、それを定紋にしている、京都の夷屋吉郎兵衛抱えの若女方玉村吉弥は、その頃、都の男はいうまでもなく、人の女房や娘にまでかなわぬ思いをさせ、船岡山や鳥部山の焼き場で煙になった者が大勢いた。ことに楊貴妃の狂言で花をかざした顔つきは、それはそれ

れるが、元禄十三年(一七〇〇)刊行の『役者万年暦』の序に、「その頃の当り狂言、玄宗皇帝花軍に、又九郎抱への玉村吉弥、楊貴妃と成てゆるぎ出る」とある。[一一] いたって風流人の。[一二] 小堀遠江守政一。伏見奉行。茶人・作庭家。秀吉・家康に仕えた。正保四年(一六四七)没。六十九歳。[一三]『歌舞伎事始』に、大坂にて承応元年(一六五二)六月一日、「立慶町塩屋九郎右衛門座にて御屋敷方の仲間三十余人口論、吟味の上、これより芝居中へ御制法の書付出でしが、七月に至り惣て停止」させられたとある。[一四] →四五四ページ注一。[一五] 現今でも節分のいり大豆を年の数ほど食する慣習は残っているが、当時は年の数の豆を拾って厄払いにやった(鶉衣)。[一六] 数をごまかして、少なく勘定すること。語源は上方におけるお盆の贈答品であった刺し鯖のかぞえ方からきたとする説がよい。刺し鯖は開いた塩鯖を二枚重ねたものを一つとかぞえた。[一七] ひねた若衆でもかまわない。[一八] 当時は脚本らしい脚本もなく、上演間近になって役者が集まり、狂言の役割や趣向やせりふの打合せをした。「物まふは夜分に成てどれからぞ/芝居のしくみ明日はつらみせ」(大坂独吟集 鶴永)。つらみせは顔見世芝居。[一九] 四条の橋は延宝四年(一六七六)五月の洪水で流失し、以後この地が祇園の神領なるゆえに、正規の橋をかけると崩れ落ちると称し、板の仮橋をかけて崩れ橋

にて恋の奴のあばれしより、[一四]歌舞伎といふ事法度になり、ひらかぬ花の散るここちして、太夫本をはじめ、子どもの親方ふかく嘆きしに、今思へばこれ程仕合せなる事はなし。いかに情なればとて、二十すぐるまで前髪おきて勤めはなるまじきに、野郎なればこそ、三十四五までも若衆顔をして、人の懐の中へもはひる事ぞと、をかしき色の道の思はれける。外へは年をかくし、[一五]節分の大豆も[一六]鯖読みにして、くらがりにて内証は済ませども、物覚えのつよき見物目が、同じ時の若衆方は敵役になり、若女方は祖母方になりしを思ひあはせておどろきぬ。芸見るばかりは、たとへ七十になる若衆が振袖を着るとても、すこしもかまひにならぬ事ぞかし。とかく[一七]合点する夜の客さへあれば、質はおかずに年はとるなり。

春の初狂言の[一八]仕組に、玉村吉弥行くとて、[一九]四条のくづれ橋わたる時、[二〇]看板うたぬばかり[二一]北国者にかくれもなき男、その様をかしげに[二二]割織着て、[二三]ほくそ頭巾に[二四]山刀さして、肩に[二五]れんじやく掛けて、都の[二六]霜先をかんがへ、[二七]狼の黒焼き売りにのぼ

は、本場の中国美人を見たことがないからであろうが、そこらの美人絵などの及ぶところではない。いつまでもそのままの美少年でいられたら、こんなめでたい事はなかろう。「若衆と庭木は大きくならないものならば」と、風流な小堀遠州も言われたということである。

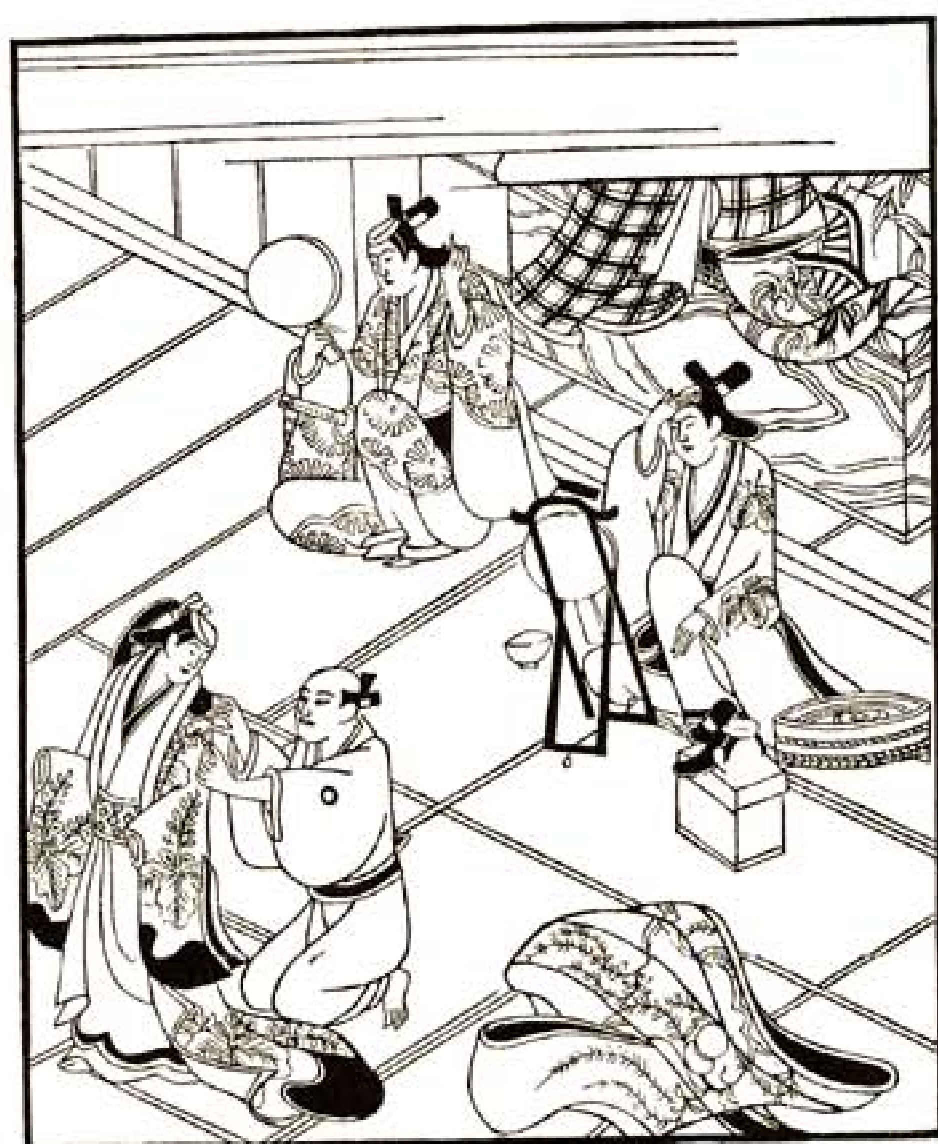
世の中の事は何事も嘆くに及ばないものだ。ある年、大坂の芝居小屋で、武家勤めの中間どもがあばれたことから、若衆歌舞伎が御法度になり、若衆はみんな前髪を剃って野郎頭になった。その当座は蕾の花が散ったような心地がして、太夫元をはじめ若衆の抱え主までもひどく嘆いたものであったが、今思うと、これほど都合のいい事はない。いかに色恋の道だからといって、二十歳過ぎまで前髪立ちのままで勤めはできまい。野郎頭になったからこそ、三十四、五歳までも若衆顔をして、人の懐の中へもはいれるのだ。全くおかしい色の道である。ほかへは年を隠し、年の数ほど食うことになっている節分のいり大豆も数をごまかして暗がりで内緒にすませても、物覚えのよい見物人どもが、その若衆と同期の若衆方は敵役になり、若女方は祖母方になっているのを思い合わせて驚くのである。芸を見るだけなら、たとえ七十歳になる

と称した。三〇 看板こそかけていないが。三一 加賀・能登・越中・越後・佐渡などの北陸道の田舎者。三二 古布を細くさいて緯糸にして織ったそまつな織物。「身には割織を着て、藤縄の組帯して」(五人女三の四)。三三「ほくそ頭巾、織田信長着す、もつとも古き風也。苧を以て之を作る。元文迄は山家の者多く用ふ」(我衣)。三四 鍔のない、身が厚く幅の広い護身・伐採用の刀。三五 連尺。二片の板に縄をつけて背につけ、物を負うのに用いる具。三六 霜月の前、十月頃。寒に備えて薬喰い(養生喰い)をする時季。「干鮭は霜先の薬喰ひぞかし」(一代男三の六)。三七 疳(小児病)の妙薬といい、北国者が売り歩いた。

一「吉弥は」とあるべきところ。
二『尾陽戯場事始』(天明二年)に、山城喜内という浄瑠璃太夫が、寛文元年(一六六一)に興行したとある。
三 員子。員は円に同じ。金銭。
四 諺「念力岩をとおす」のもじり。
五 金山。

りしが、この面影のまたなきうるはしきに目をとめてたたずみしに、吉弥[一]を心をつけて、手にふれし楊枝をかの男が袖口になげ入れて、何心もなくよろこばせて通りけるに、この男狂乱の心になりて、商ひ物を喜内[二]が浄瑠璃芝居の前にうち捨て、本国佐渡が島へ帰り、明暮ゐんつう[三]をためける。金銀さへあればこの恋はかなふと思ひつくこそをかしけれ。

念力岩[四]を見立て、かな山[五]にかかりて、おもひの外なる俄大臣となりて、五年あまりも過ぎて都にのぼり、馬乗物をすぐ



を持つのが佐渡の大臣。その前に神妙にすわっているのが男姿の吉弥。舞台へ向かう烏帽子姿の役者の後は道化方の南北三ぶ。化粧し着付けをする右面の三人の若衆方は吉田伊織・野川吉十郎・加川右近。

若衆が振袖を着て勤めても、少しもかまわない。いずれにせよ、年などかまわない夜の客がありさえすれば、質は置かずに年を越せるのだ。

　新春の初芝居の打合せに行く玉村吉弥が、四条の崩れ橋にさしかかった時、看板こそかけていないが、まぎれもない北国者がやって来た。その身なりはいかにもぶざまで、割織の着物を着て、ほくそ頭巾をかぶり、山刀をさして、肩に連尺をかけている。都で寒に備えての薬になるだろうと、狼の黒焼きを売りにやって来たのだが、吉弥があまり美しいのに見とれて、たたずんでいた。吉弥はそれに気がついて、手を触れた楊枝を、その男の袖口に投げ入れて、なんとなく喜ばせて通り過ぎた。この男は気も狂うほどとりのぼせて、商売物の黒焼きは、山城喜内の人形浄瑠璃芝居の前に捨てて、本国の佐渡島に帰り、それから金儲けに打ち込み、金銀さえあればこの恋がかなうと思い込んだのは滑稽であった。

　念力は岩をも通すというが、金山に取りつき、思いがけないにわか成金となった。五年ほどたってから上京し、乗って来た駄賃馬をまっすぐに四条河原へ行かせて、玉村吉弥を尋ねたところが、「その人は役者の習いで江戸の座元に抱えら

に川原[六]に立てさせ、玉村吉弥を尋ねけるに、「その人は役者のならひにて江戸へかかへられ、四年[七]あとにくだられける」と語る。これを聞くより、京には一夜もとどまらず、又東路の心ざし、逢坂山[八]にも我をとめぬる恋の関守もなく、したい事して行く道に、それまでは御油[九]・赤坂[一〇]・金川[一一]などに色しかけたる女[一二]の人を留めけるが、耳にも聞きいれず、品川より江戸入りをいそぎ、境町[一三]に行きて吉弥を尋ねけるに、「この所の芝居にて都の花を咲かせて後、人よりはやく若衆姿をやめて男になりし[一四]」とむかしを語れば、なはまたなつかしく手引



玉村吉弥を慕って発奮、俄大臣となった佐渡の男が、五年余り過ぎて都に戻るが、吉弥はすでに若衆をやめていた。それでも吉弥が懐かしく、坂東又九郎座の楽屋を訪れ、男姿の吉弥と出会う。左下の扇

れ、四年前に下った」ということであった。それを聞いた男は、一晩も京都にとまらず、そのまま関東をめざした。今では逢坂山に野暮な関所もなく、したい事をして行く先々には、御油・赤坂・神奈川などの宿場に、色仕掛けの客引き女がいたが、男はそれに耳もかさず、品川から江戸入りを急いだ。芝居町の堺町に行って吉弥を尋ねると、「こちらの芝居でひと花咲かせてから、人より早く前髪を落として元服してしまった」ということであった。男はいっそうなつかしくなり、手引きを頼んで坂東又九郎が座元をしている森田座の楽屋にはいって見ると、まだ身仕度の最中で、若衆たちは白粉を塗っていなかったが、素顔でもみな美しかった。中でも吉田伊織・野川吉十郎・加川右近などは、みんな人に知られた美少年であったが、自分の好きな京都の吉弥にくらべると、肩を並べる者は一人もいなかった。京都で逢った時の吉弥の顔を思い出しながら、楽屋を見渡したが、見分けがつかないでとまどっている時、役者の一人が大男をつかまえて、「これこそ玉村吉弥の変った姿です」と言ったので、男は驚いてよくよく見ると、一目見ただけであったが、昔の面影が残っていて、首筋の美しかったことを思い出した。

六 歌舞伎劇場のある四条河原。
七 寛文元年に。すなわちこの時は寛文五年。
八 「夜をこめて鳥の空音ははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」(後拾遺)をふまえている。
九 現、愛知県豊川市御油町。以下、東海道の宿場。
一〇 現、愛知県宝飯郡音羽町赤坂。
一一 現、横浜市神奈川区。
一二 宿場の飯盛女。
一三 現、中央区日本橋人形町。慶安四年(一六五一)に江戸芝居の濫觴である猿若座(後、中村座)が禰宜町から移り、天保十三年(一八四二)までこの町にあった。
一四 元服した。

きを頼み、坂東又九郎楽屋[一]に入りてみるに、いまだ身拵へする太夫子の風情、白粉をぬらぬ素顔にてもうつくしからぬはなし。すぐれて吉田伊織[二]・野川吉十郎[三]・加川右近[四]、いづれも名をあげし美児なれども、我がおもふ都の吉弥にくらべては、つづくは一人もなかりき。すぎにし面影の思はれながめやるに、見分けがたくて心わづらふ時、大男なるを、「これぞ玉村がかはれるすがた」といへば、おどろきつら〳〵見る程に、一目なれどもむかしの形、首筋うつくしきを思ひ出し、今でも恋はやめがたくて、その後人しれず京の事どもをかたれば、吉弥も二たび都なつかしく、「その時ならばその心入れあだにはなさじ」と、まことある心中申せば、この男うれしさかぎりなく、勤めの身にはやさしくおもひ、我が仕合せを残さず咄して、よき物一代の世をくらす程とらせて、又生国佐渡に帰りける。

そも〳〵楊枝一本よりのなづみなり[五]。惣じて舞台子は、人に言葉をかけ、あとのへらぬ手などは誰にもにぎらすべし。玉村吉弥が情にて命捨てし人数をしらず。江戸中寺社の絵馬[六]

今になっても恋しさに変りはなく、京都での思い出を話すと、吉弥もまた京都時代がなつかしくなり、「あの時でしたら、あなたのそのお心をむだにはいたしませんでしたのに」と、真実のこもった心を打ち明けた。男はうれしくてたまらず、勤めの身としては優しいことだと思い、自分が成功した一部始終を話し、一生暮せるほどの金を吉弥にやって、また故郷の佐渡へ帰って行った。

これも初めは楊枝一本からの恋慕である。歌舞伎若衆というものは、誰にでも優しい言葉をかけ、減るものでもない手などは、誰にでも握らせるがよい。玉村吉弥の情けのために、命を捨てた人はどれだけあるかわからない。江戸中の寺社に奉納した絵馬に、吉弥が乗った駄賃馬の手綱を、坊主小兵衛が馬方となってとった所を描いてあった。その絵馬を見てさえ恋い慕う者があって、今に話の種となっている。

一　→役者一覧。
二　→役者一覧。
三　→役者一覧。
四　→役者一覧。
五　悩み。恋慕。
六　当時、役者が寺社に紋提灯や自分の姿を描いた絵馬を奉納することがはやった。「今とても山もと恋し勘太郎／檜原の奥の絵馬尋ぬる」(誹諧七百五十韵〈延宝九年〉)。

に、吉弥面影を乗掛(のりかけ)に、坊主小兵衛[七]が馬子(まご)の所、これを見てさへ恋にしづみ、今に世がたりとはなりぬ。

[七] ↓役者一覧。

本朝若風俗

男色大鑑

絵入

六

巻六　あらまし

一　情の大盃 潰胆丸　身体つきも物腰も女らしく、舞も拍手もすぐれた若女方の伊藤小太夫は、都で抜群の人気だったが、美道の意気をおろそかにせぬ若衆だった。春の日暮れ、身をやつした三十一、二歳の女の不審なふるまいを見て訳を尋ねると、「夫が小太夫に恋煩い、今は零落して死の床にある。何か小太夫の物を見せてやりたい」という。その場の者が定紋付きの緋無垢を渡し、それを知った小太夫は、その人に会おうと狂乱のようになるが、女は翌日、夫が小太夫の緋無垢を見て満足して死んだと涙ながらに話したので、皆感じ入った。

二　姿は連理の小桜　小桜千之助は、身持も固く芸達者、愛敬の備わった若衆だが、荒木与次兵衛座の舞台に高下駄の行者姿で登場、長台詞を見事に語った。浮気男どもが、千之助の持つ木の枝に思い思いの恋文を結びつけたが、中にも二十四、五歳の頬被りした男の文は、真情のあふれたものだった。千之助が、その男を訪ね、思いを遂げさせてやると、男は感激して、脇差を抜きもあえず腕に二、三か所傷つけて心中を示し、その後はどこかへ身を隠してしまったという。これは千之助の草履取りに聞いた本当の話だ。

三　言葉とがめ耳にかかる人様　生国は石見の浜田の浪人が、滝井山三郎を慕い、絞り煙草入れを売った金で毎日木戸銭を払い、その舞台姿を見つめていた。ある舞台で山三郎が台詞を間違えた時、それをなじる男があり、浪人と口論となって芝居は滅茶苦茶となった。その帰りがけ、浪人は、その悪口した男を切り、偶然山三郎の草履取りの裏棚に逃げ込む。これが縁となって、浪人と山三郎は衆道の契りを結ぶが、浪人が母親の懇請で浜田に帰った後に、音信が絶えたことを嘆いた山三郎は床に臥し、十九歳で亡くなった。

四　忍びは男女の床違ひ　女方の元祖と称された初代上村吉弥は、今流行る吉弥結びを工夫したことでも知られるが、ある時、高貴なお方から、舞台姿そのままで屋敷へ参るようにと招かれた。厳しい警備を女ということで通過、奥まった高雅な一室へと導かれて行ったが、侍女たちは吉弥を見て大騒ぎ。主人らしき官女と盃を交わし始めた時、その兄君の当主が帰還した。吉弥を「歌舞の女」とごまかそうとするが、当主に召し上げられる。吉弥は困って女鬘をとると、これはなおよしと可愛がられることになった。妹君の方は、さぞがっかりしたことだろう。

五　京へ見せいで残り多いもの　貞享三年の春、『他力本願記』の仕組が大当り、大坂周辺の農村からも大勢の見物客が集まったが、それは皆鈴木平八一人がお目当てだった。その中でも大家の娘とおぼしき美女は、平八をじっと見つめたまま、平八の楽屋入りを見送ると同時に気絶した。作者（西鶴）はその娘に気付け薬を与えて介抱、無事帰宅させたが、そのまま娘は病臥、三月八日に亡くなった。その日平八は、坂田銀右衛門方で竹本義太夫・伊織らの浄瑠璃を聞いて帰宅したが、夕暮れから病に臥して衰弱し始め、閏三月八日には「幻に美女が見える」と言って息をひきとった。享年二十三歳、何とも惜しまれることだ。

男色大鑑　本朝若風俗　第六巻

目録

㊀ 情の大盃　潰胆丸

伊藤小太夫さながらの女

衆道中立売[一]の内儀

きのふの小袖けふは形見

㊁ 姿は連理の小桜

願状にしるる千之助が心ざし

文章はいもせ[二]の階がかり

人のしらぬ情一夜の笹篦屋

一 上京の東西の通り。現在の京都御所の西にあって、一条通の南。

二 男女の縁のとり結び。

一 滝井山三郎の滝。滝の糸のように千々に思い乱れる。

二 夢介、夢中作左衛門などと同じ擬人名。無我夢中の男の意。

三 言葉(ことば)とがめは耳にかかる人様(ひとさま)
胸を烟(けぶ)らす仕出(しだ)したばこ入れ
口ゆゑに切られ損切つたり牢人(らうにん)
山三郎(さんざぶらう)思ひみだるる滝[一]の糸

四 忍びは男女床(なんによとこ)違ひ
人の顔見せおもしろの出見世(でみせ)
近代(きんだい)の風俗お山吉弥(きちや)が真似(まね)
おもひもよらぬ兄様(あにさま)の仕合せ

五 京へ見せいで残り多いもの
古今(ここん)出来まじき物平八が若衆方
酒ゆゑ夢[二]太郎と我が名を呼ぶ事
女の執心(しふしん)三十日めに惜しや命

目録終

情の大盃潰胆丸

坊主は人から木っ端(こば)のように思われている、というが、世の中にこれほど気楽なものはない。したい事をして遊び、それぞれの寺の宗旨を学び、習い覚えたお経を読んで、檀家の衆に衣を着て逢(あ)うよりほかに、勤める事もない。たまったお

❖野郎歌舞伎初期の上方の女方、二代目伊藤小太夫の評判と逸話。前半は小太夫の好意的評判。後半は、今はおちぶれて病床にあり、小太夫に恋い焦れている大尽の女房に、周囲の者が小太夫の定紋つきの緋無垢を与えた。それと知った小太夫は、我ゆえに臨終と狂乱したが、大尽は喜びながらその翌朝死んだという。

三 びっくりするほどの大杯。「武蔵野潰胆丸といへるに打てとついで」(西鶴俗つれづれ一の三)。
四「思はぬ子を法師になしたらむこそ、いと心ぐるしけれ。…ただ木のはしなどのやうに思ひたらむこそいとほしけれ」(枕草子)。
五 気楽。のんき。
六 歌舞伎若衆を呼んだ色っぽい座敷。
七 火であぶった麩を煮つけたもの。
八 キシメジ科の栗茸に同じ。「柳茸。柳、榎、栗等皆菌ヲ生ズ、毒無ク食スベシ」(大和本草)。
九 冷やしたゆで栗。
一〇 甘海苔。浅草海苔の異名。
一一 杉の薄板または杉箱に魚鳥肉と野菜を入れて焼き、杉の香をうつした料理。
一二 女色にふけること。女郎買いをすること。
一三 →役者一覧。

情の大盃潰胆丸

榾柮といへど、法師程世にきさんじなる物はなし。したい事してあそび、寺それぞれの宗旨に学びおきたる経を読みて、諸旦那に衣を着て逢ふより外勤める事もなく、包み銀のたまるを化につかふもよしなしとて、恋のはじまり芝居子狂ひ、これぞ出家に備はりし遊興、色座敷にも身の一大事を忘れず、精進かたく焼麩・柳茸のにしめ物、水栗、酢味噌に木天蓼、あまのりに梅干の吸物、これにて夜もすがらの長酒、よくも呑まるる事ぞと、この真言ある心ざし、殊勝千万にぞ見えける。いかに仏の覿面にしるし見せ給はぬとて、長老様の椙焼も出来はせぬ事ぞかし。肴を心まかせに、女濡れ世間はばからずは、出家にならぬが損なるべし。

さる上人の物ずきにて、伊藤小太夫に舞台衣装を着せて、かづらもそのまま女にかはらず風流なる面影、一座の興ともなし給ふは、誠に女めづらしき心に偽りなくて、諸人これを

布施の金を無意味に使ってもしかたがないと、恋の手始めに芝居の若衆ぐるいをするのだが、これこそ出家にふさわしい遊びである。色気のある座敷でも、出家の身であることを忘れず、精進を固く守って、魚も焼き麩や柳茸の煮しめ、冷やしたゆで栗、またたびの酢味噌、浅草のりと梅干の吸物などである。これで一晩中飲み続けるのだが、よくも飲めるもので、その真実ある心がけは、いかにも殊勝に見えた。いかに仏が即座に罰をお与えなさらないからといって、和尚様が杉焼きを召し上がるわけにもいくまい。心まかせに魚を食べ、世間をはばからずに女ぐるいができるものなら、出家にならないのは損というものだ。

ある和尚が物好きに、伊藤小太夫に舞台衣装を着せて、鬘もそのまま女のあでやかな姿に仕立てて遊興なさったのは、いかにも女珍しい心が素直にあらわれて、誰も悪くは言わなかった。ちょうどその乱れた座敷に居合わせた猩々の源兵衛という男が、つぎのように話した。伊藤の酒席のさばきぶりは、古今まれに色っぽく、客種が変らず、所も同じ四条河原なのに、この太夫一人のさばきで、万事、別世界のように眺めが変ってしまう。東山に出た月も、紫帽子をかけているよう

よきと沙汰し侍る。折節この乱れ座敷まじはりし猩々の源兵衛といへる男のかたりぬ。伊藤は古今の色酒振り、同じ手組の客にして所もかはらざるに、この太夫ひとりの仕掛けにて万格別世界の詠め、東山の月の顔も紫の帽子かけたるやうに思はれ、祇園林の烏の羽色も宗伝唐茶に見なし、時めく美君にうかされ、我にかぎらずいづれも明方をしみ、「秋の夜の夢ばかりなる手枕に」など、古歌を取り違へて、前後を覚えずなりにき。されば、「一人の心は千万人の心なり」と、杜牧之が阿房宮の賦にも書き残せしが、伊藤が心の淵に沈められずと云ふ事なし。歴々の帥仲間もおよがされて、恋に無二遣瀬一て悩み果てける。いづれはあれどこの少人、気分は寛闊にぞ生れ付きて物静かに、自づからの若女方、采体今風の仕出し、爪端ゆたかに、物ごししとやかに、舞ひ事すぐれて、よろづの拍子ききて、染川林之助が乗り初めし二つ縄を一筋にしてわたり、都人の目をも覚ましける。これ人間業とは思はれず。殊更吉野身請けの狂言に、この太夫が道中移せしに、誠の吉野は藤に色を奪はれ、あだなる桜と見くら

に思われ、祇園林の烏の羽色も、しゃれた宗伝唐茶のように見える。今を時めく美君に浮かされて、私だけでなく誰もが、明け方の別れを惜しみ、「秋の夜の夢ばかりなる手枕に」などと、古歌を間違えたりして、前後不覚になってしまうのであった。ところで、「一人の心は千万人の心なり」と、杜牧之が阿房宮の賦に書き残しているように、伊藤の情けにおぼれない者とてはなかった。れっきとした粋人たちも手玉に取られて、やるせない恋に悩むのであった。すぐれた若衆も少なくないが、とくにこの若衆は、大様に生れついても物静かで、天成の若女方といえよう。身なりは当世風で、身のこなしはゆったりとして、声もしとやかで、舞がうまくてすべての音曲に通じ、染川林之助が乗り始めた綱渡りの二つ縄を一筋にして渡り、都の人々の目を驚かした。とても人間業とは思われなかった。ことに吉野身受の狂言で、吉野太夫の道中姿を演じたが、本物の吉野も顔負けで、つまらない桜になってしまったと、人々が見くらべて言ったものだ。

今更評判するのもくどい。この太夫のすぐれていることは、れっきとした証拠がある。役者ぐるいのやめられない者が、この若衆に墓場というあだ名をつけたの

一 色気のある酒席のさばきぶり。
二 連中。仲間。
三 →二九六ページ注一〇。
四 京都祇園社の森。
五 枯茶色。→四五八ページ注七。
六 「春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ」(千載 周防内侍)の春を秋とまちがえた。
七 杜牧之の「阿房宮賦」(文章軌範七)の一節「嗟乎一人之心千万人之心也」。秦の始皇一人の心も国民一般の心も同様なり、の意。
八 杜牧。晩唐の詩人。陝西の人。字は牧之。杜甫に対して小杜という。詩は豪放かつ艶麗。宣宗の大中六年(八五二)没。
九 秦の始皇帝が造った宮殿。囚徒七十万人を使役して咸陽に造る。
一〇 すぐれた若衆も少なくないが。
一一 『遊仙窟』の字訓。
一二 褄はずれ。身ごなし。
一三 音声。
一四 寛文期の上方役者という以外は未詳。
一五 二筋の縄を渡る綱渡り。「すでに韋駄天舞台から飛　西鶴／二つ縄大を虚空に引廻し　満平」(飛梅千句〈延宝七年〉)。
一六 『役者評判蚰蜒』(延宝二年)の若女方伊藤小太夫の評に「過にし春一つ縄をつたひし風情は、のきばのつまに誰をまつらんとよみしくものふるまひよりもかろくして」とある。
一七 長崎の大尽が、延宝七年(一六七九)に島原上之町喜多八左衛門抱えの三

代目吉野太夫を千両で身請けして、長崎へ伴い帰った一件（恋慕水鏡〈天和二年〉）を脚色した狂言。ただし延宝七年は延宝五年の誤りと考えられる。延宝六年春、京都北側芝居で「吉野身受」を上演。長崎の大尽小倉屋源兵衛を嵐三右衛門、吉野太夫を伊藤小太夫の役で、半年余り大入り（歌舞伎年表一）。

一八 伊藤の藤であるが、また、後文に見えるように、小太夫の紋は藤の丸の内に伊の字であった。「紫ノ朱ヲ奪フ」（論語）をふまえている。



藤の丸に伊

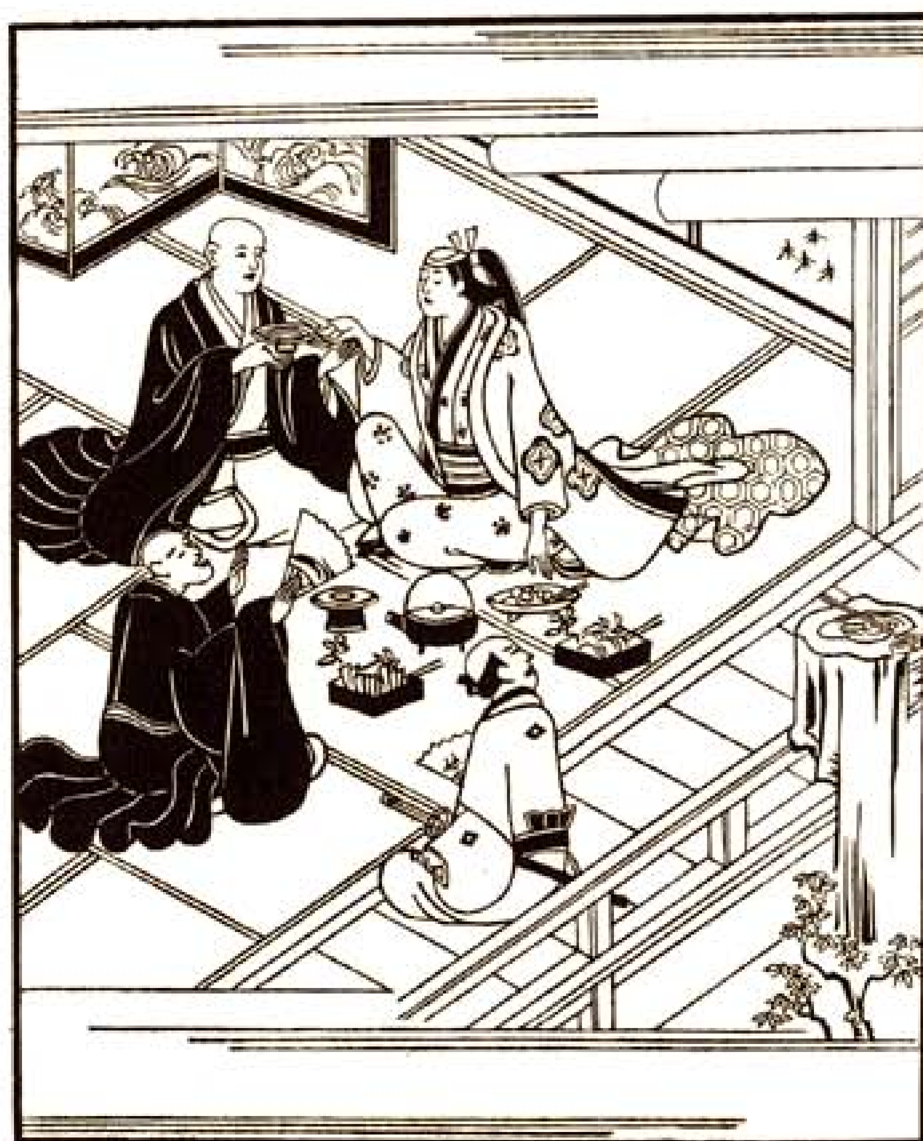
一九 上文の「焼けとまらぬ」を受け、さらに下文の、野郎の揚代としては高価な銀三枚で身代が滅亡する意のあだ名。

二〇 当時の歌舞伎若衆の一夜の揚代は銀一枚（四十三匁）であった（椀久二世の物語上）。

二一 算用のこまかい。

二二 銀三枚は、普通、丁銀（約四十三匁）三枚をこれにあてるのであるが、それをきっちり四十三匁の三倍の百二十九匁、秤にかけて渡したのである。

二三 恋文。


さる上人の物好きにて、舞台衣装のままで祇園の茶屋に招かれ、一座の法師たちを持てなした伊藤小太夫の見事な座さばきは「色酒振り」だったという。そう語ったのは、廊下にすわる猩々の源兵衛。

べていへり。

今また評判するもくどし。よきに極まりたる証拠をしらずや。若道狂ひの焼けとまらぬ者の申し出して、この若衆を[一九]墓原といへるは、一夜の[二〇]情代銀三枚あげし替へ言葉なり。[二一]秤目こまかなる京の人が、枕の夢に[二二]百二十九匁かけしや、情なればとて、思ひ切つては出せし事ぞ。

惣じて、高い物の悪しき事なし。この太夫は、洛中の女、貴賤にかぎりもなく思ひをふくみて、いひもやらず命をとられける人、数をしらず。[二三]分の文ども便を求めて通はせしを、

は、一晩の揚代を銀三枚も払うので、いずれは破滅するという意味である。何事にも算用の細かい京都の連中が、夢のような一夜の情けに百二十九匁もかけたわけだが、いくら恋のためだからといって、よくも思い切って出したものだ。

すべて高い物に悪いものはない。この太夫には、京都中の女が身分にかかわらず恋し、思いも打ち明けないで焦れ死にした者が数知れなかった。つてを求めて恋文を届ける女もあったが、間違っても取り上げなかったのは、薄情だったからではない。男色の意気地を大切にしたからだ、と結んだ。

するとまた一人が、「今時の歌舞伎若衆は、勤めの間はしかたなく脇明けの大振袖を着ているが、暇な晩はおとなの丸袖を着て、祇園町・石垣町・上八軒・穴奥・八坂・清水坂などの茶屋女をあさり歩き、土手町の出合宿で、素人女と忍び逢い、わが家では裁縫女に昼間居眠りをさせ、それどころか、あんまり色遊びにふけるものだからにきびが出て、若衆姿などは消し飛んで、その根性から、花盛りの身を見限られるとは、全くあさましいことだ。おしなべて歌舞伎若衆のつつしむべきは女色だ。三年か五年もたって若衆盛りが過ぎると、昼も夜もなく、道

かりにも取りあげざるは、難面き心にはあらず。その身[一]美道の意気をおろそかに思はぬ故ぞかし。

「今時の野郎、勤めの内は是非もなく脇明けの[二]大袖を着て、隙の夜は丸袖になりて、[三]祇園町・[四]石垣・[五]上八軒・[六]穴奥・八坂・[七]清水の茶屋をさがし行き、[八]土手町の素人女にしのび通ひ、[九]宿にては物縫ひ女を昼居睡らせ、[一〇]それのみ、[一一]悪所のさかりは面皰にあらはれ、衆道の形は外になりて、[一二]心から花のさかりを見かぎらるるこそ浅ましけれ。惣じての勤め子、つつしむべきはこのひとつ、五三年その程過ぎれば、昼夜をかぎらず[一三]釣りものしても人はとがめず。およそ[一四]唐人の若衆にしてから[一五]鍔のしれた事」、これは笑へどいづれも浮気の大座敷、やう／＼踠きをやめて、汗は又元の水になして、[一六]手前風呂立ちさわぎて入りける。

春の日も暮になりて、[一七]板屋もしらぬばかりの雨ふり、明日見る梢のためにはよしや、[一八]岸根蛙の声せはしきもゆたかに聞きなして、笹垣の外を覗けば、女はさかり三十一二の美形、額際より自然とうるはしき黒髪なるを、いつすき櫛のわかち

ばたで女を釣り上げようが、誰もとがめない。およそ物の道理のわからない若衆にしても、そのくらいの出入りはわかりそうなものだ」と言ったので、人々は笑いだしたが、何しろ浮気な大座敷の事、まもなく騒ぎも静まり、汗でも流そうと、がやがやとその家の風呂にはいった。

春の日も暮れ方になって、板葺きの屋根に音なく小雨が降り始めた。明日は梢の蕾も開くことだろうと、岸辺の蛙のせわしい鳴き声ものどかに聞きなされた。笹垣の外を眺めると、三十一、二歳の女盛りの美人がいた。額際から自然と美しく生え揃った黒髪なのに、いつ櫛の歯を入れたともわからず、油っ気のない髪先を無造作に折り曲げて、古暦を引っ裂いた紙で、ちょっと結んでいる。薄樺染めの小袖には、山尽しの模様が描いてあったが、その絵もかすかになるまで着古し、肩先の吉野山の所は破れて、浅黄色の木綿切れを当て、裾の末の松山の所には、横縞の継ぎがしてある。小倉木綿の男帯に細目布の端継ぎをしたものを、左の脇腹で結び、緋縮緬の腰巻の色は変っているが、さすがに昔の色香が残っていて、どういう人のなれの果てであろうかと、心を引かれるのであった。その女は、紙子の広袖を着せた三、四歳の男の子を連

一 男色で身を立てている者は女と親しくするべからず、という衆道の心意気。
二 大振袖。丸袖は短い袖の外側の下部に丸みをつけた成人用の着物。
三 以下、いずれも茶屋女(私娼)の巣窟。
四 東山区川端通四条下ル宮川町付近。
五 三条大橋と四条大橋の間、縄手通から祇園寄りの地。
六 八坂神社西門付近の旧町名。
七 清水坂下。
八 賀茂川を隔てて木屋町通に面した町で、素人めかした私娼(白人)がいた。『傾城仕送大臣』(元禄十六年刊)に、白人は土手町より起こる、とある。
九 自宅(親方の家)。
一〇 それのみか、の略。
一一 あんまり色遊びにふけるものだから。
一二 そのいやしい根性から。
一三 路傍で女を誘惑すること。「せめては銭のいらぬつりものをして、こよひをなぐさみ給へ」(真実伊勢物語一)。
一四 物の道理のわからない若衆。
一五 鍔は鍔目の略。鍔目は「つばめる」(要約するの意)という動詞から転成した名詞の当て字。出入りの知れたこと。
一六 自家の風呂。
一七 板葺きの屋根に音なく小雨が降り。寺社や武家屋敷以外の町家は、当時まだ板葺きであった。

もなく、油のかをり絶えて、はしたなく折り曲げて、古暦の引裂き紙にてつい結び捨て、薄椛染の小袖に〔一九〕山尽しの書紋、そのけしきも幽かになるまで着ふるし、肩先の吉野山をむかしになして〔二〇〕、浅黄の木綿ぎれを当て、裾に〔二一〕末の松山の所には横縞の継をして、〔二二〕小倉の男帯に〔二三〕細目布のはしつぎ左の脇腹にむすびとめ、ひぢりめんの下紐、色はかはれど石流残りて、いかなる人の果てぞと、心をうつさせける。〔二四〕髪置き頃の子に紙子の広袖を着せて、川原におのれ咲きの菜種の花を二もと三もと手折りて、むす子が泣くをすかして、「我が阿爺様の悩み給ひて、とても及ばざる若衆様に命をとられ給ふ。それはあの藤の丸の内に伊の字の紋所を、〔二五〕花紫の大振袖に付けておはしける。〔二六〕朝むらさきといへど、夕になほうつくしさ見よ」とて〔二七〕肩車に乗せて、青葉の立木隠れよりさしあぐれば、かの悴子〔二八〕いたいけしたる手をあはして、「あれは〔二九〕のの様か」と、目もふらず拝みけるこそをかしけれ。各々垣ごしに聞くに堪へかね、杉の組戸を〔三〇〕あけ過ぐれば、この女胸轟かし〔三一〕漂行くを、引きとどめて子細を尋ねけるに、「おそろしや」とば

れていた。川原に自然と生えた菜種の花を二、三本手折って、泣いているその子をすかしながら、「お前の父様は、とても及ばない若衆様を思って、命を取られておしまいになる。そのお方は、あの藤の丸の中に伊の字を書いた紋所を、江戸紫の大振袖につけておられるお人です。紫は朝が美しいというけれど、夕方はいっそう美しい。あれをご覧」と言って、子供を肩車に乗せ、立ち木の青葉の陰から差し上げた。子供はかわいらしい手を合わせて、「あれは仏様か」と、わき目もふらず拝んだのはおかしかった。みんなは垣根越しに聞くにたえかねて、杉の格子戸をあけて出て行った。女が驚いて立ち去ろうとするのを引きとめて事情を尋ねたが、「恐ろしゅうございます」と、言葉を濁してさしうつむいた様子をよく見ると、まばゆいほどの美人であった。「どうして恥ずかしがりながら、ここまで忍んで来られたのですか」と、いやおうなしに問い詰められて、女は、つないだ玉のように流れる涙を両袖にうけて、恋の始終を話し始めた。それを聞いて、ずいぶん大胆な連中も泣いてしまったが、それももっともなことであった。
「今となっては、恥ずかしがってもしかたがありません。お尋ねくださってうれ

一八「や」は語勢を添え、感動の意を表す間投助詞。
一九 様々な名所の山を墨絵で描いた模様。書絵小袖という。
二〇 破れてしまって。
二一 歌枕。宮城県多賀城市の付近にあったという山。
二二 木綿糸を合わせて博多織のように織った幅の狭い帯地。九州小倉の産。
二三 織目の荒い麻布。
二四 小児が三、四歳の頃、初めて頭髪をたくわえる祝儀。当時は多く十一月十五日をもって式日とした。
二五 江戸紫に同じ。青紫色。江戸でもっぱら行われた。
二六 朝は浅の掛詞であろう。浅紫は薄い紫色。「春はあけぼの、やうやうしろくなりゆく山際、すこしあかりて紫だちたる雲のほそくたなびきたる」(枕草子一段)。
二七「かたぐるま」に同じ。
二八「いたいけす」は、かわいいさまをする、の意。かわいらしい様子の。
二九「のの」は日・月・神・仏をさしていう小児語。祈むの転という。
三〇 あけて出て行くと。
三一『遊仙窟』の字訓。

かり云ひ消してさしうつむきし風情、気を付けてみるに、瞬き程の佩人[一]なり。「いかにして恥ぢかはし[二]、これまで忍びよられしぞ」と、いやといはせず問ひつめられ、玉つなぎたる涙を諸袖に伝はせ、恋の始めを語り出るより、随分大胆なる者ども惣泣き、これぞ至極[三]なりける。

「今は恥ぢぬべき事にも非ず。問はせ給ふこそ嬉しけれ。我がつれあひは、都にしれての衆の道に溺れ、世にある時は難[四]波津や梅に松本才三郎[五]に相馴れ、むさしの月をもそねむ花[六]井才三郎に戯れ、この河原にて村山久米之介[七]に気を失ひ、牛[八]房庄左衛門方に夢に暮れて現に明かし、過ぎにし紙漉町[九]の躍りの場の喧嘩にても、この君にあやふき命を惜しまず男を達てられしに、さりとは世程さだめがたきはなし。今は室町[一〇]の本宅に住み兼ね、あるに甲斐なき北野の末、二十五日[一一]ならでは人の面影を見ざりし片陰に引き込み、うき事ばかり聞き明かす。卯木[一二]の耳搔を細工して一日を暮らす片手にも、若恋を忘れもやらず、いつの頃よりうか〳〵とその事をいはずして打ち悩み、今日を限りと枕の哀れなる声にて、『見ずに果て

しゅうございます。私の亭主は京都で知られた衆道好きでございました。全盛の時分には、大坂の梅の花のような松本才三郎に馴染み、江戸の月よりも美しい花井才三郎をかわいがり、この四条河原では村山久米之介に打ち込んで、抱え主の牛房庄左衛門方で、夢のように暮しておりました。以前、紙漉町の踊りの場の喧嘩の際も、久米之介殿のために危うい命を惜しまず、男を立てられたほどでございます。それにしても世の中はわからないものでございます。今では室町の本宅におられなくなり、生き甲斐もなく北野の場末に引っ込み、毎月二十五日のほかは、めったに人顔を見ることもありません。つらいことばかり聞きながら、卯木の耳搔きの細工を賃仕事にして、その日暮しの身の上になっても、衆道のことは忘れません。いつの頃からか、うかうかと、それと言わずに悩んでいましたが、いよいよ今日が最期だという時になりまして、寝ながら哀れな声で、『逢わないで死んでしまうのか、伊藤小太夫様を』と、男泣きに泣きだしました。女の身にとっては悲しく、暮しも貧しいので、ひとしおかわいそうになりまして、せめては太夫殿に申し上げて、書き捨ての反故なりといただき、快く最期を迎えさせた

一 「あだ人」は、浮気な人の意であるから、「あで人」(あでやかな人)とあるべきところ。佩は地名か姓に用いられているのみで意味はない。よるところは、『近代艶隠者』巻一の一、巻三の二などに使用の「風人」(詩人)の訓読であろう。
二 どうして、恥じらいながら。
三 もっとも千万なことであった。
四 松の序詞。「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花」(謡曲・難波)。
五 万治・寛文期の大坂役者であろうが未詳。
六 →役者一覧。
七 →役者一覧。
八 前項の村山久米之介の抱え主(野郎虫)。
九 明暦二年(一六五六)の春、京都坂田定右衛門座で、女方の橋本金作が桟敷で客と口論して騒動となり、これによって京都芝居は残らず一時停止となった事件(文斎日記、芸鑑)をいうものと思われる。紙漉町という町名は現存しないし、文献にも見当らない。しかし巻七の一に、「大仏の辺り紙漉町」とある。京都で大仏といえば、東山区の方広寺、俗称大仏殿である。
一〇 京都の室町には呉服屋や呉服所などの富商が多かった。
一一 二月二十五日は京都北野天神の梅花祭。また毎月二十五日は、北野にかぎらず天神の縁日。
一二 ユキノシタ科の落葉低木。材が

堅く、木釘や細工物の材料。「小刀細工ききければ卯木の耳搔、鼠の作り物仕出して」（永代蔵五の四）。

一三 定紋つきの緋無垢。無垢は表裏とも同じ色、同じ布地で仕立てた着物。

一四 快方に向かった時。元気になった時。

一五 私だけがあとに残って。

ぬべし、伊藤小太夫様を』と男泣き、女の身にしてかなしく、世もまづしければ一入いたましく、せめては太夫殿に通じて、書捨ての物なりとも申し請けて、最後を心よくいたさせ参らせたし」と、あらましに語り絶えて、涙より外はなし。

　情をしる人々、しばらく女の心ざしを感じて、太夫には知らせずして、肌になれたる[一三]定紋の緋無垢を遣はし、「これを見せ給ひて後、その人[一四]験気をえし時、思ひを晴らさせ申すべし」といへば、この女なほ涙に沈み、「さても有難し。はやくこの事を聞かせ」と立ち帰りし跡にて、伊藤に語りければ、「それは何方へか、その女は」と、取りあへず道の程二三町もしたひしが、行方の知れざる事を嘆き、「我故命のせまるとなり。その人に逢ひましてその思ひを」と、狂乱のごとくなりぬ。やうやうその日も明の日に、人顔の薄くこく見えし時、きのふの小袖を帰して、「墓なやその人は曙に煙となしける。この着物を見つる、嬉しや、相見る心ちこれまでと、身をふるはし詞も終り、[一五]我ばかり悲しき」と泣くに、その座に心玉のある人はなかりき。細かに尋ねて跡をも弔ひて、な

いと存じまして」と、あらましを語り終って、後は涙にむせぶのであった。

　情けを知る人々は、しばらく女の心がけに感心していたが、太夫にはそれと知らせずに、太夫が着なれた定紋つきの緋無垢の下着を女にやって、「これをご亭主に見せなすって、お元気になられてから、思いをかなえてさしあげましょう」と言うと、女はなおまた涙に沈んで、「ほんとうにありがとうございます。早くこの事を知らせとうございます」と言って帰って行った。その後で、伊藤に話すと、「それはどこへ行きました、その女は」と、とりあえず二、三町も追いかけて行ったが、行方が知れないので小太夫は嘆いて、「私ゆえに命が危ないそうです。その人にお逢いして、思いを晴らさせてあげたい」と、気がおかしくなったように取り乱した。ようやくその日も暮れてあくる日、人顔がぼんやり見える日暮れ時に、女は昨日の下着を返しに来た。「夫はこの明け方に弔いました。この着物を見まして、太夫とお目にかかったような気がしてうれしい、もう思い残す事はないと身を震わし、言葉もとだえてしまいました。私だけがあとに残り、悲しくてなりません」と泣いたので、その場に居合わせた人々は、気も魂も消し飛ん

どと思ふ所へ、男女余多懸け付け、とかくの事をもいはず、かの女房を乗物に取乗せ、「これは由なし、親御様の御外聞」、月夜に挑灯昼とも弁へず、どつさくさして帰りける。

姿は連理の小桜

天笠の荷葉、大唐の牡丹、和朝の小桜、これを花の随一と定め、詩歌遊興の基なり。されば、諸木物いはずして、しかも手なく歩まず、吉野の嵐、初瀬の雨、春の名残に人を驚かし、かへつて無常のはじめとなるのみ。あかず詠めは姿の花、若道のさかり千本の中にあらはれ、千之助が芸振り、さながら女に女のまばゆく、しら〳〵と顔見とむる人もあらぬ程にして、近代の稀者、口も動かさずして言葉のあやきれて、聞くに情含み、いやといはれぬ笑ひ、諸見物たばこの吸殻に袖の煙を知らざるは、放火の笑ひ后をなぞらへてなほ思はれける。不断の身持殊更にかためて、勤めの外夜の道筋を踏まず、朝に寝顔を同じ内なる末々にかりにも見せたる事なく、逢は

でしまった。詳しく事情を聞いて、亡き跡を弔いたいものだと人々が思うところへ、大勢の男女が駆けつけ、何も言わずに、その女房を駕籠に乗せ、「こんな事をなすって、親御様のご外聞にかかわります」と言いつつ、まだ明るいのに提灯をとぼして、どやどやと引き上げて行った。

姿は連理の小桜

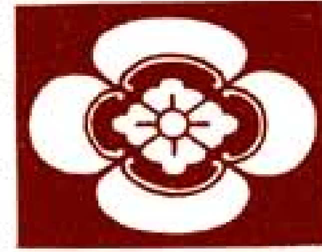
インドの蓮花、中国の牡丹、日本の小桜は、それぞれの国で花の随一と定められて、詩歌や遊興の基になっている。だが草木はものを言わないし、しかも手もなく足もないから、嵐に吉野の桜が散り、雨に初瀬の花が散って、春も終りかと人を驚かし、かえって人の世の無常を知らせている。それにくらべると、若衆盛りの姿の花々は、見飽きることがなく、中でも小桜千之助の美貌はひときわ目立ち、その芸風はまるで女のようで、女はまばゆくて、まじまじとその顔を見つめるものはないほどであった。近頃稀に見る役者で、口も動かさずに歯切れよくせりふを言い、しかも情のこもった声で、うっとりするような微笑をたたえている。見物の人々は見とれてしまって、煙草の吸

一 不必要なぜいたく・見栄のたとえ。「月夜に挑灯を昼ともさせ」(五人女一の一)。 二 どやどやと。どさくさ。

❖貞享当時の京都の若女方小桜千之助の舞台を作者が見物中、二十四、五歳の頬かぶりした男が付け文した。その夜千之助はその男をわが家へ迎えて情けをかけたので、感激した男は脇差で腕を傷つけて心中を示したという情話。

三 一つの木の枝が他の木の枝と相連なって、木理の相通じていること。愛情の深さをたとえる語。 四 小桜千之助→役者一覧。 五 インドの蓮、中国の牡丹、日本の桜(小桜千之助)は、それぞれの国で代表的な名花。 六 奈良県桜井市の初瀬山。桜の名所で歌枕。長谷寺がある。 七 女にそっくりなので、女はまばゆくて。 八 まじまじと。平気で。 九 歯切れがよくて。 一〇 周の幽王の寵后褒姒。王が褒姒の笑を得ようとして、しばしば諸侯を集める烽火をあげさせた結果、申侯が犬戎とともに周を攻めた時、烽火をあげたが諸侯が集まらず、王は遂に殺されたという。 一一 浮気をするための夜歩き。 一二 大坂四天王寺の別称。 一三 愛染は愛欲染執の意。染物業者と水商売の男女が信仰した。四天王寺西門の北西にある勝曼院に本尊としてまつられてる。 一四 寺社に奉納する役者の定紋つきの提灯。 一五 和光の陰と陰間子の掛詞。提灯—和光。和光は

知徳の光をやわらげ隠して、それと現さぬこと。陰間子は、まだ舞台をふまない修業中の少年俳優。一六 桐の臺。七九の桐、五七の桐、五三の桐など桐紋の総称。一七 →役者一覧。一八 紋所の名。木瓜は帽額の当て字。御簾の帽額(上方にひきまわす布)に多く木瓜の紋様が織り出



木瓜

してあるのでいう。木瓜、丸に木瓜、四方木瓜、木瓜菱など種類が多い。一九 →役者一覧。二〇 柏の葉を重ね



重ね柏に巴

た形の定紋。二一 →役者一覧。二二 絵馬の絵の余白に書く決まり文句「奉掛御宝前」。二三 寺社の本堂(殿)の奥にあって本尊(神体)を安置する所。二四 四三〇ページ注一の「しかじ」と同じ用法。たしかにそうだ、の意。二五 自分にとって都合のよいことはいっさいやめにして。二六 作者が参詣して。二七 正月興行と替った、二月興行の初日。二八 →役者一覧。二九 初芝居(正月興行)に演ずる狂言。三〇 →役者一覧。

ねばしれぬやさしき事おほかりき。いづれの人にも愛敬そなはりてありける。

　これぞよしや難波の大寺にたたせ給ふ愛染明王、役者おろかならず祈りて、紋挑灯に和光の陰間子はしらず、桐の頭松本小太夫、二つ木瓜袖岡今政之助、重ね柏に巴鈴木平七、これに心を掛け奉る御宝前、はらひ清める法師の内陣をあらためけるに、一つの願状籠め置きぬ。しかじ、世に鼠程うるさき物はなし。封じこめしをおのが心まま食ひ裂きしに、その筆跡をみれば、願主小桜千之助として、「自ら存ずる子細あるによつて、五年、我ながらならぬ事のみ、大願成就の内、かたくこの身を清め畢んぬ」。所々きれ〲読みて、各々かいやり捨てける折節、参詣してこれを聞きしに、まことある心からにやと、いと殊勝に思はれける。

　しかもその日は二月朔日、それよりこの若衆にうつり気になりて、すぐに荒木与次兵衛が芝居見物せしに、今日より初狂言のかはり三番つづきの口上に、松本文左衛門罷り出、書付けをもつて外題を読んで後、役人付けためらはず、「さて

殻で袖が焦げるのも気がつかない。のろしの火を笑った褒姒になぞらえて、いよいよその美しさを思い知るのであった。千之助はふだんの身持をことさらに引き締め、勤めのほかは夜歩きをせず、朝は同じ家の下々の者に、仮にも寝顔を見せたことがない。逢わなければわからない、優しいところが多かった。どんな人にも天性の愛敬をふりまくのであった。

　これこそ、役者たちが四天王寺の愛染明王を信仰して、愛敬の備わるように祈るご利益である。そのご神前には、修行中の陰間子はともかく、桐の臺の定紋は松本小太夫、二つ木瓜は袖岡今政之助、重ね柏に巴は鈴木平七と、それぞれ定紋つきの提灯を奉納していた。そのご神前を清掃する役の坊主どもが、内陣を調べてみると、一通の願状が籠めてあった。全く世の中で鼠ほどうるさいものはない。封をしてあるのを、さんざんに食い破っている。その筆跡を見ると、願主小桜千之助とあって、「私は思う事があるので、五年間、自分に都合のよい事はいっさいやめて、大願成就までは、かたくこの身を清める事にした」と書いてある。所々切れているので、坊主どもは拾い読みして、捨ててしまった。作者はその時参詣して、この事を聞き、千之助は誠実な人

も申したり」と讃めける詞の下より、色香のふかき桜は顔にあらはるる若女方、幕切つて見えそむるより、「いよう〳〵、千さま、千之助様、万人の中にも又とござるまい。今の世の人殺しめ、生きながら墓へやらるるは」と、舞台裏までひびきわたり、諸人の声やう〳〵囃方片扇[一]をあげて静めければ、仕出し[二]舞台なかば近く、鳥足[三]の高木履、その身は紙子[四]にさま〴〵の切り接ぎ憎からぬ模様、「この子なればこそ着もすれ、末々の女方の着て似合ふまじき」と、はや西二軒目の桟敷より物馴れ[五]ども沙汰し侍る。首に懸けたる扣き鐘の音まで

一 半びらきの扇。
二 新趣向の舞台。本舞台の前方に取り付けた付け舞台。↓挿絵。
三 下駄の台の下に長い鉄の棒を付け、その先を鳥の足のようにしたもので、修験者などが用いた。↓挿絵。
四 様々な変り模様の紙で継ぎはぎした紙子。
五 通な連中。



文を結びつけているが、頬被りの男が本文中で千之助に心中立てをした人物。舞台には、千之助の後にたたき鐘を打つ者二人、後見役の役者二人、手前の客席には、男女の観客が変化をつけて描かれる。

柄なのだろうと、すっかり感心してしまった。

しかもその日は二月一日で、二月興行の初日だったので、この若衆に心をひかれて、それからすぐに荒木与次兵衛座へ芝居見物に出かけた。今日から初狂言の替り三番続きの口上に、松本文左衛門が登場して、書付けを見て外題を述べてから、役者の役割をすらすらと読み上げた。「さてさて、見事な口上だ」と、見物人がほめていると、深い色香の顔にあらわれた若女方が、幕を押し分けて舞台に姿を見せた。「いよう、いよう、千様、千之助様、万人の中にも二人とござるまい。今の世の人殺しめ、生きたままで墓場へやられるわい」というほめ声が、舞台裏まで響き渡った。その見物の騒ぎを、囃方が半開きの扇を上げてしずめると、新趣向の付け舞台の真中近くに、千之助は鳥足の高下駄をはき、いろいろな紙を切り継ぎにしたおもしろい模様の紙子を着て進み出た。「この子なればこそ着こなせるんだ。下っぱの女方が着たら、とても似合うまい」と、早くも西側二軒目の桟敷で、通な連中が噂をした。首にかけたたたき鐘の音までもしおらしく、正面に少し笑顔を見せて見物をしずめ、美しい口元から色気のある声でせりふを述べ

もしをらしく、正面に少し笑みて、一しづめ色ふくませて、うるはしき口もとよりして台詞、ここが聞き所ぢや、だまれ。

〇只今此処元をすすめて通る自らは、好色中興の世捨て者、夫婦妹背の修行者なり。されば足柄[六]・箱根・玉津島[七]・貴布禰[八]や三輪[九]の明神は、夫婦男女のかたらひを守らせ給ふ御神なるゆゑ、我心中に大願あつて、隔夜[一〇]に通夜をいたす。その心ざしは我が身にふかいおもはく[一一]がござりましたれども、月には雲のさはりとかや、かなはねばこそ[一二]うき世の中、あきもあかれぬ中なれども、引きわかれせし悲しさは、命も絶ゆるばか



大坂堀江の荒木与次兵衛座の初狂言の舞台に登場した小桜千之助。修験者の用いる鳥足の高足駄をはき、たたき鐘をさげ、右手に撞木、左手に木の枝を持って長台詞をいう。二人の男が、その木の枝に恋

始めた。ここが聞き所だ、黙れ。

「ただいまここを勧進して通ります私は、好色中興の世捨者、男女の仲を取り持つ修行者でございます。されば足柄・箱根・玉津島・貴船や三輪の明神は、夫婦男女の仲を守らせ給う御神でございますゆえ、心中に大願のある私は、一晩おきに通夜をいたしております。かように思い立ちましたのは、私に深く愛し合った恋人があったからでございますが、月には雲の障りと申しますように、思うにまかせぬからこそ憂き世、飽きも飽かれもしない仲を引き裂かれた悲しさは、命も絶えるほどでございました。たしかに私は前世の報いで、かような憂き目にあいましたけれども、せめては世の中の恋人たちの守りになろうと、身命を投げ捨てて、この五社の大明神を祈りました。すると神々も納受ましまして、あらたかなお告げを蒙り、この連理の枝をさずかりました。『多くの恋をすすめ、千人に達したら供養せよ。その縁を結んだ者は、男女にかかわらず、器量がよくて品がよく、姿もよくて心がけはなおよく、一生言い争う事もなく、この世も後の世も、またその後の後の世も守ってつかわそう』とのご託宣でございます。皆様がお心の中で、よい奥様や旦那様をもちたい

六 神奈川県南足柄市矢倉岳に鎮座の足柄明神。室町時代までは足柄峠に鎮座。
七 和歌山市和歌浦の玉津島神社。
八 京都市左京区鞍馬貴船町にある貴船神社。
九 奈良県桜井市三輪山の大神神社。
一〇 神仏に一夜おきに参籠する修行を隔夜といい、その修行者を隔夜道心という。
一一 恋人。
一二 「思ふ事かなはねばこそ、うき世なれ」(浮世物語一の一、謡曲・安宅)。

一 あらたかなる。霊験いちじるしい。

二 言い争い。口論。

三 おかか様の略。おかみさん。

四 普通は殿御と書く。

五 都の富士などと同様に、富士山の形を模した大編笠。→五〇一ページ挿絵。

六 綿帽子の別名。女子の頭装用。

七 書状を礼紙(上包みの紙)で包み、礼紙の上下の余った部分を筋違いに左右へ折ってから、またそれを裏の方へ折る書状形式の一。

りでござりました。しかじ、我が身こそ前世の宿業によつてかやうのうき目にあひまするとも、せめては世に恋ある人のまもりともならなんと、身命をなげうつて、世々の恋ある人のためにこの五社大明神を祈りしに、神も納受ましまして、[一]あらたなる告げを蒙りて、この連理の枝を授かり、「余多の恋をすすめ、千人に及ばば供養をとげよ、その縁をむすびとめたる者は、男女子によらず、見目よく品よく形よく、しかも心中はなほよく、一生[二]口舌事なく、この世も後の世も、又その後の後の世も、御まもりなされう」との御託宣でござる。皆様心中によい[三]おかさまや[四]殿子をもちたいと思はしやれまするならば、この連理の枝にむすび付けさしやりませい。いかやうな恋でもかなはぬといふ事はござりませぬ。

さても／＼長事をさはりなく申ししまへば、浮気男ども思ひ／＼にむすび付けし中に、年の頃二十四五と打ち見えたる人、[五]富士おろしと云ふ大編笠をぬげば、紫の[六]手細にて頰かぶりして顔は見せざりき。何とはしらず、「思ひこの内にあり」と書きたる[七]立文一通しとやかにむすび付け、姿を見こみし有

とお思いでございましたら、この連理の枝に手紙を結びつけなされませい。どんな恋でも、かなわぬという事がございませぬ」。

長いせりふをすらすらと言い終えると、浮気男どもが、それぞれに手紙を結びつけた。その中にいた年のころ二十四、五歳と見える男が、富士おろしという大編笠を脱ぐと、紫の綿帽子で頰かぶりして顔を隠していた。何が書いてあるのか、「思いこの内にあり」と書いた封書一通をしとやかに結びつけて、千之助の姿をじっと見つめた様子は、並みの男と違って深く思い込んでいるようであった。千之助が楽屋に引っ込むと、人々が集まって枝に結んだ手紙を見ると、おおかた、「惚れました。命々」などと書いてあるだけで、格別の事もない。ところが例の封書をあけて見ると、とても笑い捨てられない、行成流の筆を走らせた、つぎの文章であった。

「色即是空と申しますが、初めて夫婦の交りをなさったという伊弉諾・伊弉冉尊の御事などは申すまでもない。すべてわが国の姿は、無心の草木までも色香をたたえている。折も折、二月一日の今日の日の光もまたしかりである。しかし、この色香を心に含んでいる若衆はめった

様、つねの人とは思ひ入れもふかかかり。千之助楽屋に入れば、おの〳〵立ちかかりむすびし文を見るに、大方、「ほれました、命々」などと書きて別の事なし。件の文をあけそむるより、さりとはわらはれず、行成流に筆をうごかせ、先づはその文がら。

「色はすなはちこれ空、空はすなはちこれ色、いざなぎ・いざなみの御事なんなほ言ふにたらず。都て和国の姿、心なき草木も色なる顔ばせ、時しもあれ、今の月今の日めぐみ又しかり。この心をふくむ人わくらばなり。心にあらねばもろわざうつる事かたし。諸人の目をよろこばしめんたはれのみ、と見ん人もあらんなれど、賤はさと見ず。おのづから色を心に染めて、連理の小桜、外にさかりを顕はし給ふぞや。されば、高きいやしきに隔なきその修行の道なれば、など願ひて叶はぬ事のあらん。ただ一筋にねがひけるを、生如来の捨ておかんせぬめりと、人の山崩れて笑ふべらなればと、君ゆゑの恥はなんのいの。つたなき口していふがくだ、実の色を顕はして、羽なきを連理にやどらせ、比翼の思ひをなさせて下

にない。心に色香がなければ、どんな演技も、人の心を動かすことはできない。諸人の目を喜ばせるための戯れにすぎない、と見る人もあるであろうが、自分はそうと思わない。連理の枝をもつ小桜殿は、自然と色香を心に含んで、外に盛りの色をあらわしなさるのだと思う。さて色道は、貴賤の隔てのない修行の道であるから、どうして願ってかなわないことがあろう。ただ一筋に願っているのだから、生き仏様もお見捨てにはならないであろうと、人々が笑いくずれても、君ゆえの恥はなんでもない。つたない口で言うだけわずらわしい。真実の色をあらわして、羽のない鳥を連理の枝に宿らせ、比翼の思いをさせてくださるならば、永久にご恩に着ます。さもなくば、いついつまでも恨みは尽きないでしょう。今月の十日に、この所にこの姿で、このご返事をいただきたく存じますから、必ず、必ず、必ず」。

　集まった人々がこれを読んで、その深い心を哀れに思っていると、北方角の九郎助という男が、自分もまた同じ思いだったので、この手紙を袂に入れると、そこへ千之助がやって来て、「私への恋文を、人手に渡すわけには」と、真顔になって取り返したので、九郎助は残念に思

八「ふかかりき」の省略。
九 平安中期の書家藤原行成がはじめた書道世尊寺流の別名。行成は小野道風・藤原佐理とともに三跡と称せられた。万寿四年(一〇二七)没。五十六歳。
一〇「色即是空、空即是色」(般若心経)。
一一 初めて遘合をなさったという男女神。
一二 日恵み。日の光。
一三 稀である。
一四 もろもろの業。種々の演技。
一五 いやしい自分。
一六 捨ておかれぬであろう。「めり」は推定の助動詞で、「と思われる」の意。
一七「べらなり」は平安朝前期の用語。「のようだ」の意。ナリ活用の助動詞。
一八 何でもない。言うにたらず。
一九「くだ」は「くだくだし」の略。言うだけわずらわしい。
二〇 比翼の鳥の略。雌雄一体で一目一翼という想像の鳥。愛情の深いことのたとえ。比翼連理。

一 仏説に、人は七たび生れ変るという。七生と同じ。
二 北の方角を向いている、との意。閻魔王庁や罪人は冥界で北面しているというので、陰気でにがり切った顔つきをいう。北向きとも。
三 自分もまた同じ思いだったので。
四 大阪市東部の高台。
五 寝床で散る桜(千之助)のほうが趣もひとしお。
六 心に残る記念(かた)の品。
七 衆道では古い仕打ちだが。
八 『色道大鏡』巻六、心中部貫肉篇に「貫肉とは肘にても股にても刃の先にかけて肉むらを突き貫く事也。是衆道において奴などのすべきはたらきなれば…」とある。
九 歌舞伎若衆の抱え主であろう。
一〇 役者の草履取り。→四五八ページ注一。
一一 「惜しまぬ人はなかりき」の略。
❖延宝三年(一六七五)に十九歳で死んだ江戸の若女方滝井山三郎の舞台をけなしたあぶれ者を、芝居が果てて後、途中で待ち受けて討ち果たした浪人と、山三郎は衆道の契りを結んだが、浪人が郷里の老母危篤の知らせで帰

され候はば、七世[一]までの厚情、さなくは七生の恨みつき申すまじく候。この月の十日に、この所にこの姿して、この御返事をうけとり申すべく候まま、かならず〳〵〳〵や」。

人々よりて読みけるを、あはれに心ふかく思はれし折節、北方角[二]の九郎助といふ人、我もまたありて[三]、この文袂に入れしに、千之助立ちかかり、「我を恋ひての文、化には」と、真顔になりて取りかへしけるは本意なく、せめては、と硯はやめて書きうつし帰りぬ。その後千之助は、この男のありかを尋ねければ、上町[四]の笹篦屋を宿として、備前より分ありて身を隠せし人、むかしはいやしからず。子細聞くまでもなくひそかに我が方に乞ひ請けて、春の夜の闇はうれしからじ、昼見る桜よりは寝道具[五]の散り桜、数々わけのよき事させて、「明方の烏め、憎し」と云ふ時、千之助おくり出て、「これにかぎらず、又も」と、心をのこしける物[六]を手にわたしぬ。かの男うれしさのままに、「この道にふるけれども、せめては」[七]と、脇指ぬきもあへず腕二つ三つ引き捨て[八]、時ならぬもみぢを見せて立ち帰りける。それより尋ねしにさだめがたくなり

って、せめてはと、筆を早めてそれを書き写して帰った。その後千之助が、男の在所を尋ねると、上町の笹篦屋に泊まっているとわかった。備前岡山から事情があって出て来て、身を隠している人で、以前はかなりの身分の侍であった。千之助は事情を聞くまでもなく、こっそりとわが家に招いた。春の夜の闇はうれしくないが、昼間舞台で見る小桜よりは寝床で散る桜のほうがひとしおで、いろいろとうれしい事をさせて後、「明け方の烏めが憎い」と言うその男を、千之助は送って出て、「今日に限らず、また」と、心の残る記念の品を手渡した。その男はうれしさのあまり、「衆道では古い仕打ちだが、せめては」と、脇差を抜くやいなや、腕を二、三度引き切り、時ならぬ紅葉を見せて帰って行った。千之助が後で行方を尋ねたが、わからなくなった。この事を人に話さなかったのは、まことに深い情け知りである。

ある時、田中屋治右衛門方で、九郎助も来合わせて、夕方から酒を飲み始めた。そこへ、千之助の草履取りの駕籠の作という男がやって来たのを幸いに、酔わせたうえで、「いつかの恋文の始末は」と尋ねると、一部始終を話した。聞いた人は驚いて、全く若衆心の深い人だ、これ

ぬ。この事人にかたらず、ふかき情しりなり。
　ある時田中屋治右方にて、九郎助まじりに宵より酒事つのりしに、小桜が金剛、駕籠の作といへる男、来るを幸ひに酔はせての上にて、「いつぞやの文の終りは」とたづねしに、はじめを残さずかたりぬ。聞く人これはとおどろき、さても若衆の根ざしふかく、これぞ恋の山桜今はさかり、散るををしまぬ人は。

言葉とがめ耳にかかる人様

　紫野の法師は、扇に絵がけるを妄語の誡めひとつ、といへど、紙をはなれて烏飛び、足を十付くれば水辺に躙る蟹あり。宅磨が牛、東坡が竹、雪中の芭蕉は嘘をまことにす。いつはりのなき野郎の花の姿を桜木に彫りて一冊とせしを、居ながら美形を翫ぶ事、重宝にながめくらす。牡丹・芙蓉の色を諍ふ、いづれ愚かならず。これ程うつくしう筆を尽くせし中に、悩みただならぬとはや恋風は、筑波根の嶺より落つ

こそ恋の山桜だと、今の花盛りが散るのを惜しまない人はなかった。

言葉とがめ耳にかかる人様

　紫野大徳寺の一休和尚は、扇に絵を描くのは、嘘をいましめる方便だと言われたけれども、描いた烏が飛び出し、蟹の絵に足を十本かきつけると、水辺に歩み出したという話がある。宅磨が描いた牛や、蘇東坡の描いた竹は真に迫り、王摩詰の雪中の芭蕉などは、嘘を真実にしたものである。嘘偽りのない歌舞伎若衆の花の姿を板木に彫って、一冊にした書物があるが、居ながらにして美少年を賞翫できる便利なものなので、一日中眺めておられる。牡丹と芙蓉が色を争う姿は、みんな悪かろうはずがない。筆をふるって美しく描いてある中に、ことさら美しく恋心をさそわれるのは、滝井山三郎の絵姿であった。まさか自分だけ美しく描くように注文したわけではなかろう。王昭君も、自分の姿絵を描く絵師に賄賂を贈らなかったというではないか。だが、うっかりした事は言えないし、また笑ってもすまされないものだ。
　以前、下鴨の糺の森に遊びに行った帰りに、扇をかざした女を見て心をひかれ、

国したまま、便りが絶えたことを悲しみ、まもなく病死したという、勤めを離れた野郎情話。
一二 言葉とがめ（せりふをとちった役者への罵声）に腹をたてる人の意。
一三 京都紫野大徳寺の一休和尚。一休和尚が住吉の牀菜庵に居住の時、堺甲斐の町の扇屋甚右衛門方をたびたび訪れたが、その貧しさを憐み、白地扇子に烏を描いて与えたので、世人この扇子を賞翫すと『堺鑑』（天和三年序）にある。
一四 仏説にいう十悪の一。嘘言。
一五 蟹は甲殻類十脚目。
一六 宅磨派は日本仏画の一派。平安末期に興り、動的な表現をとり、鎌倉仏画の新様式を達成した当時第一の流派。永延の頃（九八七）に盛名のあった為久を祖とする。
一七 宋代の文人蘇軾。東坡は居士号。その竹画については『万宝全書』四に、「よく意を墨戯にとどむ、墨竹をつくる」とあって、古来有名。
一八 唐の王摩詰の絵は四季に拘泥せず、雪中の芭蕉を描いて真にせまった。「雪のうちの芭蕉の偽れる姿の真を見ればいかならん」（謡曲・芭蕉）。
一九 『垣下徒然草』（寛文十一年江戸板）一巻は、当時の江戸役者二十八人の肖像を収め、中に滝井山三郎の姿絵がある。
二〇 桜木（板木）に彫って。
二一 滝井の序詞。「筑波ねの峰よりおつるみなの川恋ぞつもりて淵となりける」（後撰）。

る滝井山三郎[一]、吾[二]ばかりの色を誂へはせまじ。昭君[三]も黄金不買漢宮皃とこそ。嗟、不言不笑。

それよ、扇をかざせし女を見て恋ひしづみ、糺[四]のもどりに撥音をあやしみ、誰がすむ宿は知らざりし築地の内をみれば、よそにはふらぬ時雨とながめし主の風骸[五]、柳の朶の夕の気色、ねん[六]もない絵などは見おとりて、むかしにあらぬ思ひとなれり。色こそかはれ、なほなりやすさうな恋に思はれぬれど、牢人の身の悲しさは、朝の風夕の雨さへしのぎがたく纔かの借り棚、窓より睨けば今日も思ひの山、胸は富士の煙をこがし、涙は深川の浪に滴る。干がたき袖をしぼり[七]のたばこ入れ仕出し、これを渡世として命をつなぐ舟[八]つきを売りめぐりて、毎日木戸銭出し、「この狂言に滝井山三郎が出まする」と云ふ時に入りて、正面のシテ柱[九]の方に身をよせ、これ一番と詠めし時、童戯[一〇]坂東又次郎が軽口、万能丸五郎兵衛[一一]が答話[一二]、その日は思ひの外仕組違ひて、台詞入りみだれければ、山三郎纔かの所に言葉[一三]のあやきれざりき。南の方の桟敷の下より、「置きをれ[一四]」と云ふ。かの牢人聞きもあへず、「だまれ」と云

三味線の撥音をあやしんで、誰の家ともわからない築地の内をのぞいて見たことがあった。するとわが家にだけ降る時雨だといいたそうな様子で、雨を眺めている女主人がいた。その風情といい、柳の枝の夕景色といい、つまらない姿絵などは及びもつかず、新しい物思いの種となった。男色ではないが、うまくいきそうな恋と思われたのに、浪人の身の悲しさは、その日その日を過ごしかね、今江戸に来て、小さな借家に住みついた。今日も山三郎を思う心は、窓から見える富士の煙のように燃え、涙は袖に余って深川の波にしたたるほどである。暮しのために、皺紙製の煙草入れを工夫して船着場を売り歩き、それで毎日木戸銭を稼ぎだして堺町に出かけ、「この狂言に滝井山三郎が出ます」という時に入場して、その日もシテ柱のあたりに座をしめ、この一番と見物していた。道化方の坂東又次郎の軽口や、万能丸五郎兵衛の当話などがあって芝居が始まったが、その日は思いのほか仕組みが食い違ってせりふが入り乱れ、山三郎はほんの少しせりふをとちった。その時、南の方の桟敷の下から、「やめとけ」と声がかかった。浪人はとたんに、「黙れ」と言う。「いや、黙るものか。山三郎を引っ込ませろ」と言う。

一 →役者一覧。
二 自分だけ美しく描くように注文したわけではなかろう。
三 →四七〇ページ注三〇。
四 京都市左京区下鴨の糺の森。糺の涼みといって、夏は洛中の貴賤が群集した。
五 「ふうがら」という訓に従えば風柄で、容姿・人品の意。漢字に従えば風骸で、風格・風采。ほぼ同意である。
六 案外な。つまらない絵。前文の役者の姿絵をさす。
七 「しぼり」は上下にかかる。加工して皺を作ったしぼ紙で製した煙草入れを発明し。
八 「命ヲハカレバ江ノホトリニ繋ガザル舟ニ似タリ」(和漢朗詠集下)のもじり。
九 当時の舞台の四隅に立つ太柱のうち、向かって左奥の一本。橋懸りに取りつく所の柱。
一〇 →役者一覧。
一一 →役者一覧。
一二 一般に当話と書く。当意即妙の話。
一三 せりふをとちった。
一四 やめとけ。やめろ。

ふ。「いやだまるまい。山三郎引つ込ませ」と云ふ。大事の時邪魔なして、座中これを悪みける。その男は、色黒く髭自慢、[一五]目を世間にひけらかし、仁王団助とや、関東にかくれなきもてあまし者なり。人おそるるに、[一六]かつに乗つてなほいふ事をやまず。芸の中山三郎もすこし赤面して、その男をまなざしにかけぬ。この子一代に、「おけ」といはれしこれがはじめなり。

　程なく果てて見物出しに、浪人かの男を跡より忍びて、浜[一七]町のすこし透きを見合せ、むかふに廻り、「山三郎におけと



滝井山三郎が台詞をしくじった折に「置きをれ」「引つ込ませ」と野次った仁王団助が、芝居の帰りがけ浜町のあたりで、山三郎を慕う石見浜田出身の浪人に肩先から一刀のもとに切り殺された場面。

大事な時に邪魔がはいったので、見物一同は皆これを憎らしく思った。その男は色が黒く、髭自慢で、あたりをにらみ回している、仁王団助とかいう江戸で知られたもてあまし者であった。人々がこわがるので図に乗って、なお言いつのった。山三郎は芝居を続けながらも、少し顔を赤らめて、その男をにらみつけた。この若衆はこれまでに、「やめろ」と言われたことは一遍もなかった。

　まもなく芝居がはねて、見物が外へ出ると、浪人は、その男の跡をこっそりとつけ、浜町で少し人通りのとだえるのを見合わせて、その男の正面に回り、「山三郎にやめろと言った頬骨はここか」と言いさま、一尺九寸の大脇差を抜き打ちに、相手に柄に手もかけさせない早業であった。刃物を恐れる町人や百姓は、荷を付けた馬を引きのけ、浪人を励ましながら退き道をあけてやった。これも縁というものであろう。浪人がそれとも知らずに駆け込んだのは、山三郎の草履取りが住む裏借屋であった。ここはともかくと、草履取りも命がけで浪人をかくまったのは、もっともなことである。夜になってから、山三郎はこっそりとやって来て、「お志がひどくうれしく、お礼のしようもありません」と、身元を調べもせ

一五　あたりをにらみまわし。

一六　勝ちに乗じて。図に乗って。

一七　もと日本橋区(現、中央区)の東端にあって隅田川に臨む。埋立て地で、両国橋から永久橋(現、日本橋蠣殻町付近にあった)に至る間を、俗に浜町と称した。

いふたる頬桁[一]はここか」と、一尺九寸抜き打ちに、柄に手もかけさせず早業、刃物おそるる町人百姓も、荷付け馬を引きのけ、「さても〳〵」と力をそへ、退き道をあけける。これぞ縁なるべし、おもはずも山三郎が金剛[二]の住みける裏棚にかけ込みし。ここはとかくして、命にかけて置きし[三]も至極なり。夜に入りて山三郎忍びて来り、「心ざしの程うれしさ尽くされず」と、あらため[四]もやらず衆道の念比して、その後は末々の頼みに色をふくみ、人しれず申しかはせしに、さりとてはその人はいとほしく、後には勝手勤め[五]もおもしろからず、これに外を忘れける。

人の身程さだめがたきはなし。この牢人、生国石見[六]の浜田の人なりしが、独りの母親こがれて、世のかぎりと知らせて、代筆の文見しより、この事山三郎に語れば、断りに責められ、外の事にあらねば涙に別れて後、又も音信の絶えにし事を嘆き、いつとなく思ひ沈みて、朝にこがれ夕にたへ、面痩せ形かはりて、程なう床につきけるが、うらめしの浮世のならひ、さかれる花の村雨、桂光[七]の雲霧、十九の名残、平[八]

ずに男色の契りを結んだ。その後は先々の事まで約束し、人知れず愛し合った。そうなると浪人がいよいよいとしくなり、後には客勤めもいやになってこの事でほかを忘れてしまった。

　人の身の上ほどはかりがたいものはない。この浪人は石見国浜田の者であったが、一人の母があなたを恋い焦れて、いよいよ命も危ないと、代筆で知らせてきた手紙を見て、山三郎にこれを話すと、もっともな事で、ほかの事とは違うので、しかたなく涙ながらに別れた。その後浪人から便りもなかったので、山三郎はそれを嘆き、いつとなく物思うようになり、朝は焦れ、夕方は耐え、面痩せして姿が変り、まもなく床についてしまった。恨めしいのは浮世の習いで、盛りの花に村雨、月に雲霧のたとえのとおり、十九歳を名残として、平生の美しい顔は病に衰え、眠るようにこの世を去った。死んだ姿は、「美麗暗に変ず落花の風」ともいうべく、見る人はすべて涙の袖をしぼり、聞く者はみな袂を濡らした。釈迦が入滅した時、娑羅双樹は枯死したというが、山三郎の死によって、木挽町には雑草がはびこり、禰宜町は臥す猪の床になるだろうと、人々はひたすらに嘆くのみであった。

一　頬骨の異称。
二　役者の草履取り。→四五八ページ注三。
三　「かくまひ置きしも」と補ってよむ。
四　素姓を調べもしないで。
五　暮しのための客勤め。
六　島根県浜田市は旧藩時代の城下町。元和五年(一六一九)八月に浜田城を築城し、古田重治が初代城主となり、以後、松平・本多の諸氏が藩主になった。知行は五万石余。
七　桂は月の桂で、月の中に生えているという想像の木。すなわち桂光は月光。月に村雲、花に風の意。
八　「平生ノ顔色ハ病中ニ衰ヘ、芳体眠ルガ如シ新死ノ姿」(九想詩・第一・新死想)。
九　「紅顔暗ニ変ジ美麗ヲ失フ」(九想詩・第二・肪脹想)。
一〇　木挽は木挽町。もと京橋区(現、中央区)の劇場街で、森田座があった。鶴林はインドの釈迦入滅の地、跋提河西岸の娑羅林。患とは、釈迦入滅の時、四方の娑羅双樹がことごとく枯れて白色に変じ、群鶴のごとくなったことをいう。
一一　もと日本橋区(現、中央区)の劇場街で、堺町の別名。慶安以来、中村座があった。
❖寛文・延宝期の京都の名女方で、

生の顔色は病中に衰へ、芳体眠るがごとし新死の姿、美麗暗[九]変落花の風、見るもの袖をしぼり、聞くもの袂をうるほさずと云ふ事なし。木挽草[一〇]滋鶴林の患へ、禰宜町[一一]臥す猪の床とならん、と嘆くのみなりしが。

忍びは男女の床違ひ

「上々吉弥白粉かけねなし」[一二]。四条通り高瀬川の橋詰に新見世出し[一三]に、京女一子細[一四]あるは、ここに立ちかさなりもとめて帰りし。「いかなる事や、声なうして美女を呼びける」[一五]と尋ねしに、「これはおやまの元祖大吉弥[一六]が下宿[一七]なるが、相応なる商売せし」といへり。一切の女、紅粉の翠黛はただ白皮[一八]綵りてこそ見よげになりぬ。女方もむかし右近[一九]・左近[二〇]が時は、面影はまぎらはしく[二一]、かしらは置手拭[二二]にして大方に色作りしに、諸見物もそのなりけりに請取り、仕組[二三]も今に見くらべて過ぎにし事をかしかりき。当代諸国の風俗、都の女をまねてやさしくゆたかに、采体[二四]にうまれ付きの恥をかくすを、明暮

忍びは男女の床違い

「上々吉弥白粉かけ値なし」という看板をかけ、京都四条通高瀬川の橋詰めに新店を出したところ、京女でちょっとしゃれた女は、先を争ってその白粉を買って帰るのであった。「どういうわけで、宣伝もしないのに美女を呼び寄せるのであろう」と尋ねると、「そこは女方の元祖で、大吉弥の別宅で、役者にふさわしい商売をしているのだ」と言った。女はすべて紅・白粉をつけたり、眉を描いたりしてこそ、見られるようになるのである。女方も昔の右近源左衛門や村山左近の頃は、顔も男か女かはっきりせず、頭は置き手拭を額にかぶり、いい加減に扮装したものであったが、見物はそれなりに受け取り、歌舞伎の仕組みも簡単なので、今から見ると昔の事はおかしくてならない。今時は各地の女の風俗も、都の女のまねをして、身なりも優しく豊かになり、うまく欠点を隠しているのだが、知っているのは毎日使っている鏡だけである。

吉弥は生れつきの美貌であったのを役者にして、その麗質を金に飽かして磨いたので、自然と太夫の品位が身につき、肌から銀一枚の光がさすようになった。

大吉弥と呼ばれた上村吉弥が、公家方に女方の舞台姿のままという注文で呼ばれて行くと、相手は当主の妹であった。杯が出たところで当主が帰館、見つけられて当主に若衆としてかわいがられたという逸話。

一二 上々吉(最上等)と吉弥白粉の掛詞。下文の大吉弥が出した白粉店の看板。

一三 京都四条木屋町の高瀬川にかかる四条小橋。

一四 しゃれっけのある女。

一五 諺「声なくて人を呼ぶ」。有徳の人は呼びかけずして人が帰服する、の意。

一六 上村吉弥(大吉弥) →役者一覧。

一七 別宅。

一八 「紅粉翠黛白皮ヲ綵ル」(九相詩・序)。

一九 右近源左衛門 →役者一覧。

二〇 村山左近 →役者一覧。

二一 男か女かはっきりせず。

二二 前髪を落として月代頭となった野郎歌舞伎の初期(明暦・万治)は、まだかつらがなかったので、源左衛門は「欝金(鮮黄色)の服紗もの(置手拭)に細き糸を付けて額に被り、其の服紗ものを月代に打掛くるより月代を隠す」(昔々物語)とある。

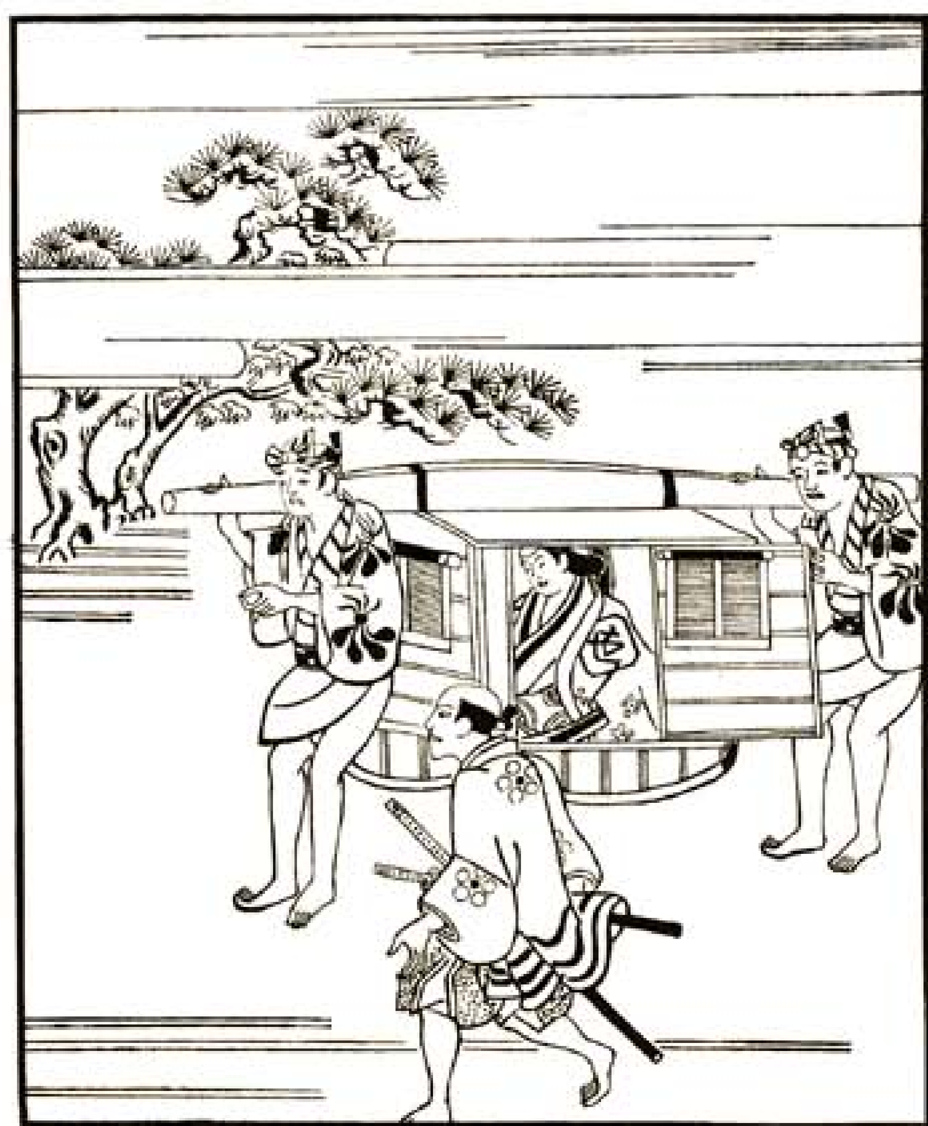
二三 野郎歌舞伎の初期の歌舞伎は、まだ若衆歌舞伎時代の名残をとどめ、歌と舞の所作事か道行舞で、複雑な劇的構成をもつようになったのは、寛文中期以後。

二四 なりふり。身なり。

遣ひなれたる鏡より外に知った人なし。

吉弥はすぐれて美形を、芸子にして金玉を金子にて琢きける程に、おのづから太夫にそなはり、肌より銀一枚[一]の光さして、四条河原の猟もきかず、礒[二]なる色遊びは目緩くて、皆この美少にあひぬ。なほ姿に気をつくし、桜[三]咲く十八日に、祇園町さる方に簾を掛けさせ、まことの都女の風俗をみて、よき事もあらばそれをと思ひしに、心にくきは女駕籠の窓より鹿の子下髪のちらりとすきうつりて、魂飛び入るばかりぞかし。皆々よきにはかぎるまじけれど、悪女とは思はれず、貴

一 太夫子の揚代。四十三匁。
二 安っぽい遊びを「磯ぐるい」という。浅いの洒落。
三 弥生、すなわち三月十八日。



高貴なお方から、舞台姿そのままで参れと招かれ、忍び駕籠に乗せられてどことも知れぬ屋敷におもむく上村吉弥。手前の武士は屋敷へ案内することを命ぜられた人物とみられる。

それで人々は四条河原のいい加減な役者あさりをやめ、安っぽい色遊びはばかばかしくなって、皆この美少年と逢うようになった。吉弥はいよいよ自分の姿に気を配り、桜の咲く三月の十八日に、祇園町のある家の表に簾を掛けさせて、その陰から生粋の京女の風俗を見て、よい所があったら取り入れようと待ちかまえていた。心憎いのは女駕籠で、窓から鹿の子の衣装や下げ髪がちらりと透けて見えて、魂が飛び込みたくなるほどであった。みんな美人とは限るまいが、といって醜女とも思えないので、駕籠に乗れる金持は得ということになる。高価な楊貴妃白粉を使えるということは、ありがたいことで、遠目には色っぽく見せた女が、よく気をつけて見ると、世間のあばた面を一人で引き受けた、全くとりえのないいやな顔であった。ところがその帯を結んだ後ろ姿は、またとあるまいしゃれた色女であった。「どういう女だろう」と吉弥が尋ねると、郊外まで足をのばして小家相手に塩を売る男が、その女を見覚えていて、「あれは東の洞院の浮世紺屋の娘で、姿のお春といわれる評判の女です」と話してくれた。吉弥はその姿をまねて、一丈二尺の大幅帯の両端の絎目の角に、鉛の重りをつけた吉弥結びを始め、

賤の損徳ここにあり。銘々の楊貴妃[四]おしろいありがたし。遠目に色をかづかせ[五]、気を留めて見るに、世間の疱顔[六]を独りしてあづかり、いやというてからすこしもとりえのなき顔なりしに、その後つき、帯結びたる品物[七]、又あるまじき風儀、「いかなる女」と尋ねしに、塩売りの男、これを見おぼえて、「あれは東の洞院[八]の浮世紺屋[九]の娘、姿のお春といへる名とり」とかたりぬ。吉弥これをうつして一丈二尺の大幅帯、くけめの角に鉛のしづをかけ、世に吉弥むすび[一〇]とはじめて今にはやらしぬ。

ある時貴なる[一一]御方より、舞台姿そのままに参れのよし、夜に入りての忍び乗物、勤めの身とて行くに、御門ちかくなりて定紋の挑灯闇になして、厳しき番所見えしに、恋はむかしになりし女[一二]むかひに出、吉弥手をとりて案内して行く。心もとなき事ながら、「この道は首尾さま／＼なり」と、その御方に身をまかせ入るに、番の者寝声にて、「女一人」とこたへて帳に付けおくよし。そこ過ぎて、並木の真砂地百間ばかり行きて、又中門[一三]左の方の蒔石いろ／＼、木の間／＼の釣

今なお世間で流行らせている。

ある時、高貴なお方から、舞台姿そのままで参れという使いが来た。吉弥は勤めの身なのでやむなく、夜になってからこっそりと迎えの駕籠で出かけた。ご門近くなると、定紋付きの提灯を消し、厳しい番所があった。恋などは遠い昔となった老女が迎えに出て、吉弥の手を取って案内した。心配ではあったが、「この道にはいろいろな逢い方があるのだ」と思いながら、そのお方に身をまかせて行くと、番の者が寝ぼけ声で、「女一人」と受け答えして、帳面につけた。そこを通り過ぎて、並木のある砂を敷いた道を百間ほど行くと、また中門があって、左の方に色とりどりの蒔石がしてあり、方々の木の間に釣ってある灯籠の光が映って、玉を敷きつめた浜辺のようであった。引き水の流れに沿うて置かれた庭籠の鳥の中には、夜鳴く鳥もあったので、気をつけて見ると、白鷴は枯木の陰にとまり、梟は梢で身動きし、鸚鵡は口まねもせずじっとしている。

階段を静かに上がると、宮城野をここに移したように、一面に萩を描いた檜の二枚戸をあけて、長廊下を忍び足で行くと、女の笑い声や双六の賽子の音がする。琴の音は物静かに、横笛の音は遠くから

四『人倫訓蒙図彙』白粉師の条に、「おしろいは鉛をむして水飛するなり。やうきひ病にていろ青黒になりしに、仙人来りてをしへしとかや」とある。「一度の大願にやうきひの匂ひ粉をぬりくり」(西鶴織留五の二)。
五 色っぽくみせたが。
六 あばた顔。
七 色っぽい美人。「ぬれもの、しなものといふも同じ詞なり。吉弥といふ女方をほめていひ出したる詞とぞ」(好色伊勢物語〈貞享三年〉)。
八 御所の南に連なる南北の通り。西隣が車屋町通、烏丸通である。→四五九ページ注四。
九 当世風の染物をする紺屋。
一〇「帯のむすびは吉弥むすびとて、唐犬の耳のたれたるごとく、二つむすびの両はしをだらりとさぐるなり」(都風俗鑑〈延宝九年〉)。


吉弥結び
(姿絵百人一首)

一一 貴族。公家。
一二 老女。
一三 公家の寝殿造りで、東西の対屋から釣殿(泉水に臨んで建てた殿舎)に通ずる廊の中ほどにある門。

一 キジ科の飼鳥。きじほどの大きさで背面と尾は白く、顔は赤い。中国南部の産。
二 宮城野（仙台市の東方一帯にあった原）をここに移したように一面に萩を描いた板戸。
三 真木は最上の木の意で、多くは檜の美称。
四 盤双六。二人が双六盤に向かい、二個の賽を筒に入れて振り出し、出た目の数だけ盤にならべた駒石を進め、早く相手の陣にはいったものを勝ちとする。
五 垂蒸。帳。のれん。
六 香木を適当に切り割りする小道具を納めた小箱。
七 女方。
八 局。部屋持ちの女官。
九 ごまかした。まぎらかした。
一〇 正しくは清涼殿に昇殿をゆるされない官人をいうが、一般には宮中に仕える者以外の庶民をいう。

灯籠に影移りて、玉なす浜か、とやり水の流れに添ふ庭籠の諸鳥、夜鳴くもありて気をつけしに、白鷴[一]枯木の陰に宿し、梟 梢に身を動かし、鸚鵡口まねもせず。

　静かに階をあがれば、宮城野[二]をここに真木[三]の二枚戸をあけて、長廊下さし足して行くに、女の笑ひ、双六[四]の音、琴はしめやかに横笛はるかに、うき／＼と心をさだめがたく、灯もなき大書院歩みて、又板敷の椽に出、たれむし[五]の数くぐりて絹ばりの障子引きあけて、紅の房つきし綱うごかせば、玉の鈴音なして、大勢の足音しどけなく、屏風をこかし伽羅箱[六]蹴立て、「どれお山[七]は、吉弥は」と、男めづらしく詠め、俄に乱人のごとし。上気は青ざめて、さても／＼見ぐるし。つぼね[八]らしき人せいして、奥にその御ひとり宮女の御有様、位とられて皆まで言葉につくしがたし。

　金銀のかはらけ出、御うれしげに酒事はじめ給ふに、女のかけ出、「それ御帰り」と、蠟燭吹き消してくろめける[九]。吉弥かくせる方もなく、女あまたにおくり出しを見付け給ひて、「それは」と仰せけるに、「歌舞の女」と申す。「地下[一〇]には稀

聞こえてくるので、気も浮き浮きとして落ち着かない。まっ暗な大広間を歩いて、また板敷きの縁側に出て、たくさんの帳をくぐり、絹張りの障子をあけて、紅の房のついた綱を引くと、玉の鈴がからからと鳴った。すると、どやどやと大勢の足音がして、屏風を倒し、香木箱を蹴とばして、「どれ、女方は、吉弥は」と、男珍しく眺めるありさまは、狂人のようであった。初め上気したのが青ざめたのは、全く見苦しかった。お局らしい人が、女たちを制して、吉弥を奥の間に案内すると、そこに高貴な官女らしい方がおられたので、吉弥は気おされてなんともいいようがなかった。

　金銀の杯が出て、そのお方はうれしそうに酒盛りをお始めになると、突然女が駆け出して来て、「それ、御前様のお帰り」と言って、蠟燭を吹き消してその場をつくろった。だが吉弥を隠す所もなく、女たちが大勢で送って出たのを、御前が見つけられて、「それは何者だ」とおっしゃったので、「歌舞の女でございます」と申し上げると、「地下には稀なるものじゃ」と仰せられて、ご自分のものにしてしまわれた。遠慮なくお戯れなさるのを、いやとも言われず、吉弥は困ってしまったが、やむなく女鬘を取ってお目に

なる物」と、おぬしのものにあそばしける。遠慮なく御たはぶれ、いやはならず、この時の迷惑さ、ぜひに叶はず女かづらをとりて御目に掛けぬれば、「これなほよし」とかはゆがらせ給ひける。おもはぬ方の床のあけぼの、最前の妹君のさぞほいなかるべし。

京へ見せいで残り多いもの

花の咲く山はあらうが、恋の海見せばや、衆道の芸振り[一一]生きてはたらく[一二]鈴木平八、本朝は見めぐりしに、又つづきてい ふべからず。この風俗唐にもあるべきか。されば[一三]蘇子瞻、[一四]赤壁の下に遊んで、薄暮に[一五]置網をあげて魚をとりての楽しみ、[一六]松江の鱸を思ひ合はせてうまうもない酒に明かせしとや。この鈴木を見せて酒相手にせば、又[一七]東方の既に明けなんとするはさておいて、昼を月夜と歌はせたしと思へば、唐にも見せいで残り多いもの。この人、[一八]品形の諸色に勝れ、賢愚貴賤ともに、一度[一九]眸れば[二〇]手の舞ひ足の踏む事を忘れなやませ、なほ

かけると、「このほうがいっそうよろしい」と、かわいがられた。吉弥は思いがけないお方と一夜を明かしたが、最前の妹君は、さぞがっかりなさったことであろう。

京へ見せいで残り多いもの

花の咲く山はたくさんあるだろうが、恋の海も見せたいものだ。歌舞伎若衆としての芸ぶりを、生きた鱸のように見せてくれる鈴木平八は、日本国を見渡しても、これに続く役者はまたといない。これほどの役者は、中国にもありそうに思えない。ところで蘇東坡は、赤壁に友人と遊び、暮れ方には置網を引き上げて魚を捕り、酒の肴にしたというが、名物の松江の鱸と思いくらべて、うまくもない酒で夜を明かしたという。もしこの鈴木平八を見せて、酒の相手にしたら、「東方のすでに明けなんとす」などと言わないで、昼を月夜にしてうたわせたいと思ったことであろう。平八を中国の詩人に見せなかったのは残念である。この平八は品位も姿も、ほかの役者とくらべようもなくすぐれ、賢愚貴賤にかかわらず、一度この人に流し目をされると、手の舞い足の踏む所を覚えずに恋い焦れた。一

❖貞享三年(一六八六)三月に没した大坂の若衆方の随一の鈴木平八の舞台を、同年三月の大和屋で作者が見物中、平八の舞台姿に見とれたあげく気絶した娘を、作者は気付薬を与えて介抱した。娘は三月八日に病死したが、平八はその日から患いだし、まもなく没した。追善の章である。

一一 下文の鈴木を鱸と見立てたレトリック。
一二 →役者一覧。
一三 宋の詩人蘇軾。子瞻は字。唐宋八家の一。
一四 蘇軾が一〇八二年七月十六日の夜、友人と湖北省黄岡県の名勝、赤壁に遊んだ時の作を「赤壁賦」といい、その年十月満月の夜、友人二人と再遊した時の作を「後赤壁賦」という。「客曰ク、今日ノ薄暮、網ヲ挙ゲテ魚ヲ得タリ。巨口細鱗、状松江ノ鱸ニ似タリ。タダイヅクニカ酒ヲ得ル所ゾ」(後赤壁賦)。
一五 待網とも。網を水中に張り、上流から来る魚を捕えるもの。
一六 注一四の詩句。松江は中国江蘇省太湖の支流で、今の黄浦江の一部の称。
一七 「肴核既ニ尽キテ、杯盤狼藉、相トモニ舟中ニ枕藉シテ、東方ノ既ニ白キヲ知ラズ」(赤壁賦)。
一八 品位と姿がともにすぐれ。
一九 眥の語尾を変化させて動詞化した語。ながし目すれば。
二〇 中国の五経の一つ『礼記』楽記篇にある文句。

枕かはせしは、馴[一]れし子持ちが中をもたがはす程のしれもの[二]なり。くどう[三]は人の見聞きて知る通りのごとし。惣じて芸は万[四]にうつる事奇妙なり。武道[五]は名におふ藤代[六]の庄司がゆかりなればしかなり。

さる程に、ことし貞享[七]の春、他力本願記[八]の仕組ことに面白く、人の山崩れて恋の淵を埋み、せめては御手[九]の糸にすがりて来迎の姿を拝み奉り、台詞を梵音金口[一〇]に聞きなしける。この頃日本橋[一一]の駕籠かきども、八つさがり[一二]よりは一人もなかりし。いかにと問へば、大和・河内・和泉の片里よりの見物帰りにぞありける。あるは麦藁筋[一三]の小さき袖をつらね、箔[一四]の帯のひかるを自慢にむすびさげし山賤女[一五]も、堀通ひ[一六]に身をやつし手業を忘れ、少し品[一七]やるとて尻ふり、うはさして往き還る。ちかき里はいふにおよばず、群をなす事、何年已来なしと沙汰しけるは、鈴木独りの色にまどへるなり。都て恋ひ詫び悩みて夕[一八]の露をあやまる者、男女の数、指を折るに暇あらず。殊に三月三日は、鉱[一九]の槌打つ二蔵までも、天王寺・清水[二〇]・汐[二一]干などいひて遊ぶ日なり。ましてその上つ方、一帳羅[二二]を取り

緒に寝たが最後、客に子供まである馴染んだ女房と仲違いさせるほどのしたたか者である。くどく言うまでもない。人々が見聞きしているとおりである。どんな役でもぴったりとはまるのは、不思議なくらいである。ことに武道の役は、武名高き藤代の荘司鈴木三郎と同姓のよしみがあるのだから、うまいのは当然である。

さて今年貞享三年の春、平八が演じた他力本願記の芝居はことにおもしろく、押し寄せた見物人は平八を恋い焦れ、せめては平八が手にしている法の糸にすがりついて、その尊いお姿を拝み、せりふをありがたい仏教の声楽や法語のように聞きなすのであった。その当時、道頓堀日本橋辺の駕籠かきどもは、八つさがりからは一人もいなかった。なぜかと聞くと、大和・河内・和泉の片田舎から見物にやって来た連中の帰りだということであった。あるいは麦藁のような縞の袖の小さい着物を着連ね、金銀の箔を置いた光る帯を自慢そうに結んだ百姓女も、道頓堀通いにうき身をやつし、仕事を忘れてしまい、尻を振ってしなを作り、役者の噂をしながら往来している。近い村はいうまでもなく、遠方からも大勢おしかけて来るのは、ここしばらくなかった事だという噂であった。それも鈴木ひとり

一 子供まである馴染んだ女房との仲。
二 痴者。したたか者。
三 くどく言うまでもない。
四 どんな役柄でもぴったりはまるのは。
五 歌舞伎の役柄の一つで武道方のこと。武道に達した侍の役。
六 紀州藤代(現、和歌山県海南市藤白)に住んでいた鈴木の党(熊野三党の一)の中の庄司重倫の嫡男鈴木三郎重家は、弟の亀井六郎とともに義経に仕え、衣川で討死にして武名をとどめている。その同姓の鈴木平左衛門に武道を仕込まれ、かつまた平八も、狂言『高館』で判官役か鈴木三郎の役を勤めて評判をとった事は、貞享三年(一六八六)刊の歌念仏『新五人女』により知られる。
七 後文に鈴木平八急死の事が見えるから、貞享三年三月。
八 宇治加賀掾の正本「他力本願記」を歌舞伎化したものであろう。貞享三年三月、東本願寺門跡が大坂に下り、開山親鸞上人の法会を執り行った事実にちなみ、親鸞上人伝を上演したのである。劇場は大和屋座。
九 仏法結縁のたよりとなる綱。法の綱、または法の糸という。親鸞に扮した平八が手にしたのであろう。
一〇 梵音は梵唄または声明ともいい、仏教の儀式に用いる古典の声楽。金口は貴い言葉。
一一 道頓堀川筋の橋で、南は立慶町、北は宗右衛門町にかかる。
一二 現在の午後二時過ぎ。

出して思ひ〳〵に立ち出、住吉かこつけて皆この芝居に入り、涎は堀の水かさをまし、鼻毛はい[二三]かのぼりをあげ、狂[二四]言の継煙管を湯になして、首の骨の折るるもしらず、「いよう、平八様」など、口々やかましく讃め立てぬる。男は男ども思ふに所[二五]せく、中に女も女、きのふ髪切り、よい年頃なる一[二六]年たらぬつくもがみさへ、根から剃りおとしたる墨染まで、心の中外にあらはしけるも興さめてをかし。

　あるが中に、東三軒めの桟敷いみじく囲ませ、身[二七]持ちたる者の娘と思しき、あ[二八]げ巻程過ぎ美目すがたうるはしき、我と心に知り初めて恋をば人にならひたき最中、ただし下[二九]地あるもしらぬが、続き狂言のはじめより目[三〇]がれもせず平八を詠め、うれしさうに片頬に笑みふくみたる有様、思ひ入れのふかさうな事、人目なくばはしり出て、といはぬばかりに見えける。

　をかしくも哀れに思ひ居るに、時うつり、そろ〳〵果て口になれば、この女う[三一]れたきおもざしになるは、平八が楽屋入りを名残をしくあらん気色、芸もをはり平八入らんとするに、階[三二]がかりまで念比に見送りけるが、あまりて思ひしづみ、

の色に迷ってのことである。すべて平八を恋煩い、夕べの露と消える男女は数限りもなかった。ことに三月三日の雛の節句は、鍛冶屋の向こう鎚を打つ小僧たちまでも、天王寺や新清水寺に参ったり、潮干狩に出かけたりして遊ぶ日である。まして上流の人々は、それぞれ一帳羅の晴れ着を着込んで出かけ、住吉にかこつけてみなこの芝居にはいり、道頓堀の水嵩がふえるほど涎を流し、凧が上げられるほど鼻毛をのばして狂言に見とれ、継煙管が煮つまるのも覚えずに吸い続け、首の骨が折れそうになるのもかまわないで、「いよう、平八様」などと、口々にやかましく褒めたてていた。男が夢中に見物する、そのたてこんだ中に、女も女で、昨日髪を切ったばかりのよい年の白髪の老婆や、根から剃り落とした墨染姿の尼までが、恋心を顔にあらわしているのは、あさましく滑稽であった。

　その中で、東側の三軒目の桟敷に、腰元どもに取り囲まれた大家の娘らしい女がいた。総角に結った少女期も過ぎて、顔も姿も美しく、色気づいて恋の手ほどきを受けたい最中と見られたが、経験があるのかもしれない。続き狂言の初めから、目もはなさずに平八を見つめ、うれしそうに片頬に笑みをたたえた様子は、

一三　滝縞(縦縞)に類する縞織物を、農婦なのでわざと麦藁筋といったのであろう。
一四　金銀箔を模様に置いた帯。
一五　百姓女。
一六　道頓堀通い。
一七　媚態を示す。
一八　夕べの露と身をあやまる(消える)者。
一九　土(槌)の枕詞。二蔵は職人の通称。
二〇　天王寺の西にある有栖川山新清水寺。
二一　「三月三日…泉州堺の浜、住吉の塩干、無双の壮観なり」(諸国年中行事)。
二二　とっておきの晴れ着。
二三　凧の糸のようにのばし。
二四　狂言に見とれて、と補って読む。
二五　所狭く。たてこんでいる。
二六　「百年に一年たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ」(伊勢物語六十三段)。九十九髪は老女の白髪をいう。九十九は百に一画たりぬ白の字となるゆえという。
二七　身を持ちかためた者。大家の娘。
二八　総角は髪を左右に分け、頭上に巻き上げて両輪を作る少女の髪型。少女期も過ぎて。
二九　経験があるかもしれない女が。
三〇　目離れもせず。目もはなさず。
三一　恨めしそうな。
三二　当時の歌舞伎の舞台下手(左)の楽屋へ通う廊下の部分。能舞台のそれと同じ。後の花道に当る。

一 興行物の終わりに、客の帰りをうながすために打つ太鼓。
二 作者。すなわち西鶴。
三 江戸時代の常備気付薬。安土・桃山時代の名医曲直瀬道三の婿養子玄朔の自製という(雍州府志六)。
四 かえって。いっそ。
五 なまなかな心。中途半端な心。
六 →役者一覧。
七 すでに貞享元年(二年説もある)に、道頓堀戎橋南詰に竹本座の櫓をあげた竹本義太夫は、この年貞享三年(一六八六)二月四日から、近松の新作「出世景清」を上演して名声を揚げつつあった。
八 浄瑠璃太夫であろうが未詳。

そのまま絶え入りける。芝居は[一]追出しの太鼓を敲き立てどや〳〵とするに、つき〴〵の奴僕は「水よ、薬よ」と噪ぐ。この道すきものの[二]我なれば、最前よりとくと目ききはして置く。心根ふびんさに、そのまま医者分になつて、巾着さぐりながら桟敷に飛びあがり、年玉にもらひし[三]延齢丹をのませければ、やう〳〵として息出、乗物に入れて帰りける。所ききたれどここに遠慮す。

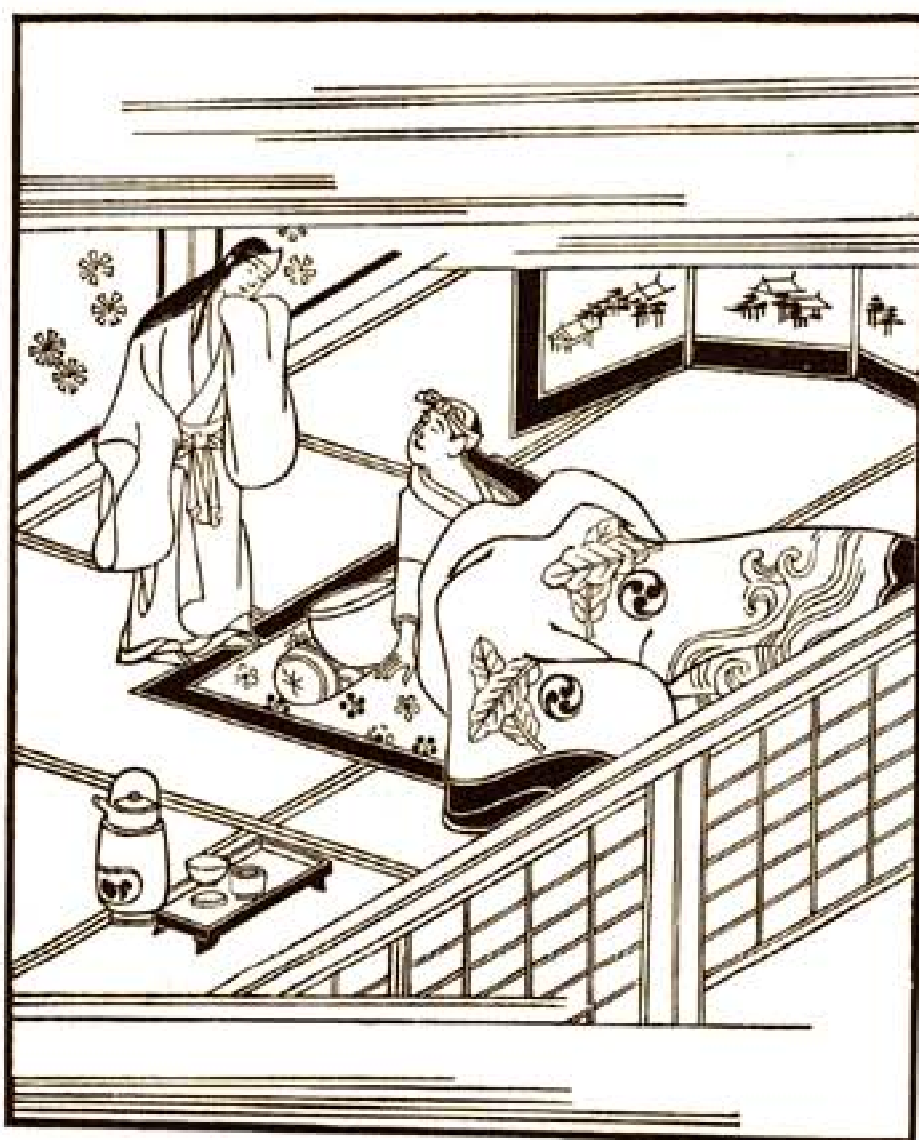
さてもその女は、ひとり娘にて、日頃月花と寵愛せしに、えしれぬ病に起き臥しくるしく、医術尽くせども芝居のあたりたるに療治なく、次第によわり、形も思ひ崩れ目もあてられず。[四]なまなかかう〳〵といひたらば、世間にはかへぬ命なるべき事に、[五]なま心にて独りぐち〳〵と胸にかためてとかず、つひに三月八日に開かぬ花散りて、二親の嘆きかなしむ事かぎりなし。

平八その日は[六]坂田銀右衛門方に遊びて、[七]竹本義太夫・[八]伊織などに一二段かたらせて聞く所とて、静かに暮方より我が宿に帰りぬ。春ながら秋ふく風か、と身にこたへてうちなやみ

深く思い込んだようで、人目がなければ駆け寄って、といわぬばかりに見えた。

おかしくも哀れに思っているうちに、時が過ぎてそろそろ終りに近づくと、その娘は恨めしそうな顔つきになり、平八が楽屋に引っ込むのを、名残惜しく思っている様子であった。芸も終わって平八が引っ込むのを、花道までねんごろに見送ったが、あまり思い詰めたので、そのまま気絶してしまった。小屋では追い出しの太鼓を叩きたて、見物がどやどやと出て行く中で、供の下男が、「水だ、薬だ」と騒いでいる。この道にかけては人後に落ちない作者なので、最前からとくと見届けていた事だし、娘の心が哀れで、さっそく医者代りになって、巾着をさぐりながら桟敷に飛び上がり、お年玉に貰った延齢丹を飲ませると、やっと息を吹き返し、乗物に乗せて帰って行った。娘の住所を聞いたが、ここは遠慮しておく。

ところでその女はひとり娘で、日頃、両親は月よ花よとかわいがっていたのに、わけのわからない病気にかかり、寝起きも苦しくなった。医療の限りを尽したが、芝居にあたった病気は手当の仕様もなく、しだいに弱り、姿もやつれて目も当てられなくなった。いっそ、こうこうだと打ち明けたら、世間体には替えられぬ命な



鉢巻をして病臥する鈴木平八の枕元に現れた死霊の美女。それは平八を慕い、一か月ほど前にその舞台姿を見て失神、その後死去した女。額烏帽子を付けることで亡霊であることを示している。

ける。明くればよわり、暮に身をもだへ、次第に世のかぎりと思ひさだめし枕にちかく問ひよる人の中にも、すぐれて年月の念比忘れず、もろともに命ちらばと、[九]桜山林之助が心ざし深かりき。[一〇]上村吉弥も京より折節下りて浮世の暇乞ひ、衰へたる身、通ひ兼ねたる息づかひ、それも正しく言葉をかさね、盃をかはして別れの涙の外なし。人こそ知らね、執心かけし方には身をまかせし事その数をしらず。[一一]腕突き股切るもかぎりなし。いつの頃か里人指切つて舞台に投げしも、色の首尾残る所なく、不断の心持、天晴役者には惜しき者ぞかし。

のに、なまはんかにひとりくよくよと思い悩み、ついに三月八日に蕾のまま散って、両親は限りなく嘆き悲しんだ。

　平八はその日、坂田銀右衛門方に遊んで、竹本義太夫や伊織などに浄瑠璃を一、二段語らせて、さわりの所を静かに聞き、夕方になってわが家に帰った。途中、春なのに秋かと思われるような冷たい風が身にしみて、悩んだ。それから日ごとに弱って苦しみ、いよいよこの世も終りと覚悟した。見舞いに来る人々の中でも、桜山林之助は、特に年来の昵懇を忘れず、死なばもろともと思い込んでいた。上村吉弥も、ちょうど京都から来合わせて、今生の暇乞いをした。平八はすっかり衰えて、虫の息であったが、それでも正しく挨拶をして杯を取り交わし、涙ながらに別れを告げた。人はあまり知らないが、平八は自分を恋した人には数限りなく身をまかせ、幾たび腕を突いたり股を切ったりしたかわからない。いつの頃であったか、田舎者が指を切って舞台の平八に投げた時も、立派に筋を立てて情けをかけてやった。ふだんの心がけはまことに天晴で、役者には惜しい人物であった。その身一代の情話は少なくない。まだ若かった頃、五人の男の名を書き連ねて、「この中のお方には、いつでも一度はお

九　→役者一覧。
一〇　上村吉弥（二代目）→役者一覧。
一一　衆道において誠意を示す行為。→五〇四ページ注六。

その身一代に情の咄多かりき。若年の時五人の名書きして、「この中の御方には、いつによらず一度づつは御心に随ひ申すべき」との誓紙ありける。悪口仲間に何事をか見付けられける、これをかし。万気に障りなき若衆、又の世にもあるまじ。古今武道、美道の詰開き、日本若道の鑑移して、[一]その身作りて違ひなし。

惜しや日数ふりて、自づから便なく、[二]身 冷 魂 去 荒原棄との古詩、今この身に思ひ合はせ、哀れさも一しほに増されり。[三]生薬も叶はずして、今はと見えし時、現世後生とて[四]百万遍の数ある玉を繰り、[五]千巻陀羅尼をよませても、[六]定業亦能転の経力もこの恋力には叶はず、ただ、「幻にいと艶なる女の見え侍る」とかたりて、[七]閏三月八日に息絶えぬ。[八]一念五百生と聞きし思ひ入れの魂の取り付きたるよと知られぬ。二十三歳いまだ東の[九]山の端の月、西へ入る事惜しまれける。

心に従います」という誓紙を書いたが、悪口の好きなその連中に、どんな落ち度を見つけられたものか、全くおかしい。何かにつけていやみのないこんな若衆は、後世にも二度と現れないだろう。武道事と衆道の駆引きでは、古今に稀な日本の男色の鑑ともいうべき若衆として、その身の上話を書いても間違いはない。

惜しいことに平八は、日がたつにつれて頼りなくなり、「身冷やかに魂去って荒原にすたる」という九相詩の文句を、今の自分の身と思い合わせて、ひとしお悲しくなるのであった。どんな名薬も効き目がなく、もはや最期と思われた時、この世とあの世とのためだといって、みんなが大きな数珠を繰って百万遍の念仏を唱え、僧侶に千巻の経文を読ませても、深く観音を信ずれば、定まった業報の苦をのがれることができるというお経の力も、死んだ娘の恋の念力には及ばなかった。平八はただ、「幻に、とても美しい女が見える」と言って、貞享三年閏三月八日に息が絶えた。人の一念は五百度生れ変るまでは消えないという。平八を恋した女の魂が取りついたのだと知られた。二十三歳の若さで、まだ東山の山の端に昇ったばかりの月が、西へ沈んでしまったのは、惜しい事である。

一 その身の上話を書いてもまちがいはない。
二 「身冷カニ魂去リ、之ヲ荒原ニ弃ツ、雨灌ギ日曝シテ須臾ニシ爛壊ス」(九相詩・序)。
三 起死回生の薬。
四 多くの僧俗が集まって、一つの大きな数珠を繰りまわし、仏名を百万遍唱える修法。
五 千巻の陀羅尼。陀羅尼は仏菩薩の説いた呪文で、梵文をそのまま音写して読誦する経文。
六 『妙楽大師疏記観音』の釈に、「若其機感厚定業亦能転」とある。定まった業報の苦も、機縁厚く観音を信ずれば、のがるるを得べし、との意。
七 貞享三年(一六八六)閏三月。『古今四場居百人一首』(元禄六年)には、平八の命日は三月十八日とある。
八 『大智度論』中の句。「一念五百生繫念無量劫」。一度悪念をいだくと、五百生の間その罪は消えない、との意。五百生は、幾度となく迷界に生まれかわること。
九 東山の山の端(四条河原の舞台)に顔を出したばかりの月が。「山の端にいざよふ月を出でむかと待ちつつ居るに夜ぞふけにける」(続後撰)。

本朝若風俗

男色大鑑

絵入

七

巻七　あらまし

一　蛍も夜は勤めの尻　村山又兵衛座の太夫子吉田伊織・藤村半太夫の二人は、容貌も芸も客あしらいも今の世界に又とない役者、とはいえ、勤め子にも太鼓持同様それぞれに苦労は多い。ある夜、半太夫は常連客から大鶴屋の二階座敷に招かれていたが、窓から蛍が二つ三つその袖にとまった。蛍も尻でもてはやされるなどとからかわれているうち、その蛍は、半太夫に思いをかける道心者が放したものとわかる。せめては盃をという声を聞いて足早に立退いた道心者は、足をすべらして増水した川に落ち、死んでしまう。のち、半太夫は出家するが、その道心者は夜ごと夢に現れ、しみじみと話を交わした。

二　女方もすなる土佐日記　道頓堀畳屋町に開店したばかりの井筒屋という扇屋は、松島半弥が引退して開いた店だが、若衆盛りでの引退はいかにも惜しい。まして半弥は、客あしらいが抜群、美形でセンスもよく機転もきき、古今に稀な女方だったのだから。荒木座に抱えられて出演していた時、田舎めいた男が舞台に上がり、脇差を抜いて小指を切り落とし、半弥に心中立てをした。半弥はあわてず応対し、その夜、男と盃を交わし、また会うまでの形見として袷と中脇差を贈った。男は土佐へ帰る船旅の途中、半弥を思うあまりに狂乱し、貰った脇差で自害してしまった。

三　袖も通さぬ形見の衣　道頓堀心斎橋の人形屋新六は、旅中に行き暮れ、丹波の子安の地蔵堂で夜を過ごしたが、そこに切戸の文珠が現れ、今夜、道頓堀の楊枝屋に生れた男の子は、芸子になって十八歳の正月二日に早死すると予言するのを聞く。帰ってみると、その日楊枝屋に男の子が生れていた。その子は十三歳からその道に入り、戸川早之丞と名乗って大和屋甚兵衛座に出て評判をとったが、役者仲間の念者に溺れて客を大事にしなかったため、極貧の状態となった。大晦日に借金を払えず、芝居衣裳を取り戻され、初芝居に着て行くものもないのを恥じて、正月二日に自害して果てた。

四　恨みの数をうつたり年竹　村山座の玉村吉弥は盛りの若衆、客に誘われて伏見の城山に初茸狩りに行き、日暮れにさる草庵に立ち寄った。その庵主の所に、わからぬ年齢を正直に知らせる年竹なるものがあり、若衆たちの年穿鑿をするが、若衆は皆、年を隠しているもの、二十二歳の庵主より若い者は一人もなかった。初茸の塩焼で酒宴となったところに、強もての男伊達が闖入、吉弥に盃を無理やり所望する。吉弥は巧みに男をあしらい、酔って寝た男の釣髭と片鬢を剃って土産に持ち帰り、笑いの種とした。

五　素人絵に悪や金釘　堺の浦の地引き網を見ようと、岡田左馬之助に誘われて出かけたが、途中で那波屋と嵐三右衛門らの一行と出会い、さらに上村辰弥なども加わる。堺の中浜で酒宴、極上の気分の時、美少年の姿に金釘を打ち付けた檜板が流れてくる。これは筑前の男が、失恋した若衆を恨んで作り、海に投げ入れたもの、左馬之助は若衆に同情、その釘を抜き捨てた。その後、南宗寺を見学、乳森の遊女町も見て大坂に戻り、夜は荒木与次兵衛座の稽古で若衆たちの見事な素顔に堪能した。

男色大鑑　本朝若風俗　第七巻

目録

目録終

蛍も夜は勤めの尻

身過程世にかなしき物はなし。万につけておろかなる事もなく見えわたりたる中も、殊更色道の太鼓もち、心永う物毎堪忍つよきがもと手なるべし。

ある時、[一]石垣町の大鶴屋の座敷に、[二]村山又兵衛座の太夫子[三]吉田伊織・[四]藤村半太夫この二人をならべて見しに、先づ今の世界にまたあるべき野郎とも思はれず。さながら風情は、絵に残せしむかし名をしる美女めきて、[五]時勢粧の舞ひぶり、見し人これに悩まぬはなし。殊更一座客のこなし、[六]調謔しめやかに情ふかく、[七]たよ〳〵としてよわからず、[八]うちまかせ身にも心を置くぞかし。伊織は床に入りてからその[九]敵の好く事のみ申しつくして、はや枕の上にて命も算用もかまはず、客噪ぎ出て興をもよほせり。又半太夫は、床入りしてより言葉数なく近寄らず、その客に気を悩ませ身をもだえさせ、少しはせく心の時、一生忘れぬ程の嬉しがる事を、ただ一つ小語き

蛍も夜は勤めの尻

商売ほど世の中でつらいものはない。万事にそつなく勤めている中でも、ことに遊里の太鼓持は、気が長くて何事にも辛抱強いのが元手であろう。

ある時、石垣町の大鶴屋の座敷に、村山又兵衛座の吉田伊織と藤村半太夫の二人を並べて見たが、まず今の世界にまたとある役者とは思われなかった。その風情は、絵に書き残された昔の有名な美女とそっくりで、当世風の舞いぶりを見た人で、この二人に惚れない者はなかった。ことに座敷での客あしらいは、しっとりと情け深く戯れ、なよなよとしていながらもしっかりしたところがあって、身をまかせていても、客はなんとなく気が置けるのであった。伊織は床入りしてからは、その客の好きそうな事だけをたっぷり言って、いざとなると命も損得もかまわないというふうなので、客は思わず興に乗って騒ぎだすのであった。また半太夫は、床入りしてからは言葉数が少なく、客に近寄らないで気をもませ身もだえさせ、少しせいてきた時を見計らって、一

❖巻五の一の主人公藤村初太夫と同一人と推定される万治・寛文期の京都村山座の立女方の藤村半太夫(こちらは本名)が、自分を慕うあまり、誤って溺死した道心者の心が忘れられず、出家して槙尾に籠った。毎夜の夢に道心者が現れて、しみじみと語ったという。念者のために出家するという巻五の一と同じパターン。半太夫の逸話を再度起用したために、一方を初太夫としたものと考える。

一 京都市東山区川端通四条下ル宮川町付近。東石垣・西石垣とあり、遊山茶屋が多かった。『好色一代女』巻五の目録にもこの名が見え、『西鶴置土産』巻一の一の「かどたふさぬ大鶴屋が扇」もこれであろう。
二 →役者一覧。
三 →役者一覧。
四 →役者一覧。
五 当世風の舞ぶり。→四五六ページ注四。
六 『遊仙窟』の字訓。
七 なよなよ。弱々しいさま。
八 身をまかせていても客は何となく気が置けるのであった。
九 遊里語。客と野郎(女郎)の双方が相手をさしていう。

一 帥は粋に同じ。相手を粋人扱いにしてまるめこむこと。

二 揚代はみな同じなのに。

三 戸前が屋内にある貴重品入れの蔵。

四 粋人には銀がない。

五 神楽は延宝・貞享期の京都の太鼓持四天王の一人。ある夜の座敷で、太鼓持の神楽庄左衛門が音頭(口笛)をとって。夜神楽(夜に行う神楽)との掛詞。

六 近世初期に始まる和様書法。→四三九㌻注八。

て首尾の仕掛け、さりとては、外の子供にまた教へてもならぬ事、この二人が帥ごかし、皆嘘にして偽りとは思はれず。「今の都に太夫子三十一人、同じ値うちなるに、これに逢はぬは無分別なるべし。金銀のたくはへあらば、この色あそびにつかうたがよいは。何か世に残して子にゆづり、自然その子目始末を思ふたはけにて、一代歌舞伎若衆を買ふ事もしらずして暮らし、内蔵の片隅に積みかさねられ、幾年かこの銀世間のおもしろき事をもしらず、そのままに朽ち果つるを銀も口惜しがるべし。諸事分のよき人にはなくて、さてもままならぬ世の中」と祇園町の末社どもこれをなげきぬ。

さる程に夜神楽の庄左衛門口笛に、もろ〱の太鼓おもひ〱の芸渡して役者まさりの身振り、後には笑はれもせず、腹抱へてをかしさも今なり。この座に村岡丹入とて、むかしは何がしの二男、万にかしこく、その身持ちいやしからず、大気にして人のにくまぬ生れ付きなりしが、世につれて先祖の名を埋み、下立売り堀川の辺りに大橋流の売り手本もはかどらず、針立ての張紙しても呼ぶ人なく、世わたりの悲しさ

生忘れないほどのうれしがる事を、たったひとことささやいて身をまかせる。こんな仕打ちはほかの若衆に教えたところで、できる事ではない。この二人が客を粋人扱いにして丸めこむ手口は、みな嘘のようだが、と言って偽りとも思えない。「今の京都に立女方が三十一人いて、揚代はみな同じなのに、この二人に逢わないのは、ばかばかしい話だ。金があったら、この二人との色遊びにつかうがいい。この世に残して子供に譲っても、その子供がけちな野暮で、一生歌舞伎若衆を買うことも知らずに暮し、せっかくの銀が蔵の片隅に積み重ねられ、長い間世間のおもしろい事も知らないで、そのまま朽ち果てるのを、銀もくやしがる事だろう。すべてにものわかりのよい男には銀がない。全くままならない世の中だ」と、祇園町の太鼓持どもが嘆いたものである。

さてある夜の座敷で、神楽庄左衛門が音頭をとり、太鼓持どもが、得意な芸をまわし始めた。役者まさりの身振りに、しまいには笑うこともできず、腹をかかえてひっくり返った。この座敷に村岡丹入という者がいた。昔は名のある者の次男で、何事にも賢く、身持も堅く大様で、人から憎まれない生れつきであった。世の移り変りにつれて、先祖の名も埋もれ

に大臣の慰み者となつて、今日もこの席に連なり、膳おそく据わるさへ無念かさなりしに、脱ぎ捨ての小袖を畳めと、足で押し出さるる。これもいやとはいはず畳みおきしに、灰吹きを捨てにやらるる。是非なくかしこまつて居る所を、大勢立ちかかつて[七]早縄を掛けられ、[八]鳴滝の盗人と引かれしは、座興にしても胸しづまり兼ね、縄といたらば二三人もさし殺し、物の見事に死ぬべしと、一筋に思ひ極めしに、鼻紙入れより[九]長徳寺四五つ蒔き散らして、先程よりのなぶり賃に、これ[一〇]紅のばつと給はりけるにぞ、そのまま心かはりて、さても旦那大分見事なはづみと、欲より身の程をわすれて、智恵も才覚もかくして、万事を愚鈍に見せかけて、生れつきからうとき人にまはされて、けいはくのある程云ひつくして、我が心ながら恥づかしき事にぞありける。折節買うてもらふ[一一]陰子にさへ高をくくられ、帯とかすまでの詫び事、人こそ知らね、拝まぬばかりなり。又、供つれぬ身の気の毒は、草履あづけしもそこ〳〵にせられて、帰るさにかたし〳〵取り集めて、[一二]卸がはや駕籠に付きて御供を申す。都に住めるにも、渡世さ

てしまい、下立売堀川のあたりで、大橋流の手本を売っていたがはかどらない。そこで鍼医者の張紙をしたが、呼んでくれる人もなく、暮しのために恥を忍んで大尽の慰みものとなり、今日もこの席に加わっていた。自分の前に膳が遅く据わる事さえ腹をすえかねていたのに、脱ぎっぱなしの小袖をたためと、足で押し出される。それもいやとは言わずにたたんでおくと、今度は煙草盆の灰吹きを捨てにやられる。あきらめてかしこまっていると、大勢で取り囲んで捕り縄をかけ、鳴滝の盗人だと引き立てられたのは、座興にしても我慢がならず、縄がとけたら二、三人刺し殺して、ものの見事に死んでやろうと、一途に思い詰めていると、大尽が紙入れから一歩金を四つ五つつかみ出してまき散らし、さっきからのなぶり賃だといって、金色の物をぱっと下さったので、それでまた気が変ってしまった。旦那が見事にはずんでくださったわいと、欲から情けない身の上を忘れて、知恵も才覚も隠し、万事を愚鈍に見せかけて、生れつき足りない男だと折り紙をつけられ、ありったけのお世辞を言うのは、我ながら恥ずかしい事であった。時たま買ってもらう陰間にさえなめられ、人こそ知らないが、帯をとかすまでには

七 捕縛用の縄。捕り縄。

八 狂言の「花盗人」は、初期の歌舞伎の上演種目になっている(劇場一覧)。狂言には場所が明示してないが、歌舞伎の場合は場所を植木屋の多かった鳴滝(京都市右京区)に設定したのではないかと思われる。「花盗人」は、桜を盗んで縄つきとなった男(シテ)が、狂歌を詠んで許されるという筋。

九 金一歩の異称。「是は駿河の国府中の片山にありける寺に、此景地前には田子の浦後ろは富士を詠め、四季ともに年寄ぬ所也。此座敷を借て遊興せしに、日に金一歩に定めける。是より一歩を長徳寺と云悪所の辞なり」(俚言集覧)。

一〇 「乳母が袖口紅ゐのばつと小判花の都かはらず」(好色盛衰記一の一)。金色の物をぱっと。

一一 まだ舞台をふまない男色専門の少年。

一二 駕籠かきの異称。

まくにありけるこそをかしけれ。

品[一]はかはれど、なほ勤め子のかなしきは限りもなし。きのふは田舎侍のかたむくろなる[二]人に、その気に入相ごろより[三]夜ふくるまで無理酒にいたみ、今日はまた七八人の伊勢講仲間[四]として買はれ、床入りはひそかに鬮どりしらるるなど、その中に好ける客もあるに、鬮のならひとていや風なる親仁目に取り当てられ、かしらからしなだれ、髪のそこぬるをもかまはず、爪のながき手を打ち懸けられ、楊枝[五]つかはぬ口をちかく寄せられ、木綿のひとへなる肌着身にさはりておそろしき



三味線をひく女方がそれか。右面の坊主頭の人物が村岡丹入。座興に早縄をかけるべく二人が手をとって押え、左面右下の役者が紐をささげて行く。扇をかざしてはやしたてているのが神楽の庄左衛門か。

一　遊女と性質は変っていても。
二　かたくなな。頑固な。
三　その気に入るように勤めて入相(暮れがた)頃から。
四　掛銭で伊勢参宮をする講中に買われて。
五　房楊枝。先端を打ちくだいて房のようにした楊枝で、今の歯ブラシに当る。

拝むようにしてかき口説くのであった。また供のない身の悲しさは、草履を預けてもいいかげんにされて、帰る時には片方ずつ集めてはき、大尽の早駕籠についてお供をする。都に住んでいても、いろいろな世渡りがあるのは興味深い。

遊女と性質は変っていても、客勤めの若衆もまた、その悲しさは限りもない。昨日は頑固な田舎侍の気に入るように勤め、暮れ方から夜更けまで、酒を強いられてひどい目にあい、今日はまた七、八人の伊勢講仲間に買われたところ、こっそりと床入りの相手を決めるくじを引いている。その中に好きな客もあるのに、何しろくじ引きなので、いやらしい親仁に引き当てられると、はなからしなだれかかり、こちらの髪がこわれるのもかまわない。爪の長い手を打ちかけられ、楊枝を使ったことのない口を近寄せられる。ごわごわした木綿の単肌着が身に触るのが恐ろしく、夜着に籠った革足袋のむれたにおいに鼻をふさぐと、衆道のわきまえもなく、いきなり褌をときはじめる。銀が敵とあきらめて、自由にさせながらも、秘伝の素股を使わせる。夜更けて起き別れるまでに、どれほど気苦労をするかわからない。それもみんな自分の得にはならず、親方のためになるだけなのだ

に、革たびの匂ひ籠りて鼻ふさげば、衆道の分も知らずしてふんどしとき掛かる。銀が敵、と是非もなく自由させながら、ひみつのすまたを持つてまゐり、夜更け起き別るるまでにいかばかり年を寄らしぬ。これみなわが身の徳にはならず、親方のためばかりにして、一しほうたてかりき。されどもこの勤めのせつなき事を忘れけるは、万人男女ともに気をうつし、現なき風情に姿の自慢、宿に帰れば「太夫様〳〵」と、あまた人のそだてつるに、身くだくる事をもしらざりき。これを思ふに薄命の身に替はらず、品こそ違へ遊女に同じ。



石垣町の大鶴屋の座敷での遊興。左上の大尽客に膝枕されているのが藤村半太夫。『野良虫』所載の紋所より確認できる。本文では吉田伊織もいるはずだが、井桁に桐の紋所（野良虫）の役者は見当らない。

から、いっそうつらいのである。それでもこのせつなさを忘れて勤めるのは、大勢の男女が思いを寄せるので、うかうかと器量自慢をし、家に帰るとみんなから、「太夫様、太夫様」とおだてられるので、わが身が砕けるのも知らないでいる。これを思うと、性質こそ変っていてもその哀れな身の上は遊女と変らない。

　五月雨が降るか降らないほどに、板葺きの屋根にかすかな音を立てているある夜の事、若衆たちがいつもの常連の客と一緒に、大鶴屋の二階座敷で、明け方まで冷酒を飲みつづけていた。今鳴った鐘は八つか七つかとただして、「この辺で切り上げようか」と言った時、細い格子窓の隙間から、蛍が二、三匹飛び込んだ。またおもしろくなって眺めていると、この蛍は人なれていて、尻を光らせながら灯火の周りを飛んでいたが、やがて半太夫の袖にとまった。すると誰かが、「蛍も同じ身の上」と、平安城の道行を語ったので、みんなしらけてどっと笑った。「まことにこの蛍も、勤めのために尻を照らしているんだ」と、一人が悪口を言うと、「だがこの蛍は夜だけの勤めで、昼は暇なのがうらやましい。私はこうして夜を勤め、昼はまた舞台を勤めなければならないのがつらい」と、半太夫が正

六 鹿のなめし革で作った足袋。小紋を散らしたりした。元禄頃はすでに時代おくれとなった。
七 秘伝の素股。相手にわからないように、股間で事をすませる閨房の秘技。
八 どれほど気苦労をするかわからない。
九 思いを寄せるので。
一〇 「そだつる　のすると同じこと也。向ふの気に随ひて、軽薄し褒美する貌なり。子など育てあぐる心か」(色道大鏡一)。
一一 ふしあわせな流れの身。遊女。

ある夜、五月雨のふるかふらぬか程に、板屋音も幽かなる明方まで、いつもの手組の客まじりに、大鶴屋の二階座敷に冷酒のかぎりもなく、今の鐘は八つか七つのせんぎして、「ざつと立たぬか」といふ時、虫籠のすきまより蛍二つ三つ飛び入りしに、又興になりて見しに、この蛍人なれて、光を灯とあらそひ、半太夫が袖にとまれば、「蛍も同じ身の上」と、平安城の道行を語れば、座中しらけてどつと笑ひ、「誠にこの蛍も勤めに尻を照らしけるよ」と悪口いうて、「されどもこれは夜ばかりにして、昼隙の浦山し。我はかくありて、昼又舞台の勤めやるせなきに」と、うそのなき心の程をいふに、次第に蛍乱れしを、不思議と人つかはしみしに、闇にまぎれて面影は竹の小笠を着たる法師の、墨染の袖より薄葉包みし蛍を、ひとつ／＼人の慰みになれるやうにはなちやりぬ。むかし車のうちへなげ入れし事のおもはれ、何とやら恋の仕掛けめきてやさし。この有様を帰り語りけるに、半太夫きくに涙をうるほし、「さる事こそあれ。夜毎に太夫もとにしのべる道心者ありけるとや。若衆いづれかと思ひしに、さては

直に気持を打ち明けると、しだいに蛍が乱れ入ってきた。人々が不思議に思って、人を見にやると、暗くて顔はわからなかったが、竹の小笠をかぶった坊主が、衣の袖から薄紙に包んだ蛍を一つ一つ、人の慰みになるように放していた。蛍を女車に投げ入れた故事が思い出され、どうやら恋の仕掛けのようで優しく思われた。帰ってこの様子を話すと、半太夫は涙を流して、「思い当る事があります。毎晩太夫元へ忍んで来る坊さんがいるそうです。目当てはどの若衆かと思っていましたが、さては私だったと見えます。うれしい事です。許してください。せめて杯でも」と言う声を聞き捨てて、その坊主は足早に立ち退いたが、下駄の音もけたたましく石垣を踏みはずし、ひどく体を打ちつけたようであった。折から降りつづく雨に、いつもの浅瀬も高波が渦まき、気の毒にも坊主は波に沈んで、人々が駆けつけた時には影も形もなく、行く水をうらめしく思って、ひとかたならず悔やんだ。それから半太夫は悩ましくなり、見ぬ人を思いやって、うかうかと暮していた。

　その後、半太夫はあるお方に深く愛されて身請けされ、大仏の近くの紙漉町に住むことになったが、かの坊主の気持が

一 常連の客。
二 午前二時か午前四時か。
三 虫籠格子の略。虫籠のように細かに組んだ格子窓。
四 「実にうつせみも蛍もわれが身にそひて、ないつこがれつさまさまに、やるかたわかぬふみ車、ふみもならはぬかちはだし」(操の前道行)。
五 宇治加賀掾の正本「平安城都遷」(五段)。略して「平安城」。道行は加賀掾段物集『大竹集』(延宝九年)と、西鶴序の『小竹集』(貞享二年)に、「操の前道行」として収められている。
六 竹の皮で作った笠。
七 薄葉紙。薄くすいた鳥の子紙。
八 『伊勢物語』三十九段の、天の下の色好み源至が、女車に蛍を投げ入れた話をいう。
九 興行主。→四六一ページ注一六。

我かよ。うれし。ゆるし給へ。せめては盃して」といふ声聞き捨てに、足ばやに立ちのきしが、下踏の音けはしく、石垣踏みはづし、あらけなくいたむと見えしが、ふりつづきし雨の高浪、つねの浅瀬にかはりて、哀れやその身を沈め、おの〳〵かけつくるまに影も形もなくなりて、一〇ゆく水に数の思ひをさせて、大方ならず悔やみける。それより半太夫心地うちなやみて、見ぬ人を思ひやりてうか〳〵暮らしぬ。

その後、さる御方様の情ふかくなりて、役者の身請けをあそばし、大仏の辺り一一紙漉町に住みしうちにも、かの法師が心入れあはれに忘れず、一二槙の尾にとり籠りて出家となりける。殊勝さかぎりもなく、朝暮念仏おこたらず、心をすまし、床も定めず、おのづから眠りのうちに、かの法師夜毎にあらはれ、しみ〴〵と語るこそうれしけれ。目覚むれば影消えて、寝入れば夢ながらただしく見えぬ。その印には、山路に咲ける四季折々の草花を手折り持てきて、仏前にさし捨てて心も慰めける。この事人にかたれど、うたがひて同じ枕に庵室に仮寝せしに、この法師こそ見えね、生花は毎日かはりたる事

哀れで忘れられず、槙尾に閉じ籠って出家してしまった。ひどく殊勝な心になって、朝夕、念仏を怠らず、心を澄まし、寝床も決めずうた寝していると、かの坊主が夜ごとに現れて、しみじみと話しかけるのがうれしかった。目が覚めると姿は消え、眠ると夢ではあったがまさしく見えた。その証拠には、山に咲く四季折々の草花を手折ってきて仏前に供え、半太夫の心を慰めてくれた。この事を人に話すと、その人は疑って、半太夫と同じ庵室に仮寝したが、坊主の姿は見えないで、生花は毎日変っていたと語った。

一〇 はかない思い。「行く水に数かくよりもはかなきは思はぬ人を思ふなりけり」(古今)。

一一 →四九六ページ注九。

一二 京都市右京区の北部の山中にある紅葉の名所。槙尾西明寺がある。

ぞと申しき。

[1]女方もすなる土佐日記

[2]道頓堀畳屋町の西北角に、井筒屋といへる新見世の扇屋あり。[3]冷しさは生の[4]松嶋半弥が面影、七左衛門と名をかへ、惜しや花は盛り、月は[5]二十日あまりを若衆の最中と見しに、無分別なる元服、これを[6]金剛仲間になげきぬ。この児人は、美道二葉の時より[7]松島や小島の蜑のぬれにやさしく、情ふかく、[8]一座けだかく、酒すぐれて呑みこなし、[9]文などこれにつづきてまねする子もなし。水仙の早咲きに[10]壺入りの客には、[11]雪むかしの口を切り、春は桜の名残をうつし絵に、自ら筆を染めて、[12]古歌のすがたなるを詠じける。五月雨のしめやかなる夜は[13]初音焼きかけ、ほととぎす今にもと待つ人様の気に入り、秋は月をも宵から見捨てずして、書物に心をうつし、ひとつ〳〵能き事を見習ひ、万につけていやしからず。殊にはその身生れ付きてならべ[14]枕に打ちとけてより、人の命をとる程

❖貞享三年(一六八六)に二十歳で引退して扇屋となった大坂荒木座の若女方松島半弥の逸話。荒木座の四月狂言の最中、半弥の舞台に田舎者が上がり、脇差で小指を切って渡した。半弥はその夜、その男を招いたが、男は床入りもせず帰ろうとするので、袷と脇差を贈った。男は土佐へ帰航の途中、狂乱し、風早の浦で半弥から贈られた脇差で自害して果てたという。

一 「男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり」(土佐日記)。

二 現、大阪市中央区東心斎橋付近。歌舞伎役者の居住地。

三 「涼しさはいきの松原まさるとも添ふる扇の風な忘れそ」(新古今)。生の松原は、福岡市西区姪の浜の西から博多湾岸に沿う松原で歌枕。

四 →役者一覧。

五 二十歳の元服をいう。「それの年の、十二月の、二十日あまり」(土佐日記)。

六 役者の草履取り仲間。→四五八ページ注三。

七 『難波立聞昔話』(貞享三年)の松島半弥の評判に、「松しまやおじまのあまの田夫ものまで、此君みるとぞつと思ひのゆかにふするうたがひなし」とある。「松島やをじまのあまのすて衣思ひすつれどぬるる袖かな」(続千載)。

八 一座のさばきは上品で。

女方もすなる土佐日記

道頓堀畳屋町の西北角に、井筒屋という新店の扇屋がある。これはまだ若々しい女方の松島半弥が、七左衛門と改名して開いた店である。花ならばまっ盛り、月ならば二十日あまりの若衆盛りなのに、無分別にも元服したものだと、役者の草履取り仲間が嘆いたことであった。この若衆は、まだうら若い頃から、「松島や小島の海人の濡れる袖」というその名にちなんだ古歌のように、色っぽくて情け深く、座持ちは上品で、酒も上手に飲みこなし、客への手紙の書きっぷりといったら、まねのできる若衆はいなかった。わが家に迎える馴染の客には、水仙の早咲きを生けて、雪昔を詰めた壺の口を切ってもてなし、春は散りゆく桜を描いた絵に、みずから筆をとって賛をして見せたりする。五月雨の降るしんみりとした夜は初音を炷いて、時鳥が今にもと待っているお客の気に入り、秋は宵から月を眺め、ふけては書物に心を移すというふうに、一つ一つよい事を見習って、何事につけても上品であった。ことに床入りしてか

九 客へやる勤めの手紙。
一〇 茶屋へ呼んで遊ばず、野郎の自宅へ行って遊ぶ親しい客（色道大鏡一）。水仙―壺入り。
一一 初昔・後昔などとともに宇治茶の銘。『好色一代男』巻七の二「其面影は雪むかし」。雪昔を詰めた壺の口を切ってもてなし。
一二 古歌の風格のある和歌を。
一三 初音という伽羅の銘は「きくたびに珍しければ時鳥いつも初音の心ちこそすれ」（金葉）の一首によって名づけられたので、「ほととぎす今にもと待つ」と続けた。→三六五ページ注一五。
一四 床入りしてうちとけてから。
一五 借金の淵というべきところを、道頓堀の堀と言い替えた。
一六 薄紫。→二九六ページ注一〇。
一七 着物の裾まわしに、表裏共切れを用いること。→四五八ページ注三。
一八 大様な人柄。
一九 一両小判。
二〇 上半期の収支決算日である盆の前日をいう。
二一 上方では盆の贈答用に刺し鯖を用いた。背を割いた塩鯖二枚を重ねて一刺とする。
二二 つついていたが。
二三 摂津国西成郡勝間村（現、大阪市西成区）産の木綿の褌。
二四 褌の下りと昼下りの掛詞。昼下りは午後二時頃。未の刻。いい加減くたびれていて。
二五 →役者一覧。

の事ありて、稀に逢ひぬる客も忘れがたくて、跡引きて明暮恋にせめられ、一五借銭の堀へはまりし人かぎりしられず。

一六若紫の帽子は、世上の野郎定まつての飾りを替へ、浅黄ちりめんの仕出し、更に又美形なり。不断衣装はさのみ色を好まず、肌付きは白むくに黒き一七ひつかへしの重ね小袖、外の芝居子のかくはなるまじき事ぞかし。第一一八大気者にして、人のほしがる一九黄色にておもき物をも手にはもたず、さもしき事のなきに、又ある太夫子方へ二〇盆節季に見廻ひけるに、二一さし鯖の代銀を手づから掛けて渡されしに、秤目二二せせる程こそあれ、四匁の内にて二分五リンかるいとて、肴売りとの口論見ぐるし。それさへいやなるに、人が見ねばとて、二三勝間の里にて織りし下帯、それも二四昼にさがりはよごれて、せめて夜ならばと思ひし。これらに引きあはせては、勤め子にもさて〳〵違ひあるものぞ。せはしさ、ゆたかさ、大晦日と元日程に替はれり。世に住めばいやな年越し、と二五柊兵四郎と語りてこれを笑ひける。

ある時、道古といへるをもてなしに、半弥物好みにして難

らの客あしらいの巧みさは生れつきで、相手の命を取るほどの業を心得ていたので、たまさかに逢った客でも忘れかねて跡を引き、明け暮れ恋に責められて借金の淵にはまった人は数限りなくあった。

　半弥は世間の役者が揃ってかぶる紫帽子の趣向を変え、浅黄縮緬で仕立てたが、それでいっそう美しくなった。ふだん着が派手なものを好まず、肌着は白無垢で、上に引っ返しの黒小袖を重ねていたが、ほかの若衆のできることではない。第一大様な人柄で、人の欲しがるずっしりした小判などには手も触れず、少しもさもしいところがなかった。ある時作者が、さる女方の家へ盆節季に見舞いに行くと、その女方は塩鯖の代銀を渡すのに、自分で天秤に掛けて秤目をつついていたが、その銀が四匁のところを二分五厘軽いとかいって、魚売りと口論していたのは見苦しかった。それだけでもいやなのに、人が見ないからといって、勝間木綿の褌を締めていたが、それも前の下がりは薄汚れていた。せめて夜ならば人目にもつくまいと思ったことである。かれこれくらべてみると、若衆にもひどい違いがあるものだ。こせこせしたのと、ゆったりしたのと、大晦日と元日ほどの相違がある。この世に住むからには、い

波の茶臼山[一]へまかりけるに、桜狩りせし春にかはりて、秋も又物の哀れなるこそ万の虫鳴く音にしられけれ。南の池ちかく幕うたせて、那古[二]の海の夕日上戸の顔をあらそひ、酒論さまぐ〵の肴つくして、「これでも呑めぬ」といふ時、ちかき里童子四五人、手毎に目籠を提げて見えわたりしに、「何事が仕業」、尋ねけるに、「松茸を狩る」といへり。「山浅くしてある物か」と見しに、露草わけて色なる朽葉さがせば、笠をかたぶけ、ここかしこにある程とりて、松煙らせて当座焼きに柚酢のかをり、これは〳〵と求喰りけるに、それよ一年小松半太夫[三]つれて、天野[四]の茸狩りの御酒宴に、髭[五]の半右衛門おたけさんさ[六]の一ふし、今もはやり歌山春之丞[七]も立ちさわぎ、いつにかはりておもしろし。これ皆亭主半弥が心ざしふかし。松茸かぎりもなく、宵より人遣はして植ゑ置きけるとなり。万事おとなしき仕方ぞかし。諸芸も思ひ入れふかうして、「いや申し」と云ふ言葉つきまでもにくからず、古今の女方と申してもくるしかるまじ。

荒木座[八]へ抱へし卯月の初めつかた、半弥大振袖の橘かをり

一 大阪市天王寺区にある丘。慶長十九年(一六一四)、大坂冬の陣に徳川家康がここに陣した。
二 『万葉集』に見える歌枕。大阪市の西方の海浜の称。現在は陸地となっている。
三 未詳。
四 大阪府河内長野市天野町の天野山。
五 未詳。太鼓持か、役者の抱え主であろう。
六 当時流行した「さんさ節」の替え歌であろう。「かはりさんさのふしも、色にうつりて人皆悩みふかく」(武道伝来記四の一)。
七 →役者一覧。
八 大坂堀江の荒木与次兵衛座。荒木与次兵衛 →役者一覧。

やな年越しもしなくてはならないと、柊兵四郎と話して笑ったものである。

ある時、道古という客をもてなそうと、半弥の好みで大坂の茶臼山に出かけた事があった。花見をした春とはうって変って、秋の淋しさはいろいろな虫の鳴く音に知られるのであった。南の池のほとりに幕を張らせて、酒好きは、那古の海に入る夕日のように顔を染め、いろいろと気炎をあげつつ、酒の肴もあらかた片づけて、「これではもう飲めない」と言いだした時、近くの村の子供たちが四、五人、てんでに竹籠をさげてやって来た。「何をするんだ」と尋ねると、「松茸狩りです」と言う。「こんな浅い山にあるものか」と見ていると、子供らは露草を分けて紅葉した落葉を捜していたが、やがて笠を傾けて、そこかしこにあるほどの松茸を採って来た。松葉をたいてその場で焼き、柚の香りもうれしく、みんな舌鼓を打って食いあさった。そういえばある年、あるお方が小松半太夫を連れて、天野山で松茸狩りをされた時のご酒宴に、取持ちの髭の半右衛門がうたった「おたけさんさ」の一節は今も流行り、歌山春之丞がうたいだし、いつにないおもしろい遊山となった。これも皆亭主役の半弥が気を配り、前夜から人をやって方々に

九　時鳥の鳴き声の「本尊かけたか」のもじり。「仏壇に本尊をかけたか鶉公」（犬筑波集）。五三一ページ注三にも挙げた「きくたびに珍しければ時鳥…」（金葉）によって、「めづらしき狂言」と続けた。

て、見物[九]思ひを掛けたかの鳥の声、めづらしき狂言の中程に、諸人の座せる片隅より田舎めきたる男の舞台にあがり、「これ半弥様、我数ならずして恋ひたてまつりしは恐れなれども、心中はこれぞ」と、脇指ぬきて左の小指板敷におしあて、なる程心静かに五引き六引きに切落とし、紙に包みてなげ出しける。半弥さわがず、「我おぼしめしての御心ざし、あだには存ぜじ。狂言なかばなれば、とかくは楽屋へ御入り」と申すうちに、かの男は見えずなりにき。「我が宿へ是非に御尋ね給はれ」といひすてて、かの指人手にかけず、血の出る程



大坂堀江の荒木与次兵衛座の舞台に大振袖の松島半弥が出演中、片肌ぬぎになって舞台に上がり、脇差で小指を切り半弥に心中立てする土佐の男。舞台後ろの後見役も土間の観客も、これはと驚く表情。

松茸を植えておいたのであるという。万事行き届いた仕方である。諸芸にも嗜みが深く、「いや申し」というちょっとした言葉つきまでも好ましく、古今に稀な女方といっても差し支えはあるまい。

荒木座に抱えられた四月初旬、半弥の舞台衣装の橘の模様が香り、見物は折からの時鳥の初音のように掛け声をかけた。その初音のように珍しい狂言の最中に、平土間の片隅から田舎者らしい男が舞台に飛び上がり、「これ半弥様、つまらない私がお慕いするのは畏れ多いことですが、心中はこれです」と言って脇差を抜き、左の小指を板敷に押し当てて、いかにも落ち着いて五引き六引きで切り落とし、紙に包んで投げ出した。半弥は少しも騒がず、「私を思ってくださってのお心ざし、おろそかには思いません。狂言の最中ですから、ともかく楽屋へおはいりください」と言ううちに、男の姿は見えなくなった。「私の家へ是非ともお訪ねください」と言っておいて、半弥はその指を人手にかけず、血の出るだけは洗い流して、ていねいに包んで懐に入れたが、いかにも情けのこもった仕打ちで、世間の評判も悪くなかった。芝居では前代未聞の出来事である。

半弥は家に帰って寝床を取り、袖に香

一 いかにも情けのこもった仕打ちだったので。

二 大阪市浪速区元町二丁目の鉄眼寺の明けの鐘。

三 兼光という刀工は、美濃・関・備前などにそれぞれ存在するが、最もあらわれたのは備前の初代兼光で、長光の孫、相州五郎正宗の門下である。嘉暦・延元年間(一三〇〜三〇年代)の人。

四 貴人の所持品を御物という。大名拵え。

五 高く声をはり上げる。「秋風に声をほにあげてくる舟は天の門わたる雁にぞありける」(古今)。また同時に、「船人声を帆に上げて、湊の外に漕出す」(太平記二)の意をかけている。

六 大川(淀川)口の一の州。「今の一之洲は、安治川・九条村の西、波除山の下にあり」(摂陽群談六)。

七 大坂の木津川口の船着場。大阪市大正区三軒屋のあたり。

は洗ひ流して、念比に包みて懐中せしは、[一]さながら情らしくみえて、人皆あしからぬ取沙汰にあへり。前代芝居にてはためしもなき事なり。

半弥、宿に帰りて寝間あらためて、袖に焼きしめ、その夜侘びて、[二]鉄眼の鐘のなる時、すこし夢むすびける。程なく明けわたり、人顔のほのかに見ゆる時、きのふの男、友とせし人と二人つれてたづね来りしに、かず／＼詞をかさね、たんと嬉しがる事のみ申せど、その身をふるはし、「かたじけなし」とばかり一言、その後はさしうつぶきて、いとど物哀れに見えける。心程はあらまし外の人申せし。半弥泪しのびて身をまかせ、たはぶれの種を仕掛け手をとれども、用意の小座敷にもゆかず。盃事過ぎてから、留めてもとまらず立ち帰るにぞ、恋は残れり。「又あふまでの形見なり」と、浅黄じゆすの袷に、[三]兼光の中脇指の[四]御物拵へなるをおくりにける。

ひそかに国里を問ひけるに語る。「土佐の者なるが、御名残も只今出舟」と、[五]声帆にあげて、[六]川口一の州より、涙は浪の白玉に数まさりてん。その日は蘆の浦風かはりて、[七]三軒屋

を炷きしめて、その夜、男の訪れを待ちわびていたが、少しうたた寝をした。鉄眼寺の明けの鐘の鳴る時、まもなく夜も明け渡り、人顔もどうにか見えるようになった頃、昨日の男が友達と二人連れで訪ねて来た。半弥はいろいろと話しかけ、ずいぶんうれしがる事ばかり言ったが、男は身を震わせて、「かたじけない」とひとこと言っただけで、それからはうつむいてしまい、ひどく哀れに見えたが、その気持は連れの友達が話してくれた。半弥は涙をこらえて身をまかせ、手を変え品を変えて戯れ、手を取って誘ったが、男は用意の寝間にも行かない。酒をくみかわしてから、留めても留まらずに帰ろうとするので、半弥は心残りであった。「またお逢いするまでの形見です」と、浅黄繻子の袷と大名拵えの兼光の中脇差を贈った。

半弥がひそかに連れの男に故郷を尋ねると、「土佐の者ですが、お目にかかれるのもこれが最後で、もう今頃は船出のはず」と言って、大声で泣きだした。出船を告げる船頭の声とともに帆を上げて、船は大川口の一の州から出たのだが、土佐の男の涙の数は、波の白玉よりも多いことであろう。その日は蘆を吹く海風の向きが変ったので、三軒屋という所に船

といふ所にかかりぬ。今日の夕の淋しさに、硯[八]の海ふかく、思ひつづけて書く事こそあれ。四月五日の宵月、さながらたとへて男[九]もすなる半弥様のさし櫛か、とうたがひも晴れぬに、村雨俄に思はぬ袖を濡れのはじめ、水鶏のたたくは矢[一〇]蔵太鼓かとぞ。ここは難[一一]波島、心は道頓堀をはなれず、蛍も飛[一二]子かと思はれ、をかしや尻[一三]なし川に影うつしぬ。

明くれば六日の朝嵐、いかりをあげてとり楫の音、礒づたひを行くに、尼が崎・鳴尾の沖より又風かはして、広[一四]田の社を見かけ、夢の浮橋わたるかと、やう／＼和[一五]田の御崎に寄せて、しばし難儀忘れし。されども武[一六]庫山の気色、雲にかくして半様も見えず。次第にうたてく、おのづから胸を燃して、[一七]火宅の車舟もさわがしく、執心の角[一八]の松原、須[一九]佐の入江ちかく、暮つ方兵庫の湊にあがりて、風呂焼かせてあらひ髪に、半弥様よりこれも形見のうつり香、初[二〇]瀬といへる名の木とめけるに、なほまたその人、花[二一]ぞむかしのかほどまではゆかしき。

七日夜ばしりけはしく、かり宿に旅ぎせるなど忘れてほい

がかりした。今日の夕暮れの淋しさに、土佐の男はもの思いに沈んで、日記を書く気になった。折からの四月五日の宵月は、女方もさすという半弥様のさし櫛かと疑ううちに、村雨がにわかに降って来て、思いがけなく袖を濡らした。水鶏のたたくような鳴き声は、芝居の終りを告げる櫓太鼓のように思われた。ここは遠く離れた難波島だが、心は道頓堀を離れない。蛍も飛子かと思われ、その光を近くの尻無川に映しているのはおかしかった。

明けて六日の朝風に碇を上げ、左へ舵を取って、磯伝いに進むうちに、尼崎・鳴尾の沖のあたりから、また風向きが変った。広田の社を遠く眺め、夢見るような気持で行くうちに、やっと和田の岬にたどり着いて安堵した。しかし武庫山は雲に隠れて半分も見えず、しだいに心細くなって胸苦しく、騒がしい船のきしむ音を聞きながら、角の松原や須佐の入江を経て、暮れ方に兵庫の港に上陸した。宿で風呂をたかせて洗った髪に、半弥様から形見にもらった初瀬という名香を炷きしめると、いよいよその人がなつかしくなった。

七日は夜船にあわただしく乗り込み、宿に煙管を忘れたのは、うかつな事であ

八 →五三七ページ注一八。

九 「男もすなる日記といふものを」(土佐日記)。

一〇 櫓太鼓は、芝居の開始または終了を告げるために櫓の上で打つ太鼓。「とぞ」は「とぞ思ふ」の略。

一一 木津川口。現、大阪市大正区三軒屋東一～三丁目。

一二 旅回りの色若衆。

一三 大川の支流で、江の子島の北より西南に流れ、寺島の西を経て海にはいる。

一四 兵庫県西宮市大社町にある広田神社。

一五 神戸港内の兵庫港の南部から東に突き出た岬。

一六 六甲山の古名。

一七 「車舟わだのみ崎をかいめぐりうしまどかけて汐やひくらん」(一目玉鉾、名所方角抄)による。火宅は衆苦充満の現世をたとえた仏教語。車舟は外輪船。

一八 「つぬ」が正しい。『万葉集』に見える歌枕。西宮市内の今津の辺であろうという。

一九 『一目玉鉾』巻四に、角の松原のつぎに「須佐の入江」とあるが、所在不明。

二〇 初瀬は新伽羅(香木)中でもはなやかに艶あり、重々しく匂うと『香名秘録』にある。名の木は銘木。

二一 「初瀬にて／ひとはいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香ににほひける」(古今 貫之)。

なし。煙絶えて塩屋さびしく、須磨の上野も推量に詠めて、ほの〳〵のあけに人丸の社を拝みつけて、明石にかかれば俄に村雨のして苫葺く難儀、されどもほととぎす聞くべき便の雨とてうれしく、もし又若衆様の初音もやと、心は空になりて、同じく八日も所を替へず思ひつづけて、九日十日の朝備前の国唐琴の泊り、虫明の瀬戸越ゆる折節、かの飛鳥井姫の、都恋しきと書き残されし扇も、半弥が仕出しの古歌もやうか、と思はれ、浪もたためば風なくて、十一日の昼ばしり、備後の鞆の浦に入りて、同船おの〳〵あがれば、我も独りは暮らし兼ねて跡をしたひ行くに、ここの分里とて、女の風俗も素人女よりは見よげに、上方ははや歌うて仕舞ひぬる、春の山道はさんさなど、今になりてから引いて、踊りぶりをかしく、これは座にたまられず。

　さても淫婦の姿にさへふつ〳〵とあきはてぬれば、常なるものはことかけにも身の毛立ちて、又舟に乗り移り、くだり日和をうれしく風早の浦、十二日の暮つ方より、この男の心地うか〳〵とうちなやみて、前後を忘れ、ただ松嶋が面子の

った。塩焼く小屋は煙も絶えてもの淋しく、須磨の上野も推量に眺め、夜もほのぼのと明ける頃、人麿神社を見とめて拝んだ。明石に近づくとにわかに村雨に襲われ、船では苫を葺くという騒ぎであったが、しかしこの雨で時鳥の声が聞けるかもしれないと思うとうれしくなった。もしまた半弥様の初音が聞けるかもしれないと、心はうわの空になり、八日も同じ所に船泊りして思いにふけり、九日に船出して、十日の朝は備前の唐琴の泊りを経て虫明の瀬戸にさしかかった。昔、飛鳥井の姫が、扇に和歌一首を書き残して、投身したという話を思い出すにつけ、その扇は半弥が工夫した古歌模様ではないかと思われた。波も穏やかに風もなく、十一日は昼船を走らせて、備後の鞆の津に着いた。同船の人々が上陸したので、自分もひとりでは淋しくて、跡を慕って行くと、ここにも廓があり、女郎の風俗も素人女よりはましであった。上方では流行遅れになった「春の山道は、さぁんさ」の歌を、今頃になって弾いて踊る身振りがおかしくて、とても見てはおられない。

　少しはましな女郎の姿さえ、ふつふつといやになったので、素人女などは不自由の折とはいえ、身の毛がよだち、早々

一「須磨上野。一之谷の上なり。古へ安徳帝の皇居大内と称して此所にあり」(国花万葉記)。
二 下文の人麿の縁による。「ほのぼのとあかしの浦の朝霧に島隠れゆく舟をしぞ思ふ」(古今　人麿)。
三 →三五〇ページ注三。
四 岡山県倉敷市児島の南岸、田之口・引綱辺の海岸(現、児島唐琴)。古く西国往来の港として栄えた。歌枕。
五 岡山県邑久郡邑久町虫明の東方、片上湾口に横たわる鴻島とその南の長島との間の海峡。歌枕。
六『狭衣物語』の女主人公飛鳥井姫に横恋慕した式部大輔が、姫を奪って海路九州へ下る途中、姫は恋人の大将の形見の扇に一首を残し、虫明の瀬戸で投身したくだりをいう。「一首のこして爰で死なふぞ／飛鳥井の姫のこころも其時は」(西鶴大矢数二十六)。
七「都恋しき」は歌の文句ではなく心である。「早き瀬の底のみくづとなりにきと扇の風よ吹きも伝へよ」(狭衣一)。
八 仕出しは新趣向。古歌模様は古歌をしたためた扇面や色紙を散らした模様。
九 広島県沼隈半島の東南端の港の鞆の津。
一〇 鞆の津の廓はありそ町といい、太夫なく、天神・鹿恋・端女郎があった(諸国色里案内)。
一一 寛文・延宝の頃流行した歌謡の一節。「春の山道霞たつ、さあんさ、せめて音を出せ鶯の、さんさのゑいよへ」(落葉集〈宝永元年刊〉)。

み思ひ出して、身をもだへ乱人となれば、舟子どももあやしく沙汰して礒辺にあげ、浜びさしのあるじを頼み、友とせし人ひとりふたり付き添ひて、さま〲にいたはりし甲斐なく、次第に盛衰[一五]なつて、我と身燃して、かなしや、今思へば形見もよしなや、難波を首途の時半弥が送りし脇指にして、自ら命をすて、血は草芥[一六]を染めなし、屍は路径に横たはり、恋よりかくはなり行く人の心ざし、日記にしるして、[一七]残る物とてその名ばかり、土佐[一八]は硯の海あさき事にはあらず。

袖も通さぬ形見の衣

猿[一九]に袴を着せて看板出し、えびす橋筋[二〇]に「根本浮世楊枝」とて、芝居若衆の定紋をうちつけ置きしに、それ〲のおもはく、その子に枕のかたらひ及びがたき人、せめては心晴らしにこの紋楊枝を手にふれて口中琢ける時は、恋の君が美舌をくはゆる心地のして、哀れや気をなやましぬ。これ程の思ひなれば、身に替へてなるものならば、命は夜の霜、朝を待

に船に引き上げた。下りの風向きもよく船出し、風早の浦を過ぎた十二日の暮れ方から、土佐の男はうつうつと気がめいり、前後不覚となって、ただ半弥の顔だけを思い浮かべ、身をもだえて気が変になった。船頭どもは怪しく思って磯におろし、漁師の家を頼んで友達が二人付き添い、看護をつくした甲斐もなく、しだいに衰えてもがき苦しんだ。今思えば、よけいな形見であった。大坂を旅立つ時に半弥が贈った脇差でみずから命を落とし、血は草や芥を染め、死骸を道ばたに横たえた。恋ゆえに最期をとげた気持は、日記に書いてあったが、残ったのは男の名ばかりであった。土佐名産の硯の海のように、男の心は浅いものではなかった。

袖も通さぬ形見の衣

猿に袴をはかせた看板を出し、道頓堀の恵比須橋筋に「根本浮世楊枝」といって、歌舞伎若衆の定紋をつけた楊枝を売る店があった。人々はそれぞれ好みがあるのだが、その子を茶屋に呼んで遊べない人は、せめてもの気晴しに、この紋楊枝で口を磨き、恋人の美しい舌をくわえた気持になり、かえって悩むのであった。それほど思いつめているのなら、命と引

一二 素人女。
一三 広島県福山市鞆町の海岸。沼隈半島の東南端にあり、燧灘に面する、古来、有名な景勝地。
一四 『遊仙窟』の字訓。
一五 憔悴の当て字。やつれて。「憔悴とおとろへ果」(近代艶隠者一の四)。
一六 「血は草芥を染め、骸は路径に横たはれり」(太平記七)。
一七 「松風ばかりや残るらん」(謡曲・松風)によるレトリック。
一八 硯は土佐の名産。「硯石　西寺ノ水崎ニ於テ、三月三日ノ潮乾ニ初メテ海底ヨリ出ヅ」(和漢三才図会・土佐土産)。硯の海は墨池。

❖貞享三年(一六八六)正月二日、呉服屋の借金が払えず、舞台衣装まで取り上げられた大和屋座の若衆方戸川早之丞が義理死にした一件を描く。巻六の五とともに追善の章。

一九 『人倫訓蒙図彙』楊枝師の条に「猿屋楊枝といふ。いわれ唐の猿は歯あかくかほ白し。日本の猿は歯しろきゆへに楊枝の簡板たり」とある。


楊枝師
(人倫訓蒙図彙)

二〇 大阪市中央区の道頓堀川に架した恵比須橋(現、戎橋)に通ずる町筋。芝居町に近い。

一　花代の略。揚代さえ払えば。

二　北は船場、南は道頓堀の恵比須橋に至る心斎橋筋。
三　「獅子笛…これは猟夫の用る鹿笛にはあらず。頭に獅子を付たる笛なるべし」(嬉遊笑覧六)。
四　子供だまし。
五　織り方の粗い綿布。
六　心斎橋筋を南へ恵比須橋を渡れば芝居町。天和・貞享当時は嵐座・荒木座・大和屋座などがあった。
七　常打ちの芝居。決まった場所で決まった興行をする芝居。
八　前文を受けて「灯台本くらし」というべきところを、灯台本はけちで油のへるをなげきて暗し、といった。「惣じての事灯台元くらし」(胸算用三の四)。
九　丹波国多紀郡雲部村大字村雲(現、兵庫県多紀郡篠山町に属す)。「神南備の山の景色はつれなくて時雨ふりくる村雲の里」(懐中抄)。

ちて消ゆべきが、勤め子の習ひとて、いづれにても花[一]といふ一字にて自由に詠めらるる事なればこそ人死のなけれ。かかる面影を江戸・京・大坂、三が津に生れあはして、明暮見るさへあかざりし。遠国の人稀に見て、生きて帰るは不思議なり。狂言の番組・役付けを求めて、その名をあらましに覚えて、我が国がたの夜ばなしの種となるも、上方にのぼりし徳ぞかし。

　世に又世をわたる業程かなしきはなし。道頓堀の真斎橋[二]に人形屋の新六といへる人、手細工に獅子笛[三]あるいは張貫の虎、またはふんどしなしの赤鬼、太鼓もたぬ安神鳴、これみな童子[四]だらしの様々拵へて、年中丹波がよひして、そのもどりには竹の皮・荒布[五]に肩替へて、しづかなる心なく、元日より大晦日まで、夫婦の口過ぎばかりにさりとはせはしく、橋[六]ひとつ南へわたれば常芝居[七]のあるに、つひに見た事もなし。灯[八]台本油の耗るをなげき、始末心よりこれなり。

　この人、ある時、道に行き暮れて里とほく、村雲山[九]も時雨もよほして、風は松をさわがせて次第に淋しくなれば、や

き替えに思いがかなうのであれば、夜の霜が朝を待って消えるように、命がけの者もあるはずなのに、勤め子というものは、花代しだいで自由に眺められるので、人死にがないのである。その美しい若衆の顔かたちを、江戸・京・大坂の三都に生れあわせて、毎日眺めても飽きないのだから、遠い田舎の人が稀に見て、生きて帰れるのは不思議だ。狂言の番組や役付を買って、その名をあらまし覚え、故郷での夜話の種にするのも、上方にのぼった得というものだ。

　さて世の中に、生きていくための仕事ほどつらいものはない。道頓堀の心斎橋に、人形屋の新六という者が住んでいた。手細工で獅子笛とか、あるいは張貫の虎、または褌なしの赤鬼、太鼓を持たない安神鳴など、みんな子供だましの玩具を作り、年中丹波へ通い商いをして、帰りには竹の皮や荒布を仕入れ、落ち着く暇もなく元日から大晦日まで、夫婦が食うだけのために、全くせわしく暮していた。橋一つ南へ渡れば、常設の芝居があるのに、かつて見た事がなく、灯台もと暗しというが、行灯の油の減るのを惜しむけちな心から、そんなありさまであった。

　この新六がある時、道中で日が暮れたが、村は遠く、村雲山も時雨れ、風は松

一〇 子安は安産すること。安産に効験ある地蔵堂。「丹州(丹波)老の坂に子安の塔あり、是は地蔵菩薩なり」(京童一)。

一一 あらたかに。

一二 京都府宮津市の大宮文殊の海岸、天の橋立の南にある天橋山知恩寺。本尊文殊戸利菩薩。日本三文殊の一。

一三 山城・大和・河内・和泉・摂津の五か国をいう。

一四 →四六一ページ注六。

う〱[一〇]子安の地蔵堂に立ち寄りて、寒き一夜を明かしぬ。既に夜半と思ふ時、駒の鈴音けはしく耳驚かし、旅人かと立ち聞きせしに、形も見えずして御声あらたに[一一]、「お地蔵〱」と呼び給ひて、「今夜の産所へ見舞ひ給はずや。丹後の切戸[一二]の文珠ぢや」と宣へば、戸帳のうちより、「今宵は思ひよらざるとまり客あり。役々の諸神諸仏によきに心え給へ」といひ別れ給ひ、その夜の暁方に又文珠の声し給ひて、「今宵五[一三]畿内ばかりの平産一万二千百十六人、この内八千七十三人娘なり。中にも摂津の国三[一四]津寺八幡の氏子、道頓堀の楊枝屋に、願ひのままなる男子平産せし。母よろこぶ事浅からず、大きなる顔して味噌汁の餅食ふなど、人間ゆく末の身の程しらぬは浅まし。この子美形にそだちて、後には芸子になりて、諸見物に思ひつかれ、これさかんの時至りて、十八歳の正月二日の曙の夢と、かぎりの命、世間の義理ゆゑに捨つる若衆ぞ」と、先を見ひらきての御物語り、あり〱と聞きしに、程なく常の夜も明けしらみ、新六地蔵堂を起きわかれ、丹波より難波に帰りて見しに、南隣楊枝屋に、日も時もたがは

を騒がせて、しだいに淋しくなってきたので、ようよう道ばたの子安の地蔵堂に駆け込んで、一夜を明かすことにした。すでに夜中と思う時分、けたたましく馬の鈴音が聞こえて来た。旅人かと聞き耳を立てていると、姿は見えなかったが、あらたかなお声で、「お地蔵、お地蔵」とお呼びになって、「今夜子供の生れる家へお見舞いなさらぬか。丹後の切戸の文殊じゃ」と仰せられた。すると戸帳の中から、「今夜は思いがけない泊り客がございます。役々の諸神諸仏によろしく申し上げてください」と言ってお別れになったが、その夜の明け方に、また文殊の声がして、「今夜、五畿内だけで、安産が一万二千百十六人、このうち八千七十三人は娘でござった。中でも大坂の三津寺八幡の氏子の道頓堀の楊枝屋に、願ったとおりの男の子が無事に生れました。母は大変な喜びようで、大きな顔をして味噌汁の餅を食っていましたが、人間はあさましいもので、行く末の事を知らないのです。この子は美しく育って、後には役者になり、多くの見物に恋い慕われ、全盛期を迎えた十八歳の正月二日の明け方の夢のように、世間の義理ゆえに命を捨てる若衆でござる」と、先を見通してのお話を、新六はありありと聞いた。ま

ず男子産み出して、今日六日とて親類集り、はじめて髪たる祝言より、この子はそなはりて野郎下地なり。子細は、今からさへ鬢付きの色こく、首筋はえぎはまで、この何怜しみならびなき太夫になるべしと、なほ嬰児あげまきの頃より、朝暮大事に掛けてそだてける程に、はや十三よりその分知りになつて、かりにも人に悩ませ、調謔の上手、これを恋ひしのび寄る戸川早之丞と名によびて、大和屋甚兵衛座に出て若衆方の靚粧、外にかはりて小取りまはしに、諸芸を藤田小平次にもまれて、武道殊更にしこなして、尾上源太郎が替りにもなるべき者といへり。それのみ、衆道一分たしなみ情ふかく、人の言葉をあだにはなさずして、名の出ぬ程よろこばしけるは、そのかぎり知れざりき。

いつのころより役者仲間に念比分をもとめて、年月の心づかひ、それは〳〵これに思ひつづけて書くにはたらず。この念者と申しかはせしも、「口惜しき事ながら、身の勤めなれば、世にしれて逢ふ程の大臣は是非もなし。それより外なる浮気の沙汰なる人には、狂言の仕組は格別、これより脇にて

もなくその夜も明けたので、新六は地蔵堂と別れて、丹波から大坂に帰って見ると、南隣の楊枝屋に、文殊の仰せのとおり日も時も違わず男の子が生れていた。しかも今日は六日目だというので、髪垂の祝儀に親類が集まっていたが、その子は役者になるように生れついていた。というのは、今から鬢のあたりの髪の毛が黒く、首筋から額の生え際も整っていた。この美しさでは肩を並べるもののない若衆になるだろうと、両親はいよいよ幼い頃から毎日手塩にかけて育てた。早くも十三歳で歌舞伎若衆となって、人の心を悩ますほど戯れが上手なので、恋い慕う者が多かった。芸名も戸川早之丞といって、大和屋甚兵衛座に若衆方として出演し、装いはほかと違ってきりりとして、芸事は藤田小平次に仕込まれ、ことに武道が得意で、尾上源太郎の代りになるべきものといわれた。それのみか、衆道の意気地をわきまえて情け深く、人の言葉を聞き流したりはせず、浮名の立たない程度に喜ばした事は数限りなくあった。

いつの頃からか役者仲間に兄分を求めて、長い間心を尽し、それはそれは筆には書き尽せないほどであった。その兄分と約束した事といえば、「口惜しい事ですが、勤めの身ですから、世間でもそれ

一 小児が生れて六日目に胎髪を剃る祝儀を髪垂という。
二 役者の適材。
三 『遊仙窟』の字訓。原本「何怜」。
四 総角。子供の髪の結い方。→五一五ページ注六。
五 衆道の粋人。歌舞伎若衆となって。
六 『遊仙窟』の字訓。
七 →役者一覧。
八 →役者一覧。
九 『遊仙窟』の字訓。
一〇 きびきびしていて。
一一 →役者一覧。
一二 →五一四ページ注五。
一三 →役者一覧。
一四 衆道の兄分。

人に手を握らるる事、神ぞいたさじ」といひかはせり。何かこの心ざし違はず、その後は銀勤め客もおのづからいや気になりて、かの者次第にかはゆく、酔ひもせぬ酒に取乱し、をかしからぬ座敷、後には人もたづねやらず、内証きのどく、「大節季も近し」と異見してもなほやめず、極月二十二三日ごろまでうか〳〵と、[15]月夜に夜の明けて、その末々は闇になりける。

はや初芝居も程なく、舞台衣装の物ずき色々の美をつくし、天晴この小袖をかさね、[16]手に入りし狂言をして見せ、念者めになかしてと、心も浮き立つ春を待ちける宵に、金剛が万の心当てにせしあなたこなたの付け届けなくて、胸算用ばらりと違ひ、[17]三五の十八、「十九、二十度づつも酒呑み荒して、その気のつかぬ大臣め。大晦日の[18]闇の鬼にかませたし。されども薬代・花代取りにやられぬ物なるに、さりとは悪し」と、今になつての迷惑、[19]大方の人には「留主〳〵」と、[20]二番鶏の鳴くまでのがれ、「とかくない袖は振られぬ」といへども、呉服屋心つよく堪忍せず、つれなや松の内には急度済まする

と知れて逢うほどの大尽客はしかたがありません。それよりほかの浮気な相手には、芝居の仕組みは別として、これからは人目のない所で手を握られるような事は、神かけていたしません」と言うのであった。その誓いに背かず、その後は銀で勤める客も自然といや気がさし、兄分がしだいにかわゆくなり、酔いもしない酒に取り乱して、座敷の勤めもおざなりになったので、後には客も寄りつかなくなった。そうなると家計も苦しくなり、「大晦日も近いから」と意見されても、いっこうに改める様子はなかった。十二月の二十二、三日頃までもうかうかと暮し、いつ夜が明けたともわからず、やがてまっ暗闇の大晦日を迎えた。

初芝居を明日にひかえ、早之丞は好みの舞台衣装に趣向をこらし、見事にこの小袖を着て、手なれた芝居を演って見せて、念者を泣かせてやろうと、心もうきうきと春の訪れを待っていたその夜、草履取りが心当てにしていた方々からの暮れの祝儀がまるでなく、胸算用がばらりと狂ってしまった。「十九度も二十度も酒を飲み散らしておきながら、付け届けに気のつかぬ大尽め。大晦日の闇に隠れている鬼に嚙ませてやりたい。といって薬代と祝儀はこちらから取りにやるわけ

一五　いつ月夜が明けたともわからず。

一六　手なれた。得意の。

一七　目算の狂うこと。十九、二十度と続けた。「心当てなる料理もばらりと違ひ、三五の十八」(一代女三の三)。

一八　気味わるいことのたとえ「くらがりに鬼をつなぐ」をふまえた。

一九　たいていの借金取りには。

二〇　未明に鳴くのが一番鶏、夜明けに鳴くのが二番鶏。

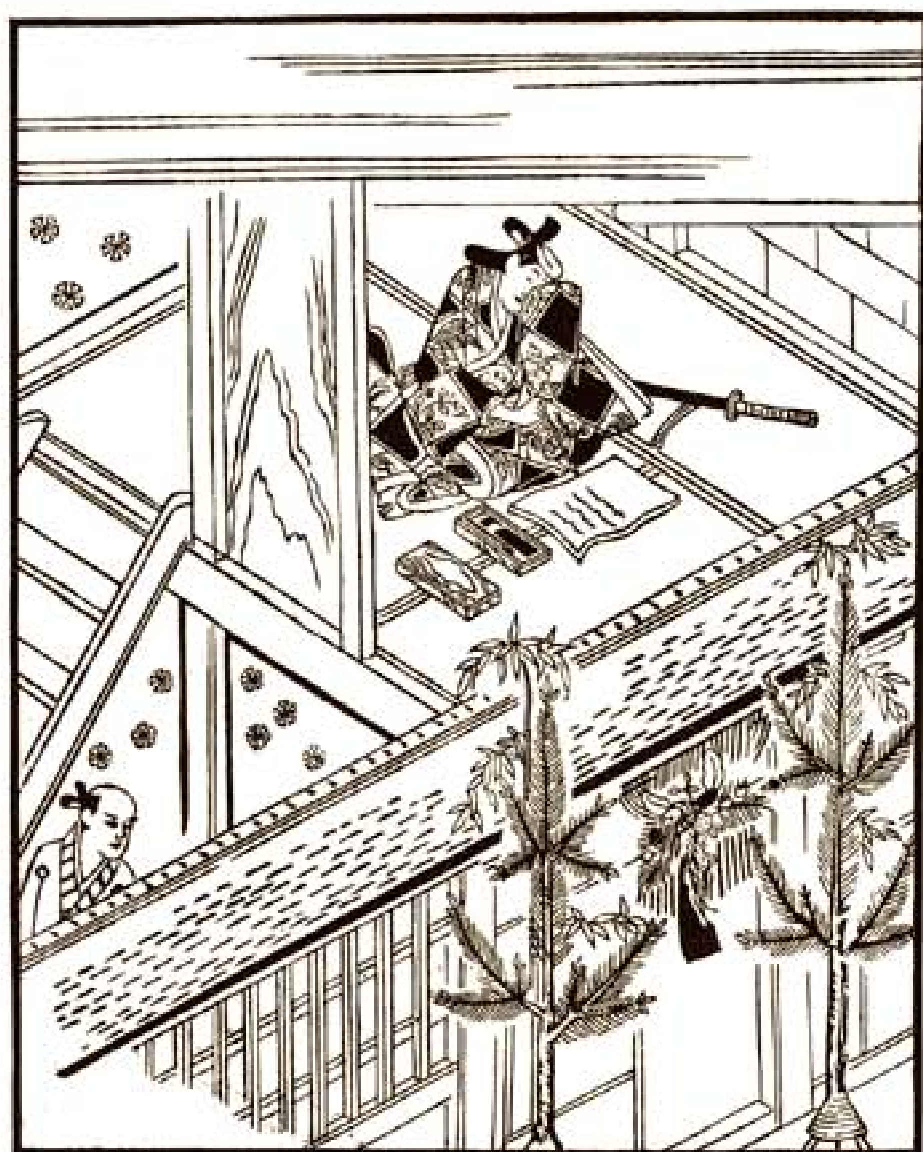
一 舞台衣装に対してふだん着をいう。
二 元日の朝、大阪市浪速区恵美須の今宮戎神社から売りに出た若恵比須売り。恵比須の像を印したお札で、門口にはり、神棚に供えて福を祈った。
三 大阪市中央区高津にある高津の宮。
四 道頓堀の元朝の川水。
五 →役者一覧。
六 →役者一覧。
七 →四六一ページ注一六。
八 裄は着物の背縫いから袖口に至るまでの長さ。
九 鼠色の木綿のお仕着せに。
一〇 歌舞伎で行う、三人で舞う三番叟。能の翁を踏襲したもの。顔見世および正月興行の初日に演じ、「翁渡し」と称した。

断りも聞き分けず、[一]地衣装も残らず取つて帰れば、いうて甲斐なき恨み、「むごい仕方」と、この上ながら分別するうちに、南の方より今宮の[二]若えびす売りなど新し雪踏の音、人の姿も心も春になりて、東は[三]高津の宮の松の葉越しに初日常とはかはりたる気色、何心もなく早之丞打ちながめて、[四]堀江の若水に口そそぎなんどして、身の上をいはひて歳旦の和歌を吟じける所へ、[五]坂田小伝次・[六]山本左源太、大振袖の色香をふくませ、梅か桜かこれぞ花揃へ、「いざ[七]太夫もとへの初礼同じ道に」とささへばよろこび、冬より着つづけたる小袖ぬぎ捨て、「今日の肌着は浅黄よ」といはれし時、金剛まだ隠して、「御[八]裄ゆき違ひて皆々仕立てなほしに」と申せば、物静かに声して、「我はお跡より」といひやるもうたてし。

その日もむなしく暮れて、明くれば二日のはじまり、太鼓ひびきわたりいまだ人顔も見えぬうちより、諸職人の弟子たまま〳〵隙を得て、[九]鼠色に五所紋の袖をつらね、無理ばきの革足袋ふくろぶるを用捨なく、足ばやに言葉せはしく、「早之丞が芸ぶりを見るべし」とつぶやき行く。その後[一〇]式三番すぎ

にはいかない。全く憎いやつだ」とぼやきながら、今になって当惑している。たいていの借金取りには、「留守、留守」と二番鶏が鳴くまで言いのがれ、「何といってもない袖は振られない」と断っても、呉服屋だけは気が強くて承知しない。冷酷にも、松の内には必ず済ますからという言い訳も聞き入れないで、ふだんの衣装までごっそり持って帰った。草履取りは今更どうしてみようもない恨みつらみを並べ、「ひどい仕打ちだ」と嘆きながらも、この後の事を考えるうちに、南の方から今宮の若恵比須売りがやって来た。通りには新しい雪踏の音がし、人の姿も心も春めいて、東の高津の宮の松の葉越しに昇る初日の出が、いつもとは変った趣である。早之丞は何心なくその景色を眺め、道頓堀の若水で口をそそいだりして身の上を祝い、歳旦の和歌を詠んでいるところへ、坂田小伝次と山本左源太が訪れた。はなやかな大振袖の姿は、梅か桜かと見まごう風情である。「さあ、太夫元へのご年始に、一緒に参りましょう」と誘うと、早之丞は喜び、暮れから着続けていた小袖を脱ぎ捨て、「今日の肌着は浅黄にしよう」と言った時、草履取りはまだ隠して、「裄丈が違いましたので、みんな仕立て直しに出しました」

二　語りぐさ。話の種。


正月二日、狂言が始まるという使いが来ても、舞台で着る衣装がなく、自宅の二階にかけ上がり、涙ながらに遺書を書いている戸川早之丞。立派な門松が飾られ、金剛は下で様子をうかがっている。

て、狂言はじまるとて楽屋より使は来り、衣装はなし。今はせんかたなくこの事を語れば、早之丞うち笑ひて、「浮世程思ふままならぬはなし」と、二階にあがるを見しが、筆ばやにその事にはなく書置きして、惜しきは命、「これは〳〵」と、なげきて帰らぬ若衆、さても死なれぬ所を、すこしの義理につまりて武士もなるまじき最後、末々の世のかたり句二ぞかし。物はあらそはれぬ事、子安の地蔵の御言葉、思ひあはすればまことに正月二日の骨仏とはなりぬ。

と言った。早之丞は落ち着いた声で、「私はおあとから」と言ったのも、情けないなりゆきであった。

その日もむなしく暮れて、明けると二日の初芝居が始まった。櫓太鼓が響き渡り、まだ人顔も見えないうちから、諸職人の弟子どもはたまさかの休みに、五所紋をつけた鼠色のお仕着せを着込み、無理にはいた革足袋のほころびるのもかまわず、足ばやに言葉もせかせかと、「早之丞の芸ぶりを見よう」と、つぶやきながら通り過ぎて行く。その後、幕開きの式三番も終り、いよいよ狂言が始まりますと、楽屋から使いの者がやって来たが、衣装はない。今は仕方なく草履取りがこの事を話すと、早之丞は笑って、「浮世ほどままならぬものはない」と言って二階へ上がるのを見たのが最後で、筆ばやにその事とはなしに書置して、惜しい命を絶ったが、「これは、これは」と嘆いても返る事ではない。なかなか死ねないところを、少しの義理につまって、武士でもできそうにない最期をとげたのは、後世の話の種にもなるだろう。物事は疑えないもので、子安の地蔵のお言葉を思い合わせてみると、そのとおり早之丞は、正月二日に骨仏となった。

恨みの数をうつたり年竹[一]

芝居子の一座に用捨すべきは年せんさく[二]なり。秋も末の気色、露に時雨の淋しき程もふらず、昼から西日移りて、東山の雲に虹[三]の大筋なる縞繻子を着つれて行くは誰が子ぞ[四]。村山[五]座の御太夫、琢かずして光ある玉村吉弥[六]といへり。今が花の都に思ひ懸けざるはなし。その日は衣[七]の棚四六と名に立つ児人好きのさそひて、伏見[八]の城山へ初茸狩りにまかるとて、若衆あまたうかれ男四条河原を出て、はやくもここ櫃川[九]といふ。[一〇]むかし読み残せし樺桜も紅葉してけり。春にまさりて詠めにつづく、うら枯れの藤[一一]の森の宮所を過ぎ、山を南にのぼれば、麓に京駕籠をおろして、花紫の帽子姿、松よりほかに見る人もなければ編笠とり捨て、うるはしき面子[一二]して、乱れし薄を心ありげに分けゆくを、思へば恋の山入り[一三]そむるより袖は[一四]ぬれのさかりと、外より見ての浦山しくこそ。「惣じて傾城は床の内、野郎を道中を慰み」と、色に馴れたる人のいへり。

恨みの数をうったり年竹

歌舞伎若衆の一座でしてはならないのは、若衆の年齢をほじくる事である。秋も終りに近い時分で、露や時雨も淋しいほどは降らず、昼過ぎには西日もさして、東山の雲に大きな虹がかかった。その虹のように大筋の縞繻子を着流して行くのは誰あろう、村山座の若女方で、磨かないでも光り輝く玉村吉弥という若衆であった。今が盛りの吉弥に、花の都で思いをかけない者はなかった。その日は衣の棚の四六という、人に知られた若衆好きに誘われ、伏見の城山へ初茸狩りに出かけることになり、大勢の若衆たちと浮かれ男が四条河原を出て、早くも伏見に近い櫃川にさしかかった。古歌に詠まれた樺桜も、すでに紅葉していた。末枯れた藤も春以上に眺めのよい藤森神社を過ぎて、城山を南に向かって登り始めた。麓で京駕籠を乗り捨て、花紫の帽子姿の若衆が、松よりほかに見る人もないので編笠を脱ぎ、美しい顔をさらして、乱れた薄を心ありげに踏み分けて行く。思えば「恋の山入りそむるより濡るる袖」とい

❖主人公は巻五の五の主人公、京都の若女方玉村吉弥が再登場。伏見の城山へ初茸狩りに行った先で、男伊達に杯をせびられた吉弥が、色仕掛けで酔わせ、左の鬢髪を剃り落として、土産に持って帰った。巻五の一と巻七の一では藤村半太夫、巻五の五と巻七の四では玉村吉弥と、二度も同じ役者を主人公としているのは、武家社会の衆道と違って、職業的なこの世界には、ユニークな逸話が乏しかったせいであろう。

一 本文中に述べているように、これを両手で持って打つと、当人の意志を無視して、年の数だけ打つという神通力のある竹。

二 年齢を問いただすこと。

三 虹のように大筋の縞繻子。中国の広東・オランダより舶載の繻子を最上とした(和漢三才図会)。

四「朝倉や木の丸殿にわれをれば名のりをしつつゆくは誰が子ぞ」(新古今)。

五 村山又兵衛　→役者一覧。

六 →役者一覧。

七 衣の棚は京都の町名。北は下長者町に起こり、南は三条に至る。法衣を商う店が多かったゆえの名。四六は十兵衛などを分解した遊里名。

八 元和九年(一六二三)に伏見城廃毀後の伏見山は、桃樹を多く植えたので桃山と称するようになり、延宝年間には桃花の勝地として喧伝された。

九 宇治から伏見への間、木幡に近い小川。「都出でて伏見をこゆるあけ

がたはまづ打ちわたす櫃川の橋」（新勅撰）。
一〇「櫃川の岸に匂へるかば桜ちるこそ花のとちめなりけれ」（夫木抄）。
一一 京都市伏見区深草にある藤森神社。
一二『遊仙窟』の字訓。
一三「恋の山しげき小笹の露わけて入りそむるより濡るる袖かな」（新勅撰）。
一四 恋盛り。
一五 壁・ふすま・障子などの腰の部分に紙を張ること。ここは、若衆の手紙を張ったもの。
一六 旅稼ぎの陰間。↓五三五ジ注三。

その日も暮ちかくなりての茸狩り、稀に見付けしを手ごとにかざして、里ばなれし草庵に入りて内をみれば、若衆の文[一五]腰張、名書きはむしり捨てて、なほゆかしく目を留めて見しに、文章みなわけのよき事ばかり。この文ひとりの筆にはあらず、舞台子の名残ぞかし。この法師、むかしはただ人とも思はれず、持仏堂あけてみれば、真言宗と見えて、弘法大師に菊萩を手向けて、その脇にうつくしげなる若衆の絵姿を掛けて、いと殊勝にをがまれ給ふ。「これは」と庵住にたづねければ、すぎにし事を語るに、案のごとくこの道に身を捨て、「つらき親仁にふそく、二年あまりここに山居の夢にもその事をわすれず」と、涙に墨染もはぐるばかりなげきぬ。聞くにあはれさまさりて、「おいくつ」と年をとへば、「我わきまへのなき時分にもあらず。二十二になりける」とや。「それは花はさかりにもなり給はぬ御身ぞ」と、一座の子供までも、人なみなれば義理に袖をしぼる。その顔つき、大方は分別らしく見えける。いづれ二十二よりうちなるは一人もなし。

その中に、[一六]飛子の時を思へば、さりとはふるき若衆あり。

う古歌の趣で、今が恋盛りだと、よそ目にもうらやましい事であろう。「およそ女郎は床の中、若衆は道中の慰み」と、色事になれた人が言ったことがある。

その日も暮れ近くまで茸狩りをして、たまに見つけた初茸をてんでに持ち、村はずれの草庵にはいって内を見回すと、若衆からの手紙が壁や襖の腰張りにしてある。宛名をむしり取ってあるので、なお奥ゆかしく思われ、注意して見ると、文章はみな情のこもった内容で、しかもそれぞれ筆が違っている。歌舞伎若衆の名残である。この庵主の昔はただ者とは思われない。持仏堂をあけて見ると、真言宗とみえて、弘法大師のお姿に菊と萩を供え、その脇に美しい若衆の絵姿が掛けてあって、たいへんありがたく拝まれた。「これは」と四六が庵主に尋ねると、いろいろと昔の事を話してくれた。思ったとおり男色におぼれ、「やかましい親仁がいやで、二年あまりもここに山住いしていますが、夢にもその事は忘れません」と、涙で墨染の衣の色もはげるほどに嘆いた。事情を聞くとかわいそうでならず、「おいくつ」と年をきくと、「私はもうわきまえのない年頃ではありません。二十二になります」と言う。「それではまだ男盛りに間のあるお身の上じゃあり

ついでながら年をとへば、「覚えませぬ」といふこそをかしけれ。あるじの法師のいはく、「ここに幸ひ年竹とて、しれぬ年の正直にしるる物こそあれ」と、かの若衆に年竹をもたせて立たせおき、子細らしく印(一)をむすびければ、しばしありてこの竹をうちけるほどに、皆々同音にて数とりける。十七八九までは何心もなく、それより上は恥づかしくなりて、左右の手に力身(二)を出し、随分うたぬやうにしけれども、不思議やうちやむ事なく、三十八にしてかの竹両方へわかりぬ。若衆赤面して、「まことしからぬ年竹」とかいやり捨てられしを、法師眼色かはつて、「諸仏も証拠、これに偽りなし。うたがはしくは幾度なりともうつて見給へ」といふ。この座の若衆、尻(三)のはげる事をおそろしく、誰がうつ人もなく、座興さめてありける。これから酒なせと、初茸塩焼きにして、おの〳〵前後を現の枕となしたはぶれける。折を見合はせ羽織の無心をいふ若衆もあり。六間口の家の約束するもあり。当座に小柄をもらふもあり。さても〳〵手ばしかく取りあげるこそをかしけれ。

ませんか」と、居合わせた若衆たちまで、人並みに義理の涙をこぼした。その顔つきは大方思慮深そうに見えた。二十二歳より若い者は一人もいなかったのである。

その中に飛子の時の事を思えば、ずいぶん古い若衆がいた。ついでに年を聞くと、「覚えておりません」と言ったのはおかしかった。すると庵主が、「幸いここに年竹といって、わからない年を正直に知らせてくれるものがある」と言って、その若衆に、年竹を持たせて立たせておき、もっともらしく印を結ぶと、しばらくして、若衆が両手の竹を打ち始めた。みんなが一緒にその数をかぞえると、十七、八、九までは若衆も何心なく打っていたが、それから先は恥ずかしくなって、左右の手に力をこめ、ずいぶん打たないように力んだけれども、不思議にもやめることができず、三十八まで打ってその竹は両方へ分かれた。若衆は赤面して、「いんちきな年竹だ」と言って投げ捨てたので、庵主は目の色を変えて、「諸仏を証拠に、これに偽りはない。疑わしいなら、幾度でも打ってみなさい」と言う。居合わせた若衆は、化けの皮のはげるのが恐ろしくて、誰一人打つ者はなく、座はしらけてしまった。これから酒にしようと、初茸を塩焼きにして、みんな前後

一 主として真言宗において、祈念する時に両手の指をさまざまに組み合わせること。

二 力をこめて。

三 尻が割れる、尻が破れるともいう。秘事が露顕すること。化けの皮がはげる。



玉村吉弥は、人里はなれた草庵で、杯を無理に所望した男伊達を巧みにあしらい、男が看板にしていた釣髭と片小鬢を剃り落とす。庭にいる吉弥の草履取りは笑いをこらえている（あるいは居眠りか）。

　このおもしろき中へ、都にはめづらしき男達、「雲の今とぎれ」と我が悪名を申し、枝折戸に入りて、小者に長刀をもたせ、竹縁にさしかかり、「玉村吉弥がうけし盃をこれへ」といふ。吉弥きかぬ顔してありしが、「この盃はこのうちにまゐらす方がおひとりある」といへば、この男堪忍ならず、「是非いただくべし。お肴はこれに」と、件の長刀をとりまはせば、いづれもおそれて詫びてもきかず。吉弥打ち笑ひ、「にくさも悪し。ただはおかじ、我にまかして皆々先へ」とかへし、吉弥はかの馬鹿男にしなだれよりて、「今日のおも

不覚に酔って戯れ始めた。潮時を見て、羽織をねだる若衆もあり、六間間口の家を約束する者もあり、即座に小柄を貰う者もある。いやはや、すばしっこく客からまき上げるありさまはおかしかった。

　このおもしろい最中へ、京都には珍しい「雲の今とぎれ」という男伊達が、みずから悪名を名のって枝折戸からはいり、下男に長い刀を持たせて竹縁にさしかかり、「玉村吉弥が受けた杯をこちらへ」と言う。吉弥は聞こえないふりをしていたが、やがて、「この杯は、この中に差し上げるお方が一人ある」と言うと、男伊達は承知せず、「是非ともいただこう。お肴はここにある」と、持たせてあった長い刀をひねくりまわすので、みんながこわがって、詫びを入れたが聞き入れない。吉弥は笑って、「ほんとうに憎いやつです。ただではおきません。私にまかせて、皆様はお先へ」とみんなを帰しておいて、そのばか男にしなだれかかり、「今日はまだるっこい町人相手で、ほんとにつまりませんでした。酒ならばあなたのような男らしい殿御のお相手をしてこそ、飲めようというものです」とたらしこんで、むやみやたらと飲みかわした。吉弥は男の機嫌をとって、うまくあしらったので、このばか者は夢現になって、

しろからぬ事、町人のまだるき付き会ひ酒ならば、かうした殿こそ呑まれた物ぞ」と乱[一]りなるもりかはし、その男の気をとりて、よい[二]程にもつてまゐれば、このたはけ、寝もせぬ夢のごとくなりて、いつとなく恋を仕掛くる時、「いかにしてもむさくさとしたお髭さはりとなりて、口ちかよせる事も心にかかる」などいへば、「君の御こころにいらぬ物つらに置くもよしなし。小者まねきて御気に入る程に剃れ」と云ふ。「とても御事に、我が手にかけて殿ぶりをよきに」と、吉弥剃刀取り持ちて、この男の上髭は残して、物の見事に左の方の鬢剃りて、右ばかりありしままにすて置きける。

万事覚えず鼾あらけなき中に、ここを足ばやに立ちのき、京へのみやげにこの男の釣髭[三]を持ちてかへれば、いづれも大笑ひして、「さても手に入り[四]し事なり。これを肴に酒よ」といへば、秋田彦三郎[五]、即座に髭舞ひとはやし出し、座中に腹抱へさせける。かの男は目覚まして後、剃られし髭を惜しみなげきかなしむ事、是非もなき身とて、髭見世[六]をとりおき、この事さたなしにかへりける。その後見れば、勧進的[七]を世わ

いつとなく恋を仕掛けてきた時、「どうもあなたの、そのむさくるしいお髭が邪魔になって、口づけをする気にもなりません」と言うと、「君のお気に入らない物を、面に置いても仕方がない。下男を呼んで、お気に入るほど剃らせなさい」と言う。すると、「どうせついでですから、私の手で男振りをよくして差し上げましょう」と吉弥は剃刀を持ち、この男の口髭だけを残して、ものの見事に左の方の鬢を剃り落とし、右の方だけそのままにしておいた。

男は前後不覚で高鼾をかいているうちに、吉弥は草庵を足ばやに立ち退き、京都への土産には、この男の釣髭を持ち帰った。みんな大笑いして、「さても、うまくしてやったものだ。これを肴に飲もうじゃないか」と言うと、道化方の秋田彦三郎は、即座に髭舞いといって囃し始めたので、みんなは腹をかかえて大笑いした。その男は目が覚めてから、剃り落とされた髭を惜しみ悲しんだが、しかたがないので、看板の髭を取っ払って、この一件には目をつぶって帰って行った。男のその後を見ると、勧進的を商売にしていた。髭のない顔つきが思いやられ、いっそうその男のことがおかしかった。

一 むやみやたらと飲みかわし。
二 ほどよくあしらったので。
三 口髭の先端をはねあげたもの。→四六二ページ注五。
四 思うように事をはこぶをいう。
五 →役者一覧。
六 看板の髭を取り払って。
七 寺社の勧進のためと称して行った賭弓。京的ともいった土弓で「めった的」の類。

❖作者が大坂荒木座の若女方岡田左馬之助に誘われて、堺の浦の地引網見物に出かけて帰るまでの紀行随想。左馬之助の評判を折り込んでいる。

たりにしてありける。髭なき事を思ひやられ、なほこの者をかしかりき。

素人絵に悪や金釘

[八]行く春の境の浦の桜鯛あかぬ形見にけふや引くらん。これは[九]為家卿、都には見ぬ真那鰹・飛魚の生きてはたらくに目を覚まして読み給へり。「地引きの網は春より[一〇]折節こそ増され」と、[一一]岡田左馬之助といふ[一二]風流者にさそはれ、[一三]弥十郎もゆく水、[一四]仕過し組の五左衛門もうきたつばかりに、[一五]大紋を揃へ単物を着たる男の肩骨のつづくほど急がせ行くに、人の心も同じ道筋、京の[一六]那波屋の誰か、[一七]嵐三右衛門もてなし、山の替りの海自慢、[一八]細江の浦に網をおろさせ、かかる気色を見せばや。駕籠十八挺ならべ立てしは、しばし里あるがごとし。[一九]嵐門三郎・[二〇]沢村小伝次・[二一]藤田鶴松、その外もみな子供役者まじり、「[二二]嵐三例の大酒、今宵もまた[二三]松が[二四]ねほれて、下戸のあらはるるまでの遊興なるべし」と指さして、出茶屋の吉が許に腰を

素人絵に悪や金釘

「行く春の堺の浦の桜鯛あかぬ形見に今日や引くらん」という古歌があるが、これは民部卿為家が、都では見られない真魚鰹や飛魚の生きてはね回るありさまに、目を見はってお詠みになった和歌である。「地引網を楽しむのは、春よりも夏がよい」と、ある日作者は岡田左馬之助という風流男に誘われた。太鼓持の弥十郎も行けば、いつもやり過ぎの五左衛門もうきうきとして、大紋をつけた揃いの単物を着た駕籠かきの肩骨の続くかぎり急がせて行った。いずこも同じ人心で、京都の那波屋の某を、嵐三右衛門がもてなそうと、山の代りの海自慢をして、細江の浦に網をおろさせて見せようとやって来た。駕籠を十八挺立て並べたありさまは、臨時に村でもできたかのようであった。嵐門三郎・沢村小伝次・藤田鶴松、そのほか若衆が大勢交じり、「嵐三は、いつものように大酒、今夜もまた鶴松が

八『夫木抄』巻二十五に、収められている民部卿為家の歌。
九 藤原定家の長子。和歌師範家の一つである冷泉家の祖、為相の父。『続後撰集』『続古今集』の撰者。建治元年(一二七五)没。七十九歳。
一〇 中夏。五月下旬(後文による)。
一一 →役者一覧。
一二 作者西鶴が。
一三 未詳。太鼓持か。
一四 太鼓持であろう。「仕過し組」は、やり過ぎる手合いの意。
一五 大きな家紋をつけた単物を着た駕籠かき。
一六 近世初期に台頭した、播州(兵庫県)那波港出身の京都一流の富豪那波屋九郎左衛門。二代目は長男が継ぎ、身代六千貫目、三代目からしだいに身代が傾いたと『町人考見録』に見える。『好色二代男』巻一の三にも、那波屋の何某が嵐三右衛門と島原で遊ぶくだりがある。
一七 →役者一覧。
一八『一目玉鉾』巻四、住吉に近く「細江」を記載。歌枕。「住吉の細江にさせる澪標ふかきにまけぬ人はあらじな」(詞花集)。
一九 →役者一覧。
二〇 →役者一覧。
二一 →役者一覧。
二二 嵐三右衛門の略称。「しからば嵐三が諸芸、一つ書にして御めにかけんと」(役者大鑑合彩)。
二三 藤田鶴松の松。
二四 寝惚れて。ねとぼけて。

掛くれば、簞笥の下より朝顔[一]焼きの天目出して、「これまゐれ」のよし。兼ねてしるべのよしみとて、いはでその心ざし、気を付けてみるに、人様のためにと硯紙などありける。この女は大方に手も書きて[二]、歌学の心[三]もある人の申しき[四]。

くるしからぬ酒事にして[五]北の方をみれば、国といふ女の茶みせより、かはゆらしき手してまねく。上村辰弥[六]・嵐今京之助[七]なり。黒の市左衛門付きて、これも、「湊[八]と云ふ所に置網引かせて見にまかる」と、亀源といふ男つれて行く。日も昼[九]にさがり、淡路島に影移るを惜しまれ見しに、松影にきて鬢[一〇]の厚き男立ち合ひて、沓音[一一]のしをらし。昔日、光源氏住吉詣[一二]での時、この浜にてあそばしけるとなり。又古歌にも、花[一三]のえに掛けてかぞふる鞠の音のなづまぬ程に雨そそぐなり。きのふは二十八日、御田[一四]虎が涙雨の名残を、今日も袖はぬれぬばかりに降りぬ。風もいとはず毎日ここをあそび所、借銀[一五]・棚賃にて世を渡る人めきて、西の木陰にだんだら[一六]筋の幕の内に、琴の音雲井[一七]のやどりなど、これはと思ふ内に、逶迤[一八]なる女の独り二人立ち出しに恋を覚ましぬ。色黒く足ふとき酢[一九]

寝ぼけて、下戸の正体を現すまで酒宴が続くことだろう」と、一行を指さして出茶屋の吉の床机に腰かけると、吉が簞笥の下の引出しから、朝顔形の茶碗を取り出して、「これで召し上がれ」と言う。かねて作者とは知合いの仲なので、それと言わずによく気がつく事である。気をつけて見ると、人様のためにと硯や紙が用意してある。この女はひととおり文字も書き、歌学の心得もあるとある人が言った。

軽く酒盛りをしながら、北の方を見ると、国という女の茶見世から、かわいらしい手で招く。よく見ると上村辰弥と嵐今京之助であった。これも亀源という男が、太鼓持の黒の市左衛門を伴って、「湊という所に張らせておいた地引網を見に行くところだ」ということであった。その日も昼下りになり、淡路島に午後の日ざしの移るのが惜しまれて眺めていると、松陰で神主らしい鬢の厚い男たちが立ち合い、鞠を蹴る沓音がしおらしく聞こえてきた。昔光源氏が、住吉社に詣でられた時、この浜で蹴鞠を遊ばしたという。古歌にも「花の枝に掛けてかぞふる鞠の音のなづまぬ程に雨そそぐなり」とある。昨日は二十八日で住吉社の御田祭に虎の涙雨が降ったが、今日もその名残

一 朝顔の花形に焼いた天目茶碗。略して朝顔ともいう。
二 文字もひととおり書いて。
三 和歌の本質や歴史、作歌の作法や故実・文法・注釈などに関する知識。
四 あるとある人の申しき。
五 軽く酒盛りをして。
六 →役者一覧。 七 →役者一覧。
八 堺郊外の湊村。現在の堺市西湊町・東湊町。 九 午後二時前後。
一〇 公卿や神主など、冠をかぶる職種の頭つき。ここは住吉の神主であろう。 一一 蹴鞠の沓の音。
一二 『源氏物語』明石の巻で、源氏が明石を引き上げて都への帰途、難波の浦で御禊をして、住吉社へ代参を遣わしたくだりをいう。謡曲「住吉詣」に作る。
一三 慈円の家集『拾玉集』に収められている。
一四 五月二十八日は住吉神社の田植神事「御田祭」の日。この日降る雨を「虎が涙雨」(季題)という。大磯の遊女、虎御前が、決死の敵討ちに出かける恋人の曾我祐成と別れた時の涙雨という。
一五 店商いをやめ、主として金融業で悠々と暮している上流町人。俗に仕舞屋といった。
一六 だんだら染め(段染めとも)に同じ。異なった色で段々に染めた横縞模様。
一七 八橋検校作曲の箏曲組歌「雲井の曲」。八橋検校は近世初期の箏曲家。京都で俗箏の流派を創始。貞享二年

蛤売りも、前髪あればやさしく見えぬ。

「世は広し、今もまだ[二〇]平髷かけて、[二一]下髪の[二二]たるい姿をようは見てゐる事」とそしりて、我らは男色の道を分けて、笹葺きの里つづき[二三]丸雪松原・[二四]朴津を過ぎて、境南の端の旅籠屋に、人留める[二五]一夜女の立ち出、[二六]水風呂を見せかけ、「もえぎの蚊帳もかしませう」とまねく。ここに泊りを定め、亭主は梱屋の惣兵衛呼び出し、「いづれも高野参りなれば、[二七]つん醒き鍋のうつり香のなきに」と云ふ。程なく、「御膳出します」と、豆腐・こんにやく・竹の子のあへ物、「げに旅の習ひ、この不自由さを忘れな」と、それより[二八]中浜に行けば、今朝より[二九]うけおろしたる[三〇]手繰り舟、礒ちかく引き寄すれば、小肴摑み取りなり。生船波の下をくぐらせ、大鯛二十四枚はなち掛けて、生死の間なく塩焼きにして盃を流し、猟師に小歌をのぞめば、赤き頭を振つて、この酒機嫌、[三一]潯陽の江の心地ぞかし。[三二]楽天が今見ば、この智恵なしを笑ふべし。

沖の方より浮藻につれて、一尺あまりの檜木板に児人の姿を模し、身に明所もなく[三三]金釘を打ちて、見るにうるさし。こ

が、袖を濡らさぬほどに降っている。それなのに雨風もいとわず、毎日ここを遊び所にしているのは、多分、金貸しや家賃で暮す人らしく、西の木陰に段だら染めの幕を張った中から、「雲井のやどり」などいう琴の音が聞こえてきた。これはと思ううちに、なよなよとした女が一人二人出て来たので、恋心が覚めた。色黒く足の太い酢蛤売りでも、前髪があれば女よりは優しく見える。

「世の中は広いものだ。今でもまだ平元結をかけて、下げ髪にしたあまったるい姿を、よくもまあ見ておられるものだ」と罵りながら、我々はひたすら男色の道をたどり、笹葺きの小家のつづく霰松原や朴津を過ぎて、堺の南の端にある宿屋町に着いた。客引きの飯盛り女が出て来て風呂を見せ、「萌黄の蚊帳も貸しましょう」と誘うので、その宿に泊まることにした。梱屋の惣兵衛という亭主を呼び出し、「みんな高野参りだから、料理はなまぐさい鍋の移り香のないように」と言いつけた。まもなく「お膳を出します」と言って、豆腐とこんにゃくと筍のあえ物を運んで来た。「まことに旅というものは、不自由なものだということを忘れるな」と言って、それから目当ての中浜に行くと、今朝から受け網を下ろし

(一六五)没。

一八 『遊仙窟』の字訓。 一九 春、堺の浦でとった蛤のむき身を芥子酢で食し、酢蛤といった(和漢三才図会)。
二〇 平元結。丈長という。幅三センチほど。 二一 →二九一ページ注五。
二二 あまったるい。
二三 住吉から堺に至る間にあった松原で、現在は住之江区安立となる。歌枕。「丸雪」(易林本節用集)。
二四 現、大阪市住吉区住吉神社の付近で、大和川以南の地。歌枕。
二五 一夜の伽をする飯盛り女。
二六 蒸風呂に対する湯風呂。
二七 ひどくなまぐさい。「つん」は強意の接頭語。「つんのめる」など。
二八 堺の中浜筋は、中央の大道筋より西二筋目。その海岸。
二九 受け網を仕掛けていた。中央に袋があって、魚を追い込んで捕えるようにした網。
三〇 網繰船。下ろした受け網をたぐる小船。
三一 謡曲「猩々」による。中国江西省潯陽江に住む赤毛の猩々に、くめど尽きせぬ酒壺を授けられる話。
三二 「潯陽江頭夜客ヲ送ル」という詩句をもって始まる、中唐の詩人白楽天の長編詩「琵琶行」は八一五年作。潯陽江のほとりに左遷されていた時の作で、客を送る船中、かつて長安の名妓で今はおちぶれた女の琵琶を聞いた感動を叙した白楽天の代表作の一。
三三 呪詛のために打った金釘。

れ素人絵の証拠には、着物ひだり前に目鼻せはしく、母指ほそく小指ふとく、ふつつかなる事のみなり。裏板に書付けありて、「筑前の国福岡本町二丁目醤油屋の万吉、十五歳にしてすぐれたる生れ付きながら、情しらずめ、我執心をかけし甲斐なく、おもふ子細ありとて文そのまま帰したる恨み、世に神あらば七日が中に取殺し給はれ」と[一]大橋流に書きしるし、[二]箱崎の明神への願文、「万里の風波につれて今ここに流れ寄り、上方にて恥をさらす」と、又海に投げ捨つるを、左馬之助取りあげて、「様子はしらぬ国の事ながら、先づこの念者おろかなる仕業なり。御存じのわが身、なれながらも、ふかく思ふ方の心ざし、など化にはなさじ。増して常なる若衆のその哀れをや知らざらん」と、泪実の袖に隙なく、かの打ち付けたる釘をひとつ〳〵手づから抜きて、[三]人しれぬ釘の岩ねに隠し、「何か科なき身に障りのあるべし」と大やうなる取りさばき、若道の[四]本心入れぞかし。

　この人の事、近き頃絵草紙につくりて、加賀の十兵衛と申す男は、沙汰もなき事なるに、左馬之助相果てしとは諸人な

ていた手繰船が、磯近く網を引き寄せると、小魚はつかみ取りであった。生簀船を波間に浮かべ、大鯛二十四枚を放しておいて、生きたやつを片っぱしから塩焼きにして杯をまわし、漁師に小唄をのぞむと、潮風で焼けた赤毛の頭を振ってうたう。この酒機嫌は、潯陽江の猩々を見るような気持である。その潯陽江で琵琶行の詩を賦した白楽天が、今このありさまを見たら、知恵のないやつらだと笑うことだろう。

　沖の方から浮藻と一緒に、一尺あまりの檜の板が流れてきた。それには少年の姿が描いてあって、体に隙間もなくまじないの金釘が打ちつけてあり、見ていて気味がわるかった。それが素人絵の証拠には、着物は左前に描いてあり、目鼻はくしゃくしゃで、親指は細く、小指は太く、まことに不恰好である。板の裏に書付けがあって、「筑前国福岡本町二丁目の醤油屋の万吉は、今年十五歳で、器量のすぐれた生れつきであるが、薄情なやつで、私が恋した甲斐もなく、考えている事があるからと、恋文をそのまま突き返した恨み、この世に神があるならば、七日のうちにとり殺してください」と、大橋流の筆跡で書きしるし、宮崎八幡宮に納めた願文であった。「万里の風波に

一　→四三九ページ注八。
二　福岡市東区箱崎の宮崎八幡宮。
三　「人知れず釘を岩根に」とあるべきところ。
四　本筋をわきまえたふるまい。

げきて、一日二日は世になりを静めて、この噂聞き定めてよろこぶ。過ぎにし弥生の末に、舟あそびの帰るさに[五]難波の橋柱にて指すこしいたませ、血の出る程にもなきを、引割き紙にしてむすびしを見て、「[六]心中して切れつるは」と能き名の立つ事、つね〴〵男女の心玉にのりて、何がなと思ふ故ぞかし。勤めとて指切るもあり。かためとて太股に[七]煙管焼きするもあり。これ皆客のためにいたい目にあひながら、この事人はしらずなりぬ。左馬は身に入れ瘊子ひとつもなくて、その情ふかし。風俗は[八]上京の町人の男子めきて、万[九]江戸手代に任せ、東山の花に暮らし[一〇]広沢の月に明かし、大晦日をしらぬ顔つき、一度もせはしき事をいはず。人の気を汲みて、人の友にもなりぬべき者なり。よき事見出して語るにたらず。

浜の晩景を見捨て、[一一]南宗の唐門に入りて、殊勝に物さびたる寺内、南の森の陰こそ[一二]藻塩草に見え渡る[一三]玉横野、西の方に蘆の長池にかけわたしたる橋の上、「どうもいはれぬ所ぞ」と、[一四]木間六兵衛に[一五]寝覚めひらかせみしに、自然と蒔絵に[一六]虎渓のむかしを書きぬ。法師まじりに、「これは」と横手を打つ

漂って、今ここに流れつき、上方で恥をさらす」と、また海へ投げ捨てようとしたのを左馬之助が取り上げて、「様子のわからない国の事ですが、何といってもこの男の仕業は愚かな事です。私は皆様もご存じの身の上で、この道にはなれきっていますが、深く思ってくださるお方のお心を、どうしておろそかに思いましょう。まして素人の若衆が、その情けを知らないはずがありません」と言って涙で袖を濡らし、板に打ちつけてあった釘を、一本一本みずから抜いて、こっそりと岩の陰に隠し、「科のない若衆の身に、障りはありますまい」と、大様にとりさばいた。衆道の本筋をわきまえたふるまいである。

この左馬之助の事を、最近、加賀の十兵衛という男が絵草紙に作って、ありもしない事なのに、左馬之助が死んでしまったと伝えた。人々は悲しんで、一両日は鳴りをひそめていたが、無事であることを知って喜んだ。この三月の末に、左馬之助は船遊びの帰途、難波橋の橋柱で指を少し傷つけ、血が出るほどでもなかったのを、引裂き紙で結んだのを見た人人が、「客への心中で切ったのだ」と、色っぽい浮名を立てたが、ふだん男女が目をつけていて、何か起こらないかと期

五 淀川に架し、北浜と天満を通ずる難波橋の橋柱。

六 客へ真心を示すために。

七 若衆や女郎が客への誓約に、雁首を焼いた煙管で太股に焼印をつけること。

八 京都の三条以北。店商いをしない一流町人が多く住んでいた。

九 江戸の出店の手代にまかせ。

一〇 京都市右京区の上嵯峨にある広沢の池は観月の名所。

一一 大阪府堺市南旅籠町にある臨済宗大徳寺派の竜興山南宗寺。開山は正覚寺普通国師。沢庵を中興の祖とする。唐破風造りの山門は甘露門という（堺鑑）。

一二 二十巻。宗硯編。寛文九年（一六六九）刊。歌ことば・歌枕を収めたもの。

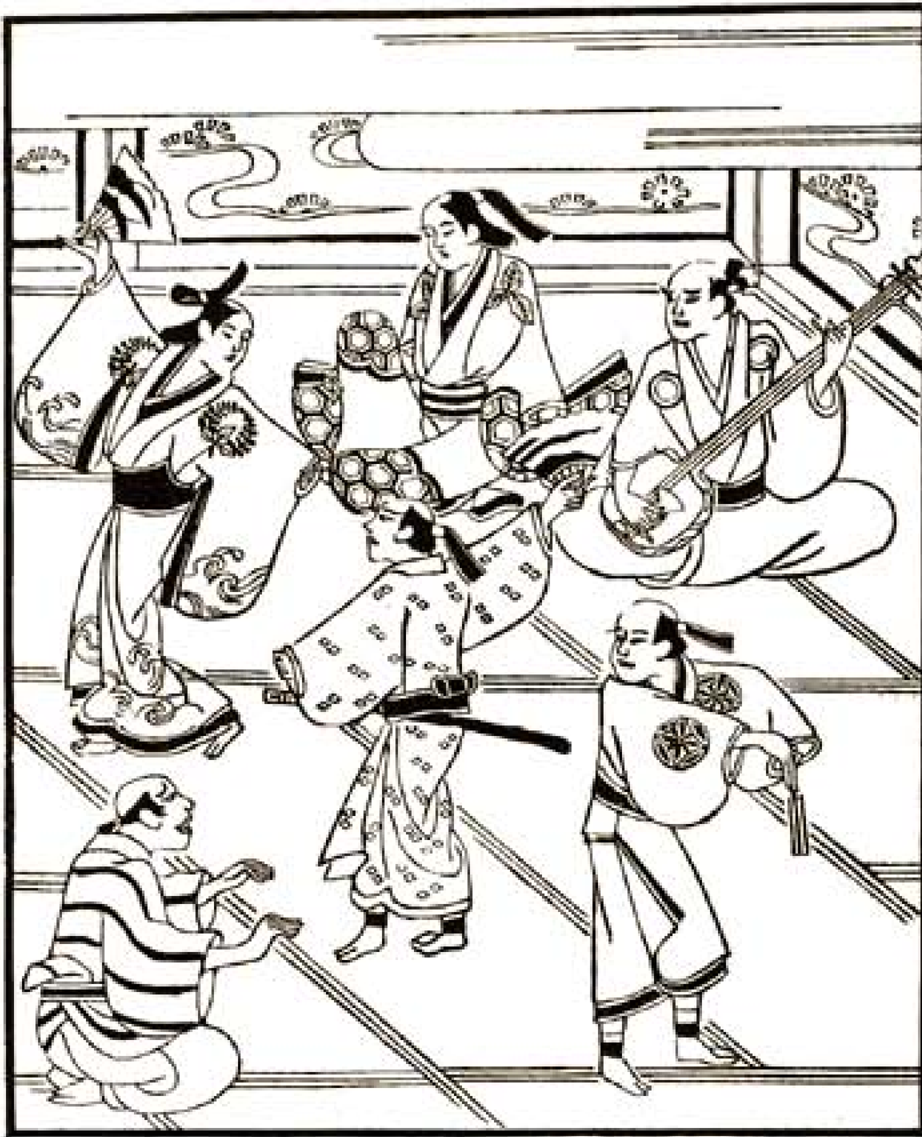
一三 『堺鑑』に「玉横野　所ハ南宗寺内、利徳庵ノ側南野ヲ云トゾ」とある。『藻塩草』巻三「野の部」に収載。

一四 未詳。

一五 寝覚提重の略。携帯用の提げ重箱。

一六 晋の僧慧遠が江西省廬山の東林寺に隠棲し、虎渓を渡るまいと誓ったが、陶淵明と陸修静の二人の帰りを送って思わず虎渓を過ぎたので、三人とも大笑いしたという故事による画題。

て、いつとなく乱酒になつて、前後をしらずなりにき。
ひとりの風流男、懐より女のさし櫛をとり落とすを見るに、やさしく駿河なる蔦の細道かかせて、影桜[一]の定紋、「これは正しく佐渡嶋屋[二]の吉田ではないか」「いかにも」といただくを、用捨なくもぎ取りて泥中になぐれば、沈みて跡形もなし。「これは国土の費」と云ふ。「若衆の持ち給へる楊枝ならば、多くの人をかけて青砥左衛門[三]もさがし出すべし。何ぞ遊女の手馴れし物を、見るもいやらし。とかくはかの色里をやめぶん」と、真顔になつて異見して、瀬々の浅みを横ばしる蟹の



南北三ぶ。左面は、左上が若殿役の吉川源八、その隣が小桜千之助（以上、本文の記述と紋所などより推定）。長刀を持つ人物は不明。手前では狂言作者が二人の役者に台詞や演出の指示を与えている。

待しているからである。若衆は勤めのために指を切る場合もあり、誓いと称して太股に煙管焼きすることもある。これらはみな客のために痛い目にあいながら、人々はこの事を知らないのである。だが左馬之助は身に入れ墨一つなくて、情けは人一倍深い。風俗は上京の町人の息子のようである。万事を江戸の出店の手代にまかせ、東山の花に暮し、広沢の池の月見に明かすといった風流な暮しぶりで、収支決算日の大晦日などはまるで知らない顔つきをして、一度もしみったれた事を言わない。人の気持をよくくみとるので、親しい友達にもなれる人柄である。美点をあげだしたらきりがない。

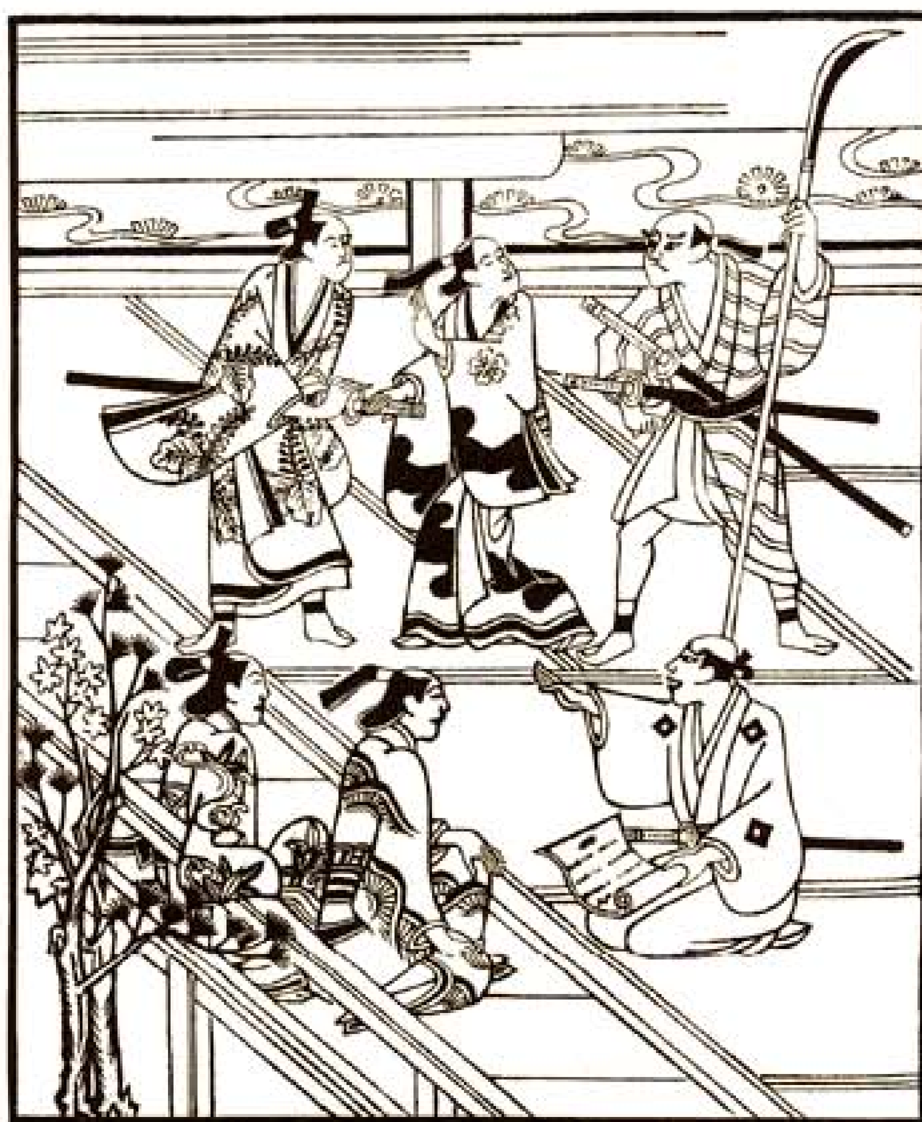
浜の夕景色を見捨てて、南宗寺の唐門をくぐると、境内はいかにもものさびて、南の森の陰は、藻塩草に見える玉横野で、西の方には蘆の生い茂った長池に橋がかかっている。「何ともいえない眺めだ」と、そこで木間六兵衛に提げ重箱を開かせると、この趣にふさわしく蒔絵で虎渓三笑の図が描いてあった。寺の坊主も一緒になって、「これは」と感嘆し、いつとなく飲み始めて、前後不覚となった。

そのうちに一人の風流男が、懐から女のさし櫛を落とした。見ると優しくも蒔絵で駿河の蔦の細道を描き、影桜の定紋

一 陰桜とも書く。桜花の裏をかたどった定紋。
二 大坂新町佐渡島町の佐渡島屋（富士屋とも）抱えの太夫。本書刊行の翌貞享五年（一六八八）刊の『諸国色里案内』に見える。
三 鎌倉中期、執権北条時頼に仕え、評定衆の長となった青砥藤綱。鎌倉滑川で落とした銭十文を、大勢の人夫を使って、捜させたという逸話は、『武家義理物語』巻一の一の題材となっている。原話は『太平記』巻三十五に見える。

細かなるを生きながら肴にして、酔ひては時を忘れ、一閑坊の案内古跡物語も耳にいらず、[四]白蔵主の住み給へる松林寺の三足狐咄もをかしからず。

まつ毛もぬらさず行くに、ここ[五]乳森の遊女町、[六]折節門立時なれば、もし見付けられてはと、小女郎手の[七]編笠を先さがりにかづき、[八]天王寺屋利兵衛といふ揚屋のかどなる冷水おもひ出して、[九]井筒によりて面影をみれば、この所の[一〇]四天王と名高きよねどももはや見付けて、禿つかはし、「大坂のわるい人様達」とまねく。「女には物いふ事も嫌ひになりし」と笑ひ、



荒木与次兵衛座での芝居の稽古風景。右面は、三味線ひきの隣に立膝ですわり小唄を歌うのが吉川多門、扇を手に踊るのは上田才三郎、中央の立姿が浪江小勘。右下はやつし芸をする中川金之丞、左下が

がっついている。「これはまさしく佐渡島屋の太夫吉田の櫛ではないか」「いかにも」と、大切にしまおうとするのを、いきなりもぎ取って池に投げ込むと、沈んで跡かたもなくなった。すると、「むだなことをなさる」と言うので、「若衆がお持ちになった楊枝なら、大勢の人を雇って青砥左衛門も捜し出すだろう。女郎の持ちなれた物など、見るのもけがらわしい。ともかく廓通いはよしにしなさい」と、真顔になって意見した。瀬の浅い所を横走っている小蟹を、生きたまま肴にして酔っぱらい、時のたつのを忘れ、案内役の一閑坊がしゃべる古跡物語も耳にはいらず、白蔵主が住んでおられた少林寺の三足狐の話も興味をひかない。

狐にばかされないまじないに、睫毛に唾をつけることもしないで行くうちに、乳守の廓にさしかかった。ちょうど女郎どもの客待ち時分だったので、もし見つけられてはと、小女郎手の編笠を前下がりにかぶり、天王寺屋利兵衛という揚屋の門口の清水を思い出して、井筒に寄ってのぞいていると、この廓の四天王といわれる名高い女郎どもが早くも見つけて、禿をよこし、「大坂の性悪な人様たち」と招く。「女には口をきくのもいやになった」と笑って、夕日が沈むころまでそ

四 少林寺の誤り。大阪府堺市少林寺町にある臨済宗大徳寺派の寺。寺内に白蔵主堂があり、白蔵主稲荷を祀る。永徳年中（一三八一〜八四）、耕雲庵という塔頭の住持白蔵主が、森の中で三足の狐を得、種々の奇特があったという伝説は、狂言「釣狐」の原拠。よって俗に釣狐寺という。

五 堺には南北二か所に廓があり、南が乳守。

六 遊女が門口に出て、客待ち顔にたたずむ夕刻。

七 人目をさけるためにかぶる、やや深い目塞編笠の一。都の富士などとともに当時の流行。

八 『諸国色里案内』の堺乳森・揚屋町の条にこの名が見える。

九 「宿をならべて門の前、井筒によりてうなゐ子の」（謡曲・井筒）による。

一〇 『好色二代男』巻七の五に「乳守にさそはれ、勘兵衛方に行ば、…爰の四天王市橋・小沢が胸の疵も」とある。よねは遊女の異称。

夕日かぎりある遊びそこ〴〵にしてわかれ、浜を見渡せば、辰弥は棚無し舟[一]に乗りうかれ、京之助は礒づたひ、左馬は戎[二]島の望み、心々の夜の道、遠里小野[三]油火幽かに、今宮・道頓[四]堀の野墓の煙に、無常の心玉しばしはしづまりしが、畳屋町[五]に帰ると又忘れて、その夜は太夫本与次兵衛[六]座敷仕組、浪江[七]小勘がうつくしさ、吉川多門[八]が小歌、上田才三郎[九]がとりなり、[一〇]小桜千之助がばつとしたる芸振り、吉川源八[一一]が若殿、三枝歌[一二]仙が禿立ち[一三]、中川金之丞[一四]がやつし事[一五]、南北三ぶ[一六]が早口[一七]、それ〴〵の役付け、見る人に笑はせ泣かせ、上手をするぞかし。若衆方の常なる素顔をみるに、偽りなしに見事なる物を、よい国に生れ合せて自由になる事に付けて、遠国の金持ひとしほ哀れと、帥仲間にて申し悔やみぬ。

終

こそこに遊んで別れた。浜に出て見渡すと、上村辰弥は小船に乗って浮かれ、嵐今京之助は磯伝い、左馬之助は戎島行きを望み、みなそれぞれ楽しんでいた。大坂への夜道を急ぎ、遠里小野のかすかな油火を眺め、今宮や道頓堀の墓地の人焼く煙を見て、しばらくは無常の思いに沈んだが、畳屋町につくと、また心が浮き立ってきた。その夜は太夫元の荒木与次兵衛方の座敷で狂言を催した。浪江小勘の美しさ、吉川多門の小唄、上田才三郎の水際だったなりふり、小桜千之助のはなやかな芸風、吉川源八のおっとりとした若殿姿、三枝歌仙の禿姿、中川金之丞のやつし事、南北三ぶの早口芸、それぞれの役割を見事にこなし、見る人を笑わせ泣かせ、みんなうまいものであった。今見る若衆たちのふだんの素顔は、偽りなしに美しく、よい土地に生れ合わせて、それを自由に拝めるにつけても、遠国の金持はまったく哀れなものだと、粋人仲間が気の毒がったものである。

一 船棚のない小船。
二 堺市西部、堺港北岸の地。寛文四年(一六六四)八月八日、激浪に襲われた際に生じた半島で、延宝年中、芝居小屋や水茶屋が設けられて盛り場となった。
三 現、大阪市住吉区遠里小野から、堺市遠里小野町にかけての一帯の称。『万葉集』では「とほさとをぬ」ともよんでいる。
四 大阪市西成区今宮の飛田墓地と、中央区千日前の千日墓地。ともに大阪七墓の一。
五 →五三〇ページ注二。
六 大坂堀江芝居荒木与次兵衛(→役者一覧)座の太夫元与次兵衛方の座敷での趣向(狂言)。
七 →役者一覧。
八 →役者一覧。
九 →役者一覧。
一〇 →役者一覧。
一一 →役者一覧。
一二 →役者一覧。
一三 太夫に付き従う禿のなりふりやしぐさ。
一四 →役者一覧。
一五 身分のある男が恋ゆえに身をやつし、物売りなどになる演技。
一六 →役者一覧。
一七 早口芸。同音が重なって発音しにくい俗謡やせりふなどを、早口に語る芸。

本朝若風俗

男色大鑑

絵入

八

巻八　あらまし

一　**声に色ある化物の一ふし**　藤田皆之丞は高貴な御婦人方に何度も惚れ込まれたが、女色にふけることのない篤実な若衆。この美少年を連れて京の涼みに出かけた。石垣町の大鶴屋の二階から見渡せば、まさに都といった風情。涼みの様子をながめていると、茶屋の棟に不思議な美女が現れて、誰とも知らず人を招いたが、その相手は皆之丞のようだった。せめては盃事をと皆之丞に無理に飲ませて軒に盃を投げると、女は嬉しげにいただいてから盃を投げ返したが、どうもこの辺に隠れなき井筒屋の娘のようだった。

二　**別れにつらき沙室の鶏**　昔の松本名左衛門、中頃に宮崎伝吉、現在の峰野小曝は、その時々の美少年の代表。見とれながら飲んだことを今も身にしみて忘れないが、中にも小曝は、衣裳に豪奢な新趣向をこらして若衆の手本となった。役者たちの慰みも種々、その時々に変るものだが、小曝は沙室の闘鶏を好み、三十七羽の鶏を飼って自慢にしていた。ある夕暮れに憎からぬ客が訪れ、しめやかに語らっているうち、鶏がいっせいに鳴きだし、客は名残を惜しんで帰って行った。「恋の邪魔をする鶏め」と小曝は、一羽も残さず追い払った。

三　**執念は箱入りの男**　備前の人が上京して来たので、菱屋六左衛門の二階座敷を借り、竹中吉三郎・藤田吉三郎など古今に稀な者を相手に楽しく飲んでいたところに、誰からとも言わず進物を入れた箱が届けられた。酒宴が終った後、その箱から「吉三、吉三」と呼ぶ声がする。開けてみると角前髪の人形、添え状の説明によれば、この人形に魂が入り、両吉三郎を恋い慕う故に届けるとの由。一座の物に驚かぬ男が、「両人に思いをかける見物は数多く、とても人形の思いなど叶わぬ」と説得すると、人形も納得してあきらめたようだった。

四　**小山の関守**　天和三年四月、藤井寺の開帳があり、重という人に誘われて出かけた。その日は鳴物停止の日で役者たちは隙。大勢の若衆も参詣に来た。小山の里に宿を借りて酒宴をしながら役者たちの品定めをする趣向で楽しんだが、十六人の若衆のうち最上は上村辰弥ということになった。この辰弥にはこんな話もある。ある座敷で客が、「心中立てに指を切ることはできまい」と何心もなくいうのを聞いた辰弥は、ただちに脇差で親指を押し切り、これを肴にと投げ出して、その後も上機嫌で遊んだ。皆々感嘆したことだった。

五　**心を染めし香の図は誰**　この前、大坂箕面の勝尾寺の開帳があり、大和屋甚兵衛を誘って参詣したが、途中、北中島の宮の森で休んでいると、十五、六歳の大家の娘らしい美少女が、お供とともにやって来た。それまで何気なく歩いて来た女は、甚兵衛を見ると顔を赤らめ袖をかえしてみせた。そこには甚兵衛の香の図の定紋が染め込まれていた。これは出来心とは思われぬが、女は駕籠に乗せられて去った。その夜は桜塚の落月庵で俳諧を興行し、皆々道頓堀に戻った。

男色大鑑　本朝若風俗　第八巻

目録

一　声に色ある化物の一ふし

　神子の口もあはぬむかしの事

　藤田皆之丞[1]勝手屏風の事

　女の心だま屋根をとびこす事

二　別れにつらき沙室の鶏

　[2]八人ならびの長枕今は夢になる事

　一盛りは吉野増りの顔見世の花の事

　峰の小瀑豊かなる身持ちの事

一　勝手は便利の意。持ち運びに便利な丈の低い二曲屏風。枕もとなどに立てる。ただしここは気まま勝手の意。『野郎立役舞台大鏡』（貞享四年）の藤田皆之丞の評判に、「花も紅葉も一盛り、藤の異名を勝手屏風といふ事誰しらぬ人もなく」とある。

二　西鶴の『難波の良は伊勢の白粉』巻二に、堺の大尽客が、虎斑ビロードの夜着や二間の長枕を峰野小曝に贈ったという記事がある。

三　執念は箱入りの男

菱屋が二階座敷恋にのぼり客の事
文も数かさなり千体仏に張らるる事
竹中吉三藤田吉三思ひを[一]一荷の事

四　小山の関守

下戸も上戸も付け[二]ざし嫌はぬ事
山本左源太身請けの首尾の事
上村辰弥よい子に極まる事

五　心を染めし香の図は誰

大和屋甚兵衛が定紋の事
芸子は今が盛り大臣はす[三]がりの事
若衆好きの目からは美女も隠元豆と見し事

目録終

一　天秤棒でかついだ荷のように、二人の吉三を一緒に愛したいとの意。

二　口をつけた杯を、そのまま洗わずに人にさすこと。情のこもったしぐさ。

三　末枯りの意。末になって尽きようとすること。伽羅などにいう。

声[四]に色ある化物の一ふし

「やあら目出たや、鶴は千年亀は万年、東方朔[五]は九千歳」と、年越[六]しの夜の厄払ひが高声、老[七]の浪立つ敷き寝[八]の舟の春にちかづくをおどろき、曙はかはらぬに、若水[九]といはうて顔洗へばとて、寄る年のよらずにあるべきや。殊更縁遠き娘の親、芸子の親方、数[一〇]折る煎豆に「又ことしの暮れけるよ」と、つねの人よりはひとしほ惜しみぬ。

いづれ若衆の盛り四五年の花代、おもへば詠めるうちのせはしかりき。「女程久しきはなし。願はくは女方の藤田[一一]皆之丞を生きながら女にせまほし」といふ人あまたなり。この広い都に女はいかなるもある[一二]人の沙汰しけるは、「これをわる物ずきといふ。同じくは稀なる若衆に女のまねびさへうたてかり」といふ。この道をすけるからはそれ程になくてはなり。皆之丞が何怜[一三]しげなる風情、先づはかづら[一四]顔、雲間の月わづかに出るに異ならず。まなざしは玉芙蓉を欺き、言葉は巧み

声に色ある化物の一ふし

「ああら目出たや、鶴は千年、亀は万年、東方朔は九千歳」と、節分の夜の厄払いの甲高い声が聞こえてくる。年寄りになると、よい夢を見ようと枕の下に敷く宝船の春に近づくのが、かえって情けなく思われるものだ。いつもと変らない曙なのに、若水だなどと祝って顔を洗ったからといって、寄る年が寄らないはずはない。ことに縁遠い娘の親や、歌舞伎若衆の親方などは、節分の晩に年の数ほど数えるいり豆に、「また今年も一つ年をとったのか」と、並みの人よりもいっそう悔やまれるのである。

どのみち若衆が花代を稼ぐ盛りは四、五年そこそこなのだから、思えばせわしい眺めである。「女ほど盛りの長いものはない。できることなら女方の藤田皆之丞を、そのまま女にしたいものだ」と言う人が多い。この広い都には、どんな美女でもいる。ある人が、「それはいか物食いというものだ。同じことなら、この稀な若衆に、女のまねをさせることさえ情けない」と言った。衆道を嗜むからには、そうなくてはならないところである。皆之丞の美しいことといったら、まずその鬘をかぶった顔は、雲間からわずかに

❖京都の若女方藤田皆之丞の評判とエピソード。作者がある年の夏、大尽や太鼓持と共に京都へ上り、皆之丞を呼んで遊んだ時、井筒屋という茶屋の娘が、屋根の上から皆之丞に恋文を投げたという、作者登場の随想的作品。

四 声につやのある。
五 上文から引き続いて厄払いの祝詞。「これは仙郷に入つて年久しき東方朔とは我事なり。…寿命既に九千歳に及べり」(謡曲・東方朔)。
六 節分年越しの夜、各戸をまわって求めに応じ、厄払いの祝詞を唱えて災厄を払い、銭を乞うた物乞の一種。→二四〇ページ注五。
七 老いて額に皺のよることの形容。→三〇二ページ注一。
八 除夜または節分の夜、宝船売りが売り歩く、一枚刷りの七福神の乗った宝船の絵を求め、枕の下に敷いて寝て吉夢を祈った。
九 元日の朝初めてくむ水。邪気を払うという。
一〇 指折って数えるの意。節分の夜、年の数ほどいり大豆を食うならわしをいう。
一一 →役者一覧。
一二 有と或の掛詞。
一三 『遊仙窟』の字訓。原本「何恮」。
一四 鬘をかぶった舞台顔。桂(月の)をかけて、下文の月と縁語。

にしてしかもやさしげに、万の事ひとつとして下に見られず。皆上京の御車の前後にありし宮女の男めづらしきやうに、思ひめぐらしたる舞台つき、偽りをまことに見なし、情しらずもいたづらにはなりぬ。男よりは上臈衆に思ひこまれ、めいわくせし事幾度か。されども、かりにもあらざらん事一生かたくなかりき。風俗地衣装の外に替はりて、黒羽二重に白小袖、かさねて見る事もあかず。一度に肌着も十の数を拵ゆる事、今の世の勤め子のせぬ事なり。これみな小平次が実ごとなる物ずき、川原の水ぎは立ちてしをらし。

この美児、難波の大舞台、松本名左衛門が草も木もなびけし時、はじめての出姿、梅はつぼみにして匂ひふかく、春やむかしを忘れず、小指に結びし二また竹の縁にひかれて、この君をつれて天王寺の彼岸に参詣でける。その友とせしは、浅香主馬など都の殿とつれぶしの小歌に呑み掛け、この酔ひの浮気に神子町に行きて、沢井作之助がなき跡を、梅の木のこさんに口よせさすもをかしくかなしく、「とうてたもつて嬉しや」といふ時、ひそかにここを立ちのく。さりとては義

のぞいている月のようである。目つきは芙蓉のようで、ものの言い方が上手で、しかも優しく、諸芸も一つとして見下されるということがない。いってみれば上京の御所車の前後につき従う宮女が、男珍しく思うような風情に装った舞台姿である。見物の衆はその偽りを真実と思い込み、情けを知らない人でも心を乱すのであった。男よりも貴婦人方に見そめられて、迷惑したことがたびたびであった。しかし仮にも女の色に迷うようなことは、かつてなかった。身なりはといえば、ふだん着もほかの若衆とは違って、黒羽二重に白小袖を重ね着しているのだが、いつ見ても飽きることがない。同じ肌着を一度に十枚も仕立てるということは、今の世の役者のできないことである。これはみな実事の名人である養父の藤田小平次の好みで、四条河原では水際立ってしおらしい風俗である。

この美少年は、大坂の大舞台、松本座の座元松本名左衛門が、若衆方として全盛をきわめていた頃に、初めて舞台に姿を現したが、まだ蕾の梅で、匂いを深く秘めていた。ある年の春、作者は、皆之丞が初舞台で小指に縁結びの二股竹を結んでいたことを思い出し、その竹の名所である天王寺の彼岸参りに連れて行った

一 公家の牛車。御所車。 二 上流婦人。貴婦人。 三 若衆としてすべきではないこと。女色にふけること。
四 ふだん着。 五 皆之丞の養父藤田小平次。→役者一覧。 六 篤実な人物を演出する技。藤田小平次は実事の名手。 七 川原(四条)の水際と、ひときわ目立つ意の「水際立つ」との掛詞。 八 →役者一覧。
九 皆之丞の初舞台は大坂道頓堀で、延宝初年。当時、十五、六歳(役者評判蚰蜒)。
一〇 皆之丞が初舞台の演出で、縁結びの象徴として、二股竹を小指に結びつけたのであろう。その二股竹は天王寺の名物で、「摂州天王寺ニ之有リ、淡竹ノ二岐ハ、処々ニモ亦希ニ有リ」(和漢三才図会)とある。
一一 →役者一覧。 一二 大坂天王寺の林町は、巫女が多く住んでいたので、俗にみこ町といった。「巫女町によききぬすます卯月哉　蕪村」。
一三 未詳。 一四 巫女の名。
一五 巫女が冥界の人の霊を呼び出し、神がかり状態になって告知すること。霊媒。
一六 →役者一覧。 一七 未詳。 一八 「津の国の難波の春は夢なれや蘆の枯葉に風渡るなり」(新古今　西行法師)による。 一九 「さそふ水」と水茶屋(色茶屋に対し普通の茶屋)の掛詞。「わびぬれば身をうき草の根を絶えて誘ふ水あらばいなむとぞ思ふ」(古今　小野小町)。 二〇 下文の石車の伊右衛門とともに太鼓持。

理にも涙はこぼれず。「仕組狂言に泣く事、これを思ふに身過ぎ程かなしきはなしと、上村門之丞・西川市弥などが舞台子の時申せし事、こればかりは至極」と大笑ひして、その春の過ぐるも夢なれや、蘆の青葉の風も住みなれし浦のめづらしからず、京の風ゆかしく、涼みにいざとさそふ水茶屋の後家が見世にて、かりそめの談合、しまりなしの七十郎、云ひ出すからは跡へも先へもゆかぬ石車の伊右衛門、「太鼓はもてど地咄がならぬ〳〵」と立ち行くに、江南の浅瀬に水覚船をよせて、大臣は勿論、おせささよいこれ盃踊り、右から左へ移る間に、夕暮はやく石垣町につきぬ。

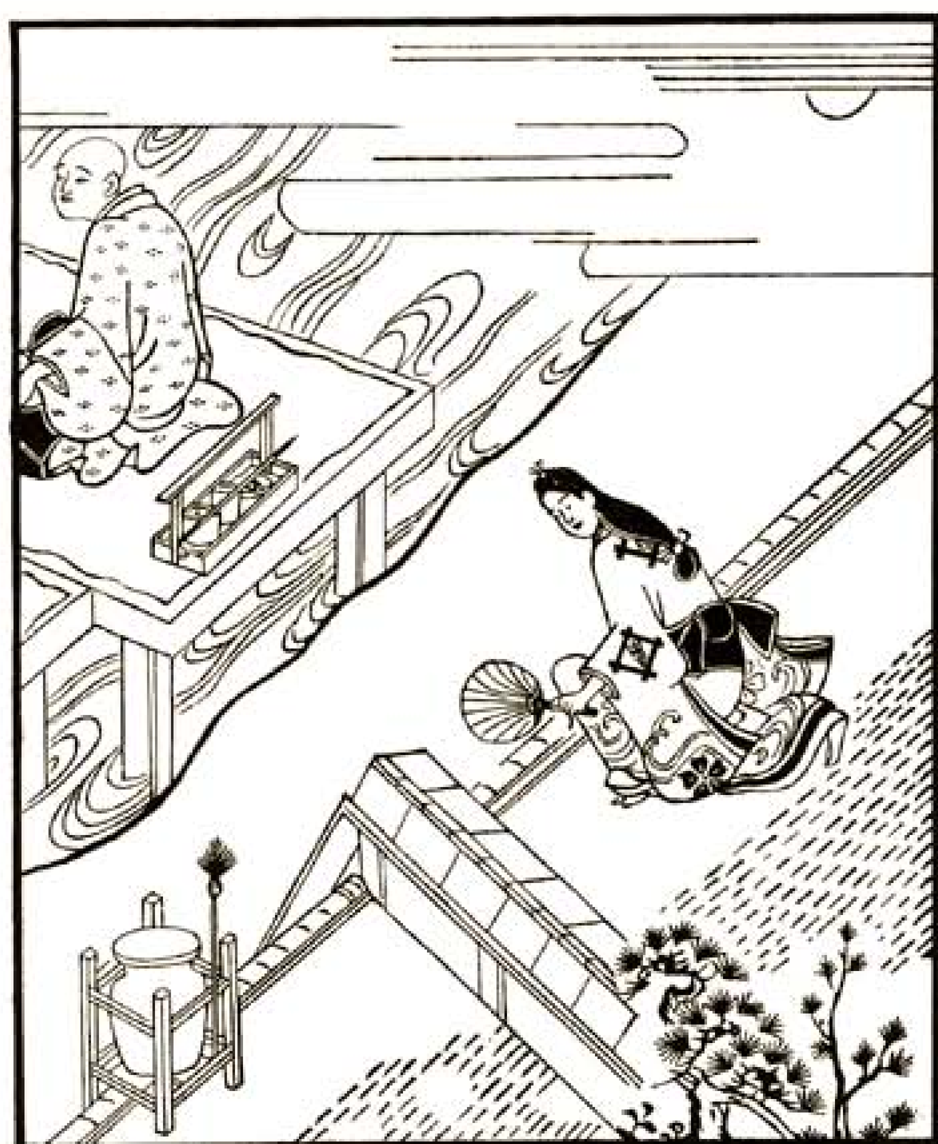
　大鶴屋が二階より見わたせば、都とはここの事なるべし。京の人にも目鼻あり、大坂とても手足はかはらず、小判はここにも落としてはおかず。別に替はつたやうにも思はざりしが、所せきなき涼み床にゆたかなる女まじり、いづれかいやなる風儀はひとりもなく、目に正月をさせて、餝り縄の染め出し明衣、御所ちらし・千筋・山づくし・曙縞、幽禅が萩のすそ書き、白鳶が若松、色々の模様好み、素人目にはあだに

ことがあった。皆之丞の友達の京都の浅香主馬などと連れだって、合唱の小唄を肴に飲み始めた。酔っぱらった勢いで、神子町に出かけ、亡くなった沢井作之助の霊を、巫女の梅の木のこさんに呼び出させた。おかし悲しい気分になっていると、「訪うてくだされてうれしや」と巫女がしゃべり始めたので、こっそりとそこを立ち退いたが、どうして、義理にも涙が出ない。「仕組まれた芝居で泣くのは、思うに商売ほどつらいものはないと、上村門之丞や西川市弥が若衆であった時に言ったことがあるが、これだけは間違いない」と大笑いした。その春も夢のように過ぎたが、蘆の青葉の風も、住みなれた海辺は珍しくもない。京都の風がなつかしく思い出されて、涼みに行こうではないかと誘い合って、水茶屋の後家の店で、思いつきの相談がまとまった。太鼓持のしまりなしの七十郎や、言い出したからには梃でも動かない石車の伊右衛門が、「いくらご機嫌をとっても、このままでは話がはずまない」と言って出て行ったが、まもなく道頓堀に近い川筋に、水覚の早船を取り寄せた。大尽をはじめ、「押せささよい」と囃し立て、にぎやかに、右から左へと杯をやりとりしているうちに、夕方早く石垣町に着いた。

二一「太鼓石車の伊右衛門が重口にて語りければ」(好色盛衰記三の一〈元禄元年〉)。 二二 普通の会話。 二三 中国の揚子江以南の地を江南というに擬して、大坂の淀川以南の地をいう。ここは道頓堀。 二四 近世初期、寛永前後、大坂の人水学宗甫がくふうした早船。「近年水覚といへる盲人工夫ふかき者にて、中津川に砂車、淀川に魚荷の早船」(独吟百韵自註絵巻)。 二五 囃しことば。「長い刀に長脇指をぼつこんで、おせさ、よいさ、とうたへど」(一代男四の一)。 二六「右から左へ移る間に」とあるから、せわしい杯のやりとりの様をたとえていったのであろう。 二七 四条の茶屋町。→五二三㌻注一。 二八 →五二三㌻注一。 二九 所狭き甚なき。立錐の余地もない。 三〇 諺。目を楽しませること。眼福。 三一 正月の注連縄。 三二 御所好みの上品な草花の散らし模様。 三三 千筋染。細い縦縞模様。「今の世のよね(遊女)の好きぬる風俗は、千筋染の黄無垢」(一代女一の四)。 三四 →四九五㌻注一九。 三五 曙染のようにぼかした縞模様。曙染は友禅模様を黒・紫・紅などでぼかして染めたもの。 三六 京都の絵師宮崎友禅が描いた萩の裾模様。友禅は手描き・手染色の創始者で、元禄初年までは京都小川通上立売下ル町(現、上京区小川町)に住んでいた(人倫訓蒙図彙)。いつの頃か加賀前田侯に召され、加賀友禅の名を残し、金沢で没した。 三七 未詳。

見るらん。この夕祇園殿さぞ嬉しかるべし。先づすずしめの[一]神楽、仕合せの木工兵衛に小語きて、人顔の見えぬ時、女中のちかき程に床をなほさせ、皆之丞をさそひて紋なしの挑灯に面をそむき、若衆みな／＼丸袖[二]の羽織をかくし、夏頭巾の山は、さながら錦を夜かぶりてかぶらせ、あらけなき作り声は、狂言作り[三]の平兵衛もそれとはしるまじ。

これも乱酒[四]になつて与左衛門がわすれて君の名をよび[五]、あらはれわたる宇治の川嶋[六]数馬、浪に色ちる玉本[七]数馬、連引きの撥音しづかに歌山[八]春之丞も悪からず。調諧[九]のかり枕すこし



か。右面は、茶屋の屋根の上に現れた不審な美女。「絹縮の広袖に黒じゆすの前帯、髪ときすて中程をかいむすび、金の房付き団」を持つ。皆之丞に思し召しがあり、屋根で杯を受け小唄を歌って消える。

大鶴屋の二階から見渡すと、花の都というのはここの事であろう。京都の人にも目鼻があり、大坂の者だとて手足があり、ここでも小判は落としていない。別に変ったようにも思われなかったが、人でうずまった涼み床には、ゆたかな女が大勢まじっていて、一人もいやらしい身なりの者はいなかった。楽しく眺めていると、正月の注連縄を染め出した浴衣、御所好みの散らし模様、千筋染め・山尽し・曙縞、友禅が筆をふるった萩の裾模様、白鳶筆の若松と、いろいろと好みの模様を染めた単を着ている。素人目には、値打ちがわからないだろう。この夕べは、八坂の祇園殿もさぞうれしいことであろう。祇園殿といえば、その名も神のお心をしずめる神楽という太鼓持の庄左衛門が、仲間の仕合せの木工兵衛に耳打ちして、人顔の見えない時に、女たちに近いあたりに涼み床を用意させた。皆之丞を誘って、定紋のついていない提灯に顔を背け、若衆たちはみな、おとな用の丸袖の夏羽織を着ているのもおかしかった。みんなが人目を忍んで夏頭巾をかぶっているのは、ちょうど錦を夜着ているようなもので、せっかくの美貌も台なしである。それにわざと荒っぽい声で話している様子を見ては、狂言作者の富永平兵衛

一 神慮を清めしずめる神楽という名の太鼓持の庄左衛門。当時京都の太鼓持四天王の一人。仕合せの木工兵衛も同じく太鼓持。

二 歌舞伎若衆は振袖を着る。ここは成人用の袖の短い丸袖を着て、素姓を隠したのである。

三 歌舞伎脚本作者として、初期を代表する富永平兵衛。俳名辰寿。延宝期における実事の名手金子六右衛門の門下で、役者より転業。上方で延宝・元禄期に作者として活躍。延宝八年(一六八〇)の顔見世役者付に、それまで作者無記名の慣例を破り、狂言作者として名を掲げたので有名(耳塵集)。元禄十二年(一六九九)頃没。

四 前記の神楽庄左衛門とともに、当時の京都の末社四天王の一人、乱酒の与左衛門。

五 「君の名をよび」をうけた。同時に川の序詞とした。「朝ぼらけ宇治の川ぎりたえだえにあらはれ渡る瀬々の網代木」(千載)。

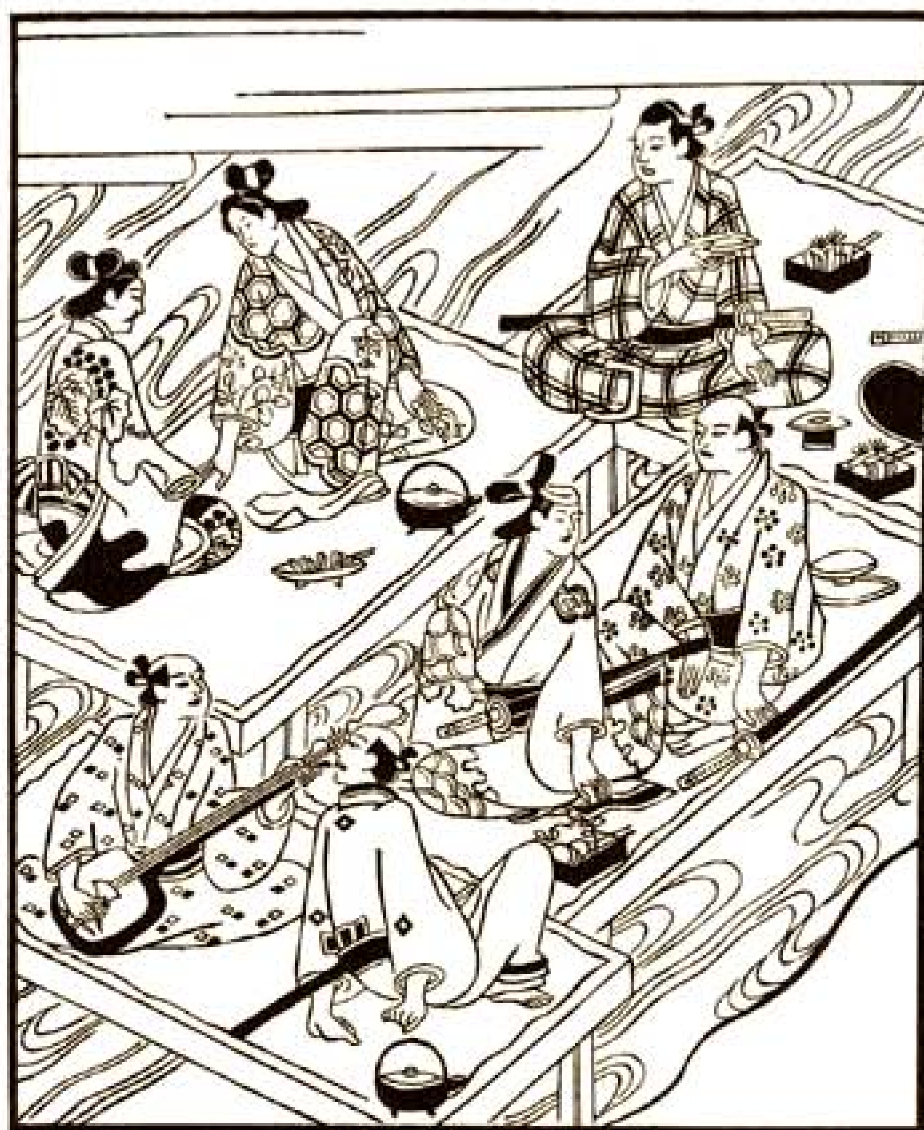
六 →役者一覧。

七 →役者一覧。

八 →役者一覧。

九 『遊仙窟』の字訓。

一〇 わが心ではあるが。我ながら。
一一 痴者。ひとくせある者。
一二 しゃれた涼み床。いたりは至極の意。
一三 貞享・元禄期の京都の太鼓持。「さて島原の手引に花さき左吉といへるいたり末社をつれて」(好色盛衰記四の二〈元禄元年〉)。



左面は、京三条大橋より北の閑静な涼み床で遊興する役者たち。手前の三味線ひき他一名は「坂田藤十郎が一組」の者、その上が藤田皆之丞、隣が坂田藤十郎（紋所より推定）。杯を持つ人物が嵐三郎四郎

夢見るうちにも、親仁の精進日はわすれず、宵の鮓に驚き口すすぐなど、一〇心ながらをかし。「後の世もまはり遠し。近道におもしろや」と云ふ所へ、夜の編笠は一一しれもの、一二いたり床にしかけ、「伽羅の焼き辛くだされませい」と、都なれや花車なる物もらひ、気を付けて見しに一三花咲左吉なり。「色ある床を見に廻るためにや」といへば、大笑ひして、「今宵は見る程の人みな悪女なり。同じ値段にて醜き方に床を借すは、しばしなれども因果」といふ。「汝が見残しあるべし」と、俄に末社の商ひ口、「火桶は〳〵」と、涼みの頃売るもかは

でも、それとは気がつくまい。

それもその名のとおり酒に乱れた太鼓持の乱酒の与左衛門が、うっかり若衆の名を呼んだので、すっかりばれてしまったその若衆方は川島数馬、同じく色っぽい玉本数馬、静かに三味線を合奏している歌山春之丞もわるくない。うたた寝をして、少しまどろんでいるうちにも、親仁の命日であることを思い出して、宵の口に鮨を食べたことに気がつき、驚いて口をすすぐなど、我ながらおかしかった。「後の世のことなど気遣うな。このままが手っ取り早くておもしろい」と言っているところへ、夜なのに編笠をかぶった、ひとくせありそうな男がやって来た。しゃれた涼み床に近づいて、「香木の焼きがらを下されませい」と言っている。さすが都だけあって、風流な物貰いがいるものだと思いながら、気をつけて見ると、太鼓持の花咲左吉であった。「いい女のいる床を見て回るためにか」と言うと、左吉は大笑いして、「今夜見た女は、どれもこれもまずい。同じ値段で醜いやつらに床を貸すのは、ほんのしばらくでも不運な事だ」と言う。「いやいや、お前の見残しがあるかもしれないぞ」と言って、太鼓持どもがにわかに触売りのまねをして回り始めた。「火鉢は、火鉢は」

一 鍔がなく、柄口と鞘口が合うように造った短刀。九寸五分。
二 備前国(岡山県)和気郡伊部村産の陶器。黒褐色で厚手、硬質。いんべ焼ともいう。
三 →三四三ページ注一〇。
四 幾度も洗った帷子。
五 桁が二十一ある算盤。
六 概算。
七 せせこましくしている。
八 歌舞伎若衆を揚げる花代その他の諸雑費。
九 →役者一覧。
一〇 →役者一覧。
一一 →役者一覧。

り物、「御慰みになる碁の相手、一番三文づつで、負けに打ちます」「かみさま方の白髪を月夜影にてぬきます」「お若い衆に喧𠵅の相手は入りませぬか」と、声々さわぎまはれど、石流治まりし代のためし、誰かまふものもなく、[一]相口はおとさぬやうに、扇ばかりの風に身を楽しみける。この静かなる人心、銀溜めて引込み所ここぞかし。

　なほ水上をながめ行きしに、三条の橋より上に、世間はなれての床涼み、[二]備前焼の茶瓶、[三]天目ひとつ、この外に盃も見えず、皆分別らしき顔つき、[四]洗ひ帷子の尻をまくりて座して、[五]二十一間のそろばんはじき、「酒・肴・茶・たばこ、大方[六]中つもりにして何程」と、涼み中の入用を勘定して、これを遊山の種とす。「さても隙ある男、こんな事にて大事の京を[七]せまくなしぬ。[八]芸子の集礼は大分の事を算用には入れぬか」と指さしてをかしく、立ち帰れば、夜露もふけては袖をいたはり、ちり〳〵に床帰り、人の山もはじめの川となり、水の音のみ次第に淋しく、東の岸根に役者の声ばかりそこ〳〵に残りぬ。[九]坂田藤十郎が一組、[一〇]藤川武左衛門が酒友達、[一一]嵐三郎

と、涼みの今頃に売り歩くのも異なものだ。「お慰みになる碁の相手、一番を三文ずつで負けて差し上げます」「お内儀さん方の白髪を、月明かりで抜きます」「お若い衆に喧嘩の相手はいりませんか」などと、口々に騒ぎ回ったけれども、さすがに治まったご時勢だけに、一人として相手になる者がない。短刀は落とさぬように気を配り、扇の風を楽しんでいる。この静かな人心、金をためてからの隠居所はここにかぎる。

　なお川上へさかのぼって行くと、三条の橋の上手に、人群れを離れて床涼みしている連中がいた。備前焼の茶瓶と茶碗が一つあるだけで、ほかには杯も見えない。みなもっともらしい顔つきをして、水をくぐった帷子の尻をまくってすわっている。二十一桁の算盤をはじいて、「酒・肴・茶・煙草など、およそ見積ってどれくらいになるだろうか」と、涼みの間中の経費を勘定して、それを遊びの種にしている。「いやはや、暇な男もあるもので、こんなばかげた事で、せっかくの京都をせせこましくしている。歌舞伎若衆の揚代はかさむはずだが、それは計算に入れないのか」と指さして、おかしく思いながら引きあげた。夜が更けて、露に濡れた袖をかばいながら、みん

四郎も機嫌にして、夜半の鐘に明日の舞台勤めを思へば、「身しる川風に声をとられな」と立ち行く。その跡は十三夜の月東山を我が物になし、松の梢を照りのぼれば、四条通りを蚤の飛ぶも見えわたりぬ。

「とかくは寝てのたのしみ」と、大臣は銘々に児人を慰み残りぬ。ぬれの相手なしの身は、宵にかへらぬ事をいうては悔やみ、同じ蚊屋に生男ばかりのならべ枕、別して口惜しかりき。今からも陰子隙あらん、と思ひやられ、おかぬ棚をまぶり、石垣町のともしびに姿の障子に移るを、それこのもしげに見しに、立ちつづきし茶屋の棟よりうるはしき女の、絹縮の広袖に黒じゆすの前帯、髪ときすて中程をかいむすび、金の房付き団をかざし、思ひよらざる風情、晴れたる月に不思議晴れがたく、独りも魂はなくて、心に観音経など読みてしばしあるに、この姿消えもやらず、軒端にちかよりて、誰とはしらず人をまねき、「情しらず」と云ふにぞ、うたがひなく恋とはしられける。

おの〳〵身に覚えなく胸のさわぐ中にも、こんな目にあふ

なばらばらに涼み床に帰って行った。山のような人の群れも消えて、もとの静かな川となり、流れの音だけがしだいに淋しくなってきて、東の川原に役者の話し声だけがわずかに残っていた。坂田藤十郎の仲間、藤川武左衛門の酒友達、嵐三郎四郎の仲間も上機嫌であったが、夜半の鐘を聞いて、明日の舞台の勤めを思い、「身にしみる川風で声がかすれては」と、それぞれ引きあげて行った。その後は十三夜の月が東山をわがものにし、松の梢に昇るころには、四条通を蚤が飛ぶのも見えるほどであった。

「何はともあれ、寝ての楽しみだ」と、それぞれ若衆としけ込んだ大尽は、これからがお慰みだ。色事の相手のない連中は、取り返しのつかない宵の口のことを語ってはぼやき、同じ蚊帳に色気のない男だけが枕を並べて寝たのは、実にくやしかった。今からでも暇な陰間がいるかもしれないと、当てもないことを思いながら、石垣町の茶屋の障子に映る若衆の影を、うらやましく眺めていると、軒を並べている隣の茶屋の棟に、美しい女の姿が現れた。絹縮みの広袖を着て黒繻子の帯を前結びにし、ほどいた髪の中ほどをちょっと結び、金の房つきの団扇を手にしている。思いがけない女の風情に、

一二 身にしみる、または身にしむの誤記であろう。

一三 色気のない男ばかり。

一四 まだ舞台をふまない男色専門の若衆。陰間。

一五 諺。置いた覚えのない棚まで捜すの意。「まぶる」は見つめるの意。

一六 経に生糸、緯に強撚糸を用いて堅しぼにした絹織物の一。

一七 『法華経』の「観世音菩薩普門品」第二十五の一品を、別に分けて一巻とした経文。

事ならばと思ふ。かの女もだえて、「せめて言葉のかへしはないか」と、泪袖をつたひて、白玉を数にくだきし。我ながら我が文をなげつけしに、上書きに「多古[一]の浦袖さへ匂ふ」とありしは、皆之丞への思ひ入れ、ひとしほ哀れさまさり、「せめては盃事よ」と、太夫に無理にのまして軒口になぐれば、女嬉しげにいただき、間なくなげかへして、「ここはから盃ながらお一つ」と、屋根よりうたひし小歌の声[二]、「このあたりにかくれもなき井筒屋のお娘が色移りによく似た」といへり。とがむるにもあらず、そのままに明け行く空の名残、男女に限らずかく思はるるは、この君美しき徳の一つなり。

別れにつらき沙室[三]の鶏

「鼻は人の面の山なり」と古詞に申し伝へし。男女にかぎらず高下あつて、思ふままならぬは人の顔つきぞかし。むかし[四]末摘といへるも、すぐれて鼻醜かりしに、これも美女となんいへり。それを思へば、[五]ふたつどりには、低きより高いに徳

月は晴れているが不思議は晴れず、みんな気もそぞろになって、心の中で観音経など唱えていた。しばらくたっても女の姿は消えず、軒端に近づいて、誰か知らないが人を招き、「薄情者」と言ったので、さては恋のためなのだとわかった。

誰も身に覚えはなかったが、胸騒ぎしながらも、こんな目にあってみたいものだと思っていた。その女は身もだえして、「せめて返事だけでもしてもらえないものか」と、涙は袖を伝い、白玉を砕いたように散った。女がみずから投げつけた手紙の上書きを見ると、「田子の浦袖さへ匂ふ」と書いてあったので、皆之丞を慕ってのことだとわかった。ひとしお哀れになって、「せめては杯を」と、太夫に無理に飲ませて、それを軒端に投げてやると、女はうれしそうにいただいたが、まもなく投げ返し、「ここはから杯ではございますが、お肴にお一つ」と言って、屋根から小唄の声が聞こえて来たが、「この辺でよく知られた井筒屋という茶屋の娘にそっくりだ」と誰かが言った。とがめだてする者もない。それなりに空は明けはなれていったが、男にも女にもこんなに慕われるのは、皆之丞の美徳の一つである。

一 「田子の浦の底さへ匂ふ藤波をかざして行かむ見ぬ人のため」(拾遺)。
二 色は声色。調子。

❖延宝・天和期の大坂の若衆方峰野小曝の評判とエピソード。闘鶏がはやり、小曝もシャムの名鳥を集めていたが、好きな客が訪れた夜、鶏がいっせいに鳴いて客が帰ったので、恋の邪魔と一羽も残さず追い払ったという情話。前半、役者の移り変りを述懐している。

三 軍鶏に同じ。闘鶏用。原産シャム(タイ国の旧称)。
四 『源氏物語』末摘花巻の女主人公。大きな赤鼻の醜女。よって末摘花(紅花の異称)と名づけた。
五 二者択一というのなら。
六 →役者一覧。
七 歌舞伎における喜劇的役柄。道化方。歌舞伎の発生期にあらわれた喜劇役の「猿若」の系統を引き、滑稽な物まね・身ぶりで見物を笑わせ、劇の進行を助ける役柄。
八 →役者一覧。
九 →役者一覧。
一〇 峰野小曝　→役者一覧。

のあるべし。
　[6]鎌倉新蔵も[7]童戯なればこそ人も見ゆるせ、[8]昔日松本名左衛門、中頃に[9]宮崎伝吉、今の[10]峰の小瀑、いづれも美少人、その時にいたりて、花はさかりの客に悩ませ、[11]野郎の仕出しに姿をうけて呑みつる事、今も身の添ひてわすれがたし。中にもこの人、役者子どもの手本、よき衣装を着はじめける。この事[12]千里までもかくれなき[13]虎膚天鵞兎の羽織、ばつと沙汰し侍る。「勧め子の唐織を着始めしは、これを手本に[14]イロホ形・[15]暦小紋袖をあらそひける」と、[16]平川吉六も、あつて過ぎたるむかしを思ひ出せり。その時は、[17]名に橘の[18]小嶋妻之丞、彦十郎といひ、[19]小野山主馬は宇治右衛門とて、こはい顔して今京の見物事になりぬ。それらのみ、[20]三原十太夫・[21]柴崎林左衛門・[22]沢田太郎左衛門・[23]桜井和平など、みなこんつよき立役つとめけるが、これらもむかしは若衆ならめ。[24]岩倉万右衛門・[25]松本文左衛門・[26]山本八郎次、かづら姿見し事を思へば、久しき事にはあらず。[27]松本間三郎も小膳といひしに、[28]今はかか方の[29]太郎次も、[30]置綿時々の所作とて、かくも移り替はる物は狂

別れにつらき沙室の鶏

「鼻は人の顔の山だ」と、昔から言い伝えている。だが男女に限らず鼻には高低があって、思うままにならないのは人の顔つきだ。昔、源氏物語の末摘花という女は、大きな赤鼻でひどく醜かったが、それでも美女ということになっている。それを思うと、どちらかといえば、低いより高いほうがましだ。
　鎌倉新蔵も道化役者であったから、低い鼻でも人は大目に見たのである。古いところでは松本名左衛門、中頃の宮崎伝吉、当節の峰野小曝などは、みんな美少年であったが、時節が来て花の盛りを見せ、客を悩ましたものであった。その新趣向の野郎の装いに見とれながら酒をくみかわしたことを、作者は今でも身にしみて忘れられない。中でも小曝は、歌舞伎若衆の手本になるような、見事な衣装を着始めたものである。虎斑ビロードの羽織などはことに評判で田舎にも知れ渡った。「これを手本にして、若衆たちが舶来の織物を着始め、イロハ形や暦小紋に染めたりして趣向を競ったものだ」と、平川吉六も、過ぎた昔を思い出して話したことがあった。その頃名高かった小島妻之丞も、今では立役になって彦十郎と

一一　野郎の新趣向の装いに、ほれぼれと見とれながら。
一二　「千里を駆ける虎」(謡曲・元服曾我)などということから、下文の虎にかかる。
一三　虎斑の縞模様を織り出したビロード。『難波の良は伊勢の白粉』の評判中、堺の大尽客が小曝へ贈った品々をいう条に、「重ね着物台五十、虎ふ天鵝絨の夜着蒲団」とある。
一四　イロハの文字を染め出した模様。
一五　暦模様を散らした小紋。
一六　→役者一覧。
一七　「名に立つ」と橘との掛詞。さらに「今もかも咲きにほふらむ橘の小島の崎の山吹の花」(古今)によってつぎの小嶋にかかる。
一八　→役者一覧。
一九　→役者一覧。
二〇　→役者一覧。
二一　→役者一覧。
二二　→役者一覧。
二三　→役者一覧。
二四　→役者一覧。
二五　→役者一覧。
二六　→役者一覧。
二七　→役者一覧。
二八　「今はかか方」(花車方)は上文の松本間三郎と、下文の太郎次の上下にかかる。
二九　小勘太郎次　→役者一覧。
三〇　綿帽子ともいい、若い女も頭装に用いたが、ここは老女の防寒用。綿帽子をかぶってそのつど老女の役を勤めている。

一 →役者一覧。
二 松本常左衛門　→役者一覧。
三 未詳。
四 中村主膳　→役者一覧。
五 西川庄太夫　→役者一覧。
六 宮田沖之助　→役者一覧。
七 古くは三種の香を三包ずつと無試の香一種を加え、十炷とした聞香。のち志野流香道を始めた志野宗信（大永二年没）がこれを改め、試み香あるものを十種香、なきものを十炷香と名づけた。
八 海産巻貝のばいでなく、種々の貝の収集。
九「ちかきころよりしやむを蹴あはす事はやり出て、当月などは一羽に付、或は十両、或は五両、ひよこさへ一歩する」（難波の皃は伊勢の白粉二）。
一〇 方屋。土俵場。競技場。
一一 韋駄天。足の速い仏法守護神。
一二 しゃっ面。顔の悪態語。
一三 樊噲。漢初の勇将。鴻門の会に高祖劉邦の危急を救って、舞陽侯に任ぜられた。
一四 四輪の荷車。
一五 現、大阪市平野区。綿の集散地。

言役者、染之丞[一]は惣兵衛となりて世をわたり、常左衛門[二]も以前に見違へ、梅之助[三]は六左衛門とよばれ、主膳[四]は六郎右衛門と云ふ男になる。庄太夫[五]が三味線も死ぬれば聞けず、沖之助[六]が事いひ出すものもなし。これを思ふに、一日も浮世ながら住めるが徳なり。

慰みさま〴〵見たり聞いたり、十炷香[七]すたれば、力をも入れずして楊弓の星の林、夜は又はるかなる音羽山の鈴虫、相坂の轡虫、住吉の松虫籠、これも秋の末より螺[八]づくしはやらし、和朝にある程の事を色品詠めつくし、沙室[九]の鶏合せいさぎよく、ある時小瀑、沙室の鶏をあつめて会をはじめける。八尺四方にかたや[一〇]を定め、これにも行司ありてこの勝負をただしけるに、よき見物ものなり。左右にならびし大鶏の名を聞くに、鉄石丸・火花丸・川ばたいだてん[一一]・しやまのねぢ助・八重のしやつら[一二]・礒松大風・伏見のりこん・中の嶋無類・前の鬼丸・後の鬼丸・天満の力蔵・けふの命しらず・今宮の早鐘・脇みずの山桜・夢の黒船・髭のはんくわい[一三]・神鳴の孫介・さざ波金碇・くれなゐの竜田・今不二の山、京の地車[一四]・平野[一五]の

い、同じく若衆方の小野山主馬は、敵役の宇治右衛門となり、こわい顔をして京都の見物をうならせている。それだけではない。三原十太夫・柴崎林左衛門・沢田太郎左衛門・桜井和平なども、みんな根気よく立役を勤めているが、この連中も以前は若衆だったはずである。立役の岩倉万右衛門・松本文左衛門・山本八郎次などの、あでやかな鬘姿を見たのも、そう昔のことではない。かか方の松本間三郎も、初めは女方で小膳といい、小勘太郎次も、今ではかか方となって、そのつど綿帽子をかぶって老役を勤めている。役者ほど移り変るものはない。染之丞は惣兵衛と改名して舞台を勤め、常左衛門もすっかり変ってしまい、梅之助は六左衛門と名を変え、若女方の中村主膳は六郎右衛門といって立役になっている。庄太夫の三味線も、死んでしまっては聞かれないし、沖之助の事を今では言い出す者もない。これを思えば、はかない浮世とはいうものの、一日でも住みながらえたほうが得というものである。

歌舞伎若衆の慰み事も、これまでいろいろと見たり聞いたりしたものである。十炷香がすたると、力のいらない楊弓が流行り、夜はまた遠い音羽山の鈴虫や逢坂山のくつわ虫、住吉の松虫などを籠に

岸くづし・寺島のしだり柳・綿屋の喧嘩母衣・座摩の前の首白・尾なし公平、この外名鳥かぎりなく、その座にしてつよきを求めて、あたら小判を何程か捨てける。

小ざらし心にまかせ、三十七羽すぐりて、これを庭籠に入れさせ、天晴この鶏にまさりしはあらじと、自慢の夕よりにくからぬ人の尋ね給ひ、いつよりはしめやかに床の内の首尾気遣ひし給ひ、「明方より前に、八つの鐘ならば、夢を惜しまじ、知らせよ」など、勝手のものに仰せけるに、勤めながら真言を語る夜は明けやすく、長蠟燭の立つ事はやく、鐘の

一六 今、寺島という地名はない。当時は寺島新田といい、現、大阪市西区千代崎の地。
一七 大阪市中央区久太郎町にある坐摩神社。
一八 坂田金時の子で、剛勇無双。金平浄瑠璃に登場する架空の人物。
一九 床の内と内(自宅)との掛詞。
二〇 午前二時を知らせる鐘。
二一 当時の長蠟燭は、大形の三百目懸蠟燭と百目蠟燭の二種類であった。



峰野小曝が催した暹羅の鶏合せの会の情景。草履取り（金剛）に籠から出させた鶏を闘わせ、女方役者はそれぞれに自分の鶏を応援。紋所からは特定できないが、左の人物が主人役らしく、小曝か。

入れて楽しみ、それも秋の末になるとすたって、螺尽しが流行るというように、日本にあるいろいろな慰みをし尽したあげく、今度は、勇ましい暹羅の鶏合せが流行り始めた。ある時、小曝が暹羅の鶏を集めて闘鶏の会を催した。八尺四方の土俵を設け、これにも行司があって勝負を明らかにする。おもしろい見物であった。左右に並んでいる大鶏の名を聞くと、鉄石丸・火花丸・川端韋駄天・暹羅のねじ助・八重のしゃっ面・磯松大風・伏見の利根・中の島無類・前の鬼丸・後の鬼丸・天満の力蔵・今日の命しらず・今宮の早鐘・脇見ずの山桜・夢の黒船・髭の樊噲・神鳴の孫介・さざ波金碇・くれないの竜田・今不二の山・京の地車・平野の岸崩し・寺島のしだり柳・綿屋の喧嘩母衣・座摩の前の首白・尾なし公平など、そのほか名鳥が群れていた。人々はその場で強い鶏を求め、あたら小判を捨ててしまうのであった。

小曝は気の向くままに三十七羽選び、それを庭籠に入れさせて、この鶏にまさるものはあるまいと自慢していると、その夕方、小曝の好きなお方が訪ねてこられた。いつもよりはしんみりとした床の内であったが、わが家の首尾を気遣われて、「明け方より前に、八つの鐘が鳴っ

突き出し気の毒、太夫よの事にまぎらかせども、大臣耳をすまし、八つ九つのあらそひかたづかぬうちに、三十七羽の大鶏声々ひびきわたれば、「申さぬ事か」と起きわかれて、客はふだんの忍び駕籠をいそがせける。名残を惜しむに是非もなく、泪に明くるを待ち兼ね、「おのれら恋のじやまをなすはよしなし」とて、一羽も残さず追ひはらひぬ。これなどは、更に分の若衆の思ひ入れには非ず。情を懸けし甲斐こそあれ。

過ぎにし春の海、中国の人、吉川多門に深くむつれての別れに、川口まで見送りし泪、その夜寒空雨となり風となり、袖の外までぬれしをいとはぬ風情、思ひくらべてかはゆさもまされり。いにし律師覚範の、多門といへる童子に、「恨みずば」の歌よまれしも、こんな事のおもはくぞかし。

執念は箱入りの男

田代如風は千人切りして、津の国の大寺に石塔を立てて供養をなしぬ。我又衆道にもとづき二十七年、その色をかへ品

たら寝ていてもかまわぬから知らせてくれ」などと、台所にいる者に仰せられた。勤めではあるが、心をこめて語る夜は明けやすく、長蠟燭の燃え尽きるのも早い。そのうちに気の毒にも八つの鐘が鳴りだした。小曝はほかの話でまぎらそうとしたが、大尽は耳をすまして、八つだという。いや九つだと言い争っているうちに、三十七羽の大鶏がいっせいに鳴き始めた。「言わないこっちゃない」と大尽は起き出し、いつもの忍び駕籠を急がせて帰って行った。小曝は名残を惜しんだが、今更しかたなく、涙にくれて夜の明けるのを待ちかね、「おのれら、恋の邪魔をするふとどき者」と言って、一羽も残さず追い払ってしまった。これなどは職業的な若衆の心意気ではない。情けをかけた甲斐があるというものだ。

ある年の春、中国筋の人が海を渡ってやって来て、吉川多門と深く馴染み、いよいよ別れという時に、多門は安治川口まで見送って行った。その夜は寒空で雨風となり、袖が涙で濡れただけでなく、全身びしょ濡れになるのもかまわなかったという。二人の心意気をかれこれ思い合わせて、かわいさもいっそうまさるように思われた。昔、律師覚範が、多門という少年に、「恨みずばい

一 午前零時頃。二 職業的な歌舞伎若衆。三 →役者一覧。四 睦れて。なれ親しんで。五 淀川の支流堂島川の末、安治川口をいう。船着場。六 覚範は朝範の誤記。律師は徳望高い仏教戒律の師範。「つらかりける童を恨むとて、音し侍らざりければ、わらはの許より、われさへ人をといひおこせて侍りければ／恨みずばいかでか人にとはれまし憂もうれしき物にぞありける」（後拾遺　律師朝範）。なおこの和歌は延宝四年（一六七六）刊の男色に関する和歌を集めた『岩つつじ』（伝北村季吟編）にも収められている。

❖貞享当時の京都の若女方竹中吉三郎と藤田吉三郎の評判とエピソード。作者が備前の客と同道、京都石垣町の茶屋で両吉三郎を呼んで遊んだ夜、両吉三郎に恋慕したという人形屋の看板人形が箱入りで届き、吉三の名を呼んだので、吉三飲み捨ての杯を与えてあきらめさせたという、現実的な場面にそぐわない奇談。

七『摂陽奇観』巻十三の慶安三年（一六五〇）の条に、「十一月、天王寺西門田代供養塔建つ。慶安三庚寅十一月十四日、九州肥後国益城郡中島の住人、田代孫右衛門造立す。世俗に千人切の罪を謝する供養の石碑也とて、図のごとく長き塚なり」とある。『好色二代男』巻八の五でも、同じ趣向を用いている。八 本書執筆の貞享三年（一六八六）現在で、二十七年前は、役

を好き、心覚えに書き留めしに、既に千人に及べり。これを思ふに、義理をつめ意気づくなるはわずかなり。皆勤め子のいやながら身をまかせし独り〳〵の所存の程もむごし。せめては若道供養のためと思ひ立ち、延紙にて若衆千体張貫にこしらへ、嵯峨の遊び寺にをさめ置きぬ。これ男好開山の御作なり。末の世にはこの道ひろまりて開帳あるべき物ぞかし。

ある時、備前の人々、住みなれし国かた、浦々の春の浪、牛窓の白魚、虫明の瀬戸の海月、琴の泊のあみ海老、これを肴に明暮小島酒もおもしろからず、孔子くさい顔つきは所ならひにしてをさめすぎ、先のしれたる命の程を思へば楽しみなし。都の桜ちらぬうちにと、風も船のためにはうれしく、のぼれば安居の藤も今といふ時の鐘、明くれば芝居を見果て、暮るれば品定めして、昼の面影わすれぬ野郎まねける。

いづれはあれど、座敷は菱屋六左衛門が浜二階、東に名山、石垣町筋向ひに四条の橋を目の下に、ここ又京の中の京と云ふ所なり。今宵の遊興常にあらず、有難き美形の集り給ふ中に、百体頭とて御姿のすぐれてをがまれ給ふは、竹中吉三郎・

かでか人に」という歌を贈られたのも、こんな思いを込めてのことであろう。

執念は箱入りの男

田代如風は千人斬りをして、大坂の四天王寺に石塔を建てて、殺した人の供養をした。私はまた男色において、今まで二十七年の間、色を替え品を替えてかわいがった若衆を、心覚えに書き留めておいたところ、すでに千人に及んだ。その交情を振り返ってみると、義理を守り、意気地をつらぬいた交りはめったにない。大方は勤めで、いやいやながら身をまかせた若衆の心を思えば、哀れでならない。せめては男色供養のためと思い立ち、鼻紙で若衆千体の張子人形をこしらえ、嵯峨の遊び寺に納めておいた。これこそ男色開山の御作である。後世にこの道が広まったら、開帳すべきものである。

ある時、備前岡山の人々が、上京して来た。住みなれた国の浦々の春景色にも飽きてしまい、牛窓の白魚、虫明の瀬戸の海月、唐琴の浦の醬蝦の塩辛などを肴に、地酒の小島酒を飲んでみてもおもしろくない。まじめくさった顔つきは、陽明学の流行る土地柄とはいいながら、修まりすぎていて、長くもない命だと思う

者評判記として最初の京都四条河原の評判記『野郎虫』刊行の万治三年(一六六〇)に当る。九 縦二一センチ、横二七センチほどの杉原紙。奉書紙に似て薄く柔らか。上等の鼻紙。一〇 張子に同じ。木型に紙を幾重にもはって形を作り、あとで型を抜きとる。一一 岡山県邑久郡東南部の半島にある牛窓港。歌枕。『和漢三才図会』備前国土産に「水月クラゲ、アミ、白魚」とある。一二 →五三六ページ注五。一三「唐琴の泊り」に同じ。→五三六ページ注四。一四 小えびに似て体長一、二センチ。体は透明。塩辛・佃煮として食用。一五 岡山県南部の児島半島産の酒。『毛吹草』三に「備前小島酒」とある。一六 道学者めいた堅苦しい顔つき。一七 寛永九年(一六三二)に因幡鳥取から備前岡山三十一万五千石へ転封した池田光政は、陽明学者の熊沢蕃山を登用し、藩校(花畠学舎)を設けて士民の道徳教育を振興したので、後世まで陽明学が盛んであった。一八 修まりすぎ。一九 京都東山松原安井門跡真性院の藤。俗に藤寺といい、黄昏の藤といって有名。二〇 世に、黄昏の藤という名のとおり、夕暮れを告げる、時の鐘の鳴る頃。二一 京都西石垣町の茶屋の筆頭菱屋六左衛門。「ここうけたまはりの菱屋六左衛門がせんさく仕出しぬ」(西鶴置土産三の一)。二二 川原に面した二階。二三 東山。二四 供養のために観音や釈迦の像を百体つくるに擬していう。二五 →役者一覧。

[一]藤田吉三郎など、神代このかた古今の稀者、悪い程[二]靚粧の見よげなり。なほうつり香に心のとまる[三]袖岡政之助、歌の一ふしは[四]悩みもとゐ、[五]光瀬左近・[六]外山千之助、この五人打ち込みて、これぞ今の世の色づくし、[七]物いふ花山に入り、春の夜のならべ枕、身をそれになれて、[八]調謔女にかはる事なし。

「これ思ふにひとしほ[九]分の若衆やさし。[一〇]若衆はたがひの心ざしよりかため、命をその人に捨て置き、[一一]自然の時の後だてとも末々の頼もしづく、この君達はたのしみもなく、しかも[一二]心底おぼつかなき初会より、その身を客の物になして勤め給ふは、[一三]地若衆の情ふかきにまされり」と、人の気のつかぬ所に心をはたらかせ、[一四]帥顔なる法師の無用の詞に、興あり過ぎてよろしからず。されども愚かになき太夫子の付合ひ、すこしもしらけずして、酒事殊更につのりぬ。亭主もまはりの悪き盃の時呼び出せば、[一五]あひ〳〵申して数かさなり、偽りなしに酔ひ出て、料理自慢の長口上、申しもあへずかたづけられ、大方は夢になれども、真言はわすれずして、「もはや吸物は宵から六色か。今一度、桂川の[一六]柳魚に[一七]松菜をあしらひて、蓋

と、何の楽しみもない。都の桜の散らないうちにと船出したが、その花を散らす風も船のためにはうれしく、京都へ着いたのは東山の安井門跡の名も黄昏の藤のまっ盛りの時であった。時の鐘とともに夜が明けると、一行はさっそく芝居見物に出かけ、暮れると若衆は品定めして、昼間見た顔の忘れられない野郎を招いた。

茶屋もいろいろあるが、座敷は名にしおう菱屋六左衛門の川原に面した二階で、正面に東山、石垣町を筋向いに眺め、四条の橋は目の下で、ここぞ京都の中の京都という所である。今夜の遊びは、いつもとは違う。ありがたい美少年が集まった中でも、えり抜きの若衆として姿のすぐれているのは、竹中吉三郎と藤田吉三郎で、神代このかた古今に稀な美少年、憎らしいほどその装いは見事である。なおまた移り香に心のひかれる袖岡政之助の小唄の一節は迷いのもとである。それに光瀬左近、外山千之助と、えり抜きの五人の若衆が同座したのである。これこそ今の世の色尽し、客はものを言う花の山に分け入ったような気持で、若衆と並べた春の夜の枕の戯れは、遊女とのそれと少しも変らない。

「考えてみると、玄人の若衆はなんと優しい事だろう。素人の若衆は兄分との互

一 →役者一覧。
二 『遊仙窟』の字訓。
三 袖岡今政之助 →役者一覧。
四 迷いのもと。
五 →役者一覧。
六 →役者一覧。
七 「物いふ花」と花山の掛詞。物いう花は美人のたとえ。解語花の訓。
八 『遊仙窟』の字訓。
九 職業的若衆。
一〇 素人の若衆は、兄分との心意気で契約し。
一一 万一の時。
一二 気心もわからない初会から。
一三 素人の若衆。
一四 帥は粋。粋人ぶった坊主頭の取持ち。すなわち作者西鶴。西鶴は延宝五年冬に剃髪している。次章「小山の関守」の冒頭の法師も作者西鶴。
一五 間。杯のやり取りの間にはいって、取次ぎをすること。その重言。
一六 柳葉魚の略。無足目の魚類の稚魚で、無色透明、柳葉状をなす。
一七 アカザ科の一年草。高さ約一メートル。海岸に自生。栽培して若菜を吸物の青みや味噌あえとする。

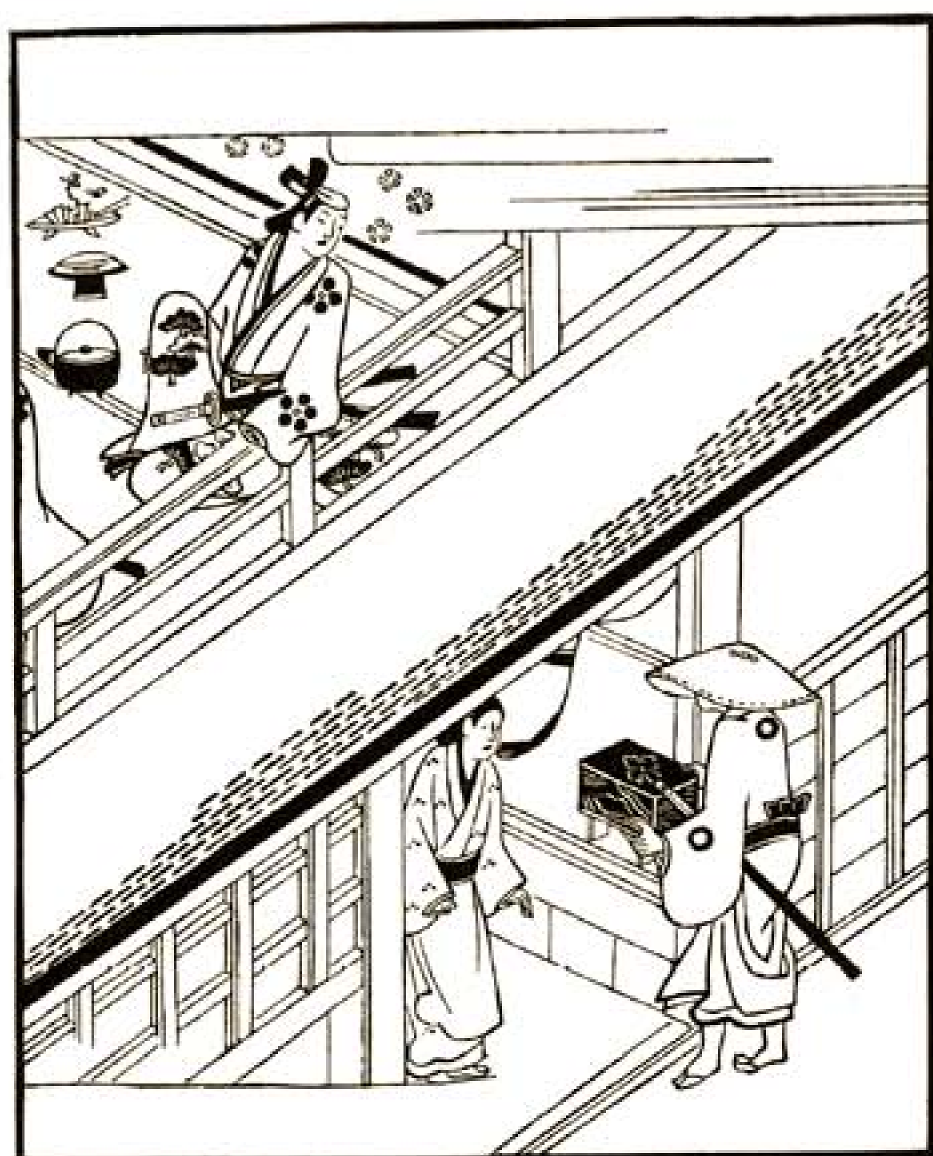
一八 生あわび。
一九 遊興の座敷。
二〇 銭三十文のものが小判二両。
二一 通辞。通訳。
二二 無節制な飲み方。がぶ飲み。
二三 浅黄の引っ返し。裾まわしに表裏共切れを用いること。共裾。
二四 中国から舶来の絹。
二五 八色で段染めにした紐であろう。
二六 藤田の名にちなんだ藤色の紫縮緬の小袖を二枚重ね。

茶碗にてかるう出せ。その跡に、水溜めて深き鉢に桜の花を浮けて、生貝[18]を角切りにして先細の箸を添へて出せ。色座敷[19]は仕掛けばかりの物ぞ、銭三十[20]が物が小判二両になるをしらずや。我が才覚ひとつで、十三人口四十年過ぎるは、世間の人さまにあしからず思はるるゆゑぞかし。別して今宵のお客、他所の御方、太夫さま達も今の都の晴れなり。お手がならば猫までに通事[21]させよ」といひ寝入りにする事、二階に聞こえて、それ〳〵の身過ぎと、ひとしほをかしかりき。

　その後は我呑み[22]あらはれ、酒になれたる君達さへ、色あそびの色に出、紅の寝道具に移り、ひとり〳〵の身振り、先づ竹中は、浅黄[23]かへし下着に、中は紅鹿の子、上は鼠じゆすの紋付、白らしやの羽織に小鳥づくしの唐衣[24]の裏を付け、八所[25]染の胸紐ときて白糸の長柄ぬき出し、ひだりのすこし身をひねりて座して、笑へる口もとのゆがむになほしをらし。藤田は、白小袖の上に我[26]が名の色をふくませ、紫ぢりめん二つかさね、なほまた羽織・帯までも同じ色の帽子、しめやかに身をかため、息づかひまで気を付け、自然と若衆にそなはれり。

いの心意気で契約し、命を兄分に預けておき、万一の時には後楯になってもらおうと、行く末までも信頼し合っての付合いだが、この若衆たちはそういう楽しみもなく、しかも気心もわからない初会から、その身を客にまかせて勤められるというのは、情けの深い素人の若衆よりはまさっていましょう」と、粋人ぶった坊主頭の取持ちが、よけいな事を言ったので、おもしろすぎてかえってしらけてしまった。しかし利口な若衆たちの座持ちで、少しも興ざめせずに、いよいよ酒宴は盛んになった。杯のまわりが遅くなった時、茶屋の亭主を呼び出すと、たびたび杯の取次ぎをしているうちに、ほんとうに酔ってしまい、長々と料理自慢を始めたが、それも飲みつぶされて前後不覚となってしまった。それでも本性は忘れないで、「もう吸物は夕方から六色出したか。もう一度桂川の柳魚に松茸をあしらい、蓋茶碗で軽く出せ。その後で深い鉢に水を入れて桜の花を浮かし、生あわびを角切りにして、先の細い箸を添えて出せ。遊びの座敷は見せかけが第一だ。銭三十文ほどのねたが、小判二両になることを知らないのか。おれの才覚ひとつで、一家十三人を四十年もたて過ごして

筋目あらばよき大名の道具なるべき人がらも今、行末の芸の事までも、岩井半四郎と素面の時沙汰し置きぬ。京にうれしがり、大坂に請け取る仕出しなり。袖岡は、黄なる肌着に青茶・椛茶の縞揃へ、ばつとしたるかたぎ、さながら女のごとし。その物ごしたま／＼に聞く人は、作り声とも思ふべし。かしらから濡れものに、誰かいやといふはなし。光瀬は、白き下着に薄色の中形、縫ひ分け縞のうね帯、もえぎの袋うちの柄糸、なで角の金鍔、髪結ふさまも一きは目立ちて、ぬるき所なく人の好ける風儀あり。外山は、紅の色こく、白地に

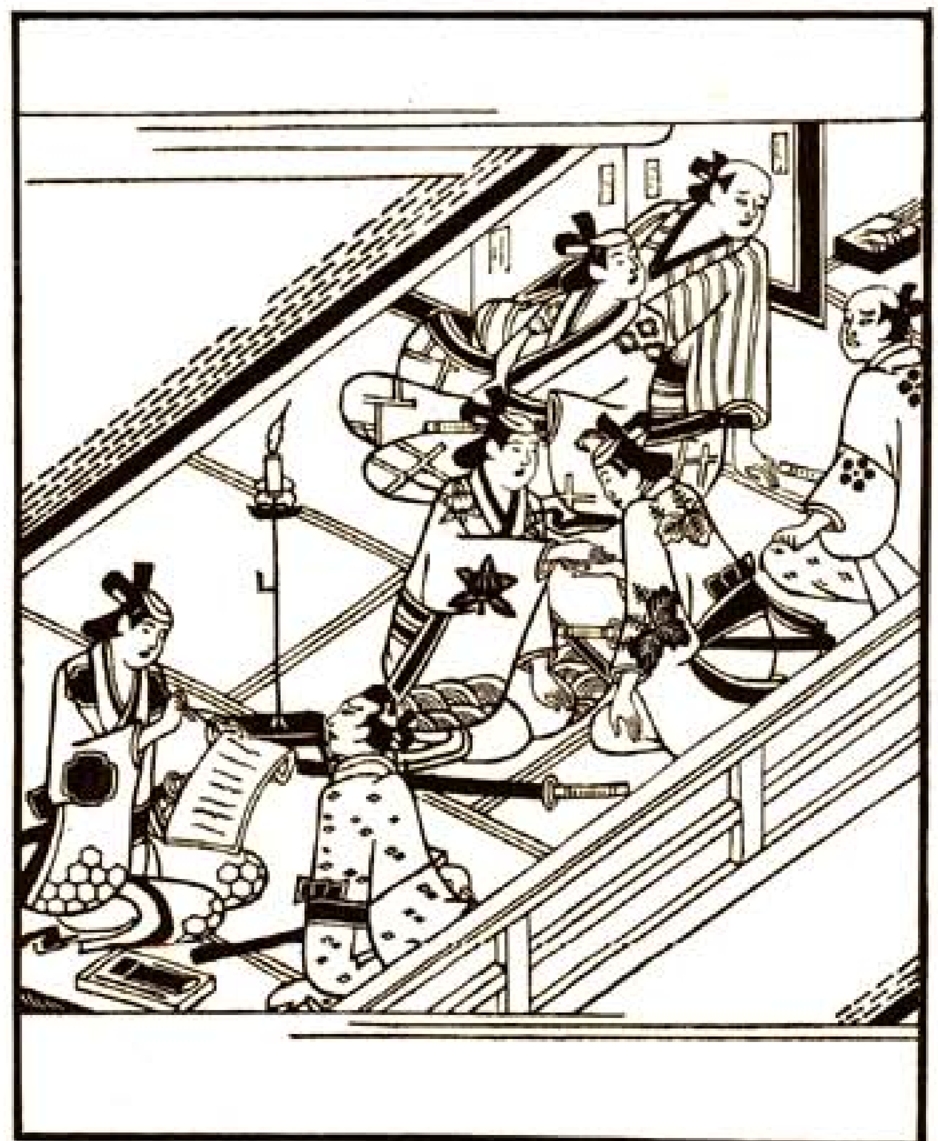


下半左衛門か。その前で体を寄せ合いながらのぞいているのは、上が外山千之助、下が袖岡政之助。中央で手を合わせている二人は、右が竹中吉三郎、左が藤田吉三郎である（紋所などよりの推定）。

きたのは、世間の人様に悪く思われなかったからだ。ことに今夜のお客は他国の方々、お若衆も今の都の花形だ。お手が鳴ったら猫までも通訳させせよ」と言いながら寝込んでしまった。それが二階まで聞こえて、それぞれ商売は抜け目のないものだと、ひとしおおかしかった。

それからはがぶ飲みになって、酒になれた若衆たちも、紅の夜具に劣らないほど顔が赤くなった。一人一人の身なりを見ると、まず竹中は下着は浅黄の引っ返し、中着は紅鹿の子、上着は鼠繻子の紋付、白羅紗の羽織に小鳥尽しの模様の舶来絹の裏をつけ、八所染の羽織の紐をといて、長い白柄の脇差を半ば抜き出してさしている。左の方に少し身をひねってすわり、笑うたびに口元のゆがむのがいよいよかわいらしい。藤田は、白小袖の上にわが名の藤色の紫縮緬の小袖を二枚重ね、羽織や帯までも同じ色で、紫帽子をしっとりとかぶって身をひきしめ、息づかいまでも気をつけている。自然と若衆に生れついた風格で、素姓さえよければ、大名のお小姓にもなるべき人柄だし、芸も行く末は立派になるに相違ないと、素面の時に作者は、座元の岩井半四郎と噂したことがあった。京都の客にもうれしがられ、大坂でも迎えられる押出しで

一 →役者一覧。
二 音声。話し声。
三 薄紫色の中型模様。
四 縫い分け縞の畝刺しの帯。真綿を入れた帯を、刺繡の縞模様で畝刺し（キルティング）したもの。
五 丸打ち。平打ちに対して、紐を管状に編んだものをいう。
六 角鍔の角に丸みをつけたもの。
七 でれっとしたところ。生ぬるいところ。
八 濃い紅の下着に、上着は書絵（肉筆絵）。



京石垣町の菱屋六左衛門の浜二階で遊興する役者たちの所へ、贈り物と称して人形屋が箱を一つ持って来たところ。手すりによりかかってその様子を見ているのが光瀬左近。左面右の月代を剃った役者は山

書絵の東海道、いやしき馬方もこの君につなぎ[九]、川越[一〇]しもこの恋に沈み、身の上を白川橋[一一]にまことの旅人の声もして、鶏も客の立つ時をつくり、頂妙寺[一二]の鐘無性につきならし、その数は百八[一三]やら、八十八夜[一四]の名残の霜、三月二十八日の更け行く袖のひややかに、あそぶにあかぬ男、性悪といへ、さてそれにはちつともかまはぬ世なり。なんのかの、「焼味噌で又酒よ」と云ふ時、門の戸扣き明けて、「これを二階のおの〱さまへ」と、進上箱[一五]ひとつわたして、その使は見えずなりにき。

ある。袖岡は、黄色な肌着に青茶と樺茶の縞の小袖を重ね、ぱっとした人柄は、まるで女のようである。その優しい話しぶりは、たまたま聞く人は作り声かと思うだろう。まるっきり色っぽいので、誰もいやというものはない。光瀬は、白い下着に薄紫の中型模様の小袖を着て、刺繡で畝刺しにした縞帯をしめ、柄糸は萌黄の袋打ちの紐、撫角の金鍔をはめている。髪の結い方もひときわ目立って、でれっとしたところがなく、人好きのする風采である。外山は、濃い紅の下着に、白地に肉筆で東海道を描いた小袖を着ている。卑しい馬方もこの君には恋い焦れ、川越え人足も身の程を忘れて恋に沈むことであろう。やがて三条の白川橋のあたりに、本物の旅人の声がして、鶏も客の朝立ちをうながすように鳴き始めた。頂妙寺で明けの鐘をむやみに撞いているが、その数は百八つであろうか。ちょうど八十八夜で、霜の降るのも今夜限り、三月二十八日の夜も更けて、さすがに袖も冷たい。それでも遊びに飽きない男どもは、性悪と言われようが、そんなことはちっともかまわぬ浮世だ。「ともかく焼味噌でまた酒だ」と言い出した時、門の戸をたたき明けて、「これを二階の皆様へ」と、贈り物の箱を一つ渡して、その使い

九 東海道の縁。馬をつなぎ。恋い焦れ。
一〇 同じく、川越え人足。
一一 身の上を知らぬと白川の掛詞。白川橋は京都市東山区の三条通白川筋の東海道筋に架した官橋で、東海道の終点三条大橋の一つ手前の橋。
一二 京都市左京区仁王門通川端東入ルにある日蓮宗の本山。梵鐘は古来有名。
一三 人間の煩悩の数は百八とされ、寺院で朝夕、百八を略して十八回打ち鳴らした。ただし大晦日の夜は百八回撞く。
一四 立春からかぞえて八十八日目の夜、太陽暦で五月二日頃。霜の降るのはこれを限りとするので、名残の霜という。
一五 贈物を入れる化粧箱。

座敷へ持つて出ての不首尾(ぶしゆび)、先から名をいはぬもかしこし。此方(こなた)にとはぬも利発なり。[一]見えわたりたる所杉(すぎ)の箱なれば、この内菓子(くわし)には極まれり。昼あひし役者にこの趣向はかたらず。誰(たれ)かは気付けておくりけるぞと、近付き思ひ出(いだ)すに、[二]藤本平十郎・[三]榊原(さかきばら)平右衛門・[四]杉山勘左衛門・[五]坂田伝才なども知らぬ事なり。「さては天から降りたる一箱」と大笑ひして、明けもせずそのままに捨て置きぬ。

程なく、太夫(たいふ)たちの迎ひ駕籠(かご)とて声さわがしく、いづれも心の残らぬ別れ、又晩も約束して逢(あ)ふまでの淋(さび)しさ、君立ち帰られし跡にて、とんと寝たが最後[六]尾も頭(かしら)も覚えず、五人ながら枕も定めかね、いろ〳〵の夢みる時、最前の箱の中より、「吉三〳〵」と[七]諸声(もろごゑ)のする事うたがひなく、皆々聞き耳立てて起き出(いづ)れば、箱に音あつておそろし。されども、きかぬ男ふたとつてみれば、[八]姿人形の[九]角前髪(すみまへがみ)、いかなる人の作りけるぞ、さながら目つき手足の力身(りきみ)生きたるもののごとし。なほ気を付けて見しに、これに添状(そへじやう)あり。「それがしこのあたりの人形屋なるが、この形(かたち)ひとしほ心を込めて作り、看板に立

は帰って行った。

その箱を座敷へ持ち出したが、困ったことに先方も名のらず、こちらも名を聞かなかった。しかし、かえって、その方がよかったようだ。見たところ、杉の箱だから、中身は菓子にきまっている。昼間逢(あ)った役者には、今夜の趣向は話してない。誰が気をきかして贈ったのだろうと、あれこれと近づきを考えてみたが、藤本平十郎・榊原(さかきばら)平右衛門・杉山勘左衛門・坂田伝才(でんさい)なども知らないはずである。「さては天から降った一箱だ」と、みんな大笑いして、開けて見もせずにそのまま放っておいた。

まもなく若衆(わかしゅ)たちの迎えの駕籠(かご)がやって来て、がやがやと騒ぎ出した。男どもはみんな心の残らぬ別れをしたが、また晩も約束して、また逢うまでの淋(さび)しさはひとしおであった。若衆たちが帰ったあとは、とんと寝たが最後、五人とも前後不覚で枕もはずし、いろいろと夢を見ていると、さっきの箱の中から、「吉三(きちざ)、吉三」と二度呼ぶ声が、はっきりと聞こえた。みんな聞き耳を立てて起き上がると、箱の中で音がして気味がわるい。だが気の強い男が蓋(ふた)を取って見ると、角前(すみまえ)髪(がみ)の美しい人形がはいっていた。どんな人が作ったのであろうか、目つきや手足

一 見たところ。
二 →役者一覧。
三 →役者一覧。
四 →役者一覧。
五 →役者一覧。
六 前後不覚で。
七 ふた声。
八 美人人形。
九 額の両角を直角に剃りこんだ半元服。十五、六歳で行う。

て置きし事年久し。いつの頃よりこの人形、魂のあるごとく身をうごかしける事たび〳〵なり。次第に奢り付きて、この程[一〇]衆道心を移し、芝居帰りの太夫達に目を付け侍る。これさへ不思議なりしに、夜毎に名をさしてその子を呼びける。何とやらおそろしく、外にはこの事しのび、川原に流しけるは二三度なれども、いつとなく宿に帰りぬ。木のはしの物いふ事、前代ためしもなく、聞き伝へし事もなし。我が物ながら、さりとてはもてあまし迷惑なる折節、藤田・竹中両太夫どの、その座に御入りを見および、これをつかはしまゐらす。又の世までの咄の種にためして見給へ」と、ただしく書き付けける。

　その中に大方なる事にはおどろかぬ男進みて、人間にあいさつするごとく、「おのれその身をして若道の心ねやさし。両吉三郎に思ひ入れありや」といへば、たちまちうなづきしを、いづれも我[一一]折つて興を覚まして、宵の慰みあだになりぬ。子細らしき人、[一二]十面つくつて語りし。「これとてもあなどるまじ。そもそも人形は、[一三]垂仁天王八年に野見大臣これを始め

の様子がまるで生きているようであった。なお気をつけて見ると、添え手紙がはいっていた。「私はこの近所の人形屋ですが、この人形をひとしお心をこめて作り、長年看板に立てておきました。いつのころからか、この人形は魂があるようになり、たびたび身を動かします。しだいに我儘になってきて、近頃は男色づいて、芝居帰りの若衆たちに目をつけます。これだけでも不思議なのに、毎晩その若衆の名を呼びます。なんとなく恐ろしくなりまして、人知れず川原に二、三度も流しましたが、いつのまにか家へ帰って来ます。木切れがものを言うなどという事は、前代に例がなく、聞き伝えた事もありません。わが物ながらすっかりもてあまし、困っている折から、藤田・竹中のお二人がその座においでの事を知りまして、この人形を差し上げます。後の世までの話の種に、ためしてごらんなさい」と、はっきり書いてあった。

　一座の中でも、たいていの事には驚かない男がいて人形に近づき、人間に挨拶するように、「貴様、人形の分際で衆道の心をもつとは優しい事だ。両吉三郎を思っているのか」と言うと、人形はただちにうなずいた。人々はあきれ返って興ざめし、昨夜からの慰みも吹っ飛んでし

一〇 男色づいて。

一一 閉口して。あきれて。
一二 渋面。しかめっ面。
一三「按ズルニ本朝ノ木偶ハ、垂仁天皇八年、野見宿禰始テ人ノ形ヲ造ル」(和漢三才図会)。

一 天秤棒で担ぐように、両方を等分に所有すること。「島原の野風、新町の荻野、この二人を毎日荷ひ買ひして」(五人女二の三)。
二 秤の錘(おもり)である分銅の形に鋳造した金銀塊。豊臣秀吉の時、軍用に金分銅を製し、江戸幕府もしばしば金銀分銅を鋳造した。千枚吹きと二千枚吹きの二種類があり、一枚は量目四十四匁(一六五グラ)であるから、千枚分銅はその千倍で一個四十四貫目内外。銀分銅も同じ。

❖天和三年(一六八三)四月十七日、作者は知人に誘われて、河内の藤井寺の開帳に出かけた。同行の若衆のかれこれを評判、特にその中の一人上村辰弥をほめている。開帳参詣の道中記を主とする。
三 大阪府藤井寺市小山。大和川の南岸。 四 山城をはじめ近畿・中部地方の諸国にある三十三か所の観音を本尊とする寺。 五 葛井(ふじい)寺とも書く。大阪府藤井寺市藤井寺にある西国第五番の札所。真言宗御室派の寺で、本尊は十一面千手観音。西鶴の藤井寺開帳参詣の件は、『役者大全』にも見える。
六 西鶴自身。→五七四ページ注一四。
七 四天王寺の別名。
八 午前八時を告げる時の鐘。 九 徳川家康の命日。四月十七日。この日江戸では将軍家の日光社参があり、町方火の用心・芝居鳴物停止。大坂

て作り、人のはたらきをえたり。唐にも后をみて笑ひたる伝へもあり。この二人すぐれて美児あらはれたり。かかる形の物さへ思ひ入りける」としばらくかんじて、いまだ枕にありし捨て盃を取りあげて、「これ皆君のお口の添はりし跡ぞ」といただかせて、「惣じてこの人々を諸見物おもひ入りしその数をしらず。とても叶はぬわけあり」と、ならぬ子細を小語きければ、人形ながらがつてんしたる顔つき、その後は目もやらず思ひ切りける。

これさへこの聞きわけのあるかしこき世に、親の異見を尻に聞かし、野郎ぐるひに事つのつて、家うしなひ所をさり、あかぬ妻子に暇の状をつかはし、都を立ちて江戸行けばとて、一升入る壺に埋み金もなし。さりながら、一代跡のへらぬ金の棒あらば、[一]一荷にして持ちたき物は竹中吉三郎・藤田吉三郎、重いかるいなし、とかく[二]千枚分銅。

[三]小山の関守

まった。そこでもっともらしい人がしかめっ面をして語った。「いや、人形だとて侮るまい。そもそも人形は垂仁天皇の八年に、野見宿禰が初めて作り、人間の動きを得たということだ。唐土でも人形が美しい后を見て笑ったという伝説がある。この両吉三は世にもすぐれた美少年なので、こういう人形までも惚れこんだのであろう」と、しばらく感心していたが、まだ枕元にあった飲み捨ての杯を取り上げて、「この杯はお二人のお口が触れたものだ」と言って、人形に差してやり、「だいたいこの若衆たちには、大勢の見物人が恋い焦れているのだから、とてもできない相談だ」と、望みのかなわぬわけをその男がささやくと、人形ながらも納得のいった顔つきをした。その後は目をくれずに思い切ったという。

こんな人形でさえも聞き分けのある賢い世の中なのに、親の意見を尻に聞かせ、野郎ぐるいが高じて家を失い、所を立ち退き、飽きも飽かれもせぬ妻子に離縁状をやり、都を出て江戸に下ったからといって、小判の詰まった一升入りの壺が埋まっているはずもない。だがしかし、一代使っても減ることのない金の棒があったら、一荷にして手に入れたいものは、竹中吉三郎と藤田吉三郎である。この二

[四]西国三十三所の観音、五番は河内の国[五]藤井寺の開帳、天和三年四月に「参詣せん」と、重といへる人俄にさそふ水、夜前の寝顔洗ひもあへず、[六]法師の徳には髪結ふまでもなく、駕籠はやめて[七]難波寺の[八]五つの鐘の鳴る時、殊勝さも今日は[九]御命日にして、[一〇]御魂屋のよそほひ寂光浄土、ここ[一一]極楽の東門過ぎて行くに、その一日は世上の[一二]鳴り物とまれば、なほまた芝居の役者子どもの隙なり。思ひ／＼の袖をつらねし折節は、[一三]衣装の御法度かたく守りて、随分目立たぬ仕出しなれども、[一四]形の山更に桜は花に顕はれ、舞台子は鬢つきにしるるぞかし。

やう／＼[一五]平野の里大念仏の御堂に休みしに、宵の約束たがへず、[一六]森といふ男、按摩取りの休古をつれてきたるにぞ、ひとしほをかしさまされ。それより春野の名残、草々の[一七]花分け衣、歩行路おもしろく程なく参りて、下向に小山といふ里人の方にやどり求め、「さらばこの所に関据ゑて、今日詣でたる子供を、ひとりも残さず留めて酒事よ」と、軒の番屋に毛氈しかせ、「色にとめる[一八]酒ばやし」と札を立て、立役の[一九]源右衛門を目付とし、[二〇]文作の三味線引きかけて、今や／＼と待つ

人は重い軽いのない千枚分銅である。

小山の関守

西国三十三か所の観音の五番は、河内の藤井寺である。そのご開帳に「参詣しよう」と、天和三年四月の十七日に、重という人が突然誘いにやって来た。昨夜の寝顔を洗う暇もなく、そのうえ作者は坊主頭なので、髪を結う手間もいらず、駕籠を早めて出かけた。五つの鐘の鳴る時分に、四天王寺にさしかかったが、今日は十七日で権現様のご命日なので、御霊屋も装いをこらし、さながら寂光浄土のようにありがたく拝まれた。この極楽の東門を通り過ぎて行ったが、今日一日は鳴物停止なので、芝居の役者子供はいよいよ暇である。連中もそれぞれ着飾ってやって来たが、今年の二月に衣装法度が出たばかりなので、掟をかたく守って、ずいぶん目立たないように装っている。だがみんな美しい連中なので、満開の桜山のようにはなやかである。第一舞台子は髪の結い方でそれとわかるものである。

ようやく平野の大念仏寺に着いて、御堂に休んでいると、昨夜の約束どおり、森という遊び仲間が按摩取りの休古を連れてやって来たので、ひとしおおもしろ

において毎年四月五日付の町触れで、日光御法事につき、町々諸事穏便のお達しがあった(大阪市史(三))。

一〇 家康の霊を祀る廟。元和年間、徳川秀忠が千七十余石の朱印状を四天王寺に与え、日光山輪王寺の支配を受けているから、盛大な法要を営んだ。

一一 四天王寺の西大門は、昔から極楽の東門と信ぜられ、西方を正門として門前に石の鳥居があり、鳥居には、「釈迦如来、転法輪所、当極楽土、東門中心」の額がかかっている。

一二 →注九。

一三 衣装法度は延宝以前にもたびたび発令されているが、特にこの章の年時である天和三年二月に出た法度は、一般の女衣装はもとより、役者や遊女にも及んでいる。

一四 満開の桜の山のようにはなやかで。

一五 大阪市平野区平野上町の融通念仏宗の総本山大念仏寺。大治二年(一一二七)、鳥羽天皇の勅願により良忍の開創。

一六 当時の大坂の世之介的遊び人。『好色一代男』巻七の七に、「一年森が道いそぐとて、駕籠の者殺せし野辺もこのあたり」とあり、『好色二代男』巻四の五には「森五」、また『西鶴置土産』巻五の三には「森五郎」として登場している。

一七 歌語。花の野山を分け行く衣。

一八 杉の葉を束ねた酒屋の看板。

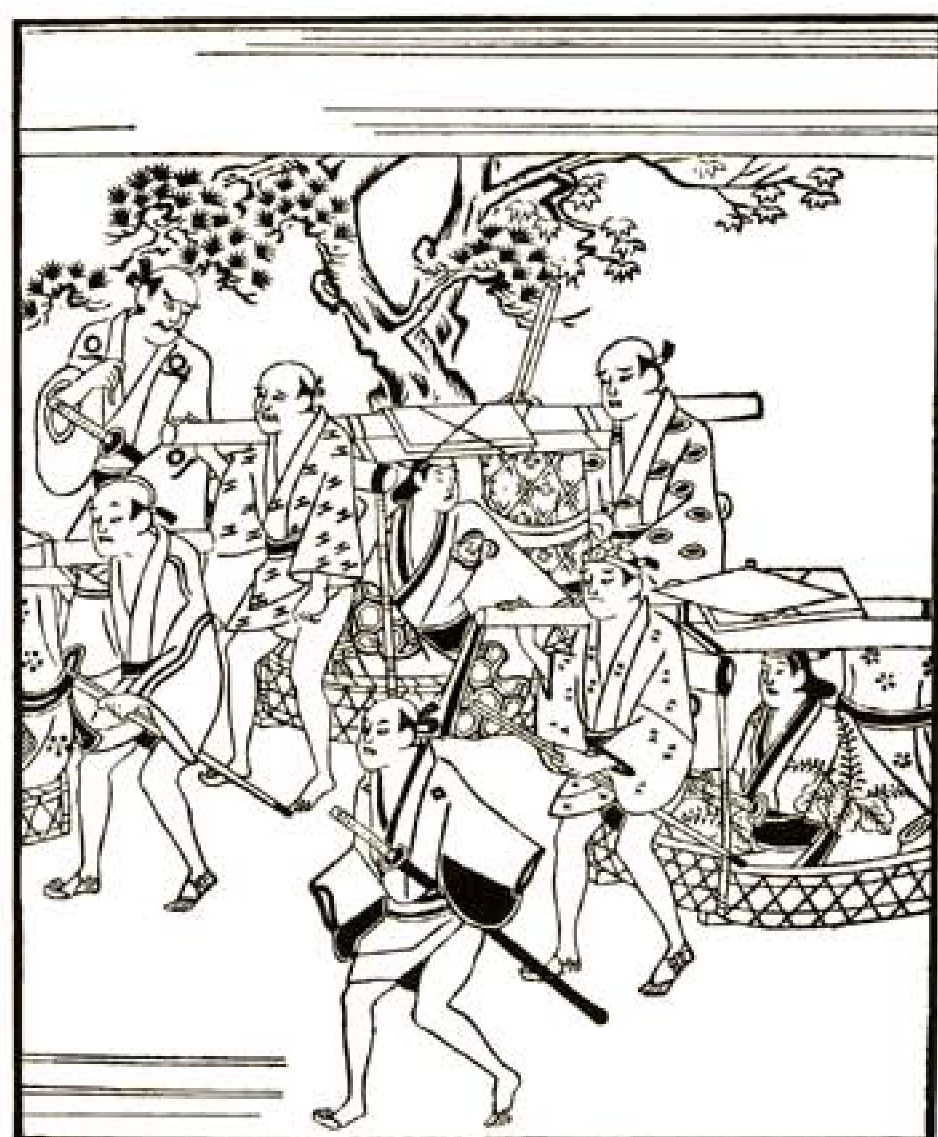
一九 →役者一覧。

二〇 即興の作詞・作曲。

一 ↓役者一覧。
二 ↓役者一覧。
三 未詳。
四 ↓役者一覧。
五 上村吉弥(二代目)　↓役者一覧。
六 二代目吉弥の弟。上村辰弥　↓役者一覧。
七 百姓が街道筋に出している茶屋。

所に、沢村小伝次[一]をかしがらせ、竹中半三郎[二]に無理酒を汲みかはし、小松才三郎[三]に心を残させ、尾上源太郎[四]が病気を浮かし、かれこれ十六人、日も暮々の長座敷、ばらりと立ち行く跡はもとの在所となる。

　牛はくろし、木綿は白し、人の顔はあかく西日をあらそひ立ち出るに、ここに兄弟の女方、同じつれを別れて、吉弥[五]は堺に、辰弥[六]は大坂にかへるに、道すがらの野夫出茶屋[七]も、「今朝よりすぐれてうつくしきは、定めて上村辰弥ならめ」と、名をさしあつるも真言なり。よきもの人もしる事ぞと、

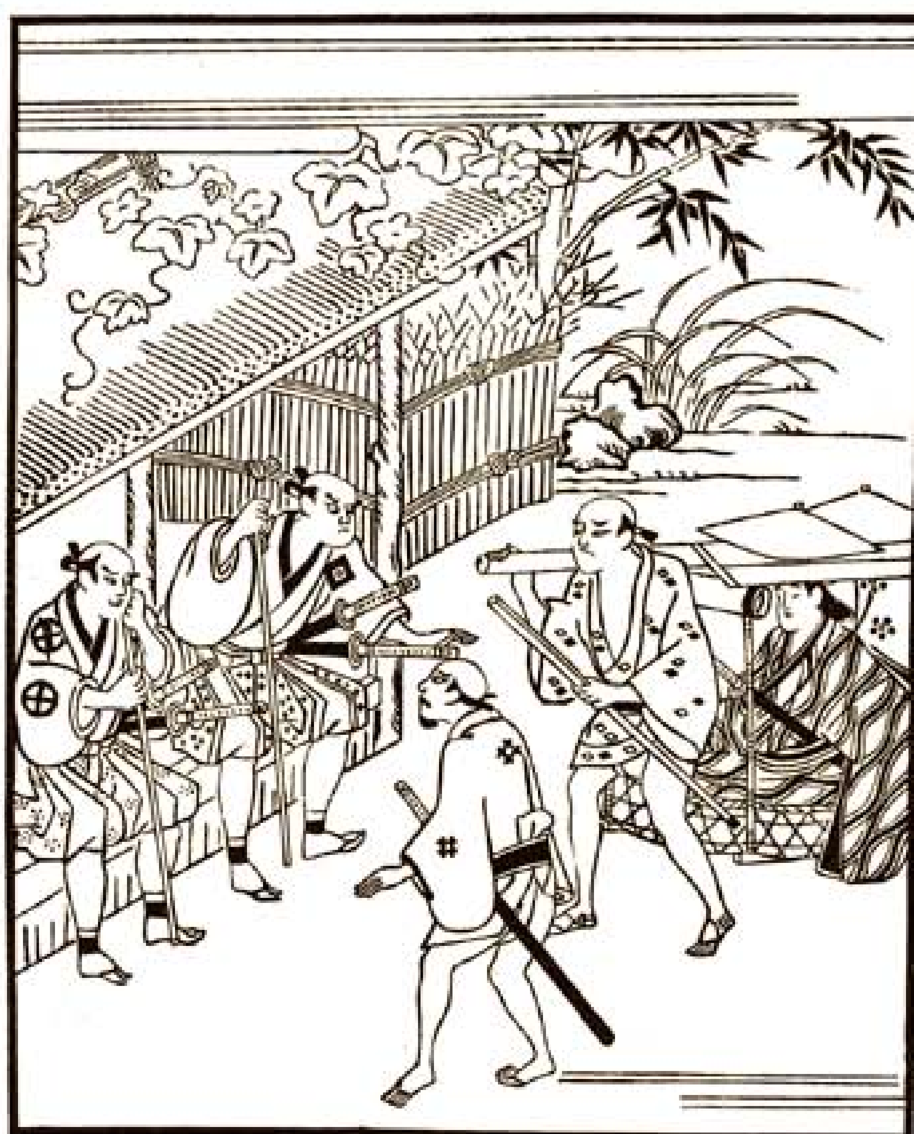


ている所。行列の先頭を行く草履取りは困惑の体である。左面の駕籠の役者は紋所がないが本文中の竹中半三郎か。つぎの駕籠にのるのが上村辰弥（ただし紋は少々異なる）、最後の駕籠が沢村小伝次。

くなった。それからは春野の名残の草花を踏み分けながら、徒歩の道行きもおもしろく、まもなく藤井寺にたどり着いた。帰りに小山という村の村人の家に宿を求め、「それではここに関所を設けて、今日藤井寺に参詣した若衆を、一人も残さず書き留めてから酒盛りにしよう」と、軒端に設けた番小屋に毛氈を敷かせ、「色にとめる酒林」と記した札を立て、立役の源右衛門を監督とし、即興の三味線を弾きながら、今や今やと待っていた。まずやって来た沢村小伝次をおかしがらせ、竹中半三郎に無理酒を飲ませ、小松才三郎に心を残させ、病中の尾上源太郎をうきうきとさせ、かれこれ十六人、日も暮々になるまで長座して、いっせいにばらりとたちのいた跡は、元の淋しい在所となった。

　牛は黒し、木綿は白し、人の顔は西日のように赤くなって引き上げて行った中に、兄弟の女方は一行と別れ、兄の上村吉弥は堺へ、弟の上村辰弥は大坂へ帰って行ったが、途中の百姓茶屋で、「今朝から見る若衆の中で、これはとびきり美しいが、きっと上村辰弥であろう」と、名を言い当てたのももっともである。よいものは人もよく知っているものだと、一行の一人の手堅い最上商人も商い口を

八 最上地方（山形県）と上方は、その地の物産の紅花や米をもって直結していた。同地方の商人は人情薄く、事を容易に承引しないので、そういう性格の人の代名詞として用いられた。
九 商品の安値をねらって買い込み、高値を待って売り、その差額を儲ける商行為を買置きという。
一〇 取引きを確認する行為。手打ちという。
一一 買って遊べないものならば。
一二 廓の女郎。



小山の里に関所を設け、美少年の役者が藤井寺の開帳参詣から帰るのを待ち受け、酒の相手をさせようという趣向で、左面左側は、立役の源右衛門他一人が、目をいからして駕籠で帰る若衆を留めようとし

最上人も商ひ口を出して、「万に買物心元なし。買うてあがりをたしかに請くる、この子より外なし」と、「胸算用違ひはないか、手を打て、打ちもせい」と大笑ひして、心は恋のはじめとなれり。ならぬものならば人死絶えまじ。

　同じ勤め子のうちにも心ざし格別に違へり。親方のためとばかり、うか〳〵と客に身をまかすもあり。「かくかりそめの執心も大方ならぬ気づくし」と、その人をおろそかにせぬこそやさしけれ。親類にも合力せぬは金銀なり。むかしは情もふかかりしに、いつその程より分里の女のごとくなりぬ。

きいて、「買物は何でも心配なものだ。買ってたしかに儲かるのは、この子のほかにはない」と言ったので、「胸算用に違いはないか。手を打て、打ちなさい」と大笑いして、心に恋が芽ばえた。買って遊べないものならば、人死には絶えまい。

　同じ勤め子でも、気の持ち方はひどく違っているものだ。親方のためとばかり、うかうかと客に身をまかせる若衆がいるかと思うと、「その場限りであろうと、こんなに自分を慕ってくださるのは、並並ならぬ心尽しだ」と、その客を大切にする優しい心がけの若衆もいる。親類にも用立てないのは金銀だ。勤め子も昔は情が深かったが、いつのころからか廓の女のようになってしまった。好きな相手は別として、金になる大尽客と安上がりの連れ込み宿で忍び逢い、客の酔いを見すまして無心したりする。そのうえまもなく廓のように紋日をつくり、毎月十二日は三津寺薬師の縁日、十五日は三津寺八幡、十八日は新清水観音と紋日を定めて、毎月めんどうなことになるだろう。

　女郎も野郎も流行っている時に逢ったほうがよいという。同じ揚代なのだから、何かにつけてよいはずである。しかし、とやかくいうのは情け知らずというもの

[一]おもはくの念比は格別、大臣に小宿[二]にてあふなど、盃[三]のうちはかるなど、追付け紋日[四]をこしらへ、八月十二日は三津寺[五]の薬師、十五日は八幡[六]、十八日は清水観音[七]、役日[八]も定め、毎月むつかしくなりぬべし。

女郎も野郎も時花るにかかるがよしといへり。おなじ事にて万に付けてよいはずなり。さま〴〵にいふは情しらず、さりとてはよくも[九]勤めの身なり。一疋の蚊の食ひ所、わづか物[一〇]の立ちしも人は身をなやませけるに、義理にもせよ欲にもせよ、数の定まりてそれ〴〵に役ある指を、よう〴〵[一一]切る事ぞとあはれさましぬ。唐国[一二]にも身の血をしぼりて酒となし、世をわたれる伝へもある酒屋[一三]に、山本左源太[一四]、わけのよき[一五]あまりに心中あらはし指を切りしを、よろしく取沙汰して名を今に残しぬ。諸事を聞くに、右近[一六]源左衛門にありし時より情ふかく、世にかくれし人のむかしを尋ね、なるまじき事ども見し人泪をこぼし、聞くにほめぬはなし。勤めの若衆もかくまたあればたのもし。これさへ世間の噂にやん事なし。

上村辰弥は、かりそめ客の出合ひに、座もしめやか過ぎて

だ。考えてみればよくも勤めているものだ。一匹の蚊に食われても、ちょっとした刺が立っても、人は身を悩むものなのに、義理にもせよ欲にもせよ、数が決まっていてそれぞれ役目のある指を、よくも客に切ってやるものだと思うと、哀れでならない。唐土にも体の血をしぼって酒を作り、世を渡ったという言い伝えがある。酒といえばある酒屋の客と深間になった山本左源太が、真心を示すために指を切ったのを、世間ではよろしく評判して、今でもその名が残っている。いろいろ聞いてみると、この左源太は、右近源左衛門の手元にいた時から情けが深く、おちぶれて姿を隠した昔の客を訪ね、まねのできない事をしたということだが、それを見た人は涙をこぼし、聞いてほめないものとてはなかった。勤めの若衆も、こんなふうだと頼もしい。これさえ世間ではとかくの噂が絶えないのである。

ある時、上村辰弥は初めての客と出会い、座も沈んで杯のまわりも遅く、何となくおもしろくなかった。すると誰が言うともなく、「役にも立たない心中立ての話をよく聞くが、そうそう指は切られまい」と、何気なく言うのを辰弥が聞いて、「事と次第によっては、命でも捨てます。まして指などはそれほど驚くこと

一 好きな相手は別として。
二 正規のルートの茶屋をさけ、安上がりの連れ込み宿で大尽客と逢う。祝儀を余分に貰うため。
三 客の酔いを見すまして無心する。
四 紋日は物日の音便。物日は祝祭日の意。五節句やその地の社寺の祭礼日を廓では物日（紋日）といい、遊女は休むことが許されず、客がないと自費で身揚りをしなければならなかった。西鶴は「むつかしくなりぬべし」と予見的な言い方をしているが、執筆当時（貞享三年）すでにそうなっていたことは、「遊女のやうに、紋日をさだめて大臣をせぶる也」（男色十寸鏡〈貞享四年〉）という記事で知られる。まだ紋日のなかった天和三年（一六八三）の時点に合わせて書いたのであろう。
五 大阪市中央区心斎橋筋の三津寺の薬師堂の縁日は、毎月八日と十二日（摂陽群談）。
六 同じく三津寺八幡の例祭は八月十五日（摂陽群談）。界隈には役者が多く住んでいた。
七 四天王寺の西にある新清水観音の観音供は毎月十八日（難波鑑）。
八 物日、紋日に同じ。
九 よくも勤めているものだ。
一〇 刺が立っても。
一一 よくもよくも。
一二 『今昔物語』巻十一と『宇治拾遺物語』巻十三に見える、人血をしぼって纐纈を染めて商うという話のもじりであろう。

一三「伝えもある」と「或る酒屋」との掛詞。
一四 →役者一覧。
一五 深くなりすぎて。
一六 →役者一覧。
一七 相手に誠を示したという話。心中立ての話。
一八 箱細工を指物(さしもの)という。箱枕。箱形の木枕で、上に小さなくくり枕をのせる。
一九 たたんだ扇の両端を、親指と人さし指ではさんで引き合う遊び。
二〇 ひたすら思った。
二一 上盛。最上級。第一人者。
二二「さきの世にいかなる種をまきて今のうき身と生れきぬらん」(あさがほのつゆ)など用例が多い。

盃(さかづき)のまはりもおそく、おもしろからぬ折しも、誰(たれ)がいふともなく、「無用の[一七]心底咄(しんていばなし)聞くに、指はきられまじき物」と何心もなくいふ。聞きて、「ことによりては命さへ、まして指などは、さのみおどろく事にもあらず」と笑ひながら、座興なれば皆々聞きもとがめず、よの小歌になりぬ。

　辰弥立つかと見えしが脇指(わきざし)ぬきて、[一八]さし枕(まくら)に拇指(おやゆび)をあてて音もせず押し切り、心しづかに身仕舞(みじま)ひして、「これを肴(さかな)」となげ出(いだ)しけるに、おの〳〵「これは」と興を覚まし、跡の事どもかなしみけるに、いつよりは機嫌(きげん)よくさわぎあそびはじめて、[一九]扇引(あふぎび)きなんど心にまかせし。さりとてはおちつきたる身のかため、いはで人々心[二〇]をこらしける。これを思ふに、まつたく欲に非(あら)ず。無分別といふ人はのけて置きて、なるべき事かとおもひめぐらす程きもにめいじ、古今の芸子のうは[二一]もり、万人ともに思ひつく事、この人[二二]先生(ぜんしやう)にていかなる種を蒔(ま)きて今の花の咲きける、知らずかし。

はありません」と、笑いながら言った。座興だと思って、みんな聞きとがめもしないで、小唄(こうた)でまぎらかしてしまった。

　辰弥は何となく立ち上がったかと思うと、脇差(わきざし)を抜き、箱枕(はこまくら)に親指を当てて音も立てずに押し切り、心静かに身づくろいをして、「これをお肴(さかな)に」と言って投げ出した。人々はびっくりして興をさまし、後の事を心配していると、辰弥はいつになく機嫌よくはしゃいで遊びだし、扇引(おうぎび)きなどに興じ始めた。まことに落ち着いた身だしなみであると、人々はそれと言わずにひどく感心した。この事を考えてみると、全く欲のためではない。無分別だという人は別にして、こんな事がやすやすとできるものではない、と思うにつけても、ただ肝(きも)に銘ずるのみである。まことに辰弥は古今の若衆の鑑(かがみ)である。すべての人が恋い慕うのだが、この人は前世でどういう種を蒔(ま)いて、今こうして花を咲かせているのかわからない。

心を染めし香の図は誰[一]

[二]江南の橘を江北に植ゆれば忽ち枳になりかはる、といへり。さもあるべし。和国にもそのためしあり。[三]江北の赤頭の子供を[四]江南の金剛が手にかくれば、程なく[五]太夫髪となり、あれがそれかと思ふ程の姿、人はまた作るに色をましける。「いづれかあしきはなし」といへば、「美きはなほまれ」といへり。[六]太夫本をはじめ、役者仲間にも幾人か抱へて末を見しに、今の舞台を踏む程の子は千人にひとりなり。形見よけれども心うとし。あるいはかしこくて芸にならず、[七]三拍子に揃ひかね親方倒し数を[八]。かならず物になりぬべきと思へばわづらひ出し、あぶなきものはこれなるべし。

これ思ふに、金銀何惜しかるべし。とかくは命を[九]のべるの薬代なり。[一〇]煎じやう常の格別にかはれる所あり。風情は若道にして心ざしはそのまま上臈にひとしく、物がたき所をさつて語るにあかず。昔は衆道といへば、あらけなくりきみ、言[一一]

心を染めし香の図は誰

中国揚子江以南の地の橘を以北の地に植えると、たちまち枳になり変るということだが、さもあろう。日本にもそういう例がある。大坂の淀川以北の赤茶けた髪の子を、南の道頓堀の金剛が手塩にかけると、まもなくつやつやした若衆髪になって、あれがそれかと思うほどの姿になる。人は作り立てると美しくなるものだ。「もともとできの悪いものはないのだ」という者もあれば、「しかし上玉はめったにない」と言う者もある。太夫元をはじめとして、役者仲間で抱えた子供たちの行く末を見ると、今の舞台を踏むほどの子は、千人に一人くらいのものである。器量がいいかと思えば心がにぶく、賢いかと思えば芸にならず、三拍子揃った子はなかなかないもので、親方に迷惑をかける者がとても多い。必ずものになると思っていると、病気になるというぐあいで、危ないのはこの稼業である。

考えてみれば、金銀など何の惜しいことがあろう。若衆につかう金は、命をのばす薬代である。薬袋には「煎じよう常

❖作者が俳諧の弟子の大和屋甚兵衛を誘って勝尾寺の開帳に出かけた先で、甚兵衛の定紋香の図をつけた小袖を着た美女に出会ったが相手にせず、その夜は桜塚の水田西吟の落月庵で俳諧を興行したという、まったくの紀行随想である。

一 源氏香の図。大和屋甚兵衛の定紋。
二 中国揚子江以南の地を江南といい、以北の地を江北という。「晏子曰ク、橘江南ニ生ズレバ、則チ橘ト為ル、江北ニ生ズレバ、則チ枳ト為ル、水土異ル也」(晏子)。環境によって性格が変化するとの意。
三 大坂の北郊(淀川以北の地)の赤茶けた髪の子供。
四 淀川以南の大坂市中、特に道頓堀の役者の草履取り。→四五八ページ注一。
五 太夫は一座の目玉となる女方。そのつややかな黒髪。
六 興行人。→四六一ページ注二六。
七 小鼓・大鼓・太鼓(または笛)の三種の楽器の拍子が揃う意より転じて、すべての条件が揃うことを、三拍子が揃うという。
八 数を「知らず」の省略にしてはひどすぎるから、脱落と考える。
九 歌舞伎若衆につかう金は、命をのばす薬代。
一〇 江戸時代の煎薬の袋には、「煎じやう常の如し」と書いてあった。
一一 いかついものの言い方をし。
一二 大柄で雄々しい若衆。

葉に角を入れ、[一二]大若衆を好み、身に疵付くるをこの道となしぬ。それをも伝へて[一三]分子までも刃物わざ、無用の事と云ふまでもなし。今は[一四]山王の祭さへ、血を見ずに神輿もわたらせ給ふ。武士も具足のいらぬ御時なれば、まして色座敷へは[一五]瓜割も出さぬがよし。西瓜も勝手にて切り、皿盛りにして済む事なり。ただよわ〳〵としたるを当世の若衆といへり。江戸にて[一六]芸子のを[一七]小紫とよび、京にて[一八]かをると付け、遊女の名も物やはらかにして聞きよし。

[一九]袖嶋市弥・[二〇]川嶋数馬・[二一]桜山林之助・[二二]袖岡今政之助・[二三]三枝歌仙など、うつくしきがうへに女のごとく紅の脚布する事、恋をふくみてしをらし。明くれば芝居入り、暮には楽屋帰り、銀つかはぬ人も沢山にみればこそあれ、紋所を覚え名をしるぞかし。よき芸者なれども、[二四]鈴木平左衛門・[二五]山下半左衛門・[二六]内記彦左衛門・[二七]幸左衛門など帰るには、さのみ気を付くる人もなし。木綿着物の広袖に薬鍋さげたる[二八]子供下地も、[二九]二つ折りの髪の結ひ振り、はや目を付けける。殊更人の嫁子、内儀らしき人までも、[三〇]千日寺のあたりに立ちさわぎて、ままなら

のごとし」と書いてあるが、今の歌舞伎若衆は、昔のそれとは大違いである。見たところは男色であるが、気持は女同様で、少しももの堅いところがなく、話していて飽きることがない。昔は衆道といえば、荒っぽく力み、いかついものの言い方をし、大柄の若衆を好み、体に疵をつけるのを本意としていた。それをまねて歌舞伎若衆までも刃物を振り回す者があったが、いうまでもなく無用の業である。今では殺伐だった江戸日枝神社の山王祭でさえ、血を見ずに神輿が渡っている。武士も鎧のいらないご時勢だから、まして遊興の座敷には小刀も出さないほうがよい。西瓜も台所で切って、皿盛りにして出せばすむことだ。ただ弱々としているのが、当世向きの若衆である。江戸では役者に小紫と名づけ、京都ではかをると名づけているが、遊女と同じ名ものやわらかで聞きよい。

袖島市弥・川島数馬・桜山林之助・袖岡今政之助・三枝歌仙などの若女方や若衆方が、美しいうえに女のように紅の腰巻をしているのは、色っぽくてしおらしい。夜が明けると楽屋入り、暮れには楽屋帰りの若衆たちを、役者買いのできない人も大勢見物するからこそ、その紋所を覚え、名を知るのである。立派な芸人

一三 職業的な歌舞伎若衆。「其頃(明暦)は京女形の下げ髪は法度にてありしに、橋本金作いふ女形、さげ髪にて舞台へ出で、其上、桟敷にて客と口論し、脇差を抜いたる科にて、京都かぶき芝居残らず停止仰付られたり」(芸鑑)。

一四 東京都千代田区永田町の日枝神社の山王祭は六月十五日。同時に行う神田明神の神田祭とともに、将軍が観覧したので天下祭と称した。祭礼が華美になって氏子の負担がふえ、かつ双方が張り合って血を見る事が再々だったので、天和元年(一六八一)から、幕府の命で隔年に行うことになった。

一五 正しくは割瓜。オランダ船来の小型ナイフ。

一六 歌舞伎若衆の芸名を。

一七 →役者一覧。

一八 市川かをる　→役者一覧。

一九 →役者一覧。　二〇 →役者一覧。

二一 →役者一覧。　二二 →役者一覧。

二三 →役者一覧。　二四 →役者一覧。

二五 →役者一覧。　二六 →役者一覧。

二七 竹島幸左衛門　→役者一覧。

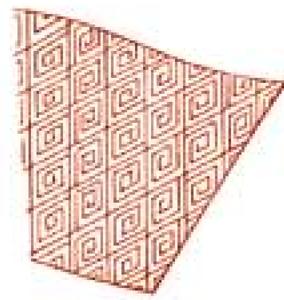
二八 修行中の少年俳優。仕込みっ子。

二九 髻を折り返し、根元で結んだ髷。「二つ折に髷出して若衆めきたるたてかけにゆはせ」(世間娘気質〈享保二年自序〉)。

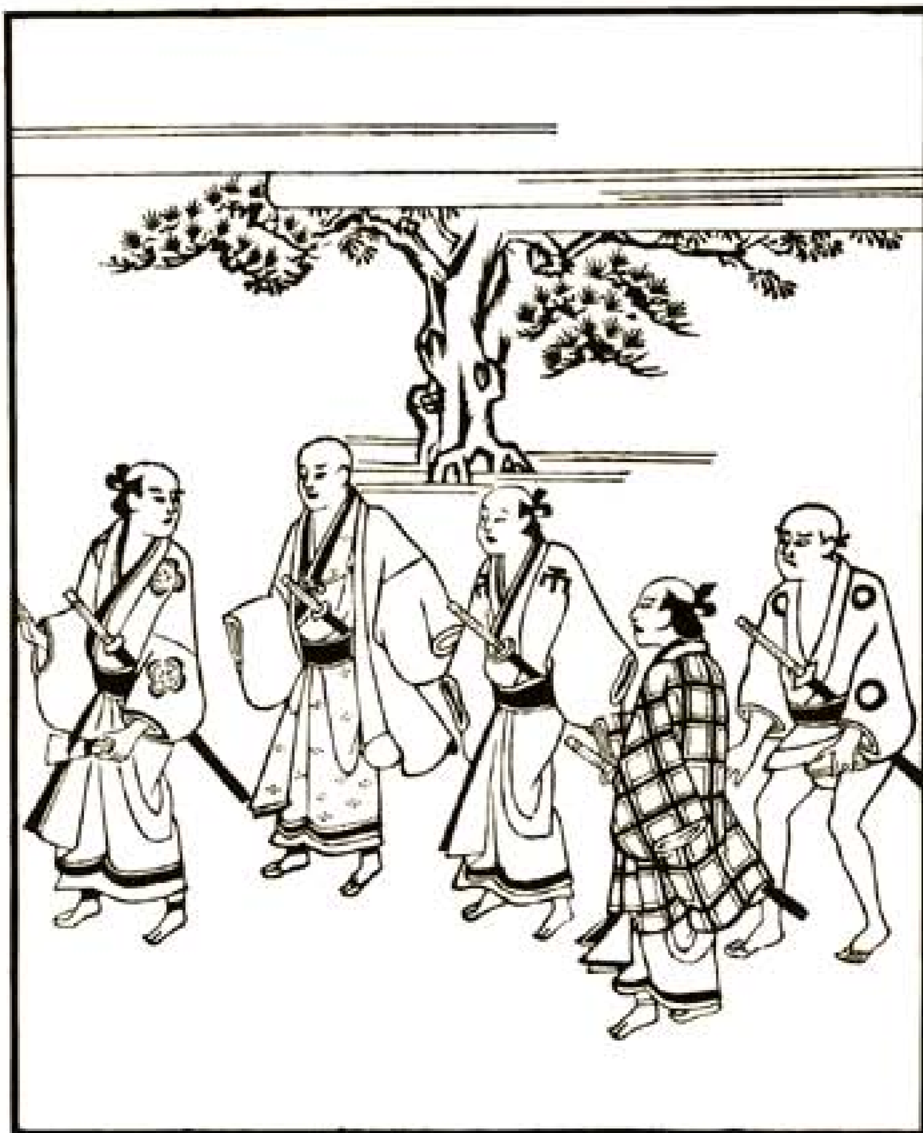
三〇 大阪市中央区千日前(道頓堀の南)にある浄土宗法善寺の別称。寛永年中、千日の念仏を行ってよりの称という。

ねばこそいたづらに心はなしぬ。
　過ぎにし頃、勝尾寺の開帳に大和屋甚兵衛さそひて参詣しけるに、中津川の舟わたしを越えて、北中島の宮の森に駕籠立てさせて、「煙草よ、茶」などいうてしばらく休みしに、跡よりいまだ十六とみて十五なるべき美女の、黒繻子の大振袖に宝づくしの切付け、帯は白綸子につばくらの縫鳥に紫糸の網をかけ、物ずきなるうしろ結び、水色の絹たびにばら緒のわら草履、ひざやの二幅蹴かへしにほのめき、おとしがけのはね髻、すかし形のさし櫛、金銀のべわけのかうがい、

一 大阪府箕面市粟生外院にある真言宗の勝尾寺。本尊千手観音。西国第二十三番の札所。清和帝（八五八年即位）より現寺号の勅額を下賜。以来、歴代皇室の帰崇を受けた。大坂から神崎、西宮、伊丹、池田をへて陸路六里（貞享四年大坂大絵図）。
二 →役者一覧。
三 中津川は淀川の支流長柄川の別名。今の新淀川。北長柄村にあった長柄渡し。
四 現、大阪市東淀川区。中津川と神崎川の間に位置する。北中島惣社があった。
五 宝船の絵に積んである珊瑚・瑪瑙・琥珀・如意宝珠・米俵・打出の小槌などの宝物の模様を切り抜いて布帛に縫いつけたもの。今のアップリケ。
六 縫い取り（刺繍）との掛詞。
七 細い緒を数本集めて作った鼻緒。
八 緋紗綾の腰巻。紗綾は地紋に紗綾形がある絹織物。


紗綾（和漢三才図会）

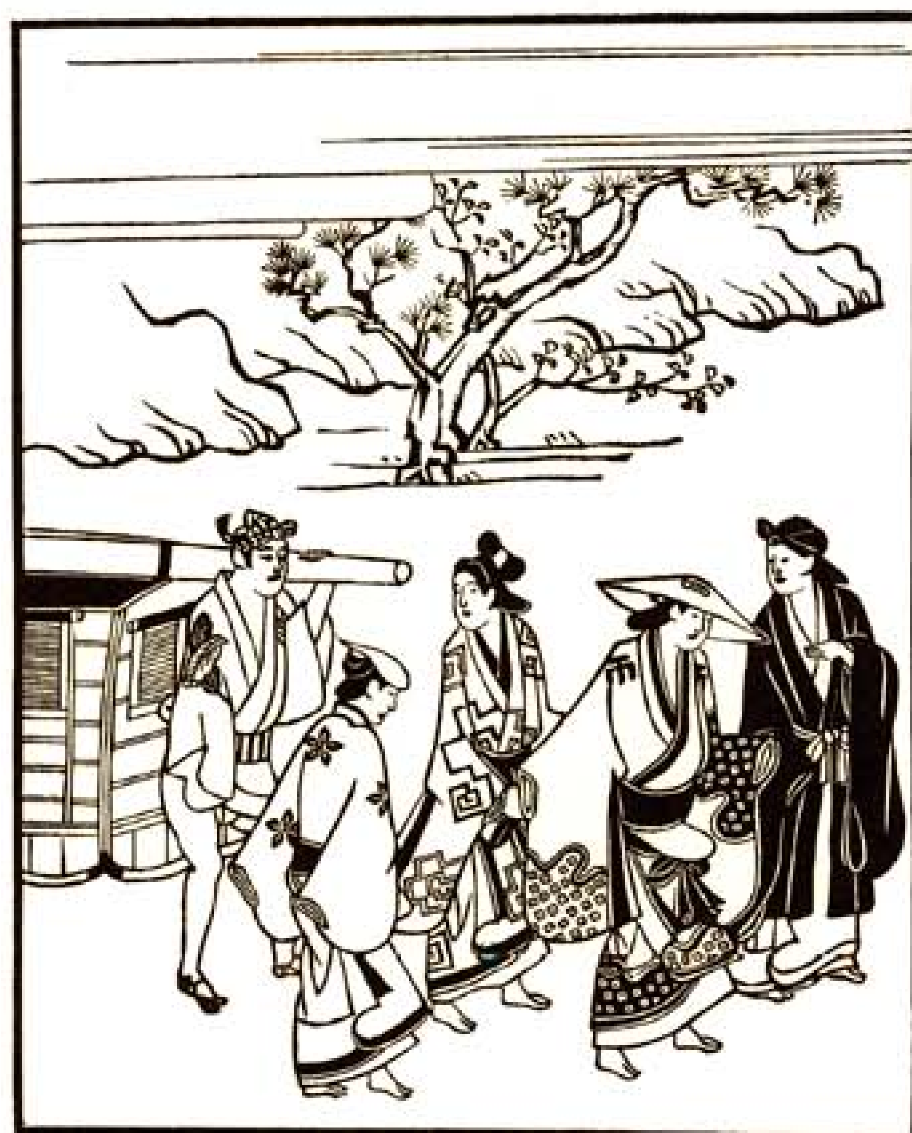
九 普通より低い位置に元結を掛けること。
一〇 針金を入れて先端をはね返らせた元結。
一一 峰を透かし彫りにした櫛。
一二 金属を平らに打ち延べて作るこ


をかぶり豪華な衣装に身を包んだ大家の娘らしい美少女、腰元・乳母・駕籠かきと続く、参詣の帰りがけらしい一行。娘が着る小袖には、思わくありげに甚兵衛の香の図の紋が染め込まれている。

だが、立役の鈴木平左衛門や山下半左衛門、内記彦左衛門や竹島幸左衛門などの楽屋帰りを、さほど気をつけて見る人もない。それに引きかえて、木綿着物の広袖を着て、薬鍋をさげた仕込みっ子も、髷を二つに折ったその髪の結いぶりに、人々は早くも目をつけるのである。ことに人の嫁御や女房らしい連中までも、南の千日寺のあたりに群がって、かなわねばこそ心を悩ますのである。
　この前、勝尾寺の開帳があった時、作者は大和屋甚兵衛を誘って参詣した。中津川の船渡しを越えて、北中島の鎮守の森に駕籠をすえさせ、「煙草だ、茶だ」といって、しばらく休んでいると、後から十五歳かせいぜい十六歳と見える美少女がやって来た。黒繻子の大振袖に宝尽しの模様を切付にし、帯は白綸子に燕を刺繍して、その上に紫糸の網をかけた物好きなものを後ろ結びにしている。水色の絹足袋にばら緒の藁草履をはき、緋紗綾の腰巻が歩くたびにちらつく。髷には落としがけのはね元結を掛け、透かし彫りの櫛と金銀を延打ちにした笄をさし、金糸入りの浅黄地の布で裏打ちした菅笠に、紙縒の紐をつけてかぶっている。身につけている物で、何一つとして悪趣味なものはなく、ありのままの素顔まで、

とを延打ちという。金銀を延打ちにした笄。笄は髷に挿す髪飾り。

一三 金糸を織り込んだ布帛。
一四 『遊仙窟』の字訓。
一五 良家の子女には科負比丘尼(俗に屁負比丘尼)といって、人前での過失の身代りとなる比丘尼が付き添った。
一六 中居ともいう。家族の世話をする腰元と庭働きの下女との中間に位置し、来客の接待、使い役などをつとめた。
一七 はなやかに着飾り。
一八 総支配。しんがり。
一九 一尺八、九寸(約五七センチ)の脇差。中小脇差に対す。



作者（西鶴）が大和屋甚兵衛を誘って勝尾寺参詣をする途中の情景。右面は作者の一行で、二番目の坊主頭が西鶴。それに続く香の図の紋所をつけた者が大和屋甚兵衛。左面は、科負比丘尼を先頭に、菅笠

浅黄地の金[一三]入りにて裏をうちし菅笠に文反古の紐を付け、着たる所の采体[一四]、いづれにひとつあしき物ずきなく、ありのまなる素面、よろづにいふべき所なし。左のかたに衣[一五]を着たるびくに、右に姥らしき人身に添ひ、腰元・中通り[一六]の女までも皆色めきて振り懸け[一七]、乗物つらせて、押へ[一八]に五十あまりの親仁、若き男一人大脇指[一九]の出立ち、町人とは見えける。

かの娘、これまでは何心もなくたどりきしが、甚兵衛を見あはせ、上気して袖をかへして見せけるに、香の図の染込み紋ありありと見えしは、出来心にはあらず。それよりもだも

非の打ちどころがない。娘の左の方には、科負比丘尼、右には乳母らしい女が付き添い、腰元や中居女までも皆はなやかに着飾り、駕籠を従え、監督として五十余りの親仁、それに大脇差をさした若い男の様子は町人と見えた。

娘はそれまで何心もなくやって来たのだが、甚兵衛と目を見合わせて上気し、袖を返して見せると、甚兵衛の定紋の香の図がありありと染め込んであったのは、でき心とは思われない。娘はそれから身もだえして足も立たず、夷神社のある西宮から駕籠に乗せられて、美しい姿は見えなくなって別れた。また縁があったのであろう、勝尾寺でめぐり逢い、娘は悩ましい目つきをしながら、跡を慕って来た。坊主がいろいろな寺宝の縁起を口達者にまくしたてると、「馬の角を蜂が刺したらどうなんです。牛の玉が割れたっていいじゃないの。天から降ってきた仏様も、ありがたくない。あの人だけが」といった顔つきで、甚兵衛の顔をありがたそうに見つめている娘の表情は、かなわない恋だから哀れだ。こんな女を女房にもつ男の身になるのはいやなことだ。

これが衆道というのなら、命などどうでもいいのだが、みんな女嫌いのしゃれた仲間なので、なんとも思わずお山を下

一 西宮夷社のある兵庫県西宮市。ここから北上して箕面に向かう。
二 『摂陽群談』(元禄十四年)勝尾寺の条に、「宝蔵、同所にあり。当寺歴世相伝の什物を蔵納。天子を始め奉り、群卿将軍家悉く崇敬、寄付の宝物等、枚挙にいとまあらず」とある。
三 初め西山宗因門で、のち西鶴に兄事した岡松軒水田西吟は、慶安の頃、摂津岩屋から大坂に移住し、摂津国豊能郡豊中の桜塚(現、大阪府豊中市桜塚)に落月庵を構えて隠棲したのは、延宝初年であった。『好色一代男』の板下と跋文の筆者。宝永六年(一七〇九)没。
四 旅回りの陰間。
五 と言うのを最後に白けて。
六 因縁をつけた。色目を使った。
七 淀川の下流。大坂にはいって天満橋のあたりよりいう。
八 水浴してけがれを落すこと。みそぎをして。
九 インド・中国・日本。天竺は日本および中国におけるインドの古称。震旦はインドにおける中国の古称。
一〇 「天竺には非道と名づけしは、いとふつつかなる詞にぞある」(よだれかけ〈寛文五年刊〉)。
一一 同じく『よだれかけ』に、「支那には押軓とぞいひし」とある。

だとして足もたたずして、えびすの宮[一]のある里よりその人は駕籠(かご)にのせられ、美形(びけい)は見えず別れぬ。又、縁あるにや御山にしてめぐりあひ、目もと悩(なう)みて跡をしたひくるに、さまざま御宝(みたから)[二]口かしこき法師の縁起(えんぎ)、「馬の角(つの)を蜂(はち)がさしたら大事か、牛の玉も割れたらままよ、天から降りたる仏さまもありがたからず。あの人を」と殊勝さうに娘の見る顔ばせ、かなはぬ恋なればいたはし。この女をもつ男の身になる事もいやなものなり。

これ衆道(しゆだう)ならば命かへりみるにはあらねど、おの／＼女嫌ひしやれ仲間、なんとも思はず下向(げかう)して、その夜は紅葉(もみぢ)見して桜塚(さくらづか)の落月庵(らくげつあん)[三]にて物がたき俳諧の興行、伊丹(いたみ)・鴻之池(こうのいけ)酒のもてなし、「この里は折節飛子(をりふしとびこ)[四]もあり」と、これを云ひしらけ[五]に立ち帰るに、道すがら子細(しさい)[六]を付けし女に袖(そで)ふれし事うるさく、天満川(てんまがは)[七]にて垢離(こり)[八]をかき、女をみし目を洗ひ流し、皆々道頓堀(だうとんぼり)帰りぬ。明くれば恋のはじまりより芝居の果てまで、衆道の外の噂(うはさ)もいやなり。この道私(わたくし)ならず三国[九]のもてあそび、天竺(てんぢく)にては非道[一〇]といふもをかし。震旦(しんだん)にては押軓(あせん)[一一]とたはぶれ、

り、その夜は、かつて紅葉(もみじ)見に来た桜塚の落月庵(らくげつあん)で、まじめな俳諧を催した。伊丹(いたみ)や鴻池(こうのいけ)酒のもてなしを受けた席で、「この村にも時々は飛子(とびこ)が来る」という話を最後に、みんなしらけて引き上げた。その帰途、甚兵衛に色目を使った女に出逢(であ)った事をうるさく思い、天満川(てんまがわ)で身を清め、女を見た目を洗い流して、みんな道頓堀(どうとんぼり)に帰って行った。一夜明けると、衆道以外の噂(うわさ)をするのもいやなことであった。この道は私事(わたくしごと)ではなく、インド・中国・日本三国のもてあそびである。インドで非道というのは、いささか滑稽(こっけい)だ。中国では押軓(あせん)といって戯れ、日本では衆道(にょしょく)といってはなはだ盛んである。女色(にょしょく)があるので、愚かな人種が絶えない。願わくは男色(なんしょく)をこの世の交りとし、女を滅ぼして日本を男島にしたいものだ。そうなれば夫婦喧嘩(げんか)を聞かず、嫉妬(しっと)することもなくなり、静かな世の中になるだろう。

三『好色一代男』の女護島渡りに対置。

我が朝(てう)にては衆道専(もつぱ)らに栄(さか)んなり。女道(によだう)あるによつてうつけし人種つきず。願はくは若道(じやくだう)世の契りとなし、女絶えて男島[三]と改めたし。夫婦喧(いさか)ひ聞かず、悋気(りんき)治まり、静かなる時にあふべし。

男色大鑑　第八巻　終

貞享四丁卯年正月吉日
大坂伏見呉服町淀屋橋筋
書林　深江屋太郎兵衛　板
京二条通　山崎屋市兵衛　行

解説

一　西鶴諸国ばなし

体裁

『西鶴諸国ばなし』の初板本と推定されるものの体裁は、大本五巻五冊。その刊記は、「貞享二年丑正月吉日　大坂伏見呉服町真斎橋筋角　池田屋三良右衛門開板」。刊年の貞享二年（一六八五）は、西鶴四十四歳である。

本書は、日本の諸地方を舞台にして、奇談異説を材とした、短篇説話集である。序文・本文・挿絵、ともに板下は、西鶴の自筆自画と認められる。本文は、各巻に七篇の短篇説話を載せ、五巻、合計三十五篇を収めている。各篇に半丁、あるいは一丁の挿絵一葉を掲げる。外題（げだい）は「西鶴諸国はなし」、その題簽（だいせん）には「絵入」と角書（つのがき）が付されている。しかし、内題は外題と相違して、「大下馬（あふげば）」とあり、その肩部に「近年諸国咄（きんねんしよこくはなし）」と副題している。また、柱刻には「大」の一字が見られ、「大下馬」を予想させる。以上から、本書の題名はつぎのように考えてよい。すなわち、本題「大下馬」、副題「近年諸国咄」、外題「西鶴諸国はなし」。

それゆえに、本書は「大下馬」とよばれてしかるべきものである。しかし、「西鶴諸国ばなし」が今日通行の書名となっているので、以下の記述はこれによることにする。

テーマ

本書は、その序文に、

世間の広き事、国々を見めぐりて、はなしの種をもとめぬ。熊野の奥には、湯の中にひれふる魚あり。筑前の国には、ひとつをさし荷ひの大蕪あり。豊後の大竹は手桶となり、若狭の国に二百余歳の白比丘尼の住めり。近江の国堅田に、七尺五寸の大女房もあり。

とあるように、作者が、日本の諸地方を巡歴して得た話の種によって、人々に「はなす」、というポーズで編纂された説話集である。本題の「大下馬」というのは、その「はなし」を「人々に下馬させて聞かせるために立てた大きな下馬札」という意味である。それは、本書が、人々に話して聞かせる、西鶴の「はなし」集であることを意味している。しかし、「大下馬」という書名は、書名としてははなはだ趣向の凝ったものではあるが、本書の内容を平明に人々に示しているとは言いがたく、この書名から人がその内容を把握するにはいささか困難をおぼえる題名といってよいであろう。副題の「近年諸国咄」は、そのために、内容説明的題名としてさらに付加されたものと考えられる。

本文は、その説話の舞台を日本諸地方にとる。すなわち、京都・大坂・江戸の三都はもとより、奈良・堺・伏見・博多・姫路・駿河の府中などの地方都市から、紀伊の海岸、箱根山中、摂津の池田村、若狭の小浜、河内の生駒や農村、飛騨の山中、信濃の浅間山麓や街道筋、諏訪湖畔、大和の吉野山中、但馬の農村、紀伊の高野山、常陸の鹿島、相模の鎌倉、陸奥の南部など地方の小都市や農村・山村に至るさまざまな地域を舞台にしている。ただし、畿内のほかは東海・東山の両道の地域が多い。これは作者の関心・知識の、あるかたよりを示すものであろう。

舞台の多様さとともに、登場人物もまた多彩である。武士は紀州侯から浪人に及び、商人・職人・農民・猟師・僧侶（道心者）から、芸能者・仙人、また、天狗・化生の者に及んでいる。が、その傾向としていうならば、町人・農民層と武士層とが主流をなしており、これは当時の社会構成員の職業・身分の平均値的な現象を示していると見てよい。このことは、作者が、彼の「はなし」を享受する対象がかたよっていないで、社会一般の人々を平均的に想定しているということをうかがわせるようである。

時代設定

つぎに、本書の説話における、事件の生起した時代設定についてである。これは副題に「近年」とあるために、本書刊行の貞享を去ることあまり遠くない時代、すなわち、寛文（一六六一〜七三）以後と設定されているように一応考えられるかもしれない。たしかに、巻二の七「神鳴の病中」・巻四の一「形は昼のまね」は「近年」の事件であるように時代を設定した説話であると考えられる。しかしながら、諸篇を看読してゆくならば、必ずしも近い時代に時代設定されているとは限らない徴証をもつ篇が散見される。たとえば、本文に設定年代を、年号を記して、明瞭にしている場合が五篇ある。これらの

篇のうち前述の「神鳴の病中」以外の四篇はすべて江戸時代初期の年代である。すなわち、巻一の四「傘の御託宣」は慶安二年春、巻一の六「雲中の腕押し」は元和年中の冬、巻二の一「姿の飛び乗物」は寛永二年初冬・慶安年中、巻二の三「水筋の抜け道」は正保元年二、三月である。これらの時代設定は一六二〇～五〇年頃までであり、これは本書の刊行の一六八五年をさかのぼること三十余年から六十余年となる。あるいはまた、巻二の二「十二人の俄坊主（にはかばうず）」に登場する紀州国守は壮年期の徳川頼宣（よりのぶ）をモデルにしたと推定されるから、これも寛文以前と時代設定されていると理解してよかろう。それゆえに、本書は副題に「近年」と銘打つものの、多くの篇は江戸時代初期一六二〇～五〇年頃まで、元和・寛永・正保・慶安の頃を、その設定された時代として考えてよかろう。このことは、本書の副題の「近年諸国咄」の「近年」というのが、この一書の時代設定としてはいささか無理な規定を題名に付したということなのである。なお、時代設定を基本的には江戸時代初期に定めているということは、序文に記している作者の「もとめ」た「はなしの種」もまた、江戸時代初期に起こった事件である、ということではない。

原拠

頭注において、校注者は原拠と推定しうる事件や説話など、また類型譚（るいけいたん）を指摘しておいた。そのいちいちについてはここに触れないが、それによって、作者西鶴がきわめて多くの原拠や類型譚に支えられて各篇を制作していることが理解できる。諸篇の原拠は、説話書・縁起書・仮名草子、あるいは、地誌・百科辞書などに求められるが、それはしかし、諸篇の直接の原拠がこれらである、ということではない。一篇の説話が単一の原拠によって制作されているよりも、しばしば複数の原拠や類型譚に支えられ、そしてかつ、原拠がかなり変形せしめられて一篇に構築されている。これは、近世初期の仮名草子類とは相違して、本書の説話が独創的な複合的構造をもち、巧妙・緻密なる構成を有している、ということである。すなわち作者は、作品の構成・人物設定・原拠利用・思想性など、形式・内容になみなみならぬ意をそそいでいる、ということなのである。

成立

このことから、それゆえに、作者が『西鶴諸国ばなし』全篇を短日月の間に制作した、と考えないほうが、本書の成立については理解しやすくなるようである。西鶴はこの作品のうちの若干の説話——それはしかしかなりの篇においてであろう、特に巻一、二——は、すでに前もって制作していたのである、と考えたほうが理解しやすいようである。

この点、西鶴の『西鶴諸国ばなし』制作についての私の説を記しておくとつぎのごとくである。

① 西鶴は、若干の篇の原型の説話を制作する。
② これに、すでにあった中世説話などの類を導入して補筆を行う。
③ これを、人々に「はなし」ながら刪補をほどこす。
④ これを、書肆の希望によって出版するにあたり、修補を加え、新しい「はなし」を追加する。

西鶴は、「黒田侯御帰国の時、大坂の御屋敷へ召して、次にてはなさせ、聞き給ひ、世上へ出し、使番・聞番・留守居の役にいひつけ侍らば、かゆき所へ手のとどくやうにあらん人がらと称し給ふよし」(『見聞談叢』)とあるように、話術が巧みであり、貴人の席において「はなし」をすることもあった。このことを考え合わせるならば、この『西鶴諸国ばなし』の諸篇は、西鶴が「はなし」の場で話す「はなし」のレパートリーであったと考えうるのである。西鶴は「はなし」を人に所望されると、あらかじめ制作しておいたレパートリーの中から、その場に適合するものを選び出し、これを話したのであろう。そして、くだんの「はなし」を繰り返し繰り返しすることによって、説話一篇が練り上げられ、巧妙・緻密に形作られてゆく。『西鶴諸国ばなし』は西鶴の自家薬籠中の「練られたはなし」なのであった。

こう考えてくるならば、副題に「近年」と明記しながら実は一時代前の、近世初期に時代設定された説話が主流をしめているという疑点もおのずと氷解してくるのである。『西鶴諸国ばなし』の諸篇の中には寛文・延宝頃、西鶴の二十歳代後半からの彼の「はなし」のレパートリーが含まれていたとすれば、「ひとむかし」前に時代を設定された諸篇は原『西鶴諸国ばなし』に含まれる説話であり、細部の修補を経て梓に彫られたと考えうるのである。

『西鶴諸国ばなし』は『好色一代男』『好色二代男』に次ぐ、西鶴の第三作の浮世草子として刊行されたのであるが、しかし、それは制作順序が前二者に遅れて第三番目である、という意味ではない。制作順と刊行順とは必ずしも一致しないはずである。しかし、原『好色一代男』・原『好色二代男』・原『西鶴諸国ばなし』の成立の順序についての実証資料を欠くのでこれ以上はここでは述べないが、私としては、西鶴の浮世草子諸作品の成立は、むしろ原『西鶴諸国ばなし』を原点において、この作品の諸

篇から、本書以後の諸作品は直線的に発展し、あるいは文脈の変更によって成立した、と考えるならば、そのかなりの作品の成立についての理解がはなはだ容易になるのである。

文学的価値

さて、『西鶴諸国ばなし』の諸篇は、多くの先行説話を遺産として継承し、新しい説話に再生されたものである。本文篇の頭注に指摘しておいたが、多くの量のそれを本書の読者はみるであろう。『西鶴諸国ばなし』は、この、中世説話的な諸原拠を、そのまま繰り返し収録したごとき、仮名草子にしばしば見られる類聚説話集ではなくて、新しい文脈に再構成した説話集である、という点にその文学史的地位は求められるべきであろう。

また、『西鶴諸国ばなし』の諸篇が、一篇全体の構成においてすぐれていることは巻一の一「公事(くじ)は破らずに勝つ」一篇をうかがっても知りうるところであるが、その価値の高さはただに構成のみにとどまらない。細かく作品をみてゆくならば、人物設定の巧妙さ（たとえば、巻一の三「大晦日はあはぬ算用」の浪人たちが、武勇と友人間の義理に生きる江戸時代初期の六法者仲間であること）、地域設定による事件の必然性の巧妙さ（たとえば、巻四の二「忍び扇の長歌」は武士中心の都市である江戸に設定、巻五の一「挑灯に朝顔」は茶の湯・芸能事の盛んな奈良に設定）、などの細部の技巧についても同様に言いうる。そして、それは作品の形式面にのみとどまらない、一篇の思想的内容に相関している。たとえば、「忍び扇の長歌」における女主人公は、一生を独身で過ごすことを余儀なくさせる、大名の婚期を過ぎた姪(めい)（彼女の父は大名家において厄介者(やっかいもの)的位置にある）と設定されており、このことは、事件が単に封建社会における女性の恋愛肯定という問題を大きくこえて、大名家の封建的家族制度による犠牲者が、その社会制度を批判する、という形で作品に現前しているのである。読者はそれを読み取らねばならない。

挿絵

西鶴本のみならず、一般に浮世草子の挿絵は、本文の説明のための絵、というように思われがちであるけれども、子細に見ていると、必ずしもそれで割切ることのできない絵を見つけることができるようである。もちろん、その挿絵の多数を占めるものは本文の説明としての絵である。しかし、それに混じって、本文の説明の閾(いき)を超えた、含みのある絵を発見することができる。そのことを『西鶴諸国ばなし』の挿絵を通路として述べてみることにする。

その例として第一に、同書の巻一の一「公事は破らずに勝つ」の章がある。この章は奈良東大寺と興福寺との間の、太鼓貸借

の訴訟事件のストーリーである。挿絵に、太鼓の皮に唐獅子が描かれている。この挿絵から、知る人は、このストーリーが一二九五年の五獅子の如意の貸借事件を原拠にしている（頭注参看）ことを理解し、作者の作意を評価したはずである。

第二は巻二の二「十二人の俄坊主」の章で、この章は紀州の国守、徳川頼宣が加太の浦に遊んだ折の奇談である。挿絵は水上に半身出して長刀で襲ってくる大蛇を打ち払っている頼宣の姿が描かれている。これは頼宣が水練に巧みであったことを、本文には記述していないのであるが、示している絵である、とみてよい。

第三は同巻の四「残る物とて金の鍋」の章。この章は、摂津平野の木綿買い商人が、大和からの帰路、生駒山中で生馬仙人を助けたところ、仙人からお礼に酒肴をもてなされた話である。挿絵はその馳走のさまを描いている。肴は平鉢・角盆に盛り付けてあって、仙人が最初に出したという黄金の小鍋は見当らない。このことは絵に描かれた肴は酒がかなり進んでから、さらに客に出した強肴であることがわかり、仙人と商人とがさんざんに飲み酔っぱらってしまったことが知られるのである。

第四は巻三の四「紫女」。これは筑前博多に出現した妖怪、紫女に魅惑されて、取り殺されかけた若侍が気を取り直して女を斬ろうとして取り逃す。その後も紫女は男に執心して出てくるので、国中の道心者に弔いさせると、紫女は現れなくなった、という話。挿絵は紫女を和尚とその弟子たちが調伏する祈りのシーンである。これは本文でいえば、「（紫女が）その後も心を残し、あさましき形見えければ」に対応するので、それに後接する「国中の道心者をあつめて、弔ひける」に対応するのではないと思われる。後者ならば弟子たちが衣の両袖を肩で結ぶはずはあるまい。これは妖怪変化を「弔う」のではなくて「調伏」している姿である。しかし、本文には、紫女を調伏したが成功しなかった、という記述はない。だが、紫女はまず密教系の修験者・修行者によって調伏しようとしたけれども、妖怪の方の力が強くて成功しなかった、よって、国中の仏道修行者・僧侶を集めて供養すると、紫女は成仏得脱の身となった、というストーリーをこの挿絵から読み取ることができるようである。

第五は巻四の四「驚くは三十七度」。この章は常陸国の雁猟師の林内という男の発心譚である。冒頭で作者は「友呼び雁」という関東の猟法を紹介する。しかし、林内の猟法は本文を読むと、その猟法によったのではあるまい。挿絵は「友呼び雁」らしい絵が左下に見える。しかし、左上方には「むそう網」猟法（地上に「霞網」のような網を張って空から舞い下りる雁をこの網にかけ

て捕獲する方法）の様子が描かれており、右側に居る猟師たちも大籠を傍に置いているから、これは「むそう網」猟法で雁を捕っているのであることが知られる。すなわち、林内の猟法は本文には記述されていない「むそう網」猟法であったことが挿絵から知られるのである。

すなわち、『諸国ばなし』の挿絵の中には本文と補完関係にあって、本文と挿絵とが積分化されて一篇を成立させている、ということがあるのである。挿絵が本文の単なる説明画ではなかったのである。このことは注意されねばならないことであると、私は考えている。『諸国ばなし』の挿絵は西鶴の自筆であると認定されている。本文の記述を補完するという挿絵の画き方に西鶴の作意があったことが理解されてくるはずである。

小説類の本文と挿絵とが密接に関係する、という事象は、近世においては後期小説に顕著に現れる現象である。しかし、その夙い形態は西鶴本において既に現前されているのである。近世の絵入小説本というのは平安・中世の物語絵巻、絵入草紙の先蹤を受け継ぐのであるが、浮世草子時代に入って更に構図に作意が求められているのである。このことは出版文化が急速に拡がり、衆庶の多数がこれを享受するようになったことと強く結びついているはずである。このことは絵入狂言本などの演劇書類の絵の作意をも視野に入れて考えてゆく必要があろう。

さらに、小説類の挿絵の構図制作ということに焦点をおいて考えると、それは必ずしも小説作者に一任されているというのみではあるまいと、私は思う。小説作者に絵心があるとは限らず、また、あっても、挿絵を第三者に委託する、ということもあろう（これは今日の場合で考えても成り立つはず）。とすれば、本屋（出版者）側の意向がそこには働く、ということも多かったはずである。当時の画人は多く画工であって、彼らにその作意を期待することは、私は無理だと思う。

ここに本屋側における「編集者」というような存在が必要になってくるはずである。私は、西鶴本の編集者は、初期の『好色一代男』時代は水田西吟（『一代男』跋文の執筆者）、やがて北条団水がそれを担当していたのではなかろうかと推測している。団水は他にも草紙類の編集者であった。西鶴本の西鶴生前の編集者であったがゆえに、彼の没後も引き続き遺稿を整理し編纂し、刊行に至らしめたのであろうと、推測している。

ただ、浮世草子の各作品の刊行以前のプロセスについては、実証資料に乏しいうらみがある。ために、類推によって整合性のある仮説を立ててゆかざるをえない。そしてそれには、元禄期の出版文化という、この期の刊本をとりまいている状況についての更なる研究を必要とする。

（宗政五十緒）

このページ（部分）は、著作権許諾の都合によりジャパンナレッジではご利用になれません。

三　男色大鑑

大本八巻十冊本と、同じく八巻八冊本の二種の板本が伝存している。刊記はともに「貞享四丁卯年正月吉日　大坂伏見呉服町淀屋橋筋　書林深江屋太郎兵衛。京二条通　山崎屋市兵衛板行」とあるのが初板本で、これに「江戸日本橋青物町　万屋清兵衛」の名を加えたものが再板本である。

諸　本

八巻十冊本は、巻二・三十一丁（六十二ページ）のうち、はじめの十五丁を上、後半の十六丁を下、巻七・二十七丁のうち、はじめの十四丁を上、後半の十三丁を下と、それぞれ上下に分冊し、合わせて十冊に仕立てたものである。ところが八冊本においても、巻二の十六丁と巻七の十三丁の柱刻に「下」の文字が残っている。してみると、巻二と巻七が他の巻よりもそれぞれ五、六丁ないし二、三丁多いのにつけこんで、最初から右の二巻を分冊して、十冊に仕立てたものと思われる。しかしたとえば、八冊を銀八匁で売るべきところを、十冊に仕立てて銀十匁で売るというのは、明らかにいかさまである。ほかの巻々は巻一・二十七丁、巻三・二十四丁、巻四・二十三丁、巻五・二十五丁、巻六・二十二丁、巻八・二十四丁であって、最も薄い巻六でも二十二丁であるのに、十五丁一冊、十三丁一冊では、いくらなんでもひどすぎる。それにまた西鶴の作品は、『好色一代男』八巻八冊、『好色二代男』八巻八冊と、最高八巻八冊というパターンができているので、かたがた読者や販売店の不人気をかい、あわてて八冊本に製本しなおして売り出したものと考えられる。そのことは当時の書籍目録に、すべて八冊として記載されている事実からも推定されよう。したがって十冊本は伝本がきわめて少なく、わたしの知るかぎりでは、現在、早稲田大学付属図書館本の他に一本を存するのみである。

題簽（だいせん）左肩、「本朝若風俗」の五字を冠し、内題もまた「男色大鑑　本朝若風俗」とある。西鶴の自序に「貞享四年竜集丁卯陬日」の日付を有し、「鶴永」「松寿」の方形印記がある。柱刻は「大」。本文板下の筆者不詳。挿絵は吉田半兵衛風。

改題本に「古今武士形気（かたぎ）」大本五巻五冊がある。奥付に「大坂吉文字屋市兵衛　同源十郎、江戸吉文字屋治郎兵衛」と、板元だけが記載され、刊年月を欠くが、『大坂出版願書控帳』に、宝暦七年（一七五七）十二月の板行願出とあるから、翌八年正月の刊行であろう。内容は『男色大鑑』の巻二から巻五までの四巻二十章を改編したものである。

テーマ　『男色大鑑』の前半四巻二十章は、町人社会の男色三、僧房の男色一をのぞいて、武家社会の衆道を取り上げている。総じて非職業的男色の世界である。後半四巻二十章は、町人社会に属する職業的な歌舞伎若衆を取り上げている。これで一応、近世前期における男色、若衆風俗を網羅したわけである。少なくとも元禄期までの歌舞伎界においては、若女方（わかおんながた）・若衆方など、若くて美貌の歌舞伎若衆は、早朝から夕刻までは舞台を勤め、夜は茶屋で客の求めに応じて男色の相手をする、というのがしきたりであった。そういう職業的男色に対して、武家社会は戦国の余風として男色をたしなみ、しかも武士道における義理を男色のモラルとし、衆道（しゅどう）（若衆道）と称するに至った。時代を担うこの二つの社会において、習俗として公認されていた男色を、総合的に描こうとしたのがこの『男色大鑑』である。なお若衆（男色における弟分）は、十八、九歳で元服して前髪を剃り落とすまでで、それ以後、野郎頭（月代（さかやき）頭）になってからは念者（ねんじゃ）（兄分）となるのが、武家・町人を通じての一般的なルールであった。

「登場役者一覧」作成にあたり、鳥越文蔵氏にかずかずの助言をえた。

（暉峻康隆）

『男色大鑑』登場役者一覧

一、頭注欄において、「→役者一覧」とした役者を現代かなづかいによる五十音順に配列して、その解説をまとめた。
二、人名の下の数字は、本文中に登場する主要なページであり、解説末の現・退・故は、それぞれ、『男色大鑑』執筆当時の、現役・引退・物故を示すものである。
三、挿絵の出典中、つぎの略称を用いた。野郎大仏師(大仏師)　役者評判蚰蜒(げじげじ)　難波の貝は伊勢の白粉(伊勢の白粉)　雨夜三盃機嫌(三盃機嫌)　古今四場居百人一首(百人一首)　野郎関相撲(関相撲)

あ行

秋田彦三郎　五四八
秋田系役者の祖。寛文・延宝期の道化方の名手で、南北三ぶとともに京坂を歴勤。物まね・軽業・軽口・拍子事をよくした(役者評判蚰蜒〈延宝二年刊〉)。『役者大鑑』(元禄五～八年)の道化秋田彦四郎の評判に、「いにしへのめい人、あき田彦三郎にはにたところもないが、なにとてあき田彦四郎とはつきたまふぞ。ただしはゆかりの人か」とあるから、早く延宝年中に没したらしい。故

浅香主馬　五六三
貞享当時、大坂嵐座の立役であった市村四郎次の若衆時代の芸名。主馬は賤妻とも表記し、「しづま」とよんでいる。たとえば貞享・元禄当時の敵役小野山宇治右衛門の若衆時代の芸名、小野山主馬を、『役者大鑑』(元禄五～八年)で「しづま」とよんでいる。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)における市村四郎次の自己紹介によると、若衆時代は小舞所(庄)左衛門の抱えで、浅香しづまと称し、小六方などで京坂を歴勤していたが、中頃江戸へ下って元服し、市村四郎次と改名して立役を勤めていたが、上方がなつかしく、一両年以前(貞享元年)京都へ上り、当年(貞享三年十一月の顔見世)より嵐座に出勤、とある。巻八の一の時代は、「難波の大舞台、松本名左衛門が草も木もなびけし時」であり、藤田皆之丞が「はじめての出姿」というのであるから、延宝初年で、浅香しづま(主馬)の在上方時代と一致する。なお、『役者大鑑』に京都村山座の立役として評判、「以前も上京、又ほどなく江戸へ立こし、此度村山座のつとめ、先以御無事めでたし」とあり、背が低くて横ぶとりなれば、槌が芸をするようだとある。現

荒木与次兵衛　四九九・五三二・五五六
初代。荒木系祖。寛永十四年(一六三七)生れ。父は大坂道化方の祖といわれる斎藤与五郎(ふんとく与五郎)という。花車方(老女役)で名作者の福井弥五左衛門に師事し、寛文四年(一六六四)に「非人敵討」を演じて名声を得た。初代嵐三右衛門・藤田小平次とともに、延宝期の上方劇壇の重鎮となった。大坂堀江芝居の座元を勤め、立役としては武道・実事の妙手であった。元禄十三年(一七〇〇)十二月没。六十四歳。現

嵐今京之助　五五〇
西鶴の『難波の貝は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に、嵐三右衛門座の若衆方として登場、京都芝居からの初下りであったことが知られる。嵐今というからには、嵐京之助の二代目であろうが、ともに評判記に取り上げられるほどの役者ではない、色若衆であったようである。現

嵐三郎四郎　五六六
上方役者。寛文三年(一六六三)生れで、はじめ江戸の中村勘三郎座で若衆方を勤め、中村勘之介と称していたが、延宝五年(一六七七)の顔見世に上京して嵐三右衛門座にはいり、嵐三郎四郎と改めて立役となり、美貌と六方とやつし事で人気を博したが、貞享四年(一六八七)十二月二十七日に色と金のために自殺した。翌元禄元年三月刊の西鶴作『嵐無常物語』(半紙本二冊)は、その最期物語である。現

嵐三右衛門　五四九
初代。延宝初年から元禄初年にかけての座元兼立役。本名西崎三右衛門。寛永十二年(一六三五)摂津西

宮の西崎新平の子として生れた。少年の頃、江戸で魚問屋を営む父のもとに下り、役者を志し、丸子三右衛門と名乗って舞台をふんだ。寛文年中、「小夜嵐」という狂言で六方を勤めて好評を博したので、嵐を名字としたという。延宝初年、上方に帰り、京都で嵐三右衛門座の座元と立役を兼ねた。同五年(一六七七)十一月、京都北側芝居の「丹波与作」で大当りをとり、また同六年春、北側芝居の「吉野身受」で、伊藤小太夫の吉野太夫の相手役、小倉屋源兵衛を勤めて、半年余の大入りをとった。三右衛門が大坂に下って、嵐三右衛門座の座元となったのは、天和二年(一六八二)と推定される。『難波立聞昔話』(貞享三年刊)に、嵐座の座元として評判、「凡天下の役者の氏神」とあり、「居宅道頓堀南側戎橋より二丁西」とある。また『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、名代松本名左衛門、大坂座元嵐三右衛門、立役の上々吉として評判、「男つき役者めかず、すなをにして大じんの人相そこからそなわりたる生れ付也。一、六法のふりだし、天上天外唯我どくそんとは此人なるべし。……一、やつし事上々吉類なし。とりわけぬれのやつし、顔つき目つきにうつす事、どうもいわれずうつるぞ」とある。元禄三年(一六九〇)十月十八日没。五十七歳。二代目は実子の門三郎が、元禄三年十一月に襲名した。現


(百人一首)

嵐門三郎 五四九

初代嵐三右衛門の子。初名勘太郎。延宝末から女方として舞台に立ったが、天和にはいると父三右衛門が座元である道頓堀嵐座の若衆方となったことは、西鶴の『難波の皃は伊勢の白粉』巻二によって知られる。元禄三年(一六九〇)十一月、父の死とともに二代目三右衛門となり、立役と座元を兼ねた。親ゆずりの六方・濡・やつし、拍子事にすぐれ、「父ちちたれば子こたりとは此人なるべし」と『役者大鑑』(元禄五～八年)に見える。元禄十四年十一月七日没。四十一歳。現

市川かをる 五六七

貞享三年(一六八六)、京都大和大路芝居に若女方として登場。翌四年正月刊の『野郎立役舞台大鏡』に、京都万太夫座の若女方として評判、「女がたの美しきは下におかれぬ物、此君の美しさ、漢の李夫人そとをり姫も袖をおおふてにげたまふべし」とある。また『野郎関相撲』(元禄六年刊)に、「前廉京にふと出られしより、いちはやく太夫となりて日々に繁昌し給ふ事、もとあいきやうよき生れつきゆへ成べし」とある。美貌で売り出した色若衆であったらしい。生没未詳。現

伊藤小太夫 四九一

二代目。万治年間に二代目を襲名した京都の女方で、小太夫鹿子の創始者。寛文元年(一六六一)、上方から江戸に下り、古日向太夫(都伝内)座に属した(剃野老)。寛文末年


(百人一首)

にはまた上方に帰り、当時の名女方の上村吉弥(大吉弥)と並称され、お山小太夫と呼ばれた。濡・愁嘆をよくし、傾城役を得意とした。延宝六年春、京都北側芝居で、「吉野身受」の吉野太夫を演じ、半年余りの大入りをとった。元禄初年没という。退

岩井歌之介 四六一

承応以前の若衆歌舞伎時代の女方。塩屋九郎右衛門座で美貌をもって鳴る。生没未詳。故

岩井半四郎 五七六

初代。摂州有馬の扇商の子という。大坂で座元を勤め、嵐座と並称された。『難波立聞昔語』(貞享三年刊)に、幼い頃は岩井半太夫といい、大坂の塩屋九郎右衛門座に属し、のち荒木与次兵衛座の三幅対となり、小唄の名人とある。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)には、立役で武道方の第一、男ぶりが見事と評判。元禄十二年(一六九九)四月三日没。四十八歳。一説に五十二歳。倅亀松、二世半四郎となる。現

岩倉万右衛門 五六九

上方役者。天和二年(一六八二)の大坂大和屋甚兵衛座に、立役として登場しているが、江戸と注記してあるから、江戸下りの役者であったことが知られる。下って『難波立聞昔語』(貞享三年刊)に、「ぬれにうとからず、武道一きはくるしうなし。……今年給金三十五両……借宅新屋敷西より一丁目北側吉田や」とある。翌年刊の『野郎立役舞台大鏡』では、京都岡村座の立役の中として評判。元禄十四年の評判記で、大坂立役の上にランクされているのを最後に姿を消している。現

上田才三郎 五二六

天和・貞享期の道頓堀荒木与次兵衛座の若衆方。西鶴の『難波の皃は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に、荒木座の若衆方として登場している。また元禄元年(一六八八)、京都万太夫座の狂言「大隈川源左衛門」に、端役の千日行者を勤めている以外は、目下のところ所見なし。 現

上村吉弥(大吉弥) 五〇九

初代。寛文・延宝期を盛時とする上方の名女方。俗に大吉弥といい、吉弥結び(女帯)の創始者。もと大坂の道化方斎藤与五郎の抱えで、京都四条中の島芝居で売り出した。延宝八年(一六八〇)刊の『役者八景』に女方として記載、翌天和元年刊の『おもはく歌合』に、「今は上文字屋吉左衛門と名を改め」とあるから、吉弥が役者をやめて京都四条通で白粉屋を開業したのは天和元年の事である。西鶴も参加している俳書『道頓堀花みち』(延宝七年刊)に上村吉也の名で入集、また延宝八年五月の『西鶴大矢数』第三十二の表に同名で出座している。享保九年(一七二四)六月没。天性の美貌で、舞所作に優れていた。『舞曲扇林』の評に、「上村吉弥は平転を自由になせり。平は面体手足、力身なくやわらかに舞ふ。転は安らかなる所に悦として気を転ずる也。吉弥是をよく考へ、安らかにすらりと舞ふ中に、早く気をかへ心をあらため、行雲の風にひらめき、秋の葉の日にかがやくがごとく所作をなせり」とある。退


(百人一首)

上村吉弥(二代目) 五一七・五八二

初代荒木与次兵衛の門弟で上村辰弥の兄。天和初年、二代目を襲名。貞享年間には若女方として、二代目伊藤小太夫につぐ位置をしめ、京都村山座の立女方を勤めた。踊りや愁嘆事・怨霊事を得意とした。元禄五年(一六九二)頃没。西鶴の『難波の皃は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)巻二に、大坂嵐座・鈴木座の若女方として評判。また『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、村山座の若女方、上村今吉弥として評判、「一、しうたんのせりふ上手にて人を泣かす事えもの。一、舞ぶり扇の手上手にてとりまはしりかうなり。一、怨霊となつて、地赤にうろこがたの箔装束きてかるわざのはたらき、随縁ふしぎの妙をえ給ふ……。一、人の奥様となつて、りんきに身をもやし、腹たつるふぜい、よくうつりて上手」とある。 現

上村辰弥 五五〇・五八二

天和・貞享期の大坂の若女方。二代目上村吉弥の弟。初名は上村辰之助。西鶴の『難波の皃は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に、嵐座の若女方として評判。『難波立聞昔語』(貞享三年刊)嵐座の条に、今年給金百三十両、二十歳、居宅三津寺筋真斎橋東へ半丁北側、とある。なお同書に、辰弥は酒乱で、脇差を抜いて客を追い回すことたびたび、とあるが、多分それがもとであろう、元禄四年(一六九一)頃自殺した。『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)の若女方上村辰弥(二代目)の評に、「上村辰弥事は此世をうらみ、めいどこうせんの旅役者となり給ふ。……面かげに辰弥が姿、みるたびにいやましの思ひまさる折から、此君顔見世より出らるる姿、上村の、かたわれこれなんめり」とある。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)の評に、「面体うつくしく、見かけからりはつのあまる芸ぶりなり。……一、舞上手にて扇こうしや也。手ばしかなる舞ぶり、姉のお吉(上村吉弥)に似たる所あり」とある。野間光辰紹介(文学 昭和四十一年一月号)による西鶴第五書簡に、「人は何ともいへ、たつや能子にて候」とある「たつや」は、この上村辰弥である。巻八の四「小山の関守」の目録に、「上村辰弥よい子に極まる事」と記し、本文でも口をきわめて褒めているのは、心からのことだったのである。 現

上村門之丞 五六三

延宝六年(一六七八)刊の『古今役者物語』の江戸四座の役者付に、「子供」とあり、貞享元年(一六八四)には江戸葺屋町に住む(野郎三座託)。上方勤務の時期不明。 現

右近源左衛門 五〇九・五八四

若衆歌舞伎時代から初期の野郎歌舞伎時代にかけての上方の名女方。一説に元和八年(一六二二)生れ。振付師の始祖といわれる、歌舞伎伝助(日本伝助)の門弟。承応元年(一六五二)江戸に下り、「海道下り」や「山崎通い」などの道行を舞って好評を博した。万治・寛文頃は老女役を演じている。俗に女方の祖といわれ、前髪を剃らされた野郎歌舞伎時代の初期、鬘があらわれるまで、彼独特の置手拭を考案して月代をかくし、鬘が登場するまでの女方芸を守った(昔々物語)。 故

歌山春之丞 五三三・五八四

評判記その他に見当らないが、巻八の一にも「あ

らはれわたる宇治の川嶋数馬、浪に色ちる玉本数馬、連引きの撥音しづかに歌山春之丞も悪からず」とある。川島数馬は天和・貞享現在の若衆方(難波立聞昔語)であるから、春之丞も当時の野郎で、はやり歌を得意とした存在であったらしい。評判記にも登場しないこの芸名は、その後も上方でうけつがれ、宝永二年(一七〇五)冬、大坂で立役となった初代春山源七があらわれている。二代目源七の兄は若女方の春山歌五郎というから、この春之丞の系統であろう。現

岡田左馬之助 五四九
貞享・元禄期の上方の若女方。貞享元年(一六八四)、大坂荒木与次兵衛座の立女方となり、同三年には京都岡村座の若女方となる。元禄九年(一六九六)江戸山村座に下る。『難波の㒵は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に荒木座の若衆方として評判。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)には岡村座の若女方として評判、「ぽつとりとしたるむまれ付なるゆへ、諸人ともにすきけるなり。……一、長刀つかふ事名人。一、舞ぶり扇の手上手也。一、ぬれのせりふしつぽりとして、上村よりましじやと都にてのとりざた」とある。生没未詳。現


(関相撲)

お国 四六一
出雲お国。初代は慶長十八年(一六一三)没。太夫蔵人の元和当時は二代目お国であった。『古今役者大全』(寛延三年刊)に、元和三年(一六一七)三月六日より二十六日まで、二代目お国、四条中の島にて興行。立役を加えて大いに繁盛す、とある。故

尾上源太郎 五四〇・五八二
延宝・天和期における大坂の大和屋甚兵衛座の若衆方。歌舞伎俳優の一系統をなす尾上姓を名乗った最初の役者。元禄十六年(一七〇三)刊の『好色敗毒散』巻五に、「今は昔尾上源太郎といひし野郎の膝頭に、人面瘡出来て、この口より物食ふ事すさまじく、太平記の講釈など、なか〳〵聞き事なりき」とある。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)には、すでにその名が見えない。故

小野山主馬 五六九
主馬は賤馬とも作る。延宝期の上方の若衆方。天和元年(一六八一)に立役に転じ、宇治右衛門と改名。貞享・元禄期の敵役として活躍した。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、「都一番のかたき役」とある。元禄十三年(一七〇〇)刊の『役者万年暦』に、京都早雲座の敵役上々吉として記載、その後まもなく姿を消している。なお西鶴も参加している俳書『道頓堀花みち』(延宝七年刊)に入集し、『西鶴大矢数』(延宝八年五月)の第三十二の表に出座している小野山恋舟はこの人である。現

か行

加川右近 四八四
万治・寛文期の京都役者。『野郎虫』(万治三年刊)の夷屋吉郎兵衛座「れんとび権之助内　加川右近」の評に、「いまだ少年なれば、なにはのよしあし定めんもおとなげなし。……芸も少年にはめづらしきとの取沙汰なり。笑ひ顔うつくし」とある。故

鎌倉新蔵 五六九
延宝・元禄期の上方の道化方。元禄五年(一六九二)十一月の顔見世に大坂鎌倉新蔵座の座元を勤めているが(役者大鑑)、翌六年刊『野郎関相撲』に、「もはやふるびて唯功者ぶんに入るるのみ」とある。ただし『役者大鑑』(元禄五〜八年)の評に、「しんじつから見物に笑はするは老功、とりわけ馬子になつて大はだぬぎ、又は丸はだかに成、こんのふんどしを見せて笑はするが得物」とある。現

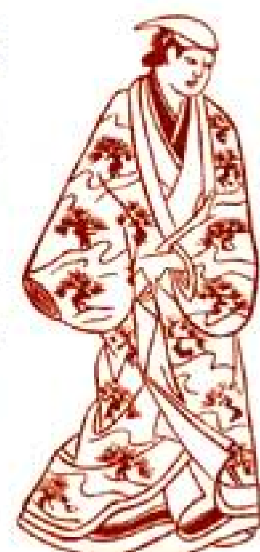

(関相撲)

川島数馬 五六四・五八七
上方役者。二代目。初代の弟子で初名は沢之丞。若衆方。貞享三年(一六八六)刊の『難波立聞昔語』に、大坂嵐座所属で、当年二十八歳とある。翌四年刊の『野郎立役舞台大鏡』では、若衆方ではあるが「今の数馬はかたき役としぐまれ」とある。翌元禄元年、京都万太夫座に出勤。他に所見なし。現

源右衛門 五八一
元禄六年(一六九三)十一月の京都四条南側の村山平右衛門座の極り番付に、立役として記載されている竜井源右衛門であろう。現

小勘太郎次 五六九
若衆時代のことはよくわからないが、延宝年中、道頓堀芝居に登場。下って天和三年(一六八三)大坂の大和屋甚兵衛座の顔見世に、花車方(老女役)として登場している(摂陽奇観八)。元禄期にはいると、

当代花車方の上々吉となり、「此人上手なる証拠は、何をいたされてもそれぞれにうつし、狂言にまをぬかすことなし。しかのみならず、うれい事よくうつれり」(役者大鑑)とある。元禄十六年(一七〇三)刊の『役者御前歌舞伎』に、京芝居の花車方上々吉として登場しているが、同年冬、江戸に下って山村座に属し、正徳二年(一七一二)まで江戸劇壇の上々吉花車方として活躍、翌三年没。西鶴も参加している俳書『句箱』(延宝七年)と同年刊の『道頓堀花みち』に出座入集し、『西鶴大矢数』(同八年五月)の余興第四十六に出座している小勘重行は、この太郎次である。現


(関相撲)

小桜千之助 四九八・五五六
初代。初代上村吉弥の門弟。京都村山座の開祖村山又兵衛の養子または縁者という。延宝・天和・貞享期の若女方の名手。西鶴の『難波の貞は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に大坂荒木与次兵衛座の若女方として評判。また『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、若女方小桜古千之助として評判、「女のぬれに三国一、またと類なし」とある。二代目は貞享四年(一六八七)に、大坂荒木座の若衆方小桜小太夫が、京都の村山座で襲名している。同時に千之助は立役となって村山九郎右衛門と名乗り、さらに元禄五年(一六九二)には、村山平右衛門と改名している(役者大鑑合彩)。生没未詳。現


(百人一首)

小島妻之丞 五六九
上方役者。寛文・延宝期には若衆方、天和の頃、立役となり、小島彦十郎と称した。元禄初年、狂言作者に転じ、主として竹島幸左衛門のために作した。元禄六年(一六九三)八月、京都菊屋七兵衛板の狂言本「好色伝授」の作者。『役者大鑑』(元禄五〜八年)に、京都布袋屋梅之丞座の立役として評判、「一両年いぜん嵐座にて見しのち、いづちゆきけん、中絶してげんざんにいらず候所、御無事にて当年竹嶋座へのありつき、目いでたく存候。……此人狂言作者になり給へば、あながち芸にかまはぬ役者也」とある。なお『句箱』(延宝七年)と同年刊の『道頓堀花みち』に、小島立花の名で入集、『西鶴大矢数』(延宝八年五月)の余興第四十六にも、同名で出座している。現

小紫 五八七
貞享二年(一六八五)三月の江戸森田座の「薄雪物語」上演の際の役者に、出来島小紫の名が見える(歌舞伎年表)。現

さ行

榊原平右衛門 五七八
上方役者。元禄後半期の立役の名優であった初代榊山小四郎の養父。天和三年(一六八三)十一月の顔見世役者付に、大坂大和屋甚兵衛座の立役として登場(摂陽奇観八)。『役者大鑑』(元禄五〜八年)に立役の中位として評判、「上下きて竹杖をつき、きいたかへのふれ事いひに用ひてよし。……所の代官事か、物がしら事に用ひて、公事さたのさばきなどいはするによろし」とある。のち親仁方に転じたという。生没未詳。現

坂田銀右衛門 五六六
延宝・貞享期の大坂大和屋甚兵衛座に属した立役。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)の敵役小野山宇治右衛門の評判に、「大坂大和やが芝居にて小詰役(端役)の時分は、坂田銀右衛門とけちりんもちがいのない役者、上手とも下手とも気がつきませなんだ」とある。現

坂田小伝次 五四三
延宝・貞享期の上方の若衆方。延宝八年刊の『役者八景』に、若衆方として記載。『好色一代男』巻五の七にも登場している。

坂田伝才 五七八
上方役者。『古今四場居百人一首』(元禄六年刊)に、坂田伝才こと伝内とあり、からくり物を使うことが上手で、京都では半道化、江戸へ下って実方とある。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)には、京都万太夫座の立役坂田伝内として評判。「ばばのまね日本一、すべて物まね上手也」とある。江戸へ下ったのは元禄四年で、中村七三郎・袖岡今政之助らとともに下り、山村座に出勤している。生没未詳。現

坂田藤十郎 五六六
初代。元禄期上方歌舞伎の代表的立役。正保四年(一六四七)、一説に同二年、京都の座元坂田市右衛門の子として生れた。通称坂田伊左衛門。若衆時代の事はわからないが、よく修業に励み、延宝年中、すでに立役となっている。延宝六年(一六七八)二月大

坂に下り、同年正月六日に病死した大坂新町の名妓、扇屋夕霧の身の上を脚色した狂言「夕霧名残の正月」を金子六右衛門座で上演し、藤屋伊左衛門を演じて名声を博し、当り狂言となった。当時三十二歳、以後同狂言を十八回上演したという(役者大鑑、耳塵集)。夕霧伊左衛門狂言の原点となったこの戯曲は、近松作かとの説もあるが、つぎの理由で藤十郎自作と考えたい。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)の坂田藤十郎評判に、「諸げいこうしやにして狂言もつくらるれば、まずもんもうにはなさそうな」とあり、また主人公に自分の通称の伊左衛門を用いているからである。それに藤十郎は無学どころか、延宝七年には、西鶴も参加している俳書『道頓堀花みち』に、坂田冬貞の名で入集し、また、延宝八年五月の『西鶴大矢数』第三十三の表に、西鶴と一座しているほどである。延宝以後京坂を歴勤し、元禄六年(一六九三)三月、京都万太夫座で、近松門左衛門作の「仏母摩耶山開帳(ぶつもまやさんかいちょう)」で大当りをとって以後、近松と提携し、「傾城阿波鳴門(けいせいあわのなると)」(元禄八年)そのほか近松の作品に続々と出演した。元禄八年十一月、京都万太夫座の座元となって、名実ともに上方演劇界の第一人者となった。貞享当時の芸評に、「一、やつし芸かるく、つくろいのなきしだしなれば、人ごとにすきまする。一、諸事こうしやにして間あい上手なれば、おのづから狂言がいきてみゆるなり。一、傾城かいの大臣となつては、嵐と一座しても、ひけはとらぬぞ」(野郎立役舞台大鏡)とある。宝永六年(一七〇九)十一月一日没。現


(関相撲)

桜井和平(さくらいわへい) 五六九

上方役者。天和・元禄期の立役で、『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、大坂嵐座の立役の中として評判、「一、諸芸上手ぶらるるによつて、返つてみざめする事。……一、軽業え物にして、やつし大かたなり」とある。『役者大鑑』(元禄五~八年)には、京都村山座の親形(親仁役)の上として評判されている。元禄十一年(一六九八)刊の『役者(やくしゃ)櫻櫚箒(しゅろぼうき)』に、親形の上として登場しているが、まもなく姿を消している。現

桜山林之助(さくらやまりんのすけ) 五一七・五八七

桜山系の祖である初代桜山庄左衛門の、若衆時代の芸名。初代桜山四郎三郎の兄。泉州堺の生れで、幼い頃ようじ屋重左衛門にかかえられて、戸川庄太夫と称した。延宝末年から桜山林之助と称して大坂の舞台に立ち、若衆方として名をあげた。元禄九年(一六九六)冬、京都万太夫座で元服し、桜山庄七と改名して立役に転じた。翌年さらに庄左衛門と改名、正徳三年(一七一三)には、京都立役の巻軸(かんじく)にすえられたが、まもなく病没した。小柄であったが男振りがよく、時代・世話をかね、濡(ぬれ)・武道に長じた。『難波立聞昔語』(貞享三年刊)に、難波の若衆方の随一、年は当年二十三、とある。同四年刊の『野郎立役舞台大鏡』に、大坂荒木座の若衆方として評判、「一、武道のつめひらきあつぱれきき事なり。一、諸げいにくげなき仕出しなるゆへ、世間のひいき多くて評判よろしければ、追付上役者にもなりたまふべし。一、上るり小歌よくうたわるるゆへ、猶以ておも入ふかし」とある。現


(百人一首)

沢田太郎左衛門(さわだたろうざえもん) 五六九

上方役者。前歴は明らかでないが、『役者大鑑』(元禄五~八年)に、立役の中として評判、「此人のしよさ、すこし間にあへばこそ、実とやつしと両役をつとめたまふ」とある。他に所見なし。現

沢村小伝次(さわむらこでんじ) 五四九・五八三

初代沢村長十郎の兄。はじめ京都宮川町備中屋六郎右衛門の抱え子であったが養子となり、一閑(いっかん)と称していた。延宝末年、若衆方として京都の舞台をふみ、天和年中に大坂嵐座の若衆方となったことは、西鶴の『難波の貞は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)によって知られる。鈴木平八没後(貞享三年三月没)の上方の若衆方の随一と称せられ、『難波立聞昔語』(貞享三年刊)に、今年給金七十五両の位、年二十二歳、居宅畳屋町三丁目西側、桐のとうの暖簾、家名備中屋とある。元禄五年(一六九二)には荒木与次兵衛座の若衆方となり、その事を伝える『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)に、「若衆方の巻頭あつぱれにくまれぬ芸ぶり……武道のせりふ、みちを立ててのつめひらき、さながら秋のもみぢかとうたがふ。ぬれ事さしては心の外の思ひがます」とある。元禄六年に若女方に転じた。宝永初


(関相撲)

年に没した時は四十二、三歳である。現

柴崎林左衛門 五六九

上方役者。はじめ柴崎林之助といい、若衆方として勤めていたが、貞享初年、立役に転じて林左衛門と改名した。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)では、京都村山座の立役中の部として評判、「男つききれいなるゆへ、諸芸さつぱりとみゆる」とある。宝永四年(一七〇七)刊の『役者友吟味』では、大坂の立役上々吉となっており、享保初年まで精勤した。享保七年(一七二二)没。現

杉山勘左衛門 五七八

上方役者。初代。杉山平八の養父。延宝初年、大坂の荒木座に登場、貞享期には荒木座の立役となっている。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)には、京都村山座の立役の中位として評判、「ぬれのそそり、わつさりとしておもしろし。一、時々半道いはるるゆへ、腹すじよる事多し」とある。また『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)に、やつしと半道化の名人と評判。元禄末年没。現



(関相撲)

鈴木平左衛門 五八七

上方役者。延宝・元禄期の立役。はじめ江戸で丹前に一風をなして売り出したが、貞享初年、上方に移り、大坂の大和屋座で立役として売り出した。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、同座の立役として評判、丹前・濡・やつし・武道の上手、



(百人一首)

三味線は古今無双の名人とある。晩年は、また、江戸に移り、武道・実事をもかねて、枯淡な芸風をみとめられた。元禄十四年(一七〇一)没。現

鈴木平七 四九九

貞享・元禄期の大坂の若衆方。鈴木平八の実弟。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、大坂大和屋座の若衆方として評判。また『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)に評判して曰く、「此君舎兄声吟のながれをくんで、此難波津にあしを留、一日〱夜々御商売をかせがるるにより、いつとなくあがる鈴木の名も高く……芸ぶり平八に其まま、草のかげにてさぞよろこび給はん。面ていおもはしからねど、衆道のせりふ、意気地の目づかひ、見るたびにいやましのおもひ……武道のつめひらきあざやかにきこへおもしろし。太刀打かい〲しくりこんに見ゆる」とある。しかし翌元禄六年(一六九三)には江戸に下り、『役者雷』(元禄七年序)に若衆方として記載、同九年刊の『野郎にぎりこぶし』には、山村座の若衆方として記載されている。元禄十二年頃まで山村座に出勤、その後の動静はわからない。現



(関相撲)

鈴木平八 五一三

鈴木系祖の初代鈴木平左衛門の門弟。一説に養子という。天和・貞享期の大坂における若衆方の随一。技芸・容色ともにすぐれ、濡・愁嘆・武道事をよくした。貞享三年(一六八六)閏三月八日没(新五人女)。二十三歳。『難波の白は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に、荒木与次兵衛座の若衆方として評判、「伊勢芝居よりのぼり子供ありといへども、当地に尻のすはる事まれ也。初舞台の美少人達は、平八身ぶりを手本に見習ひたまへ」とある。また平八が没した直後に出た追善の踊り歌念仏『新五人女』における桜山林之介の追善文中に、「すずき〱と名も高館の御所芸者くらいあり」とある。さらに『野傾友三味線』(宝永五年刊)巻一に、「一とせ鈴木平左衛門、座本せしに、同平八大あたりにて、『顔見世や判官贔屓鈴木がた』と、狂句の作者例の西鶴」とあり、平八が狂言「高館」で、判官役または鈴木三郎の役を勤めて当りをとったことが知られる。故



(百人一首)

袖岡今政之助 四九九・五七四・五八七

今政之助とは、今の二代目政之助の意。初代は延宝・天和を盛りとした若女方。俳書『道頓堀花みち』(延宝七年刊)に、袖岡由衣の名で入集している。元禄七年(一六九四)十二月三日没。四十四歳。二代は寛文六年生れで、初代の実子、または養子という。若女方で、貞享三年(一六八六)に大坂で二代目を襲名した。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、大坂荒木座の若女方、袖岡今政之助として評判、「面体大略にして諸げい古政に似たるといふ人あり。……口せきにつやなしとかきたる草紙あり」とある。元禄四年、江戸に下り、若女方として活躍した。正徳元年(一七一一)花車方(老女役)とし

て舞台に立ち、江戸花車方の随一と称された。享保九年(一七二四)没。濡と愁嘆にすぐれ、花車方としては老母役を得意とした。現

袖島市弥　五八七

上方役者。天和・貞享期の若女方。天和初年、大坂の大和屋甚兵衛座に若女方として登場。同三年(一六八三)冬、同じく大和屋座で太夫号を得た。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、大和屋座の若女方として評判、文弥節の浄瑠璃・小唄よし、とある。ただし貞享四年(一六八七)の江戸中村勘三郎座の番付によれば、女方で狂言「つり狐」に出演しており、翌元禄元年七月刊の『野郎役者風流鑑』に、中村座の役者四天王の一人にあげられているから、貞享四年中に江戸へ下ったことが知られる。生没未詳。現


(百人一首)

染之丞　五七〇

『好色一代男』巻五の七に、山本勘太郎などとともに登場する若衆方の鶴川染之丞であろう。立役に転じて惣兵衛と改名したものと思われるが、評判記に所見がない。

た行

滝井山三郎　五〇六

寛文初年、京都で若女方として舞台をふみ、寛文三年(一六六三)には江戸に下って評判をとり、同五年十月には、市村座の「梅が妻」で大当りをとってまもなく、十二月には京都へ引き上げた。寛文七年、再び江戸へ下って中村勘三郎(二代目)座に属したが、当年より町奉行となった島田出雲守に寵されたので、山三郎は江戸四座のほかに一座を立てる事を願ったが成就しなかった。同年八月勘三郎が急死したので、その死は山三郎がその跡に代らんための毒殺であったと『久夢日記』が伝えている。延宝二年(一六七四)刊の『新野郎花垣』に、「此君人にこへ、おすがた心ばせ又有べきともおもはれず。ぬれ狂言のしなせぶり、うたふ小歌のひとふし、かりやうびんがともいふべし」と評判し、肖像の賛に、「新しばゐとりたてたき井心ねは流れにすめる役者すくわむ」とある。『古今役者物語』(延宝六年刊)に、「さて又滝井のあはれとも、きえてはかなき山三郎」とあるから、延宝三、四年頃には没した事が知られるが、この死も毒殺された勘三郎一家の恨みの毒殺であったと『久夢日記』にいう。真偽を知らず。本文に「十九の名残」とあるが、寛文初年に十四、五歳で舞台をふんだとしても、延宝三、四年頃は三十歳に近い。故


(新野郎花垣)

竹島幸左衛門　五八七

上方役者。歌舞伎の振付師の始祖といわれる歌舞伎伝助の実子。幼名日本左衛門。貞享のはじめ江戸から大坂に上り、嵐座の立役として登場。『難波立聞昔語』(貞享三年刊)に、給金百五十両、借宅周坊殿町難波橋筋南より三丁目東へ一丁目とある。上坂当時は重く用いられなかったが、元禄期にはいると立役の上々吉となった。『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)に、今の上々、立役実方、藤田小平次・荒木与次兵衛と三幅対の中尊、武道・拍子舞・うれい事の上手とある。正徳二年(一七一二)十一月二十四日没。現

竹中吉三郎　五七三

延宝・元禄期の上方役者。仕方舞の名手の戎屋吉郎兵衛の子。延宝期は竹中初之丞といい、京都戎屋の舞太夫であったが、天和・貞享期は若女方竹中吉三郎となり、岩本権三郎座に属して、藤田吉三郎と並称された。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、京都岩本座の若女方として評判、女方として京都一番の高給取り、とある。評に曰く、「一、舞ぶり扇の手上手なり。それはどうり、ゑびすやの吉郎兵衛といふ名人の親仁めが、存生の内によく仕入たもの。一、せりふもの言ひもそそらず、打ついてよし」とある。元禄元年(一六八八)九月から、立役竹中藤三郎となって大坂に下る。『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)には、大坂荒木座の立役として評判。『役者大鑑』(元禄五〜八年)には、酉の年(元禄六年)大坂より上り立役として評判、「竹中は年若にしてきようはだ成仕出し、しかも諸芸おもいれのうつりよし。今一はづみて上文字にちかき役者、いかにしてもたのもしいといへり」とある。生没未詳。現


(関相撲)

竹中半三郎　五八三

上方役者。天和・貞享期の若衆方。西鶴の『難波

の良は伊勢の白粉」（推定天和三年刊）に、荒木座の若衆方として評判。『難波立聞昔語』（貞享三年刊）荒木座の条に、小歌徳右衛門抱え、給金四十両、二十五歳、宅戎橋北側西へ一丁新屋敷とある。『野郎立役舞台大鏡』（貞享四年刊）に若衆方として評判。「手負いの所作上手なり」とある。『役者大鑑合彩』（元禄五年刊）や『役者大鑑』（元禄五〜八年）には、すでにその名が見えない。生没未詳。現

玉井浅之丞 四七五

寛文・延宝期の江戸の玉川主膳座に属した若女方。江戸の評判記『垣下徒然草』（寛文十一年刊）に、玉川主膳とならんで評判、すぐれて美貌であったとある。「をうなかとみれば玉井の浅之丞今やうきひの花の面影」（垣下徒然草）。

玉川主膳 四七五

巻五の四の本文に、玉川を玉村と誤る。野郎歌舞伎の初期、万治・寛文期の女方。寛文元年（一六六一）、京都から江戸に下り、新伝内座で若女方を勤めたが、「よわひふけ過ておもはしからず。たけたかくは反りてあしし。小うたわたりなみ也」（剃野老〈寛文二年刊〉）とある。すでに二十歳を過ぎていたらしい。同二年、玉川主膳座をおこして座元となり、翌三年には、市村竹之丞と相座元を勤めた。延宝初年、出家して可見と号し、法名を頼信といった（古今役者物語）。扇舞・道行舞をよくした（舞曲扇林）。故


（百人一首）

玉川千之丞 四六八

若衆歌舞伎末期から野郎歌舞伎初期にかけて活躍した若女方。万治三年（一六六〇）刊の『野郎虫』の京都村山座、玉川千之丞の評判に、「面体芸いづくを、難ずべきやうなし。……されども年の齢二十日ばかりの月を見る如くなれば、野郎の齢も今少しにて、一入惜しく思はる」とある。寛文元年（一六六一）江戸に下り、堺町の中村勘三郎座で、「河内通」の狂言で名声を博した。寛文五年、上方に帰ったが、翌六年にはまた江戸市村座に出演している。まもなく上方に帰り、寛文十年また江戸に下って中村座に出勤、翌十一年五月十四日、三十五、六歳で没した。『直矩日記』寛文十一年の条に、「五月十四日とやらん、玉川千之丞死す。木引町に有レ之し」とある。『舞曲扇林』にいう。「千之丞は虚曲の二つを得たり。虚は何心なくかろくして陽也。体ゆるやかに舞なせり。曲は風流なり。千之丞曲をつくるに、姿見の鏡を立て我とその品を鏡に写し、人のみるさま心の移るやうを考て、女性の姿をよく分別せしゆへに、見物の心をときめかしける。是虚曲の二つを分別せしゆへ也」。まだ歌舞本位の時代の舞の名手である。故


（剃野老）

玉村吉弥 四八〇・五四四

万治・寛文期に活躍した若女方。はじめ、京都の夷屋吉郎兵衛座に属し、玄宗皇帝花軍の狂言で楊貴妃に扮して当りをとった（野郎虫）。寛文元年（一六六一）、江戸に下って、いにしえ座に属し、若女方として売り出したが、延宝初年には姿を消している。『剃野老』（寛文二年刊）に、「いにしへ座玉村吉弥。いふばかりなくあでやかにして、此世の人ともおもほへず。……かかる人後の世にもいできなんや。芸の思ひいれ上手なり」とある。生没未詳。故

（大仏師）

玉本数馬 五六四

延宝二年（一六七四）刊の『役者評判蚰蜒』に、京都夷屋座の若衆方として評判、「人はだの児文殊とは是なるべし。殊におどりのなりふり、さめさめとして、すそにぼたんの花がちる」とある。

太夫蔵人 四六一

元和三年（一六一七）に段助という座元が京都から大坂に下り、蔵人という女太夫を仕立てて太夫蔵人と号した。後に道頓堀浜側の歌舞伎芝居、塩屋座となると『古今役者大全』（寛延三年刊）にいう。故

出来島小曝 三六六

寛文・延宝期の江戸役者。初代。伝説に女歌舞伎の頭目の一人の出来島長門守の門人という。寛文初年、若衆方として登場。のち若女方に転じ、美貌と舞所作・小唄で人気を博したが、背丈が延び過ぎて、延宝五年（一六七七）頃には姿を消している。江戸堺町の評判記『新野郎花垣』（延宝二年刊）に、「此君又たぐひなき白ぼたんとやいはん、きりやうずい一


（百人一首）

にして、こゑあざやかなり。……ただしたくましくのび過たるはいやか」とある。

戸川早之丞 五四〇

大坂道頓堀の大和屋甚兵衛座の若衆方で、呉服屋の借金に詰まって、貞享三年(一六八六)正月二日に義理死にした。同年三月には同じ原因で自殺し、この方は『新五人女』(貞享三年刊)に、「たき川市弥しでのみちゆき」という歌祭文が収められている。またこの二人の事件は、『椀久二世の物語』(改題本『新小夜嵐』)下巻「買掛りは絹袖の泪」の主題となっている。

外山千之助 五七四

貞享・元禄期の女方。はじめ京都で滝井沢之丞の芸名で若女方を勤め、まもなく外山千之助と改名し、貞享四年(一六八七)か元禄元年(一六八八)江戸に下った。『野郎役者風流鑑』(貞享五年刊)に、「外山千之助住所ふきや町小見せ物うら。此君京四条の下り、今市村の座に出給ひ、女方をまなび給ふ。面体うつくしく、ぼつとりとしてやさしく見ゆる。諸芸たをやかに露こぼれかかれる御よそほひ、誠に京女郎の風俗なり」とある。生没未詳。現


(三盃機嫌)

な 行

内記彦左衛門 五八七

上方役者。寛文八年(一六六八)刊の『野郎大仏師』に、若衆方山川内記として登場。天和の頃、山川彦左衛門と改名して立役に転じた。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、京都万太夫座の立役として評判、「やつしげい上手なれども、人によつてすき嫌ひあり」とある。また『役者大鑑』(元禄五～八年)には、「ふり出しも成り、やつしも成り、ぬれ事もなり、憎ざうもなけれど、人がおもしろがらぬがきのどく」とある。生没未詳。現

中川金之丞 五六六

天和・貞享・元禄期の大坂役者。貞享元年には、荒木与次兵衛座で立役を勤めている(摂陽奇観)。正体は、新町廓内越後町の遊女屋田中屋加右衛門で、気楽な身の上であったが、道楽がこうじて、立役となった人物である(役者大鑑合彩)。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)の評に、「諸芸かるく、つくろはぬ所が上手なり。一、やつしにくげなく、心そこからおかしい所がある」とある。現

中村主膳 五七〇

天和三年(一六八三)の大坂荒木与次兵衛座の役者給金付(摂陽奇観八)に見える、若女方の中村主膳。巻八の二の本文によると、この主膳が貞享初年に六郎右衛門となったわけであるが、『役者大鑑』(元禄五～八年)によると、六郎右衛門が三人いる。その一人の村川六郎右衛門は敵役、久賀六郎右衛門はもと門弥という若衆で、現在は半道方であるから該当しない。残る立役の松永六郎右衛門がそれであろう。『役者大鑑』に、「身のはたらき実ごとのつめひらき大略にして、家老役をもつとまれば、中文字に打付いた役者也」とある。元禄十一、二年頃まで、京都の早雲座や万太夫座に出勤している。現

浪江小勘 五六六

はじめ京都宮川町山屋文左衛門の抱え子で、陰子名を滝井浪江といったが、ある客に引かされて大坂に下ったのを、また母親が難題を吹っかけて取り戻し、再び陰子小島梅之助(役者八景〈延宝八年刊〉)となった。延宝八年(一六八〇)道頓堀初舞台の際、浪江小勘と改め、天和元年(一六八一)嵐座の若女方となり、嵐三右衛門の相手役として好評を博した。『難波立聞昔語』(貞享三年刊)に、今年給金七十五両、二十八歳、居宅畳屋町東側、南より一丁目、柿無地のうれん、とある。翌貞享四年刊の『野郎立役舞台大鏡』にも、嵐座の若女方として評判。『役者大鑑』(元禄五～八年)の若女方、浪江小勘(二代目)の評に、「此君ゆかりあつてなみ江小勘の名跡をつぎたまふにや。むかしの小かん大坂にて名を発したまふこと、たれしらぬものなし。中にも小野の小町になり、死んだあらし三右衛門を四位の少将にして大内のぬれ狂言おもひ出せば心ゆかし」とある。元禄初年には引退もしくは病死したものと考えられる。西鶴も『難波の良は伊勢の白粉』で取り上げている。現


(簑張草)

南北三ぶ 五五六

初代。延宝・貞享期を最盛期とする上方の道化方で、所作事をよくし、田舎者やあほう役を得意としたことが、『古今四場居百人一首』(元禄六年


(百人一首)

刊)などに見える。初見は延宝二年(一六七四)京都芝居。元禄八年(一六九五)竹島幸左衛門座の出勤を最後に姿を消している。元禄十年頃没。現

西川庄太夫 五七〇

天和二年(一六八二)大坂荒木座の新女方として登場している。『難波の貞は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に鈴木平左衛門座の若女方として登場、「去年はじめての顔見世に、文弥が鉢の木を耳より取出し、かはつた花をやられた」とある。貞享四年刊の『野郎立役舞台大鏡』には、その名が見えない。ただし、巻八の二の本文に、「庄太夫が三味線も死ぬれば聞けず」という庄太夫が、この西川庄太夫であるか否かは断言できない。

野川吉十郎 四四

寛文・延宝期の若女方。はじめ京都で上村吉十郎と称し、音曲と六方をよくした。事情あって野川吉十郎と名を改め、寛文六年(一六六六)頃江戸に下り、中村勘三郎座に属した。延宝年間までその名が見える(野郎大仏師、垣下徒然草)。故


(大仏師)

は行

花井才三郎 四六六

初代。寛文・元禄期の江戸役者。寛文初年、若衆方として中村勘三郎座に出勤(剃野老)、延宝年中、立役に転じた。『野郎役者風流鑑』(元禄元年刊)では、中村座の役者四天王の一人となっている。元禄半ば頃、姿を消している。現

坂東又九郎 四四

初代。坂東系祖。初代森田勘弥の実父。はじめ京都四条河原の道化方で、前出の玉村吉弥の抱え主であったが、寛文元年(一六六一)江戸に下り、まもなく堺町で坂東又九郎座を立てた。寛文八年に森田座の森田太郎兵衛が死んだので、五月、又九郎は太郎兵衛の養子であった倅の又七を勘弥と改名して太夫元とし、森田座の名義を立てた。それ以来、同座は彼の血縁によって永く継承された。元禄十三年(一七〇〇)四月十日没。六十七歳という。現

坂東又次郎 五〇六

初代。江戸の道化方。同じく道化方で、寛文六年(一六六六)に堺町で坂東又九郎座を立てた初代坂東又九郎の長男。寛文末年に竹之丞座に属し、延宝初年には森田座の座元も勤めている。生没未詳。故

平井しづま 四八一

承応以前の若衆歌舞伎時代、大坂道頓堀の塩屋九郎右衛門座に属し、美色をもって鳴り、舞所作をよくす。生没未詳。故

平川吉六 五六九

『役者大鑑』(元禄五〜八年)に、大坂竹島幸左衛門座の親形(親仁役)の中の部に評判されている平川五郎左衛門が、吉六の後身である。評に曰く、「そのかみ大こ吉六といひし時代をおもんみれば、歌説教などよろしかるべし。……衆生縁のなきゆへにや、さのみ評する人なければ中の上文字」とある。本文の西鶴の口調から見れば、貞享当時すでに中年に達し、老役に転じていたらしい。現

柊兵四郎 五三一

初代坂田藤十郎(宝永六年没)の妹婿で、大坂の立役。「鬼にもまけぬ心ねの大臣、柊木兵四郎をつれて、一盛は花之丞にたより」(好色盛衰記三の一)。現

藤川武左衛門 五六六

上方役者。初代。前名富士川武左衛門。寛永九年(一六三二)生れ。延宝の頃から立役としてあらわれ、貞享期には「京一番の武道方」(野郎立役舞台大鏡)とされた。元禄期にはいると実悪・敵役に転じ、同十五年(一七〇二)には京敵役の巻頭に推され、実悪の開山と称された。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に京都村山座の立役として評判、「ぬれ事武道がたに相応してかたし。とかく武道ひとすじの役者と心得給ふべし」とある。享保七年(一七二二)に引退し、同十四年三月没。九十八歳。現


(関相撲)

藤田吉三郎 五五四

貞享・元禄初期の京都の若女方。初代藤田小平次の門。貞享三年(一六八六)大坂大和屋甚兵衛座に出演して名声を博し、竹中吉三郎と並称された。修羅事と濡事を得意としたが、『役者大鑑合彩』(元禄五年刊)には、近年患いがちとある。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に曰く、「芸ぶりしつとりとして思ひ入ふかし。大名高家のおくさまがたをしやうで見るここちする。一、詰開きの口上せ


(百人一首)

かずさはがず、うちついたる事、竹田近江がからくりの仕掛よりもたしかなり」。生没未詳。現

藤田小平次 五四〇・五六三

延宝・元禄期の上方の立役。初代で藤田系祖。伊勢出身で、花車方の名優でかつ狂言作者であった福井弥五左衛門に育てられ、実事師としてあらわれた。延宝二年(一六七四)京都夷屋座の座頭となり、天和・貞享頃には大坂の大和屋甚兵衛座に属した。六方は嵐三右衛門(初代)、実事は藤田と並称された名優。元禄八年(一六九五)を最後に姿を消している。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、「実かたの元祖とやいはん、名人とやいはん。四方髪の家老となり、敵役に打むかひ、理非めいさつにのべらるる時は、ふるなの弁舌も及びがたし」とあり、また、「打物ぬいてのはたらき上手にして、とりまはしりこうなり」とある。同十年頃没。現


(げじげじ)

藤田鶴松 五四九

天和・貞享期の大坂の若女方。初見は天和二年(一六八二)十月、大和屋甚兵衛座の若女方として登場。『難波の皃は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)では、嵐三右衛門座の若女方として評判。また同年十一月の顔見世芝居に、大和屋座の若女方として出勤(摂陽奇観八)している以外、所見がない。西鶴評に、「若道を立て今ぞさかへん藤田」とある点から見て、色若衆のまま終ったらしい。現

藤田皆之丞 五六一

延宝・天和・貞享期の京都の若女方。初代嵐三右衛門と並称された名立役、初代藤田小平次の養子。初見は夷屋吉郎兵衛座の評判記『役者評判蚰蜒』(延宝二年刊)で、当時十八歳の若女方として評判。初舞台はそれより一両年前、大坂であったことが知られる。下って貞享四年(一六八七)刊の『野郎立役舞台大鏡』に、京都岩本座の若女方として評判。その後姿を消している。評に曰く、「花も紅葉も一盛り、藤の異名を勝手屛風(我まま者)といふ事誰しらぬ人もなく……西鶴法師がかける永代蔵の教にもそむき、先祖相伝の財宝おのづから皆之丞と消うせしもむかし〳〵」とあり、また、「古身にさびのつかぬはまれな物、それゆへ鼻の下耳のかたわらに青色のさびいでたるが気の毒」とある。延宝二年(一六七四)当時十八歳であるから、今年貞享四年は三十一歳、若女方としてはひねすぎている。現


(げじげじ)

藤村初太夫 四五三・四五六

万治三年(一六六〇)刊の京都四条河原の役者評判記『野郎虫』に、村山座の花形として記載されている「長右衛門内藤村半太夫」と同一人と推定される。その理由は、『野郎虫』の挿絵に、卍の紋を付けた半太夫の座姿があり、巻五の一の挿絵の同人も同じ紋を付けており、また本名で登場する巻七の一の挿絵でも、同じ紋を付けているからである。ただし目録の小見出しに「花崎初太夫」とあるのはなぜだろうか。半太夫の初名であったのか、またはこの変名で登場せしめるつもりであったが、書きはじめた時点で、それとわかる藤村初太夫という、一字違いの芸名に直したのであろうか。今のところ、半太夫の初名と考えるほうが自然であると思う。なお半太夫を初太夫として登場せしめた理由については、巻七の一の❖を参照。故


(野郎虫)

藤村半太夫 五三三

万治年間、京都長右衛門抱えで、村山又兵衛座の立女方として売り出し、その頃元服して輪鼓としたと『野郎虫』(万治三年刊)に見える。延宝三年(一六七五)頃、江戸に下り、森田座に出勤したが、すでに衰えていた。美貌で舞をよくした。巻五の一の藤村初太夫と同一人と推定される。故

藤本平十郎 五七八

上方役者。藤田小平次の弟。天和・宝永期の立役。実方の名手で、柴崎林左衛門と両輪なりと、『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に大坂大和屋座の立役として評判。三都を歴勤。生没未詳。現

坊主小兵衛 四八五

寛文中頃から延宝末まで活躍した江戸の道化方の名優。頭を糸鬢に剃り、坊主頭のように見えたので、この名がある。坊主又兵衛、坊主百兵衛などの亜流を生んだ。『舞曲扇林』物真似芸の条に、「坊主小兵衛、是よりまこり以前にかかる風俗なし。小兵衛気を転じ、まこ


(百人一首)

とに坊主のごとく膚をあらはし、一風流をかまへたり」とある。故

ま行

松島半弥 五三〇
初代。延宝・貞享期の大坂の若女方。延宝末年には道頓堀で松島半弥座の座元を勤めたが、貞享三年(一六八六)中に二十歳で元服し、本分中にあるように七左衛門と改名して、畳屋町で井筒屋という扇屋を開業した。同年刊の『難波立聞昔語』荒木座の条に、松島半弥、小歌喜兵衛抱え。給金三十両、二十歳、宅畳屋町、とある。『道頓堀花みち』(延宝七年刊)に、松島知舟の名で入集している。現


(三盃機嫌)

松本小太夫 四九九
寛文・延宝期の上方の歌舞伎若衆。『野郎大仏師』(寛文八年刊)に、「容顔いかにもうるはしく、かたぎしづかにしてよし」とある。故

松本常左衛門 五七〇
二代目。寛文年中、大坂の若衆力で、のち若女方から立役に進む。貞享末年没かという。『好色一代男』巻五の七に、鶴川染之丞・山本勘太郎などとともに登場している。

松本名左衛門 五六一・五六九
上方役者。大坂道頓堀の松本名左衛門座の始祖という杉本久左衛門の子。一説に孫。若衆歌舞伎時代から大坂で人気を博し、承応二年(一六五三)に再出発した野郎歌舞伎時代にはいると、若女方となり、松本座の名代をかねた。寛文・延宝の頃には大坂随一の名優と称された。延宝年中、立役となり、やつし事と実事で藤田小平次と並称された。実子の松本兵蔵は、名左衛門が没してまもなく、貞享三年(一六八六)に十八歳で、大坂嵐座で初舞台をふんでいる(難波立聞昔語)。『古今四場居百人一首』の名左衛門評に、「先一番に実かた大名ごとの誉、やつしごとの大名人、取わけ猿引などの所作、てんと〳〵ないぞ〳〵」とある。故


(百人一首)

松本文左衛門 四九九・五六九
上方の立役。『古今四場居百人一首』(元禄六年刊)の松本名左衛門の評判中、「松本文左衛門も此ゆかりか」とある以外、所見がない。口上役の役者だったので、表立たなかったらしい。現

松本間三郎 五六九
はじめ松本小膳といったが、延宝二年(一六七四)刊の江戸役者評判記『新野郎花垣』では若衆方の松本間三郎として登場。翌三年十一月、江戸中村座の顔見世狂言に新子供として登場。下って延宝八年刊の『役者八景』には、上方の女方松本間三郎として紹介、肖像と漢詩を配してある。さらに天和三年(一六八三)の大坂荒木座の役者給金付では、親形となっているが、まもなく花車方(かか方)に転じ、元禄七、八年頃まで上方の舞台を勤めている。現

万能丸五郎兵衛 五〇六
寛文・延宝期の立役。江戸・上方を往来し、道化がかり舞・六方・小唄・浄瑠璃・軽口等に妙を得、多能なる故に万能丸と称した。『直矩日記』延宝六年(一六七八)正月の条に、法体して一円といい、鶴屋播磨と提携して人形の相手となり、江戸堺町にて興行したとある。生没未詳。故


(百人一首)

三枝歌仙 五五六・五八七
天和・貞享・元禄初年の上方の若女方。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)に、大坂荒木座の若女方として評判、「諸芸こうしやなる所多し。腰元子娘になり、それ〳〵のぬれ事すぐれたるとはいはれねども、大方にあぢつくさるる也」とある。元禄元年(一六八八)京都の万太夫座の狂言に、若女方として出演している以外、所見なし。現

光瀬左近 五七四
延宝・天和当時は京都の若衆方として名声を博し、貞享期には京都村山座の立役として活躍している。濡事と武道事をよくした。『野郎立役舞台大鏡』(貞享四年刊)の評に曰く、「万こうしやにして、古今まれなる口上……一、ぬれ事よくうつりておもしろし」。また『役者大鑑』(元禄五〜八年)の評に、近頃は使番・ふれ事の端役を勤め、「とかくしれぬは役者の身にしあり」とある。『道頓堀花みち』(延宝七年刊)に入集している光瀬玉舟は、この人である。現

峰野小曝 五六九
延宝・天和期の大坂道頓堀の若衆方。延宝八年(一六八〇)刊の『役者八景』に、肖

像と漢詩を配してある。『難波の㒵は伊勢の白粉』（推定天和三年刊）に、大坂嵐座の若衆方として、その全盛ぶりを評判。貞享四年（一六八七）春刊の『野郎立役舞台大鏡』には、すでにその名が見えない。『道頓堀花みち』（延宝七年刊）に入集し、また『西鶴大矢数』（延宝八年）の第三十二の表に出座している峰野帆舟は、この小曝であろう。

（伊勢の白粉）

三原十太夫 五六九

上方役者。はじめ若衆方であったが、天和年中、大坂荒木与次兵衛座に敵役として登場。『野郎立役舞台大鏡』（貞享四年刊）では、荒木座の敵役中の部、『役者大鑑』（元禄五〜八年）では、大坂岩井半四郎座の敵役の上の部として評判。正徳年中まで活躍している。現

宮崎伝吉 五六九

江戸役者兼作者。俳名巴蝶。寛文末年、若衆方として上方から江戸に下り、のち立役となり、貞享頃から作者も兼ね、市川団十郎・中村七三郎とともに三幅対として江戸劇壇を代表した。『役者みゝかき』（推定元禄五年刊）に、立役として評判、「武道のつめ合、細に気を付て引事よくいわるる。……此人の芸あまり細過たる故にや、こま物やと云り。去ながら古しへより一二を論ず立役、今改て評せんはふるし」とある。現

宮田沖之助 五七〇

延宝期の上方の女方。『役者八景』（延宝八年刊）に、肖像・漢詩・発句を配して紹介。巻八の二の「いひ出すものもなし」という文意から見て、天和年中夭折したのであろう。故

村山久米之介 四八六

万治三年（一六六〇）刊の京都四条河原役者評判記『野郎虫』村山座の条に、「ごんぼ庄左衛門内村山久米之介。面体よし、小歌は座中並ぶものなし」とある。翌寛文元年、京都芝居が崩れて、村山座の役者も玉川千之丞を筆頭に江戸へ下り、いにしえ座に属した中に見える今村粂之助は、この久米之介である。故

村山左近 五〇九

若衆歌舞伎時代（寛永〜承応）の女方。堺の出身で、京芝居の祖村山又八の五男、江戸村山座の座元の村山又三郎の実弟。寛永十七年（一六四〇）、一説に同十九年、江戸村山座に下り、染手拭をかぶり、はじめて女装して舞台を勤めたのが、江戸における女方のはじまりと伝えられている。右近源左衛門とともに、女方舞踊の代表的存在である。故

村山又兵衛 四五五・五三三・五四四

京都村山座の座元で歌舞伎役者。承応から延宝頃までの人。京都芝居の祖とされている村山又八の長男又太郎の子。のち初代村山平右衛門となる。承応元年（一六五二）に若衆歌舞伎禁止後、芝居者一統を率いて公儀に嘆願し、「物真似狂言尽し」の名目で、翌二年に再開を許されたので、京都芝居中興の祖とされている。ただし、『文斎日記』によれば、明暦二年（一六五六）春、坂田定右衛門座で河島某という武士が、女方の橋本金作を相手に、抜刀してあばれたので、京都芝居は残らず停止された。又兵衛ほか座元七人が、嘆訴した結果、同年六月に、改めて興行を許されたとある。承応元年の件とは別件か、明らかでない。故

や 行

山下半左衛門 五八七

上方役者。嵐三右衛門の弟子で、はじめ京都で嵐の小詰役（端役）を勤めていたが、天和年中、大坂の大和屋座に移って、「須磨寺の開帳」で、名声を博した。定享三年（一六八六）刊の『難波立聞昔語』荒木座の条に、「今年給金二百両の威勢、随一といわんとすれば、師匠嵐と云うくせものあり、先は第二のたて物ならん」とある。実方・武道方をよくし、特に濡事では、「山下がかり」といって一風を立てた。元禄期にはいると、京都で山下半左衛門座の座元を勤めている。生没未詳。現

大和屋甚兵衛 五四〇・五八八

初代大和屋甚兵衛が創立した大坂道頓堀の歌舞伎芝居、大和屋甚兵衛座で、座元をかねた立役の二代目甚兵衛。初代の子で延宝年中に襲名。初名は若衆方の鶴川辰之助で、若衆方からまもなく立役となる（役者大鑑合彩）。俳諧は西鶴の門人で生重と号し、延宝八年（一六八〇）の西鶴再度の大矢数四千句の興行に、鶴川生重の名で大矢数役人として参加、『西鶴大矢数』の余興第四十六に出座している。『野郎立役舞台大鏡』（貞享四年刊）に、女の好く役者で、男つきしゃんときれい



（百人一首）

なる生れつき、芸も切れはなれさっぱりとしておもしろし、六方のふり出し・濡事(ぬれごと)・やつし事、大かたなり、とある。元禄十五年(一七〇二)冬、上京して、早雲座の座元を一子の藤吉にゆずって引退し、翌々宝永元年(一七〇四)一月十日没。五十余歳。現

山本勘太郎(やまもとかんたろう)　四八〇
初代。万治年間、京都で若衆方の太夫(たゆう)として知られ、寛文元年(一六六一)江戸に下り、古伝内座に出勤。『剝野老(むきところ)』(寛文二年刊)に、「心ばへよし、人のすく思ひ入おほし。目もときよらにてほのかにかへりみる時は、いかなる通り者もさつきやみの空にあくがれ……氏やんごとなき人なり、神におそれあれば申さず」と評判。延宝三、四年頃、再び上方に帰ったが、その後消息を絶っている。西鶴が勘太郎出家の事をいっているのは、延宝末年の事実であろう。「楽屋にあらばかか方とならん／今とても山本恋し勘太郎」(七百五十韵〈天和元年刊〉)。二代目は京都の役者評判記『野郎虫』(万治三年刊)に、「伊兵衛内　山本小勘」とあるのがそれで、「いまだ少年也。後々は一座の太夫に成ゆへに、勘太郎になずらへて小勘とぞいふなる。……ゆくするはこかん太郎が跡つぎになをる」とある。故


(籆張草)

山本左源太(やまもとさげんだ)　五四二・五八四
延宝・貞享期の上方の若衆方。『役者八景』(延宝八年刊)に若衆方として記載。万治・寛文頃は老女役を演じ、置手拭を考案して女方の祖といわれた上方の名女方、右近源左衛門の手元で育ったという(巻八の四)。天和期には大坂大和屋甚兵衛座の若衆方として出勤している。生没未詳。

山本八郎次(やまもとはちろうじ)　五六九
上方役者。貞享・元禄期の立役。『役者大鑑』(元禄五〜八年)に、京都万太夫座の立役の中位として評判、「顔つき五音のやうたい岩倉万右衛門に似て、諸芸万右衛門よりはこうしや也。ぬれのそそり、目つき、かほつき、大かたにうつり、身もよほど動く也」とある。元禄八年(一六九五)七月、京都の万太夫座に出勤している。目下のところ他に所見なし。現

吉川源八(よしかわげんぱち)　五五六
荒木与次兵衛(荒木座の座元)の実子。『難波の貞は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に、荒木座の若衆方吉川源八で登場しているが、まもなく吉川源三郎と改名。『難波立聞昔語』(貞享三年刊)には、吉川源三郎で登場、鼓はよく打つが芸は下手とあり、与次兵衛抱え子なれば給分なし、今年二十二歳、とある。その後の評判記に所見なし。現

吉川多門(よしかわたもん)　五五六・五七三
延宝末年より道頓堀に若女方として登場。『難波の貞は伊勢の白粉』(推定天和三年刊)に荒木座の若女方として評判。貞享元年(一六八四)荒木座の役者給金付に、同じ若女方の浪江小勘の九十両に対し、歌二十両分を加えて百十両とある。貞享三年十一月の顔見世狂言から京都岡村座の若女方となった(野郎立役舞台大鏡)。その評に、「一、かれうびんなる御小歌、あれでも世界に人だねはあるか。一、諸芸こうしやにして打ついたる所あれば、大名高家のおくさま方に用てよし」とある。のち花車方(かしゃがた)に転じ、元禄末年に消息を絶っている。現

吉田伊織(よしだいおり)　四八四・五三三
京都四条河原の評判記『野郎虫』(万治三年刊)村山座、「市郎兵衛内　吉田伊織」の評判に、「舞台付しとやかにして、彼の有度浜(うど)に天降(あま)りし人の舞の姿かと思はる」とある。寛文元年(一六六一)に何かの事情で村山座が崩れたため、同座の太夫玉川千之丞を柱として江戸へ下った中に吉田伊織もおり、若衆方として、いにしえ座に属した事が知られるが、その後の消息は明らかでない。故

西鶴の時代の通貨

西鶴の作品は、金銭のことを具体的な数字によって記し、読者に強い印象を与えることが多い。それは、町人たちの経済生活・日常生活に取材した町人物の作品のみならず、好色物・雑話物などにおいても同様である。金銭によって動かされ、時にはそれにふりまわされる人間や人の世の姿は、数量の表示によっていっそう現実味をおびてくるのである。したがって、その数字の生々しさを理解しておくことは、現代の読者にとって是非とも必要なことであるが、そのためには、当時の貨幣制度や、各貨幣を現在の貨幣価値に換算する要領を知っておく必要があろう。以下、その点について簡単に解説を加える。

西鶴が生きた時代（一六四二〜九三）に用いられていた貨幣は、金・銀・銭の三種類である。

金貨は、**大判**・**小判**・**一歩判**の三種。大判は、額面十両と明記されているが、実際上の通貨ではなく、主として献上や贈答用に使用された。それゆえ、民間での通用価値は、小判（一両）十枚には相当せず、西鶴の時代には、八両で取引され、享保十年（一七二五）以後、七両二歩（七・五両）と定められた。小判は一両として通用、一歩判は、一両の四分の一に相当する。なお、小判・一歩判は、授受の際にいちいち目方を計らず、表記された価格で通用する、表記（定量）貨幣である。

銀貨は、**丁銀**と**豆板銀**の二種類。ともに目方を計って受渡しをする、秤量貨幣である。丁銀は重さ四十三匁（約一六〇グラム）前後の海鼠形のもの、豆板銀は約一匁から五匁前後までの円形・指頭大のもので、小玉銀、小粒、細銀、露などとも呼ばれた。

なお、『日本永代蔵』巻六の二で西鶴が、江戸の描写の中で、

上方とちがひし事は、白銀は見えず一歩の花をふらせける。秤いらずに、これ程よき物はなし。

と記すように、江戸を中心とする関東地区では金貨幣が、京・大坂を中心とする関西地区では銀貨幣が、主として使用されていた。

銭貨は、**一文銭**（寛永通宝）である。中央の四角な穴を、藁しべなどでなった銭緡につなぎ、百文つないだものを百緡、千文つないだものを貫緡と称して使用した。ただし、当時一般には、九六銭といい、九十六文つないだものを百文として通用させていた。

以上の金・銀・銭の三貨の交換価格は、金一両＝銀六十匁＝銭四貫文を一応の基準として、日々、小判市（両替市場）で取引される相場によって変動していた（なお、西鶴没後二年の元禄八年一六九五八月以後は貨幣改鋳がたびたび行われ、貨幣制度は複雑なものとなり、貨幣の種類も多くなるが、西鶴没後のことゆえ、ここでは省略に従う）。

右の金・銀・銭三貨の貨幣価値を現在の貨幣価値に換算するためには、普通、主食である米の価格を比較することによって行われる。しかし、毎日の米の取引（米相場）によって価格が変動する当時の米価と、一応、政府の統制下にあって毎年の米価がきめられる現在の米価とでは、厳密な比較は不可能である。とは言え、他の物品や人件費などでは、当時と現在のあり方が異なりすぎているので、基準とすることはできない。それゆえここでは、米価を基準とするが、それもあくまで便宜上の一つの目安として換算するものであることをご承知いただきたい。

現在（一九九六年）、自主流通米の米価は、高いもので一〇㌔五千円強。当時（貞享・元禄頃の米価）は、一石（約一五〇㌔）約四十匁前後（一〇㌔では二・七匁弱）である。したがって、おおよその目安としては、銀一匁が二千円弱に相当すると見ればよいことになる。今、銀一匁を二千円として換算して整理すれば、以下の通りである。

金一両＝銀六十匁＝十二万円
金一歩＝銀十五匁＝銭一貫文＝三万円
銀一匁＝二千円
銭一文＝三十円



校注・訳者紹介

宗政　五十緒（むねまさ　いそお）
1929年、岡山県出身。京都大学卒。近世文学専攻。龍谷大学教授。主著『西鶴の研究』『日本近世文苑の研究』『近世京都出版文化の研究』『江戸時代の和歌と歌人』ほか。2003年逝去。

松田　修（まつだ　おさむ）
1927年、大阪府出身。京都大学卒。近世文学専攻。法政大学教授。主著『日本近世文学の成立』『日本芸能史論考』『刺青・性・死』『異形者の力』ほか。

暉峻　康隆（てるおか　やすたか）
1908年、鹿児島県出身。早稲田大学卒。近世文学専攻。早稲田大学名誉教授。主著『西鶴—評論と研究』『定本西鶴全集』『芭蕉の俳諧—成立と展望』『江戸の素顔』ほか。2001年逝去。

新編日本古典文学全集 67
井原西鶴集②〈全四冊〉

一九九六年五月一〇日　第一版第一刷発行
二〇〇三年七月二〇日　第一版第三刷発行

校注・訳者——宗政五十緒　松田修
暉峻康隆
発行者——柳町敬直
発行所——小学館
〒一〇一—八〇〇一
東京都千代田区一ツ橋二—三—一
電話　編集　〇三—三二三〇—五一四一
　　　制作　〇三—三二三〇—五三三三
　　　販売　〇三—五二八一—三五五五
振替口座　〇〇一八〇—一—二〇〇
印刷所——凸版印刷株式会社

Printed in Japan　ISBN4-09-658067-8